

# ストライクウィッチーズ～約束の空～

カメクリオ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大切な何かを守りたいから、叶えたい夢があるから、自分ならできると信じているから。

だから魔女へウィッチたちはその身をかけて異形と戦い、空を飛ぶ。

その魔女たちの活躍する空に魔法使いへウィザードが並んだ時、世界を脅かす絶望は希望へと変わろうとしていた。

## 目次

### 第一章 ストライクウィッチーズ編 1944

第一輪	魔法使いへウィザードへは風と共に	1
第二輪	魔法使いとウサギのワルツ	10
第三輪	不安	21
第四輪	奮起	29
第五輪	複・雑・大・尉	34
第六輪	友・情・構・築	42
第七輪	Sの夢／まだ見ぬ先を求めて	51
第八輪	Sの夢／限界を越えろ！	64
第九輪	祝う魔女	75
第十輪	未知の怪異	85
第十一輪	生まれてきてくれた君へ	91
第十二輪	彼女のズボンはどこに消えたのか	107
第十三輪	いつか叶える夢のハナシ	117
第十四輪	離別・悲しみを知る彼女	129
第十五輪	変異・イントロダクション	137
第十六輪	マジックタイム、ショータイム	146
第十七輪	嵐の前の静けさ	153
第十八輪	揺れる空	165
第十九輪	誰のためか	174
第二十輪	動揺のTurn Over	183
第二十一輪	さまよいのFriendship	199
第二十二輪	離れ行く仲間たち	207
第二十三輪	決意、共に	217

	第二十四輪	裏切りの真意	229
	第二十五輪	集う空、繋げる風	243
	第二十六輪	勝利せよ、ストライクウィッチーズ	253
	第二十七輪	空に再会を誓って	262
	第二章	アルダーウィッチーズ編	1944
	第二十八輪	新天地へ	275
	第二十九輪	情熱のアルダーウィッチーズ	281
	第三十輪	歓迎の戦い	292
	第三十一輪	裸の語らい	303
	第三十二輪	仲間からの送り物	309
	第三十三輪	夢の邪魔	319
	第三十四輪	暗夜に墜つ	329
	第三十五輪	優しさという強さ	339
	第三十六輪	信じあう心	352
	第三十七輪	追跡！赤ズボン隊	359
	第三十八輪	魔法使いの客人	371
	第三十九輪	脅威	383
	第四十輪	今足りないモノ	393
	第四十一輪	向き合うべきコト	404
	第四十二輪	強さ×強さ＝最高	420
	第四十三輪	いつかまた：	435
	第三章	ストライクウィッチーズ2編	1945
	第四十四輪	人類、進展の兆し	445
	第四十五輪	空に集う運命	452
	第四十六輪	扶桑の若き野獣	461

第四十七輪	結成！新生ストライクウィッチーズ	472
第四十八輪	二度あることは三度ある	483
第四十九輪	規律・野獣VS希望・野生	495
第五十輪	服部レポート 前編	506
第五十一輪	服部レポート 後編	516
第五十二輪	大いなる獣	528
第五十三輪	魔法使いの協力者	537
第五十四輪	新型ストライカーを巡って	546
第五十五輪	わたしがあなたにできること	559
第五十六輪	レッツ・トライ・トウギヤザー 前編	573
第五十七輪	レッツ・トライ・トウギヤザー 中編	586

## 第一章 ストライクウィッチーズ編 1944

### 第一輪 魔法使い〈ホイザード〉は風と共に

「おお、やったぞ成功だ！」

「素晴らしい。我々はネウロイに対抗する新たな術を手に入れた！歴史の転換点たる時に我々は立ち会えたのだ！」

とある一室の外で軍服に袖を通した男たちはガラスの向こう側にいる人物に向けて拍手喝采を巻き上げる。

その集団から離れた一人の軍人は室内に入り、暗がりの中に佇んでいる人影の肩に手を置くと満足気に微笑むとある言葉をかける。

「よくやってくれた。たった今この時より君は強大な力を手にしたのだ。これからは非その力を存分に振るってほしい。我々の自由と平和のために、期待しているよ…君は我々人類の最高の希望だ」



1939年、奴らは突如として現れた。その名はネウロイ。その異

形は街を蹂躪し、人類の住処を命を奪った。

人類を脅かす危機に対して人類の対抗策となったのは魔力を持った少女たち通称『魔女』<sup>ウィッチ</sup>そしてストライクユニット。

これらの加護を得た人類は今も世界各地でネウロイとの激しい戦闘を繰り広げていた。

そしてある海上でも一人のウィッチが戦艦を守りながらネウロイとの戦いを繰り広げていた。

「くっ」

扶桑のウィッチ、坂本美緒は大型のネウロイを相手に苦戦していた。

航空機がいるといってもネウロイが相手では戦力と数えていいか

怪しいところ。実質孤軍奮闘の状態にあった。

そんな彼女の耳に通信機越しに声が飛んでくる。

『大丈夫ですか？坂本さん！』

「そこで何をしている宮藤！出るなど言ったはずだ！」

扶桑より同行してきた少女に坂本は声を荒げた。

宮藤芳佳、回復の魔法を持つ彼女はウィッチとして多くの死線をくぐり抜けてきた坂本から見えて確かに逸材だった。しかし彼女は民間人、非戦闘員だ。戦闘に参加させるわけにはいかない。

だから先ほど坂本は彼女に部屋で大人しくしているよう戒めたのだが、どうやら我慢できなかったらしい。

「まったく無茶な奴だな。あの度胸はたいしたものだ」

あいつに負けてられないな

そう意気込んでネウロイの翼にあたる部位を両断するが、切断された箇所は再生を始めた。

コアを破壊できなければ修復されてしまうのがネウロイの厄介な特性だ。

「さてどうするか」

坂本のウィッチとしての能力『魔眼』でコアの位置は特定している。問題はビームが絶え間なく放たれる中をどう突っ切って破壊するか

坂本が思案する最中ネウロイは周囲にビームをばら撒く。

シールドを展開してやり過ごす坂本だが拡散した一部の光線が艦隊へ：宮藤の乗船する赤城へ向かう。

「しまった！宮藤！」

「あつ…」

運悪く甲板にいた宮藤の瞳に高速で迫る赤い光が映る。恐ろしい色をしたそれを宮藤は食い入るようにつめる。

彼女を救おうとする坂本だが今からストライカーを飛ばしても割って入るには遅すぎる。

(お父さん…)

着々と近づく死の光を前に宮藤の脳裏に泣き父の顔が浮かぶ。

その時宮藤の耳に奇怪な音が入り込む。

『ディフェンド、プリーズ』

宮藤の正面に黒い影と緑の風の防壁が出現した。防壁はネウロイの光線を受け止め、宮藤と赤城が焼かれる悲劇をは回避された。ぎゅつと閉じた目を開くと、宮藤の前で黒い布地がなびいた。

「ふう〜間一髪、怪我はないか？」

赤城と宮藤を救った黒い影はそう声をかける。緑の宝石の顔を持ち、同じ色の指輪をはめた黒いロングコートの騎士。それが声の主であった。

「は、はい大丈夫です。ありがとうございます」

人なのかどうか外面ではとても判別できない謎の存在に戸惑いながら宮藤は助けてもらった礼の言葉を言う。

「どういたしましたして、危ないから下がってな。すぐに終わらせる」

宝石の騎士は安心させるように宮藤に言葉を残すと足に風を纏い、その力で赤城から飛翔する。

「ストライカーなしで空を飛んだだと!？」

ストライカーユニットを身に着けずその身一つで空を飛ぶ騎士に坂本は驚く。当の騎士は坂本の反応を余所に彼女の隣に並び、敬礼の仕草を取る。

「何者だ？」

「お初にお目にかかります坂本少佐、私はロマーニヤ空軍所属ソーマ・スペランツァであります。本日付けで501部隊に配属を命じられました。お見知り置きを」

「ロマーニヤ空軍から…? ああ、ミーナから近々戦力補充の人員が来るという話は聞いていたな。君がそうか、しかしかなり珍妙な恰好をしているな…いや今はそんなことを言っている場合じゃないな。すまないがネウロイの撃破に協力してもらえるだろうか」

「もちろん、そのために来たので」

「感謝する。実戦の経験は？」

「これが初めて。だけどご心配なく。自分の身くらいは守れます」

「わかった、その言葉を信じよう」

「コアの位置はどこかわかります？」



「あのネウロイのちょうど真ん中辺りだ。私がコアを破壊する、君は援護を」

「りょうかい」

坂本の指示に軽い調子で応じた騎士―ソーマは指輪を手の形を模したようなベルトにかざし、魔法を発動する。

『コネクト、プリーズ』

隣に生じた緑の魔法陣から銃剣ウィザースードガンを取り出したソーマ。

坂本と共に分散し、ネウロイのビームをかいくぐって接近する。

「はあー!」

ウィザースードガンから銀色の銃弾を放ち牽制するソーマ。ネウロイの注意を引き付けるためそのままネウロイの周りを飛行する。

「そうだ、それでいい。お前は俺に集中してろ」

襲い掛かるビームの束を避けながらソーマは高度を上げ上昇。腰元のホルダーから黄色の指輪を抜き取り指に嵌める。

『ランド、プリーズ。ドツドツド、ドツドツドン!』

『ディフェンド、プリーズ』

黄色の魔法陣をくぐり、緑から新たに魔法陣の色に体を変化させたソーマは集中砲火するネウロイの攻撃を土壁で防御。

砕けて分散した土の破片が重力に従って落下し、ネウロイの体全域に降り注ぐ。

『ハリケーン、プリーズ。フーフー、フーフーフー!』

その結果を落下しながら見届けたソーマは再び緑の指輪に切り替え、土の姿『ランドスタイル』から風の姿『ハリケーンスタイル』となり海面スレスレで浮上する。

「風に土、自然の力操る魔法か。しかも色まで変わるとは、面白い…私も負けてられないな。これは」

実戦が初めてとは思えないソーマの奮闘ぶりに刺激され坂本の気合いが高まる。

ネウロイの火力がソーマに集中し、彼女への攻撃の手が緩くなっている内に一気に懐に飛び込みその体に刃を突き立てる。

「ずおりゃああー！」

右翼に相当する部位を叩き斬ると身を反転させ、そのままコアのある箇所まで一直線に前進する。

「よしー！」

コアのある部位へと突き刺した坂本は撃墜を確信する。

ところが

「何っー！」

コアを貫くはずだった刀はその直前で進行を止める。結果としてネウロイはまだ生存している。

その証を示すかのようにネウロイの体の斑点が赤く光る。

「攻撃が来るぞ少佐ー！」

「っー！」

剣を引き抜き坂本は即座に上昇。その数秒後に彼女がいた場所をネウロイの赤色光線が通り過ぎる。

「どういうことだ。確かにさっきまで攻撃は通っていたはずだ」

「きつとたぶん」

『ハリケーン、シューティングストライク！フーフーフー、フーフーフー！』

坂本と合流したソーマはウイザーソードガンに緑の指輪をかざして引き金を引く。

風の弾丸が銃口から放たれ、先ほど坂本が攻撃した位置…ネウロイのコアの部位で炸裂する。

着弾に成功したため黒煙が上がるがネウロイはけろっとしていた。

「やっぱり他に比べてコアの周辺だけ装甲が頑丈になってるみたいだ」

「今までにはない特性を持ったネウロイだ。あれを倒すにはもっと高い威力の攻撃が必要になるな。私の剣は見ての通りコアを捉えられなかったができるか？」

「今撃つたのより威力の高いのあるにはあるけど…それでもあの装甲と再生スピードを越えてコアを破壊できるかどうか」

「君が撃つた後にすぐ私が斬る。それではできないか？」

「それだと当てられるかちよつとばかし怪しいな。この攻撃の中じゃ一つと！」

話している間にもネウロイの攻撃は続く。それらを回避しながら坂本とソーマは思った。

せめて後もう一人だけでもいてくれたらと

「あれは？」

その時坂本は赤城に視線を切り替えると甲板上に青い光が展開していた。目を凝らしてみると光源たる魔法陣の中心にはストライカーユニットを装着し、銃を手に発艦準備をする宮藤がいた。

「宮藤なのか？」

「あの魔法陣の大きさ、すごい潜在能力だな」

宮藤の展開する魔法陣は赤城の横幅を覆うほどの大きさだった。坂本もソーマも宮藤の秘めたポテンシャルの高さに驚嘆する。

そうしていると宮藤がストライカーを吹かし赤城の甲板上を飛び出す。その出力は坂本にも劣らない。

しかし離陸した瞬間、軌道がガクンと落ち海面に下がりつつある。

「まずい、あのままじゃ！落ちるぞ！」

「飛べ！宮藤！」

嫌な光景を想像し急行しようとするソーマの横で坂本が声を発した。

すると彼女の声に応えるように宮藤は上昇し、雲の広がる空を舞う。

「私、とんでる？坂本さん私飛んでます！」

高度を安定させ、落下を回避したかと安心した矢先…今度は坂本とソーマの横を駆け抜けてしまう。

ストライカーの操作に苦戦する宮藤の目前にネウロイから放出されたビームが接近する。

「うわッ！」

焦りながらもシールドを張り、ネウロイのビームの防御に成功。

彼女の張ったシールドは大きく、改めてソーマと坂本はその魔法力に舌を巻く。

「すごいな、あの子。すごいけど…大丈夫か？」

「今日初めてストライカーに触れたんだ。無理もない」

「あくそれは仕方ないな」

『エクステンド、プリーズ！』

ソーマは魔法で右腕を伸ばし、宮藤の首元を掴んで引き寄せる。

「ありがとうごさいーうわあああ!!腕、腕がぐにやって、なんですかこれ!？」

「落ち着いて、そうなる気持ちわかるけど危くないから」

大蛇と見間違えるくらい長くうのように動く腕を見て気味悪がる宮藤をソーマは宥める。

「す、すいません…えっと」

「俺はソーマ、よろしくな」

「宮藤芳佳です。さっきはありがとうございました」

驚きが冷めてお互いに名前を伝え合う宮藤とソーマ。

それが済んだ頃合いを見計らって坂本は宮藤に声をかける。

「さて、宮藤。私の命令に逆らってここまで来たからには協力してもらうぞ。いいな?」

「はいー!」

いい返事だ、坂本は宮藤の言葉に対してそう呟くと彼女の肩に手を回しグツと体を寄せる。顔と顔が触れ合う程度の距離まで

「私が奴の注意を一手に引き受ける。ソーマがコア周辺の装甲を攻撃。着弾と同時に宮藤、お前が接近してコアを砕け」

「私が、コアを」

「大丈夫だ。お前ならやれる。自信を持って」

「はい」

坂本からの激励を受けて宮藤は自らを奮い立たせる。

「よし、じゃあいってきますか」

ソーマの言葉を合図に三人は別方向に散開。ネウロイのビームを避けながらそれぞれの仕事に入る。

「はあああー!」

矢継ぎ早に撃たれるビームを回避しながら坂本はネウロイの周囲

を飛び回り、ネウロイの意識を他の二人から反らす。

その間にソーマは赤い指輪を填めながら更に上空へ移動する。

「ここまで来ればいけるか」

『フレイム、プリーズ。ヒーヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

炎を帯びた赤い魔法陣に足元から通過し、ソーマは赤い姿―フレイムスタイルに変化。

さつきと同じようにハリケーンスタイルの解除によって体が落下を始めるが、気にも留めずウィザーソードガンをガンモードに変え、赤い指輪をかざす。

『フレイム、シューティングストライク！ヒーヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

『コピー、プリーズ』

コピーの魔法で二つに増やしたウィザーソードガンを両手に握り締め、坂本が攻撃した場所ネウロイのコアがあると思われる付近へ照準を合わせ発射。

灼熱の業火が二つ、ネウロイに激突する。

舞い上がった黒煙の隙間から紫色の光が零れ、その光源たる石―ネウロイの生命源であるコアが姿を覗かせる。

「よし、見えた！」

「それがネウロイのコアだ！いけ、宮藤！」

自分の出せる限りの全力を振り絞って宮藤はネウロイのコアへ一直線に前進する。

複数のビームが彼女に打ちかけられる。しかし宮藤は速度を緩めることなくビームの中を突っ切る。

「いっけええー！」

引き金を引き、数十発の弾丸がコアを破砕する。

銃弾の命中によってネウロイはその体を青い粒子状に変質させてバラバラと周辺に散らばった。

「やった…？」

今までにない種類の集中の仕方をそたせいで宮藤は疲弊していた。そんな彼女の隣に坂本とハリケーンスタイルに戻ったソーマが並

ぶ。

「よくやったな宮藤」

「ああ、ナイスバウトだった」

二人とも宮藤の健闘に労いの言葉をかける。そして彼女の勝利を讃えるのは彼らだけではない。

「あれを見ろ。宮藤」

坂本に言われて海上に視線を送ると多くの人間が手を振っているのが見えた。

赤城の甲板上から、避難ボードの上から、命の危険を免れた全ての軍人たちが上空に佇む三人を祝っている。

「皆感謝している。彼らが無事だったのはお前のおかげだ」

「でも私より坂本さんとソーマさんの方が」

「頑張って体を張ったのは一緒だろ？謙遜しないで堂々としたらいいさ」

坂本に続いてソーマがそう伝えると、遠くの空から編隊を組む複数の人影がやって来る。

「あれは…」

「501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ、ネウロイと戦うウィッチの精鋭たちが各国から集った隊だ。宮藤、ソーマ君たちを我々は心から歓迎する」

今日この時ストライクウィッチーズのウィッチたちに新しい仲間が参入した。

一人は宮藤芳佳…ストライカーユニット開発の第一人者宮藤一郎博士の一人娘。

そしてもう一人ソーマ・スペランツァ…風・土・火といった自然を操る力を持つ仮面の騎士、ウィッチ魔女ならぬ魔法使い《ウィザード》。

彼らとの出会いが後に501統合戦闘航空団に変革をもたらす大きな風を呼ぶこととなる。

## 第二輪 魔法使いとウサギのワルツ

ブリタニアにある第501統合戦闘航空団基地の執務室、ここに一組の少女と少年が執務机を挟んで向かい合っていた。

少女の方は腰の辺りまで伸びた赤い髪が特徴的で整った美貌と合わさって大人びて知性的な雰囲気を漂わせている。

相對する少年の方は目元に少しかかるくらいのブラウンの髪で、冷静さを見せている傍ら若干の幼さを残した顔つきをしている。

「手続きは以上です。これで本日付けで正式に貴方の第501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズへの転属が決定しました」

「御世話になります。ミーナ中佐」

「よろしくねソーマ大尉。それとここではあまり堅苦しい呼び方をしなくても大丈夫よ」

「いいんですか?」

「ええ、皆家族みたいなものだから」

自らの前で敬礼の姿勢をとるソーマに向けてミーナ・デイトリン・デ・ヴィルケ中佐は柔和な笑みを浮かべる。

「さて、ではブリーフィングルームに行きましょう。他の皆に貴方を紹介します。宮藤さんのも兼ねてね」

椅子から立ち上がるとミーナは「付いてきて」とソーマに呼びかける。

ソーマはそれに従って二人揃って廊下を歩く。その最中ミーナが昨日のソーマの姿を思い出して口を開いた。

「でも未だに信じられないわ。私たちウィッチの他に魔力を持った人がいるなんて。それに結構変わった姿をしていたし」

「そりゃ驚くのも無理はないよな。俺も自分に魔力があるって知ったのは結構最近のことだから」

「先日上層部から届いた貴方に関する書類を見せてもらったけど今までは戦闘機のパイロットをしていたのよね。そこからどういう経緯で自分の中の魔力の存在を知ったの?」

「愛機の整備中たまたま近くにあったストライカーユニットに触れた

んだよ。そうしたらストライカーユニットが反応して、そこからは流れに流されて色々」

「それまではストライカーユニットに触っても何もなかったの？」

「ああ、ストライカーユニットに触ったのはそれが初めてだよ。今まで触ってみようとも思わなかったし」

「…そうなの。なんだか不思議な話ね」

ストライカーユニットはウィッチにしか反応せず、男性のウィッチの前例は耳にしたことはない。だからであろうか。ミーナはソーマの話がすんなり腑に落ちないようだった。

その後二人は宮藤の部屋に向かって彼女を拾った後共にミーティングルームに足を踏み入れた。

「はい皆さん注目。今日から皆さんの仲間になる新人を二名紹介します。坂本少佐が扶桑から連れてきてくれた宮藤さんとロマーニヤからの増員として来てくれたソーマ大尉です」

壇上上がったミーナは第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズの面々の前でそう告げる。

彼女の声を宮藤と一緒に隣で聞きながらソーマはで目の前に揃って座っている一同の顔を見渡した。

机の上で体を横にして寝ている部隊内で最年少と思われる少女、銀の髪の大人しそうな印象を受ける少女、オレンジに近い赤の髪の高身長少女、貴族っぽい高貴さがにじみ出ている眼鏡の少女、一見しただけで厳格そうな少女

ちらっと見ただけでも色んなタイプの女性がいた。

(やっぱり聞いてた通り色んな国から来てるんだな)

「さ、二人とも」

そんなことを考えていたソーマはミーナの声で注意を戻し、宮藤と自分が名乗る機会がやって来たのだと気付く。

「えっと…」

「レディファースト、お先にどうぞ」

ソーマに順番を譲られて宮藤がまず先に挨拶を始める。



「宮藤芳佳です。皆さんよろしく申し上げます」

ペコリと礼儀正しく頭を下げて宮藤は自己紹介を終え、ソーマと立ち位置を入れ替える。

「本日付けで501部隊に配属されることとなりました。ソーマ・スペランツァであります。原隊はロマーニヤ空軍、階級は大尉。よろしく申し上げます」

堅苦しく形式的な挨拶で締めくくるソーマ。

宮藤と同じように軽く一礼してから彼はミーナに進行のバトンを渡す。

「宮藤さんの階級は軍曹になるので同じ階級のリーネさんが面倒を見てあげてね」

「は、はい」

ミーナに名前を呼ばれたのはリネット・ビショップ少尉。

内気そうな雰囲気を漂わせた少女で頼りなさげながらに返事をする。

「必要な書類、衣類一式、階級章、識票なんかはここにあるから」

ソーマが彼女に視線を向ける横でミーナは手元の箱の中、宮藤にあってがわれた備品を一つ一説明していくのだが

「あの、これは入りません」

その中の一つ、拳銃を見て宮藤は毅然と言ったのけた。

「もしもの時のためには持っておいた方が」

「使いませんから」

「そう」

「はっはっは！おかしな奴だな」

「綺麗事言って、どう思う？」

坂本はさして気にしていない様子だが座っている者からは厳しい声が微かだが聞こえた。その声はペリーヌ・クロステルマン、部隊の中でただ一人眼鏡をかけた少女だ。

彼女は宮藤への不満を後ろにいるルツキーニにぼやいたようだが、当の彼女は眠っていたのか口の端に唾液を付けており、ペリーヌの言葉は聞こえていなかったようだ。

「なによ！なによ！」

「あらあら、仕方ないわね。個別の紹介は改めてしましょう。では、解散」

苛立つて部屋を抜け出したペリーヌに困った様子のミーナ。

そのミーナの合図で全員が席を立ち、何人かは後ろ髪を引かれたような様子もなくミーティングルームから出ていく。

「ひゃあ!」

出て行った者たちの背中を見送っていた宮藤が後ろから胸を揉まれて驚きと恥じらいを混ぜた声を上げる。

「どうだ？」

「残念賞」

エイラに胸を揉んだ犯人ルツキーニはその言葉通り本当に心の底からがっかりした表情をし、手を宮藤の胸に重ねたままソーマの方に視線を移す。

「先に言っておくけど俺はないからな」

「うじゅ…」

「リーネは大きかった」

「私ほどじゃないけどね！」

エイラの発言でリーネが頬を赤らめるのを尻目にシャーリーが勝ち誇った笑みを浮かべている。

「私はシャーロット・イエーガー。リベリアン出身で階級は大尉だ。シャーリーって呼んで」

「よろしくお願いします」

伸ばされたシャーリーの手を握り返す宮藤…であったが不意に力を込められて顔を歪める。

「はっはっは！食べないと大きくなれないぞ！」

(まあすごいな…確かに)

そう言い放って堂々と胸を張るシャーリー。

その様子をシャーリーの後方、数歩離れたところから見守り腕を組みながらソーマはそんな感想を抱いていた。

ソーマが見た限りさきほど部隊全員の女性陣の中では確かに彼

女はトップクラスの豊満な胸の持ち主だ。自信を持つだけはある。

そして今もルツキーニが頭を埋めている。どうやら彼女の一癖のお気に入りにはシャーリーのもののようなのだ

「エイラ・イルマタル・ユージェイライネン、スオムス空軍少尉。こっちはサーニヤ・リトヴァク、オラーシヤ陸軍中尉」

「あたしはフランチェスカ・ルツキーニ。ロマーニヤ空軍少尉」

ブリーフィングルームにいた残りの少女たちも二人に名前と原隊を名乗る。エイラに体を預けて眠る銀髪の少女サーニヤの分はエイラが補う形になったが

一通りの名前と顔の紹介を終えたのを確認して坂本は皆に指示を伝える。

「よし、自己紹介はそこまで。各自任務につけ、リーネと宮藤は午後から特訓、ソーマもこれから模擬戦を行う。私についてこい」



基地の施設を周っている宮藤とリーネ、夜勤哨戒のため就寝しているサーニヤとエイラ、各国からの取材を受けているハルトマンとバルクホルンを除いた面々は格納庫に集まっていた。

目的は新しく着任されたソーマの力量を測るためだ。

「ではこれよりソーマ大尉の模擬戦を始めます。ソーマさん、準備ができたと言ってください」

「了解。すぐ終わるよ」

『ドライバーオン、プリーズ』

「おおくなんかでたく！」

『シャバドウビタッチヘンシーン、シャバドウビタッチヘンシーン』

「ベルト、だよな？それ、音がすごいやかましくないか？」

「やっぱ最初は戸惑うよな。俺もそうだったし」

指輪をかざした瞬間、腰元に出現したドライバーにルツキーニは目を輝かせ、シャーリーはベルトから発せられる音に小言を入れる。

『ハリケーン、プリーズ！フーフー、フーフーフー！』

正面に展開した緑の魔法陣が自動的にソーマに向かい、彼の体を変化させる。

魔法陣が消え、緑の宝石の騎士ウイザードとなったソーマはミーナに目を向ける。

「準備できたよ。この後はどうすればいい？」

「模擬戦ではペイント弾を使用します。相手は…誰がいいかしら」

「私がやるよ」

率先して名乗りを挙げたのはシャーリー。

「ええ、ではお願いできるかしら。ソーマさんはそれでいいかしら」

「俺は問題ないよ。むしろ付き合ってくれるならありがたいくらいだ」

ソーマはそう言うのとシャーリーに歩み寄り手を差し出す。

「お手柔らかによろしく、シャーロット・イエーガー中尉」

「さつきも言ったけどシャーリーでいいよ。この経歴じゃ私のが上だけど階級はそっちの方が上なんだし、変に気使わないでお互い気軽にいいこうぜ。でも訓練だからって手加減はしないからな」

「ああ、もちろんだ。それとこれとは別だからな」

基本的な礼を交わして、ストライカーを装着し頭にウサギの耳を生やしたシャーリーとソーマは空へ舞い上がり、距離を開けお互いを見据えた状態で待機する。

「昨日も見ただけどストライカーを使わずに空を飛ぶなんてどういう原理なのかしら」

「本人曰く飛ぶのも魔法らしい。ベルトを介して指輪に秘められた魔法の力を開放するらしい」

昨日の戦闘終了後坂本はソーマから彼の使う魔法について簡単に聞いていたのかミーナに簡単に説明する。

「聞こえますか？二人とも。どちらかが被弾するか航空不能になった時点で模擬戦を終了してください」

「質問、戦闘範囲は空中以外もありかな？海上とかも使っているのか？」

『周辺に危害を加えなければ好きにして構いません。ですがあまり基地から離れないように注意してください』

「オーケー、問題ない」

『…では開始してください！』

戦闘の始まりを告げる合図を受けてシャーリーとソーマはまずエンジンと風力を吹かして躊躇いなく真っ直ぐ突っ込む。

まずはお互いに挨拶がてらの準備運動。相手の体とすれ違い合いながらも互いに引き金を引きはせず、上空へ上がり再び間合いを取る。

宙を飛行する両者だがまだどちらの銃からも弾は発射される気配はない。

「シャーリーさんいつになく慎重ですわね」

「相手の出方を伺っているのね。ストライカーを持たないウィッチなんてシャーリーさんからすればネウロイ以上に動きが読めない相手だもの」

「いや、そうでもないみたいだぞ」

ペリーヌとミーナはいつも滅多に見ないシャーリーの動きに言及する。

だが坂本の呟きと連動するかのようなタイミングでシャーリーは反転し、引き金を引く。

ペイント弾をソーマは飛行しながらかわし、それを追う形でシャーリーは弾の発射を続ける。

「シャーリー頑張れー！」

ルツキーニが声援を送る。それに呼応したかのようなタイミングでシャーリーは自身の固有魔法を発動し、急加速。

一気にソーマに詰め寄りその真横を取る。

「へへん、もらった！」

「マジか!?!」

至近距離から複数放たれるペイント弾をソーマはをなんとかスレスレでやりのけ、シャーリーの照準から逃れようとするが、振り払えずにいる。いくら間合いを突き放してもその度にすぐ横につかれて

しまうのだ。

「すぐに間合いを詰められる。速さじゃあつちが一枚上手か。だったらー！」

『コピー、プリーズ！』

「なっ、なんだそれ!？」

コピーの魔法で二人になったソーマを前にシャーリーは面食らってしまう。

その彼女にソーマから二つのプレゼントが飛んでくるがそこはさすがはリベリオンのエース、奇怪な技に虚を突かれながらも冷静に回避行動をとりかわす。

そしてコピーの魔法が解け一人になったソーマの描く軌道をなぞるように追跡する。

「すごいわね彼の固有魔法」

「驚くには早いぞ。あれぐらいはまだほんの一端、昨日なんて土の雨を降らしたり、魔法陣から武器を出したりでちよつとした手品状態だ」

「独力で空を飛んだり、分身したり：もうなんでもありなのね」

「はっはっは！ある意味なんでもできるのがあいつの固有魔法と言っているいいかもな」

坂本は豪快に笑い飛ばすと一旦口を閉じて、シャーリーから追われるソーマを見上げる。

離れていた二人の距離がシャーリーの方から縮まりまた横を取られている。

「あれを見るに一つ分野ではそれに秀でている者に遅れをとるができないわけではないようだな。どんな相手、状況にも対応できるといった意味では部隊の誰よりも優れているだろう」

「複数の力を状況に応じて分けられるのなら確かに心強いわね。誰と組んでも安定した力を発揮できるもの」

「魔法を使う度にいちいち指輪をベルトにかざさなければならぬのが隙を作る難点ではあるが、そこは我々でフォローすればさしたる問題でもないだろう」

ソーマの力を見定める坂本とミーナ。彼女たちに視線を注がれている最中でソーマはシャーリーに追われながら突然進行方向を変えて、真下に向かって降下する。

「なんだ？急に海なんかに向かって…」

疑問を感じながらもシャーリーはその後を追いかける。するとソーマは降下しながら腰元にホルダーから指輪を外し、付け替える。

『ウォーター！プリーズ！スイ〜スイ〜スイ〜！』

青い指輪をベルトにかざしたソーマは青い姿―ウォータースタイルに変身。

風の浮力を失い飛行できなくなったが本人は冷や汗一つかかずにくるりと一回転して軽やかに、波紋も起こさず海面に降り立つ。

「海の上に立った!?!」

「悪いね、許可もなく勝手に舞台を変えちゃって」

『バインド、プリーズ!』

詫びの言葉に反してソーマは無慈悲に魔法を発動させる。

「うおっ!?!」

波の中から水の鎖が飛び出してシャーリーへとびかかる。一つや二つではなく数え切れない程多くの鎖が、それも一つ一つが異なる動きをして

「おいおい、分身の次は水の鎖かよ。やりたい放題だな」

逃げ回るシャーリー。

その進路上へソーマはペイント弾の銃口を合わせ、狙いを絞る。水の鎖に手こずっているシャーリーの視界の端にもその動作が映った。

「そういう魂胆か。よし、だったら」

何かを決断したシャーリーは軌道を変更。超高速を使って突如ソーマへ直進する。

(動きを変えた?)

弾丸のごとく迫りくるシャーリーにソーマはその場で引き金を引こうとする。

だが引き金にかけたその指に力がこもる直前にシャーリーは急停止し、身体が足を前に突き出し「く」の字を表した体勢になる。

「なに!?!」

シャーリーとソーマの間で風圧によって波が立つ。ソーマのペイント弾は水の壁に溶け、同時にその壁はソーマの視界を遮る。風と水、二つの圧力を前に咄嗟にソーマは腕で顔を庇う。

(水でペイント弾をかき消すだけじゃなく目つぶしまで…高速で突っ込んできたのはこれが狙いか。あの僅かな時間で考えたな)

防御と目くらましを一手で実行するシャーリーの戦術と咄嗟の判断力にソーマは感心する。

波が収まり、視界が解放されるとそこには一定の距離を置いて銃を構えるシャーリーの姿があった。

ービシヤ!

シャーリーの銃口から飛び出した弾がソーマの顔で弾け、青い彼の顔を鮮やかなピンク色に塗りつぶす。

「そこまで。この試合はシャーリーさんの勝利です」

無線から聞こえてきたそのミーナの一言で模擬戦は終了を告げた。

格納庫へ帰投したシャーリーにルツキーニが勝利のお祝い代わりに飛びつく。

「やったねシャーリー!」

「おいおい急に飛びつくなよ。まだストライカー付けてるんだから危ないだろ」

ルツキーニをやりわりたしなめるシャーリー。彼女に指輪を外して変身を解いたソーマが歩み寄り、賞賛の言葉を送る。

「さすがは歴戦のウィッチ、すごいな。まるで歯が立たなかつた」

「そんなことないさ。今は私が勝ったけどこれは模擬戦での話。より実戦に近い形式でやってたらまた勝敗は別になってたかもな…あるんだろ?ちゃんと使い慣れてる武器が。なんか戦い辛そうに見えたりしな」

「まあ、な。言い訳するわけじゃないけど。本気を出せなかつたってのは本当だ」

「だろ?だからさ、今度は本気のお前ともやってみたいな。いつでも挑戦は受けるからさ」



「言つとくけど次はもう負けるつもりはないからな」

「当然。これからよろしくな」

気持ちの良い微笑みを向け合つて二人は握手を交わした。

### 第三輪 不安

「大丈夫か宮藤」

「訓練がこんなに大変だとは思いませんでした」

すっかり空が黒く染まった頃の食堂。机の上で力なく突つ伏す宮藤に正面からソーマが自作のチョコレートケーキを頬張りつつ一言心配そうに呟く。

基地内を一通り見て回った後宮藤はリーネと共に、坂本の指導の下ランニングやら腕立て伏せやらに加えてストライカーを用いた射撃訓練など特訓をしていたのだが、どうやら相当堪えたようだ。

最もこないだまで民間人だったのだからそれも無理のないことだとわかつているが、普段きつちりとしている宮藤がだらしなくしている様にソーマはつい失笑してしまう。

「…私ここにいていいんでしょうか」

「何かあったのか？」

と、そんな時今朝と比べて元気がなく表情にも陰りを見せる宮藤の様子にソーマは引っかけかりを覚え、彼女に訊ねる。

「バルクホルンさんに言われたんです。ここは最前線だから即戦力になれないなら扶桑に帰れって」

「ああ…」

着任間際に記憶した情報の中からバルクホルンの名前と顔を思い起こしたソーマは納得したように唸る。

そして宮藤の話に黙って耳を傾け情報を整理する。

訓練を終えて疲れから満足に立てずにいた宮藤に対してバルクホルンは先ほどの言葉を『ネウロイはお前の成長を待ってはくれない』と添えて突き付けたのだという。

「バルクホルン大尉の言ってることは確かに間違ってる。でもそれは宮藤のことを気遣ったの発言じゃないかと思う」

宮藤から事の経緯を確認してソーマが出した結論がそれだった。

「私を？」

「戦場じゃどこもそうだけど特にここみたいな最前線は他のどこと比

べても危険が付きまとう。そんな環境に自分の身を守れないような人間を置くのすごく気が気じゃないし最悪のことになった時にのしかかる責任も辛さも大きい：もし生半可な気持ちでいるならやめておけって伝えたかったんじゃないか。それだと危ないから。宮藤自身にとっても他の人にとっても」

「それはそうかもしれませんが。でも私、半端な気持ちでここに来たんじゃないありません。私がこの場所に来たのは皆を守りたいと思ったから」

「いい理由じゃないか。だったら一日でも早く認めてもらわないとな。大丈夫、始めから何もかもできる奴なんていないんだ。ネウロイは待ってくれないかもしれないけど皆お前の成長を待ってくれるさ：いつかきつとバルクホルン大尉も、もちろん俺もな」

「ソーマさん」

ソーマの言葉が心に沁みたとようで宮藤の顔と瞳に明るさが戻る。

「私、頑張ります!!皆に認めて任せてもらえるように」

「頑張れよ。俺にできることがあれば喜んで力になるからさ」

すっかりやる気に目覚めた宮藤に微笑みながらソーマは改めてフォークでケーキを裂いて口元に運ぶ。

「宮藤も食べるか?食べたいなら作るけど」

「今から、ですか?...今からはちよつと」

言い淀んで視線を外す宮藤。それはソーマの申し出が不快だったからとかではなく乙女ならではの理由からだった。

宮藤の視線を辿ったその先にある時計を見たソーマは彼女の考えを見抜いた。

「つと悪い、デリカシーが足りなかった」

「いえ全然。むしろすみませんせつかくのお誘いを断ってしまった」

「いいって、また次の機会だな。じゃあそつちもいらなかな」

「え?」

自分以外の誰かに語りかけるような言葉を呟くソーマに宮藤が戸惑っていると、扉の影からある一人の少女が姿を見せる。

「リネットさん」

「ごめんなさい。たまたま通りかかった時明かりがついてたから気になつて」

「謝ることじゃないって。それよりケーキはどうする？いるか？」

「だ、大丈夫です。失礼しました」

「ああ、ちよつと待った」

か細い声で逃げるように背を向けるリーネ。そんな彼女をソーマが呼び止める。

それに足を止めたリーネにソーマが静かに歩み寄る。

「な、なんでしよう大尉」

リーネは恐る恐るソーマと視線を合わせる。上官に何か失礼を働いてしまったのだろうかと嫌な想像を働かせて、

ソーマが目前で足を止めるまでの間リーネは呼吸すらままならぬい圧迫感に襲われていた。

ごくり、覚悟を決めたように唾を飲み込んだリーネ。

そしてソーマが口を開く。

「じゃあせめて紅茶だけでも飲んでいかないか？」

「は、はい…」

思いも寄らぬ言葉にリーネはつい生返事で返してしまった。

「どうだ二人とも、味の方は」

「すごく美味しいです」

「私も、美味しいです」

宮藤とリーネは提供されたセージティーに舌鼓を打つ。リーネも加わったことで食堂はちよつとしたお茶会の場になっていた。

「扶桑じゃ紅茶じゃなくてまた違ったお茶が一般的なんだろう？話でしか聞いたことないけど緑色のやつ」

「緑色…ひよつとして抹茶のことですか？」

「そうそう確かそんな名前だった気がする」

「抹茶でしたら坂本少佐が朝によく飲んでますよ」

「へえ、今度もらえないか聞いてみようかな。一回飲んでみたいんだよあれ」

リーネも交えてお茶トークで会話に華を咲かせる三人。

宮藤はソーマの入れた紅茶を口に運びながらその味と香りと場の空気に癒される。

「はあく疲れが一気に取れた気がします。ね、リネットさん」

「そういうえば二人は一緒に訓練したんだったよな」

「すごいですよ。リネットさん、私よりすごく大きな銃を使ってるのに離れたところにある的に一回で当てられて」

「そんなことないよ私なんて全然…」

うつむき加減に否定するリーネにソーマは違和感を覚えた。言葉だけなら謙遜にも聞こえるが、彼女の声色と表情は謙遜という域を越えている。

「何か悩みでもあるのか？」

「いつも失敗ばかりなんです私。練習ではできるのに本番だとできなくて、飛ぶことすら満足にできなくて」

なるほど、とソーマは彼女の抱える悩みに納得する。

「ビショップ軍曹、失敗するのは怖いかもしれない。でも失敗を経験しない人間なんていない。十回だろうと二十回だろうと誰だって皆する。大事なのは失敗した後どうするかじゃないか？」

「失敗した後…」

「失敗してやっぱり自分には無理なんだって諦めるのか、そこから次の成功に繋げるためにどうするか考えて諦めないのとじゃ、結果はだいぶ変わってくる。それで例えまた失敗したとしても少なくとも諦めた時よりはちよつとずつでも前に進める…そうは思わないか？」

「そうだよ。リネットさん、失敗は恥ずかしいことじゃないよ。失敗しても次頑張ればいいんだよ」

ソーマだけでなく宮藤もリーネを慮り励まそうとするが、それでもまだリーネは不安を拭えていないようで視線を落としたまま顔を上げない。

「ごめんなさい、宮藤さんスペランツァ大尉。でも私…やっぱり怖い」

「リネットさん…」

「まあ、こればかりはそう簡単に解決できる問題じゃない。焦らず落ち着いて向き合えばいい」

そう言ってソーマはカップに口を付けて残りの紅茶を飲み干す。その間もソーマはリーネから目を離すことはなかった。

(どうするかな…)

翌朝ソーマが腕を組みながら廊下を歩いていると

「おはよーっすー!」

「うおっ!」

不意に背中を誰かに叩かれる。衝撃に軽く驚きつつも振り向くとシャーリーが朗らかな笑みが近くにあった。

「ビツクリしたあく挨拶くらい普通にやってくれよ、おはよ」

「ははは、悪い悪い。後ろ姿が見えたからつい、な。それよりどうしたんだ?なんか考えたみたいだけど」

「ああちよつとな。リネット、ビシヨップ軍曹のことでき…なあ、彼女ずっとあんな感じなのか?」

「あんな感じ?」

ソーマは昨晚のやり取りを話した。

どうすればリーネが緊張という課題を克服できるのか。自分がどう立ち回れば上手くいくのかと

昨日からそのことばかりを考えていた。

「あー、まあそうだな」

返答が戻って来るのに暫しの間を要したがそれで伝わるほどリーネの様子は周知の事実であるようだ。

「飛行のスジもいいし狙撃の腕も充分実戦で通用する域には達してるんだけどな。どうも実戦じゃ上手く実力を引き出せないみたいなんだよ」

「昨日本人も言ってたけどやっぱり緊張のせいかな?」

「どうだろうな。そこまでは、私にも。でもここブリタニアを守るってことはあいつにとっては相当のプレッシャーを感じてるんじゃないか。ここはあいつの故郷だから」

「故郷か」

そういう事情があるのならいささか過激と思えたりリーネの態度も納得がいく。

自分の失敗のせいで故郷が焼かれてしまうかもしれない。それを思うと確かにとてつもない不安がまとわりつくだろう。

「一回でも結果を出せば自信がついて変わるきっかけになるんだろうけどな。その一回を作るのが、なかなかできないみたいだ。もういつそのこと早いうちにここから抜けた方がある意味楽になるかもな…今の状況のままじゃあいつも苦しいだけだ。自分で自分を追い詰めて」

「なんとかしてやりたいけどな」

彼女自身のためにもリーネに自信を持たせるにはどうしたらよいか。様々な考えを巡らせるソーマ。

そんな彼を横目で見てシャーリーがぼやく。

「それにしても意外だな」

「何が？」

「ここに来て数日しか経ってないのにもう他人の心配をしてるなんて。普通慣れないところに来たら当分の間は他人にかまってる場合じゃないだろう？自分の方は悩みとかないのか？」

「ん〜まあな。場所や人が違うだけで前いたとことはそんなに変化はないから特には悩みらしい悩みも不満もないかな。あるとしたら好きな時間に浴場に入れないことぐらいかな。仕方のないことだとはわかってるんだけど前いたとこより入る時間に気を遣わないといけないし」

「あ〜」

ここブリタニアの基地には男性職員もいるにはいるにはいるが、ソーマがいる隊員宿舎の浴場は基本ウィッチ、女性たちが使用している。そのため入る時間に注意しなければウィッチと遭遇してしまう恐ろしい事態を引き起こしてしまう。

「中佐に頼んでみたらどうだ？それぐらいだったら配慮してくれると思うぞ」

「そうだな。今度聞いてみるか」

そう返事を返して会話に一区切り付けたちようどそのタイミングで基地内にサイレンが鳴り始める。

「なあこれって」

「ネウロイだ。ブリーフィングルームに急ぐぞ！」

「わかった」

敵の襲来に対応すべくソーマとシャーリーはお互い顔を見合わせ、すぐブリーフィングルームに急行する。

「行っちゃったね」

ネウロイの迎撃に向かった面々が作った飛行機雲の軌跡を見上げて宮藤が悲痛混じりに呟く。

坂本・ペリーヌ・バルクホルン・ハルトマン・ルツキーニ・シャーリーらが出撃。

宮藤とリーネそしてソーマは待機を命じられた。

「今できることってなんだろう」

「足手まといの私にできることなんて」

「リネットさん……」

卑屈とも言えるくらい自信を喪失しているリーネに宮藤は励まそうとするが、言葉を思い浮かべるそれより前にリーネは基地内に逃げ去るように去ってしまう。

ソーマもハリケーンウィザードリングを指で弄びながら横で遠ざかっていくリーネの背中を見送っていると、入れ替わるように別の方向からミーナがやって来た。

「中佐」

「宮藤さん、ソーマさん、ちよつといいかしら」

彼女は足を止めると二人に声をかける。

「リーネさんはここブリタニアが故郷なの」

「えっ?」

「ヨーロッパ連合がネウロイの手に落ちたことは知ってるわね。欧州最後の砦、そして故郷でもあるブリタニアを守る。リーネさんはその



プレッシャーで実戦だとダメになっちゃうの」

ミーナの語った事情を聞いて宮藤はリーネに対しての心配を顔に出す。一方のソーマはシャーリーから聞き出した話との差異がないことを確認して、軽く息をこぼす。

「芳佳さんはどうしてウィッチーズ隊に入ろうと思ったの？」

「困っている人たちの力になりたくて」

「リーネさんが入隊した時も同じことを言っていたわ。その気持ちを忘れないで。そうすればきっと皆の力にあられるわ」

微笑みと共に授けられた言葉で宮藤はきゅつと口を結んで基地内に向かつていった。

きつとリーネの元へ行くつもりなのだろう

「大尉にも聞いていいかしら」

「ん？」

「貴方はどうして戦う道を選んだの？」

「どうしてって、そうだな…」

先の宮藤と同じ質問をかけられてソーマはハリケーンウィザードリングをしまいつつ、答えを出す。

「皆の希望を守って照らすため、かな」

「希望を？」

「そ、だからそのためにまず俺にできることをする。それが今ここで俺がすべき役目…かな」

そう言うともミーナから視線を切ってソーマは空を見上げる。

青く白く、果て無くどこまでも広がり、世界を包む大きな領域。

少し離れた場所で今魔女たちが生死をかけた戦いを繰り広げているとはとても想像できないほど静かで落ち着いている雲海が彼の頭上にあつた。

## 第四輪 奮起

ある部屋の前に宮藤は立っていた。しばしそこでドアを見つめていた宮藤だが、決意を固めるとドアをノックして中にいる人物へ呼びかける。

「リネットさん。私魔法もへたつぴで叱られてばかりだし、ちゃんと飛べないし、銃も満足に使えないし…ネウロイとだって本当は戦いたくない。でも私はウィッチーズにいたい。私の魔法でも誰かを救えるなら何かできることがあるならやりたいの…そして皆を守れたらって」

「守る…」

嘘偽りのない本音、宮藤の自らの戦いへの思いを扉越しに聞いてリーネは忘れていたことを思い出す。

自身もまたこの場所にきた時同じことを言ったのだと、そしてできそこないの自分を卑下するばかりでその思いがで薄れつつあったことを

「だから私は頑張る。だからリネットさんもー」

宮藤が更に思いを綴ろうとした時、それをかき消すように再度危機の襲来を告げるサイレンが鳴った。

「ネウロイがこっちに来てるのか？さっきのとは別の個体か」

「ええ、今こっちに向かっているのが本命みたい。先に出現したネウロイは囷だったようね」

基地内の一室にソーマとミーナそしてエイラが集まり、迎撃のための戦力状況確認を行っていた。

「出られるのは私とエイラさん、それとソーマさん貴方は大丈夫かしら」

「問題ないよ。今すぐにでもいける」

「エイラさん、サーニヤさんは？」

「夜間哨戒で魔力を使い果たしている。無理だな」

「そう、じゃあこの三人で行きましょう」

人差し指を交差させてバツ印を作ったエイラとハリケーンウィザードリングを付けてそれを見せるソーマに交互に視線を配ってその決定を下したミーナ。相手にもよるがこの三人でどこまで戦えるのかわからない。撃墜できればいいが、そうでなければ最悪先行した坂本たちが戻ってくるまでネウロイの進行を食い止めねばならない。二人を従えて迎撃に向かおうとする彼女の前に走ってきたのだろうか、勢いよく扉を開けて宮藤が入ってくる。

「私も行きます！」

「まだ貴方が実戦に出るのは早すぎるわ」

そう志願する宮藤にミーナはきっぱり断言する。

「足手まといにならないよう精一杯頑張ります！」

「訓練が十分でない人を戦場に出すわけにはいかないわ。それに貴方は撃つことに躊躇いがあるの」

ミーナにとってそれが宮藤の出撃を拒む一番の理由だった。

迷いは隙を生む。そして敵はその隙に乗じて命を奪おうとする。

そんな命のやり取りが短時間で何度も繰り返されるのが戦場だ。

宮藤がそこに足を踏み入れるには色んなものがまだ不足している。

「撃てます！・守るためなら！」

だが宮藤は引き下がらない。

「とにかく貴方はまだ半人前なの」

「でも…」

「私も行きます！」

食い下がる宮藤に加勢する形で今度はリーネが駆け込んできた。

「リネットさん…」

「二人合わせれば一人分くらいにはなります！」

「って言ってるけどどうする？中佐。この様子だと二人たぶん引きそうにないぞ」

二人の眼差しから意地でも曲げない強さを見たソーマはミーナに決断を仰ぐ。

困った顔のミーナであったがネウロイがすぐそこまで迫っているのもあって彼女たちの出撃を認める。

「九十秒で支度なさい」

「はい！」

「敵は三時の方向から向かってくるわ。私とエイラさんで先行するからここでバックアップをお願い」

「はい！」

「りようかい」

ほどなくして基地から飛び立った五人は海上を飛行する。ミーナとエイラが並行して先を行き、その少し後ろを残りの三人が飛ぶ。ハリケーンスタイルのソーマは前方に目を向けながら背後の宮藤とリーネの会話に耳を傾ける。

「宮藤さん、本当は私怖かったです」

「私は今も怖いよ。でも上手く言えないけど何もしないでじっとしての方が怖かった」

「何もしない方が…」

宮藤の言葉に考えるリーネ。

「二人とも、話すのはそこまでだ。敵のお出ましだ」

ソーマの声かけで二人はパツと視線を前に戻す。ミサイルのようになりで弾丸のごとき速さで迫るネウロイを視界に捉えた。

既にミーナとエイラが発砲し交戦しているがネウロイはスピードに物を言わせて強引に彼女たちの攻撃を振り切る。

「ネウロイを止めて！」

「りよ、りようかい！」

リーネとソーマは一斉に弾を放つ。だがネウロイの装甲にソーマの打った弾は弾かれてしまい、リーネの射撃に至っては掠ってすらない。

「駄目、やっぱり私は…」

「顔を上げろリネット軍曹！まだ終わってないぞ！」

俯くリーネにソーマが檄を飛ばす。

「リネット！自分が信じられないならそれでもいい。でもお前ならやれると信じている、そう思っている人がすぐ隣にいる、せめてその人

の言葉は信じてくれ！」

リーネの脳裏にある人物の顔が思い浮かびそちらを見る。宮藤芳佳：…出会ったばかりの自分を昨日からずっと励ましてくれた人

(そうだ、宮藤さんはずっと私にできるって言ってくれた。自分のことは信じられなくても宮藤さんのことなら…)

唇をきゅつと閉めて、スコープに目を通す。

「宮藤さん！私が撃つから私の体を支えて！」

「リネットさん、うんわかった！」

宮藤はリーネの股下に潜り込んで肩で担ぐような体勢になる。

リーネの雰囲気が変わったのを確信してソーマは身を屈めて前へ突っ込む準備をする。

「よし、じゃあ俺たち三人でやるか。ウイニングショットは任せたぞ」  
『チョーイイネ！キックストライク、サイコー！』

機械音声を鳴らしてネウロイに前進。距離が縮まるにつれてソーマの右脚に風が帯びていく。

そしてある一瞬で高高度まで浮上するや、右脚を突き出して急降下する。

「はああ、でやあああああ！」

竜巻を纏わせた高威力を誇るキックがコアより少し上にずれた箇所突き刺さる。ソーマの右脚の接触部から火花が散るもコアにまだダメージが到達しない。しかし、これでよかった。

「今だー！」

(当たって！)

動きが止まったの隙を見逃さずリーネは引き金を引く。彼女の放った弾丸は一切ブレることなくソーマの真下、コアを穿ち、更に抵抗力が弱まったことでソーマのキックが黒い体を貫く。

ネウロイは悲鳴を上げて絶命。ソーマの背後で粉粒が漂う。

「ふう〜」

「やったー！やったよ宮藤さん！」

ゆっくり息を溢したソーマが振り向くと嬉しさが極まったあまり宮藤に飛びつくリーネがいた。

抱き着かれた宮藤は勢いを受け止めることができず、バランスを崩して二人は海に落ちていく。

「お、おいー!」

海に落下した二人にソーマは案じる声を上げるが、海面から顔を出した二人は見つめた瞬間綻んで笑い合う。

その二人を見てソーマも緊張の糸を解く。

「芳佳でいいよ。私たち友達でしょ」

「じゃあ私もリーネで」

「うん、リーネちゃん」

「はい、芳佳ちゃん」

すっかり二人の間に壁はなくなったようでリーネと宮藤は海水で体が濡れているにも構わずまた抱き付きあう。

ソーマはゆっくりと降下し、水面に風の力で浮遊した状態で二人に手を伸ばす。

「仲良くなったのはいいけど、あんまり水に浸かっていると風邪ひくぞ。ほら」

差し伸ばした手を宮藤とリーネが握ったのを確かめてソーマは引き上げ、生き生きとした表情の彼女たちを間近で見つめる。

いい顔だな、とソーマは思ったがそれを言葉にはしなかった。

「これで基地を守れた。よくやったな。二人の頑張りのおかげだ」

「私たちの…」

「そうだよ。リーネちゃん、私たちの力でやったんだよ」

「…うん、うん、ありがとう芳佳ちゃん」

ソーマの言葉に二人は顔を見合わせて満面の笑みを浮かべる。

そんな微笑ましい光景に上空のエイラとミーナは温かな眼差しを送り合った。

## 第五輪 複・雑・大・尉

扶桑海軍少佐、坂本美緒の朝は早い。

日が昇り始めて間もない青と黒の入り混じった空の下彼女は起床してまず基地の敷地内でランニングを行う。

そうして身体を温めて汗を流し、基礎の体力作りを終えるといよいよ本命の工程、木々の中で愛刀烈風丸の素振りに入る。

一太刀、一太刀想いを込めて垂直に振るう。

ここまではいつも通りの普通の流れ、たった一人きりの落ち着いた時間であった。

しかし今日は違った。

八百二十六回目を越えたあたりから後ろに何やら気配を感じる：が敵意のようなものを向けられてはいないと感じたため彼女はそのまま素振りを続ける。

日課の千回目を終えて坂本は息を吐く。そして視線を背後に向けるとそこには男が一人

「もう起きていたのか、目覚めが早いな」

「その言葉そのまま返すよ。鍛錬、こんな朝早くからやってるんだな」腕を組みながら立っていたのはソーマだった。彼は汗をかいた坂本にタオルを渡して歩み寄る。

「毎日やらねば落ち着かなくてな。一日気を引き締めるためにもこの時間にやるのがいいんだ。ところでお前は何故ここに？私に何か用か？」

「いいやこれといって用事とかはないんだ。散歩がてら歩いてたら窓から少佐が見えてき。気になってそれで来てみたんだ」

「ふむ、そういうことか」

ソーマの言葉に坂本は得心がいったように頷くと不意に彼にある提案を持ちかける。

「どうだ、私と剣を交えないか？」

「え？今から？」

思いがけない誘いにソーマは目を丸くする。

「お前も剣を使うだろう。お前の剣の腕を確かめたいんだ」

「それは構わないけど危なくないか？寸止めで止めてくれるんだろうけど俺シールド使えないし」

「シールド張れないのか？それは知らなかった。どうしてもというのなら無理にとは言わんが」

「まあ、変身した状態ならある程度問題ないけど」

「なら変身してくれていい。やるなら気を遣わずにしたいだろう」

「おっけ、それなら喜んでやらせてもらうよ」

そういう条件ならばと申し出を受けたソーマはドライバーを起動させ、黄色の指輪を翳して変身する。

『ランド、プリーズ！ドツドツド、ドツドツドン！』

『コネクト、プリーズ！』

指輪と同じ色の魔法陣が足元から頭上にかけて体を通過し、ソーマはランドスタイルへの変化を終える。

コネクトの魔法でウィザースードガンをソードモードにし、刀身に左手を添える。

「黄色の姿か…準備は整ったな。では、行くぞソーマ！」

「ああ、いつでもー」

剣を向け、構えを取る両者。

二人は距離を縮め、透き通った音が木々に響く。

「いやあ、いいなあ実にいい鍛錬だった。やはり打ち合う相手がいると剣筋にも張りがあるなあ！」

「さすが剣の達人…変身してても結構ヒヤつとしたよ…何回か」

素振りをこなした後の勝負であったというのに息を乱さず疲れを見せない坂本。打ち合ったソーマは変身を解いて、その場に座り込む。

「でも勉強になったよ。さっき少佐も言ってたけど剣の立ち合いなんて滅多にできないし、戦闘の動きの確認にもなるしやってみたら結構タメになるな」

「身になったのなら申し出た私としてもありがたいところだ。なんな



「ら今日だけでなくこれから定期的にやるか？」

「本当か？少佐がいいなら喜んで」

「よし、ではまた明日だな。今日のところはひとまずこれで終わりにするとしよう。朝食まで時間もある。風呂にでも入って汗を流してくるといい」

「少佐は？」

「私はまだここにいます。まだ三十キロ走り終えてないからな」

「さんじゅっ!?!…」

ケロツと何食わぬ涼しい顔で言っただけの扶桑海軍少佐の前にソーマは耳を疑い唾然とする。

とんでもない体力お化け…そんなフレーズが頭に浮かんだがそれを目の前の上官にぶつける度胸は彼にはなかった。

嬉しそうに剣を交錯させる坂本。

その姿を一部始終、遠くから望遠鏡越しに眺めていた…もとい監視していた者がいた。

「ぐぬぬ、何なんですの！あの方は！」

唸り声を溢してペリーヌは仇敵を見るかのようなギラリとした鋭い目つきを坂本の隣にいるソーマに対して叩き付ける。

「坂本少佐とあかも親し気に…！なんてうらやま、いえ礼儀知らずなのです！」

ペリーヌは嫉妬の叫びを上げる。閉め切った自室のため幸いそれを聞く者はいない。

ソーマ・スペランツァそして宮藤芳佳、この二名がペリーヌには堪らなく気に入らなかった。

前者については得体の知れない力と姿を除けば階級が上なこともあって極力不快感を表に出さないようにしている。

だが後者よりもっとそれ以上に不快、もとい敵視しているのは宮藤の方だ。自らの意志で軍人になる道を選んでおきながら戦争はしたくないと知ったような口を聞く。そんな態度でありながら坂本が

構っているのがペリーヌの神経を逆なでしていた。

あの二人とは反りが合わない。そして敬愛する坂本少佐が目にかけているのが忌々しい。

ペリーヌはそんな思いを持っていた。

それから小一時間経った食堂ではソーマを交えたウイツチたちが一堂に会して宮藤お手製の日本食を食していた。

黙々とあるいは嬉々として食物を口に運ぶ中で一人、食事はおろかさ箸にすら手を付けずただぼんやりそこに座っているだけの人物がいた。

「ねえ食べないの？ トウルデー。食欲ないの？」

「あ、あのお口に合いませんでした？」

そのバルクホルンにハルトマンと宮藤が言葉をかける。しかし声をかけられた本人はどちらにも言葉を返すわけでもなく、席を立ち食器を片付けるため移動する。

自分の料理が何か勘に触ってしまったのだろうかと心配になる宮藤。その心理を読み取ったかのようにペリーヌが口を開く。

「バルクホルン大尉じゃなくてもこんな腐った豆なんてとてもとても食べられたもんじゃありませんわ」

「でも納豆は健康にいいし坂本さんも好きだった」

「坂本さんですって!?!坂本少佐とお呼びなさい!」

「え、でも坂本さんが私たちは海軍だから階級とかは気にしないでいいって」

「また貴方は！私だって…さん付けで…」

宮藤に食ってかかるペリーヌ。

「確かにクセは強いけどそんなに強く否定するほどじゃない気もするけど…あ、悪い。ソイソース取ってくれるか？」

「おお、はいよ」

「ありがとな」

隣で勃発しているペリーヌ対宮藤の構図はさておいて、ソーマはシャーリーから受け取った醤油を白米にかけて納豆と一緒にかき混

ぜ出す。

ネバネバの糸と鼻につく特徴的な匂いとぐつちやりと混ざった見た目にソーマの隣にいるルツキーニは顔をしかめる。

「うえゝ変な見た目ゝ臭いもすごい酷いし」

「でもこうして食べるのが扶桑流って聞いたぞ。だろ？」

「はい、醤油も納豆もご飯にも合いますから。扶桑じゃ両方かけて食べる人は珍しくありませんよ」

「見た感じすぐく体に悪そうなのにな。お風呂といい扶桑の文化は変わってんな」

宮藤の説明にそう感想を呟くシャーリー。彼女たちの会話に耳を傾けていたソーマが目を別の方向に向ける。

一人食堂を後にするバルクホルン。そんな彼女をソーマは目で追っていた。

「私ってバルクホルンさんに嫌われてるのかな」

朝食後次のお茶会に備えてリーネが準備をしていると宮藤がふとそんな言葉を呟いた。

「え？どうして？」

「なんか避けられてるような気がして」

「気のせいだよ。バルクホルン大尉は誰にもあんな感じだよ。あ、でも中佐とハルトマン中尉は別だけだね。あの戦いが始まった時からずっと一緒だったんだってあの三人」

「へー」

そんな二人のやり取りを少し離れたところで聞きながらソーマは椅子に座っていた。片肘を机に付いて外の風景を何の気なしに眺めていると空から赤い影：機械でできた赤い鳥が足で指輪を持って舞い降りた。

それに疑問を露わにすることなく窓に近づいてソーマは鳥を招き入れる。

「お疲れさん」

労いの言葉をかけると赤い鳥は身体を指輪に変形させて動かなく

なる。その指輪をポケットに仕舞い込んでソーマは鳥が運んできた指輪の表面を確認する。

左向きの矢印と右向きの矢印、二つの矢印が上下に分かれた紋様が彫られている。

表面をまじまじと眺めてソーマは指輪をまた仕舞いこんだ。

そしてテラスで行われる交流会に三人は共に向かった。三人が顔を出すと彼ら以外は全員着席していた。

宮藤とリーネは同じ席に座った。だがソーマは足を動かしたのは彼女たちとは異なる別の席。

「……いいか?」

「いや。トウルーデもいいよね?」

彼が向かったのはハルトマンとバルクホルンのいる席。

快く了承してくれたハルトマンに反してバルクホルンからの反応はない。ひとまず「ありがとう」と感謝を告げてソーマは彼女たちと同席する。

「作戦室からの報告では明後日が出撃の予定です。ですので皆さん今日はゆっくりと英気を養ってください」

ミーナの言葉で懇親会が始まりを告げる。

「何か持ってこようか?」

「いいの?じゃあケーキお願い!種類はおまかせするよ」

「おっけ、バルクホルン大尉は?」

「必要ない」

「そっか」

立ち上がってケーキを取りに行くソーマ。彼に向かってバルクホルンは叩き付ける。

「お前といいあの新人といいわざわざ最前線にまで来てやるのが馴れ合いとは…呆れ果てたものだな」

新人、それが誰を指しているのかすぐに見当がついた。ソーマがその新人に目を向けると、紅茶のすすり方で粗相をやらかして恥ずかしそうに赤面し、ペリーヌにまた呆れられていた。

ソーマはバルクホルンに異を唱えることも、振り返ることもせず  
ケーキを取りに歩みを再開した。

「待って！」

お茶会が終わった後部屋に戻ろうと一人廊下を歩いていたソーマ  
にハルトマンが声をかける。

「ハルトマン少尉、どうした？」

「さつきはごめんね、ソーマ。トウルーデが」

「大丈夫、気にしてないよ」

「トウルーデが不愛想なのはいつものことなんだけど今日はなんだか  
いつにもましてるような気がするなあ…なんでだろ」

バルクホルンに代わって詫びたハルトマンは深く考える。その彼  
女にソーマは問いかける。

「ハルトマン中尉ってバルクホルン大尉とはここに配属される前から  
の付き合いって聞いたけど心当たりとかないのか？」

「心当たりかーうーん…もしかしてクリスのことかな」

「クリス？」

「トウルーデの妹だよ。カールスラントの撤退戦の時にね、ネウロイ  
に襲われたのが原因でずっと意識を失ったままでは今は病院にいるん  
だ」

ハルトマンの話を聞いてソーマはバルクホルンの言動に納得する。

「とにかくトウルーデのことは嫌いにならないでね。さつきはあんな  
こと言っちゃったけどたぶん悪気があって言ったんじゃないんだ。  
ちよつとピリピリしてて余裕がないだけで本当は—」

「わかってるよ。バルクホルン大尉が思いやりのある人だったのもハ  
ルトマン少尉が信頼してるのも。わざわざ言いに来てくれてありが  
とな」

「ん、こっちこそありがと。そう言ってくれて助かるよ。じゃあまた  
後でね」

「おう」

そう言って踵返すハルトマン。角を曲がってそのまま自分の部屋

に戻ると思いきや、ひよこつと顔を出す。

「あ、そうだ。私のことハルトマンでいいよ。そういうの苦手だし」

「ああ、改めてよろしくなハルトマン」

上げた片手を振ってハルトマンは足音と共に遠ざかっていく。過ぎ去ったハルトマンの背に軽く微笑んでソーマは自室のドアに手をかけ、そのまま動きを止める。

「妹、か…」

今日一日のバルクホルンの様子を思い返してソーマは呟く。窓から差し込む黄金色の温もりを背に受けた彼の体は自室へと消えた。

## 第六輪 友・情・構・築

「何故今になってあの時の夢を…」

窓から差し込む白き光が唯一の光源となる部屋でバルクホルンは寝そべりながら今朝方見た悪夢を振り返る。

炎に包まれ崩壊する祖国カールスラント、黒煙と火花の立ち込める上空で耳障りの声を上げるネウロイ、そしてその中で泣きじやくる愛しい妹

どうしてそんな思い出したくもない記憶が今頃になって夢となって蘇ったのか。悪夢から覚めた直後はわからなかったが今ならわかる。

新しく入ってきた扶桑からの新人、宮藤芳佳。あれのせいだ。

あれを見る度にその容姿を妹クリスと重ねている自分がある。そして後悔に苛まれる。

どうしてあの時自らを犠牲にしても妹を守れなかったのだ。あの時守れていれば今頃クリスは年頃の女の子らしい穏やかな時間を過ごせていたはずなのに

(少し風に当たってくるか)

何度目かわからない自分への責めを繰り返すバルクホルンは気分を切り替えるために部屋を出ることにした。

『エクステンジ、プリーズ!』

「なんだ?今のは」

聞きなれない音声が廊下に反響する。

時刻は日が変わる少し手前、当然こんな時間に部屋の外で出ている者など夜間哨戒を務めるサーニャ(たまにエイラもいるが)以外はいるはずがない。

そんなことを考えながらバルクホルンが気になって音の出どころを探っていると食堂のドアから明かりが漏れていた。

「こういう魔法か。いいなこれ。使い勝手が良さそうだ」

ドアを開けて中を覗いてみるとソーマが机の前に立っていた。机の上には形の異なるマグカップが二つ置かれていた。

満足気に笑って身に着けていた指輪を外してポケットにしまい入れる彼。そして視線を感じて振り返るとバルクホルンと目が合った。

「バルクホルン大尉」

目が合うなり即座に体を反転させて去ろうとするバルクホルンにソーマが声をかけた。

「せっかくだしお茶でもどうか。その様子だとたぶん寝付けないんだろ？ちよとどカップ出してあるし、ホットミルクとかもあるけど」  
「必要ない」

キツパリと断ち切るバルクホルン。せっかくの意味がわからないと不満を心で吐いて振り向いた彼女はソーマをキツと鋭い眼差しを突き刺す。

「こんな夜更けに何をしているのか知らんがこの際はつきり言っておく。私はお前と必要以上に関わる気はない。お前のように戦場を軽んじているようなふざけた姿勢の奴とはな」

「そんなつもりはないんだけどな」

「それでその態度なら尚更な話だ。もういいか、貴様のヘラヘラした顔を見ていると無性に腹が立って余計に眠れなくなる」

凍てついた視線を反らしてバルクホルンは去っていく。

(こりや一筋縄じゃいかなそうだな)

背を向け夜の暗がりに溶けていく彼女をソーマは黙って見送っていた。

宮藤とバルクホルン、坂本とリーネがロツテを組んで模擬戦を行う。

青いキャンパスに白い軌跡を描いて飛び回る四人をペリーヌは歯ぎしりしながら眺めていた。

「あの豆狸、また坂本少佐と！」

「豆狸って…」

ペリーヌの宮藤に対してのものと思われる言葉にソーマはそう小さくぼやく。準備待ちをしながら上空で行われている模擬戦を観戦する二人の元にミーナが歩み寄る。



「今日も調子が悪いみたいね」

「調子が悪いって、誰が？」

「トウルーデ、バルクホルン大尉よ。最近彼女様子が変なの」

同じく上空を見上げて口にしたミーナの言葉に二人は意外と言った顔をし、再度模擬戦を見つめ直す。

「とてもそのようには見えませんが」

バルクホルンの動きは綺麗で洗練されていてとても不調な状態の人間が引き出せるものではない。だからペリーヌにはミーナの言葉がにわかには信じ難く聞こえた。

ソーマも空を動く彼女を注視していると、基地にネウロイの襲撃を告げる報がなる。

「ネウロイ！」

「今日は来ないはずじゃなかったのか？」

「ええ、そのはずだけど…やっぱり出現のサイクルが乱れてきてるわね。とにかく迎撃しましょう。訓練は一時中止、美緒！」

坂本に通信を入れてミーナとペリーヌはストライカーユニットを装着するために格納庫に走る。

ソーマはハリケーンスタイルに変身し、上昇。ウィザーソードガンを手に取り、一足先に訓練組と合流する。

ほどなくしてミーナとペリーヌの到着し、飛行しながら坂本は指示を伝える。

「私の二番機には宮藤、バルクホルンの二番機にはペリーヌ、リーネにはソーマお前が付け」

「了解」

「わかりました」

坂本の指示通りの布陣を組んで皆は飛行し、ネウロイを視線上に捕捉。各機指示通りの陣形に分かれて戦闘に突入する。

「リーネは射撃に集中してくれ。防御は俺が引き受ける！」

「はい、お願いします！」

『ライフエンド、プリーズ！』

撃ちかけられる熱線をソーマが風の障壁で受け止め、その背後から

放ったリーネの射撃がネウロイの装甲を削り取る。

(安定した射撃だ。前とは違うな)

プレツシャーに押し潰されていた頃とは大違いの射撃の精度にソーマは喜びを仮面の奥で見せる。

チラリと余所に目を配れば宮藤もリーネに負けず奮闘ぶりを見せ、坂本の動きに食らいついてネウロイに銃撃をお見舞いしている。彼女も確実に成長を感じさせる動きを魅せている。

そんな中で

「やつぱりおかしいわ」

ミーナの声にソーマとリーネはある一点に注目する。彼らが目を向ける先えはバルクホルンが勇猛果敢に攻め、弾を打ち込んでいる。

精度は的確で確実な有効打を与えているのは端から見てもよく伝わる。だが二番機のペリーヌがそれに、バルクホルンの機動に追い付いていない。

どうにも嫌な予感がする。それを感じたソーマは腰のホルダーから指輪を取り外す。

(こいつ、さっさと落ちろ！)

ペリーヌのことなど見向きもせずネウロイに接近したまま射撃を続行するバルクホルン。その瞳にはもうネウロイしか見えていない。

そんな彼女とペリーヌにネウロイはビームを撃ちかける。

「くっ！」

「きゃー！」

赤の光をバルクホルンは回避するが後ろのペリーヌは間に合わずシールドで受け止める。幸い無傷で済んだものの衝撃は抑えられず、弾き飛ばされた。そして回避行動をとったバルクホルンと激突、戦闘体勢を崩してしまう

隙ができた敵が二人まとめて固まっている。これを見逃すはずはなく、ネウロイは砲門に光を集中させる。

『コピー、プリーズ！』

『エクステンジ、プリーズ！』

しまった、と二人が危険を察知した慌てて魔法陣を展開した時そんな音と次いで、爆発音が聞こえた。

いつまで経っても衝撃が来ない…疑問を感じたバルクホルンが恐る恐る目を開けるといつの間にか目を覆いつくしていた赤い光は消えていて、代わりに黒い煙の塊が上空でできている。その黒い塊の中から尾を引いて魔法使いが落下していく。

「どういふことだ…」

周りに目を走らせるとリーネとミーナがすぐ近くで焦りの表情を浮かべるのが目に入る。次いで落下する人物に向かって降下する宮藤とそれを不安な眼差しで見つめる坂本も捉えた。

「ソーマさん！」

「ソーマ！」

「なにが…まさか！」

「そんな、私たちを庇って!？」

宮藤と坂本の悲痛な叫びでバルクホルンとペリーヌは初めて事態を知った。

一人に戻り変身の解けたソーマに追い付いた宮藤は身体をゆっくりと地面に降ろし、バルクホルンとペリーヌも降下する。

頭や腕を始めとする体の至るところからの出血、焼け焦げた衣服…ネウロイの攻撃を受けたのは明白だ。それでバルクホルンとペリーヌは悟った。彼の魔法、おそらく位置を入れ替える魔法で代わりに深手を負ったのだと。

「バカな、何故だ…何故私なんぞを！どこにある、お前が身代わりになる理由なんてないだろう！」

「…から」

「！」

「俺が、したかったから…やった。それだけ、だ」

宮藤の治療を受けながら弱い掠れた声を出すソーマ。バルクホルンと視線が重なり、痛みに苦しみながらも彼女の問いに言葉を返し、緩やかに目を閉じる。

「大尉！」

「気を失っただけです！でも安心できません、すぐに治療しないと！」  
「っ、私が盾になります！貴方は治療に集中してください！」

意識を失ったソーマに治癒魔法をかけ続ける宮藤。その彼女を守るためにペリーヌはシールドでネウロイの流れ弾を受け止める。

今できることを懸命にやっている二人を尻目にバルクホルンはソーマを見つめたまま動かない。

ギョツと固く拳を握り締め、何かを決心したバルクホルンは瞬間、両手のMG42を起こして空に舞い戻る。

狙撃を行うリーネとミーナの合間を縫って、赤い光をかわしながらネウロイに銃弾の嵐を叩き付ける。

「くそっ！これでもまだ削り切れないのか！」

「私のトネールじゃ、あんな高さまで届かない。ここを離れるわけにはいかないし」

いくら装甲に浴びせても穴が開かない。コアを狙おうにも間髪入れずにビームを放たれ接近を妨げられる。

どうすればと見上げるペリーヌは何かないかと辺りを見回す。

「あれは…」

そして目に入った。さっきの攻撃でソーマの手から零れ落ちたであろうウィザードガンが

「もしかしてこれなら」

ペリーヌはそれを拾い上げ、倒れるソーマの近くに走る。

「ペリーヌさん何を」

「私に使えるかわからないけど今はこれしか…大尉、お借りします」

『チヨイイネ！シューティングストライク！』

ハリケーンウィザードリングを外して自分の中指に通したペリーヌは見よう見まねでハンドオーサー部分に指輪と付けた手を置き、銃口の先をネウロイに向ける。認証を知らせる音に使えると確信を持ったペリーヌは狙いを定める目付きを更に細める。

「届いて、トネール！」

祈りを込めて指先に力を込めるペリーヌ。反動で体が後ろに吹っ

飛ぶが射出された蒼い雷の塊は真っ直ぐネウロイに向かっていく。その速度はハリケーンスタイルやフレイムスタイルのシューティングストライクの比ではなく、放たれてからほんの一瞬に近い時間で着弾し、装甲をいとも容易く打ち貫く。

直撃した箇所はコアのあるところではなかったが、ペリーヌの魔法の効果でネウロイは麻痺し攻撃が止む。

「コアは頭上付近だ！決めるバルクホルン！」

「うおおおー！」

坂本が叫び、それに応えるようにバルクホルンが全力で突っ込む。反撃など来る前に片を付けるそんな思いで突進したバルクホルンは瞬間にネウロイのコアのある部位へ限界まで接近し、出しえる限りの銃弾をお見舞いする。

そして大量の弾を至近距離で浴びたネウロイは姿を消失し白い破片をまき散らす。

「やったー！」

撃破を確認し、地上のペリーヌは喜ぶ。宮藤もまたその思いを分かち合いながら眠るソーマへ語りかけるように呟いた。

「やりましたよ。ソーマさん」

「おっはよソーマ」

「おはよハルトマン」

その翌朝、朝食のためいつものように食堂に歩いていたソーマはハルトマンと出くわす。お互いに軽い調子で朝の挨拶を交わすと目的地まで足並みを揃える。

「昨日はありがとね。トゥルーデのこと、守ってくれたんでしょ。怪我はもう平気？」

「宮藤のおかげでな。この通り」

「そっか、よかった。でも無理はしちやダメだよ。もし痛むようだったら私に相談して、宮藤みたいに治癒魔法は使えないけどこれでも私医者志望なんだ。処置ぐらいはパッパッとできるよ」

「へえ、それは知らなかった。じゃあその時はありがたくお世話にな

ろうかな」

「うん、全然おーけーだよ」

ハルトマンは頭の後ろで、ソーマは胸の前で腕を組みながら話をし、食堂に辿り着く。

もう二人を除いて皆席に着いており、食事も机の上に並べられていた。

「ありや、もしかして私たち待ち？」

「みたいだな」

「おはよう二人とも、もう朝食の用意はできてるわよ。席に座って」  
ミーナに笑顔で迎えられてハルトマンとソーマは同じように椅子に座る。

「お、その様子だと怪我はもう大丈夫そうだな」

「ああ、心配かけたな。宮藤もありがとな。おかげでこの通りピンピンしてるよ」

「いえ、お怪我が治ってなりよりです」

シャーリーと宮藤にそれぞれ感謝を伝えたソーマ。そこで自分の手前に他とは違う物が置いてあるのに気づく。

「紅茶とケーキ？なんで俺だけ？」

見てみると他のメンバーのところにはなく、これから用意される様子もない。その証拠にルツキーニが恨めしそうにジツとソーマを見つめている。そのことを疑問に思っているとミーナが答えてくれた。

「貴方へのお礼だそうよ。ペリーヌさんとバルクホルン大尉から」

「え？」

予想していなかった言葉にソーマは目を丸くしてペリーヌとバルクホルンを交互に見やる。

「助けられたのは事実ですし、言葉だけじゃなくきちんと気持ちのこもったお礼がしたいと思ひまして。め、迷惑でしたらお飲みにならないくてよろしいですわよ」

「ペリーヌさん、さっきソーマさんがどういいうお茶が好きなのか皆に聞いてたんですよ」

「ちよつとリーネさん！それは言わなくてもよろしいんじゃないませ

ん！」

「そんな貴重なものなら尚更一口一口大切にじつくり味わなきやな。ありがたく頂くよ」

声を大にして顔を赤くするペリーヌ。苦笑しながらソーマは感謝の言葉を伝えると、紅茶の横に添えられたチーズケーキに視線を注ぐ。

「じゃあこのケーキは」

「私が作ったものだ」

近くで聞こえる声に反応して顔を上げると椅子の横にバルクホルンがいた。目が合ったのを確認してから彼女は言葉を紡いだ。

「その、昨日のことはすまなかった。いや昨日だけの話ではない、これまでお前には心無いことを言うてしまった。本当にすまないと思っ  
ている。今更こんなことを言うのはおこがましい話だろうが、今からでも私を仲間として受け入れてくれるだろうか」

誠意ある言葉と表情。それを確かに感じ取ったソーマは椅子かた立ち上がって手を差し伸べる。

「これからもよろしくなバルクホルン」

「ああ、私の方こそよろしく頼む」

その手をキュツと握ってお互いの手の感触を確かめ合う。

肌触りの良い朝の日差しに照らされた二人の笑顔はこの瞬間、それを見た者にはこの上なく眩しく映っていた。

## 第七輪 Sの夢／まだ見ぬ先を求めて

シャーリーはいつものように格納庫でストライカーを整備していた。ストライカーのチューニング、これをしている時は彼女にとって心安らく貴重な瞬間であった。

「朝食の後から見かけないと思ったらここにいたのか」

笑顔でストライカーを弄りに没頭していると後ろから声がかかる。それに反応して振り向くとそこにはソーマがいて彼はシャーリーへ歩み寄ってきた。

「ストライカーの整備自分でやってるんだな」

「整備というよりは改造だけだな。そっちこそなんでここに来ただ？いつもここに顔出さないだろ」

耳を傾けながらもストライカーを弄る手を止めないシャーリーをソーマは眺める。ストライカーは軍の所有物であり、整備をするのは基本整備士たち。いくらウィッチと言えども個人で勝手に改造の手を施すなどいいのだろうか、と疑問が頭を過った。

しかしその疑問はとりあえず置いてシャーリーの質問に答える。

「やっておきたいことがあってさ。って言ってもまあこっちも整備なんだけど」

「整備？ストライカー持ってないのか？」

「ああ。だからストライカーじゃなくて」

首を傾げるシャーリーにそう言っただけでソーマはウィザードドライバーを起動し、コネクトの魔法で魔法陣を展開させる。

『コネクト、プリーズ！』

魔法陣からソーマが出したのはバイク『マシンウィンガー』。だが普通のバイクとは異なり、魔法使いウィザードとしてのソーマの顔を象ったように前面部分に緑の寶石が埋め込まれていて、一見してバイクとは思えない見た目をしている。

「おお・・・」

「こっちの方」

「これバイクか？お前の？」



「そ、最近使ってなかったから動作に問題がないか点検しておこうかと思つてさ」

「なあ、見てみていいか？」

「どうぞ」

許可を得た途端、水を得た魚のようにシャーリーはマシンウィングァーに飛びつく勢いで観察を始める。

「変わった形のバイクだなあ。エンジンは何使ってるんだ？」

「確かストライカーと同じ魔導エンジンだったかな。貰い物で俺が作ったわけじゃないからそのあたりのことは詳しくは知らないんだよな」

そうソーマが返答している間もシャーリーは回りながら、時折止まって興味を持った箇所を見たり触ったりしている。

すっかり興味津々になつている彼女のその様子をソーマは穏やかな顔で眺めていた。

「バイク好きなんだな」

「まあね、私は元々バイク乗りだったし」

「マジ？」

「本当だよ。ボンネビル・ソルトフラッツってリベリオンの大会で優勝したことだつてある。嘘だと思つたら後で私の部屋に來いよ、優勝トロフィー見せてあげるから」

「いや疑つてるとかそんなじゃないんだけどさ。優勝するだけの実力があるのになんでウィッチになつたのかなと思つて。それだけ頑張れたつてことはその世界が好きだったんだろ？その道で頑張つていこうとか考えなかつたのか？」

「うん勿論好きだよ。でも挑戦してみたくなつたんだ新しい世界に」  
観察を止め、マシンウィングァーに手を置いてシャーリーは語り始める。

「大会で優勝したその日に聞いたんだ。魔導エンジンを操つて空を飛ぶ世界最速のウィッチたちの話を。ストライカーでなら音速の世界にも辿り着けるかもしれない。そう思つて私は軍に志願したんだ」

自分の動機を、目標を、夢をキラキラした少年のような瞳で話す

シャーリー。眩しく映るその姿にソーマはポツリと眩いた。

「かつこいいいな」

「そ、そうか？嬉しいけど、そうはつきり言われるとなんか照れくさいな」

「恥ずかしがることないだろ。自分で決断してその夢に真つ直ぐ進んで、夢を叶えてまた次の夢に挑戦してって、最高にかつこいいいじゃんか」

「だからやめろって。そう言うソーマだってあるだろ？夢」

「…夢か」

訊ねられて言い淀むソーマ。予期せぬ驚きと触れられて欲しくない領域に踏み込まれた不快感が混ざったような表情を作った。たった一瞬微々たる変化だった。だがその僅かな変化をシャーリーは見逃さなかった。

「この力で皆の希望を照らすために戦う。それが今の俺の夢かな」

「そっか、かつこいいいじゃん。そっちもさ」

ハリケーンウィザードリングを嵌めた指を見せて言うソーマに気持ちのいい笑みと共にシャーリーはその言葉を送る。言われたソーマは目を横にずらし、指で頬を搔いてから気まずそうに言葉を返す。

「…照れるなこれ」

「だろ？」

「……」

訪れる静寂。じつとお互いに視線を向けたまま動かない二人。

そして数秒ほど経った後に

「ぶっ、はっははー！」

顔を見合わせた二人が同時に嘖き出し、笑い声が格納庫に木霊する。

「今度一緒にツーリングしようよ。私とお前のバイクでさ」

「お、いいなそれ。おすすめの場所とかあるか？」

「あるよ。じゃあ今度の休暇にいくか。あ、たぶんルツキーニも一緒になると思うけどいいか？」

「人数多い方が楽しいしな、問題ないよ。休暇の日程合わせないとい

けないし詳しいことはまた今度話し合って決めるか」

それからしばらくして

「海上訓練？」

「はい。明日10:00にミーティングルームに集合せよとのことです」

シャーリーがストライカーを弄り、ソーマがマシンウイングの車を蛇口に繋いだホースで洗い流していると、その二人の元に宮藤とリーネがやって来た。彼女たちが持ってきたミーナからの伝令にソーマは困ったように後頭部を掻く。

「俺水着持っていないんだよなあ。用意した方がいいよなあ？」

「そうだなあ。訓練そのものは海上に落ちた時の非常事態に備えての訓練をするはずだからソーマの場合なくてもいいとは思うけど、自由時間もあるからな。あつて越したことはないんじゃないか？」

「それミーナ中佐も同じこと言っていました。訓練の後は皆で海水浴できると」

シャーリーに重ねて宮藤が先ほど言われた内容を思い出して言う。

実際のところは宮藤の言うように軽いニュアンスではなかったのだが、似たようなものだろう。

「じゃあ買ってくるか。予報じゃ今日はネウロイも来ないみたいだし。二人は自分の水着あるのか？」

「私は大丈夫です。坂本少佐が以前使っていたものを貸してくれるみたいなので」

「リーネは？」

「わ、私は…」

「リーネちゃん？」

頬を赤くするリーネ。その反応に宮藤もソーマも首を傾げる。一方でシャーリーはピンと来たようでニヤニヤと意地らしい微笑を浮かべている。

「私も同行させてもらっていいですか？」

「いいよ。なら時間もないし今から行こうぜ。こいつで送ってくか

ら」

「そのバイク、ソーマさんのだったんですか？」

「いいなあーリーネ、私もそれ乗ってみたかったんだけどなあ」

自分の知るバイクとは程遠い見えない奇抜な見た目をしたそれに驚く宮藤の傍らでシャーリーは心底から残念そうに呟く。

「そう言われてもな。見ての通りこのバイク二人までなんだ。悪い、また今度な」

「ん〜わかつてるけど…それでもなあ」

シャーリーは諦め切れない様子で悩みあぐねていた。そうしてしばらくシャーリーは声を上げた。

「そうだ！あれを使うか！」

「あれ？」

何か妙案を思いついた様子のシャーリーを前に三人は首を傾げた。



「さつき言ってたあれってこれのことか」

買い出しのために街に出るとミーナに申請して無事了承を得たソーマが戻ってくるのとシャーリーはマシンウインガーにサイドカーを取り付けていた。これならば確かにシャーリーも加えて三人乗りが可能だ。

「よし、これで三人乗れるぞ」

「じゃあ行くか。二人とも乗ってくれ」

まず真っ先にソーマがバイクに跨る。そしてその後部座席にシャーリーは乗った。

そのシャーリーに顔を向けてソーマは疑問を口にした。

「え？お前がこつちななの？」

「私が後ろじゃ嫌か？」

「そういうわけじゃないけど。てつきりリーネが後ろに乗るか」と

「別に隠さなくなつて正直に言っているんだぞ。リーネが後ろに座つてる方がいいって」

「そうじゃないって」

「冗談だよ、冗談。ふっふーん、いいから行こうぜ」

ソーマの困り顔を見てからかったシャーリーはにひひと笑う。完全に遊ばれてるなど、その表情から悟ったソーマは目を細めつつリーネに視線を切り替える。

「リーネ、悪いけどそっちに乗ってくれるか」

「わかりました」

バイクにさほど興味がないリーネは快く承諾しサイドカーに乗り込む。リーネとシャーリーがヘルメットを被ったのを確認してソーマはハンドルグリップを握る手を強める。

「行っていいか？」

「はい」

「いつでもいいよ」

「…っ！」

ソーマの腰に腕が回され、柔らかい感触が生じた。その瞬間彼の体は電撃が走ったようにピクリと跳ね上がる。

グラマラスシャーリーと謳われる彼女の実った特大な果実が密着したせいだ。

「ソーマさん？」

「どうかしたのかー？」

「あ、ああ、いやなんでもない」

（ヤバい、これは…耐えられるか俺）

出発しない彼を不審がつてリーネとシャーリーが声をかける。背中に感じる慣れない感覚、理性を奪おうとする圧倒的な破壊力にどうか平靜を保ちつつ彼女たちに返事をし、ソーマはバイクを走らせる。



「ここまで来ておいて今更言うのもなんだけど三人も離れてよかったのかな」

「いいんじゃないか。中佐が許可してくれたんなら。それにいつネウロイが来るのかわからなくなってるならこういう時に気を休めておかないとやっていけないだろ」

「まあそれは言えてるな」

「あ、ここみたいですわね」

マシンウインガーを街の入り口に置いて会話をしていると目的の水着を売っている服屋に到着する。

「男のはあっちか。俺向こう行ってるよ」

「おっけー。こっちに来るのは気まずいだろうから終わったらそっちいくよ」

中に入って早々、二人と別れてソーマは男性売り場の水着コーナーに移動する。

「何色にするかな。緑だとなんか代わり映えしないしピンクもな、ちよっと抵抗あるな。いやこれどっちかってつとマゼンタか？まあそれはどっちでもいいか…どうするかな」

赤・黄色・紫とカラーのバリエーションが大量にありどれにするか迷う。特段こだわりはないがどうせなら少し考えてから決めたい。

「これでいいか」

色々見比べて数ある中から選んだのは黒を基調とし橙のラインが入った水着。派手でもなければ地味でもないと個人的に思う丁度いいデザインだ。

会計を済ませてソーマは店の商品を見ながらシャリーとリーネを待つ。

「まだあつちは時間かかりそうだな」

十分弱過ぎたが二人が来る気配はない。女性の買い物は相応にして長いものと聞いたことがある。ソーマはもう少しだけ待つてみることにした。

店内をちらちらと見て回っていると窓越しに向かいの店の商品が見え、ソーマは足を止めた。

「そうだ、今の内に買っておくか」

一旦向かいの店に赴いて帰って来たソーマは再び男性用売り場に舞い戻るが未だシャーリーとリーネの姿はなかった。

さすがにかかりすぎる。もしかして良からぬことに巻き込まれたのだろうかど心配になってソーマは女性用の売り場へと向かう。

その試着室の前で待ち構えているシャーリーがいた。ひとまず危惧していたような厄介な事にはなっていないさそうのでソーマは安心した。

「シャーリー、まだかかりそうか？」

「ごめんソーマ、もうちよつとだけ待っていてくれ。後もう少しのはずだから」

近づいたソーマに気付いたシャーリーは振り向いて申し訳なさそうに両手を合わせて謝罪を述べる。

「待つのは全然いいけど何に時間かかってるんだ？」

「リーネに合う水着がなかなかなくてさ。今お店の人に頼んで一緒に見繕ってるんだ」

「それなら時間かかるのもわかるけど、にしたってかかりすぎじゃないか？チラツと見ただけだけどリーネが着たら可愛く見えそうな結構あると思うけどな」

店内にある女性用の水着を見渡してソーマは言う。それに対してシャーリーは言い辛そうに苦い顔をして言葉を絞り出す。

「可愛いとかの問題じゃないんだよな」

「どういう問題よ？」

「シャーリーさん、やっぱりこれもダメみたいですよ。胸のあたりがきつくて、それにこんなに肌が見える水着とてもじゃないけど私には…」

ソーマが訊ねるとそれに合わせるように試着室のカーテンが開いた。

音と声に反応してソーマが視線を向ければ、そこにある光景にその眉が動いた。試着室から姿を見せたのはリーネ。白い水着を着た彼女は、腹部が外気に晒し、いつもは大人しく鳴りを潜めている胸元は苦しそうにぎつちり寄せられていた。

「ええっ!? ソーマさん! な、なんでいるんですか!？」

「なかなか来ないから気になって来たんだよ。なるほどなあ、こういうことか。これは確かに可愛いとかの話じゃないな」

「私ほどじゃないけどリーネも結構あるからピッタリ合うサイズがなくてさ」

狼狽えるリーネ。それを見て納得した様子のソーマにシャーリーが説明する。

大人しい性格とは真逆にリーネはシャーリーに次いでバストが大きく、水着が合わないのだ。

恥じらうリーネに気を遣ってなるべく彼女を直視しないようにしてソーマはシャーリーと話す。

「だったらシャーリーと同じような水着でいいんじゃないか? シャーリーに合うサイズがあるならリーネだって着れるはずだよ」

「私もそう言ったんだけどさ、私の水着今リーネが着てるみたいに露出の多いタイプのやつで、リーネがあまりそういうのは着たくないって言うんだよ。で、今店の人にワンピースタイプの水着で合うサイズがあるか見てもらってるってわけ。それなら肌覆う面積も多いしな」  
確かにリーネの性格的やイメージを考えるとワンピースタイプの水着はピッタリだろう。しかし…とソーマは今のリーネの姿を見つめる。

「それでもいいと思うけどな。合ってるし可愛いし」

「あ、あまり見ないでください!」

異性に見つめられて相当恥ずかしかったのか、可愛いと言われて照れたのか…どちらかあるいはその両方かは不明だがピシヤリと勢いよくカーテンを閉める。

「す、すみません。失礼なこと言って」

「俺の方こそごめん。今のは俺が悪かった」

カーテン一枚を隔てた先にいる相手にお互いに謝る二人。やや気まずい空気が漂う中ソーマは一息置いてシャーリーに話しかける。

「まだ時間かかりそうだし先中佐たちに頼まれた日用品買っておきましょう。さっきバイク止めたところで待ち合わせよう」



「色々負担かけさせて悪いな」

「いいって。じゃ、また後でな」

「おう」



夕日が見え始めた黄昏時、バイクに寄りかかってソーマが待っているとシャーリーとリーネが街の出口から戻ってきた。

「おつ待たせ〜！」

「無事いいものが買えたみたいだな。よかった」

「すみません。私のせいでお二人に迷惑をかけてしまった」

「俺は気にしてないよ。こういう皆で買い物なんて滅多になかったから楽しかったし」

「そうそう、私もあんまりああいいうところ行かないから新鮮だったよ」

頭を下げて謝るリーネ。彼女の律儀さにソーマもシャーリーもふつと綻んだ。

「さて、目的の水着も頼まれた物も買ったし日が暮れない内に帰るか」  
買った物をバイクの収納口に閉まって入りきらなかった分はサイドカーに積み込む。リーネには少しばかり不自由をさせるが、自分のせいで時間を食ってしまったからと嫌な顔一つせず受け入れてくれた。

リーネがサイドカーに乗り込んだのを見届けてソーマはバイクに乗り、シャーリーもその後ろに座る。シャーリーはソーマの腰に手を回して身体を密着させる。

再び襲いかかる心を乱す魅惑的な感触にソーマはピクつと身体を跳ね上げる。

(おかしい、なんかさつきより押し付けられている感じがする)

バイクを発進させてしばらく。

どうにか意識を取られぬようバイクを走らせていたが背後の温もりと柔らかさがやはり気になる。むしろ時間が経つにつれて、基地が近くなるにつれてその感触が強くなっているように思えて、気になっ

てしようがない。

「もしかしてまだ気になる?」

不意に耳元で囁くシャーリー。その声に含まれる小悪魔にも似たいたずらの色にソーマはまさか、とある考えが過ぎり小声で反発する。

「おまつ、気付いててわざとやってたのか!? さっきからずっと!」

「さっきからっていうか、基地出る時からずっとだな。いやあ、あんなわかりやすい反応するから面白くてさ〜つい」

「つい、ってなんだよ! ついって! 運転に集中できないから離れてくれよ!」

「離れたら落ちるだろー。我慢しろって。それに、嫌いじゃないだろ? こういうの」

「:そりゃあ、悪くはなーじゃねーよ! 何引き出そうとしてんだよ!」

「はっはっは! ほんっと面白いな!」

いいようにソーマをからかって気持ちよく笑うシャーリー。サイドカーのリーネには会話の内容は何一つとして聞こえていなかったが楽しそうに笑顔の二人を見てつられて笑った。



基地に戻った頃にはもう空は朱色に染まっていた。格納庫の前にバイクを止めて荷物を運んだ後、三人は部屋の椅子で体を休めていた。

「私は部屋に戻りますね。今日は本当にありがとうございました」

「おう、また後でな」

「私も部屋で休んでよっかな」

「シャーリー、ちよっと待った」

「ん?」

リーネに続いて自室に向かおうとしたところをソーマに呼び止められるシャーリー。一体何だろうかと思っていると彼は今日買った荷物の中から小さな袋を出してシャーリーに手渡した。

「はい、これ」

「なんだこれ？」

「プレゼント」

「プレゼント？なんで？」

手に持った袋をシャーリーは疑問の眼差しを注ぎ、目をパチクリさせる。

「こないだ大尉に昇進しただろ。そのお祝い」

「…あ、あく！あつたな！そーいや」

暫しの間を置いてシャーリーは思い出したように声を上げる。

「あつたな、つてお前。忘れてたのか？自分のことだろ」

「いやあ、階級とかそういうのあんまりこだわりなくてさ。すっかり忘れてたよ」

「そういう発言軍人としてどうかと思うぞ。その方がシャーリーらしいと言えばらしいけど」

バルクホルン辺りにでも聞かれていたら間違いなく呆れの一言が投下されていたであろうことをてんで恥じることなく言つてのけるシャーリーにソーマは苦笑する。

「中身空けて見ていいか？」

「もちろん」

何が入っているのかとわくわくしながらシャーリーは袋に入つていた箱を開けてみる。赤い宝石のネックレスがあった。

「うわっ、すっげえ。いいのか？こんな高そうな貰っちゃつて」

「俺が勝手にしたくてやったことだしお前がそういうの気にする必要ないつて。むしろ好みとかよく調べずに買っちゃつたから気に入つてくれたかどうか」

「そりやあもちろん。気持ちだけでも嬉しいのにこんなプレゼント貰ったらめっちゃくちゃ嬉しいに決まつてんだろ。ほんとありがとな」  
「それならよかった。買った方としても嬉しいよ。じゃあまた後でな」

「ああ、お疲れ様。ゆっくり休んでな」

そう言つてソーマはその場を去つていく。食堂に一人となつた

シャーリーは貫った赤いネックレスを首にかけて、窓の近くまで近づく。

軍服というのを差し引いてもこの宝石の輝きが自分に見合っているのだろうか？と鏡面に映った自分を見て思う。

「たまにはこういうのも悪くない、かもな」

かわいい服を着たいと思ったことはあったがお洒落にはさほど関心はなかった。

これを機にそういう物を買ってみようか。ドレスでも着れば少しはマシになるだろうか…

鏡面に映る自分の姿を見ながらそんなことを考えるシャーリーはどこか嬉しそうに笑っていた。

## 第八輪 Sの夢／限界を越えろ！

海上訓練日当日、基地の敷地内の浜辺でウィッチたちは各々個性あふれた可愛らしい水着を着て訓練に励んでいた。

のんびりと犬かきで泳ぐハルトマン、逆に全力のクロールで水平線を横切るバルクホルン、『いやっほー！』と歓喜の叫びと共に海面に飛び込むシャーリーとルツキーニ、砂浜の上で座り込んでじつと水面を見つめるサーニヤとエイラ：真つ当に訓練をしている者と遊んでいるようにしか見えない者まで時間の過ぎし方はそれぞれだった。

一方：

「なんでこんなの履くんですか!？」

宮藤とリーネの二人はというと

仲間たちから少し離れた岩場で坂本とミーナの指導の下、水着にストライカーを装備させられていた。

海上訓練とは聞いていたがストライカーを装着するとは予想していなかったのか、まるで話が違うとでも言いたげな口調と目で宮藤が上官らに異を唱える。

「何度も言わすな。万が一海上に落ちた時のためだ」

「他の人たちもちゃんとやったのよ。後は貴方たちだけ」

飛び込むよう促す坂本とミーナ。海上訓練で何故竹刀が必要なのだろうかと坂本の持つ竹刀が気になりつつ、二人の隣でソーマは渋る宮藤とリーネを説得する。

「もし溺れたとしても俺がすぐ助けに潜るからさ、怖がらずに飛び込めよ」

「それでも怖いですよ!」

「いいからさっさと飛び込め!」

「はっ、はいい!」

頑なに嫌がっていた宮藤とリーネだが坂本の一喝に萎縮して時を同じくして海面に消える。

水柱が二つ上がり、波紋が静まった水面を坂本は懐中時計を手に見る。

「浮いてこないな」

チツ、チツ、と時計が時間を刻む音だけがやたらと大きく気持ちよく聞こえる。三十秒か一分か、二人が海に消えてどれだけ過ぎろうか。なかなか上がってこない二人にソーマは心配になる。

「助けに行った方がいいかもな」

「そうかもしれないわね。そろそろ限界でしょうし」

「やっぱり飛ぶようにはいかんか」

ウォーターの指輪を用意してソーマが救助に向かおうとしたちやうどその時水面に黒い影が生じ、徐々に大きくなる。そこから二つの頭が這い出てきた。

「ぷはあ！」

「いつまで犬かきやつとるか」

無事上がったて来たことに胸を撫で下ろすミーナとソーマ。一方で坂本は酸素を求めてあがく二人に手厳しい言葉を送りつけた。

「はあ…疲れた」

「すぐ慣れるって」

休憩時間となり、すっかりしごかれて疲れ果てた宮藤とリーネは砂浜に身体を預けるように寝そべっていた。

そんな彼女たちの真ん中にシャーリーが座って励ましの言葉をかけ、宮藤やリーネと同じく身体を横にして青空を見上げる。

太陽の温かな日差しを全身に受けてシャーリーは首を真横に動かす、とそこであることが気になった。

「あいつどこ行っただんだ？さっき一緒にいただろ？」

「あいつってソーマさんのことですか？ソーマさんなら」

宮藤が言いかけた時、遙か遠くの海から水柱が天に向かって昇る。とても自然現象とは思えない光景にシャーリーが驚く間にも水柱の数は増え円陣を作るように次々と立ち並んでいく。

「うおっ！なんだああれ！」

「たぶんソーマさんだと思います。水の魔法の力を使いこなす練習を

したいからって言ってさつき海の中に」

「すげえな…しかし休憩の時間だつてのによくやるなああいつ」

感心したように呟くシャーリー。気を取り直して再度寝そべって天を仰いでいると、宮藤が空に何かを見つけた。

「今太陽を何か通つたような…」

「ん？」

宮藤に釣られて他の二人も太陽の方角を見上げる。燦々とした輝きを放つ白い球体の真ん中を黒い影が一直線に凄まじい速さで横切つた。それは

「敵だ！」

真つ先に腰を上げてシャーリーは格納庫を目指す。宮藤とリーネも習おうとするが先の訓練の負担が消えていないせいで、立ち上がった瞬間姿勢を崩して転倒してしまう。

その間にシャーリーはいの一番に格納庫に到着し、水着のままストライカーを履いて出撃する。

「行きますー！」

誰よりも先に格納庫を飛び出して青空を飛行する。自身の魔法を発動し、ネウロイを追跡するその最中シャーリーは違和感を覚えた。

（全然加速が止まらない。今日はエンジンの調子がいいのか？）

いつもと違う飛行の感覚。普通なら不安になつて慌てるのだろうがこの時の彼女に不安だとか恐怖だとかそういうマイナスな気持ちにはなかつた。

（この感じ、似てる。あの時と）

「いつけええええ！」

固有魔法の超加速の力を更に開放し、数段階加速する。ついで味わつたことのない風が肌を通る。

「私、マツハを超えたの!?これが超音速の世界?すごい、すごいぞ! やつた!私やつたんだ!」

敵を追いかけている時だというのにこの上ない喜びと達成感が胸を打つ。インカムから坂本の警告がその気持ちに支配しているせいか、シャーリーはそちらに気付くことなく飛行を続ける。

そうしているうちに彼女はネウロイを捕捉した。だがその瞬間ネウロイは後方部の砲門から彼女めがけてビームを放った。

「やっば——」

自身の速度も相まって放たれた攻撃を避けることができずシャーリーは咄嗟にシールドを張る。

「うわああああ!!」

シールドで攻撃は耐えたが、その衝撃と超高速の波に乗っていた状態から急激に停止したことによる負荷がシャーリーを襲い、彼女の体は真つ逆さまに落下していく。

(まずい、これじゃあ海に：なんとかしないと。でも体が、動かない) 衝撃で体が一時的に麻痺したのか思うように動かせない。このまま彼女の体は海面に激突してしまう：高度を考えればいくら魔力があるからといってただではすまない。最悪の結末を予想し、恐怖に思考が染まる。

視界いっぱい海の青が埋まった時、彼女の体が海面スレスレで浮き上がり空へ引き戻される。

「ギリギリ、どうにかセーフってところだったな」

「ソーマ？」

海によく似ているが違った色合いの緑の宝石の顔、ハリケーンスタイルのソーマがシャーリーの目に映った。

彼女の体を空から落下した姫君を受け止めた騎士のように受け止めたソーマは彼女の安否を確認する。

「無事か？体動かせるか？」

「あ、ああ」

「ネウロイはこの先か：あれだけの速さだと俺じゃあ追い付けない。シャーリー、あのネウロイ頼めるか？」

「でも、これじゃ無理だ。私のストライカーはもう動かないんだ」

シャーリーが空を見上げるとそこに黒点は、ネウロイの姿はなかった。おそらく攻撃するだけしてまたベルリンへと向かったのだろう。

距離を大きく突き放されてストライカーも壊れては追い付きようもない。諦めたシャーリーは沈んだ表情をするが



「追い付けるさ。俺とお前の魔法の力があれば」

「えっ…?」

「手放すからちよつとの間しっかり掴まってるよ」

その質問シャーリーは困惑の表情を浮かべる。だがそれはほんの一瞬、すぐに切り替わって迷いのない目でソーマを見返した。

「何かあるんだな。頼む、やってくれ」

「お前がそう言ってくれる奴でよかったよ。よし、なら指を出してくれ」

そう言うソーマの顔は仮面に遮られてわからないが微笑んでいるようにシャーリーは見た。

お姫様抱っこを解いてソーマは左腕でシャーリーを抱きしめたまま空いた右腕でシャーリーの人差し指に指輪と通し、自身のベルトに指輪を嵌めた手を持ってこさせる。

『タイム、プリーズ!』

シャーリーの体とストライカーを白銀の光が包む。ソーマはシャーリーから手を放すと彼女の体は落ちることなく、浮いていた。

それが意味するところは一つ

「ストライカーが治った?使えなかったはずなのに」

「ちよつと特別な魔法をかけたからな。もう簡単に壊れる心配はないはずだ」

ストライカーが完全に復元している。それも新品同様の輝きを放っている。

こんなことまでできるのか、とシャーリーは魔法の力に舌を巻く。

「俺にできるのはここまでだ。後はお前に託すしかない。頼めるか?」

「ああ…ここまでやってくれたんだ。応えなきや嘘だろ」

ソーマの言葉にガッツポーズで返してシャーリーは再び空に舞い戻る。

超加速の力を使用し、ストライカーを吹かした彼女は一気にその場から飛び去る。

ストライカーが作りだす雲を見つめたソーマは目まいと頭痛に襲

われる。

「っ・やっぱりこの魔法使うところなるか。わかっていたとはいえきついな」

「ソーマきーン！」

頭を抑えるソーマの耳に宮藤の声が届く。振り向くとそこには宮藤とリーネの姿があった

彼女たちもシャーリーの応援に駆け付けたのだろう。

「ソーマさん、シャーリーさんは？」

「あいつならネウロイと追いかけてこの最中だ。俺たちも追いかけるぞ」



「すごい。さつきと同じ、いやもしかしたらそれ以上の速さだ…これならいける！」

シャーリーはスピードの世界に突入していた。タイムの魔法で魔力もストライカーも万全の状態に戻った彼女は今、この上なく最高のコンディションで空を飛んでいる。

素肌を刺激する空気の圧を心地よく感じる彼女は青いキャンパスの中に一つの黒点を目視した。

「あれだ！今度こそ、いっけえええ!!」

直撃を恐れずシールドを前面に張りながらフルスロットルで加速する。

彼女の存在に気付いたネウロイはさつきと同じように発光部からビームを放とうとするも、そこから赤が飛び出るより前にその体を一筋の青い閃光が穿った。

「よしっ！」

大気中に散らばる白い破片。ネウロイの形を成していたものを振り返って確認したシャーリーはやりきった顔で道を引き返す。

「芳佳ちゃんあれ！シャーリーさんだよ」

先を行っているはずの人物が正面からやってくるのに気づいた



「リーネちゃん、ソーマさんはどうしたの？大丈夫そう？」  
「大丈夫、だと思おう…寝てるだけみたい」  
露わになったソーマの寝顔を見てリーネはそう答えた。



「…ん」

目が覚めるとまず茜色に染まった見慣れた天井が見えた。

「よかった起きたー！」

「…ルツキーニ」

横に座って自分を見下ろしている少女の名を呟いてソーマは身体を起こして、朧気な眼を周りに巡らせる。

家具の種類と配置、窓からの景色。重く痛む頭でもその情報で自分のいる場所がどこかわかる程度には思考力は回復していた。

「心配したんだよ。ずっと起きないから」

「ここ、俺の部屋か」

「うん、バルクホルンがここまで運んでくれたんだよ。ソーマ、寝ちゃってたから」

「そっか、あの後気失ってたのか」

ルツキーニからベッドに寝かされるまでの経緯を聞いたソーマは記憶を失う前後の状況を思い起こす。

（たったあの程度の使い方どころなるんじや、俺には扱いきれそうにないな）

タイムの魔法に気を失った原因があるとソーマは考えた。時間を操る効果を持つだけに魔力消耗が激しい上に今の自分の魔力では故障したストライカーを一つ元の状態に直しただけで体に大きな負担を与える。

使い勝手のいい力だが当分の間使用は避けた方がよさそうだ。ソーマはそこまで思案して、赤面する。

（そういえば俺、見たんだよな…シャーリーの…裸）

幸いと言うべきか、タイムの魔法の影響でモヤがかかったように

はつきりとは思いつき出せないが確かにあったという確信はあった。女性の、それも仲間の裸を間近で見ってしまったという事実が

「後で皆にお礼言わないとな。で、なんでルツキーニがここに？もしかしてずっとここにいたのか？」

「うん、ソーマにどうしても謝らないといけないことがあるから」

もう考えるのはやめたいとかぶりを振ったソーマはルツキーニに聞いた。すると天真爛漫で明るい彼女は柄にもなく沈んだ表情を作る。

「ネウロイを追いかけてる時シャーリーのストライカー調子おかしかったんでしょ？あれワタシのせいなんだ。昨日シャーリーたちが買い物行ってる間にワタシがシャーリーのストライカー倒しちゃって、その拍子に外れた部品を適当に戻してたの。なのに怒られたくなくてそのことを黙ってたからそれで…」

「だからあの時、浮上できてなかったのか」

追い付いた時シャーリーはネウロイの攻撃をシールドで受け止めた様子で外傷は一つとしてなかったのにストライカーは飛行が不可能なほど損傷が酷かった。

無線機で坂本がしきりにシャーリーに引き返すように連絡を送り続けていたのもそのためだろう。

その時はネウロイを撃破するのにいっばいで気に留めていなかったが、そういう事情があったのなら納得がいく。

「シャーリーからは何か言われたか？ちゃんと言ったのか？」

「言ったよ。言って謝ったけど、何事もなかったんだから結果オーライだから気にすることないって」

「だったらそれでいいよ。シャーリーがそれでもう気にしないって言うなら俺に謝ったりする必要はないよ」

ソーマはそう言って締めくくることがルツキーニとしてはまだ釈然としていないようで更に言葉を続けた。

「でもワタシが壊しちゃったからソーマに迷惑かけちゃったんだよ？なのに」

「そんなの全然かまわないさ。お互い困った時に損得抜きで助け合う

のが仲間なんだから、いくらでもかけたっていい。そういうものだろうたぶん」

「…そーだね。ありがとうソーマ」

笑顔を取り戻したルツキーニはよいしょっ、と声を出して椅子から降りて椅子を立つ。

「ソーマが起きたって知らせてくるね。皆ずっと心配してたから」

「待った、ルツキーニ」

「なーに？」

早歩きでドアに進み取ってに手をかけるルツキーニ。しかし開ける前に呼び止められて後ろを振り返る。

「謝らなくていいけど今度からはそういう大事な隠し事はなしだぞ。

怒られるのが怖いのはわかるけど黙ってるのはよくない」

「そうだね。わかった」

ルツキーニはそう言うのと暫し間を置き

「じゃあ約束しよ」

と言葉を続けた。

「約束？」

「そ、もう二度とこんなことしないように『どんなことも隠さないで正直に話す』って約束をソーマとしたいの。だからお願い、小指出して。こんな風に」

「これでいいの？」

怪訝な顔で聞き返すとベッドまで歩み寄ったルツキーニは拳を親指と小指を突き出した状態にして向ける。

疑問に思いながらもソーマは見よう見まねで同じ形を作ってルツキーニの指に自分の指を絡める。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーますっ！指切った！」

元気よく張りのある声で言葉を発したルツキーニは絡めた指を上下に振ってから離す。

「針千本とか指切るとかすごい物騒な言葉並んでただけどこれ約束してるんだよな？」

「芳佳にこないだ教えてもらったんだ。扶桑じゃ約束する時にこれを

やるんだって言った。破ったら本当に針千本飲まなきゃいけないから約束したことは必ず守らないといけないんだって」

受け売りの知識をルツキーニはさも誇らしげに説明する。こういうところは実に年頃の快活な女の子らしく、可愛らしく思える。

「破ったら千本も、か。それは怖いな」

「でしょ？だからそうならないように私もソーマも気を付けないと」  
「俺もか？」

「もちろん！二人の約束なんだから私だけしても意味ないでしょ」

その言い分はなんか少し違うような気もすると、腑に落ちない気持ちにはあったがソーマはルツキーニに頷いて言う。

「人に言っておきながら自分ができないなんて恥ずかしいもんな。わかった、忘れずに覚えておくよ」

「絶対だよ。絶対忘れちゃダメだからね。じゃあ私行ってくるね。ゆっくり休んでね」

無邪気な笑顔とその言葉を残してルツキーニは部屋を出ていく。勢いよく閉ざされたドアに軽く苦笑してソーマは背中をベッドに押し付け、横向きの体勢になる。

「こんなだらしのない体たらくじゃダメだな。もっと、今よりもっと強くないと」

窓から差し込む橙の光を鬱陶しく思いながらソーマはポツリと呟いた。

## 第九輪 祝う魔女

「ケーキの作り方を教えて欲しい？いいけどなんで？」

向かいの椅子に座る少女、リーネにソーマはそう質問を投げかける。

時を遡ること少し前、一通りの訓練を終えたソーマがやることもなく時間を持て余して自室のベッドで横たわっていた。そこにノックの音が響き、ドアを開けてみればリーネがいた。

彼女から相談があると言われて部屋に招き入れ、要件を訊ねたところ先ほどソーマが口にした言葉が飛んできたというわけだ。

「もうすぐ芳佳ちゃんの誕生日なんです。だからお祝いがしたくて、ケーキを作ったら喜んでくれるかなって思ったんですけど私あまり料理得意じゃないから。ソーマさんに教えてもらえないかと」

「宮藤の誕生日…いいよ、そういうことなら是非協力させてくれ」  
「ありがとうございます！」

明るくはきはきと笑顔でお礼を言うリーネ。すっかり以前の内気な雰囲気はなくなっているようで前向きで元気な最近の彼女の様子にはソーマも見ていて温かい気持ちになる。

「そっか誕生日か…：…だったら盛大に祝いたいよなあ。皆で協力して誕生日会開けないか相談してみるか。あ、それと後誕生日っていつたらやっぱりプレゼントだよな。それも用意しておかないとな。何がいつかなー」

誕生日会と聞いて何時になく少年のように楽しそうに盛り上がるソーマを前にリーネはどこか申し訳なさそうな表情を浮かべている。しかしソーマはそれに気付かず、リーネに質問する。

「それで宮藤の誕生日っていつなんだ？」

「えっと、それが…」

「どうした？」

途端に歯切れが悪くなるリーネにソーマは眉を顰める。そんな彼に申し訳なさそうな、何かバツが悪そうな、そんな表情を浮かべてリーネは口を開いた。



「…明日なんです」

「…明日？…えっ、マジ？…ほんとに？」

「…はい」

聞き間違いかと耳を疑い、改めて聞き直すがリーネから突き付けられたのは否定ではなく肯定の言葉。

「私も今日初めて芳佳ちゃんから聞いて知ったんです。お父さんの命日でもあるから言い出しにくかったって…」

「あくそういう事情なら仕方ない」

父親を失った日と自分の生まれた日が同じ、できれば自分からは言い出しにくいのは自然なことだろう。そこは宮藤もリーネもどちらも非があることではない。

「仕方ないけど明日か、プレゼントは用意してる時間ないし諦めるしかないな。とりあえず誕生日会だけでもなんとか開けないか今から中佐たちに相談してみよう」

「宮藤さんの誕生日会。ええ、いいわよ」

早速その足でソーマとリーネが相談も含めて執務室へ向かうと誕生日会の許可は驚くほどあっさり降りた。

むしろミーナと坂本も要求を聞くなり満面の笑みで応じてくれた。

「本当ですか？ありがとうございます、ミーナ中佐」

「考えてみれば歓迎会もまだやってなかったことだしな。その分も兼ねて宮藤をたっぷり祝ってやろうじゃないか」

「そういえばサーニヤさんも誕生日この時期じゃなかったかしら？」

「サーニヤ…リトヴァク中尉も？」

ミーナが言った名前にもサーマは反応する。

アレクサンドラ・ウラジミールオヴナ・リトヴァク：501のメンバーからはサーニヤという愛称で呼ばれている少女。

夜間に警戒するナイトウィッチとしての任務が主のため昼間は寝ている。だからソーマが彼女と顔を合わせたのは入隊日くらいで会話に至っては満足にしたことはない。

それこそ名前など宮藤と一緒に入隊紹介をした時に寝ていた本人に代わってエイラの口から聞いたぐらいだ。

だが、それでも名前を言われて顔を思い出せるくらいには把握している。

「確かそうだったはずよ。八月十八日、あら宮藤さんと同じ日なのね」  
相槌を打ちながらデスクの引き出しから出したサーニヤの資料を手元にミーナが確認する。

「同じ誕生日が二人もいるってなかなか珍しいな」

「普通ならそうだろうがここ501は世界のあらゆる国から選出された精鋭が集っている場所だ。その中の一人や二人くらいは誕生日が重ってもさして不思議な話ではない」

「それもそうか。確かにそう考えたら全然ありえることか」

坂本の言葉にソーマはそう同意する。同意しつつ本題に斬り込む。  
「それでさ、本人たちにはサプライズってことで内緒にして誕生日会の準備をしていきたいんだけど」

「なら今日の夕方から夜にやるのがいいわね。宮藤さんとサーニヤさん、それとエイラさんは夜間の哨戒で基地にいないからその間なら当人たちには知られずに準備ができるわ」

「私たちは他の仕事があるからあまり手伝いはできないが他の皆には私たちの方から伝えておこう。二人とも、準備の指揮は任せただぞ」

了解、はい、と声を揃えてソーマとリーネは頷き、意気込みを露わにした。

上官二人のありがたい了承を得た二人は再び食堂に舞い戻り当日の段取りを相談していた。

「宮藤のはリーネ、リトヴァク中尉のは俺が作るとして何をどうするかだな」

「食堂の飾りつけとか食材の買い出しとかもありますしね。それにケーキ以外の料理も作らないといけませんし」

「そうなんだよなあ」

二人だけで準備を行うには現状、時間も人手も圧倒的に足りない。二人が悩みに苦しんでいると彼らの耳に頼もしい声が届く。

「ならケーキ以外の料理は私が作ろう」

「バルクホルン大尉」

聞こえた声に振り向くと開いたドアの手前にバルクホルンとハルトマンが立っていた。

「ミーナと少佐から話は聞いた。私たちも二人の誕生日を祝うために協力させてくれ」

「そりゃあもちろん、ありがたいけど大丈夫か？」

「そう大したものではないが簡単なものくらいなら自信はある。任せしてくれ」

「トウルーデは料理の腕も悪くないし心配しなくていいよ。私も手伝うしね、味見役として」

「そっちかい」

手伝うの方向性が期待していた方向と致命的にズレていながらも堂々と声を張るハルトマンにソーマは素早く指摘する。

一方バルクホルンは聞く前から答えがわかっていたのか動じた様子はない。

「この手のことに関してはこいつはアテにならないから。戦闘以外のことに関してはからっきしだ」

「あ、だからさっき頭数に入れてなかったのか」

先の発言を思い出してソーマはそう呟く。

ハルトマンが頼りにならないのは残念だが、とにかくまず料理担当が決まっただけでも救いだ。

「後他に必要なのって飾り付けをする人と料理に必要な食材を買いに行く人ですかね？」

「そうだな、飾り付けはともかく時間と手間のかかる買い出しはできれば他に手の空いてる奴に頼みたいな。飾り付けの方は花だったら最悪俺が用意できるし」

「できるんですか？」

「できるよ。今からでも」

「今からってどうするの?」

「まあ、見てなつて」

リーネとハルトマンの言葉に当然のような顔でそう返したソーマは花の絵が刻まれた指輪を出して、起動していない状態のベルトに翳す。

『フラワー、プリーズ!』

魔法が発動するとソーマの手には白い紙に包まれた赤い花束が収まる。何もなかった空間に作り物ではない本物の花が現れた摩訶不思議な光景に三人は面食らうと同時に感嘆する。

「すごい、こんなことまでできるんですね」

「前から思ってたけどほんとソーマの魔法って私たちの魔法と全然違うよね。魔法たくさんあるし、色んなことできるし、なんていうか便利って感じ」

ウィッチの持つ固有魔法と異なり、ソーマの魔法は戦闘においてもそれ以外の場面でも多種多様の効果を発揮する。

確かにハルトマンの放った『便利』という言葉は彼の魔法を的確に表していると言える。

「ちなみにこういうこともできるぜ。バルクホルン大尉、ちよつと手借りるな」

「お、おい!何を!」

『ドレスアップ、プリーズ!』

気を良くしたのかソーマはバルクホルンの指に指輪を付けてまた新しい魔法を発動させる。

バルクホルンの足元に現れた魔法陣が彼女の体を下から上にすり抜けると、その時彼女に変化が起きた。

誇り高きカールスラントの軍服が、軍人が身に付けるには相応しくない真っ赤なドレスに入れ替わっていたのだ。

「な、ななな、なんだこれはあ!?!」

「見ての通り服を変える魔法だけど」

自覚なしにすり替わっていた自らの服装を見てみるうちに茹蟄みたい顔に顔を真っ赤にするバルクホルンに対しソーマは平然と言

い放つ。

「すごく可愛らしいですよバルクホルン大尉」

「んーいいんじゃない？いいけどトウルーデがそういう恰好するのなにか面白いね」

純粹に誉め言葉を口にするリーネと見慣れない戦友の姿に笑いを浮かべるハルトマン。二人の反応にバルクホルンは耳まで朱く染める。

とそこへ

「中佐たちから聞いたぞー宮藤とサーニヤの誕生日会するんだって？」

「誕生日パーティーー！私たちも手伝う！」

「さ、坂本少佐たってのご命令ですし…宮藤さんとサーニヤさん、お二人のために一緒に私も準備に加わって差し上げますわよ」

左官二人からの言伝を聞いたであろう。ルツキーニ、シャーリー、ペリーヌがやって来て…バルクホルンを凝視して固まる。動きも表情もまるで時を止められたか、石化したかのようにピタリと止まる。そして数秒後

「にやははは！バルクホルン何そのかつこー！」

「はっ、ははっ、はっはっ！お前、どうしたんだよそれ！」

「た、大尉一体何故そのようなご恰好を？」

案の定、というべきかバルクホルンの衣装に目が行くなり三人が三人ともそれに触れる。疑問を口にしただけのペリーヌはまだいい。

大っぴらに声を上げて爆笑するルツキーニとシャーリーの反応がバルクホルンの恥辱を増大させる。

「どうしてくれる…！」

「ストップ、待って！ダメだって、それ下手したら下手するやつだから！悪かったって、調子に乗りすぎたのは謝るから！」

犬の耳と尻尾を出し、ウィッチとしての力を発動させて詰め寄るバルクホルンにソーマは本格的に身の危険を感じ、冷静になるよう必死に訴える。

「ならすぐに、戻してもらおうか。今すぐにだ！」

「えくもつたいないって似合ってるんだから。なあ?」

「散々笑っておいて何を今更」

「だってお前、いつも真面目な奴が急にあんな面白いことしてるの見たらそりやお前笑うだろ。いつひっひー!」

「リベリアン貴様!」

笑いを堪えきれずに噴き出すシャーリーにバルクホルンが睨みを効かせる。悪い悪いと手で諫めながらもシャーリーの口からは笑い声が途絶えることはない。

「皆さん集まって何してるんですか?」

「うるさいなーもう夜だつてのにこんな騒がしくして何だつてんだよ」

「よ、芳佳ちゃん?」

「サーニヤさん?」

宮藤とエイラ、サーニヤが入ってきて声を上げた瞬間皆が驚いた表情を浮かべてそちらを見たまま凍り付く。

バルクホルンは咄嗟にソーマの陰に滑り込むように隠れる。

(ヤバい、どうする…このままだとサプライズが終わる、まだ何もしてない、始まってすらないのに!)

まずい…ソーマのみならず誰もがそう思った。ここで気付かれてしまったらせつかくのサプライズがサプライズの意味も為さなくなる。そうなったら企画倒れもいいところだ。

「おーい、なんで黙ってるんだよ」

「皆さん、どうかしました?何かあったんですか?」

自分たちが来た途端に視線を向けたまま立ち尽くす面々にエイラと宮藤は声をかける。それに対するソーマたちのアンサーは凝固と沈黙。その状態が数秒続いた。

「あ、あのね芳佳実はーむぎゆっ!」

「ルッキーニー!」

「さては何か隠してんな」

沈黙の空気に我慢できず打ち明けようとしたルッキーニの口をすんでのところで塞ぐシャーリー。その様はエイラに勘繰りを生み、更

に彼女の一言で宮藤は疑念を持ち始めた。

「えっ、そうなんですか？」

「違うよ芳佳ちゃん。全然そんなことないよ！ね、ペリーヌさん！」

「えっ、ええ。私たちが隠し事なんてそんなやましいことするわけがありませんわ！」

「…ますます怪しいナ」

リーネとペリーヌがフォローをするがその狼狽えぶりと必死さがありますエイラの疑念を加速させる。誤魔化す算段も思いつかず、打つ手なし、もはや終わりかと思われた時

「…こうなればもはややむを得ん。ソーマ、リベリアン、二人とも私に話を合わせろ。いいな？」

(えっ)

(何をやる気だバルクホルン)

ソーマとシャーリーが二人揃って疑問の目を向ける中バルクホルンはソーマの背から飛び出すように離れ、その姿を宮藤たちに晒す。

「宮藤！」

「バルクホルンさん！どうしたんですかそのドレス」

いつもの軍服ではなくドレス姿のバルクホルンを見ての宮藤の第一声がそれだった。

エイラとサーニヤもだいぶ衝撃的だったようで驚いたような顔でバルクホルンに視線を集中している。

「じ、実はさっきミーナから貰ったものなんだが人前で着るには抵抗があつてな。誰にも見られぬようこっそり隠れて着てみたんだが運悪くこいつらに見つかってしまったてな…全くタイミングの読めない奴らで困ったものだ」

「そ、そうなんだよ。バルクホルンの奴恥ずかしがることないのにもうこれ以上人に見られたくないってんだよ。で、自信をつけてもらおうと思つてここに在る皆に意見をもらつてたんだよ」

「リーネたちも可愛いって言つてくれたのにお世辞だと受け取つてるのかでんで信じてくれなくてさ。宮藤たちの言葉なら信じてくれるだろうと思つてサプライズついで見てもらおうかつてなつたんだ

けど、いやあく参ったな失敗失敗」

「そ、そうだったんですね」

納得したようにバルクホルンのドレス姿をまじまじ見つめる宮藤とサーニャ。このまま上手く騙されてくれと三人は強く望んだ。

「その、ど、どうだろう宮藤。やはり私には不釣り合いだろう」

「いえ、そんなことないです！お似合いですよ！すごく可愛いです」

「お姫様みたいでお綺麗ですよバルクホルン大尉」

「そ、そうか…合っているか。ありがとう。それは、嬉しいな」

恥ずかしさ故かそれとも一切嘘を言わない相手から褒められた嬉しき故か、再びバルクホルンは顔を赤に染まる。

「だから心配する必要ないって言ったのに。なあ？ははは、ははは」

「そうだよもつと自分に自信持てよ。ははは」

「本当か？本当にそれだけか？」

顔で笑って、声は乾いている表情と声がミスマッチ状態のソーマとシャーリー。それもあつてかエイラはまだ半信半疑でジト目を向けている。

一方で

（あのトウルデーがあそこまで恥をかき捨てるなんて…宮藤への愛の為せる業だね）

（大切な人のためなら恥をも忍ぶそのお姿、なんという強い精神、さすがですわバルクホルン大尉。私も見習わなければなりませんね）

（バルクホルン大尉、私が言い出したばかりにあんなことに。ごめんなさい、ほんとうにごめんなさい…）

懸命に奮闘するバルクホルンにハルトマン、ペリーヌ、リーネはそれぞれ三者三様の感想を胸中で言う。

「私たちそろそろ行きますね。失礼します」

「皆さん、おやすみなさい」

「行つてらっしゃい。気を付けてね芳佳ちゃん」

「頑張れ〜！」

夜間哨戒に出かけていく三人。エイラは渋々といった素振りであつたが



彼女たちを見送ってその足音が聞こえなくなったのを確かめると全員が全員脱力し、足もとから崩れ落ちるように床に座り込んだ。

「ふい〜危なかったな。もう少しでどうなるかと」

「今のセーフ？アウト寄りのセーフ？セーフ寄りのアウト？どっち？」

「大丈夫だと思えます。けど、エイラさんは怪しんでましたね」

「辛かったあ〜！すごく息苦しかった〜！」

シャーリー、ソーマ、リーネ、ルッキニー…と宮藤たちがいなくなるなり一斉に思いを吐き出す。

「この際エイラさんには本当のことを言って協力して頂いた方がいいんじゃないやありません？サーニヤさんの誕生日会と聞けば喜んで受けてくださると思いますけど」

「やめといた方がいいよ。エイラ、サーニヤの前だとボロ出しそうで怖いし」

あ〜とエイラを知る者はハルトマンの言葉に顔で同意する。ソーマもエイラとの関わりは数えるほどしかないが多くの者が浮かべた表情から彼女たちが予想した結末を思い浮かべるのは簡単だった。

「とにかく今気づかれなくてよかった。全部、バルクホルン大尉のおかげだ、ありがとう〜っ!？」

功労者とも言うべきバルクホルンに礼の言葉を口にするバルクホルンは彼の肩を掴んで引き寄せる。

「明日…」

「な、なんでしょう」

「明日、なんとしても成功させるぞ。いいな」

「は、はい…もちろんであります」

目尻に雫をためて言うバルクホルン。相当な恥じらいと葛藤しながらの行動であったのだろう。

これ絶対しくじれないな…既に何かを犠牲にしてしまったバルクホルンに報いるためにも。

誕生日会の成功への決意がソーマの中で一層深まった。

## 第十輪 未知の怪異

八月十六日、宮藤とサーニヤの誕生日当日。サーニヤの部屋。

宮藤たちはここで今日もまた睡眠を取ることになっている。夜間哨戒を引き続き行うよう命じられたからだ。

しかし

「気になつて寝れないな」

日没まで寝ようと三人一つのベッドで横になつてしているとエイラが天井に視線を注ぎながら、ポツリとそんなことを呟いた。

「そうですね…結局昨日も現れませんでしたし」

「あ？何の話してんだ？」

「えっ？サーニヤちゃんが見たネウロイの話じゃないんですか？」

想定とは違う返事が返ってきたことに宮藤は体を起こして問う。数日前サーニヤが戦闘して以来姿を現さないネウロイ、自分たちが夜間哨戒を行う最大の理由、てつきりそれについての発言だと思つていたのだがどうやら違うらしい。

「全然違う。そっちじゃない」

「じゃあエイラは気になつてることつてなんなの？」

宮藤に重ねてサーニヤも問いつめる。そんな二人の疑念の言葉と眼差しを受けるエイラは胡坐をかくとこう告げた。

「昨日のバルクホルン大尉やソーマたち、変じゃなかったか？」

「別に普通だったと思うけど…芳佳ちゃんは？」

「確かにちよつといつもと違った様子だったように感じたけどそんなに気になる程じゃ」

「いや、あれは絶対絶対怪しい。遠くからでも聞こえるくらい騒いでたのに私たちを見るなり皆急に静かになつたし、バルクホルン大尉はなんか突然ドレス着てたし、いつもは澄ました顔して生意気なツンツン眼鏡はすごい狼狽えてたし、いつもと様子が違いすぎる！きつと何か私たちに隠していることがあるに違いないんだ」

きつぱり断言するエイラ。彼女の言動に宮藤もサーニヤも昨日のバルクホルンたちの様子を記憶の中から起こす。

そう言われてみれば確かに皆平常時とは違うところはあった。中でも普段は動じないエイラ曰くツンツン眼鏡ことペリーヌがあんなにも焦った顔をしているのは初めて見た。

エイラの言うこともあながち気のせいとは言えないかもしれない。そう思い始めた二人であったが、ここで一つ大きな疑問に衝突する。「エイラさんの言う通りだとして皆が私たちに何を秘密にしているんです?」

「それは…わからない、けど…けど、絶対何かある!間違いない皆して何か企んでるんだナ」

「企んでるって、そんな大げさな…」

自分の感覚を信じて疑わず意固地になってしまったエイラに宮藤とサーニヤは困った顔でお互いを見合った。

その数時間後:食堂では誕生日会の準備を進めているソーマたちは複数の作業をそれぞれ分担して行っていた。

「おいハルトマン。そうじゃないぞ、ここはなあ」

「えーいいじゃんこれぐらい、形は合ってるんだしちよつとぐらいズレたってー」

「よくない!宮藤とサーニヤにとつて大事な日なんだぞ。今日に限ってはいい加減は許さんぞ。さあ、もう一度やり直すんだ」

「ペリーヌ、そうじゃないぞ。ここは山ではなく谷折りにするんだ」  
「あつ、申し訳ありません坂本少佐。先ほども教えていただいたのに」  
「なに、そう謝ることではない。初めてやることというのは最初は誰でも間違つて当然なものだ。間違えながらもゆつくりでもいいから自分のペースで覚えていけばいい。時間もまだあることだしな」

扶桑で広まっているという折り紙なる物で食堂を飾るためバルクホルンたち四人は紙と格闘していた。

ハルトマンの手がけた花の折り紙の出来にバルクホルンは納得せず作り直すよう求め、慣れぬ作業に苦戦するペリーヌを坂本が付きつきりで指導していた。

そしてもう一方、ソーマとリーネはというと

「これで後は焼くだけだな」

「こつちも終わりました」

「うん、よくできてる。リーネの飲み込みがいいおかげで思ったより早くケーキができた」

「ソーマさんの教え方がわかりやすいからですよ」

作ったケーキを見て言ったソーマにリーネは照れくさそうにしながらそう返す。

「ほう、社交辞令にしても嬉しいことを言ってくれるじゃないかビシヨップ軍曹」

「いえしや、社交辞令なんてそんなつもりじゃ！」

「ははは、わかってるよ」

そう笑顔で言うソーマ。その言葉と表情でからかわれたのだと気付いたリーネは安堵と困惑を同時に浮かべる。

そしてケーキ作りに一段落つけたソーマとリーネは畳んだエプロンを椅子にかけて、折り紙を折っている様子バルクホルンたちに近づく。

「こつちは終わったけどどうだ？」

「最初は手こずったがかなりの数が仕上がってきた。後もういくつか作れば充分だろう。出来の悪いのも混ぜっているが、まあ今回は仕方ない」

バルクホルンが目を向けた先には先の部分が曲がった花が複数。ハルトマンの手元に集中していることから彼女が製作したものだろう。

それらにバルクホルンは僅かに受け入れにくそうな顔をする。

「ただいまー！戻ってきたよー！」

とそこに買い出しに出ていたシャーリーとルツキーニが帰ってきた。食料品の入った袋を机に置く二人にソーマは問いかける。

「お疲れさん。で、どうだった？」

「につひひく大丈夫、まだ三人とも寝てるよー！」

にかつと笑ってルツキーニが答える。

「だけどそろそろ」

「起きてくる時間だよな。わかってる、もうほとんど終わってるようなものだし、もうちよつとしたら一旦切り上げて片付けよう。後のことは全部宮藤たちが出てからだな」

「じゃあ片付け終わったら、私起こしに行ってくるね！」

★

夜

満月と星の光しか照らすもののない空を芳佳たちは三人で飛んでいた。

「ねえ、聞いて。今日は私の誕生日なんだ」

と、その時ふと宮藤がそんなことを言った。そんな話は初耳だと言わんばかりの意を込めた目を向けてエイラは訊ねた。

「なんで黙ってたんだよ」

「今日はお父さんの命日でもあるから。言い出し辛くて」

「バツかだなあ、こういう時は楽しいことを優先してもいいんだぞ」

「そういうもの、かな？」

「そういうもんだって」

周りに気を遣って言わない。

なんとも宮藤らしい理由だとエイラは少しだけ呆れを含めて彼女へそう言った。

「宮藤さん…耳を澄まして」

サーニヤの声に宮藤が彼女の方を振り向くと、魔導針が光り輝いていた。どこからともなく音が聞こえてくる。

「あれ、何か聞こえてきた…」

「ラジオの音だよ」

無音だった空に音楽が加わり少し、楽しい気持ちが入みあがる宮藤。そんな彼女の言葉にエイラはやや面白くなさそうな淡泊な調子で返した。

「夜になると空が静まるから、ずっと遠くの山や地平線の向こうからの電波も聞こえるようになるの」

「へえ、こんなことできるなんてすごい」

サーニヤの能力に宮藤は率直な感想を言葉にし、明るい笑顔を作る。それにつられてか同じく笑うサーニヤをエイラは少し焼もちを焼きながらも説明する。

「言つとくけどなあ、その辺のラジオじゃないぞ。もつとずーつと遠くの、地球の裏側くらい遠くから聞こえてるんだぞ！」

さも我がことのように語るエイラ。もし今の彼女を第三者が見たらどこかなにかしらに対して対抗心を燃やしているような印象を受けるかもしれない。

「地球の裏側から？想像もつかないや」

「二人だけの秘密じゃなかったのかよー」

「ふふ、ごめんね。でも今日は特別」

「しようがないなー」

二人のやり取りの意味がわからず訊ねようとする宮藤。そんな彼女へサーニヤが口を開く。

「あのね、私もー」

『〜♪』

何かを伝えようとしたそんな時、何か異質な音が聞こえサーニヤは言おうとした言葉を抑えて周りを見た。

彼女だけでなくエイラと宮藤もまた驚愕の色に顔を染めまま、その場に佇む。

「なんだこの音…」

「これ、歌だよ」

聞こえてくる音、それは紛れもなく歌であった。しかも三人が三人とも聞いたことのある歌

「どうして…」

その事実にとまらざる眩く者がいた。

そう、聞こえてくる歌は彼女にとって非常に馴染みのあるもの。彼女自身が愛し、口ずさんでいた歌だ。

「二人とも避難して！敵が狙ってるのはー」

動揺から一転、魔導針でネウロイから何かを感じ取ったサーニヤは

二人に叫ぶと離れるように上昇する。

すると雲の中からそのサーニヤ目掛けて赤い光が一直線に伸び、回避を試みた彼女のストライカー左脚を直撃した。

「サーニヤー！」

「サーニヤちゃんー！」

エイラと宮藤が名を呼びながら落ちてくるサーニヤを受け止める。ストライカーは損傷したもののサーニヤ自身に負傷はなく、それにホツとしたエイラはビームが飛んできた方角に目を走らせる。

「ビーム…ネウロイか！」

キツと鋭い目つきで睨みつけるエイラ。

するとそれに呼応するかのように雲海が青白い光が数回灯り、その中から攻撃者が飛び出るように姿を現した。

「なんだよ…これ」

「ネウロイじゃ、ない…？蛇？」

ネウロイだと思っていた…だが違っていた。

蒼く光り輝く鱗に覆われた爬虫類を思わせる身体、月光に煌めく牙が上下に並んだ顎と爪…その姿はまるでドラゴン。神々と並び称される逸話を持つその生物に酷似した特徴が相對する存在にはあった。

今まで対峙したことのない姿形をした相手を前に誰もが揃って茫然と見上げる中、サーニヤの頭に声が響く。

『モットキカセロ』

「え…？」

『オマエノウタ、モットキカセロ』

得体の知れない相手からかけられた言葉にサーニヤの背筋に悪寒が走った。

## 第十一輪 生まれてきてくれた君へ

「宮藤！聞こえるか宮藤！聞こえていたら返事をしろ、ユーティライ  
ネン少尉！リトヴァク中尉！」

坂本が通信機に呼びかけるが帰って来るのはノイズだけで、名前を  
呼んだ仲間たちの声は一つとして聞こえない。

「今の薄気味悪い音は一体なんなんですかの…」

ペリーヌが不快と疑念に顔を歪める。

パーティーの料理作りと飾り付けを進行していた最中、置いていた  
スピーカーから突然不気味な音が流れ出した。

とても人間が出せるものではなかったあまりに異様な音に坂本た  
ちは作業の手を止め、原因を確かめるべくこうして坂本が夜間哨戒に  
出た三人に連絡を取ろうと試みているのだが、一向にこちらから返事  
が返ってくる様子はない。

「音というよりは歌のように聞こえたがまさかネウロイの」

「しかもあの歌はサーニヤの歌と同じだった、となると…」

「ネウロイがサーニヤの歌を理解し、真似ているというのか。そんな  
話がありえるのか」

「ありえないとも言えないわ。ネウロイは日々変化を遂げている。  
サーニヤさんの歌声に反応したネウロイが彼女の歌を聞いて、真似て  
いたとしてもおかしい話ではないわ」

ソーマと坂本の言葉から考えうる結論を口にしたバルクホルンは  
疑問とやや否定的な色を含んで呟く。

だがミーナはバルクホルンとは対照的に頤に手を当てて推測を述  
べる。

「とにかく今は宮藤たちのところに急ごう。通信が通じないってこと  
はネウロイと交戦してるはずだ」

「そうね、ここで話していても仕方がないわ。皆、すぐに出撃の準備  
を」

救援を優先すべきとシャーリーの言葉は尤もだ。

ミーナの一声で皆一斉に食堂を飛び出して格納庫を目指す。





『オオオオオオ！』

黒と青の二色の巨体、鱗に覆われた脚と腕、雄々しく翼。その姿はまるで多くの国で幻想の存在として語られる怪物：ドラゴンを彷彿とさせる。

それは赤く染まる瞳を動かし、エイラから宮藤へと、そして宮藤に支えられているサーニャへと焦点を合わせる。

「避ける！宮藤！」

「えっ？」

数秒後の未来を知る未来予知。自身の固有魔法で先読みをしたエイラが危険を察知し、宮藤に声を張り上げる。

その瞬間ドラゴンはグワつと大顎を広げ、そこから白く輝く吐息を放つ。

「うわあ！」

サーニャの手を取って咄嗟に上昇する宮藤。ドラゴンの放った吐息が二人のいた場所を貫く。

「サーニャちゃん大丈夫!?!」

「私は平気…!?!」

回避に成功し安堵したサーニャであったが、自身の足元に視線を切り替えた時信じ難いものを見てその顔が驚愕に包まれた。

「ストライカーが凍ってる!?!」

さっきの攻撃が掠っていたのかサーニャのストライカーの左側先端部分は青く凍り付いていた。

両側が機能しなくなったストライカーではどんなウィッチであろうとも航空は不可能。サーニャはもう独力ではこの空に居続けることもできない。

「そんな…」

「ビームじゃなくて冷氣ってことかよ…本当になんなんだよあいつ」

サーニャの歌に反応することといい、姿を変えたことといい、これ

までの倒してきたネウロイとは絶対的に何かが違う。

―舐めてかからない方がよさそうだ

エイラは眼光を鋭くさせて相手への警戒心を強める。

「私を離して宮藤さん。あのネウロイの狙いは私を狙ってる。私と一緒にいたら宮藤さんまで」

「でもそれじゃあサーニヤちゃんが！」

ストライカーの機動力が衰えているサーニヤの状態ではネウロイの攻撃を回避できる望みは薄い。それどころか海面に落ちてしまう。

それは宮藤もわかっていた。だからこそサーニヤの要求を飲めない。

「私はいいの。それよりも二人の安全を―」

サーニヤが宮藤に訴えるもそのサーニヤの言葉を断ち切るかのようにならぬネウロイの冷気が襲い掛かる。

サーニヤは宮藤を突き飛ばしてでも離そうと腕に力を込めるが、その意志に反して宮藤は彼女の腰に手を回し抱きかかえる形で推力を上げ回避する。

「駄目だよ、サーニヤちゃん。自分を犠牲にして誰かを守ろうとするなんて。もしそれで私たちが助かったってサーニヤちゃんがいないんじゃないよそんなのちつとも嬉しくない」

「宮藤さん…」

きっぱり否定する宮藤。彼女は力強い真っ直ぐな瞳で言い返す。

「私がサーニヤちゃんを守ってみせる、絶対に。だからそんなこと言わないで」

私じゃ頼りないかもしれないけど、と付け足して宮藤はこんな状況であるのに笑顔を作る。

宮藤の言葉に加勢するように今度はエイラがサーニヤの目線の先に降り立って言う。

「よく言った宮藤！サーニヤ、宮藤の言う通りだ。私もサーニヤを犠牲にして勝つなんてゴメンだ。誰も犠牲にしないで皆で勝って、皆で帰るんだ」

「エイラ…」

にへらと、エイラも同じように笑う。二人の言葉と笑顔でサーニヤの心は温かさで満たされる。

「二人とも…そうね、一緒に勝って帰りましょう」

誰一人として欠かさず501の皆が…家族の待つ場所に帰る。その瞬間三人の気持ちは一つとなった。

「宮藤、サーニヤは任せたぞ。シールドはなるべく使うなよ、冷氣じや防いでも凍らされるかもしれないからな」

「はいー」

「それとサーニヤ、私と武器を交換してくれ。あいつにはたぶんそっちのが効きそうだ」

「わかったわ」

二人が応じるとエイラはサーニヤから受け取ったフリーガハマーを肩に背負ってネウロイに接近。敵の動きを意識しながらインカムに呼びかける。

「こちらユーティライネン、新型のネウロイと交戦中！サーニヤがストライカーを損傷して飛べない。すぐに来てくれ、ミーナ中佐！坂本少佐！誰でもいい、答えてくれ！」

基地本部に援軍を要請するが返答はなく、聞こえてくるのは汚いノイズのみ。耳障りな音にエイラは舌打ちを打つ。

（クソ、あいつのせいで通信が、助けが早く来てくれるのを信じるしかない。それまで私がサーニヤを守らないと）

仲間が来てくれると信じて孤軍奮闘するエイラ。

未来予知の力をフル活用して冷氣を回避しながら、フリーガハマーのロケット弾をお見舞いするが相手に痛手を与えた素振りは見られない。

それでもエイラは撃ち続け、未来予知で余裕を持って冷氣をかわす。そんな攻防の応酬がひたすら何度も繰り返されていた。

だが

「動きが変わった!？」

冷氣を吐き続けていたネウロイが翼を揺らし始めた時エイラに緊張が走った。

—まずい

これから何を起こすのか、その先の光景を目にしたエイラは攻撃範囲から逃れようと推力を上げるが、間に合わずネウロイの翼の振動によって起きた風に吹き飛ばされる。

「うわっ！」

「エイラ！」

吹き飛ばされるエイラ。彼女を心配してサーニャは声を上げる。

「大丈夫だ、これぐらいどうってことないっ！」

その声に応え、強風に苦しめられていた瞼を開いた瞬間だった。エイラの視界に大顎を全開にして冷気を集約させるネウロイの姿が飛び込んだ。

「しまった！」

「エイラさん！」

「逃げてエイラ！」

二人の声は聞こえているが今からではどうあがいても避けられない。皮肉にも未来を見通すエイラ自身がよくわかっていた。

(やられる！サーニャ、ごめん)

放たれる氷のブレス、青白い空気の奔流がエイラの身体を飲み込んだ：かに思われた時、横から高速でやって来た何かがエイラを冷気の範囲外へ逃れたのは

「危なかったなくエイラ。結構ギリギリだったぞ」

「シャーリー…？」

突然触れた柔らかく温かな感触にエイラがそちらを見ると、シャーリーの顔がすぐ近くにあった。

『バインド、プリーズ！』

それだけではない。

彼女たちへ追撃を加えようとしたネウロイの巨体と顎に風の鎖が巻き付き、攻撃を無理矢理中断させる。

シャーリーが来たこと、鳴り響いた音声と発動した風の魔法：そこから導き出される可能性を考え、サーニャと宮藤がある一点に目を向けたのはほぼ同時だった。

彼女たちが向けた視線の先には期待通り坂本やミーナたち、501の全員がいた。

「芳佳ちゃん！よかった、三人とも無事だったんだね！」

「喜ぶのは後だリーネ。あれは一体なんだ？ネウロイはどうした？」

大事な姿を見て安心するリーネ。しかしその喜びを分かち合う余裕はない。

エイラと彼女を抱えたシャーリーが合流したのを尻目に坂本が問う。

「あれがネウロイだよ」

「何？」

「あれがネウロイだというのか？あんなものが」

「あんなネウロイ見たことないよ」

バルクホルンとハルトマンを筆頭に皆がにわかには信じられないと表情をするが、誰かが次の言葉を発する前に大きな咆哮が轟く。

一斉にそちらを見ればネウロイが風の戒めを力づくで破り、忌々しい感情を込めた瞳をぶつけてきていた。

「まずはあれを撃破することが最優先よ、行くわよ皆！」

ミーナの一声で駆け付けたウィッチとソーマはそれぞれネウロイを取り囲む形ではらける。

坂本は魔眼の力を使ってコアの場所を探る。

いくら姿が既知のものとかけ離れているといっても同じネウロイであれば、どこかに必ず弱点となるコアがあるはず。

敵の動きも見ながら、下から上に視線を移していくと赤く光る物体に行き着く。

「見つけた。コアは首の下、喉元だ。そこに火力を集中させろ！」

その指示を受け、首の辺りに狙いを定めて集中砲火を浴びせるが思いのほか鱗は固く、これといった決定打を与えられない。

超スピードを活かしたシャーリーの至近距離射撃でも、リーネのボーイズライフルの一射でも、少し怯む程度のダメージに終わってしまう。

「皆離れろーそいつの近くにいちやダメだ！」

ネウロイが翼をはためかせた時エイラが警告する。彼女の声に反応してネウロイの正面から離れた瞬間、ネウロイを起点に突風が巻き起こる。

「なんて凄まじい風なの」

髪を捲り、目を潰すほどの勢いの風にミーナが苦しい顔をする。動きを止める彼女たちの前でネウロイは口先をある一点に向け、氷のブレスを吐き出す。

その先にいたのは宮藤とサーニャ。しかしもう何度も見た動作であつたために宮藤はサーニャを強く抱きしめたまま攻撃を危なげなく回避する。

「サーニャちゃん！」

「大丈夫、平気…やっぱり私を狙って」

ミーナたちの増援によつてそちらにも攻撃するようにはなつたが主だった狙いは相変わらずサーニャと彼女を背負う宮藤に集中している。

その攻撃を止めようとソーマは再度バインドの魔法を仕掛けるが、ネウロイは巻き付いた風を一瞬にして振り払い、束縛というには満たない時間で破られてしまった。

「二度は通用しないってわけか。だったら」

ウィザーソードガンの銃弾で威嚇しながらソーマはバルクホルンの隣に移動すると彼女に助力を乞う。

「バルクホルン大尉、手貸してくれ。あいつの動きを止める」

「それは今やって失敗しただろう」

「冷気との相性がいい防ぎ方があるからそれを使う。ただそれをするとなると自力じゃ飛べなくなる。だから」

「お前が防いでいる間落下しないように私に支えろというのか」

「そうだ、頼めるか？」

意図を見抜いたバルクホルンは彼が言い切るより前に言葉の先を言う。そしてソーマからの案を受け入れる。

「わかった。お前の考えに乗ろう」

「サンキュー」

『フレイム、プリーズ！ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』  
『バインド、プリーズ！』

フレイムスタイルに変わり、バインドの魔法を発動させるソーマ。魔法陣から伸びた鎖は勝手に彼の腰元に巻き付き、その先端部分をバルクホルンが手綱を握るように持つ。

そしてホルダーから取り出した指輪を二つ手に握り締め、じつと機を伺う。

(奴が次に冷気を吐いた瞬間、そこが勝負の時だ)

(あの二人、何か狙ってるみたいね)

ネウロイの動きに注目したままその場に静止するソーマとバルクホルンをミーナは捉えていた。そして彼女は次に戦局から離れたところにいた宮藤とサーニヤに目を配った。

そこではサーニヤもまた同じように宮藤に何かを提案しているようだった。

「宮藤さん、お願いがあるの。私と一緒にネウロイの攻撃を受け止めてくれる?」

「えっ」

突然のその要求に宮藤は驚いた顔でサーニヤを直視した。

「皆戦ってるのにこのまま何もしないでただ見ているだけなんて嫌なの。皆がコアに接近して攻撃するための時間を作ることぐらいは」

「私たちが囨になるってこと?」

「あのネウロイが一番狙ってるのは私、だから注意を引き付けるには適任だと思う。宮藤さんも危険な目に合わせることになっちゃうけど」

お互いにとって危ない橋を渡ることになる。これでもし断られてもサーニヤは宮藤を責めはしない。

だが宮藤なら…とサーニヤは確信を持っていた。

「一緒にいこうサーニヤちゃん。防御は私に任せて」

「ありがとう宮藤さん」

自分の思った通りの言葉を返してくれた宮藤にそう一言お礼を言

う。それと同時に足の代わりに務める宮藤は高度を上げ、ネウロイの目線も高さにもで上がる。

サーニヤが視界に入ったことでネウロイは他のウィッチには構わず、冷氣発射の体勢に入る。

「宮藤さんー！」

「来るー！」

身構えるサーニヤとシールドを張る姿勢になる宮藤だったが…

『エクステンジ、プリーズ！』

『ディフェンド、プリーズ！』

そんな音声が耳に届いた瞬間、二人の前に存在していた景色が一変した。迫りくる青白い凶悪な光が消えていたのだ。

「あれ？」

素っ頓狂な声を出す宮藤と無言ながらも困惑するサーニヤはなんとか状況を理解しようと目を走らせると

「っうおおおー！」

「ソーマさん！バルクホルンさんも！なんで！」

「私たちが受け止めている内に攻撃を！」

冷風を炎を帯びた赤の魔法陣で受け止めるソーマとその上空で彼の腰に巻き付いた鎖を握り高度を維持するバルクホルンがいた。

自分たちの代わりに何故攻撃を受け止めているのかと混乱したが、バルクホルンの一声でその混乱は吹き飛ばされる。

「シールドがいつまで持つかわからない。一気に攻め込むぞー！」

「二人が作ってくれたこのチャンス、無駄にするわけにはいかないね。シユトルム！」

ウィッチたちは一斉に攻撃を仕掛ける。

全身に風を覆って突撃したハルトマンがネウロイの首をしたから決るように駆け上がり、その直後同じ場所に至近距離で詰め寄ったシャーリーが弾をお見舞いする。

他の皆も各自の銃器の先をネウロイに向け、連続して銃声が響く。

『ガアアアー！』

「くっ、うっうっ！」



身に銃弾を浴びせられるこの状況はさすがに堪えたのかネウロイはまず目の前の障害を取り除こうとブレスの出力を上げる。

勢いを増した冷気に次第に押され始めソーマは苦悶の声を溢し始めた。

「しつかりしろ、踏ん張れ！負けるな！」

押し返そうと踏ん張るも伸ばした腕が時間経つにつれて段々と曲がっていく。その彼を支えるバルクホルンは握る力を強め、衝撃に歯を食いしばりながら声援を送る。

彼女の声に気力を振り絞ろうとしていたが限界が来ていた。

しかし不意に正面からの圧力が和らぐ。

「ソーマさん、もう少しだけ頑張ってください！私も手伝います！」

「うじゅー！全力全開、フルパワー！」

その原因を確かめようと目を向けると、ソーマの両隣で宮藤とルツキーニがシールドを張っていた。ルツキーニの固有魔法は発熱、そして宮藤のシールドは501随一の防御力を誇る。その二つが合わさってくれたとあればネウロイの冷気に対して最も有効な盾となる。

並び立つ二人の支援で負荷が弱まったソーマは目一杯腕を伸ばし切り、魔法陣に注ぐ魔力を上げる。

「これでもくらいなさい！トネール！」

ペリーヌの放った雷撃がネウロイは悲鳴を上げる。それは冷気の放射が中断される。

この機を逃すまいとソーマは魔法陣を消すと同時にバルクホルンへと声を張り上げる。

「バルクホルン、俺を思いっきり上に投げてくれ！」

「ずおりゃあああー！」

「うおっ……！」

バルクホルンによって手に持った鎖ごと力一杯投てきされた彼の体は夜空に舞い上がる。

ネウロイの頭上より高みに上がったソーマは体勢を整えながら、ウィザードライバーに指輪をかざす。

『チヨォーイイネ、キックストライク！サイコー！』

夜空に浮かぶ満月の表面に映り込む一つの炎と逆さまになった人影。

ソーマは炎を纏った右脚を突き出してネウロイへと落下する。

それに合わせて坂本は烈風丸を頭上に振り上げ、バルクホルンは両腕に構えた銃口を起こす。リーネも照準を絞って引き金を引く。

「いやああああ!!」

「烈風斬!」

『グワアアア!』

右翼を炎の蹴りで風穴を空けられ、左翼を大量の鍛え抜かれた剣の衝撃波に切り取られるネウロイ。

更には数多の銃弾と弾丸の一発が喉元を穿ち、固い鱗に隠れていたコアが露出させる。

浮力を失った巨体は体勢を崩し、頭から下方に落ち行く。

「やった!」

「いやまだだ。コアを破壊していない」

喜ぶハルトマンの言葉を否定する坂本。そうまだネウロイは健在だ。しかも再生能力のせいで今しがた作った穴が塞がれていく。

しかし彼女にはもう攻撃する意志はなかった。

「だがもう終わりだ」

坂本は勝利を確信していた。

何故ならネウロイの落下先、そこにはエイラとサーニヤそして彼女に肩を貸すミーナが待機していたからだ。

『グワツ…!?!』

エイラはフリーガハンマーを、サーニヤは彼女の持っていた銃を、ネウロイへとプレゼントする。

二つの攻撃はネウロイの喉元、コアへと直撃し青く煌めく巨体はたちまち白い粉となって拡散する。

「終わったな」

「ええ、皆無事かしら?」

「なんとか、危ないところでしたけど皆さんが来てくれたおかげで助かりました。ありがとうございます」

戦闘を終えて一息つくともミーナは身体を振り向かせて皆の安否を確認する。全員無事だ。

安堵の表情を浮かべてミーナは告げる。

「宮藤さん、サーニヤさんそれとエイラさん。疲れてるところ悪いけど後一時間程この近辺を哨戒してもらえないかしら。さっきのネウロイによる影響がないか確かめたいの」

「それは構いませんけど」

「サーニヤは基地に帰してやってくれないか？ ストライカーが損傷して一人じゃ飛べないんだよ」

「ごめんなさい。それはできないの」

「えっ、なんでだよ。こんだけ人数いるんだから担ぐなりなんなりできるだろう？」

「本来であればそうしてあげたいんだが…今回はばかりはな。すまない」

らしくないこと言い出す隊長に異議を唱えるエイラ。彼女の言葉に何故かミーナと坂本を除いた面々が答えにくそうに顔をしかめていた…緑の宝石の仮面で顔が覆われているせいでソーマはどうだかわからないが

不自然な反応に当惑するエイラたちへミーナは凜とした顔を崩さず告げる。

「込み入った事情があつてサーニヤさんには二人と一緒にいてもらうのが都合がいいの。不自由をさせることになるのは申し訳ないけどお願いね…これは命令です」

「命令って、なんだよそれー！」

上官からの命令。これを言われてしまえば如何に納得がいかなかったもエイラは受け入れざるを得なくなってしまった。

「私は宮藤さんが平気なら大丈夫です」

「うん、私も全然大丈夫だよ。サーニヤちゃん軽いから私一人でも支えられるしね」

承諾の意を口にした宮藤とサーニヤ。それを受け取ったミーナは宮藤にサーニヤを託し離れていく。

「では三人とも頼んだわよ」

「帰ってきたら絶対いいことあるから。ラストスパート頑張つてね」

ミーナ、そしてハルトマンはそう言い残して他の面々と共に基地へ飛び去っていった。



「あく疲れた、やっと戻つてくれた。つたく、なんだつたんだよ。さっきの中佐たちは」

戦鬪区域付近を見回り何事もなく基地へと帰還したエイラたち。時刻はすっかり日が変わつてしまい、深夜。

こんな時間だと起きている人間はおらず辺りはほとんど光がなく、薄暗くなつていた：てつきりそう思つていたのだが

「あれ?」

「どうした?」

「食堂の明かりが付いてる」

そんなはずはないだろう、と言いながらエイラが見てみるとどうい  
うわけか確かに食堂の窓から明かりが漏れていた。しかも人影が複  
数動き回っている。

「本当だわ。いつもはこの時間消えてるのに」

「皆まだ起きてるみたいだね。でも何をしてるんだろう」

「きつとまた中佐たちが何か企んでるんだな。今度こそきつちり突き  
止めてやる」

格納庫でストライカーを収納するとエイラは宮藤とサーニヤの先  
陣を切つて食堂への道突き進む。

ドアを開け、姿を確認するより前に問いつめようとすると

「おい!ミーナ中佐さっきの命令はいつたい!」

「お誕生日おめでとー!さーにゃん、宮藤!」

「えっ?」

「ふえ?」

中に入るなりハルトマンから祝福の言葉がかけられ三人は凝固す

る。

「おいハルトマン、一人で勝手に言うんじゃない。それは皆で揃って言う決めていただろう」

「かったいなあートウルーデは。いいじゃん、もう一回言っちゃえば。お祝いの言葉は何回だつて言つても嬉しいものだし」

「それは、そうでもあるが」

バルクホルンが先のハルトマンの一声に苦言を呈しているがその内容が耳に入らないほどエイラは困惑していた。

彼女だけではない。

宮藤とサーニヤも食堂の壁に飾り付けられた折り紙の花や食卓の上に並べられたパンやシチュー、花瓶に刺された花束を目の当たりにして茫然とし、状況への理解が遅れていた。

「あの、これは一体？」

「今日は芳佳とサーニヤの誕生日でしょ。だから皆でパーティーしよつて決めてたの。あ、日付変わっちゃつたから昨日か。まあ、どつちでもいいよね」

「まさか昨日今日で様子がおかしかつたのつて…」

「そう、サプライズのもりで準備してたから宮藤とサーニヤには知られたくなくてさ」

ルツキーニとシャリーの説明でようやくこれまでの不自然な態度に答えを得たエイラ。

抱いていた全ての疑問が氷解したと同時に物言いたげな目を向ける。

「そういうことかよ…じゃあだったら私にもちやんと言ってくれればよかっただろ。私だけ除け者みたいにして、私だつて参加したかつたのに」

「もちろんエイラさんにも協力して頂こうという案もありましたわ。けれどエイラさんがうっかりサーニヤさんたちにバラシてしまいうだとハルトマンさんの意見で」

「私が除け者になつたのは…お前のせいだよ」

「人聞き悪いなあ、そりや言い出したのは私だけどさペリーヌだつて

納得したじゃん。私だけ悪者扱いは違くない?」

「なんだツンツン眼鏡。お前も同罪じゃないかよ」

「うっ、確かに否定はしませんでしたけど…ですがそれだからと言って除け者にしようとかそのようなことは決して」

「はいはい、二人ともそのぐらいにして席に座りましょう」

手を叩いてミーナが場を鎮める。

その響いた音を機にリーネとソーマがキッチンから持ち出したケーキを机の上に置く。

「芳佳ちゃん、サーニヤちゃんお誕生日おめでとう」

「うわあケーキだ!これリーネちゃんが作ってくれたの?」

「ソーマさんに作り方を教えてもらったんだ。初めて作ったからちよつと自信ないけど」

「そんなことないよ絶対美味しいよ。ありがとうリーネちゃん」

「リトヴァク中尉には俺から、どうぞ召し上がれ」

「ありがとうございます。すごく嬉しいです」

ショートケーキとチョコレートケーキ。

宮藤とサーニヤの反応に最上の喜びがこみ上げるリーネ。

ソーマも彼女と同等同種の思いを胸にしつつ、エイラヘライターを差し向ける。

「ロウソクの火、付けるのお願いしていいかユージェイライネン少尉」

「私でいいのか?」

「仕方なかったとはいえ嫌な思いさせちゃったからな。そのお詫びつてわけじゃないけど」

「別に嫌な思いつて程ではないけど…まあ、サーニヤのためにここまでしてくれたんだし許してやるよ。てかそれよりその呼び方がいいよ。

普通にユージェイライネンとかエイラで」

「いいのか?呼んで」

「ハルトマンやシャーリーには階級付けないで呼んでるのに今更何言ってるんだよ。サーニヤだって階級付けて呼ばれるよりそっちのほうがいいって言うはずだぞ」

「そうか、じゃあ改めて。よろしくなエイラ」

「出遅れた分はきっちり巻き返してやるからな」

そう言つてライターを受け取るとエイラはケーキに手を伸ばす。

「よし宮藤、サーニャ、私が付けてやるからな。ちよつと待ってろよ」

「はい！」

「お願いエイラ」

ロウソクの火が灯ると、ミーナたちはサーニャと宮藤と取り囲むように立ち祝いの言葉を送る。

「では日は変わってしまったけど宮藤さん、サーニャさん」

「ハッピーバースデー！誕生日おめでとう！」

その祝福を合図に宮藤とサーニャはロウソクの火を息で吹き消す。

「私からも、誕生日おめでとうサーニャちゃん」

「ありがとう。芳佳ちゃんも誕生日おめでとう」

宮藤と微笑み合うサーニャ。家族にして友人のいつも以上に眩しい笑顔をエイラはこの先忘れることはないだろう。

## 第十二輪 彼女のズボンはどこに消えたのか

その日、501統合戦闘航空軍が居を構えるブリタニア基地全体を揺るがす大事件が起こった。

「…これは事件だな」

昼下がりの食堂は只ならぬ切迫した空気に包まれていた。

険しい顔をしてバルクホルンが呟く。腕を組み、考え込む彼女の真剣な眼差しの先には宮藤とペリーヌがいた。

実は今ある一名を除いてこの場にいるウィッチたちはバルクホルンと同じようにある問題に向き合っていた。

その問題というのが

「何故ペリーヌのズボンがなくなったか…まずは状況を確かめるためにこの事態が発覚した時の状況を説明してもらおう」

「えっと、どこから説明すれば」

「入浴するに至った経緯から全部だ」

バルクホルンに言われて宮藤は記憶を辿りながら言葉を出している。

「いつものようにペリーヌさんと一緒に坂本さんの訓練を受けてそれが終わってから浴場に行っただです。それで身体を洗ってお風呂から出てみたら」

「更衣室にはペリーヌのズボンはなく、そのペリーヌが何故か宮藤の服を持っていた…ということか」

宮藤の話を聞いてバルクホルンが食卓上の宮藤の水練着を見やる。そこに彼女の水練着があるのはこれは証拠物件として押収されているためだ。

そして着る物のない彼女は代わりに坂本の軍服を借りて、上半身を包んでいる。

「疑わしいのは同じく浴場にいた人物だな。一緒に入っていたのは私とペリーヌと宮藤、そして」

その時の会話と情景を思い出しながら坂本と宮藤、そしてペリーヌ



はある人物の方を見る。

他の者もそれに吊られて、場にいるほぼ全員の注目がその一身に受け止める。

「フランチェスカ・ルツキーニ少尉」

バルクホルンに名を呼ばれた途端ビクつと身体を震わせるルツキーニ。

ジャガイモを食べていた彼女は手に持っていたフォークを放り投げ、そして

「あ、逃げた！」

「私のパンツ！」

椅子を蹴り出す勢いで逃走を図るルツキーニ。揺れ動く衣服の間からペリーヌの純白のパンツが覗く。

それを見て持ち主が声を上げて反応したこと確信した。彼女はク口だと

バルクホルンたちは彼女を取り囲もうとするが、誰かの手が小さな身体を捕える前にルツキーニは宮藤の水練着をかつさらって食堂を飛び出す。

「あ、私の！」

「待てルツキーニ！」

「これ以上罪を重ねるな！」

全力疾走で逃げたルツキーニを追いかける宮藤たち。その騒ぎをまるで対岸の火事であるかのように眺めていたハルトマンは黙々とジャガイモを口に運んだ。

基地の庭に立ち、ソーマは空を見上げていた。太陽の輝かしい光を反射して青空を羽ばたく赤い機械の鳥を目で追っていると、背後からドタバタと大きな足音が聞こえてくる。

眉を上げて体を向けると駆け足で近づいてくるバルクホルンとシャーリーがいた。

「どうした、そんな慌てた様子で」

「こつちにルツキーニ来なかったか？」

「いや、見てないけど。なんかやったのか？」

ルツキーニという少女は明朗快活なその気質から何かと問題を起すことで有名だ。ましてバルクホルンが苦勞してまで探している。

だからソーマはその名が出るなり真つ先にそういう聞き方をした。

「実はルツキーニがペリーヌのズボンを持って逃げたんだよ」

「ズボン!? またなんでそんなものを」

シャーリーの説明を聞いても状況が飲み込めず困惑するソーマ。彼の気持ちは尤もだとバルクホルンも感じていたが詳しく話す時間も惜しいため、詳細を告げず協力を要請する。

「理由は私にもわからん。とにかくルツキーニを確保するのに協力してくれ」

「ああ、じゃあ俺はこつちを探してみるよ」

「私とリベリアンはこの先に向かう。ルツキーニを見つけたら食堂に連行してくれ、暴れるようなら多少手荒な真似をしてくれても構わん。非常事態だ、目を瞑ろう」

「手荒って言っても程々にしておいてくれ、ちょっと灸を据えるくらいで」

そう言つてバルクホルンとシャーリーは走り去つていく。

遠ざかつていく背中を見送つて完全に視界から消えると、ソーマはポケットから指輪を二つ取り出して魔法で変形させる。

『ユニコーン、クラークン、プリーズー!』

「ルツキーニ、見つけたら教えてくれ」

青い馬と黄色のイカを模した機械にそう伝えたとそれらはそれぞれ、地を走り、宙を飛び、別方向に散らばる。

さて、と呟いてソーマも言われた通りルツキーニの搜索に足を運ぶ。

その数分ばかり前のこと

眠りについていたエイラは扉の閉まる音で意識が覚醒した。

重たい目を開いてドアの方に視点を合わせるとルツキーニがいた。

ルツキーニの様子はいつも以上に落ち着きない様子に見えてエイラは眉を潜める。

「なんだヨ」

エイラの言葉に返事を寄越さずルツキーニはカーテンと窓を開けて下を覗き込む。そして何を思ったか、ベッドに畳まれていたエイラのズボンを引ったくって窓から身を乗り出す。

「あ、こちら・私のー」

奪った彼女のズボンをそれを樋の間に通して滑らかに降りていく。こうして無事怪我無く地面に着地したルツキーニは再び何処かへと走り去っていく。

当然そのまま見逃すつもりはなくエイラは追いかけてみようとするが、制服に着替えようとした瞬間ある問題に気付く。

パンツを隠すために下に履く服がない、という極めて重要な問題に(どうしよう…)

このまま外に出る訳にはいかず途方に暮れているとふと眠ったままのサーニヤの姿が目に入る。

瞬間、何かを思いつくエイラ。恥と友情、どちらを取るか葛藤した末エイラはサーニヤのストッキングを拝借し、自分の下半身を保護する。

「ごめんー」

謝罪を告げ、エイラは自室を飛び出す。するとそこにバルクホルンとシャーリーがやって来た。

「ルツキーニは？」

「し、下に逃げた」

「追うぞー」

どうやら目的は同じようだ。ルツキーニの名を出された瞬間エイラはそう察知し、無言のアイコンタクトで意思疎通を図ると、二人と共にズボンの奪還に向かった。

「ここか…」

ルツキーニがエイラの部屋にいたのを窓越しに目撃したクラーケ

ン。その案内でソーマがエイラの部屋の前に着いたのは三人がいなくなつてから少し後のことだった。

「エイラの部屋…エイラ、俺だ。ソーマだ、ちよつといいか？」

ノックして呼びかけても中から反応はない。ドアに耳を当てて澄ませても、内部で誰かが動いた音も聞こえない。

試しにもう一度二回扉をノックするがそれでも反応はない。

「いないのか？悪い、入るぞ」

断りを入れてドアを開けるソーマ。水晶玉、タロットカードとエイラの私物が見える中で彼の目に真っ先に飛び込んだのは開いた窓とそこから入る風を受けて揺れるカーテン。

窓まで近づいて顔を出し、下を見下ろすとそこには草木の緑しかなかった。

「逃げた後か。一足遅かったか…!」

もういないのだと判断して部屋を出ようと踵を返した時

何気なくベッドにチラリと目を配ったソーマは瞬間、仰天の表情で固まった。

「サ、サーニヤ…？な、なんで…？」

何故エイラの部屋に彼女が…？という疑問もあった。だがそれが些細に思えるほど衝撃を与える光景が彼の前にあった。

布団もかけず、ストッキングも履かず、自身の肌と同じ色の白無垢のパンツ下半身を無防備に晒しているサーニヤのあられもない姿が「んっ…うん…」

見てはいけないかと思いつつも目を見開いたまま動けずにいると、サーニヤが目を覚ました。体を起こした彼女はソーマに眠たそうな顔を向けた。

「…あれ？ソーマさん？どうして…っ！」

眠気からか半開きの眼でソーマを見つめる彼女。

しかし数秒経って下半身に違和感を感じたサーニヤは目を落とすと、思いもしない自分の姿に驚く。

そして瞬時に自分がどう見られているのかを理解したサーニヤは布団で体を隠して、顔全体を紅潮させ潤んだ瞳でソーマを見る。

「違う、違うぞ、サーニャこれは…」

パンツ一枚の涙目の少女とベッドの前に立ち狼狽える男の二人きり…何も知らない者が見たら十人が十人そういう現場と答えるであろう状況。

必死に弁解を測ろうとするが今にも泣き出しそうなサーニャの表情は変わらない。ソーマは途方もない罪悪感に襲われた。

そしてまたどういう偶然か、このタイミングで襲撃を知らせるサイレンが基地内に木霊した。

「こんな時にネウロイが来るなんて！」

「向こうからしたら絶好のタイミングでもこっちからしたら最悪だな。どうする？」

「どうするもこうもない。すぐに出撃だ」

宮藤たちもサイレンを聞きつけて、ルツキーニ搜索を打ち切って格納庫に向かっていた。

格納庫に着いてすぐ坂本はストライカーを履き、出撃準備を終える。

「どうした宮藤、早くしろ」

「無理です！だって」

「私もさすがにこのまま行くのは」

だが何人かはそうもいかない者もいた。宮藤とペリーヌもその中に含まれる。

下に何も履いていない恰好のまま空を飛ぶ、というのには乙女心に抵抗があつたからだ。

「任務だ、安心しろ、空では誰も見ていない」

坂本の言葉は真つ当だがそれでもやはり恥ずかしさが勝ってしまい、なかなかストライカーに足を通せない。

「…なんか変な感じだな」

出撃できずにいるのはエイラもだった。やはり着慣れぬサーニャの服では違和感がすごく、服の裾を摘まんで困った表情を浮かべていた。

するとそんな彼女の耳を清らかな声が刺激した。

「エイラ、それ私の。なんでエイラが？」

その声にエイラが顔を上げ、出所を見るとまず先にソーマが目に入った。しかしすぐ関心の対象は隣のサーニヤに移り変わる。というのもサーニヤの姿が普段と違っていたからだ。

彼女がその身に纏っている衣装はコルトと言われる民族衣装に近いものだった。

（サーニヤ、いつもと違う。すごく、すっごく…か、かわいいんだな）  
その姿にエイラはつい見惚れて呆けてしまう。

バルクホルンもその姿に驚いていた者の一人だが、近づいてくるソーマを見て彼に問いかける。

「サーニヤがあんな恰好をしているのはお前の仕業か」

とてもではないがサーニヤが減多に着ない服をしている。

彼の魔法、ドレスアップの魔法によるものだとすぐに察しがついた。つい最近自分がその被害に遭ったばかりなだけに

「…ちよつと色々あつて。それより出撃準備の方は？」

「見ての通りだ」

あまりそれに触れるなどばかりに複雑な顔をする彼に疑問を感じつつも来た投げかけられた質問に答え、視線を騒ぎの方へ向ける。

未だストライカーに足を通さない宮藤とペリーヌ、彼女たちにストライカーを装着するよう促す坂本、自分の衣服を取り返そうと服を引っ張るサーニヤとそれに抵抗するエイラ…まさに騒然としている光景が広がっていた。

「時間がない。ここは我々が先行して迎え撃つぞ」

「これじゃそれが一番だな」

待っているだけ時間の無駄と判断したバルクホルン。その言葉に従いソーマはハリケーンの指輪で変身しようとする…

「皆待つてー！」

とそこに凜とした声が響く。

その声に皆発生源を見る。そこには基地を離れていたはずのミーナとリーネの二人。

「敵はいません。警報は間違いです」

「は？…」

「えええええ!？」

衝撃的な発言を聞いてソーマは困惑の表情のまま固まり、ウイッチたちは声高らかに驚きの叫びを上げる。

「出てきなさい」

ミーナに言われて壁の隅から現れたのはルツキーニ。彼女の顔はしよんぼりとしている。

それを見ても尚事態を把握できない宮藤たちに向かってリーネが説明する。

「あの警報はルツキーニちゃんが誤って押したみたいで…」

「えっ、じゃあネウロイは…来ないってこと」

「なんだよそれ…」

宮藤の言葉を聞いて出撃しようとしていた者たちはドツと肩を落とす。

「それとこれも没収しました」

「ああっ、私のズボン！」

「私のも！」

ミーナの手元にある畳まれた衣服。それを見てルツキーニの盗難被害に遭った者たちは飛びつくように出し、手に取り感謝を告げる。

「ありがとうミーナ中佐」

「私じゃありません。今回のお手柄は…彼女よ」

そう言うミーナの真横にスツと現れたのはハルトマン。

「この混乱の中冷静な判断力でした。ハルトマン少尉」

「やればできると思っていたぞ。やはりお前も生粋のカールスラント軍人だな」

「さすがですねハルトマンさん」

バルクホルンはハルトマンに両肩に手を置いて見直したかのような言葉を送る。

宮藤やエイラも彼女の功績を称える。そんな中でルツキーニは不満げな顔をするものの、落ち込んで眺めるしかできなかった。

ひよんなことから多くを巻き込み、大きくなってしまった今回の騒動であつたが何はともあれ収束した。

そして今、この騒動を解決に導いたハルトマンのネウロイ撃墜数二百五十を達成した功績を称えての表彰が行われようとしていたのだが、エイラには一つ附に落ちないことがあつた。

「んくどうにも引つかかるな」

「何か考えてるみたいだけど、エイラどうしたの？」

「なんでルツキーニはペリーヌのズボンを盗ったりしたのかつて気になつてさ。風呂に入つてたつてんなら自分のがあつたはずだろ？わざわざ他人のを盗る理由がないじゃないか」

「そういえば、お風呂に入る前はちゃんと自分の履いてたのに」

確かにそうだ、と宮藤もエイラに同調する。その答えを知るべく宮藤だけでなく話を聞いていたバルクホルンやソーマたちもルツキーニに目を向ける。

「なあルツキーニ、どうしてだ？」

代表してシャーリーが問うと、罰として両手に水のたんまり入ったバケツを持たされていた彼女は落としていた顔を上げて、泣き声に近い声色で言つた。

「だつてなんでかわかんないけど私が出た時に私のズボンがなかったんだもん…それですぐ近くにあつたから、そのペリーヌのを…つい」  
「ん？だとするとルツキーニのは、どこに消えた？」

ここにきて新たな疑問が生まれた。

彼女の話が本当だとするならばまだ騒動は真に解決していないということになる。

ルツキーニのズボンの行方を誰もが気にしているとその時、表彰台の上のミーナとハルトマンに視線を移した誰かが声を上げた。

「ああっ!!」

「ワタシのー」

風に揺れ動くハルトマンの制服。その裾から垣間見える縞々模様の可愛らしいズボン。それは紛れもなくルツキーニの物であつた。

言葉を失う一同。そんな彼らと全く同じ反応をしつつ、ソーマは平



然とにつこり笑顔で勲章を受け取るハルトマンを見てこんな言葉を  
心で口にした。

(…すげえなあいつ)

ハルトマンに対してある種尊敬を覚えると同時に恐ろしいと思  
わされた瞬間であった。

### 第十三輪 いつか叶える夢のハナシ

「いたいた。おーい、ソーマー」

廊下を歩いていると背後から名を呼ばれた。ソーマーが前へと進めていた歩みを止めて振り返ってみればハルトマンが手を振りながら距離を縮めてくる。

「ハルトマン、どうした？」

「ソーマーにお願いしたいことがあってね。さつきからずっと探してたんだ。今時間空いてる？」

「まあ、特にやることとかはないけど…お願いってなんだ？」

「見てもらった方が早いかな。とりあえず私の部屋に来てよ、詳しい説明はそこでするからさ」

「あ、ああ…」

言われるままにハルトマンの後ろについていくソーマー。二人でハルトマンの部屋へと歩を進めると途中、ある人物を見てハルトマンがあっ、と小さく声を上げた。

「あら、お二人が一緒にいるなんて珍しいですわね」

正面からやって来たのはペリーヌ。彼女を発見したハルトマンは送られた言葉に答えた直後、先ほどソーマーにしたのと同じように距離を縮める。

「ソーマーに用があったね。そうだ、ここで出会ったのも何かの縁だしせつかくだからペリーヌも手伝ってよ。今時間ある？」

「これといって予定はありませんけど…？」

「じゃあいいよねー、一緒に来て」

「え!?!ちよ、ちよつと！手を引っ張らないでくださいませし！」

ハルトマンはそう言っただけのまま自分の部屋へと進みだす。訝しむ間も、質問する間も与えられず手を引っ張られたペリーヌは困惑し、隣を歩くソーマーに訊ねる。

「スペランツァ大尉、ハルトマン少尉は何をしたのです!？」

「…俺にもよくわかんない」

「はあ?？」

帰ってきた答えにますます混乱が加速するペリーヌ。そんな戸惑いを払拭できぬうちに彼女を伴ったハルトマンは自分の部屋の前に到着していた。

「さ、入って入って。遠慮しなくていいから」

「遠慮しなくていいと言われましてもこ、これは…なんというか」

「おおお…すっごい部屋だな」

ペリーヌとソーマは絶句した。

二人の視線の先、そこにはまさしく別世界とも言える光景が広がっていた。

地面にはガラクタやゴミが散乱し、食べ終わった後の食器や書物が山のように重なっている。足の踏み場もあるか怪しい。

唯一目を反らさずまともに見られるのはベッドくらいもの。

部屋の主には非常に失礼だがこういう状態の部屋を汚部屋というのであろう。

この惨状を目の当たりにしてストレートに汚いと言わないだけ、我ながらよくできた人間だとペリーヌなどは特には思った。

「このところ掃除するの忘れててさ。この通りすっかり溜め込んじゃって」

「忘れてたってレベルじゃないと思うが…俺たちにお問い合わせのはまさかこれを」

「そ、一緒に片付けて欲しいんだ。今朝トゥルーデに部屋の掃除をしろーって口煩く言われたんだけどこれを私一人でやるのは大変じゃない？だから二人に手伝ってもらおうかなって」

予想していたとはいえ望んでなかった答えをまんまと告げられた。どうしてさつきハルトマンと遭遇してしまったのだろう。

自らの不幸を呪い、ペリーヌは重たい溜息を吐く。

「バルクホルン大尉も苦勞しますわね…心中お察ししますわ」

ハルトマンが叱りつけられた光景が容易に目に浮かぶ。きっと同じカールスラント軍人として情けない、と言った非の打ち所がない正論が飛んでいただろう。

同じくその光景を思い浮かべたソーマは苦笑しつつハルトマンに

問う。

「やるのはいいけどさ、手伝ってもらおう相手になんで真つ先に俺を探してたんだ？手伝ってくれそうなのは他にもいただろ？」

「魔法でなんとかラクチンにしてくれないかなーって。ほら、ソーマ色々魔法使えるでしょ、お掃除が簡単に終わる魔法とかある？」

あー、と納得した声色でソーマは呟く。なんとも彼女らしい発想から部屋に招かれたものだと思いつつソーマは言葉を続ける。

「残念ながらないな」

「えー、ないのー」

「ない、というかあったとしてもこういうことには使わない」

「なんで？」

純粹にハルトマンが聞き返す。

「もし戦闘になった時に備えてできるだけ魔力は温存しておきたいからな。よっぽどのことでもない限り自分でできることには魔法を使わないようにしてるんだ」

「えー勿体ないの。便利なのに」

「尤もなご意見ですわね」

その言葉に落胆するハルトマンであったがすぐにケロッと明るい表情に切り替えて二人に告げる。

「でも手伝ってくれただけ助かるよ。三人いればパパッと終わるし、それじゃあ、レッツくりーにんぐ」

すっかり三人でやる気満々のハルトマンは声高らかに拳を作った片腕を上げる。そんな彼女にとことん呆れ果てているペリーヌにソーマは謝罪を口にする。

「悪いな、クロスステルマン中尉」

「ペリーヌで構いませんわ。別に大尉が謝ることではないことではないですし…はあ、仕方ありませんわね。さっさと終わらせてしましましょう」

渋々と言った様子でペリーヌは言う。その言葉に感謝しながらソーマは目前に広がる光景を見渡して呟く。

「と言っても、これじゃあ何から手を付けていいか悩むな」

「どこに何があるのかわかりませんものね。これでは」

「…とりあえず皿は戻そう。ペリーヌ、頼んでいいか？その間に俺とハルトマンで進めとくから。後ゴミを詰めるための袋を持ってきてほしい」

「ええ、わかりましたわ」

ペリーヌは食器を手に一旦その場を離れる。ソーマは地雷源を避けるかのように足元に気を配りながら、一足先にゴミの分別を始めているハルトマンの横に移動する。

「で、ハルトマン、まずどこから始めればいい？」

「そーだね、じゃあソーマはあっちをやつてよ。私はこっち側からやつていくから」

「はいはい」

部屋の主並びに掃除の責任者の指示に従ってソーマはしやがみ込んで改めて周りに目を配る。

「しかし色々あるなあ…」

缶詰の空き缶、タオル、ちよつとしたバザーが開けそうなくらい種類が豊富な日用品が床に広がっている。仮に開いたところで売れ行きは見込めなさそうだが

よくもまあ、ここまで溜め込んだものだとそんな感想を過ぎらせつつ目に付くものを手当たり次第に掻き分け、拾い上げては近場に分類ごとにまとめて置く。

「勲章まで床に…こりやあバルクホルン大尉が怒るのも無理ないな。ひとまずこれは置いといて次は…っ！」

その作業をしばらく続ける内にソーマの目はある物に留まった。それを手に取り暫し逡巡した後、苦悩した表情を浮かべながらハルトマンに見せる。

「…なあ」

「んー、なにー？」

「…これはどうすればいい」

それはズボンだった。この間サーニヤがしていたのと同じ白色の

…

「んーその辺に置いといてくれればいいよ」

仮にも異性に下着を見られたというのに顔色一つ変えずにハルトマンは言う。あまりにも堂々としたその態度に増々一人だけ恥ずかしくなったソーマは無言で畳んだズボンをベッドの上に置いた。

その時

「ただ今戻りましたわ」

「ご苦労様ペリーヌ」

「おっ帰りーペリーヌ。ありがとね」

ペリーヌの声が聞こえ、顔を上げたソーマは手に空き缶を持ったまま動きを止める。

しかしハルトマンはその反応に気付いておらず、背中を向けたまま礼を伝える。

「おい、ハルトマン…これはどういうことだ」

「…この声もしかして」

招いていないはずの人物の声が自分の名を呼んでいることに身体を震わせ、ハルトマンは恐る恐るといった素振りでも振り返る。

嘘であってほしい、そう願っていたが残念ながらその願いは通じず…

「何故お前の部屋の掃除をペリーヌとソーマがしているのか、説明してもらおうか」

ペリーヌの横にいるのはバルクホルンだった。両腕を腰に当てて青筋を浮かべている彼女の姿を見て表情が引き攣る。

「あつれ…トウルデー、もしかして怒ってる？」

「当たり前だ！綺麗にしろとは言ったが何故自分でやろうとせず人に頼ろうとする！自分の部屋も始末くらい自分でやらんか！」

「だってその一人でするよりその方が早く終わって効率もいいじゃん」

「効率云々の話をしているんじゃない！どうしてお前はそうなんだ…まったく、カールスラント軍人として情けない」

部屋に入ってハルトマンの目前に立つなり烈火の如く怒りの感情をぶつけるバルクホルン。お叱りを諸共せず、反論するハルトマンを

余所にソーマは忍び足でペリーヌの横に移動し、声を潜めて訊ねる。  
「言っちゃったんだ」

「食堂で食器を洗っているところを見られてしまいました理由を問われたのでつい…ハルトマンさんには申し訳ないと思っただけですけど」  
「うん、まあ仕方ない。自業自得だ」

そう呟きながらソーマは視線をハルトマンとバルクホルンに戻す。  
説教はほとんど終息したようでバルクホルンが振り向いて言った。

「すまない、二人とも。とんだ迷惑をかけたしまった。後は私が面倒を見るから二人とも下がってくれていいぞ」

「そんな！酷いよ！トウルデーと二人きりで掃除なんて私耐えられないよー！」

「酷いも何もあるか！」

ハルトマンが悲痛な声で叫ぶ。

「やっぱり俺残るよ。どうせ部屋に戻ってもやることないし」

「いいやダメだ。ここで甘やかしたらハルトマンのためにならん」

頑なに引かぬバルクホルン。彼女の主張は至極真つ当で、ソーマとしても痛いほどわかる…わかるのだが

「本人あんなになってるけど？」

「ん？ああっ！」

ソーマの指先を辿ってみればベッドの上でハルトマンが突っ伏していた。

だらりと手足を伸ばし切って、天井を仰いでいるその様は『私は完全にやる気をなくしました』と声のない主張をしているかのようだ。

「こら寝るな！起きろ、シャキツとせんか！」

「もーダメだ。なんもする気が起きないーさっきまではやる気満々だったのにー」

バルクホルンが必死に言葉でやる気を引き出そうとするが効果はない。

一を十や百にすることは簡単にできても、ゼロになってしまったものを上げるのは困難の業ということだろう。

わなわなと肩を震わせるバルクホルンにソーマはペリーヌと共に

同情する。

「あれはもう何言ってもダメだと思うぞ」

「説得するだけ逆に時間を浪費してしまいますわ。私もお手伝いします。早々に終わらせてしましましょう」

「二人とも、ありがとー!」

ソーマとペリーヌの言葉に感激するハルトマン。反省しているのかしていないのか相も変わらず読めないその声色にバルクホルンはガクリと肩を落とした。

「ふー疲れた!ありがとね三人とも、おかげですっかり部屋が綺麗に片付いたよ」

部屋の掃除を終えて四人は食堂で休息を取っていた。ペリーヌの煎れてくれたカモミールティーの味に達成感を満たしながらハルトマンは感謝を告げる。

「まったく調子のいい奴だ。二人の好意に感謝するんだな」

結局は手伝ってしまった自分の甘さを痛感しつつバルクホルンもまたカモミールティーの香りに心を休ませる。

「二度目はご免こうむりますけどね。ハルトマン少尉、バルクホルン大尉も仰っていたようにご自分の暮らす部屋なのですからきちんと清潔になさってください」

「大丈夫、大丈夫。皆に手伝わせちゃったしもうあんなことにはしないよ」

(しばらくしたらまたあの光景を見ることにそうだな…どのくらい持つかな)

ペリーヌからの苦言にそう宣言するハルトマン。しかし口ではそう言っているが、反省の伺えない笑顔で言っているところを見るに再犯の可能性が高いとソーマはそう確信した。

「しかし驚きましたわ。ハルトマン少尉の部屋で医療の本を見るなんて」

「医者を目指してるってのは聞いてたけど俺も意外だったなあ」

掃除をしていた時部屋の中で唯一、最初から綺麗に片付いた部屋の



本棚に並んでいた医学書を思い出してペリーヌとソーマは呟くように言う。

「なんか気になるなーその言い方」

「日頃のお前の振る舞いを考えればこういう物言いになるのも当然だと思うぞ」

「あ、やっぱり？だよーねー」

腕を組んで言うバルクホルンに気分を害した素振りを微塵も見せず受け流すハルトマン。

「元々医者をやった家族の影響っていうのもあるんだけどさ、たくさんの人を癒して助ける仕事がしたいんだ。それでいつか自分の病院も作るのが夢なんだ…まあ、ネウロイをやっつけた後だから当分先の話になるだろうけどね」

「ご家族と同じ道を歩まれるなんて、きっとハルトマン少尉のご家族も嬉しいでしょうね」

「へへ、ありがと。ペリーヌのも聞かせてよ。ペリーヌは何かしたいことあるの？」

ペリーヌの言葉に嬉しきを感じたハルトマンが訊ねる。

「もちろんありますわ。ガリアを解放して、国と家を建て直すことです」

「家って、前から思ってたけどペリーヌは貴族なのか？」

「そうですねよ。といってもここでその立場を使う気もありませんし、今はあまりその立場に意味もありませんけどね」

「ガリアは今ネウロイの支配下にあるからな」

バルクホルンの言う通りペリーヌの故郷ガリアはネウロイに占領されてしまった。その故郷はここブリタニアは目と鼻の先

つまりロマーニヤ、カールスラントを故郷に持つこの場にいる隊員の中ではブリタニアのネウロイを殲滅させることで最も恩恵を受けるのはガリアのペリーヌだ。

だからこそペリーヌはここブリタニアでの戦いにかける思いは人一倍強かった。

「ガリアがネウロイに占領された時お父様とお母さまは亡くなりました

た……ですが家族が私に残してくれたものはまだたくさんあります。お二人の愛したガリアの国と民を守るために、なんとしても一日でも早くガリアを取り戻さなければいけないんです」

表情に陰りを作りながらも確固たる意志を口にするペリーヌ。そんな彼女にバルクホルンは助言を送った。

「私とハルトマンも故郷をネウロイに奪われた身。その気持ちはわかる。だがしかし決して焦って自分を蔑ろにするようなことだけはするなよ。」

なにをするにおいてもまず自分の命があつてこそだからな」

「言ってることは正しいんだけどさあそれトゥルーデが言えたことかなあ」

「なんだと？もう一回言ってみろハルトマン」

「ついこの間まで無茶苦茶な戦い方してたじゃん。見てて危なっかしかったんだから」

「確かにあの時はお前にも宮藤にも多くの者に迷惑をかけた。それは非として認めるが……しかしだな」

記憶に新しい出来事を蒸し返されてバルクホルンはその時のことを恥じつつ、応戦する。

あまりヒートアップしないだろうかと心配になりながらも見守っていたペリーヌが横に視線を移動させるとソーマが沈んだ顔をして己を見つめていたのに気付く。

「どうかさされました？」

「あ……いや、なんでもないんだ。ごめん」

ソーマはそう言つて顔を背けるが、その顔は変わらず。なんでもないと思つている人間が向けてくる表情ではない。

「もしかしてさっきの私の話を聞いてそのような顔をなさっております？」

どうやら当たりだったようだ。目に動揺が走った彼の反応からそう確信したペリーヌは言葉を続ける。

「貴方がどう思つているか想像はつきますけど心配には及びませんわ。家族を失った心の傷が今もないと言えば嘘になります。けれど

いつまでもくよくよしていられません…二人の死を背負ってこれからのクロステルマン家、そしてガリアを支え守っていかなければなりませんから」

「ペリーヌ…」

毅然とした貴族然とした声でペリーヌはそう告げる。

するとバルクホルンもハルトマンとの口戦に区切りを付けて彼女を激励する。

「そうだな、それを単なる夢で終わらせないようにするためにもまずは今できることを全力でするしかない。日々の訓練を欠かさぬようにするんだぞクロステルマン中尉」

「もちろんですわ」

「お前もだぞ、ハルトマン」

「はいはい、わかってますよ」

間の抜けた声で返事をするハルトマン。本当にわかっているのかと再度問いつめようとする相方のスズメバチの針のように鋭くキツイ視線を肌で感じつつ、彼女は机の上に組んだ両腕の上に顎を乗せてソーマに問いかける。

「ねえ、ソーマのも教えてよ」

「俺の？」

「私とペリーヌが話したんだから次はソーマの番じゃない？ トウルーデは大体わかるし、ソーマはもしネウロイとの戦いが終わった後のやりたいこととか夢とかあるの？」

「いや、俺のはいいだろ…」

その問いかけにソーマは突き返そうとするが

「そんなことないよ。皆知りたいよね？」

「そうですわね。私も気になりますわ」

それでハルトマンは引くことはなく追及を重ね、ペリーヌも興味があるように加担してくる。

「特に、ないよ」

「何もないなんてそんなはずないでしょう？ 恥ずかしがることはありませんのよ」

「本当じゃないの？やりたいこと。家族に会いたいかさ」

瞬間、表情が変わった。そのやり取りを静観していたバルクホルンの双眸はその時をしかと捉えていた。

「ああ、そうだな。久々に家族のところ顔を出すのもいいかもな」

「ほら、やっぱりあるんじゃない。じゃあさ家族と会って何したい？」

「色々あるけどまずはただいまって言いたいな。それからケーキ作って食べながらゆっくり皆のことを話そうかな…まあとりあえず今日のことは絶対言うだろうな。撃墜数二百を超える記録を持つカールスラントのウルトラエースの私生活はやたらと汚くてだらしないって」

「えーやめてよ。恥ずかしいよ」

言葉の割にまるで恥ずかしいとは思っていない平然とした表情のハルトマン。そんな彼女へペリーヌも追撃を加える。

「なら尚の事これから部屋を清潔に保った方がよろしいんじゃないですか？」

「そういうことだな。今回は目を瞑るけど次やったら…そうなるかもな」

「もう、二人して意地悪だなあ」

ハルトマンがそう言うのと三人の間に笑いが生まれた。

「待てソーマ」

ソーマが食堂を離れて自室に戻ろうとすると今度はバルクホルンに引き留められる。

声に反応して振り向いたタイミングで彼女は口を開いた。

「さっきのお前の言葉について聞きたいことがある」

「さっきのって？」

「お前の夢の、家族の話だ。あれは本当の話か」

「疑ってるわけ？」

「あの話になってからお前の言葉は歯切れが悪かった。何か嘘をついてるんじゃないか」

突き刺し、探るようなバルクホルンの視線。

見返すソーマは沈む夕日の暁の光に頬を照らし、その顔に微笑みを作りながら踏み出すと

「嘘なんてついてない。全部本当の話さーまだ信じられないってんなら」

「なっ!?!」

言いながらソーマは突然距離を詰め、バルクホルンの肩に腕を回して引き寄せると

「大尉の疑いが解けるまでこれから二人で話し合うか。俺の部屋で朝まで」

彼女の耳元で囁くように言う。

想定していなかったアクションに虚を突かれた彼女であったが、やがて何をされたのか理解すると夕日よりも濃い赤色で顔を染めながら腕を払って、大声を張り上げる。

「バ、バカなことを抜かすな! 誰がそんな規律に反するような真似を!」

「はは、だよな、わかってる。悪かった」

軽く微笑んで立ち去っていくソーマに静止の声を上げるがその背中からは遠ざかっていく。

バルクホルンは彼の態度に盛大に深い溜息を吐いた後、自分の部屋へと戻っていった。

さっきまで抱いていた疑問などすっかり忘れて

## 第十四輪 離別・悲しみを知る彼女

執務室にてミーナはデスクに座り、神妙な顔をしていた。彼女の脳裏にあったのはドラゴン型のネウロイとの戦い。エイラがネウロイの放つ絶対零度の白銀の吐息に飲まれそうになった瞬間の光景だ

（あの時もし救援が少しでも遅れていたらエイラさんは間違いなく墜落されていた。エイラさんだけじゃない。宮藤さんもサーニヤさんもきつと…）

未来予知を持ちシールドを一度も展開したことのない実力者としてその名を知られているエイラが撃墜の危機に瀕していた。

その事実はいミーナに不安を生み、ネウロイとの今後の戦いを危惧させるには十分すぎる程の威力だった。

「私たちの予想を超える速度と変化でネウロイは確実に進化している…これから先戦い抜けるかしら。私たち人類は」

ミーナはそう呟いて後ろを振り返る。そこにあるのは晴れ晴れとした空と広大な水平線、

しかし窓から見える景色を見据える彼女の瞳はそれらとも何か違う、遠くにあるものを見ていた。

「ご苦労さん」

基地の外で一人立つソーマの元に空の彼方から機械造りの赤い鳥が降りて来た。その脚に掴んでいた封筒を取り、その中の封を切つて目を通した彼は目を細めた。

—こちらの準備は直に整う。舞台の幕開けの用意をしろ  
手紙にはただその短い言葉が並んでいるだけだった。

その手紙をソーマは指輪に戻した鳥と一緒に懐に忍ばせる。そうして基地の外を歩いているとある光景を目にする。

（宮藤とリーネと…後誰だ？）

そこにいたのは宮藤とリーネそれと見慣れぬ男性軍人。彼は扶桑の空母艦赤城の乗組員であるのだがソーマはそれを知らないために、気になって立ち止まり聞き耳を立てるが、距離が距離だけに話の内

容はちつとも聞こえない。

しかし表情はよく見えた。

男性軍人は遠目で見ても目立ってわかる程に身体を小刻みに震わせながら手紙を差し出しており、それにキョトンとする宮藤を何か興奮した様子でリーネが見つめていた。

(何してるんだ?)

どういう状況か把握できないままソーマがその場で静観しているとその時、横から吹いた強い風が男性軍人の手から手紙をかつき攫う。

「あっ！」

突然のアクシデントに声を上げる三人。宮藤と男性軍人はすぐさま風に運ばれる手紙を追いかけるが風に乗ってはるか高くまで飛んでしまい、ストライカーでもなければ回収が不可能な高さまで達していた。

見上げるソーマはウィザードライバーを起動し、コネクトの魔法を使用した。

『コネクト、プリーズ！』

「っと」

上空と地上、それぞれ異なる場所に発生する二つの魔法陣。手元の魔法陣に手を突っ込み、空間を直結させた上空の魔法陣を通じて手紙を掴み難なく回収すると、ソーマの目前に手紙を追っていた二人が寄って来る。

「ありがとうございます、ソーマさん！」

「これぐらいどうってことないさ。で、ええっとこれは」

目の前で立ち止まった宮藤と男性軍人。ソーマは宮藤に手紙を渡そうとするがそこでふと彼の手は止まる。

「どつちに渡せばいいんだ？これ」

元々持っていた男性軍人に渡すべきか、それとも彼が送る相手の宮藤に渡すべきか

時間にして数秒弱彼が悩んでいると、男性軍人の方から声をかけられる。

「あの、スペランツァ大尉、ですよね？それを頂いてよろしいですか？」

「あ、うん。はい」

「ありがとうございます。受け取ってください宮藤さん！」

「えっ？」

ソーマから受け取るとすぐ男性軍人は再度宮藤に手紙を差し出す。

その行動に呆気に取られ、左右交互に視線を送って首を傾げるソーマの腕をリーネが掴んで二人から離れた位置に誘導する。

「私たちは離れて見ていきましょうソーマさん。近くにいたら邪魔になっちゃいますから」

「なあリーネ、これどういう状況？あの二人何してんの？」

「ふふ、さあ何でしょうね？」

そう言うリーネだが言葉の割には表情は温かく楽しいものだ。その表情を見えますますソーマが困惑に陥る間にも手紙は宮藤の手に渡っていた。

「貴方たちここで何をしているの」

「ミーナ中佐」

だがそこにミーナが現れた。咎めるような第一声を発して宮藤と男性軍人に歩み寄る彼女の瞳は誰の目から見ても怒っているように映っていた。

「このような隊員への過度な接触は禁止されているはずですが」

「すみません。ですが赤城を救ってくれた宮藤さんにどうしてもお礼がしたくて」

「どんな理由があるにせよこういった行為は認められません。それが規則ですから。これはお返しします」

それらの意見に対してビシツとそう言い放ったミーナは宮藤の手から取り上げた手紙を男性軍人に突き返す。

有無を言わせぬ剣幕に「申し訳ありません」と引き下がるしかなくなってしまう男性軍人。

しかしミーナはそれを聞いているのかいないのか、素早くその場を後にする。



「ミーナ中佐…」

「気まずい空気と静寂が辺りを覆う。」

「宮藤さんご迷惑をおかけしてすみませんでした」

「いえ迷惑だなんてそんな」

「赤城を救ってくれたこと感謝しています。自分はこれで失礼します」

宮藤が二の句を告げられる間もなく男性軍人は去ってしまう。なんとなく寂しげな雰囲気、彼の背中を見て宮藤はいたたまれない気持ちになった。

「なんだか申し訳ないことしちゃったな」

「芳佳ちゃんのせいじゃないよ」

「どうしてミーナ中佐、手紙を受け取るのはダメだって言ったんだろう。悪いことじゃないのに」

「うん、どうしてだろうね」

ミーナの言った規則、それが何故してはいけないのか。その理由を宮藤は考えても理解できなかつた。リーネも二人の会話を聞いていたソーマも同じだった。

「誰だ？入っていいぞ」

宮藤やリーネと別れたその足でソーマが真つ先に赴いたのは坂本の部屋だった。

ドアをノックする音に室内からそう言葉を返されたのを聞いてからドアを開ける。

「お前がわざわざ私の部屋に来るなど珍しいな。一体どうした？朝の稽古だけでは身体が動かし足りなくて稽古をつけてもらいに来たのか？」

「それはまたの機会です。今日はちよつと話があつてきたんだ」

「少々長い話になりそうだな。待っている、茶を用意してから話を聞こう」

ソーマの顔色を見た彼女はそう言って机の引き出しに手を伸ばす。そこから彼女が手に取ったのは茶碗と茶葉

引き出しにあつた二つの茶碗に茶葉を入れ温めた急須の水を注いで、かき混ぜていくその様は剣を握り戦闘指揮を執る勇猛な彼女とは大きくかけ離れていた。まるで著名な画家が描いた作品から出てきたように可憐な美少女がそこにいた。

「それで話とはなんだ」

ついじつと眺めていたソーマに差し出した坂本はここに来た要件を訊ねる。

「ミーナ中佐のことで聞きたいことがあつて」

「ミーナの？なんでまたあいつの話を知りたがる」

「実はさつきさー」

庭で起こった宮藤と男性軍人のやり取りをソーマは語る。最初はお茶を口に含みながらじつと耳を傾けていた坂本は話が進むにつれ深刻な表情になり、話が終盤になる頃には自らが作った茶には一度も手をつけずにいた。

「なるほど、それでお前は私からミーナがそのようなことをした理由を知るためにここに来たという訳か」

「ミーナ中佐のあんなところ初めて見たからさ。だから知りたくて」

話を聞き終えた坂本から出た言葉にソーマは率直にその言葉を返した。

司令官として冷静沈着で温厚な笑顔を絶やさないミーナが誰かの言葉に耳を貸さず、有無も言わせず一方的に説き伏せた。

その姿はいつものミーナを知る人間からすればあまりにも不自然な気がした。

「こういう話はあまり人に話すようなことではないんだがな：ソーマ、お前は口が堅い方か？」

「他人の秘密をペラペラと話して回るような悪い趣味はないよ」

「いいだろう、だが内容が内容だけに少々長い話になるぞ。それでも構わないか」

「もちろん」

そう言つて頷く彼を暫しじつと見つめる坂本。

逡巡した後今までの彼の言動と振る舞いを考慮してその言葉を信

じていいと思えたのか、彼の要望通りに坂本はミーナの過去について語っていた。

「ミーナにはかつて大切な人がいたんだ。名前はクルト、彼は音楽家で声楽家を目指していたミーナとは気があつて一時は共に生活を共にしていた程親密な間柄だったという…だがある時、二人を引き裂くに至る出来事が起こった。数年程前に行われたダイナモ作戦は知っているか？」

「話だけなら。カールスラントやガリアの人たちをブリタニアに避難させる作戦だよな」

カールスラント・ガリア・オストマルク、ネウロイの襲撃を受けたこれら三つの国の民をブリタニアに避難させるために実行された大規模作戦。それがダイナモ作戦だった。

だが規模が規模だけに当然軍からも民間からも多くの死傷者が出た。つまりその数だけ悲しみも生み出されてしまったということだ。「そうだ、その時には彼は軍に志願し軍人になっていてミーナと共に作戦に携わっていた。二人はパ・ド・カレーの軍基地で別れ、ミーナは彼の到着を待ったが…その後何日が経っても彼は一向に姿を現さなかった」

そこまで語った坂本は一呼吸置くと、ソーマを見る。

「話はここまでだ。私もミーナから一度聞いただけだからどこまで正確に話せているかわからないが」

「必要以上にウィッチと男性軍人が関わるな…中佐がそんな規則を作ったのは自分と同じ者を増やさないため」

「始まりは単なる感謝や尊敬からだとしてもそこからいつ何がきっかけで関係が発展するとも限らない。そうなる前に少しでも可能性の芽を絶つことで自分が経験した悲劇の二の舞を作るまいとしているんだ…行き過ぎていると思うか」

「いや、そうしたくなる気持ちもわかるし正しいと思うよ」

大切な人との死別。

そんな過去を経験した者ならきつとそう思っても不思議じゃないとソーマはミーナに対して一定の理解を示した。

同時にミーナにとってクルトという人物の喪失がどれだけ大きな悲しみとなり、それを今でも背負ったまま戦いに身を投じていることも。

「ありがとう少佐。ごめんな、話にくいこと話してもらって」

「構わんさ。だがさつきも言ったようにあまり口外するなよ。わかっていると思うが特に本人には」

「わかっている、気を付けるよ」

釘を刺す坂本にドアノブに手をかけたまま応じるとソーマはドアノブを回して部屋を後にする。

――言い過ぎただろうか。

宮藤と赤城の男性軍人に対する自らの行いにミーナはそう振り返りながら基地内を歩いていった。

事情も話さず一方的な物言いをした自分をきつと宮藤は理不尽に思っているはずだろう。

だが取った行動そのものに対しては後悔はしていなかった。あれは必要なことだったのだから

第二の自分を作り出さないためにも、誰に何と言われ思われようとも

「見つからないなあ、どこ行つたんだろ。こっちに行つたと思つたのに」

そんなことをミーナが自分に言い聞かせていると何かを探して首を四方に動かしているルツキーニが死角から飛び出してきた。

「ルツキーニさん、何をしているの？」

「中佐！いいところに！ねえ、こっちに赤い鳥来てない？」

「赤い、鳥？なんなの？それは」

訊ねるなり飛び跳ねる詰め寄り、むしろ逆に質問を投げかけてきたルツキーニの勢いにミーナは戸惑う。

「さつきね、見たことない鳥が降りていくのが見えたんだ。捕まえたくて探してるんだけどどこにもいないんだくずつと探してるのに」

ルツキーニの説明に出てきた特徴にミーナは頤に指を当てながら

考える。

「もう少し具体的に教えてくれるかしら？　どういう鳥だったの」

「んつとねえ、大きさはこれくらいで、後なんか普通の鳥より堅そうだった。で、キラキラしてた。宝石みたいに」

親指と人差し指で卵が一つ入りそうなくらいを作ってルツキーニは自分が目撃した鳥の特徴を語る。

堅くて宝石みたいにキラキラした赤い鳥、少なくともミーナの記憶にはその条件に該当する鳥は思い浮かばなかった。

「そんな鳥私は見てないわね：でもその特徴に似た鳥を見つけたらルツキーニさんに伝えるわね」

「ほんと、ありがと中佐！絶対教えてね、絶対だよ！」

そう告げてまた意気揚々と探し求めるルツキーニ。脱兎の如き速さでミーナの視界から消えていった元気なその姿を見て微笑むミーナであったが再び思案に耽っていた。

(宝石みたいにキラキラした赤い鳥：本当に鳥なのかしら)



「ふふふ、ようやく完成した。待っていたぞこの時を」

どこかにある研究室を思しき部屋の室内。

一人の人間の経つ空間を分厚いの壁とガラスで隔てた先には二つの特長的な物体が置かれていた。

一つは人間の身長を遥かに上回る大きさを持った機械。複数のケーブルに繋がれ、異様な雰囲気醸しだしている。

そしてもう一つは机の上に置かれた人の手形を模した紋様が刻まれたベルト。こちらは大型の機械と違っておよそ十個以上の数が並んでいる。

「これで全ての準備は整った。いよいよだ：忌々しいウィッチどもを引きずり降ろし我々が新たな戦場の主役となる時はもうすぐそこだ」

それらを見つめるとある男。ガラスに映る虚像の彼は愉快そうに笑っていた。

## 第十五輪 変異・イントロダクション

事務作業を終えたミーナが寝間着を羽織って就寝の準備を終えベッドに横になって眠りにつこうとした時、そこに外側からドアを叩く者がいた。

「誰？」

「私だ、入るぞ」

夜遅くに一体誰なのかと疑問が浮かび上がるのとドアを叩いた人物が入ってきたのは同時だった。

その人物の姿を認めたミーナは彼女の名を呟いていた。

「美緒」

「夜更けにすまないな。だが言っておきたいことがあつてな」

「何かしら」

眠りにつこうとしたところにやってきたことはさして気にせず、問いを投げかけながらミーナは考える。

軍事絡みということではなさそうだ。そうであったならわざわざこの時間帯に伝えて来る必要はないし、緊急の連絡であるのならもっと緊迫した空気を漂わせているはずだ。

「宮藤に渡された手紙を突き返したそうだな」

「…誰から聞いたの」

手紙、それだけ聞いてミーナは宮藤と赤城の男性軍人のやり取りを指しているのだと気付いた。

同時に何故その場にいなかった坂本がそれを知っているのかという疑問も生まれ、誰かが坂本に話したのだという結論もすぐに出た。

ただそれが誰かなのか、そこまでは特定できなかった。

「ソーマが昼間私の元にやって来てな…あの話お前には悪いが話させてもらった」

「そう、彼に話したのね」

「気にしていたぞ。いつものお前らしくないと」

ミーナはその時の情景を思い返して、気付いた。

そういえば宮藤と赤城の男性軍人から離れたところにリーネと一

緒にソーマもいたが、まさかその足ですぐ坂本に訊ねるとは思わなかった。そして坂本が自分の過去を話していたことにも僅かばかりの驚きがあった。

夜の暗がりのせいかな表情の暗いミーナに坂本は声を発した。

「まだ忘れられないか」

その問いかけにミーナからの答えはない。けれども彼女がどんな心情を抱いているのか、それは充分すぎるほど坂本には伝わった。

(やはりそう易々と傷は治らないか…難しいものだな)

数年の時が経つてもなお、その人がいなくなってもなお彼女の心には未だ癒えぬ心の傷が残っている。

友として、仲間として、どうかしてあげたい気持ちは山々だがこればかりは本人次第。坂本にもどうにもならない。

翌朝、ミーナはいつものように食堂で仲間たちと共に朝食を食べていた。

宮藤の作った焼き魚を箸で摘み、口に運ぶ。その所作に一点の迷いはなく、前日の夜の会話の時に見せた表情は微塵もなかった。

そう向かいの坂本が感じる一方で

「おいソーマー、おい、聞いているかー？」

シャーリーがソーマに心配そうに声をかけていた。

白米を摘まんだ箸を持ったまま茫然としていた彼だったが、その声に眉を動かして反応する。

「…ん、どうした？」

「さつきからずっと声かけてるのに箸持ったまま黙りこくって、何かあったのか」

「もしかして味変でした？」

料理に何か問題があったのだろうと宮藤も不安そうに訊ねてくる。

「ちよつと考え事してただけだ。心配させて悪いな」

「ふーん、ならいいけどさ」

そう言つてソーマは手を動かし食事を再開する。

「骨が取りにくいですね。どうして扶桑の料理はクセの多いものば

かりなんですの」

一方でペリーヌは魚の骨に苦戦していた。使い慣れない箸に加えて数の多い骨を一つ一つ取り除くのはある意味ネウロイ以上に手強い相手だった。

そんな激闘を繰り広げる彼女に坂本は苦笑しながら助言を送る。

「ご飯と一緒に食べるといいぞペリーヌ。そうすればいちいち手間をかけて取る必要も骨が喉に詰まる心配もなく、安心して食べられる」  
「本当ですの坂本少佐…ふむっ、確かにこれなら気にせず食べられそうですね」

坂本からの助言を嬉々として早速実践するペリーヌ。大口を開けて頬張るのは淑女として少々はしたない気もするが今のペリーヌはそんなことを気にする状態ではなかった。

「てゆうかき、さつきからなんか匂わないか」

「変な匂い？」

エイラの言葉に全員が食事を進めていた手を止めて鼻を動かす。すると確かに食堂という空間内に強い刺激を与える匂いが充満しているのを感じた。

「本当だ〜何これ、嫌な匂い」

「もしかして宮藤今何か焼いてないか？」

「ああっ！」

顔を顰めるルツキーニとソーマ。その二人が言葉を発した直後宮藤はキッチンへと駆け込む。

そして彼女は見た。ボイルから黒い煙と焦げ臭い匂いが漏れているのを

「すみません！魚焼いたままほったらかしにしてみました！」

「おい大丈夫かそれ！危ないぞ！」

絶叫に近い悲鳴を上げる宮藤の声を聞いてソーマは食事の手を止めて立ち上がる。万が一に備えてウォーターウイザードリングをホルダーから抜き取りながらキッチンに駆け込む。

「ふう、大丈夫です。お魚はダメになっちゃいましたけど」

「大事に至らなかつただけでも何よりさ」



焦げて使いものにならなくなった魚に申し訳なきを感じながら宮藤とソーマはひとまずの安堵を得る。

「気が付いたからよかったものあと少し発見が遅れていたら一大事だったぞ」

「まあなんともなかったんだし結果オーライじゃない。それよりわかりお願い」

「わかりました」

ハルトマンがおかわりを要求し、リーネが彼女から器を受け取ろうとした時警報が鳴り響いた。

「襲撃か、いくぞお前たち！」

「満腹に食事もさせてくれないってか」

「もくおかわり食べたかったのに空気読めないなあー！」

一同は食事を止めてミーティングルームへと向かう。その再ハルトマンはネウロイへの不満を漏らしていた。

ガリアからネウロイがブリタニア基地に向けて進行中。その一報を受けたミーナは出撃メンバーを発表した。

前衛はバルクホルンとハルトマン、後衛はペリーヌとリーネ、そして坂本とミーナの支援にそれぞれ宮藤とソーマが付くことになり、それ以外の隊員は基地で待機となった。

空を飛行中、少し先を行くミーナを後方からソーマは見ていた。「皆準備して」

空間把握の能力でいち早く敵を認識したミーナの一声。正面に意識を向けるとそこには鎮座するように佇む四角いキューブのような形状の巨大なネウロイ。

「目標捕捉、各自フォーメーションを取り、迎撃！」

坂本の指示でばらけ、銃口を合わせる一同。だが引き金に指を添えた誰かがそれを引くよりも早く、ネウロイに変化が起こった。

大型だった一体のネウロイが無数の小型となって弾けるように分散したのだ。

「えっ、なにあれ!」

「分散しただど?!」

驚くバルクホルン。二百を越えるネウロイを屠ってきたカールスラントのエースたちでさえも初めて遭遇するタイプだったのだろう。僅かな時間だが動きが止まる。

だがこんな時でもミーナは冷静に状況を鑑みていた。空間把握ですぐさま敵の方向と数を計算し、口にする。

「右下方八十、中央百、左三十」

「コアは?あれ全部つてわけじゃないよな」

「ええ、コアを持つてる個体は一体だけのはずよ。でもこの数じゃ」とにかく数を減らすのが先決だ」

コアを持つネウロイを倒せば全て終わる、といっても大量に敵がいる状況でそれを特定するのは砂粒の中から光るガラスを見つけるのと同じくらい至難の業だ。

手当たり次第潰していくしかない。

「バルクホルン隊中央、ペリーヌ隊右を迎撃。宮藤さんとソーマさんは各自坂本少佐と私の援護を」

空間把握で得た情報を元にミーナは指示を送ると、間もなくエース達はすぐさま行動に移し、ネウロイとの交戦に入る。

バルクホルンとハルトマンは背中を預け合いながら凄まじいペースで敵を撃ち落としていく。

右側の集団を務めるペリーヌもトネールで周りの敵を粉碎し、背後からその隙を狙おうとしていた一体もリーネが排除する。

「さっすがエース。俺も負けてられないな」

『ハリケーン、スラッシュストライク!』

彼らの奮闘に負けじとソーマは集団の一つめがけて、スラッシュストライクを発動し、剣を振るう。刀身から発せられた風の刃が集団の中心部で膨れ上がりネウロイを切り裂く。

だが白い破片と化したのは全体からすれば些細な数、しかもその中にコアの赤い光は見受けられなかった。

「まだまだ大量にいるな」

ハルトマンやバルクホルンらが率先して撃墜数を稼いでくれているが、それでもまだ物量差に苦しむ展開が続く。

苦い顔をするソーマ。その彼の視界の隅に赤い光が灯った。

『デیفエンド、プリーズ！』

その輝きがネウロイの攻撃だと気付き咄嗟に振り返って、デیفエンドの魔法で風の障壁を展開する。

照射されるビームを受け止めるソーマ。その彼の左手側にいるネウロイの赤い点が光り、彼は焦る。

(しまった！)

正面からの攻撃を防ぐために手が塞がっており、そちらにまで手が回らない。

だがどうにかしなければとソーマが策を考えていると、ビームを放とうとしていたネウロイはその身に銃弾を受けて散った。

銃弾の飛来した方を見るとそこには宮藤の姿：彼女はソーマの安全を確認すると即座に姿勢を反転させ坂本のフォローに回る。

「助かったぞ宮藤」

ついこの間まで新米だったのによくぞ成長したものだとその動きを褒めたたえるソーマはビームが止んだ瞬間にウイザーソードガンを撃ち込み、目の前のネウロイを一匹ずつ減らしていく。

「戦場が変わりつつあるわね」

「ああ、大陸に近づいているな」

そうしていく内に戦いの場は海から砂の広がる陸地へと移動しつつあった。バルクホルンたちの活躍で敵も徐々に減りだしているというのに一向にコアを持つネウロイが見つからない。

次第に焦れ始める坂本。

そんな時だった。宮藤が何かに気付き、空を見上げたのは

「上！」

「あれがコアを持っている個体か！」

戦場を見下ろしていた坂本と宮藤らよりも上、太陽を背にするように浮いている黒い物体が複数あった。

発見され急速に降下してくるそれを坂本が魔眼の能力で見るとそ

の内の一つにコアのある個体が潜んでいた。

「逃がすな宮藤！」

「はい！」

宮藤が追尾し、弾を撃ち続ける。右へ左へと不規則な軌道で逃げに徹するネウロイだが、食らいついた宮藤の腕はコアを討ちぬいた。白い破片をまき散らしながら砂漠の土へと落ちていく。

「やったね芳佳ちゃん！」

「よくやったぞ宮藤」

白い破片をまき散らしながら砂へと落ちていくネウロイ。

コアを持った個体を撃破した宮藤を賞賛するリーネと坂本。しかしミーナは周りの状況を見回して訝しんでいた。

「どういうこと…？コアを持ったネウロイを倒したのにまだ残存している」

未だ空には四十近い数の小型ネウロイが存在している。

どうにも様子がおかしい。そう思っていると宙を漂っていたネウロイらは突如として一斉に地上へと向かい始めた。

「何が起こっているんだ！」

予期せぬ動きに戸惑いながらもバルクホルンは銃撃する。宮藤やソーマも攻撃を加えるが、それでも半分近くの数を打ち漏らしてしまう。

激しい攻撃を逃れたそれらは宮藤が倒したコアを持ったネウロイ落下した地点に集結し、巨大な一つの塊になるとそこから更に形を変えらる。

下半身は馬の脚、手に弓を握り締めたようなケンタウロスに酷似した姿に変貌し、その足元には黒い泥が溢れたかと思えばその中から槍を持った小鬼のネウロイが多く出現した。

「これは…ネウロイが集まって合体したというのか」

「こんな特徴を持つネウロイは初めてだわ。この間のネウロイといいやはりネウロイは変わり始めているわ」

ネウロイが遂げた変貌に坂本もミーナも驚きを隠せない。

そんな彼女たちの前でケンタウロスネウロイは弓を構えると赤い

光の矢が生成し、矢を放つ。

人一人を易々と覆う程の大きな矢は細かく複数に分散し、坂本とミーナたちに襲いかかる。

数多に迫る矢の嵐。ストライカーの機動力と培った経験を回避する坂本とミーナ。

しかし数が数だけに回避だけでは対処できず二人はシールドを張る。

派手な攻撃方法の割には威力は大したことはないようでミーナは全ての攻撃を防ぎ切る。

だが

「くっー！」

ケンタウロスネウロイの矢の一つが坂本のシールドを突き抜けて、彼女の頬にかすり傷を作っていた。

「美緒ー！」

自分とほぼ同じ数、同じ威力の攻撃を受けたのに完全に防ぎ切れなかった。ミーナは彼女の身を案じて叫ぶ。

「こんのー！よくも坂本少佐を！」

ケンタウロスネウロイと小鬼型のネウロイ目掛けてペリーヌたちは四方八方から銃撃を仕掛ける。

小鬼型ネウロイは先ほどの小型ネウロイと変わらぬ耐久力のようで難なく撃墜できたが、ケンタウロスネウロイはそうはいかなかった。

図体が大きくなり、攻撃が当たりやすくなったことで変化する前より倒しやすくなっているはずだが、坂本とミーナが加わっても、ケンタウロスネウロイが絶命する気配はない。

胴体に位置するコアを集中して攻撃しようにもケンタウロスネウロイの放つ矢と剛腕が接近を阻む。

（あれ？）

なんとかして倒さなければと、宮藤もコアに照準を絞って引き金を引こうとするが、そこでふとあることに気付く。

ケンタウロスネウロイに攻撃を加える中に誰か一人の姿が見当た

らないのだ。

疑問に思っただけ首を左右に動かすとその人物は戦いの中心から少しばかり離れた場所にいた。

(ソーマさん、なんであんなところに)

不可解に思う宮藤の眼差しを受けながら砂漠に降り立つソーマ。その瞬間彼は宮藤にとって思いも寄らぬことをする。

「えっ、ソーマさん。なんで…?」

なんと変身を解いたのだ。戦いの最中、しかも大型のネウロイを前にしていながら戦闘能力を自ら手放す。

ソーマの行為には宮藤だけでなく、宮藤の声に反応してそちらを振り向いたペリーヌやバルクホルンから見ても気がどうにかしたのかと疑わざるを得ないものだった。

「スペランツァ大尉、何をしておりますの！戦いの最中ですのよ！」

「正気か！早くもう一度変身しろ！」

ケンタウロスネウロイを牽制しながら訴える二人。しかしソーマは二人の言葉が届いていないかのように微動だにせず、ケンタウロスネウロイを見据えたまま、ゆったりとした動作でウィザードライバーを起動する。

『ドライバーオン、プリーズ！』

『シャバドウビタッチ、ヘンシーン！シャバドウビタッチヘンシーン！』

「…変身」

『ハリケーン、プリーズ！フーフー、フーフーフー！』

そう呟いた言葉と共に再度姿を変える。前方に展開した魔法陣が勝手に彼に向かっていき、魔法陣をくぐり抜けたその身体を変化させる。

黒いローブと腰布を纏う緑の宝石の戦士。風の力を操り、万能な力を持った魔法使いへと

「さあ、シヨータムだ」

ソーマ、否魔法使いウィザードはそう言って、剣状態のウィザードソードガンを手に異形の群れに立ち向かう。

## 第十六輪 マジックタイム、ショータイム

ソーマ：いや風の魔法使いウィザードへと長槍を持った小鬼型ネウロイが大挙して押し寄せる。

ウィザードは蹴りやウィザードソードガンで襲いかかる攻撃を払い、逆に斬撃を浴びせていく。

「はあー」

剣戟の最中砂を蹴って、飛び蹴りを決めるウィザード。背中から倒れた一体のネウロイを尻目に風の力で浮遊し、滑空し、ウィザードソードガンを振り回しながらネウロイの集団に突っ込む。

すれ違いざまに切り刻まれるネウロイ。

空に浮かび上がったウィザードは空中で指輪を付け替える。

『ランド、プリーズ・ドツドツド、ドツドドン！』

「はっ、いやあー」

土を操る黄色の姿ランドスタイルへと変化し、着地したウィザードは近場のネウロイに肘打ちを決め、後頭部に手刀を叩き付ける。

別方向から突き出された長槍を蹴り上げると、身体を捻って跳躍。上げた蹴りをそのネウロイの横っ面に食らわせ昏倒させた彼は土砂を転がって立ち上がり、近場のネウロイをウィザードソードガンで斬りつける。

「すごい、ソーマさん。一人であれだけのネウロイを相手にしてるのに一回も攻撃を受けてない」

「まるで踊ってるみたい」

敵の攻撃をかわしたと思えば次の瞬間には攻撃に転じ、また攻撃をかわす。

動きを止めず、時に緩急をつけ、あらゆる不可思議の力を使うその様はまさに演舞のよう。

宮藤とリーネにはその戦いぶりが鮮やかに映った。

一方でケンタウロスネウロイに銃撃を仕掛けながらウィザードの戦いに目を配っていたミーナは目を細めた

(この反応、ネウロイじゃない。でも何かいる…)

自身の空間把握能力の索敵範囲内に一つの反応があることに気付いた。

敵かと一瞬、緊張が走ったがしたがいつも感じるネウロイの反応とは違う。

(あれは…鳥？でもあれは)

反応のある方角見ればそこには赤と銀の鳥。大きさは掌に収まるようなほど

それだけなら何も気にすることはなかっただろうが、その鳥は少々普通の鳥とは違っていた。

羽根を手の代わりにして、羽根と脚でカメラを持っており、しかもそのレンズの先はワイザードに向けられていた。

『バインド、プリーズ！』

そんな彼女が視線を外したワイザードの状況はというと…土の鎖で残るネウロイを拘束し、赤い指輪を取り出していた。

「せっかくだ。どうせなら派手に決めるか」

『フレイム、プリーズ！ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

『コピー、プリーズ！』

続けて変身するのは赤き火の姿、フレイムスタイル。変身と同時にワイザーソードガンをガンモードに変形させた彼は更にコピーの魔法を連続使用。四人にまで分身し、魔力の蓄積された銃の先を土の鎖に縛られた集団に向ける。

『フレイム！シューティングストライク！』

重複する陽気な機械音声。一秒も狂いなく全く同じタイミングで銃から飛び出した四つの火の塊がネウロイを覆い、その身体を一片残らず燃やし尽くす。

「よし、これで後は」

取り巻きを掃討したことで残るはケンタウロスネウロイのみ。このまま波に乗りたいワイザードはフレイムワイザードリングを外し青い指輪を付けながら後ろを、ケンタウロスネウロイのいる方向へと振り返る。



『ウォーター、プリーズ！スイースイー、スイースイースイー！』

風・土・火、と来て最後の一つ：あらゆる生命の源とされる水の力を宿したウォータースタイルに変身するとウィザードはバルクホルンやハルトマン、ペリーヌが戦っているケンタウロスネウロイ目掛けて走り出す。

「後は俺に任せてくれ！」

「任せろって、えっ、ちよつと!?!」

『ウォーター！スラッシュ、ストライク！』

ペリーヌの戸惑いに構わずウィザードは味方の銃弾が駆け巡る中、水を纏わせたウィザーソードガンを手が高く飛びあがり、ケンタウロスネウロイの胴を切り裂く。

切れ味鋭い水流の刃がネウロイの体を削るが、致命傷には至らず欠けた部位はすぐ再生されてしまう。

それどころかウィザードの背中に向けてケンタウロスネウロイは弓を射ろうとしていた。

「攻撃が来るよ！よけて！」

「いかん、あのままでは！」

ハルトマンが警告として叫ぶ。

空中で身動きの取れないウォータースタイルでは回避行動はできず、攻撃をまともに受けてしまう。

そう危惧したバルクホルンはハルトマンが声を上げて間もなく、ストライカーを吹かしてウィザードに手を伸ばそうとするが、全速のストライカーでも手を掴めそうにない。

だがウィザードはそれを予測していたのか迷いなく腰のホルダーから一つに手を伸ばして、ベルトに翳す。

『リキッド、プリーズ！』

その魔法が発動した瞬間ウィザードの身体は液状へと変質する。矢の形を為したビームに貫かれるが、液体は何事もなかったかのように元の状態へと戻る。

思いがけぬ手段で攻撃をすり抜けたウィザードにハルトマンを始め誰かが度肝を抜かれる。

「あんな避け方あるんだ…」

しかしそれに構うことなくハリケーンスタイルに再度変身するウィザードは空高く上昇。決着をつけようとする。

「こいつでファイナーレだ」

『チヨロイイネ！キックストライク、サイコー！』

風を纏った魔力が右脚に一点集中する。ウィザードは右脚をつき出してケンタウロスネウロイへと向かっていった。

「いやああああ!!」

風の流星となつたウィザードは胴を、その奥深くに潜んでいたコアを穿つ。活動の根源となるコアを破壊されたケンタウロスネウロイは爆発した。

「今度こそやったようだな」

「ほとんど一人で倒しちゃったよ」

黒い個体が根こそぎ姿を見えなくなったのを確認してひとまず肩を降ろすバルクホルンだったが、ハルトマンの呟いた言葉に砂漠に立つウィザードに視線を移す。

「やりましたねソーマさん」

「お疲れさん宮藤リーネ、二人とも怪我はないか？」

「はい、どこにも怪我はありません。ソーマさんこそ大丈夫ですか？ さっきの」

「平気だよ、この通り。それよりさっきは助けてくれてありがとうな宮藤」

彼女が視線を向ける先には宮藤とソーマ、そしてリーネ。三人はそれぞれ先の戦いにおける活躍を称え、身体を気遣い合っていた。

その様子はミーナも見ていた。

だが空から見下ろす形で見ていた彼女は地上へとふと目を配らせた時、その瞳が大きく見開いた

(この場所は…)

砂に埋もれた建物だったものの残骸、壊れ果てた車、その光景の正体を悟った時ミーナは引かれるように距離を縮めていった。

(そうか、ここはパ・ド・カレーか)

そんなミーナの行動を唯一目で追っていた坂本はその理由に気付いた。

地上に足を付けたミーナはある車の前で止まった。それは記憶に深く刻み込まれた車と瓜二つだった。

まさかと思い、微かな期待と不安の間で揺れ動きながらもミーナは車のドアを開け

「……これってー！」

彼女は大きく目を見開いた。

茜色に染まるブリタニア基地に音が流れていた。その音の発生源、基地のある一室でストライクウィッチーズの面々は皆音に耳を傾け、心を癒されていた。

赤いドレスを着てマイクの前で立つはミーナ。彼女の発する美しい歌声は通信機を通じてこの基地の周辺に届いている。

(クルト……)

ミーナが身に纏っているドレス。これは昼間の発見した車の中に袋に包まれていたものだった。

それを見た時ミーナはすぐある可能性に気付いた。クルトが、亡き恋人が自分に残してくれたのだと

「ミーナ中佐の歌綺麗だね、芳佳ちゃん」

「うん、とても気持ちいいしなんだか心を綺麗な水で洗われてるみたい」

そんなミーナを尊敬の眼差しで見る宮藤にエイラは背後から両頬を掴まんで引っぱり、からかいの混ざった不満の声を上げる。

「おい、サーニヤにはなんかないのかよ」

「もひろんしやーにやちゃんも」

音を出していたのはミーナだけではない。彼女の歌に合わせてサーニヤがピアノを演奏し、音色を出しているのだ。

彼女の奏でる旋律とミーナの歌声に心地よさを感じながらソーマは一人壁にもたれかかっていた。

清らかなメロデーが広まった夕暮れ時から一点、基地は静寂に静まり返った。

そんな夜、月明かりの差し込む部屋にドアを開けて入り込む影があった。

後ろ手にドアを閉めた影は明かりもつけず月明かりだけを頼りに机の前まで移動する。その足に微塵も淀みはない。

机にカメラを置き、引き出しを開けると数枚の写真をその中に仕舞おうとした時独りでに部屋に明かりが灯った。

驚愕に表情を染め上げ、息が止まる影。素早く、しかし内心恐る恐る向けた視線が第一に捉えたのは流れるような赤い髪と灰色のオオカミの耳。

「こんな夜遅くにどこに行っていたのかしらスペランツァ大尉」

電源スイッチに手を添えたミーナが問いかける。どうして彼女がここに、という驚きをどうにか表情に出さぬよう抑えつつソーマは問いに答える。

「昼間の戦闘で張り切りすぎたせいかなかなか寝付けなくてね。ちよつと散歩がてら外の空気を吸いに」

「散歩…そう、それにしても随分遠くまで出かけたものね。パ・ド・カレールまで行くなんて」

ミーナが目を落とした先には彼の靴。その先には大量の真新しい砂が付着していた。

そのことを追求されたソーマは表情に大きな変化は出さなかったが、微かに眉が動いた。

「昼間の戦闘ので赤い鳥を見たわ。その鳥が持っていたカメラを貴方が持つてる。あの鳥は貴方のものね」

「鳥がカメラを？何かの間違いじゃないのか？」

「話してもらえるかしら。貴方は一体何をしようとしているの」

そんな話があるわけがないと言うかのように苦笑するソーマの言葉をミーナは速攻で一蹴する。

ソーマを真っ直ぐ見据えるミーナの瞳。

今彼の前にいる彼女は年長者のお姉さんとしての顔ではなく、軍人

として隊長としての側面が強く表れている。

「悪いけどミーナ中佐…」

緊迫した空気が漂う中で麗しいときえ思えるその美貌を見つめ返しながらソーマは右手を机の裏側に伸ばす。そして

「あんたがそれを知ることはこの先ないよ」

彼は机の裏に張り付けていたロマーニヤ製の銃をミーナに向けた。

## 第十七輪 嵐の前の静けさ

洗濯当番だった宮藤とリーネが食堂に入るとハルトマンやシャーリーたちが座って卓上に目を向けている光景が目に入った。

「皆さん何を見てるんですか?」

「今朝出た新聞だよ。ほら、これ。見てみるよ、面白いのが載ってるぞ」

気になって訊ねた宮藤にシャーリーが机の上に広げていた新聞を手渡す。一体何なのだろうと紙面を見てみると宮藤とリーネは「あっ」と同時に小さく声を漏らす。

それはパ・ド・カレーでの戦いでの記録が記されていた。

だが二人の目を引いたのはそこではなく別の部分

『ウィッチすら苦戦する新型ネウロイを単独撃破』『人類の新たな希望の魔法使いウィザード現る』……という見出しと複数の写真。

写真にはそれぞれウィザードに変身する瞬間のソーマ、空中で蹴りを突き出すハリケーンスタイル、格闘戦を繰り広げるランドスタイル、銃を構えるフレイムスタイル、剣を握りケンタウロスネウロイを切り裂くウォータースタイルの姿が映っていた。

「この写真、これってこの間の戦闘の時の」

「ウィザードって、ソーマさんのことですよ。すごい、こんなに大きく取り上げられてるなんて」

新聞の内容を隅から隅まで事細かに読み進めながら宮藤とリーネはそれぞれ言葉を漏らす。

「でもなんか納得いかないんだよねー。なんか全部ソーマのおかげ!みたいな感じでさ、私たちだって戦ったのに」

一方でハルトマンが少々不満の色を混ぜてぼやく。

問題のケンタウロスネウロイを倒したのは確かにソーマだが、ハルトマンたちがまるで歯が立たなかったわけではない。むしろ撃墜数で言えば彼女やバルクホルンの方がずっと上であり、今回の戦いでも凄まじい戦果を上げておる。

にも関わらず誌面の文章はウィッチの功績には誰一人として一切

触れずソーマを、ウイザードの活躍を褒める内容ばかり。ハルトマンでなくとも仲間に不満はなくともこの記事の内容には何か一言言いたくもなるだろう。

共に戦いに参加したペリーヌも多少なりともハルトマンの言い分に同意しつつも彼女とは別に気になる点があった。

「そもそもこの写真はどやうやって撮られたのです？これだけ鮮明に撮影された写真、相当近くにいないければ取れるものではありませんわ。しかも何枚も」

ウイザードの写真は動いている瞬間は多少のブレがあるが、どれもあまりにもくつきりと姿が映されている。

これだけの質の高い写真を撮るにはペリーヌの言うように戦場になければ決して取れないはずだ。

「あの時私たちの周りに誰もいなかったよね」

「うん、もし人がいたならミーナ中佐が気付いてただろうし、その人が戦いに巻き込まれないように私たちに指示を出してたと思うよ。だから私たち以外の人はいなかったはずだよ」

戦場にはミーナがいた。

空間把握の能力を持ち、戦況を冷静に分析する視野を持つミーナが非戦闘員に危険が及ぶ状況下でその救助をネウロイの撃破より優先するはずがないと、宮藤に目を向けながらリーネは指摘する。

「でも実際写真が何枚も撮られてこうやって新聞に載ってる…妙な話だなあ」

二人の会話から生まれた疑問にそう何気なく言葉を溢すシャーリー。

宮藤もリーネも戦場の風景を思い浮かべながら考え込む。けれども納得できるような答えは一向に出てこなかった。

執務室でもまさに宮藤たちがしていたのと同じ議論が交わされていた。坂本が椅子に座るミーナの真横に立ちながら新聞を眺めるミーナに意見を問うた。

「どう思うっ？」

「不自然だわ、内容といい写真といい何もかも」

「お前もやはり同じことを思っていたか」

返ってきた答えが自分と一致していたことに満足した坂本は腕を組んで話を進める。

「嫌な風が吹こうとしている、我々の知らないところで良からぬ何者かの作為が働いているような、そんな気がしてならない。私の思い過ぎしでなければいいんだが」

神秘的な表情の坂本。暫しじつとウイザードの写真に目を落としていた彼女だがふと何かを思い出して顔を上げる。

「そういえばソーマはどこにいるんだ？今日はまだ見てないが」

「今朝方バルクホルン大尉とロンドンに向かったわ」

「ロンドンに？」

「バルクホルン大尉の妹、クリスさんの意識が戻ったと連絡があったの。そのバルクホルン大尉の付き添いでね。最初は彼女、ストライカーで行こうとしていたのだけどさすがに私情でのストライカーの使用は認められないでしょう？…そうしたら彼、自分がバイクで送っていくと志願してくれたの」

「なるほど、それでか」

ミーナから経緯を聞いて坂本の頭にはその時の様子がいとも簡単に浮かんだ。そして同時に薄っすら微笑みを作った。

（それはぜひ見てみたかったものだな）

軍事機密であるストライカーを私用で使おうとするバルクホルン、それを止めるミーナとバルクホルンに苦笑しながら自ら代案を申し出るソーマ。

慌ただしくも温かみがあり、闘いの場からはかけ離れた平和な光景。

まさに何の変哲もない日常を象徴するようなそんな場に居合わせることができなかったことを坂本は残念に思った。





ところ変わって浴場。ここでは宮藤たちが訓練で疲れた体を癒していた。

「ぎつきの訓練本当にすごかったね芳佳ちゃん。私の方が先に軍に入ったのにどんどん抜かされちゃってるよ」

シャワーで身体を洗いながら隣に立つ芳佳に言うリーネ。

彼女が言うのは今朝方行われた模擬戦、シャーリーとルツキーニアを相手に宮藤・ペリーヌペアが大健闘の末勝利したことだ。

「あれはペリーヌさんがいてくれたからだし。バルクホルンさんにもまだまだだって」

「それを言ったら私なんて全然だよ」

「そんなことないよ。私はリーネちゃんもすごいと思うけどな」

「えー、どこが?」

謙遜する言葉を返しながら宮藤の視線はリーネの顔から下、控えめな性格に反して大きな存在感を誇っている胸元に行く。

ほどけた髪がかかり着衣越しとはまた違った主張をする二つの大きな山には思わず宮藤は注目と羨望の眼差しを送らずにはいられなかった。

しかし当のリーネはそんな宮藤の目線の行く先に気付いていない。

「でも確かに腕を上げたのは間違いない」

浴槽につかっていたシャーリーが声を上げた。宮藤がそちらを振り向くとシャーリーは水泳でもしているかのようにバタ足で水飛沫を巻き上げるルツキーニアを尻目にこちらに視線を合わせていた。

「この調子だとそのうちいつかとんでもない逸材に化けるかもな」

「本当ですかシャーリーさん!」

ウィッチの先輩であるシャーリーからの賞賛に宮藤は目を輝かせる。

「強くなりたいてって思う気持ちがあればそうなる可能性は充分にある。私はそう思うぞ」

「はい、そうなるように私もつと頑張ります!」

「まあ、胸の方はどうかかわからないけどね〜につひつひ」

「もう、ルツキーニちゃん！」

バタ足を止めて冗談交じりに茶化すルツキーニに宮藤はむすつと頬を膨らませる。

相も変わらず自分の胸小ささを指摘するルツキーニに対しては苦情を言いたくなつたものの、彼女もまた自分の実力を認めてくれたことに宮藤は大きな喜びを感じていた。



「着いたぞ。ここだ」

バルクホルンの声を合図にソーマはマシンウインガーを止める。

ブリタニア基地から長距離のドライブを経て二人は何事もなくロンドンの病院に着くことができた。

「よしっと、じゃあ行ってきなよ。俺はここで待つてるからさ」

後部座席から降りたバルクホルンはその言葉に少し戸惑うような表情を作る。

だがそんな彼女へソーマは屈託のない笑顔を浮かべてバルクホルンを促す。

「俺が行ったって邪魔だろ？家族水入らずで楽しんできなよ」

「気を遣わせてしまつてすまないな。なるべくすぐ戻る」

「こつちのことは気にせずにつくりしてこいよー」

ソーマの気遣いに感謝を告げてバルクホルンはやや駆け足で病院の中に入っていく。

後ろから見ても明らかに急いでいるのがわかるその姿にソーマは微笑みつつ、腕を組む。

「さて、ああは言ったものただ待っただけつてのもな」

何しろ久々の家族の会話となるのだ。積もるに積もつた話は山ほどあるだろう。

彼女が戻ってくるまでの間どう時間を潰そうか、マシンウインガーに跨るソーマは空を見上げて考え込んだ。

大急ぎでバルクホルンはクリスのいる病室へと向かった。ほとんど走っている速度に近かったせいか途中で看護師から注意の声が飛んだが、今のバルクホルンはそんな些事に耳を傾けるゆとりはなかった。

目的の病室に辿り着くとノックもなしに飛び込むように思い切りドアを開けてバルクホルンは中へと踏み込んだ。

「クリス！」

「ちよつと病院ですよ！お静かに！」

彼女の五感に飛び込んだのはノックもなしに大声を出して部屋入り込んだ自分を注意する看護師、そしてベッドの上で叱られている自分を見てクスリと笑う妹。

その笑顔を見た瞬間、共に過ごした思い出の数々が自然と蘇る。

気が付けば彼女は妹を抱きしめていた。

確かな温もりと柔らかさが存在していた。幻なんかじゃない。紛れもなく現実だ。

それを理解する程彼女がクリスを抱きしめる力は強くなった。

「ああ、よかった…クリス」

「はは、ちよつと苦しいよお姉ちゃん」

「ああ、すまない」

言われてバルクホルンは腕を外してクリスから離れる。柄にもなく興奮してしまった自分に気づき、照れくさそうにしながら

そんな彼女の表情を見てクリスは嬉しさのこもった笑みをバルクホルンに向けた。

「なんだかお姉ちゃんちよつと変わったね」

「そうか？私は特に変わったとは思ってないが…だがひよつとしたらあの二人の影響かもな」

クリスの言葉に実感がなくやんわりと否定しようとしたバルクホルンだったが瞬間ある二人の顔が頭を過った。

「ミーナさんとハルトマンさん？」

「いや最近新しく加わった仲間がいるんだ」

「新しい人？どんな人たちなの？」

自分も知るミーナやハルトマンのような旧知の仲という程の付き合いでもなく、しかしそれでいてバルクホルンに変化を与えた存在。それを知ってかクリスの興味はその二人に向いた。

「一人は扶桑から来たウィツチの新人だ。宮藤といってな、非常に危なっかしいところがあつて困った奴だが気持ちは誰よりも真つ直ぐだ。どこかクリスに似ているところがあるな」

「私に？」

「ああ。あ、一応言っておくがもちろんお前の方がずっと可愛いがな」  
恥じらいも躊躇いもなく自信満々で言つてのけるバルクホルン。

もしハルトマンかシャーリー辺りでもいたらからからかいに走りそうなセリフだ。

クリスは姉の言葉を恥じらうわけでもなく、嬉しく思いながら質問に戻る。

「ねえ、後の人は？」

「もう一人はロマーニヤの軍人なんだが、これがまたなんとというか変わった奴でな」

残るもう一人、ソーマについてバルクホルンが答えようとした時、外から微かに心地よい音が聞こえてきた。

「何の音だ？音楽のようだが」

「気持ちいい音…でも初めて聞く音だよ」

「ええ、いつもはこんな音楽聞こえてこないんですが」

バルクホルンに訊ねられたクリスも首を傾げる。

看護師にとつても耳馴染みのない音だったようで、その音が流れてくる原因を確かめるため窓を開けて下を覗き込む。

「誰か演奏していますね。ここの方ではありませんね。軍服を着ていらっしやいますけど」

「なんだと？」

軍服を着た人間、それを聞いたバルクホルンはある人物を想像しながら看護師の隣で同じように外を見下ろす。

そこには彼女の予想通り草木の上に立ち、バイオリンを弾いているソーマがいた。

「ソーマの奴、何をしてるんだ」

「どうしたのお姉ちゃん？誰か来てるの？」

ソーマの行動に戸惑っているバルクホルンにクリスから質問が飛ぶ。

「あ、ああ、さつき話そうとしていた仲間だ。今日ここまで送つてもらってな、今下にいるんだ…そうだ、ちょうどいい。話してみるか」

「うん！会ってみたい」

「よし、ちよつと待つてろ」

妹の申し出に快く頷いたバルクホルンは真下にいるソーマへと呼びかける。

「おい！ソーマ！」

「…ん？」

音色を打ち負かそうと張り上げられたバルクホルンの声にソーマはバイオリンを弾く手を止める。

まず左右に目を向けてそれから上を見上げ、数ある窓から顔を覗かせているバルクホルンを発見する。

「どうしたんだ？バルクホルン大尉」

「クリスがお前を一目見たいと言っているんだ。来てくれないか？」

「オツケー、すぐいく」

嫌な顔一つせず頷き、ソーマはコネクトの魔法でバイオリンを収納しながら病院内に入る。

一旦クリスの病室を出たバルクホルンは階段に移動し、上がってくる彼を出迎えた。

「本当に何から何まですまないな」

「なあ、俺が入っていいのか？」

「クリスがお前に会いたいと言ってるんだ。私に止める理由などないさ」

「でもまだたくさん話したいこととかあるんじゃない」

クリスから直々の頼みとはいえ正直言ってソーマには抵抗があった。

ただでさえ会えないというのにせつかくの姉妹の団欒の一時を自

分などに割いてしまつてよいのだろうか。

そんな思いがあつた。

「大丈夫だ」

しかしバルクホルンは彼の言いかけた言葉を遮つて真つ直ぐソーマを向き、穏やかな声色で言う。

「話す時間はこれからいつでもたつぷり作れる。だから今はクリスに会つてくれないか」

「ああ、わかつた」

その一言で完全に抵抗がなくなつたソーマは頷く。

バルクホルンも同じように頷き返すと病室のドアを開ける。

「お姉ちゃん、その人がソーマさん？」

バルクホルンに次いで顔を見せたソーマにクリスが反応する。

「初めましてクリスちゃん。俺はソーマ・スペランツァ、よろしく」

「クリスです。お姉ちゃんがお世話になってます」

年齢にしては珍しい礼儀正しい子だな、ソーマがクリスを見て数秒足らずで感じたのはそんな印象だつた。

さすがはバルクホルンの妹といつたところか

「そうだクリスちゃん、面白いものを見せてあげようか」

『ドライバー、オン。プリーズ』

「えっ!？」

そこで何を思いついたかソーマはワイザードドライバーを起動する。

突然ソーマの腰に出現したベルトと鳴り響いた音声にクリスと看護師は困惑する。バルクホルンも一瞬身構え険しい表情になつたが、彼がクリスに危害を加えるような真似をするなど絶対にならないだろうと考え、すぐに落ち着きを取り戻す。

『フラワー、プリーズ!』

そしてソーマはフラワーの魔法で赤い花束を出現させる。

それを見たクリスと看護師は衝撃のあまり言葉を失くす。

「うわあ…」

「すごい…」

「はい、どうぞクリスちゃん。クリスちゃんが元気になつた俺からの

お祝い」

「いいんですか？ありがとうございます！」

魔法で出現した花束をソーマはクリスマスに送り、彼女は嬉しそうに感謝を告げる。

彼女を笑顔を間近に満足気に微笑むソーマ。

「ちよつとこい」

「え、あ、はい？」

その彼の腕をバルクホルンは引っ張って病室の隅に誘導。クリスマスに聞こえぬよう声量で囁く。

「なんのつもりだ。あまり人の妹に粉をかけるような真似は…」

「粉かけて…そんなつもりじゃ、ちよつとした挨拶、挨拶のつもりだから」

「ならいいが、もし本当にそのつもりならいくら仲間といえども私は許さんからな」

「…はい、気を付けます」

比喩表現では済まされなさそうな程凄まじいプレッシャー。

バルクホルンの瞳と言葉の中に本気を感じたソーマは萎縮した返事で応える。

「お姉ちゃん何話してたの？」

「いやこつちの話だ。気にするな」

そう言っってはぐらかすバルクホルン。

「あの、さっきのって魔法ですよ？ソーマさんもウィッチなんですか？」

会話の内容が気になりながらもソーマへと芽生えた疑問をぶつける。

その問いかけにバルクホルンから解放されたソーマは再びクリスの横に移動すると、目線を彼女に合わせるように腰を落とし、左手の指に煌めくハリケーンウィザードリングを見せる。

「ウィッチとは少し違うかな。そうだなあえて言うなら…魔法使い。俺は魔法使い、ウィザードさ」

ソーマは自らをそう名乗った。

偶然か否か、今朝の新聞に載っていたばかりの自身に名付けられた名を。

「今日はすまないな。朝から私に付き合わせてしまつて」

「いいって、これくらい」

また近いうちに会いに来ると、クリスに別れを告げて二人は病院を出た。

病院の前に止めたマシンウインガーに向かう僅かな道すがらバルクホルンはまだ耳に残っていた音色を思い出して、彼に話しかけた。

「しかしお前がバイオリンを弾けるとはな。少し意外だった」

「言つてもちよつとだけだけどな。小さい頃家の近くに來た扶桑の人に教わつたんだ。その人がすぐくバイオリン上手でさ……ちよつと変わった人だつたけど」

そんな話をしながら病院の敷地を出る二人。

マシンウインガーに乗り込もうとするが、ソーマはフロントとグリップ部分の間に挟まつていた手紙に気付く。

「なんだこれ」

「どうした？」

「いやなんかこんなものが」

「手紙か？何故そんなところに」

ソーマの手に取つた手紙を見つめ、そう口にしながらバルクホルンは考えていた。

風で飛ばされてきたものがたまたま挟まつただけの可能性もなくはないがそれにしても不自然な程に丁寧に刺さっていた。

何者かが意図してあえて挟み込んだのではないか、そんな疑念がまらず頭に浮かんだ。

「さあ、ただ一つ言えるのは」

「っ！」

ひっくり返した手紙の裏側をバルクホルンに見せつけると彼女の目が大きく開いた。

そこには文字が一言こう書かれていた。



『ミーナ・デートリンデ・ヴィルケ殿』と  
「この手紙を置いていった人間は俺たちのことをよくご存知みたい  
だ」

## 第十八輪 揺れる空

(どうしてこんなことになっちゃったんだろう…)

晴れ渡るブリタニアの青空の下、ストライカーユニットを身に着け飛ぶ宮藤。

彼女はその手に握られた実弾銃と少し先を行くペリーヌに目を配りながら、ここに至るまでの経緯を思い起こした。

事の始まりは浴場の更衣室でのこと。リーネやシャーリーたちよりも先に浴場を出て軍服に着替えようとした宮藤にペリーヌはこんなことを言いだした。

「宮藤さん、さっきのはなんですか？」

「へ？」

「さっきの左捻り込みですわ！あれは坂本少佐の技ですわ。あんな大技一体どこで身につけたんですの？」

ペリーヌが言及してきたのはシャーリーとルツキーニとの模擬戦で宮藤がルツキーニに背後を取られた時、彼女が魅せた動きだった。

ルツキーニに背中を取られた宮藤は左捻り込みであつという間に逆に背後を取り、ルツキーニとシャーリーのストライカーにペイント弾を直撃させ、勝利したのだ。

だがその際宮藤の行った行動は坂本の得意とする動きであり、それをまんまこなしてみせた宮藤にペリーヌは腑に落ちない思いを抱いていた。

故に二人きりとなったタイミングで問いつめたのだ。

「あれは坂本さんの動きを見ていたから…」

「嘘おっしゃい！見よう見まねでできるはずありませんわ！そもそも貴方は坂本少佐に対して馴れ馴れしくし過ぎですわ。なんてうらやま…じゃなくて」

「そんなこと言われても坂本さんとは同郷だし、色々お世話になってるし」

「坂本少佐と呼びなさい！」

といってもペリーヌのそんな思いなど知らぬ宮藤は困惑しながらも言葉を返す。

宮藤としては何気なく悪意のない返答であったがそれすらもペリーヌの気に障った。

「宮藤さん、貴方に決闘を申し込みますわ」

「決闘？えっ、ええええっ!？」

そんな背景があつて宮藤はペリーヌと模擬戦を行うことになったのだが、今となつては気迫に押されるがまま断り切れなかつたその時の自分を後悔していた。

握り締めた銃の触感が尚更その後悔を強くさせる。

まさか実弾を用いるとは思わなかつた。

恰好だけとペリーヌから言われたが、人を傷つけるを危険伴う道具を持つているとなるとどうしても宮藤は緊張が収まらない。

(安全装置は大丈夫：だけど)

もし万が一のことがあつたら、そう思うと宮藤は不安でたまらなかつた。

『宮藤さん聞こえていますの？十秒以上後ろを取つた方の勝ち、それならいいでしょう?』

そんな宮藤の思考をかき消すようにしてインカムからペリーヌの声が聞こえてくる。

インカムを通じて届く彼女の声に乱れはない。あちらは完全にやる気のようなのだ。

(こんなことに何の意味があるんだろう)



そんな私闘が別の場所で行われているなどはこれっぽちも思いもしないバルクホルンとソーマは病院から帰ってくるなり、執務室を訊ねた。

要件はもちろん手紙のことだ。

「悪いが勝手に中身を見せてもらった。『深入りは禁物。これ以上知り過ぎるな』これは一体どういうことだ」

バルクホルンが執務室の机に問題の手紙を置いて坂本とミーナの二人に問う。

「やましいことは何もしていない」

「私たちはネウロイについて調べているだけよ」

「それで何故こんなものが届く?」

「これを送ってきた人間に心当たりはないのか?」

バルクホルンとソーマが立て続けに質問を投げる。

「ありすぎて困るぐらいだ」

「私たちウィッチを疎ましく思う人間は多いもの」

ウィッチの存在はネウロイと戦う上でなくてはならない貴重な存在。しかしそれ故に彼女たちへ好ましくない感情を向ける者も決して少ないとは言えない。

この件もそういつた輩によるものだろうと、坂本とミーナは睨んでいた。

「だがこんな品のないことをする人間に一人覚えがある」

「誰?」

「トレヴァー・マロニー、空軍大尉さ」

ソーマの問いかけに坂本はほとんど確信しているかのように力強く呟いた。

「おそらく奴はこの戦い何かを既に握っている。私たちはそれに触れたんだろう」

「一体何を…」

「さあな、しかしこちらに知られては困るものであると見て間違いない。この手紙の文言を見る限りな」

坂本の見解を聞き、送り主の目的を考えるバルクホルン。

そしてソーマは部隊の意向を取り決める中心人物たる二人に意見を求める。

「それで501としてはどうするつもりなんだ?」

「無論ネウロイの調査は続ける。それでまたこのような下品な行いが

続くようであればこちらとしても黙って見過ごしておくわけにはいかない。だろ？ミーナ」

「ええ、本来人類同士でいがみ合うなんて馬鹿げたことしたくないのだけど：仕方ないわ、内部にいつ牙を向けてくるかもしれない相手を無視して外からの襲撃に対応する程の余裕も時間もないもの」

いかに上官といえども仲間には危害を加えるようであれば、対抗することも辞さない。

そんな覚悟を坂本とミーナが口にした時、基地内に警報が鳴った。

「この件は一旦後回しだ。いくぞ」

「了解」

坂本とバルクホルンが真つ先に部屋を出る。

ソーマも続こうと扉の前に向かった時、ミーナがその背中に声をかけた。

「スペランツァ大尉：お願いね」

「わかってる。そっちも頼む」

視線だけ向けてミーナの言葉に頷いてそう言うときソーマは先に出た二人の後を追いかけた。

(なんなんだろう…このネウロイ。何がしたいんだろう)

宮藤は困惑の中にいた。

ペリーヌとの模擬戦の最中ネウロイ襲来の報を受けた彼女はペリーヌの制止を振り切って単身先行し、ネウロイと遭遇した。

数は一機、それも小型

これなら自分一人でも問題なく倒せる、目標を捉えた時宮藤はそう思っていたのだが狙いを定めた瞬間に異変は起きた。

なんと宮藤の横に浮遊してきたかと思えばネウロイが動物の耳を頭に生やした人間の少女、ウィツチのような姿に変化したのだ。

この変化は宮藤に衝撃を与え、彼女から一切の動きを暫しの間奪ったが隙だらけとなった瞬間にもネウロイは攻撃を放つことはなかった。

ただ宮藤の横に浮いているだけ、一緒に空を飛んでいるだけの時間

が続いていた。

「ねえ、貴方は何なの？何がしたいの？」

会話が成立するかどうかもわからない相手だが、せめて何か意志表示くらいはしてくれれば……そんな期待を持って宮藤は問いを投げかけた。

「えっ、えっ？」

するとどうだろう、それが通じたのかわからないがネウロイは宮藤の周りを旋回するような飛行行動を取り始めた。

一向にコアから赤い光が放たれることはなく、むしろ宮藤の気を引こうとしようとしているのかネウロイは緩慢な速度で周っている。

「ふふ、あはは」

それがあまりにおかしくて宮藤の口から笑いがこぼれる。そしてすぐそんな自分に気付いて宮藤は驚いた。

(私何で今…相手はネウロイなのに)

敵を前にして笑うなど致命的だ。だがそれでも宮藤から見ても目の前のネウロイからは敵意を感じない。

むしろ行動から友愛の感情を感じてさえいた。

自分自身の反応に戸惑う宮藤。戸惑い、疑問を持ちながらも彼女はネウロイと並んで空を飛び続けた。

「宮藤が一人で先に向かったと！」

「すみません、私も止めたのですが」

ペリーヌからの報告を聞いて坂本が声を上げた。

『宮藤さんがネウロイと接触したのは間違いないわ。でもそこからはサーニャさんにもわからないみたい』

管制塔にいるミーナからの通信が宮藤の元に急行している者たち全員の耳に入る。

「単身で向かうとは無茶を」

「離れるようには言えないのか!？」

宮藤の行動を無茶と評するバルクホルン、坂本はそれに内心同意しつつ、通信を通じてミーナに呼びかける。

「こちらからも通じないわ。ネウロイがジャミングのようなものを仕掛けているのかも」

「無事を祈るしかないか」

「芳佳ちゃん…」

共に宮藤の安否を思うシャーリーとリーネ。

それ以降誰かが言葉を発することのない時間が続いた。そして

「いた！あそこー！」

「隣にいるのは、あれはネウロイか！何故攻撃しない！」

ネウロイと並んで飛行する宮藤を捕捉した。無事でいてくれた事に安堵する一方ですぐ目の前の敵を排除しない宮藤をバルクホルンは不審に思った。

『何をしている宮藤！』

「この声、坂本さん!？」

怒号に近い声で坂本は宮藤に呼びかける。

通信機からいきなり聞こえてきた声に驚いた宮藤は後方を振り向いて彼女と他の隊員たちの存在に気付く。

彼女の驚きを余所に編隊の中から飛び出す坂本。

「坂本少佐!？」

「ソーマさん!？」

ペリーヌが声を上げ、それと同時にウイザードハリケーンスタイルも坂本の後を追うように隊列から抜け出る。

「違うんです坂本さん！このネウロイは！」

「惑わされるな！そいつは人じゃない！」

宮藤が必死な声で訴えるも坂本は聞き入れず、愛用の扶桑刀ではなく銃を手にネウロイへと接近する。

坂本が向ける気迫から彼女を自らに害をもたらす存在と判断したのか人型ネウロイは宮藤から離れると、ネウロイの攻撃手段である赤いビームを放つ。

「くっー！」

迫りくる赤い光を前に坂本はシールドを展開しようとする。

だがネウロイのビームがシールドに接触直前、坂本に追い付こうと

していたウィザードが魔法を発動させた。

「間に合えー！」

『エクステンジ、プリーズ！』

使用者と使用者の選んだ対象の位置関係を逆転させる魔法。

その効力によって坂本の見ていた景色が瞬き一つの合間に一変した。

「これは!？」

自らを脅かそうとしていた赤い光が目前から消えた。驚愕する坂本。

「ソーマさん!」

「ソーマ!」

そして大きな爆音と悲痛な思いで名前を呼ぶ仲間たちの声が聞こえ、爆音の方を見ると黒い煙の中から落ち行くウィザードが…魔法陣が通過し、変身を解除したソーマの姿が見えた。

それで彼女は理解した。ネウロイの攻撃に晒されていたはずの自分に何が起こったのかを

「私を庇ったのか…:なんというバカな真似を!」

困惑に声を震わせる坂本。

エクステンジの指輪だった破片と赤・青・黄の三色に輝くリングがソーマと共に重力に従って落ちていく。

「まずいよ!海に落ちちゃう!」

ルッキーニの声に呼応するかのよう動きだしたのはシャーリーとハルトマン。

シャーリーは自慢のスピードをもってソーマを抱え、ハルトマンは空中に投げ出された指輪を回収する。

「よかった、呼吸はしてる」

服も体も至るところが傷だらけで焼けているが小さく型が動いている。抱きかかえているシャーリーはホッと胸を撫で下ろすが、すぐに表情を強張らせる。

「シャーリーさん!ソーマさんは!」

「とりあえずは大丈夫そうだ。でもこのままじゃ危ない。地上に降り



るぞ宮藤！」

「は、はい！」

心配と不安の混じった表情で駆け付けた宮藤とシャーリーは近くの島の砂浜に降りて傷の手当を始める。

「ネウロイは!？」

ソーマのことはあの二人に任せておけば平気だろう、とその様子を見ていたバルクホルンは敵前であることを思い出し、思考と視線を切り替える。

だが

「いない?どこに消えた!」

バルクホルンの視界に攻撃者であるネウロイはいなかった。さつきまで攻撃を加えた位置にも自分たちの周辺にも黒き影はなく、青と白が果てしなく広がっているだけだ。

ソーマの負傷に気を取られていた僅かな時間の中に姿を消してしまっただのだ。

「逃げられたのか」

「そんな、この僅かな間にどうやって?」

バルクホルンだけでなくペリーヌも悲観の色を込めて呟く。

そこにミーナからの通信が入った。ネウロイの失踪によって妨害電波の影響を受け付けなくなったからだろう。

『皆無事なの?何があったの?』

「ミーナ:ソーマが少佐を庇ってネウロイに撃たれた」

『なんですって!?!』

受け答えたバルクホルンは通信越しにミーナが息を飲んでいるように感じた。

『彼は無事なの!?!』

「今宮藤が治療にあたっている:ネウロイには逃げられた」

『ネウロイのことはいいわ。すぐに帰還して。そこでは満足な治療はできないわ』

「了解した」

そう応じたバルクホルンは通信を切り、治療が続けられている砂浜

に目を向ける。

「大丈夫かなソーマ」

そしてハルトマンも同じく心配そうな眼差しで見守っていた。固く握り締められた掌からは赤と黄の宝石が表面を僅かに覗かせていた。

## 第十九輪 誰のためか

「ここは…」

黒、黒、黒。右も左も上も下も黒一色に包み込まれた景色が俺の前に広がっていた。

あの人型ネウロイは、坂本少佐や宮藤たちはどうなったのか、様々な疑問が頭の中を駆け巡ったが、いの一歩に口を突いて出たのはここはどこなのかということだった。

『愚かな奴だ。他人のために自らの身を盾にするとは』

突然聞こえてきた声。その声の持ち主を求めて俺はまた視線を辺りに動かすがやはり黒一面の世界があるだけで自分以外の人間の姿は見えない。

「誰だ!?どこにいる!?!」

『何故あんな真似をした。仲間のために自ら死に行くような真似をするなど馬鹿げているとは思わんか』

声は俺の問いかけを無視して逆に問いかけを投げかけてきた。

それに不満を感じたが、ここまでの会話で…いや会話とも言えるかどうかわからないやり取りの中でわかったことがある。

あつちは俺を知っていてさっきの少佐を庇った時の行動も把握しているということだ。

だがそれがわかったところで相手の素性は一向に推測すらできない。こちらからの問いは返ってこないものと認識しつつ、俺は口を開いた。

「俺が自分で望んでやったんだ。馬鹿げてるなんてこれっぽちも思っちゃいないさ。それに皆の悲しむ顔は見たくなかったからな」

得体の知れない相手に言った言葉だが嘘は一切含んでいない。

あそこで俺がエクステンジの魔法を使わなかったら坂本少佐はネウロイの攻撃を受けて負傷していた可能性が高かった。そうならミーナ中佐やペリーヌ、坂本少佐を慕う501部隊の仲間たちは酷く傷ついたはずだ。

だから俺はあの行動を取った。

そのことを後悔してはいない。

『自分の取った行動に間違いはない…そんな自信に満ちた顔をしているな。本当にそうと思えるか?』

「何だど?」

なんなんださつきからこいつの口ぶりは。まるで俺のことを全部理解しているかのような言い方をしてくる。

『まあいい。お前の行動にいちいち口出しするのも面倒だ。だが一つ、忠告しておこう。お前の善意が必ずしも善意を注いだ相手を救うとは限らない』

「待て、どういう意味だ!おい!」

姿が見えないせいで遠ざかっているのかわからないが段々と薄れていく声に俺は叫ぶ。

聞きたいことが山ほどあるし、それに一方的に好き勝手言われたままでは終われない。

なんとか相手の気を引いて留まらせようと俺は声を張り上げる。そんな俺に相手が超越してきたのは

「うああっ!!」

赤き炎と緑の強風の洗礼だった。不思議と痛みも熱も感じないが身にかかる圧は凄まじかった。

「くそ、こんなものに負けるか…!」

腕を交差させ、足腰に力を入れて踏ん張るものの、炎と風の勢いは衰えるどころか更に勢いを増していき、とうとう

俺の足が浮かんだ。

「うわああああ!!」

『今回のような無茶は二度としてくれるなよ。お前がどうなろうと知ったことではないが、俺が消えるのはご免だからな』

炎と風が混ざり合った竜巻に身を飲み込まれる。

世界から弾き出される最後の瞬間、俺の耳が捉えたのはそんな言葉と…荒々しく力強い竜にも似た何かの咆哮だった。

★

(どっだっだっ…)

重たい眼を開いたソーマが真つ先に見たのは天井だった。

自分のいる場所の手がかりを求めようと視線を切り替えようとしたらちょうどその時ドアが開く音がした。

「目が覚めたのね。よかったわ」

ドアから入って来たのはミーナだった。

「そのままでもいいわ。まだ体の調子が悪いでしょう」

体を起こそうとしたソーマを諫めてミーナはベッドの横に椅子を用意し、それに腰を下ろす。

「ここは？ 基地の中か？」

「基地の医務室よ。貴方はネウロイの攻撃を受けて意識を失っていたの」

眠りから覚めて思考が機能し始めると共に、徐々にソーマは状況を把握してきた。そして思い出す。

坂本を庇って自分はネウロイの攻撃をまともにくらったことを。

「ネウロイはどうなった？」

「逃げられたわ。目を離れたのはほんの僅かな間だったみたいだけどその隙に」

「そっか……」

逃げられたと聞いても嫌な顔一つせずソーマは天上を仰ぐ。

暫しの静寂

「確かに貴方に私は頼んだわ」

その後にミーナが口を開いた。

「でもだからと言ってこんな結果は望んでなかった。私にとって501の全員が等しく大事な存在なの。誰か一人が助かってても他の誰かが傷ついて、それでいいなんて私は思わない……」

ソーマは視線を動かしてミーナの瞳に合わせた。

ミーナは真つ直ぐソーマを見つめ返す。

「約束して。次はもうこんなことしないって」

「ごめん……次は気を付けるよ」

ソーマはミーナから視線を切ると視界の端に煌めきが映り込む。不思議に思っただけその方向に目を向けるとタンスの上に置いてある指

輪だった。

その視線の動きを追ったミーナは彼に説明する。

「ネウロイの攻撃を受けて飛び散ったのをエーリカ、ハルトマン少尉が回収してくれたのよ」

「そうか、後でハルトマンに礼を言わなきゃな」

視線の方向に気付いたミーナからの説明を聞きながらソーマはぼんやりと指輪を眺める。フレイム・ランド・ハリケーン…石の輝きから置かれている指輪の種類を把握した時ソーマは目を見開いた。

「…ない」

「どうしたの?」

「ウォーターの指輪!」

ソーマは勢いよく起き上がり、ダンスに歩み寄る。ベッドからダンスまでの数歩の間にも痛みが襲いかかるが、突然のことにミーナが立ち上がって目を丸くするが、それすらも些細に思える程の問題に気付いてしまった。

「ウォーターの指輪だけがない。ハルトマンが置き忘れたのか?」

「それはないと思うわ。いくらエーリカでも貴方の戦いに必要な道具を置き忘れるなんてことはしないはずだわ」

「だったらなんで…まさか!」

そこまで言葉にした時ソーマはある可能性に行き着く。

「ネウロイに奪われたのか!」

「どういうこと?」

「さつき僅かな間しか目を離してなかったのに逃げられたって言っただろ。ウォーターの指輪がもしあの人型ネウロイの手に渡ったのだとしたら、ネウロイは海に潜って逃げたのかもしれない」

「そんな、ネウロイは水が苦手なはずよ。水中を移動できるなんてこと…」

「わからない。けどない話とは言えない」

ネウロイは水を不得意とする生態とされているが、あくまでも過去の進行から基づく推察であり絶対であるという確証はない。

もしその生態が真実だったとしてもウォーターの指輪の力を使う

ことでネウロイが水という欠点を克服できたとしたら…

「待ちなさい！どこへ行くの！」

壁に立てかけていたジャケットを取って医務室を出ようとするソーマをミーナが諫める。

「指輪を見つける。すぐにでも危険を取り除かないと」

「その体じゃ無理よ。いくら宮藤さんの魔法で治療したと言ってもまだ意識が戻ったばかりでしょう。ここから出ることは認められないわ」

「でももし海中から攻め込まれでもしたら…！」

陸戦・空戦に長けたウィッチは数多く入れど水中戦を得意とするウィッチは世界広しといえども存在しないだろう。

少なくともこのブリタニア基地に駐在している現状のウィッチには水中戦に対応できる人材はいない。

ソーマの言葉通り、本当に水の中からネウロイに襲撃されようものなら遅れを取るようになるのは明白だ。

ジャケットに腕を通し、指輪を取りドアに向かおうとするソーマ。そんなソーマの進路を塞ぐようにミーナはドアの前に回り込んだ。

「スペランツァ大尉、対応策は私たちで考えるわ。貴方は今は身体を休めることに集中して」

「それは命令か？」

「素直に聞いてくれるならどう取ってくれても構わないわ。でも私はお願いとして言ってるつもりよ…」

交り合う二人の視線。お互いがお互いの考えを探るように見つめ合った後

「わかった。大人しくしてるよ」

ソーマは観念したように目を伏せ、ベッドに腰かける。

「何かあった時には私か他の誰かが呼びに来るわ。だからそれまでは休んで」

そう言ってミーナはドアノブに手をかけ、医務室を去った。

静かに音を立ててドアが閉まる。

★

医務室を出たミーナが歩いていると反対側から坂本がやって来た。

「美緒…」

「話したのか？あいつに私のことを」

目を合わせるなり坂本が切り出した。対してミーナは口を閉ざしている。

予想していなかったからなのか、予想していたからこそなのか…どちらにしても今の坂本が言いたいことに変わりはない。

「私の代わりに奴が犠牲になると見越してか」

「違うわ！そんなこと私は考えてなんか」

「お前はそうだとしてみあいつが考えるとは思わなかったのか！」  
「っ！」

「お前も知っていたはずだ。あいつが他人を助けるために自分の身を投げ出すことを厭わない奴だと。その危うさを。どうして気付かなかった」

その言葉にミーナは大きく目を見開いた。

心のどこかで期待していたのかもしれない。

ソーマが以前にもバルクホルンとペリーヌをネウロイの攻撃から庇ったように今度も坂本を守ってくれろと。

それはミーナも場においてそれを見ていた。

だから仲間を守るために自分を犠牲にする判断をソーマがすると至らなかつたミーナに坂本はやるせない思いを感じていた。

「すまない…私が言えることではなかつたな。少し風に当たってる」

ミーナが次の言葉を発する前に坂本は背を向けて去っていく。

一人残されたミーナ。彼女は坂本のいた場所を見つめたまま立ち尽くしていた。

★



(私のせいだ…私があの時ネウロイを撃たなかったせいでソーマさんが)

宮藤は自らに対して嫌悪と言っている感情を抱いていた。

緊急着陸した砂浜と基地の医療室で宮藤は必死にソーマの手当をした。

魔法力と体力、精神が持つ限界まで。いや限界を越えても治療を続けた。

その宮藤の頑張りの甲斐もあってかソーマの傷は回復し、一命も取り止めた。

だがそのことに安堵する間もなく宮藤はミーナと坂本に執務室に呼び出され、独断行動の責任として自室で謹慎を命じられた。

一人ソファに座って悩む宮藤。彼女を

「ひゃう!?!」

ひんやりとした冷たい感触が頬を襲い、宮藤はつい間の抜けた声を出してしまう。

「へっへー、どうだ。少しは落ち着いたらろ」

「エイラさん、サーニヤちゃん」

思考を中断させて振り向くと水の入ったグラスを持ったエイラと心配そうな眼差しで宮藤を見るサーニヤがいた。

「ほら、今日ずっと魔法使って疲れてるだろ。飲めよ」

「あ、ありがとうございます。エイラさん」

差し出されたグラスを受け取る宮藤。

エイラとサーニヤは彼女を挟むように左右分かれて座る。

「大丈夫? 芳佳ちゃん?」

「うん。私は平気。だけど…ソーマさんは。私のせいで。私があの時ネウロイを撃たなかったから」

「芳佳ちゃん、自分を責めないで」

「そりゃ宮藤が気にするのは無理ないけどさ、ソーマは助かったわけだしそこまで落ち込むことないって。ソーマだってたぶん気にするなって言うと思うぞ」

後悔に苛まれる宮藤へサーニヤとエイラは元気づけようとする。

だが宮藤の表情が晴れることはなかった。

(こりや思った以上に重症だナ)

ソーマが負傷した経緯をエイラは現場を見ていた他の隊員から聞いて知っていた。

ソーマが人型ネウロイの攻撃から坂本を庇って負傷したことも、その人型ネウロイを宮藤が撃たなかったことも

だから宮藤が責任を感じるのも無理はないと思う。しかしいつまでも暗い顔をする宮藤でいて欲しくないとも思った。

宮藤がこんな調子では背中が痒いし何よりサーニヤまでもが暗い顔をしてしまう。

「そんなに気になるなら直接本人に聞いてみたらどうだ？」

「えっ？」

「さつきミーナ中佐が医務室の方から出てくるのを見たからきつとも意識が戻ってるはずだ。ソーマに謝って宮藤が今抱えてるモヤモヤを取っちまえよ」

「私もそうした方がいいと思う。その方が芳佳ちゃんとソーマさん、お互いのためにもなるよ」

「そうだね。私行ってくるよ。ありがとう、サーニヤちゃん、エイラさん」

二人に感謝を告げて宮藤はその場を後にする。思い立ったら即行動、彼女らしさを感じさせる後ろ姿をエイラとサーニヤは見送った。

「芳佳ちゃん、ちよつとだけいつもの芳佳ちゃんに戻ったね」

「やつぱ宮藤はああいう感じじゃないとな。じゃないとこつちまで調子が狂っちまうよ。全く手間のかかる奴だナ」

「やれやれと言った感じで立ち上がり、ぼやくエイラ。そんな彼女を見上げてサーニヤはクスリと笑みを溢した。

「なんだよサーニヤ」

「芳佳ちゃんを元気づけようって最初に言い出したのエイラだから」

「べ、別にあいつのためなんかじゃ…宮藤が元気ないとサーニヤが悲しむかなってだけで別にあいつのことなんてなんとも、いやなんともってわけでもないけど…」

恥じることもないのに必死になって誤魔化そうとするエイラ。  
素直になれない仲間思いな彼女の姿にサーニヤの表情にまた笑みが  
生まれた。

## 第二十輪 動揺のTurn Over

ミーナが去った後の医務室

「エクステンジの指輪もない…あの時に壊れたのか。結構使い勝手のいい指輪だったんだけどな」

窓から差し込む陽光に照らされたベッドの上で胡坐をかいているソーマが残念そうに呟く。

彼の見下ろす視線の先にはウィザードの各スタイルへの変身するための指輪と戦闘やそれ以外の状況で使用する指輪と彼が持っている全ての指輪が置かれている。

「ん？」

ドアをノックする音に反応してソーマが顔を上げる。

「起きてますか？ソーマさん。私です、宮藤です。入ってもいいですか？」

「宮藤か。いいぞ、入ってきて」

ソーマがそう言うのと宮藤が中に入ってくる。中に入ったドアノブを手放しドアを閉まったのを背中越しに音で確認すると、ベッドの側まで歩み寄る。

心配・不安・罪悪感…複数の混濁した感情がありありと顔に出ていた。

「ソーマさん、あの、具合はどうですか？」

「平気だよ。さつきまでぐっすり寝れたし気分もばっちりいい感じだ。宮藤が治療してくれたんだよな、ありがとう」

心配するも宮藤に対しソーマは笑顔で受け答える。安堵させるように向けられたその笑顔を前に宮藤は勢いよく頭を下げた。

「ごめんなさい！」

「どうした？」

「私がすっかりしてなかったせいでソーマさんに怪我を」

「頭上げるよ。俺のことは気にしなくていいから」

「でも」

宮藤が顔を上げる。今にも泣きそうな顔をしている。

「俺が負傷したのが宮藤のせいだったとしても俺の体がここまで回復したのも宮藤のおかげだ。それでもうこの話は終わり、俺のことで気に病むな。これ以上気に病まれたらかえってそっちの方が辛いからさ」

「はい、わかりました」

「ただ一つだけ聞かせてくれ。なんであの時あのネウロイを攻撃しなかったんだ？」

坂本を庇った直前の光景を思い出してソーマが問いかける。宮藤は恐る恐るといった様子で答えを出し絞る。

「わかりあえる気がしたんですネウロイと。あのネウロイは私に近づいても攻撃してこなくて、何か伝えたいことがあったように思えて、いつものネウロイとはどこか違って」

「それで銃を向けなかったってわけか」

確かにソーマの目から見ても人型ネウロイは今まで相對してきたネウロイとは異様な存在に思えた。

坂本に攻撃をしかけたと言っても先に手を出したのは坂本の方であり、それまでは坂本に対しても宮藤に対しても危害を加えるような素振りは見られなかった。

「ネウロイと分かり合う、か」

「やっぱりおかしいですよね。さつきバルクホルンさんにも言われちゃいました。ネウロイと分かり合えるはずがない、お前は違いがわかるほど戦ったのかって」

「それでお前は納得したのか？」

「えっ？」

思いがけないソーマの言葉に宮藤は驚いた顔をする。

「他人の意見も大事だけどどうしても納得できないなら自分の感じたことを正しいと信じて進んだ方がいい。そうした方が案外それが正しいって時もあるからな。たぶん：お前自身はどうなんだ？今何がしたい？」

「私は…」

ソーマに問われて宮藤は俯き、膝の上に置いた両手を見る。

「もう一度確かめたいです。あのネウロイのこと」

「そっか」

顔を上げてはつきりそう口にした宮藤。部屋に入ってきた時とは打って変わって揺るぎない力強さを宿した顔つきにソーマは満足気に微笑んで、ベッドの上からクラークの指輪を手に取る。

『クラークン、プリーズ！』

「うわあ!？」

指輪から変形し自分の頬の真横に寄って来た黄色いイカに戸惑いの声を上げる宮藤。

「なんですかこれ」

「ウィッチで言うところの使い魔みたいなもんだ。あのネウロイを探すならこいつも一緒に連れて行ってくれ。ミーナ中佐から聞いた話を考えるにネウロイが俺の指輪、水属性の力を秘めた指輪を持つていた可能性は高い。だったらそいつが役に立つ」

「水の指輪…じゃあもしかしてネウロイは」

「水中を移動できるようになっているはずだ。水中の探索はこいつ、宮藤は空、分担して探すのがいいと思う」

積極的に協力してくれる姿勢を見せてくれるソーマ。

宮藤は宙に漂うクラークを花びらを包むように合わせた両手の掌に向かい入れると

「ありがとうございますソーマさん」

礼を告げて医務室を飛び出して行く。

ソーマは宮藤のいた空間に目を向けていた。その姿が見えなくなっても、ドタドタと鳴っていた足音が聞こえなくなっても

「…頼んだぞ宮藤」

★

医務室を出たその足で一直線に格納庫へ赴いた宮藤は迷わずストライカーユニットに足を通した。

一点の曇りのない眼差しで滑走路を見据え、飛び立とうとした時「芳佳ちゃん！」

他に誰もいないはずの格納庫に響いた声に行動を中断させられた。宮藤がそちらを見るとリーネが不安そうな目で見つめていた。

「リーネちゃん」

「芳佳ちゃん、今度は本当に謹慎だけじゃすまないよ」

「うん、でもそれでも行きたいの。知りたいことがあるから」

謹慎を命じられている中での出撃。しかも仲間が被弾する原因を作った敵との接触のための行動となれば今度こそ只では終わらない。坂本やバルクホルン辺りは言わずもがな、平静さを保っていたミーナもおそらく怒りを見せるに違いない

リーネの心配が杞憂にならないことは軍歴の浅い宮藤でも想像するのは難くなかった。

だが宮藤は引き下がらない。

「どうしても行くんだね」

宮藤の言葉にリーネも覚悟を決めた。

「だったら私も行くー！」

「ダメ！…ダメだよリーネちゃん」

「どうして？私じゃ頼りない？」

「そうじゃないの。これは私が決めたことだから私一人でやらないといけないの」

ついでにこうとするリーネの申し出を拒む宮藤。彼女と見つめ合うことしばらく、リーネは彼女の意志を尊重することを決めた。

「ごめんね」

「ううん、芳佳ちゃんがそう言うなら私はもう止めないよ。私待つてるから、ちゃんと帰ってきてね」

「リーネちゃん、ありがとう」

罪悪感を込めた笑顔でリーネに言う宮藤は振り返ってストライカーに魔力を注ぐ。

格納庫の床に浮かぶ魔法陣。

クラーケンを掌に包み込んで宮藤はストライカーで漆黒の空に飛び立つ。

「気を付けてね」

どうかせめて無事であつて欲しい。リーネはそう願つた。

☆

「宮藤が脱走だ?!」

空に暗がり満ちて数時間経つた夜。宮藤のストライカーがなくなっていることに気づいた整備士の報告を受けたミーナは凜々しい顔つきを強張らせ、坂本を除いたウィッチたちの前で告げた。

「おそらく宮藤さんはネウロイとの接触に向かったのだと思われます。貴方たちにはただちに出撃。宮藤さんの後を追つて彼女をつれ戻してもらいます」

「あつちやくやつてくれたな宮藤の奴」

「謹慎の身であるというのに、なんとという真似を」

気楽な調子のシャーリーを余所に愚かなことをと、バルクホルンが呟く。しかし言葉に反して表情から不安と心配が見て取れる。

「連れ戻してその後はどうするんだ?さすがに今度という今度はお咎めなしってわけにはいかないだろ」

「もしかしてウィッチーズ隊を外されちゃうんじゃない」

エイラとサーニヤも宮藤の今後を案じてミーナに問う。

謹慎処分を下されている中での無断出撃。しかもその動機が仲間を負傷させた敵とのコンタクトとなればミーナの寛大さと立場をもつてしても限界がある。

よくて除隊、最悪は…

「司令部からは宮藤さんの撃墜許可が降りています」

「撃墜?!」

想像よりもはるかに深刻な命令にバルクホルンは思わず椅子から腰を上げる。

「それを避けるためにも宮藤さんを一刻早く連れ戻さなくてはならないわ。皆、すぐに出撃の準備を」

★



バルクホルンたちが宮藤の脱走を知らされている頃、ソーマのいる医務室を訪れる者が一人。

「私だ。入るぞ」

その客人、坂本はドアをノックしてソーマからの返事を待たずに部屋へと入ってくる。

入って来た坂本にソーマは目を向ける。

彼女の表情はいつも通りに見えるが、微かに違いがある。

どこがどう違うのか、それを言葉にして上手く言い表すことはできないが何故そんな顔をしているのかという理由に関してはすぐにはわかった。

「本来であればまず謝罪をせねばならないところだがそれよりも確認したいことがある」

「確認？」

何を？とソーマが訊ねようと口を開こうとする。が、それよりも早く坂本は二の句を告げた。

「宮藤が脱走した。焚き付けたのはお前だな」

咎めるように細められた坂本の目付きが突き刺さる。

それに対してソーマは目を反らす。

「その方が都合がよかったんだ」

「都合だと？」

「坂本少佐、少しの間俺に付き合ってくれないか」

★

日が昇り始めた。

水平線の向こうに上がり出した朝日の光を目と肌で感じつつ、宮藤はどこにいてもわからない相手の姿を求めてストライカーを吹かしていた。

(どこにいても…お願い、出てきて)

敵である存在との遭遇を心から祈る宮藤。

そうして空を飛行すること数分、水中を探索していたクラークンが宮藤の顔に寄り添うように移動してきた。

「見つけたの？案内して」

言葉に従って宮藤を導くように先を行くクラークン。

彼(?)の誘導の元ストライカーで移動しているとふとクラークンが下降し、海の中に小さな身を沈めた。

「もしかして海の中にいるの？」

ソーマの言葉を思い出して呟く宮藤。

すると海面から上がってきた。黒い少女のような体格をし、胸に赤と青の混ざった輝きを放つ石を持ったネウロイが。

「間違いない、この間のネウロイ！」

その姿を捉えた宮藤は声を上げる。一方のネウロイは宮藤に反応を示すかのように体を向けると一転、背を向けて遠ざかってしまう。

「あ、待ってー！」

追いつがる宮藤。寄り添って来たクラークンをポケットにしまいながら見失いようネウロイに注意を集中させる。

だがネウロイが彼女に攻撃することはなく、むしろ宮藤を案内するようなゆったりとした速さで飛行している。

(私をどこかに連れていこうとしている?)

前回と同じように敵対する関係であるはずの存在の行動に戸惑う宮藤。

しかしそれでいながらもついていくとやがて青い空を埋め尽くすかのように広がっている城のような大きな黒い物体を目にする。

「何あれ？」

それはネウロイの巣。ガリアにネウロイが蔓延っている原因であり、これの撃墜は501部隊引いてはペリーヌの悲願でもある。

だが宮藤はこれまで巣を見たこともなければ聞いたこともない。故に今自分の目前にあるのがネウロイの巣であることに気付けなかった。

「いた！宮藤！」

そこへ宮藤を追って来たハルトマンたちが到着する。そして巨大な巣を見て顔色を変える。

「あのでっかいの何!？」

「あれはネウロイの巣だ。前に見たことがある。あそこから奴らが出てくるんだ」

初めて目撃したのであろうルツキーニにバルクホルンが説明する。

「おいあれ！宮藤が」

「中に入っちゃった…」

エイラとハルトマンたちの前で宮藤はどういうことかネウロイに誘われるように巣の中へと姿を消してしまった。

「芳佳！」

「宮藤！」

「待って」

ルツキーニとバルクホルンが彼女の名を叫び、巣の中へ突入しようとするがそれを諫める声の一つ。

ミーナだ。

「ミーナ、何故止める！」

「様子を見ましょう」

「くつ、了解した」

下手に突っ込むのはまずいと判断してかミーナは静観に出る。

暗雲に浮かぶ巣の中で何が起きているのか、それを知る術は彼女たちにはなかった。

外がそんな状況にあるとはこれっぽちも知らない宮藤はネウロイの巣の内部、コアの存在する空間の中で思いがけないものを目撃していた。

「これは…」

空間内の壁面にはネウロイの手によって様々な映像が映し出された。

燃える街の上をビームを放ちながら浮遊するネウロイ、崩れていく

建物や爆風から逃れる人々、銃を手に微力ながらもネウロイに抗う兵士たち：人類とネウロイ、過去から現在に至るまでに繰り返されてきた戦いの光景を宮藤はネウロイの巢の中で見ていた否、見せられていた。

「人とネウロイの戦い？どうしてこれを私に」

その疑問に対して自分をここまで連れてきた人型ネウロイからは何の返事も無い。

何かしらのメッセージをネウロイは自分に伝えたいのだろうか。そんなことを考えながら映像に注目していると映像が切り替わる。

今度は戦いの場面ではなく、人間の手によって建造されたどこかの建物内にある部屋、それも実験室と思われる設備がある空間が映っていた。

カプセルの中に収められたネウロイのコア、ケーブルに繋がれた機械、そして十個はあるであろう片手で持てる程度の大きさの道具。

その道具を見て宮藤は大きく目を見開いた。

「ソーマさんのベルト？…いっぱいある」

表面にある人間の手を模した特徴的なデザイン。日々見慣れてきたのもあつてか宮藤はすぐに見当が付いた。

魔法<sup>魔</sup>使い<sup>法</sup>のウイザード<sup>い</sup>への変身を可能とさせるベルトだ。

だが何故ネウロイが見せる映像の中にソーマの身に着けているベルトがいくつもあるのか。

「…」

情報の洪水を一気に浴びせられて思考が止まり、どう反応すればいいのか宮藤は判断に困ってしまう。

助けを求めて思わず人型ネウロイを見ると、じつとこちらを見つめたまま佇んでいる。

宮藤は手を伸ばす。数泊遅れてネウロイも同じく手を上げる。

手を交わすまでほんの数センチ、もしかすると歴史的な和解の象徴となる一歩となるかもしれない。

そんな淡い期待を心のどこかで宮藤が抱いた時ネウロイが突然消えてしまった。

「えっ？どこに行つたの？ねえ！ねえってば！」

ネウロイへ呼びかけ、周りを探すが求める姿は影も形もなかった。虚しく一人となった空間に声が反響するだけだ。

「ネウロイが出てきた！」

「芳佳ちゃんは…まだ中にいる」

巣の中から出てきたネウロイを視認し、エイラとサーニヤが反応する。

「やはり罠だったか」

「とつととやっつけて宮藤を助けないと」

バルクホルンとハルトマンが銃を手に接近しようとした時二人の間を大きな影が目にもとまらぬ速さで駆け抜けた。

「なんだ今のは!？」

バルクホルンたちを追い抜いたのは高速で大型の戦闘機のような物体。人型ネウロイに向かってしながら接近先頭部分から機銃を撃ち放つ。

銃弾の雨を受けた人型ネウロイは着弾によって生じた煙に隠れ、その横を旋回した物体は人型ネウロイとの距離を取ると脚を展開した形態に変形する。

「変形した…あれは一体なんなんですよ」

ネウロイ以上の未知の存在に戸惑うたちペリーヌたち。その彼女たちを更なるサプライズが襲う。

『アロー、ナウ』

後十数の光の矢が飛来し、ネウロイの巣に着弾。接触箇所を立て続けに爆発が巻き起こる。

「また何か来た！」

「今の攻撃ってソーマ？」

低音の音声だったが魔法が発動する直前で音声が鳴るのは彼以外にありえない。ソーマが駆けつけてきたのだろうか。

そう思つて振り向いたルッキーニの視線の先には箒に乗った十三人の人影。

翡翠色のゴツゴツとした宝石をモチーフにした顔面、ページユのボディの肩部分から突き出した顔と同じ色の宝石、ウィザードに似ているがところどころ異なる魔法使いたちがそこにはいた。

「違う、ソーマじゃない！なんだあいつら！」

「各員散開！ウォーロックの支援をしつつ巢と人型ネウロイへの攻撃を実行せよ！」

「了解！」

ウィザードではないと断定するシャーリーの前で隊長格と思われる魔法使いが指示を出し、全ての魔法使いたちが左右にばらける。

『アロー、ナウ！』

『ブラスト、ナウ！』

魔法使いたちはウィザードと同じように手に填めた指輪をベルトにかざして魔法を発動させる。

各魔法使いたちの掌に展開された魔法陣から飛び出した光の矢と竜巻がネウロイの巢の表面で爆発し、回避を行っていた人型ネウロイにも何発か着弾する。

「すごい…」

「関心している場合ではない。私たちもいくぞ！」

ネウロイを追い立てる魔法使いたちの戦いに素直な感想をこぼすリーネの横でバルクホルンも戦いに加わろうとする。

だがそんな彼女たちへいつの間にか近づいていた隊長格と思われる魔法使いが制止の言葉をかけた。

「手を出さないでいただけますでしょうか。これは我々の戦いです、貴女方ウィッチの出る幕はありません」

「なんだって？いきなり出てきて急に何言ってるんだよ」

「そもそもお前たちはどこの所属だ。誰の命令でここに来ている」

魔法使いの言葉にエイラとバルクホルンは反感を示す。だが魔法使いからの言葉は返ってこない。

「おい、こちらの質問に——」

「答える義理はありません。貴女方との会話に必要性を感じません」  
「なんだと」

「落ち着きなつてトゥルーデ」

魔法使いの態度に怒りを感じ、くつてかかりかけたバルクホルンをハルトマンが窘める。

あわや一触即発の空気の両者を静観していたミーナは視線を戦いの方向へと変えた。

三人の魔法使いの人型ネウロイを光の矢で牽制し、よけた先を読んだ別の小隊が暴風の渦の中に封じ込め動きを止める。

魔法使いたちの尽力によって人型ネウロイと巣を同時に捉えらるる射線を確認した物体は脚の先に赤い光を収束させ、極太のビームとして放つ。

「赤いビーム!?!」

「あれもネウロイなの?」

ビームを発射した物体に戸惑うリーネとサーニヤ。ビームは人型ネウロイの全身を飲み込み、巣を貫通。

そこから更に物体はビームを上方向に移動させ、巣の壁を削つていく。。

「とんでもないビームだぞ」

「芳佳ちゃん!」

「宮藤さん!」

ネウロイの巣の壁にできた隙間から爆風に乗って落下する宮藤。巣の中でビーム攻撃による衝撃を間近で受けたせいかストライカーの制御が上手く取れずにいるようだ。

リーネとペリーヌがすぐに彼女の元に下降し、二人で肩を貸す形で体を支える。

「ん?」

その一方でエイラはネウロイであった白い破片に混じって青い光を反射させて落ちる何かに気付いた。

「よつと」

降下し海に落ちかけたそれを寸でのところで回収。再度上昇してサーニヤの隣に戻る。

「エイラ、何を見つけたの?」

「ああ、これ」

握っていた手を広げてエイラがサーニヤに見せたのはウォーター  
ウィザードリング。

人型ネウロイの手に渡っていたものだ。

「これってソーマさんの指輪よね」

「だよな。あのネウロイが持つてたってことか？とにかく後で返して  
やらないとな。これがなきやあいつも困るだろうし」

言いながらエイラはウォーターウィザードリングを胸元のポケッ  
トに収める。

「副隊長。人型ネウロイの消滅を確認しました。このまま巢への攻撃  
を続行しますか？」

「いや、今回はあくまでもウォーロックの試運転にすぎない。基地に  
戻るぞ」

「待つてください。貴方方は一体」

「言ったでしょう。貴女たちとの会話に意味はないと。ウィッチなど  
という得体の知れない存在である貴女たちとはね」

ミーナは魔法使いたちに素性を聞き出そうとするが、案の定とい  
うべきか隊長格の魔法使いは聞く耳を持たず隊を引き連れて飛び去  
ってしまう。

「あの言い方腹立つー！なんなのあいつら！」

「基地に戻るって言ってましたけどあの方向、もしかして私たちと同  
じ」

彼らの言動が気に入らなかつたのかルツキーニはそんな言葉を水  
平線の彼方へ消えていく背中に投げつけ、リーネはその進路に眉を潜  
める。

「私たちも戻りましょう。確かめないといけないことがあるわ」



ミーナたちが基地に戻ると滑走路に多数の人影があつた。ミーナ  
たちの到着を待っていたようだ。



「誰かいるね」

「さっきの兵器と魔法使いと他にも誰かいるみたいだ」

人型に変形した兵器に魔法使いたちに兵士：彼らが道を譲るように空けた間から進み出てきた人物を見て整った顔を歪めたミーナは着陸し、その人物と相対する。

残る501部隊も順に滑走路に着地すると兵士たちは彼女たちに銃口を突き付ける。

味方であるはずの彼らが取った行動に皆驚くが、唯一ミーナだけは威圧を込めた目で相手を見た。

「まるでクーデターですね。マロニー大将」

「命令に基づく正式な配置転換だよミーナ中佐。この基地はこれより私の配下である第一特殊強襲部隊ウォーロックと彼らメイジ部隊が引き継ぐことになる」

「ウォーロック？」

「メイジ部隊だって？」

兵士の先頭、ミーナの正面に立つマロニーの発した単語にバルクホルンとハルトマンはそれぞれ視線を人型の機械と魔法使いたちへと移す。

二人の視線の動きに気付いたマロニーは得意げに口元を緩めると、宮藤の前へと歩み寄った。

「君が宮藤軍曹か」

「はい……」

「君は軍規に背いて脱走した。そうだな？」

「…軍規」

自らの犯した行いの意味を知らされた宮藤はそう呟く。何か返す言葉を探そうと視線を横に向けた時、視界に映ったウォーロックを見て声を上げた。

「あっ！その後ろの？」

「ウォーロックのことかね」

「私見ました。それがネウロイと同じ部屋で、実験室のような部屋で…それにソーマさんやあの人たちが付けてるベルトもそこにあって」

「何を言い出すんだね君は！」

誇らしげに満ちていたマロニーの表情が激しく変わって狼狽になった。あからさまのその変化に違和感を持つ者は多かった。

「質問に答えたまえ！君は脱走した。そうだな!？」

「はい…でも…」

「中佐、私は撃墜を命じたはずだ」

「はい、ですが…」

「隊員は脱走を企てる。それを追うべき上官も司令部からの命令を守らない。まったく残念だ」

宮藤の言葉もミーナの言葉も退けてマロニーは次の瞬間、ストライクウィッチーズの面々たちにとって衝撃の一言を投下する。

「本日、只今をもって第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズは解散とする！各隊員は速やかに原隊に戻り、現地での任務を全うせよ。以上だ」

「待つてくださいまし！そんないくらなんでも」

「上官といえでもこんな強引すぎる！」

ウィッチーズへの気遣いなど微塵も考えていないマロニーへペリーヌとバルクホルンが異を唱える。

そんな時だった。

『バインド、プリーズ！』

滑走路路上に出現した魔法陣から鎖が飛び出し各ウィッチたちを腕ごと巻き込んで拘束したのは。

「きゃあー！」

「こんの、あの魔法使いたちの仕業か！」

「いや、さっきの音声…まさか！」

驚くりーネとメイジたちへ怒りの視線をぶつけるエイラ。

その中でバルクホルンはあることに気付いた。

先の戦闘の際メイジたちの魔法が発動する音声は低音の『ナウ』、しかし今聞こえてきたのは高音の『プリーズ』。

その音声で魔法を発動させる人物をバルクホルンは一人しか知らない。

どうか間違いであってほしいと願う彼女だったが、何度も聞いてきた音を間違えるはずもなかった。

そしてその願いを踏みにじるかのように

「よっ、おかえり」

メイジたちの奥からまさにバルクホルンが思い描いた人物――ソーマが右手を上げ、場違いな程の満面の笑みを浮かべて歩いて来た。

## 第二十一輪 さまよいのFriendship

「ソーマ、さん？」

メイジと兵士たちの合間を通ってマロニーの横に並ぶソーマ。自分たちが拘束され、銃を向けている状況に顔色一つ変えず、当たり前のようにマロニーの側に立った彼を宮藤たちは信じられないような目で見る。

「ああ、紹介しよう、彼はメイジ部隊の隊長を務めるソーマ・スペランツァ大尉。私の忠実な片腕だ」

宮藤たちの驚く顔を待ち望んでいたかのように思える笑みを浮かべてマロニーは言う。

「嘘ですよソーマさん…そんなの。だって私に言ってくれたじゃないですか。自分を信じろって」

でたらめに決まってる。つい先日だって坂本を身を挺して守って、落ち込んで悩む自分にも寄り添って温かい言葉を送ってくれた。

なのに裏切るなんてありえない。そう自分に言い聞かせ問いかける宮藤だが、ソーマは無言で眺めているばかり。

マロニーの言葉への否定も、宮藤の言葉への肯定もない。

「なんで黙ってるんですか…？何か言ってください…本当に、本当に裏切ったんですか！」

「本当だよ」

愕然とする宮藤。彼女だけでないリーネもペリーヌもサーニヤも、彼を信じていたほとんどの者がショックを受けた。

「おいおい、そんな顔するなよ。こう見えて俺だって心苦しいんだ」  
そんな彼女たち一人一人の顔を見渡しておどけるようにわざとらしく手を上げて言うソーマ。たった数時間顔を合わせなかっただけなのにまるで別人のように思える変貌を遂げた彼にエイラは思いの丈をぶつける。

「なんだよそれ、嘘だったってことかよ。今までのこと全部…サーニヤと宮藤の誕生日を祝ってくれたじゃないか！あれも芝居で本心じゃなかったってことなのかよ！」

「嘘、か…別に嘘ってわけでもないさ。その時にしても純粹に祝いたい気持ちでの行為だったし、仲間のために悩んで励まし合って頑張るお前たちを見て『ああ、こんないい奴らをこれから裏切るのか』って胸が痛むこともあったよ…ただお前たちよりもこっちを優先した。それだけの話だ…ああ、それと一つ言っておくと裏切りって言い方は少し適切じゃあない。ここに来る前から俺はこっち側の人間だし、お前たちを本気で仲間だなんて思ったことは一度もない」

語る内容に反して罪悪感を感じているとは思えない程清々しい顔。何もかも愚弄するソーマの態度に感情を爆発させかけている者がいた。

「ふざけるな…」

誰かがそう呟いた。同時にミシミシ、と鎖が軋む音が聞こえ、そこらを見ると魔法力を発動させたバルクホルンが鎖を裂こうとしていた。

「ふざけるなあ!!」

「バルクホルンさん!」

「バルクホルン!?!」

「おおお…」

怒号と共に鎖は弾け飛び、バルクホルンは戒めを脱する。

魔法で強化されているとはいえ鎖を腕力で破壊したことにマロニー側の人間だけでなく宮藤たちも驚き、兵士たちは狼狽えながらバルクホルンに銃口を集中させる。

だがバルクホルンの目は自分に向けられている銃口にはまるで目もくれずただ一点を、ソーマだけを見ている。

「そんなに気にくわれないなら確かめてみるか。ウィッチであるお前とウィザードである俺、どっちが人類のためになるか。今ここで」

「望むところだ」

『ドライバーオン、プリーズ』

闘志をたぎらせた瞳で睨むバルクホルンの前に立ちソーマはウィザードドライバーを出現させる。

これから一戦交えよう、二人の間にはその意志が視線で飛び交って

いた。

「馬鹿馬鹿しい。隊長、そのようなお遊びは程々に―」

「いいだろう、やりたまえ」

「マロニー大将?!」

二人で勝手に決めるな、と言わんばかりに副隊長格のメイジが口を挟むが意外にもマロニーは容認した。

「今日まで君たちがガリアの奪還のために尽力してきたのも事実、このまま無下にするのも私としても心証が悪い。バルクホルン大尉とスペランツア大尉による実戦形式の模擬戦を行い、その結果で決めようじゃないか。バルクホルン大尉が勝てばこの話は白紙、501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズは現任務を続行し我々は退散する。しかしスペランツア大尉が勝てば大人しく我々の命令に従ってもらう。それでいいかね」

「構いません」

「俺もいいですよ。どの道結果は変わりませんし」

自分の勝ちだと暗に言っているソーマの言葉にバルクホルンは内なる憤りを強める。

もし身体にダメージを与える力がこもっていたら穴が空いてそうな程の力強い視線をバルクホルンから感じるソーマだが、それを受けなくてもやはりその顔は涼しい顔のままだった。

MG42を二丁持ったバルクホルンとウイザーソードガンを持ったウイザードハリケーンスタイル。

模擬戦の準備を終えた二人は滑走路から数キロ離れた空の上で睨みを聞かせていた。

「改めて確認するが本気なのか？」

「いつだって俺は本気のもりさ。信じられないかもしれないけど」

「…」  
マロニーたちに声の届かない空なら本当のことを話してくれるとバルクホルンは考えていた。

何かしらの事情があつて彼らを欺くために芝居を打っているのだ

と。

けれども答えは変わらなかった。

「見損なつたぞ。いつもいい加減なことを言つてはいるが、平和を望む心は仲間を思いやる気持ちだけは本物だと信じていた…尊敬していたんだ私は。なのに、なのにお前は！」

初めはお気楽な奴だと思つていた。だが窮地を助けられ、近くで彼の行動を見て人柄に触れていく中で理解できていたような気がした。ハルトマンやシャーリーのように樂觀的な言動は目立つものの、戦いや仲間に関する思いは自分とおなじ、いや自分以上の持ち主である。

だがどうやら自分の目が節穴だったようだ。その評価は見当違いだったのだ。

無言で宙に佇む両者。滑走路から開戦を知らせる空砲が鳴った。

『チョーイイネ、シューティングストライク！サイコー！』

「っ！」

と同時に動いたのはウイザード。銃身を引き起こし、バルクホルンに向けて風の弾丸を放つ。

バルクホルンは上昇して回避。ウイザードもその後を追いかけるべく風の力で舞い上がる。

「いきなりか！」

バルクホルンは反転して引き金を引き、迎撃する。

ウイザードは弾幕を回避しながらウイザードソードガンで撃ち返す。

変身を解いたメイジの一人、副隊長を務めるリベリオン軍人のエリック・ラングウェイは遠く離れた戦いの様子を見ながらマロニーに問うた。

「よろしかったのですか？あのような勝手を認めてしまつて」

「構わんよ、魔法使いの優位性を証明する絶好の機会。ましてやカールスラントが誇るエースが相手となれば世間にこの上ない宣伝となるからね」

難色を顔に示すエリックと違ってマロニーからすればむしろこの展開を好意的に受け取っていた。

それはエリックに言った言葉もだが、マロニーはウィザードの勝利に確固たる自信を持っているためでもある。

「いつけー！そこだ！やっちゃえバルクホルンー！」

ウィザードの攻撃を回避していくバルクホルンにルツキーニの声援が飛び、同じく二人の戦いを見守っていたミーナたちは困惑を抱えていた。

「中佐、中佐はこの勝負どう見る？」

「総合的に考えるとバルクホルン大尉が勝つ要因の方が多い。でもまだどう転ぶかわからないわ。相手が相手なもの」

「…だよな」

シャーリーからの質問にミーナはそう意見を述べた。

今現在ウィザードは動き回り、指輪を使う暇を与えようとしないうバルクホルンに翻弄されているように見えた。

経験・技量・思考、バルクホルンが数多くの実戦で培ってきたもの全てを活用すればウィザードが劣勢に追い込まれてしまうのはある意味当然の結果だ。

だが油断はできない。ネウロイと違って相手は文字通り手を変え品を変え、戦局に対応する魔法使い。

最後の最後まで何があるかわからない。

「そういえば坂本少佐…」

戦いから目を反らしたペリーヌは自分たちの側にもマロニー側にも敬愛する上官の姿がないことに気付く。

一体どこに消えたのか、辺りを見渡して探すもその姿は影も形もなかった。

(さあ、ここからどうでる)

四方から迫る風の鎖を巧みな機動でかわし、射撃を行いながらバルクホルンもミーナと同じことを考えていた。

自分が上回っている面が多いのは彼女もわかっている。だがウィザードには多彩な魔法という他の誰にもない持ち味がある。それを



発揮されてしまえば、形勢があつという間に逆転してしまう恐れは充分にありうる。

だからこそバルクホルンはウイザードからなるべく離れず、指輪を使う隙を与えぬよう攻撃の手を緩めないような戦い方に徹していた。「嫌な戦い方するな…さすが、見事なまでに俺の弱点をわかつてる」

そのバルクホルンの狙いにウイザードも気付いていた。

距離を取ろうとしても追いかけてくるし、射撃や魔法で怯ませようにも彼女は回避と同じ動作でこちらに接近、牽制してくる。そのせいでホルダーを見て適切な指輪を取る余裕もない。

そしてウイザーソードガンを持つ手を狙撃され、たたでさえ少ない攻撃オプシオンを手放してしまう。

「つてえー…大口叩かない方がよかったかなこれは」

不利な状況の中でウイザードが軽口を叩く。

彼の目には接近するバルクホルン。彼女は両腕に持った武器を放り投げ、拳を作ると

「目を覚ませえ!!」

「っ!!」

魔法力を込めた渾身のストレートが緑色に輝く横っ面に叩き込まれる。

「なんだと!?!」

「殴ったあ!?!」

「マジかよ…」

武器を捨て、素手で殴りかかった。これには滑走路で眺めていた者たちの敵味方の隔てなくどよめきが走った。

肝心の殴られたウイザードは右手で伸びきったバルクホルンの腕を掴み、自身の腕と腰の間に挟み込んで捕獲する。

「しまったー!」

頭に血が昇っていたせいで己の失態に気付くバルクホルンだがこの時にはもう遅い。

空いたもう片方の手でホルダーから抜き取った該当の指輪を強引にバルクホルンの指にはめると、彼女の手をベルトにかざした。

『スリーブ、プリーズ！』

「うっあ……」

魔法が発動して間もなく、強烈な睡魔に襲われるバルクホルン。だが卓越した精神力故か、彼女は魔法の効力に抗っていた。

「まだだ、ここで私が負けるわけには……いかな……」

耐えていたバルクホルンだったが目を閉じて項垂れる。

力を失くしたその体を落ちないようにウイザードが抱留めた。

「……めんな」

遅しき眠り姫の目尻にたまった涙にウイザードはそう謝罪した。

瞬間、勝敗は決した。

「これで勝敗は決定したね」

「ずるいよあんなの！卑怯じゃん！」

「そうです、やり直しを要求しますわ！」

冷や汗をかいた気分になりながらも勝利を宣言するマロニーだが、その横からハルトマンとペリーヌが猛烈な異議を唱える。

無理もない、とても真つ当な決着の付き方ではないとマロニーですら思っていたのだから。

「一方が戦えなくなつた時点で勝敗となる。その条件をバルクホルン大尉自身が飲んだ。これは正当な結果だよ」

だがマロニーにとって大事なのは結果だ。ウイザードがバルクホルン大尉を戦闘不能にしたという事実さえ確実ならば勝ち方など取るに足らない問題。

「さあ、ウイッチーズの諸君。ただちに準備をし、ここを去りたまえ。君たちの役目はもう終わったのだ」

醜悪、少なくとも宮藤たちウイッチにはそう見える笑いを浮かべてマロニーが宣告する。

そこに意識を失つたバルクホルンをお姫様抱つこで抱えたウイザードが帰還。

着地と同時に変身を解除すると、そっぽを向き口の中から何かを吐き出す。

滑走路に転がる赤い色の付着した歯。それを見るソーマの頬は赤く張れ、唇には血が滲んでいた。

## 第二十二輪 離れ行く仲間たち

完全にマロニーの手に落ちたブリタニア基地。海の上ではメイジたちが訓練に励んでいた。

ウィッチで言うところのストライカーの役割を担う魔法の箒ライドスクレイパーを操縦しながら海上に設置した的を箒を操縦しながら光の矢で狙い撃つ、という内容なのだが

『アロー！ナウ！』

「あつー！」

「どこを見ている！動かない的に満足に当てられないようでは実戦で使い物にならないぞー！」

「すみませんー！」

大多数が順調に成功していく中で一人のメイジが的から大きく矢を外す。

そのメイジに訓練を見守っていたエリックの怒号が飛ぶ。

同時刻の執務室のソファにソーマは座っていた。

頬に湿布を張る彼に声をかけるのはミーナ：ではなく、かつて彼女の座っていた立場と椅子を奪い取ったマロニーである。

「君の勝ちを信じていたとはいえ少々ヒヤリとしたよ。手酷くやられたね」

「まあ、大した怪我じゃないんで」

言いながらバルクホルンに殴られた頬にソーマは触れる。

まだ痛みが残っているのか、それとも消えていたのがマロニーによって蒸し返されたせいで痛みがぶり返したのか顔をしかめる。

「これでようやく私の目的が達成される。あのような小娘たちの力などなくてもネウロイどもを一網打尽にできることをウォーロックとメイジで証明するのだ」

「作戦は大丈夫ですかね。俺も加わった方が」

「ネウロイの巢の一つや二つ、ウォーロックと彼らで充分さ。それにここで結果を出してウォーロックとメイジの量産にこぎつける必要

もある」

「よっぽど自信がおありのようだ。」

マロニーの言葉を聞いてソーマは思った。

彼は元よりウィッチという存在とそれに頼らざる得ない現状に苛立ちと危機感を抱いていた。

だからこそウィッチに頼らず、ウィッチに変わる新たな力としてウォーロックとメイジの導入に躍起になっているのだ。

その偉大なる一歩として今回の巢の撃破はまさにアピールに打ってつけの機会といえよう。

「ああ、そうだ。君に贈り物があるんだ」

マロニーは足元に置いた黒いケースを机に置く。そのロックを外してソーマが開けると中には三つの指輪が入っていた。

「新しい指輪ですか」

一つはゴリラのような巨人の紋様の紫色をした指輪。もう一つは息を吐いているドラゴンの絵の指輪。

そして最後の一つは緑色の指輪。ハリケーンウィザードリングに似ているが細部に違いがある。

「ありがとうございます。マロニー大将」

「礼はいい。私からのプレゼントではないからな」

最後の指輪に目を奪われつつもソーマはスーツケースの指輪を全てポケットにしまう。

マロニーにとってはどの指輪が何の効力を秘めているのかわからない。というより興味はないが、自身の配下であるウィザードの戦力がアップするのは間違いないと踏んでいたため、さして指輪については言及せず別の話に切り替える。

というよりも彼にとってはこちらの方が重要だ。

「ところでウィッチーズ隊の方はどうだね」

「出発に向けて準備してるみたいですよ。誰も彼も渋々な様子でしたが」

「そうか、それはよかった」

その言葉にマロニーはほくそ笑む。

それを尻目にソーマは立ち上がり、扉に向かう。

「どこへいくんだね」

「最後までいきつちりお別れしとこうかと思ひましてね。一応、世話になったので」

顔だけ向けてドアノブに手をかける。

回してドアを開けようとしたその動作をマロニーの一声が止めた。

「まさか情が移ったのではあるまいね」

「ご心配なく。そのつもりならとつくのとうに裏切ってますよ」

「それもそうだな。失礼した、行つていいぞ」

刺された釘にそう答えたソーマは執務室を出る。扉が閉まり、一人となったマロニー。

彼はこれから訪れるであろう長らく待ち望んだ光景に思いを馳せ、今から興奮を抑えられずにはいられなかった。



「はあーあ、これからどうなるんだらうなあ」

「私たちはスオムスに行くんでしょ」

木材と一緒に貨物列車に運ばれるエイラとサーニヤ。

エイラとサーニヤ、二人はスオムスへ帰還することになった。

「そりやそうなんだけどさ、なんかパツとしないってかさ。モヤモヤするんだよな」

「ソーマさんのこと？それとも芳佳ちゃん？」

「んーどつちもかな。いや宮藤は宮藤でまあなんとかなんとかするだろうけど、ソーマは…あの時はああ言ったけどよく考えたらなんかあいつ無理してる感じだしってさ」

「うん、私も思う。すごく変わりすぎてて違和感があったわ」

エイラもサーニヤもソーマの急変ぶりには奇妙なものを感じた。彼は501としての自分が演技だったと言っていたがエイラとサーニヤにはむしろ逆、マロニーの仲間として振る舞っている彼の方が演技のように思えた。

「まあ、それも今まで見せてきた姿が嘘だつて言われたらどうしようもないんだけどな。あつ」

空を見上げ、遠く離れた仲間たちの顔を思い浮かべる。とそこで忘れていたことを思い出し、ポケットに手を入れる。

「参ったな。これ渡すのすつかり忘れてた」

ポケットからエイラが取り出したのはウォーターウイザードリング。会ってすぐソーマに渡そうと思っていたが多くの出来事が立て続けに起こったせいで、エイラの中で存在が消し飛んでいたものだ。

「どうしよう」

「どうしようって、それがないとソーマさん困るんじゃ」

「そうだよなあ…けどなあ」

相談したサーニヤからの返答にエイラは指輪を指で回しながら考え込む。

あんなことがあった手前、わざわざ渡しに戻るのもなんだかな…そんな悩みが顔に出ていた。

「戻るエイラ」

答えを出しかねているとサーニヤが提案する。

濃い付き合いからかエイラの表情から悩みを読み取ったのだ。

エイラは虚を突かれた様子でサーニヤを見た。

「ソーマさんにとつて大事な物だから返してあげないと」

「サーニヤ…そうだな。まったくサーニヤに手間かけさせやがって。渡すついでに一言文句言ってやるかな」

やれやれ、と言った口調でありながら多少乗り気なエイラ。

そんな彼女にサーニヤはまるで妹を見守る姉のような温かな微笑みを浮かべた。

「忘れ物はないか？ルツキーニ」

『グラマラスシャーリー』の文字がボディにつけられたオレンジの航空機。

この航空機の持ち主であるシャーリーもルツキーニと共にこの航空機で基地を離れ、新しい土地で新しい任務へと着こうとした。

「ねえ、本当に言う通りに離れちゃうの？」

「んー？しょうがないだろ。あれでも一応上官なんだし、命令は守らないと」

模範的な軍人からはシャーリーもルツキーニも対極とも言えるくらい離れた性格の持ち主であるが、基本的な心構えは理解していた。

いくら納得がいかないことがあるとしても一端の軍人ならば従うしかないのだ。

「そうそう、命令はきちんとして守らないとな」

そこに彼女たちを揶揄するような声。ソーマだった。

彼を目にした瞬間ルツキーニは『げえ』と、まずい食事でも食べたかのような顔をする。

「何しに来たの今更」

「見送りに来たんだよ。寂しいだろうと思つてな」

「ちーつともそんなことないよーだ！早く帰つてよー！」

「帰つてつて、それはそつちの方だろ」

自分を見た瞬間の顔といい、ストレートな物言いといい、なんとも子どもらしい裏のない素直な反応にソーマはつい苦笑してしまう。

「わかつたわかつた。いなくなるよ、じゃあまたな。元気でやれよー」

いよいよネコのように目付きだけで威嚇するようになったルツキーニに観念してソーマは手を振りながら背を向ける。

だが基地に戻ろうとしていた足を止める声が出た。

「なあ、お前。本気でやってるのか？」

その言葉に踏み出した足を止め、ソーマは首を向けると声の主シャーリーが操縦席からこちらを見つめていた。

いつになく真剣で試すような視線を寄越している。

「こう見えて俺は適当なこととはしない主義でね。今も昔もいつだって本気だよ…あ、そーだ」

ソーマがポケットから出した指輪を投げ渡す。片手でキャッチしたシャーリーが掌に落とすと。収まっていたのは紫の巨人の指輪だった。

「せめてもの餞別だ。大事に持つててくれよ」



去り際に軽く笑ってソーマは基地内に引つ込んでいく。暗がりに消えていく背中にルツキー二は舌を出す。

「いーだーもう早く離れちゃお、シャーリー」

「…ああ、そうだな。いくか」

せめてもの仕返しとばかりに可愛らしい反抗に出た少女はシャーリーに進言する。

彼女に返事をしながらシャーリーは渡された指輪をまじまじと見つめた。

段々と小さく、遠くなっていく基地。

高級車の後部座席に乗りながらリーネは名残惜しそうに少し前まで自分の居場所だった建物を見ていた。

（芳佳ちゃん…元気になってるかな。大丈夫かな）

他の仲間たちの今後も気になるが一番はやはり宮藤だった。

リーネにとって宮藤は消極的だった自分に自信をつけさせてくれた親友ともいえる大事な人。

今回の件で部隊の解散となった原因を作ってしまった責任を感じているだろうと思うと、気がかりでたまらなかった。

「どこにもいませんわ。坂本少佐、どこに行ってしまったのでしょうか」

運搬トラックの隣で静かに佇んでいる宮藤の近くでペリーヌがせわしなく辺りに目を走らせていた。

これから宮藤とペリーヌは陸路で港へと向かって扶桑への船旅をすることになる。

ペリーヌに関しては元より故郷が支配されている身の上であるため、どこに行くのかまだ定まっていけないのだが、行動が決まるまでの間は尊敬する坂本の元で行動しようと心に決めていた。

しかしその話を持ちかけようにも肝心の坂本がどこにもおらずペリーヌは途方に暮れていた。

「まーだこんなところにいたのか。お前たち」

「貴方、よく私たちの前に平然と顔を出せましたわね」

「他の奴らは皆離れたぞ。後はお前たちだけだ」

そこに姿を現すなり声をかけてきたソーマにペリーヌは厳しい目を向ける。

彼女も彼女なりにソーマを信じていただけに裏切った彼の態度に不満を持っているのだ。

一方で宮藤はペリーヌと異なる反応をした。何歩か前に出て、ソーマへと進み出たのだ。

手を伸ばせば体に触れることができる程度の距離まで近づいた宮藤はソーマと視線を合わせると頭を下げた。

「ソーマさん…今までありがとうございます」

「…」

「み、宮藤さん？」

この反応には意外だったのか、ソーマもペリーヌも虚を突かれたような表情になる。

しかし宮藤は構わず言葉を繋げていく。

「情けなくて未熟な私が今日までやってこれたのはソーマさんのおかげです」

「俺はお前たちを騙してきた人間だぞ。言っただろ、あの時の言葉だってお前が基地を離れてくれた方が都合がよかったから言っただけだ」

「そうなのかもしれませんが。でも、それでもあの時言ってくれたソーマさんの言葉は嬉しかったです。だから私、信じます。ソーマさんがどう思ったとしてもソーマさんは私たちの仲間で家族だって」

「宮藤さん…」

真つ直ぐで真摯な視線と言葉が突き刺さる。

宮藤に向き合っていたソーマだがやがて彼女に背を向けた。

「坂本少佐は一足先に赤城に向かった。お前たちも早く行け、乗り遅れても泊めてやる場所はないぞ」

それだけ言い残してソーマは踵を返し、基地内へと戻っていった。

宮藤とペリーヌにはどこか寂しく見えた。

ストライカーユニットの保管されている格納庫の入り口はマロニー派の兵士らの手によってH鋼で塞ぐ作業が行われていた。

そこに足を運んだエリックはまだH鋼で妨げられていない空間から内部に目を配らせた。

十数のストライカーユニットが並んでいる。いずれも持ち主の好みや魔法に合わせた調整がなされている世界で一つしかない物だが、エリックからすればガどれもガラクタにしか見えなかった。

「こんな物」

アローの指輪をはめて、ベルトにかぎそうとする。魔法が発動する間際、エリックのその手を寸前で横から伸びた腕が掴んだ。

驚きに息が詰まったエリックが手の伸びてきた方向を見るとそこにはソーマ。

「こういうのはよくないんじゃないか」

舌打ちを打ちエリックは掴まれていないもう片方の腕を使ってソーマの手を振り払う。

「ストライカーユニットを壊そうとしたのか。何のために」

「ウィッチが無能だからいつまで経ってもネウロイどもが地上から消えないんだ。役立たずにいつまでも戦場にいられたら迷惑なんだよ」

「これはあいつらにとつて必要な翼だ」

「ウィッチに肩入れするつもりですか。マロニー大将の片腕の貴方が」

「お前がウィッチにどんな感情を持っているのかは知らない。だがウィッチがこれまで命がけで戦ってきてくれたからこそネウロイの被害を最小限に抑えてくれた、そういう考え方はできないのか」

言われてエリックは黙りこくる。しかし納得したわけではない。

言葉の節々もだが、現に今向けられている目付きに不満が残っているようにソーマは思えた。

「失礼します」

しかしその感情を表に出さずやむなくと言った様子でエリックはそう言い放って足早に離れていく。

去っていく彼を見送ったソーマはおもむろにマロニーから受け

取った新しい指輪をポケットから出した。

「…今の内に試しておくか」

ソーマはウィザードライバーを起動し、マロニーから渡されたハリケーンスタイルに似た形状の緑の指輪をはめる。

「見た目からしてたぶんこれで変身できるはずだけど」

一体どうなるのか、指輪に秘められた力に想像を掻き立ててウィザードライバーに緑の指輪を翳す。

ところが

『エラー』

「ん？」

ベルトから流れてきたのは期待を裏切る音。

「あれ？おつかしいな」

『エラー』

改めてもう一度、試してみても結果は同じ。はっきりと認証を拒否する音声が響く。

肉体に何も変化は起きず、空間に魔法陣が出現することもなかった。

「不良品か？いや、そんなはずはないけど、なんでうまくいかないんだ」

魔力を使い切っている状態ではないのに魔法が発動しないという奇妙な事態。

ソーマは首を傾げ、もう一つのドラゴンの絵の指輪も試してみる。

『エラー』

「こつちもか」

まさかと思いつつも少し期待していたのもあって落胆の聲がこぼれる。

「まだ使い時じゃないってことか？それとも」

（今の俺じゃ力不足だったってことなのか？）

このような事例は初めてだ。

魔法が使えない原因が自分にあるとして理由は何なのか。指輪に秘められた力を引き出すに値する力量が不足しているのか、はたまた

別の理由によるものなのか

しばらくその場で考えてみたものの、疑問を解消できる答えを見つ  
けることはできなかつた。

## 第二十三輪 決意、共に

「アドバイスをくれつつ?」

「恥ずかしながら私の実力不足は痛いほどわかっております。ですから少しでも周りの役に立てるよう大尉から助言を頂きたいんです」

そうソーマに訴えているのは訓練中に最もミスが目立ったメイジ部隊の一人。

作戦開始まで残り数時間弱。その間に自らの未熟さを埋めようとソーマへ助けを求めに来たのだ。

「お願いします!私が至らない故に他の大勢の足を引っ張りたくないんです!どうか、お願いします!」

「わかった。ただじっくり教える時間はないからちよつとしたことしか言えないけどそれでもいいか」

「構いません。是非!」

「じゃあここじゃなんだし俺の部屋で話そうか。付いてきてくれ」

快くその申し出を受け入れたソーマは兵士を伴って自分の部屋の前まで移動する。

「さあ、入ってくれ」

「失礼します!」

ドアを開けるソーマに緊張気味に答える兵士。

兵士が先に、ソーマが後に入り扉を閉める。

直後、何かが倒れる音が室内から響いた。

★

「見て、基地からウォーロックとメイジが!」

「ついに動いたわね」

基地から海を挟んだ大地にある家屋の名残りを僅かに残した建造物の中でハルトマンたちカールスラント組はいた。

彼女たちは基地を離れた後すぐにここで基地の様子を探ることを決め、ネウロイの巢を破壊するべく飛び立つウォーロックとメイジを双眼鏡で捉えていた。

「巢を破壊しに行くのかな。あの中にソーマはいないみたいだね。どう、ミーナ？」

「ええ、見当たらないわ。基地に残っているようね」

編隊を組んで飛行する影に見慣れた姿がないことからハルトマンとミーナは彼が出撃していないと踏んだ。

そしてハルトマンの口にした名に微弱ながら体を震わせて反応する少女がいた。

バルクホルンだ。

ソーマとの模擬戦の後目を覚ましてからというもののバルクホルンは見るからに気落ちし、口数も減っていた。

自分が勝てなかった故に部隊が解散する結果になってしまったこともだが、やはり一番はソーマの裏切りのせいだろう。

(確かに聞こえた…)

そんなバルクホルンが頭に浮かべていたのは模擬戦の終盤、スリーブの魔法で意識を夢の世界に飛ばされかけた時ソーマが口にした『ごめん』という言葉。

(うつすらとしか聞こえなかったが間違いなく言っていた。あの時間いた言葉は本物だ)

「トウルデー？」

(ソーマは本当に私たちを裏切ったのか？やはり何か思惑があつて…もし仮にあれが芝居だったとしてそうせざるを得ない事情があるのだとしたら一体…)

「トウルデー？ねー聞いている？トウルデーってばー！」

ソーマの言動に合点がいかず、その背景を探ろうと回転するバルクホルンの思考はハルトマンの声で一旦中断させられる。

「どうした？」

「どうしたじゃないって。さつきからずっと呼んでるのに全然反応してくれないじゃん」

「すまない、少し考え事をな」

笑いを浮かべて言うバルクホルン。しかし付き合いの長さから養われた勘によるものかそれが自分に気を遣つてのものだとハルトマ

ンは検討がついた。バルクホルンが何に悩んでいるのかにも

「たぶん大丈夫だよ」

「何がだ？」

「ソーマのこと、ソーマは何も変わってないよ」

「どうしてそう思うんだ」

まさに考えていたことを言い当てられ驚くと共にバルクホルンはその根拠を訊ねる。

「どうしてって、なんとなく？」

「なんとなくって…」

「でもあんな態度をしたのにはきつと何か理由があると思うんだ。自分勝手な理由じゃないのは確かなんじゃないかな。私と違って真面目じゃん、ソーマってさ」

さらっと軽く、けれどソーマへの信頼を感じさせる言葉を放つハルトマン。

それに賛同するかのように基地の動向を監視していたミーナも続く。

「エーリカの言う通りよ。彼はまだ私たちの味方よ」

「まだ？まだとはどういうことだミーナ、何か知っているのか！」

「彼は…」

ハルトマンと違ってはつきりと根拠があるように言い切るミーナ。彼女がバルクホルンからの問いかけに答えようとした瞬間、空に動きがあった。

何かが爆発する音がしたのだ。

「巣が爆発した！」

「始まったみたいね」

会話を止めたミーナたちが空に目を向けるとウォーロックとメイジたちによるネウロイの巣への攻撃が始まっていた。

いよいよ始まったウォーロックとメイジの戦い。

空での動きは満遍なく管制室でも確認していた。

「ウォーロック及びメイジ部隊、ネウロイとの交戦に入りました」



「よい、よいぞ。見事だ。さすがは私が手塩にかけて各国から選び抜いた精鋭たちだ」

管制官の告げる報告とカメラに映し出された戦闘の様子にマロニーはほくそ笑んでいた。

ウォーロックのビームとメイジの魔法は巢から沸いて出てくる小型ネウロイを着実に減らし、巢へのダメージも与えている。

予想通りの結果、いや戦闘開始からの経過時間を踏まえれば予想以上と言ってもいいかもしれない。

（それ見たことか。やはり私の考えは正しかったのだ。これからの戦場においてイニシアティブを握るのは人類の科学が生んだ兵器なのだ。あのような小娘たちではない）

この戦闘が終われば晴れてガリアは解放される。ウォーロックとメイジはその功績を称えられ本格的な量産が始まり、世界的に配備される日も近い。

そして自分自身が今よりも重要なポストに着くことも確実だ。

マロニーはこの時点で既に戦いが終わった後の理想図を頭の中で描いていた。

エリックを始めとするメイジは巢の破壊をウォーロックに任せ、小型ネウロイの撃墜に専念していた。

『アロー、ナウ！』

「数ばかりうじゃうじゃとー」

魔法の矢で前方の小型を数機まとめて落としたりエリックは周囲に目を配らせる。

見たところメイジたちの動きに大きな問題はなく順調といってよかった。訓練時に危うかったメイジもこの短時間でありえない程、堅実な動きでネウロイのビームを回避している。

精々問題らしい問題といえば小型の数が多いくらいで後は特に不安な点は見られない。

「これならばいける。ウィッチがなくとも我々だけで充分に戦えるんだ：あんな男の出番など」

— いずれはあのウイザードなど越えて自分がネウロイから世界を救う英雄となるのだ。

そんな願望を胸に抱くエリックがまたしても小型ネウロイを粉塵に化したちようどその時、頭上を覆う暗雲に動きがあった。

黒い雲の中から小型ネウロイが多数姿を覗かせたのだ。

「まだくるのか！」

「もうかなり倒したぞ。これじゃキリがない！」

「情けない声を出すな！ネウロイがなんだ！我々の人間の底力を見せてやれ！」

「ああそうだ！俺たちはやれる。もう奴らに好き勝手させるものか！」

未だ戦力を残していたネウロイ側に苛立ち、互いを鼓舞するメイジたち。しかし出現したばかりの小型ネウロイたちは彼らには構わず、一斉にウォーロックを囲いだす。

「何をしようと言うのだ」

四方八方、360。ウォーロックの周囲に展開する小型ネウロイ。

それらは同時にビームを放ち始めた。中間にいるウォーロックにはではなく射線上にいた味方に向けて

「ネウロイが同士討ちを？これは一体……」

「ウォーロックのコアコントロールシステムが作動したのか……？」

目の前で起こった光景に驚くメイジが多数を占める中エリックだけが冷静に呟いた。

彼はマロニーからウォーロックの性能を聞かされていた数少ない人物であり、だからこそネウロイの同士討ちの理由についてすぐ検討が付いた。

だがそれにしても妙におかしい。

「ネウロイの巣が……」

エリックが疑いを持った瞬間、奇妙な現象が起きた。

ネウロイの巣が突然形を崩して白い粉となる。

その粉は吸い込まれるようにウォーロックの元へ流れていき、次第に変化を与えていく。

小型ネウロイが続々と同士討ちによって消滅していく中心で白銀の装甲が黒一色に染まる。

そして巢も小型ネウロイも跡形もなく消え、残ったのはウォーロック一体のみとなった。

「やったのか？」

爆音が収まり、訪れる静寂。巢も小型も消え、敵を殲滅したというのに誰からも歓声が上がらない。

不安が色濃くこべりついたようなメイジの一人の呟きが鮮明に他のメイジたちによく聞こえる。

誰もが緊張の眼差しで動向を見ているとウォーロックが突然彼らに向けてビームを飛ばした。

「なんだと!？」

咄嗟にライドスクレイパーを操り、寸でのところで回避するメイジたち。

しかし暴走したウォーロックはメイジたちに放ったビームの行方を確認する間もなく戦闘機形態へ変形し、高高度に移動。

変形を解除するところかまわずビームを乱雑に打っていく。

その赤い光は赤城の付近の海に、基地付近の地面に着弾する。

「ウォーロックが味方に攻撃を!？」

「副隊長、どうしてウォーロックが!」

「狼狽えるな!全員突撃だ!ウォーロックを止める!」

飛び交う戸惑いの声を打ち消すように声を荒げてエリックが命令を下し、メイジたちはそれに従って動き出す。

アローやブラストで攻撃を仕掛けるメイジたちだが、ウォーロックに大して損傷はなく彼らにもビームが襲いかかる。

デیفエンドでビームを受け止めるが、何人か反応が追いつかず魔法の切り替えが間に合わない者たちがいた。

「うわあああ!」

その中の一人にビームが真っ直ぐ向かう。巢を貫通するほどの威力だ。生身で食らうよりはマシだろうが、それでも死ぬ確率の方が高い。

仮面の中の顔が恐怖で歪み切っていたメイジの前に別のメイジが横から割って入り、片手から展開した青い魔法陣でビームを防いだ。

「うえ…は？」

「すぐに退け！これはお前たちに対処できる相手ではない！」

「シールドを張った!? 貴様、何者だ！」

急死に一生を得た状況に理解が追いつかず言葉にならない声を出すメイジと打って変わってエリックが問いつめる。

魔法陣の色、指輪を用いずに魔法陣を展開したことからエリックはメイジの自身が自身の管轄外にいる人間だと見抜いた。

「さては貴様、ウィッチか！何故ウィッチがそのベルトをしている！」

「今はくだらん言い争いをしている場合ではない！状況をよく見ろ！」

「生意気なことを…！」

言い返そうとしたエリックだが言葉を紡ぐ前に思い直す。

完全に敵となりビームを放つ砲台と化したウォーロック、狼狽え懸命に身を守るための回避や防御を取る自身の部下たち。

この状況下で軍人として、部隊を指揮する立場として取らなければならぬ選択は残念ながらウィッチの変身するメイジの言う通りだった。

「ちっ！総員、基地に撤退！」

結果的にウィッチに従わなければならない不満を抑えてエリックは部隊に告げ、基地に引き返す。

「見てシャーリー！ウォーロックが！」

「おいおいマジかよ。味方を攻撃してるぞあいつ」

ウォーロックの異様な変異をルッキーニとシャーリーも視認する。

基地を発った後シャーリーの案で念のために周辺の空域でウォーロックとメイジの戦いの様子を見ることにしていたのだ。

『ウォー！ウォー！』

「うお!?なんだなんだ！」

「うひゃあ!?何これ！ゴリラ?」

声が聞こえたと思えばシャーリーのポケットから小さな紫の巨人が飛び出してきた。

驚き、奇異の目で見つめる彼女たちにゴリラ：否、巨人『パープルゴーレム』は手と顔を使って基地の方角を示す。

「さつきソーマに貰った奴だよね？ 基地に戻れって言ってるのかな」

「みたいだな。よし、戻るぞルツキーニ」

「りょーかい！」

意図を察し、ゴーレムに従うことを決めたシャーリーとルツキーニ。

航空機を旋回させて、基地へと進路を変えた。

同じ頃、エイラとサーニヤはというと

元より基地に引き返していた二人だがウォーロックの暴走を見て、急がねばとますます走るスピードを速めていた。

「エイラ、見て」

「ん？」

二人の正面、基地の方角からブルーユニコーンが地を駆けて近付いてくる。

その存在をサーニヤとエイラが認めて足を止めるとブルーユニコーンも同じようにピタリと止まって、くるりとその場で一回転。

元来た道をまた走り出す。

「なんなんだあいつ？」

「もしかして私たちを迎えに来たんじゃないかしら」

サーニヤの言葉にまさかと思い、見てみるとブルーユニコーンは少し先の道で動きを止めて二人に首を向けている。

付いてこい、言っているかのように

「どうやらサーニヤの言う通りみたいだな。あいつに付いていつてみるか」

「うん、そうしましょうエイラ」

得体の知れない物体だが少なくとも敵対心は感じられない。

相談の結果、エイラとサーニヤはユニコーンに付き従うことを決め

た。

リーネもまた突然メイジたちに反旗を翻したウォーロックに戸惑いを隠せなかった。

ウォーロックがメイジに危害を加えている光景が異常事態なのはすぐにわかった。

だがどうするべきか悩んでいると、彼女の元に基地の方角の空から赤い物体がやって来た。

「何かこつちに来てる…鳥？」

その物体、レッドガルーダは空からリーネの視線の高さまで降下すると鳴き声を上げて羽根を基地の方を指し示す。

「基地に行け、って言ってるの？」

その動きに首を傾げつつ、リーネが試しに言ってみるとガルーダは軽く鳴いてみせた。おそらくは肯定の意だろうとリーネは感じた。

「わかった。貴方を信じてみる」

きつと他の皆もこの事態を認識して解決に動いているはず。

そう思ったリーネはガルーダの要望通り、基地に戻ることにした。

「悪い予感が当たっちゃったか」

ウォーロックの変異に悪態を突きながらソーマは滑走路の先端から海へジャンプ。空中でハリケーンスタイルに変身し、ウォーロックの元へ急行する。

「マロニーめ、厄介な奴を作ってくれたものだな！」

シールドを張ってウォーロックのビームを防ぐメイジ。

その横に出しうる限りの全速でウィザードが駆けつけた。

「ごめん、遅くなった」

「見ての通りだ。お前の予感が的中したな」

「当たって欲しくなかったんだけどな。そっちは頼む。できるだけ持ちこたえる」

「任せた。無茶はするなよ」

合流してから数分足らず。

たったそれだけやり取りを終えてメイジは赤城へ方向転換し、ウィザードはウォーロックの相手を引き継ぐ。

「えらく変わっちゃまってまあ」

人類の希望として作られたものが今や人類に害をもたらし絶望を与える存在と同じパーソナルカラーに染まり、人類に牙を向けてしまった。

なんとも皮肉で哀れな話だ。

「安心しな、誰かの命を奪う前に破壊してやる」

ウィザードはコネクトの魔法陣から引き抜いたウィザードソードガンの銃口をウォーロックに向け引き金を引いた。

撤退したメイジたちと交代するように始まったウィザードとウォーロックの戦い。

ビームと銃弾を打ち合う両者を赤城の上で見守る宮藤とペリーヌは一人のメイジが自分たちの方に近付いてくるのに気付く。

「ペリーヌさん！メイジの人がこっちに来ます！」

「なんですって！」

一体マロニー側の人間が何の用なのか、赤城の甲板上に浮遊して来たメイジを警戒しているとあちらの方から声をかけてきた。

「無事かお前たち！」

「えっ、この声……」

「もしかして坂本少佐!?!」

メイジの凛々しく頼もしい声、その声を宮藤とペリーヌが聞き間違えるはずはなかった。

現にライドスクレイパーから降りて変身を解いたメイジが見せた姿は紛れもなく彼女たちが敬愛する坂本少佐その人であった。

「少佐、何故そのような恰好を？」

「マロニーたちに気付かれずに動くにはこの姿にならざるを得なくてはな」

再び会えたことに喜ばしさを感じつつも何故メイジのドライバーを身に着けているのかと、疑問の眼差しで見つめるペリーヌに坂本が

答えた。

「暴走したウオーロックを止めるぞ。宮藤、お前は先にソーマに加勢するんだ。私とペリーヌは基地でストライカーを取り戻してから他の仲間たちと合流する」

「でもストライカーユニットが」

「大丈夫だ。ちゃんと持ってきてきてある」

そう言うのと坂本は軍服のポケットから二つの物を取り出す。

宮藤のストライカーユニットと銃だ。ただしその大きさは掌に収まる程度に小さくなっているが

「ストライカーユニット!?でもなんでこんなに小さく…」

「待っている。今元の大きさに戻す」

『スモール、ナウ!』

縮小する際に使ったスモールで小さくなっていたストライカーと銃のサイズを通常の大きさに戻る。

それを見て「あっ」と小さく驚いたペリーヌは坂本に質問を投げかけた。

「少佐、これはもしかして。スペランツァ大尉の」

「そうだ、あいつは私たちと完全に袂を分かったわけではない。あいつはあいつで人類と私たちを思い悩み、考えた。その結果としてお前たちを傷つけることになってしまった…急に言われても理解し難いのはわかる。だが私たちは仲間であり家族だ。どんな理由があろうとも家族を見捨てるわけにはいかない。二人とも力を貸してくれるか?」

「はい!」

「も、もちろんですわ!」

二人から返ってくる頼もしい肯定の意。

坂本は宮藤を真っ直ぐ見据え、言葉をかける。

「宮藤、我々も後から行く。それまで任せたぞ」

「わかりました。そちらも気を付けてください」

「ではペリーヌ、私たちも行くぞ。後ろに乗れ」

「し、承知致しましたわ。坂本少佐」



『チエンジン、ナウ!』

力強い宮藤の返事に頷くと坂本は再度メイジに変身。ライドスクレイパーに跨るとペリーヌにも後ろに乗るように促す。

ペリーヌが後ろに着いたのを確認して坂本は基地を目指して海上を飛行する。

遠ざかり小さくなっていく彼女たちを見送った宮藤はウィザードとネウロイの戦いに視線を切り替える。

船の上で空で繰り広げられるネウロイとの戦いを見てみると自身の初陣を思い出す。

あの時はまだストライカーユニットを乗りこなしておらず、窮地をソーマに助けられた。

今度はあの時とは逆。ソーマの窮地に自分が駆けつける番だ。

宮藤はストライカーを装着し、発進準備に入る。

「ソーマさん、今行きます…!」

絶対に守って、一緒に帰ってみせる。

決意を胸に、宮藤は荒れる空に飛んだ。

## 第二十四輪 裏切りの真意

『チヨロイイネー・シューティングストライク！サイコー！』

連射されるビームを避けながら接近したウイザードが風の弾丸を撃つ。

だがそれはウォーロックのビームに真っ向から打ち消され、攻撃から間もなく回避をする羽目になる。

『バインド、プリーズ！』

『スラッシュストライク！サイコー！』

その結末にたじろぐことなくウイザードはならばと手段を変え、今度は風の鎖をウォーロックに絡ませた。

動きを止めた隙に斬撃を叩き込もうとする。

ところが鎖はいとも容易く破られ、近づく前にビームを発射される。

「つまずいー！」

咄嗟に前進を断念し、横に移動。そのおかげでビームはウイザードの足元をかすめるのみに終わった。

だがその攻撃はウイザードの肝を冷やすには充分だった。

「危ね…わかつちやいたが俺一人じゃきついな」

戦う前からウイザードは自分の分の悪さを悟っていた。

仲間のサポートのない空中戦ではハリケーンスタイル主体の戦法になってしまったためフレイムやランドといった高い攻撃力を与える形態へのチェンジが難しく、その時点でも不利だというのにしかも元の装甲も相まって防御力も高いときた。

ウイザードが勝てる見込みはほぼ無に等しい。

「でも泣き言言つてられない。ここが踏ん張りどころだ」

いずれ坂本や他の仲間が来てくれるはずだ。

それまでは自分がウォーロックを抑えるしかない。

できる限り時間を稼ぎ、注意を引き付けておこうとウイザードはウォーロックの周りを動き回り、ビームをかわしては大して効き目のない銃撃をする。

だがウォーロックもビームを放っているばかりではなかった。ビームでの攻撃の最中ワイザードの後方に魔法陣を出現させ、そこから出てきた鎖で腕を絡め取る。

「何!？」

後ろから突然巻き付いてきた鎖に驚き、元を辿って見てみれば鎖はいつの間にか虚空に出現していた魔法陣から伸びていた。

「これはまさか、俺の―!？」

ワイザードが驚いている間にウォーロックはビームを発射する。

揺らぐことなく伸びていく赤い線。ワイザードが視線を戻した時には視界は赤一色に埋め尽くされていた。

無駄とわかっていながらなしの防御として鎖の巻き付いてない腕で身を守るワイザード。その前に横から飛んできた影がシールドを張り、ビームを防いだ。

「宮藤!？」

「ソーマさん、私も一緒に戦います。戦わせてください」

自身を助けてくれた者の名をワイザードが言う。銃を手にしたその人物、宮藤が彼の無事を目で確認する。

「…手を貸してくれるのか」

「もちろんです。私たち仲間じゃないですか」

「…ありがとな」

さも当然のように笑顔で宮藤は言い切る。

そんな彼女に小さな声で感謝を伝えるとワイザーソードガンで鎖を断ち切って、ワイザードは宮藤と共にウォーロックを見据える。

★

同じ頃、変身を解いたエリックは早足で作戦指令室に向かっていった。

その顔は焦燥に駆られている。

(あの裏切り者めーやはり信用するべきではなかったのだ!…一刻も早くマロニー大将に報告しなければ)

基地に帰還してすぐエリックはソーマの部屋に走り、その部屋の夕

ンスの中で気を失っているメイジ部隊の隊員を発見した。訓練でミスの目立った者だ。

それがソーマの私室で意識を失い、他者による発見を避けるように隠されていた。

このことからエリックは確信したのだ。

ソーマがこの隊員を昏倒させ、ドライバーを自らが手引きしたウイツチに渡したのだと

「マロニー大将！大変です！スペランツァ大尉が…！」

背信行為を告げるべく作戦指令室に入ったエリックは室内の光景に目を見張った。

彼の目に飛び込んできたのは顔に傷を作り、縄に縛られているマロニーを始めとした上官たちとその前に立つバルクホルンとハルトマンの姿。

「お前たちはカールスラントの！何故ここに!？」

「うわあ、ややこしいのが戻ってきた」

話しに通じない質の悪い相手の乱入にハルトマンが厄介そうな顔をする。

一方のマロニーにとってはこれ以上ない救世主の登場、すぐさま助けを求めた。

「エリック中尉！いいところに来た。こいつらを捕えるのだ！」

一見して状況を理解したエリックはマロニーの悲鳴混じりの声もあってメイジドライバーを腰に巻き、魔法でハルトマンたちを鎮圧しようとする。

「があ?！」

しかしその行動は首に加えられた衝撃によって遮られる。メイジドライバーが手から零れ落ち、次いでエリックが前のめりに崩れ落ちる。

気絶し、倒れるエリックの背後にいたのは

「坂本少佐と、ペリーヌ！」

「サーにやん！それにエイラも」

「お前たちもここに戻ってきてくれていたとはな。ありがたい限り

だ」

「それについておまけみたいな言い方すんな」

扶桑刀を納める坂本。ペリーヌ、サーニャとエイラがいた。

一時の別れを嘆いた仲間たちとの再会に喜ぶバルクホルンとハルトマンと異なり、マロニーは彼女たちの帰還に戸惑い、そして坂本の手に行っているメイジドライバーに目を見張る。

「何故それを君が…まさかさっきのメイジは君だったのか坂本少佐！貴様たち、こんなことをしてただで済むと思っているのか！軍法会議ものだぞ！」

「それはこちらの台詞だ。マロニー」

「なんだと？」

「我々に支給されるはずだった資金と物資の横領、交戦結果を大きく捻じ曲げた情報統制、私たちウィッチを陥れるためにかなり手の込んだことをされていますよね。その上あのウォーロック、これを連合軍上層部が知れば立場が危うくなるのはそちらではないでしょうか。マロニー大将」

「う…」

坂本の言葉を引き継ぐ形で放ったミーナの言葉と瞳に射抜かれたマロニーは唸ることしかできない。

愚行としか思えない行為をしでかした彼にバルクホルンの一瞥が突き刺さる。

「ネウロイのコアを丸ごと兵器に転用するとは…このような結果になるとは考えつかなかったのか」

「ネウロイのコアってどういうことだよ。あのウォーロックにネウロイのコアが使われてるっていうのか？」

バルクホルンの口にした情報にエイラが驚愕の声を上げる。

「ああ、だから今あれがネウロイのコアと共鳴して暴走しているんだ」  
「待て、何故貴様たちがそこまで知っている！貴様らに知る余地などないはずだ！」

狼狽えるマロニーだが誰も彼の言葉に答えることはなく、ミーナは冷ややかな目を向けるだけに留めてハルトマンたちに向き直る。

「マロニー大将、貴方にはもうしばらくこのままここにいて頂きます。行くわよ皆」

「宮藤とソーマを助けに行くんだよね」

「ああ、行くぞぞ」

ハルトマンと坂本がそうやり取りを交わすと一行は管制室を後にする。

格納庫に向かうその道中サーニヤがハルトマンに問いかけた。

「ねえハルトマンさん」

「どしたの？サーにゃん」

「ソーマさんはやっぱり私たちを裏切ってなかったの？」

「そうみたいだよ。だよね、ミーナ」

「ええ、私は彼から話を聞いて全て知っていたの」



「悪いけどミーナ中佐、あんたがそれを知ることはこの先ないよ」

砂漠での戦いがあった日の夜のこと

部屋を訪れたミーナにソーマは銃を向けていた。

この距離で外すことはまずない。引き金を引けば間違いなく命を落とす。

だと言うのにミーナは抵抗して手を伸ばしてくるどころか、逃げもせずブレない視線でソーマを直視している。

「…なんで逃げようとしない」

「もしここで私を撃てば貴方は銃声を聞いて駆け付けた他の誰かに捕えられるか撃たれるわ。私を撃って都合が悪くなるのは貴方の方よ」

「本気だぞ。俺は」

「ええ、わかっているわ。そんなことをするような人じゃないということもね」

「…参ったな」

ミーナに銃を向けたソーマはじつと彼女の目を見た後、そう呟いて

手を降ろし引き出しの中に銃をしまう。

その彼にミーナは一瞬笑みを浮かべて、すぐ冷静さを表に出した表情に戻る。

「全部話すよ。少し長い話になるけど」

「構わないわ。私も知りたいもの」

念のための承を確認すると机の引き出しの中から出した資料を自分のベッドに腰かけたミーナに渡す。

資料を開く動作を確認してソーマは話を始める。

「まず俺はトレヴァー。・マロニー、彼の命令を受けてここにきた。彼から与えられた任務はガリアの解放を手助けすること：だがそれは表向きの理由。マロニー大將が俺に最も期待しているのはウィッチに代わる戦力を配備するに必要なベルトを開発するための戦闘データを得ること」

「貴方がしているのと同じベルト？」

「俺のは試作品だから性能とか違うところはあるだろうけどまあ、同じと見ていいと思う。これがあれば潜在的に魔力の少ない男でもネウロイと戦う力が得られる。俺みたいに姿を変えて、魔法を使えるようになるんだ」

ソーマの説明を聞きながら資料を読み進めていくミーナ。

ウィザードライバーに似た形のベルトの設計図や変身者の経歴や適性のリストが記されている。

ある程度目を通したところで一度手を止めて、自分の見解を述べる。

「このベルトが男性も使えてウィッチに近い戦力を得るための物なら人類にとって有益な発明だと思うわ。けれどその先駆けである貴方の存在を軍が未だに公にしていない。ということは何かそれなりの理由があるのね。それも密かにしておきたい何かがある：そして今日貴方が魔法使いとして戦う自分自身を写真に撮ったことから既にその動き出す準備も仕上がっている」

ここまで聞いた話と昼間の戦闘での出来事から情報をまとめあげて推察するミーナ。

さすがだとソーマは思った。

若くして癖のある隊員たちを束ねる身だけあって洞察力が高い。

「マロニー大将たちはこれとは別にある兵器の開発を進めているんだがそれが少し問題だな。ネウロイのコアが使われている」

「本当なの？それは」

ソーマの言葉にミーナの表情が険しくなる。

「俺も知ったのはつい最近だけだな。ウォーロックって名前らしい。マロニーの目的はその兵器とベルトの量産、俺はベルトはともかくこつちの方は実戦兵器にするには危険だと思ってる。コアを丸ごと転用した兵器の量産なんてリスクが大きすぎる」

「…そうね。私も同意見だわ。ネウロイのコアなんて不安定なものを利用した兵器を開発、しかも量産するだなんて…最悪の場合人類に牙を向きかねない事態になってもおかしくないわ」

「そう、だから俺はできることならこいつの量産だけは止めたい。でも何度かそれとなく進言しても聞き入れてもらえなかった」

ネウロイのコアを応用した兵器が各地に広まり、もし暴走でもすればどうなるか

そう考えたミーナは資料をベッドに置いて、隣に腰掛けたソーマに語りかける。

「確かにネウロイのコアを用いた兵器が内密に開発されているとなればそれは大問題だわ。けれどもいいの？私にこれを教えることは本来貴方にとって不都合なはずでしょ」

ミーナにとってはありがたいがソーマの行為は背信行為。

本来褒められたものではない行いだ。

だからこそ彼の気持ちをここで聞いておきたかった。

「マロニー大将たちの目的は戦場からウィッチを排斥し、覇権を自分たちの手に取り戻すこと。最初はそれに賛成だった。ウィッチは戦える力を持ってしまったせいで望んでもいない戦いを強いられている。軍に入る前からずっとそう思ってたからさ。計画が成功して、それまで力が及ばなかった人たちも戦えるようになればもうウィッチにばかり危険な思いをさせずに済むんだって」



けれどどこに来て皆と同じ時間を過ごして、同じ目線に立って戦って気付いたんだ。皆それぞれ理由は違っていてもちやんと自分で望んで戦ってるんだって。だからウィッチをただ煩わしいとかそういう理由でネウロイのコアを使ってまで排斥しようとするマロニー大将の考え方には賛同できない」

そこで一度言葉を切ってソーマはミーナの瞳を見つめる。

自分の目の前にいるミーナも、扶桑からやって来た宮藤も最年少のルツキーニも、誰かに強制されたわけでもなくきちんと己の意志で命をかけている。

そんな彼女たちを蔑ろにし、空から遠ざけるなどそれこそ許されない裏切りだ。

「自分が無茶苦茶言ってるのも、軍人として許されないのもわかってる。けど、それでも俺は皆の思いを踏みにじるようなことしたくない」

そう言い切きったソーマの瞳に宿った思いをミーナは正面から受け止める。

どちらとも言葉を発さず、少し手を軽く伸ばせば相手の体に触れられそうな程の短い距離で二人は互いを見つめ合う。

「貴方の気持ちはわかったわ…：そうね、ちよつと賭けみたいな形にはなるけど私も協力するわ」

「ありがとうミーナ中佐」

「礼を言うのはこちらの方よ。どんな結果になるにしてもちやんと選択して責任は持ちたいもの。それができるようにしてくれた。今はひとまずそのことに感謝したいわ」



「その後私は彼の情報を元に調査をしてマロニー大将の不正の証拠を掴んだ。すぐにそれを突き付けたところだったんだけどそういうわけにはいかなかったの。暴走の危険性があると言ってもウオー

ロックが本当に暴走をするかはあくまでも可能性の話。だからウォーロックが出撃するまで様子を見る必要があった。ソーマさんがあんな芝居をしたのもそのためよ。あくまでも何も手を加えずに起動したウォーロックがもたらす結果を確かめるために」

「そ、そういうことだったのか」  
「結果的にこういう形になったのは喜んでいいのかわからないのだけどね」

将来爆発しかねない火種が世界中に広まる前に爆発してくれたのはミーナとしてはありがたいところだが、正直言って複雑な思いもある。

「それにしても驚いたわ。美緒までソーマさんに協力していたなんて。しかも彼らのベルトまで」

「宮藤が脱走してあいつのいる医務室に行った時にマロニーの計画とミーナとの共謀を聞いてな。私も同じ舟に乗ったというわけだ」  
「じゃあそのベルトは」

「メイジの一人から拝借した。ウォーロックが暴走した場合にマロニーの監視から逃れつつ、実戦経験の浅いメイジ隊の犠牲を防ぐためにな。そのため少々荒っぽい真似をしてみましたかな」

坂本は心の中でベルトの持ち主であるメイジ隊員に詫げる。彼には本当に悪いことをした。

ソーマの部屋に身を潜めていた彼女は彼が連れてきた隊員をエリックと同じように刀で気絶させてしまった。

「ですが勝手すぎますわ。最初から私たちにも話してくれればよかったですのに。それなら私たちだってソーマさんの力になりましたわ」  
「ああ、誠にけしからん奴だ。あいつに文句を言わねば気が収まらん」  
話を聞いて発したペリーヌの言葉にバルクホルンが心底から同意する。

格納庫に辿り着いた彼女たちはその扉の前で立ち往生している数人を見つけた。

シャーリーとルツキーニ、リーネ。残りのメンバーだ。

「お前たちも戻ってきてたのか!」

「芳佳ちゃんとソーマさん、皆さんのことが心配で。それにこの子がここに戻るようにって知らせてくれて」

「私たちのところにも来たんです」

リーネの肩に止まるガルードを見てサーニヤがポケットからユニコーンを掌に乗せる形で取り出す。

するとユニコーンは掌から飛び降り、ガルードは肩から飛び立ち、ゴーレムがずっと隠れていたルツキーニの足元から飛び出す。

一か所に集まった彼ら(?)は羽根と角と腕を重ね合わせ、ハイタツチを交わすと指輪に戻った。

「あつ、指輪になっちゃった」

そうハルトマンは眩くと役目を終え、すっかり動かず物言わなくなったそれを拾い集めて自身のポケットにしまう。

その様子を見たシャーリーはミーナに視線を切り替える。

「二人を助けに行くんだろ。時間がない。早く行こうぜ」

「もちろんよ。トゥルーデ、お願い」

「ああ、任せろ」

朗らかさと冷静さ、自身の得意とする笑顔を向け合うシャーリーとミーナ。

紆余曲折あったがこうして集った面々の思いは一つ。戦う仲間たちを救援とウォーロックの撃破だ。

それにはまず格納庫の入り口を塞ぐH鋼が邪魔だ。

ミーナの求めに一言返したバルクホルンは固有魔法を発動させ、H鋼の一つに手を添えると…勢いよく投げ飛ばし、休む間を置かず次のH鋼に手を運んだ。



「接近する。援護を頼んだ」

「わかりました!」

『チヨロイイネ!スラツシユストライク!』

遠距離からの攻撃では埒が明かないと踏み、ウイザードは危険を覚

悟で勝負に出る。

宮藤はウィザードのフォローをすべく銃撃でウォーロックの動きの抑制にかかる。

「うおおおっ！」

ウィザードが斬り込む直前、ウォーロックの装甲が黒から黄色に変わった。

風の刃が直撃するも、想定していた以上に装甲が固く削れない。

この攻撃を続けても意味がないと即断したウィザードは反撃を食らう前にウォーロックから離れ、宮藤の横に戻る。

「ウォーロックの色が黄色になった」

「やはりそうか。気を付ける宮藤、こいつには俺の魔法がデータとして組み込まれてる。色が変わったのもそのせいだ」

「えっ!？」

魔法陣から飛び出す鎖、黄色に変色した途端に防御力が増した装甲。この二点からウィザードはウォーロックが自分の魔法を使っているのだと分析した。

ありえないと思いたかったが、ウィザードの魔法のデータを元にメイジのベルトが開発されている背景があるのだ。そのデータがウォーロックにも転用されていても不思議ではない。

「断りもなく使いやがって。聞いてないぞこんなの。しかも面倒なことに俺と違ってウォーロックには魔法を切り替える隙がない」

「それってつまり…」

「俺なんかよりよっぽど強くて厄介な相手ってことだ」

「何か勝てる方法はないんですか」

認めたくない客観的事実を口にするウィザードに宮藤が訊ねる。

「…装甲が青色に変わった時がチャンスかもしれない。俺と同じ魔法を使うなら最後の回避手段はウォーターのリキッド、液体になって攻撃をかわす魔法だ。それを使った後に強力な攻撃を叩き込めばもう回避する手段はない。ウォーロックを倒せるはず」

「ならまず青色に変えないといけないってことですね」

「そうなんだがそれも難しいところだな。ウォーロックの元々の装甲

も固い。さっきの俺の攻撃よりもっと高い威力じゃないとおつと！満足に話し合いもさせちゃくれないってか！」

話し手いる合間にもビームは打ち込まれ、二人は散り散りなつて移動する。

二体に分身し、四筋に増えたウォーロックはビームを宮藤に集中させる。

「ううっ！すごい威力……！」

一つでも通常のネウロイに相当する威力が四ついつぺんに放たれた。シールドで受け止め持ちこたえているが、防御力に定評のあるさしもの宮藤でも突き破られそうになっている。

『コピー、プリーズ！バインド、プリーズ！』

そこにフリーになったウィザードがフォローに入った。

ウォーロックと同じく二人に増え、風の鎖で二機を同時に拘束。それによって宮藤を襲っていたビームがかき消えた。

「分身の方に攻撃を集中させる！一定のダメージを受ければ消える！」

「うおおおおっ！」

ウィザードの叫びにすぐさま宮藤は応えた。

風の鎖で動きの止まったウォーロック二機の内の一機、魔法陣を潜って増えた分身の機体に距離を詰め集中砲火する。

『ランド、プリーズ！ドッドド、ドッドドドン！』

宮藤の攻撃によって分身体が消滅したその間に上昇し、本体ウォーロックの頭上を取ったウィザードはランドスタイルにスタイルチェンジ。

重力に従って落下する彼めがけてウォーロックがビームで迎撃する。

『ディフェンド、プリーズ！』

ウィザードは土の壁を手元に召喚し、盾代わりにする。ビームを受けた壁は威力に耐え切れず、数秒も経たずに崩れ去るが構わない。

『バインド、プリーズ！』

降下しつつ手元に出現した魔法陣から飛び出た土の鎖がウォー

ロックの脚部に巻き付き、それを握り締めたウィザードはターザンの要領で再度ウォーロックより高い位置に移動。

鎖から手を放してフレイムスタイルに変身する。

『フレイム、プリーズ！ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

『チョーイイネ！キックストライク、サイコー！』

宮藤から銃弾を浴びせられ続けているウォーロックに迫りながら更にコピーとドリルで二人に分身し、キックの威力の強化を図る。

これだけ火力を底上げすれば避ける暇のないウォーロックはリキッドを使わざるを得ないはず。

現にその予想は見事的中し、ウォーロックは装甲を青に変え液状化する。

ウィザードのキックはすり抜けたように水を通過し、分身が消えたウィザードはハリケーンスタイルに戻ると上昇する。

「今だー！」

(今！)

ついに訪れたチャンスを逃すまいと宮藤はストライカーを吹かして接近し、銃口をウォーロックに向ける。

引き金を引く宮藤に対しウォーロックの全身から目を覆うばかりの閃光が放たれる。

「なんなの…眩しくて前が、見えない！」

「うっ！ライトまで使えるのか！」

ウォーロックが使ったのはライトの魔法。これもウィザードの扱う魔法の一つだ。

強烈な光で敵の視界を奪う、というのが戦闘面での使い方だがその効果上、ネウロイとの戦闘では役に立たないために宮藤たちの前で披露する機会はなかった。

まさかそれが仇となつてこのような形で返つてこようとは

視界を潰され動きが止まるウィザード。

その間にウォーロックは装甲を赤に変え、バインドの鎖でウィザードの足を捕縛。ウィザードは空中に釣り上げられた魚のような惨めな恰好になる。

「くそっ！」

ウォーロックの脚部で大きくなっていく赤い光。視力が回復したウィザードは食らってはまずいと思い、即座に守りの行動に出た。

こちらウォータースタイルからのリキッドで乗り切ろうとウィザードはホルダーに手を伸ばす…が、手を伸ばした先にあったのは空気だけ。いつもそこにあるウォーターウィザードリングの感触はない。

ここでウィザードは異変に気付いた。

「ウォーターリングがない！なんで…」

あるはずの物がなく狼狽するウィザード。

手だけでなく、目を向けて確かめてみるもやはり求めているウォーターウィザードリングはなかった。

「ソーマさん！」

そこに自分の名前を呼ぶ焦燥の声。

反応してウィザードが正面を向き直ると、赤い光は先の比ではない程大きくなっていった。

助けに入ろうとする宮藤。しかしその瞬間、真っ赤な光がウィザードを飲み込んだ。

「ソーマさああああん!!」

## 第二十五輪 集う空、繋げる風

赤い光は地面を抉り、先にある木々をなぎ倒していく。

海上から地上まで伸びたその光が消えた時、宮藤の目には焼け焦げた大地と根本から折れ火が消えずに燃えている木が映る。

さつきまであつた緑があつという間に焦土と化した。

凄惨な破壊の跡に息を飲む宮藤。そんな彼女に狙いを変更したウォーロックからのビームが打ち込まれる。

「ううっ！ソーマさん！聞こえますかソーマさん！」

その動きに気付いた宮藤はシールドで防御。ウォーロックの攻めを防ぎ切りながらインカムで呼びかける。

「ソーマさんお願いです、返事をしてください！ソーマさん！」

『…くっ…あ』

「声がする。ソーマさん？大丈夫なんですか!？」

か細くも確かに聞こえてきた声に宮藤は再度呼びかける。

どうにか無事であつて欲しいと願いを込めた宮藤に返事が帰ってきました。

『なんとかな…無事なんて、もんじゃやないが…つぐっ！』

ソーマの状態はボロボロだった。

ビームを食らう直前辛うじてディフェンドでの防御が間に合ったものの、ダメージは大きく変身が解けた体には数多の出血と火傷。

しかもビームによって倒れた木が運悪くウィザードライバーの上に覆い被さつてしまい、変身どころか身動きもできずにいた。

「急いでソーマさんのところにいかないといけないのにこれじゃいけないー！」

そんなソーマの状況を宮藤は正確に把握していないが深刻な状態であるのは声だけでもわかる。

しかしウォーロックに邪魔をされて助けに向かえない。

「ごんの、どけえええー！」

もどかしさと焦りに追い詰められながらもビームを防ぎ切った手で銃弾を放つ宮藤。



ウォーロックは前方に炎を帯びた魔法陣で銃弾を受け止め、二体に分身してビームを速射する。

もどかしさと焦りを感じているのはソーマも同じだった。

一刻も早く宮藤の加勢に戻らなければならぬと、腕に力を込めるが木はピクリとも動かない。

「宮藤、くそっ！なんでこんな時にこうなるんだよ…！動け…動いてくれよ！」

魔力はまだ残っているが変身しようにも、魔法を使おうにも、指輪を認証するためのドライバーの上に木が乗っかっていてそれもできない。

ウィザードとしてできることがなければ、ソーマとしてもできないとはなかった。

「散々迷惑かけて肝心な時にこれかよ！俺は…！」

唯一できるのはこの状況と自分自身に怒りをぶつけることくらいだった。

ウォーロックは緑色に装甲を変え、先ほどまでは装甲で受けていた宮藤の銃弾を機動でかわして、瞬時に背後に回る。

かろうじて目で追っていた宮藤が振り返って銃口を向ける。

しかしその時にはウォーロックはもう発射体勢に入っており、赤い光が宮藤の瞳を照らす。

(そんなんっ！)

息を飲む宮藤。

ところがウォーロックはビームの光を消すや否や上昇する。その僅か数秒後にそこを弾丸が駆け抜けた。

弾丸のやって来た方向に敵の反応を感知しビームを放とうとするウォーロックであったが、今度はロケット弾が炸裂。

被弾したウォーロックは損傷部から電流を流して、宮藤から距離を取る。

「今のって…」

「芳佳ちゃん！」

「リーネちゃん！皆！」

もしやと思い、声に振り向けばそこには仲間たちの姿があった。

リーネ、サーニヤ、エイラ、ペリーヌ、シャーリーとルツキーニ、そして坂本…さっきの攻撃は最初の弾がリーネ、ロケット弾はエイラの補助を得たサーニヤによるものだろう。

「よかった。間に合って」

「宮藤さん。貴方はソーマさんのところに。ここは私たちが引き受けますわ」

「わかりました。でも気を付けてください、あのウォーロックは」

「ネウロイのコアが使われてるんでしょ？それぐらいどうってことないって」

「それだけじゃないんです。ソーマさんの、ウィザードの魔法も使えるんです。それも魔法の切り替えも早くて」

「なんだって!?!」

宮藤からもたらされた情報に皆が彼女の方を見、次いでウォーロックに視線を移す。

すると損傷部は治っており、装甲も緑から黄に変わっていた。

「宮藤、簡単にでいい。今のウォーロックについて教えろ」

「あのウォーロックの装甲ですが、色によってソーマさんと同じように魔法の属性を変えてきます。緑なら風、青なら水です。それと他にも私が見たことのない光を出す魔法を使っていました。後ソーマさんが言うにはウォーロックに攻撃を通すには青色で液体になって攻撃を回避した後、そのタイミングだって」

「つまり指輪を付け替える隙のなくなったソーマとネウロイを同時に相手してるようなものって考えればいいわけか」

総括するシャーリーの言葉を聞きながら坂本は頭の中で情報を整理する。

ウィザードの上位互換の性能を保持した人類の科学によって造られたネウロイ、元から簡単にはいかないと覚悟していたが益々その懸念が補強されたようだ。

「宮藤お前はソーマを回復させてこい。この化物を仕留めるにはあいつの力も、501全員の力が必要だ」

「はいー」

宮藤を地上に向かわせて、坂本と他のウィッチたちはウォーロックとの交戦に突入する。

リーネたちが宮藤の危機を救い、周囲に集う様子はソーマも地上から見えていた。

そして安堵した。

「よかった。リーネとサーニヤたちも全員来てくれたか」

合流させるために向かわせていたプラモンスターたちを彼女たちが信じてくれるかどうか心配だったが、それはどうやら杞憂に済んだようだ。

ほっと一息つく彼の元に空から三人の少女が降り立った。

「遅くなってごめんね、お待たせソーマ！」

「よく持ちこたえてくれたわね。ソーマさん」

「ハルトマン、ミーナ中佐…」

陽気な笑顔のハルトマンと真剣な面持ちでありながらも安心させるような微笑みを向けるミーナ。二人の顔を映していたソーマの瞳は残る最後の一人に移る。

その彼女はというと

「どおりゃああー！」

言葉をかけるよりも真っ先にソーマに覆い被さっていた木を持ち上げ、近くに投げ捨てる。

窮屈さと重さから解放されたソーマに無言で手を差し出した。

「バルクホルン…大尉」

戸惑いを隠せないまま手を取り立ち上がり、複雑そうな表情でバルクホルンの顔を見つめるソーマ。

自分がした仕打ちに対して当然怒りを感じているはずだ。

彼女からどんな言葉が飛び出すかソーマは緊張した。

「あれを止めてからだ」

「えっ?」

「ミーナから話は聞いた。お前も言いたいこともあるだろうし、私からお前に言いたいこともある。だが今はあれを片付けるのが先決だ。あれを止めた後に洗いざらい全部きっちり話してもらおう」

そう言つてソーマから手を離すバルクホルン。虚を突かれたソーマが目を反らすとハルトマンやミーナが小気味いい笑みを注いでいた。

「どうした、まだ踏ん張れるだろ?それとももう限界か?」

「いいや、これでも諦めの悪さには自信があるんだ。まだまだやれるさ」

「ソーマさん、すぐ回復します!」

バルクホルンの言葉にソーマが応じたところに宮藤が上空から降りてくる。

着地と同時にソーマに近付いたとき、治癒魔法をかけて傷を癒している。

たちまちのうちに苦しみが徐々に和らいでいくのを感じながらソーマは上空で練り広げられている戦いを見上げた。

シャーリーがビームを打ちながら動き回る緑のウォーロックを上回る速さで進路を遮り銃撃を浴びせ、リーネが赤色のウォーロックの高威力ビームをかわしてライフル射撃で装甲を破損させる。

連携してウォーロックにダメージを与え追い詰めているが、ネウロイ化によって得た再生能力がタイムの魔法で速度が速まっている上にバインドやコピーの魔法での攪乱で接近もできずにいる。

決定的な一打を与えられず手を焼いているようだった。

「もう大丈夫だ」

「えっ、でもまだ傷がちつとも」

「今はこれでいい。全部終わったらまた頼む」

「わかりました。後できっちりと診させて頂きますね」

『ドライバードライバー、プリーズ!』

疲労と負傷のせいで苦しい顔をしながらも宮藤に感謝を告げ、頷くとウィザードライバーを再起動し、ハリケーンウィザードリングを翳

す。

「変身！」

『ハリケーン、プリーズ！フーフー、フーフーフー！』

これまで以上に気合のこもった声でウィザードは変身を遂げる。

「いくわよ」

ミーナの合図で彼ら五人は共に空へ飛翔。その接近に気付いた坂

本たちはウォーロックのビームを避けつつ、ミーナたちと合流する。

「これで501が全員揃ったな」

地上にいた面々とウォーロックと戦っていた面々が集い、一まとめになる。

坂本の言葉が示すように離れていたストライクウィッチーズを構成するメンバーが一堂に会したのだ。

多くの者がその言葉に頷き、喜びを顔に出す一方でウィザードは申し訳なさそうに口を開く。

「皆、今更何を言っても言い訳にしかならないけど…本当にごめん」

その言葉に一齐に視線が集まるのを肌で感じた。

どんな言葉を突き付けられるのかと、不安に苛まれながら待っていると

「もうさつきトウルーデが言ってたでしょ。そういうのは後にしよつて。それにもう誰も責めたりしないって」

「事情があるにしてもせめて説明の一つはして欲しかったですけどね。まあ、いつまでも過ぎたことを引きずる性分ではありませんし今回は多めに見てさしあげますわ」

真つ先に口火を切ったハルトマンがいつもと変わらぬ調子で、少し呆れを含みながらも顔に笑みを浮かべてペリーヌがそう返してきた。

想像していたのと正反対の答えに戸惑っているウィザードにシャーリーが声をかけた。

「そういうことだ。もう皆気にしてないってよ。ほら、顔見てみろよ」

シャーリーに言われて見渡していると確かに三人以外にも自分に不快感を露わにしている者は一人としていなかった。

むしろ皆柔らかい表情で迎え入れてくれている。

「…ありがとう」

仲間たちの優しさに心を刺激されたその時ホルダーの指輪の一つが眩い光を放った。

「ねえ、指輪が光ってるよ!？」

「使えなかった指輪…なんで今これが」

ルツキーニに指摘されてウイザードがホルダーから光る指輪を手にとると、それはマロニーから渡され使おうとしても使用できなかった指輪の内の一つだった。

そして光を放ったのは指輪だけには留まらず

「ペリーヌも!体!光ってるよ!」

「はあ?こんな時に何を仰って—うひゃあ!?!なんですのこれは!？」

「おい!ハルトマン、お前もだぞ!」

「嘘、わわっ!ほんとだ!なんで!？」

「私もかよ…:こういう現象だこれ…」

ペリーヌに続いてハルトマンとシャーリーまでもが緑の光を纏いだした。

そして三人を輝かせていた光はそれぞれの体の前で球体状になると引き寄せられるかのようにソーマの前に飛ぶ。

自身の胸の前で浮かんでいるそれをソーマが恐る恐る掴み開いて見るとシャーリーたちの体の光は消え、掌には三つの指輪が誕生していた。

指輪の表面にはハルトマンとペリーヌとシャーリー、それぞれのシンボルマークが描かれている。

「指輪が増えた…?それも三つも…よくわかんないけど今が使い時つてわけか。よし、だったら」

現象の原因は定かではないが指輪が共鳴したのは理由があるはずだと信じて、基地では認証されず使えなかった指輪をかざしてみる。

『プリーズ!』



「ここは、またあの時の…」

またあの空間に俺はいた。

前回と同様に全てが黒一色、自分の手足が見えているのがおかしくらいに真つ暗な世界だ。

夢の世界かとも思ったが、妙に意識がはつきりしていることからおそらくここは現実から時間と空間が切り離された特別な世界。いわゆる俺の中の精神世界のような場所なのだろう。

きつとあの指輪を使つたせいだ。

『さあ、選べ。選択の時だ』

そんなことを思っているとまたあの不思議な声が出た。前回無理矢理この世界から追い出された時に聞いたのと同じ身の毛がよだつような雄叫びを上げてから

『その指輪を使えばお前は更なる力を手にする。今よりも遥かに万能にして強大な力を。だが指輪を使うということは俺の力の一端を引き出し、解き放つということ。お前自身を苦しめることになるぞ。それでも力を求めるか？』

声の主がそう語りかけてくる。言葉の内容に反して声のトーンからは氣遣いのような感情は感じられない。相変わらず俺を値踏み…試しているような感じだ。

選択の結果、俺がどうなろうと奴には問題も興味もないのだろう。

「この指輪が俺を強くするんだな」

『その通りだ。ただしさつきも言ったが—』

「だつたらつべこべ言わずに力を貸してくれ」

被せるように決断を伝える。言葉を遮られて気分を害したのか、あるいは思いも寄らぬ返答の早さだったからなのか声が一度ピタリと止んだ。

俺は気にせず言葉を続ける。

「お前が信用できる奴なのかはわからない。でも今仲間たちを助けるための力が必要なんだ、それをくれるって言うなら頼む、お前の力を俺にくれ」

『頼む、この俺に頼む、とはな…はっはっは、面白い物言いをする。い

いだろう、ならば使いなしてみせる俺の力を！」

愉快そうに笑う声はそう言うのと、再び雄叫びを上げた。

その時俺ははつきりと見た。

逞しい爪と翼を備えた竜—ドラゴンが自分に向かって飛び込んでくるのを。

そしてかつて体験したことのない大きな力の奔流が体の中に入ってくるのを感じた。

★

『ハリケーン、リンクス—ビュービュー、ビュービュービュー—！』

指輪を翳した途端、軽快な音声が鳴り響く。ウィザードの身体を飲み込むように竜巻が生じ、雷と風のエネルギーを帯びた緑色の竜が胸から飛び出す。

「うわあ！危なっ！」

「なになに、今度は何!?!」

「なんとという魔力だ。何が起きてる！」

突然沸いて出てきてウィザードの周りを旋回する竜のエネルギーに巻き込まれまいと近くにいたルツキーニたちは距離を取り、放出する雷の光に坂本は目を手で隠しながらウィザードを見つめる。

緑の竜がウィザードハリケーンスタイルに背中から突進すると、その背後にはウィザードの魔法陣とそれを中心として三角形状にハルトマン・シャリー・ペリーヌのパーソナルマークが浮かび上がる。

そして風が音を立てて、魔法陣と共に消えた時ウィザードの姿は変わっていた。

「ソーマさんが変わった？色は一緒だけど、ちよつと違う」

宮藤の眩きは正しく、今回のウィザードの変化は今まで見てきた変化と違って色は変わっていない。直前のハリケーンスタイルと同じ緑色だ。

しかし見た目には多少の変化があった。

顔部分は新たに左右に突き出るように二本の角が生え、胸には何か



の生物の顔を象ったようなデザインができています。

ウィザード・ハリケーンリンクスの誕生だ。

「今までにないくらい力がこみ上げてくる。それだけじゃない、この安らぐような温かき…俺の中にペリーヌやシャーリー、ハルトマンの力が入ってるのか」

左手の指輪―ハリケーンリンクスウィザードリングを見つめるウィザード。

自身の内側から感じる強くて温かみのある力。元々指輪そのものに宿っていた物と自分の中にあると思われる竜の影響もあるが、温かさはそれ以外の力から感じる。

ペリーヌ、ハルトマン、シャーリー…指輪が反応した三人の魔力も今の自分は有している。

「これなら…！」

胸に眠る力、その強さを解き放ったウィザードは意気込んでウォーロックを見据える。

「各員に改めて告げます。作戦目標はウォーロックの破壊。皆気を引き締めて」

「了解！」

ミーナの令にウィッチとウィザードが気持ちの一つに応じる。

「さあ、特別幕だ。ウィザードとウィッチの共演を見せてやる」

「いきましよう！皆さん、これで終わりにします！」

## 第二十六輪 勝利せよ、ストライクウィッチーズ

ストライクウィッチーズの攻撃が暴走するウォーロックに注がれる。

数で上回り、多方面から射撃してくるウィッチとウィザードにウォーロックはネウロイの自己修復機能と魔法使いのデータを活かし対抗する。

緑色のウォーロックはハリケーンスタイル顔負けの速さをもって空中をあちこち飛び回り、銃撃を回避してはビームを打ち出す。

その赤い光を避けてサーニャはエイラの未来予知で予測した進路上にロケット弾を置く。

自身が突っ込んでいく形になったウォーロックは複数のロケット弾を横風にビームを放つ。

「右へ動くぞシャーリー！」

ロケット弾を潰して猛スピードで動くウォーロックの移動先をエイラは未来予知で読み取り、それにただ一人対処できるシャーリーに伝える。

「オーケー、任せろ！」

最速を自負する彼女は先も緑色状態のウォーロックのスピードに勝っていた。当然ウォーロックの移動先に先回りし、銃弾を浴びせる。

「こいつを使ってみるか。ペリーヌ同時に！」

「ええ、いつでも構いませんわ！」

ペリーヌの横に近付いたウィザードは新しく手に入れたペリーヌのパーソナルマークの指輪を使用する。

固有魔法で全員の位置を把握していたミーナがそちらを見ると二人が一緒に魔法で攻撃しようとしていることに気づく。

「リーネさん、バルクホルン大尉、ウォーロックを足止めして！」

「了解！」

「了解した！」

ミーナの指示にリーネとバルクホルンは即座に行動に移す。装甲

を黄色に変えてシャーリーとハルトマンからの攻撃にウォーロックが耐えていたところにボーイズライフルの弾丸が飛来。

それは展開した魔法陣で受けきるが、別方向から撃ち込まれた連続射撃には防御の手が追いつかず直撃をくらう。

「いきますわよ！トネール！」

『チョーイイネ！プラズマ、サイコー！』

ウィザードからは緑の、ペリーヌからは青の雷が放たれた。

二つの雷は一つに交わる。展開された魔法陣を真正面から打ち破りウォーロックの全身に二色のスパークが走る。

「ソーマさんが私の魔法を？それにトネールの威力もいつもと違う？

：ソーマさんだけじゃなく私も強くなっているということですか？」

ソーマが自身と同じ魔法を使ったこと、いつにも増してトネールの出力が上がったことに驚きを隠せないペリーヌ。

そしてそれは魔法を使用した本人もだった。

「俺がペリーヌの魔法を…ってことはもしかして、他の二人の魔法も」  
ペリーヌのパーソナルマークの指輪を使ってトネールに似た雷の魔法が使えた。

つまりは他の指輪もパーソナルマークの本人の固有魔法に由来した能力が秘められているのでは…そうウィザードが考えていた時、一足先に同じ結論に至っていたのかハルトマンが横に来ていた。

「ソーマ、次は私とやろうよ！できるでしょ？」

「やってみなきゃわかんないけどな。いいぜ、一緒にいくぞ！」

言葉を返しながらウィザードは指輪を付け替え、ハルトマンのパーソナルマークの指輪を装備する。

「準備はいい？いっくよー！」

『チョーイイネ！サイクロン、サイコー！』

「シュトルム！」

雷に続いてウィザードが魔法陣から発生させたのは竜巻。竜巻はウィザードとハルトマンを標的にビームを発射しようとしていたウォーロックを包み込み、暴風の中に閉じ込める。

そこへ次いでハルトマンのシュトルムが炸裂する。風を纏った突

撃でウォーロックの装甲を削り取り、竜巻が収まった瞬間を狙って固有魔法を発動させたルツキーニの魔法陣を張ったの突撃がより一層のダメージを与えていく。

「あんだけ食らってまだ動くのかよ…もう充分だろ」

呆れかえるエイラ。その視線の先には損傷部位から電流を漏らしながらも攻撃を続けるウォーロックがいる。

しかもダメージの蓄積によって修復速度は目に見えてわかる程に低下してはいるが、損傷機能も健在だ。

「最後は私だな。ちゃんと遅れずについてこいよ！」

「そっちこそ、置いてけぼりにしないで合わせてくれよ！」

『チヨロイイネー・ジェット、サイコー！』

ウィザードは残る最後、シャーリーのパーソナルマークの指輪を使う。

シャーリーは自身の超加速を超えた速さでウィザードはその彼女に僅かに劣る速さで共にウォーロックへと接近。

数多に向かつてくる風の鎖を避けていき、更にウィザードはコピーでウィザードソードガンを二刀流にして斬り込む。

「コアは胴の中心部だ！」

魔眼でコアの位置を特定した坂本の声を聞いて、二人はそこを重点的に攻め込む。

ウォーロックにも捉えられない速さで四方八方、あらゆる方位から叩き込まれる銃撃と斬撃は鋼鉄の鎧を崩していき、その合間にも遠方から銃弾をお見舞いされる。

しかしウォーロックも足掻く。

眩い光を放って、攻撃手の目を潰す。

「うっ、眩しっ！」

「光で前が、見えない…！」

「またこの光！」

高速移動していたシャーリーとウィザードはおろかウォーロックに目を向けていた多くの者が視界を潰される。

銃撃が止み、ウォーロックは赤色に変化し高出力ビームを宮藤たち

に放つ。

しかしそのために必要なエネルギーを貯めるより早くウォーロックに銃弾が放たれ、ビームの充填を中断させる。

「悪いな、お前がそうするのは全部お見通しなんだよ」

ウォーロックを狙撃したのは優越感に浸る笑みを浮かべるエイラと目を閉じたままのミーナ。

エイラは未来予知で目潰しを回避し、ミーナは視界を使えなくなつたものの空間把握で正確な位置を掴み射撃に成功したのだ。

「そー！」

「今だ！一気に畳みかけるぞー！」

他のウィッチたちの視力も回復しようひと押しを加えるべくサーニヤとリーネが銃器を向け、坂本も烈風斬の体勢に移行する。

ウォーロックは青色にチェンジし、水の鎖を飛ばして三人の動きを止める

『バインド、プリーズ！』

ことはなかつた。三人の体に巻き付くはずだった水の鎖は軒並み全て風の鎖に絡み取られ、それはウォーロック自身にも巻き付いた。

「偽物に本物が負けっぱなしでいられるかっての」

一矢報いてやったりと言わんばかりに勝気な笑みを浮かべているように思える声色のウィザード。

偽物だの本物だの拘りや張り合う気は本人の中ではないが、だからといってやられっぱなしなのは癪に障る。

火力の高い二種の銃撃と烈風斬が炸裂し、次の対応策を計算して実行しようとしていたウォーロックは爆発に飲み込まれる。

「コアが見えた！」

猛攻の末、ウォーロックの装甲の合間から弱点の位置を露わにする赤い光が漏れる。

「ファイナーレだ！」

『チョーイイネー！スペシャル、サイコーー！』

ウィザードは息を吹きかけている瞬間のドラゴンが描かれた指輪を使うと風を帯びた魔法陣が体をくぐり抜け、背中から羽根が宿る。

その羽根は鳥や蝶のような美しい見映えではなく、ウィッチのよう  
に使い魔の一部を象ったようなものでもなく、この世に存在するどの  
生物とも取れない禍々しく触れる物全てを傷つけるようなものだ。

「ソーマからなんか生えたあ!?あれ羽根か?」

「かつこいいー!いっけー、決めちゃえ!」

戸惑うエイラと興奮し好奇の眼差しを向けるルツキーニ。

羽根：翼をはためかせるとウィザードは高速でウォーロックの周  
りを旋回。

雷を照射しながら上昇する彼の飛行した後には風が生まれ、ウォー  
ロックが彼を射抜こうとしていた時には既に雷を迸らせた暴風の中  
に閉じ込められていた。

「っ私もー!」

竜巻の頂点に行き着いたウィザードを見上げて宮藤もそこへ飛翔  
する。

「いやああああ!!」

持てる魔力の全てを解放し、ウィザードは雷と風を纏った右脚を突  
き出して高速で降下する。

ウォータースタイルの力でリキッドで回避しようとするウォー  
ロックだがその高度な情報処理能力はその行動を取らせなかった。

無駄だと判断したからだ。雷を常に浴びせ続けられている状況で  
は液体となったところで結果は変わらない。

そして

―テンペストエンド

ウィザードのキックはウォーロックを貫き、機体を真っ二つに分断  
するがコアは生きていた。

キックが叩き込まれる寸前でウォーロックはコアを上半身へとず  
らしたのだ。

暴風が消え、ウィザードも遠く離れてしまったが誰も狼狽えること  
はなかった。

(後は任せたぞ)

既に至近距離でコアを捉えている者がいたからだ。

「いけ宮藤！お前が決める！」

「お願い芳佳ちゃん！」

坂本とリーネがその者の名を呼ぶ。

キツクを放っていたウイザードの後ろに追従していた宮藤は銃口を光り輝くコアに定める。

微かに働く自己修復機能で失った下半身を復元させようとしているが、それよりも宮藤が引き金を引く方が圧倒的に早かった。

銃口から飛んだ弾丸が真っ直ぐコアを撃ち抜く。

青だった装甲は色落ちた白になっていき、全身が白に染まった時ウオーロツクは粒子となって飛び散る。

「ふう〜」

肩を撫で下ろし一息ついて状況を確認するウイザード。背中の翼は消えていた。

澄み切った青空と雲が広がっていて、海は静かに優雅な波を立てている。

「終わったな」

「ネウロイの反応、完全に消滅しました」

坂本の眩きを周囲の反応を探っていたサーニヤが補強する。

ウオーロツクは破壊され、ネウロイがいなくなった。

それはつまり

「ガリアが解放された…私の故郷が戻った…？」

ペリーヌにとってこれ以上ない結果が現実になったことを意味する。

徐々にその事実を認識し始め、目から透明な涙が流れている彼女を見てウイッチもウイザードも温かな目を向けていた。

水平線に近づいた夕陽が波を橙に染め上げる。

ブリタニア基地の滑走路上で変身を解除したソーマはウイッチたち一人一人の顔を見つめていく…右から左へ一人一人視線を交差させていく中で何をどう言葉を発するべきか考えているとバルクホルンが自分に向かって進み出ている。

「すまなかつたな」

「何が？」

「その顔の傷、私が殴ったせいだろう」

「…ああ、結構効いたよ。強烈だった」

申し訳なさそうな彼女の視線の先にある頬の湿布をソーマは片手で触れる。

「でもいいんだ。むしろ思いっきりやってくれて嬉しかった」

元を辿れば自分の方がよっぽど非があるというのにそれを引き合いにささず真つ先に謝罪を口にする彼女の生真面目さにソーマは軽く微笑んで、言葉を返す。

それに影響されてかバルクホルンも笑い、後ろで見守っていた宮藤たちも同じく微笑んでいた。

その時だった。

パアンと音がしたと思えば、ソーマが倒れた。

それはほんの数秒の出来事だったのに宮藤たちには何が起きたのかわからなかつた。

ただソーマが腹部から赤い血を流して倒れていくのを茫然と眺めていた。

しかしそれも無理のないことだった。

撃たれた本人でさえも痛みを感じるより、困惑が勝っていたのか面食らった表情で天を見上げていたのだから。

「ソーマさん！」

「ソーマ！」

「スペランツァ大尉！」

ようやく事態を認識して宮藤を始め多くの者たちが口々に彼の名を叫び駆け寄る。腹部に空いた穴から流れる血を止めるべく宮藤は治療を始める。

「あの男はメイジの！」

坂本は弾丸の飛んできた方角を見るとそこには銃を構えているエリックがいた。

「俺を虚仮にしやがって裏切り者の分際で！許さんぞ！」



激情に駆られたエリックはソーマに銃を向ける。  
始末しようとしているのは誰の目にも明らかだった。

「あいつ、まさか本気で！」

「させるか！」

添えられた指が引き金を引く瞬間、弾けたように動き出した者たちがいた。

坂本は射線上駆け込んで飛んできた銃弾を扶桑刀で切り払い、バルクホルンが地を蹴って走り出す。

「馬鹿な?！」

坂本の神業に驚くエリック。その間にも魔法力をバルクホルンが距離を詰める。

「貴様あ！」

「かつ、はッ……！」

腹に重たい一撃をもらったエリックは膝から崩れ落ちる。

瞳を閉じ、意識を失ったエリックを尻目にバルクホルンは振り返って、倒れるソーマの元へ走り出す。

「ごほっ！」

口から血を吹きだし次第に目から光が消え、顔色が悪くなっていく。命の灯火が消えかかっていた。

「……やっちまったな……！」

「馬鹿！喋らなくていい！」

「ソーマ、嫌だよお！死なないですよ！」

「芳佳ちゃんお願い！頑張って！」

「必ず助けます……絶対、だから頑張ってください……！ソーマさん！」

顔を覗き込んで心配する仲間たちが暗闇の覆われつつある視界に見える。

離れていた坂本やバルクホルンもやって来て何かを叫んでいる。

もはや聞き取るのも困難で断片的にしか音を拾えないが、おそらく皆身を案じてくれているのだろうと思った。

そう思ったかった。

（死ぬのか俺……でもそれでもいいか、最後の最後で皆の場所を守るこ

とができたなら…:それで)  
どこか独り言のように、そして満足そうに心中で呟いて彼は眠っ  
た。

## 第二十七輪 空に再会を誓って

カーテンの隙間から漏れた木漏れ日の光がベッドで眠っているソーマの顔を照らす。

「う……ん……」

声を発し、目を開く。

目を覚ましてすぐ見慣れた天井と窓から見える外の景色を見て自分のいる場所が自室の中なのだと気付く。

（俺の部屋？俺、なんでここにいるんだ……？）

ぼんやりと考えながら首を横に動かしてみる。するとソーマは自分の体を避けるようにしてベッドに頭を置き、椅子に座っている少女を見つけた。

「宮藤？そうか、俺はあの後……」

時間が経つにつれて徐々に記憶が鮮明に蘇っていく。

新たに得た力で宮藤たちと協力してウォーロックを無事撃破した。しかしその直後腹部に痛みと熱を感じ、心配する仲間たちの顔を最後に意識を失った光景が

（撃たれたんだよな。たぶん……でも）

ソーマは宮藤を起こさぬよう注意を払って体を起こし、痛みを感じた腹を確認する。

衣服の下にある素肌はビックリする程綺麗で傷跡すら残っていないかった。

宮藤の必死な治療のおかげだろう。

「いつも助けられてばかりだな。大変だったろ、お疲れ様」

傷の手当に尽力してくれた眠る彼女の頭に手を置く。

手を離して、視線を部屋に移すとタンスの上に複数の指輪が置かれていた。

ウォーターリング、全ての使い魔の指輪、いずれも紆余曲折あってソーマの手元を離れていたリングたちだ。

「ん……」

それらを取ろうとベッドから離れようとした時宮藤の口元から声

が漏れ、顔を上げた。

彼女は視点の定まっていない瞳でソーマを見つめる。

「あれ…？ソーマさん？」

「おはよう。たっぷり寝れたか？」

「あつはい…：目が覚めたんですねソーマさん！」

空返事から数秒を要して声を上げる宮藤。眠気に飲み込まれていた瞳が一瞬にして気遣いの眼差しに切り替わる。

「三日間ずっと意識がなくて心配だったんです。痛みは感じませんか？」

「今のところ大丈夫そう。さつきも言ったけど本当にありがとうな」

「いえ…あつ、目が覚めたことミーナ中佐たちに報告してきますね」

「ああ」

さつき、という部分に首を傾げながらも椅子から立ち上がって宮藤は部屋を後にしようとする。

「待つて、俺もいくよ」

その声に宮藤が振り返ってみればソーマはベッドを抜け出して歩み寄っていた。

「まだ安静にしていた方がいいですよ」

「もう大丈夫だって。皆の顔も見たいしさ」

「分かりました。じゃあ一緒に行きましょうか」

そう言って宮藤とソーマは隣り合って廊下を歩く。

「中佐は執務室？」

「そうだと思います。手続きとか色々大変みたいですから」

「手続き？」

「ソーマー！」

「うお!？」

「きゃあ！」

何の手続きなのか、と聞き返そうとするソーマを喜びの叫びを上げた何者かが後ろから衝撃が襲った。

前のめりになって倒れるソーマを宮藤が数歩離れた位置で見て、彼

を後ろから襲った少女の名を呼んだ。

「ルツキーニちゃん！」

「元氣になったんだね！もう動いて平気なの？」

「…あーうん、そう言ってくれるのは嬉しいんだけど降りてくれたらもつと嬉しいかなーなんて思うなー」

「そんなに急いでいくなつてルツキーニ。別に逃げやしないんだから」

ソーマが自身の背中に馬乗りになっているルツキーニに言うと、そこに彼女が駆けて来た方角からはシャーリーが歩いてくる。

「その感じだと傷は平気そうだな。安心したよ、大事なさそうで」

「心配かけて悪かったな」

どいたルツキーニの重みから解放されたソーマは立ち上がりながら答える。

「どこに行こうとしてたの？」

「ミーナ中佐のところだよ。ソーマさんが起きたら報告するように言われてたから」

「なら私もいくよ。私たちの配属がどうなったのか知りたいし」

「配属？」

「ガリアが解放されてもう私たちの役目はひとまず終わった。次の配属先がどこになるか確認してもらってるんだ」

そういえばそうか、とソーマは相槌を打つ。

501の役目であるガリアの解放が達成されたのであれば各国から招集されたエースたちを一か所に留めておく必要もない。

基地を離れて皆それぞれ本来いた場所に戻るのだ。

しかしそこまで考えたところで新しい疑問が生まれる。

「それはわかるけどでも二人は普通にリベリオンとロマーニヤの原隊に戻るんじゃないのか？」

「違うよーだって私たち嫌われ者だもん」

「嫌われ者？どういうこと？」

ルツキーニの言を疑問に感じた宮藤が言う。

「私たち半ば厄介払いみたいな扱いで来たからね。元いたところに

戻ったってでまともに取り扱ってもらえないんだよ。ま、私とルツキーニにはむしろ都合がいいから気にしないさ」

「そんなことあるんですか」

「だいぶレアケースだと思うぞ：まあ人のこと言えないけどさ俺も」

二人がそんな扱いになった事情が気になるものの、そうなるに至った原因におおよそ見当が付いたソーマと宮藤はあえて深掘りはせずに話を切り替えることにした。

「宮藤はどうするんだ？」

「扶桑に帰るんだよね」

「そうだよ。実家の診療所の手伝いをするんだ」

先取りして述べたルツキーニに応じて宮藤が言う。

「仕方ないとはいえ少し寂しくなるな。まだ言うには早いけど本当に世話になったな。宮藤には感謝してもしきれないくらい恩ができたよ」

「そんな、私の方こそソーマさんにはたくさん助けてもらいました。もし扶桑に来ることがあったら是非家に来てください。その時は腕を振るって美味しいご飯用意させてもらいますね」

「そいつはいい話を聞いたな。だったらいつそのこと私たちもこのまま宮藤のどこに行くか？どうだ、ルツキーニ。毎日宮藤の作るご飯食べれるぞ」

「ええっ!?それはちよつと…」

「さんせー！芳佳のご飯、マツマの次くらいに美味しいから大好きだもん」

すっかりその気の二人に困り果てて助けを求めるようにソーマを見る宮藤。その視線の意味を感じたソーマは状況を一見した後、

「あ、じゃあ俺もお世話になろうかな」

「なんで乗っかるんですか！」

意地の悪い笑みを浮かべて右手を挙げた。

期待を裏切り自分ではなくシャーリー側に加担したソーマに思わず宮藤が叫ぶ。

「はっはっはー！」

「にやはっはっはー！」

そんな宮藤の反応に声を上げて笑うシャーリーとルツキーニ。釣られてソーマもからかわれた宮藤でさえも顔に笑みが生まれる。

こんなやり取りももう少しく見納めになるのか？ソーマが寂しさを感じているとそこに新しい声が入ってきた。

「なら私も宮藤さんのお宅にお邪魔しようかしら。賑やかで楽しそうだわ」

その声は歩みを進めていた方向からミーナであった。彼女の両隣にはバルクホルンとハルトマンの姿もある。

「ミーナ中佐まで…」

「冗談はよせミーナ。見ろ、宮藤が困惑しているだろう」

「とか言って本当はトゥルーデが一番宮藤のところに行きたいんじゃないの」

「そんなことはない、馬鹿を言うな」

バルクホルンは軽やかに一蹴するが、ハルトマンの言葉が凶星を付いていたのは返事の速さが物語っている。

そして何人かはそれに気付いていたが、本人への配慮として何も言わずにおこうと揃って自己完結した。

「色々心配かけて申し訳ありませんでしたミーナ中佐」

姿勢を正してソーマはミーナの正面に立つ。目線と言葉こそミーナに向けているが、彼が放った言葉はミーナのみならずそこにいた全ての者と場にはない他の者たちにも向けられていた。

和やかな場の空気が少し緊張感を含み張り詰めたもの変わった。だが

「謝ることはないのよ。何事もなくて安心したわ…でもある意味ちようどいいタイミングで目を覚ましてくれたわね」

それも一瞬にして終わった。ミーナはいつもと変わらぬ素振りでお話かけた。

しかしその内容にソーマは疑問符を浮かべるように片眉を上げた。『ちようどいいタイミング』

その意味を訊ねようとした時、偶然にもルツキーニが先行して疑問

を呈した。

「ちようどいいって何が？」

「ガリア解放のお祝いを兼ねたちよつとしたお食事会、といったところかしら。早い人はもう明日にはここを発つことになるからその前に501全員で集まる機会を作ろうって話を昨日したはずだけど」

「あれ？そうだったけ？」

「大方話半分に聞いてたんだろう…まったくいい加減さは最後まで変わらん。その調子で余所やっていけるのか」

「シャーリーがいるから大丈夫だもーん」

「そういう問題ではない。第一いつもお前はそうだ。才能は認めるが軍人たるもの行動に責任を持つべきであって—」

「まあまあ、その辺で勘弁してくれって」

相変わらず真剣さに欠けるルツキー二の態度に呆れて小言を言うバルクホルン。

このままでは長くなりそうな説教の空気を感じたシャーリーが彼女の言葉を打ち切ろうとした時、宮藤が何かを思い出したように声を上げた。

「あつ、そうだ…食事会の準備しなきゃ！」

「どうした宮藤？」

「リーネちゃんと食事会の料理を作る約束してたの思い出して。急いで作らなきゃ」

「今からじゃさすがに厳しいだろ。俺も手伝うよ。じゃあ中佐たち、また後で」

「すいませんお願いします。お先に失礼します皆さん」

時刻はもう夕方になりかけている。そんな時間からパーティー用の料理をたった二人だけで作るとなるとソーマの言う通りとてでもないが間に合わいそうにない。

断りを入れて宮藤とソーマは揃って食堂へ足早に向かう。

「まだ夜には時間があるから焦らないでいいわよ」

ミーナは快く快諾し慈母のような微笑みで送り出した。のだが、二人が見えなくなつてからこんなことを言いだした。



「私も手伝おうかしら」

「それはまた別の機会でいいんじゃないかミーナ」

「そうそう、ミーナにはやることあるんだし宮藤たちに任せようよ」

ミーナと料理、その組み合わせがもたらす末路をよく知っているカールスラントの二人はなんとかそれを避けようとした。

苦い顔をしながら必死に

☆

以前歓迎会を行ったテラス。そこが食事会の場所になっていた。

ビュッフェテーブルには宮藤とリーネとソーマが作った料理が並び、各テーブルにはミーナを除いた501隊員が座っている。

ただ一人、ミーナはというとグラスを手に皆の視線を集める形で星に照らされた夜空の下に立っていた。

「ここにいる皆のおかげでガリアは解放され、私たち人類は平和へ一歩前進することができました。皆が気持ちを一つにして互いに助け合ったからこそ成し遂げられたことだと私は思います。

解散した後も私たちは皆それぞれ違う新しい場所でまた戦うことになるでしょう。けれどたとえ離れていようとも私たちは家族で強い絆で繋がっている。それだけは覚えておいて。最後になるけれどこんなに頼りない隊長に今日までついてきてありがとう。とても感謝しているわ」

ミーナが言い終わると各席から拍手が沸き上がる。拍手が止んだのを確認するとミーナは咳払いして一呼吸置く。

「とまあ、形式的な挨拶はこのくらいにして…早く始めましょうか。せっかく宮藤さんたちが作ってくれた料理が冷めてしまうものね。では、皆グラスを取って……乾杯」

「乾杯！」

グラスを合わせる音と全員の声、それがパーティーの始まりを告げる。

各々料理を取って食べながらそれぞれ話したい相手と話したい会

話で盛り上がっていた。

「話したい相手はいないのか？」

開始から一時間弱が経った頃

誰とも話さず一人欄干に寄りかかってテイラミスケーキを食べていたソーマに坂本が声をかけてきた。

その隣にはミーナもいる。

「もう結構話した後だよ。さっきまで宮藤やハルトマンと」

そう言つて首を向けるソーマの視線を追つてみると、宮藤はリーネとハルトマンはバルクホルンと一緒にサーニャ・エイラと話している。

他にもペリーヌはシャーリーとルツキーニの相手をしているようだった。

なるほど、ちょうどタイミング悪く話し相手がいなかったのか。

状況を見て坂本が納得するとソーマが気まずそうに表情を一変させて質問してきた。

「あのさ。マロニー大将たちはあの後どうなった？」

「マロニーはウォーロックとの戦いの翌日基地に来た上層部の者たちに拘束された。奴の指揮下にいたメイジたちも一緒だ。もつとも彼らは特に問題行動を起こしたわけでもないから事情を聞かれることはあってもマロニーのように身柄を拘束されるような扱いを受けることはないだろうがな」

「エリック、俺を撃ったメイジも？」

「マロニーと同じく拘束されたわ」

「そっか…」

消え入りそうな声で呟くソーマ。

「気にしているのか？彼らのことを」

「元はと言えば俺のせいだから。俺が裏切らなきゃあいつがあんな真似しなかったはずなんだ」

負い目を感じている。そう坂本とミーナは感じていた。

マロニーが正しかったとは言わないが、自分の取った行いもまた正

しかつたとは言えない。

そのせいでエリックが軍人としてあるまじき行動に出してしまったことを踏まえれば尚更…そう考えているように思えた。

「でもそのおかげでこうしてガリアは解放されたわ。確かに貴方も彼も軍という組織に属する人間としてあるまじき行動をしたという点においては同じだけれど人としては大きく違う。貴方は彼のように簡単に人に引き金を引くような人じゃない…貴方の裏切りがなくてもああいう人はいずれ問題を起こしていたでしょうね」

「気にするなどは言わんが気に病むのはもうよせ。お前の思いは充分皆に伝わっている」

二人はそれぞれ率直な言葉をソーマへと口にする。

「けれど上層部にも理解してもらえるかは難しいところね」

整った顔に深刻そうに皺を寄せるミーナに二人の視線が集まる。

「司令部から意識が目覚めたら出頭するようにと通達を託されたの。おそらく今回の貴方の行動について議論するつもりね」

ミーナとしてもせっつかくの空気に水を差すようなことを言いたくなかったが伝えなくてはならなかった。

幸いにもソーマはそれを理解してくれたようで嫌悪感も困惑も示さず、平然とした態度だ。

「当然そうなるだろうな」

「軍も功績も考慮して判断してくれると思うしよっぽど酷いことにはならないでしょうけど、最悪な方向にはならないように私もできる限り手を尽くしてみるわ」

「何から何まで申し訳ないな」

「仲間のためだ。これくらいどうということはない」

「そうね、この程度ならいくらでもするわ」

助けられてばかりな自分に嫌気が刺してつい呟いたソーマの言葉に坂本もミーナも気持ちのいいくらい善意を込めて返してくれた。するとそこにタイミングを伺っていたのかのように宮藤が歩いて来る。

「宮藤さんどうしたの？」

「あの、リーネちゃんのカメラで皆の写真を撮ろうってことになったんですけど今いいですか？」

「ええ、大丈夫よ。ちょうど話の区切りもついたし」

顔を見合わせて三人は宮藤を先頭に移動する。その際ソーマは食したケーキの皿とフォークをテーブルに置いて、口元に付いた残りかすを手の甲で拭う。

カメラを持ってしているリーネの周りに集う輪の中に入ったところで三人を加えての話合いが始まった。

「誰がシャッターを押すんですの？」

「カメラ、私のですし私が撮りましょうか？」

「それじゃリーネが映れないじゃん。皆で撮る写真なんだからリーネもいなきやダメだよ」

「でも誰かが外れないといけませんよね」

「俺が撮ろうか。コネクト使えば俺も映って撮れるし」

「却下だ。せっかくの記念の写真を心霊写真にでもするつもりか」

「心霊写真かーそれはそれで味があって面白そうだけどな」

誰がカメラを持って写真を撮るかで論争が勃発。

全員が写真に納まって撮りたいのだがそのためには誰かが割りを食べないといけないというジレンマに悩み苦しんでいるとソーマのホルダーからゴーレムが勝手に起動して飛び出す。

変形しながら着地すると、自分の胸を何度も打つ。

「うお、どうしたんだ急に？」

「任せろ、って言ってるんじゃない？ほら」

動作から心情を読み取ったルツキーニの言葉にゴーレムは正解とどうかのようにうんうんと頷いている。

「おーけー、それじゃ頼んでいいか。ただ高さが足りないから助手を」  
困惑していたソーマだったがその説明を聞いて納得するとゴーレムの要望に応えるべくガルダを呼び出す。

ガルダはリーネからカメラを受け取ったゴーレムを脚で掴んで空中に滞空する。

これで撮影準備は整った。

しかし列を組むにあたってまた別の問題が発生した。並びの編成だ。

「真ん中どうする？誰がいいかな？」

「はい！はい！サーニヤの隣は私だかんナ！」

「で、でしたら私も坂本少佐の隣を所望しますわ！」

「そんな強調して言うことか」

「背の高い者を後ろにそれ以外の者を前にするとして中央か。ミーナでいいんじゃないか」

「いいわよ。じゃあ私の前、前列の中央は宮藤さんでいいかしら」

「えっ、わ、私でいいんですか!？」

幾多に及ぶ言葉を重ねた結果まず後列の中央がミーナ、前列の中央が宮藤となりそこから残りが決まるのは早かった。

前列に左からハルトマン・リーネ・宮藤・サーニヤ・エイラ・ルツキーニ

後列は左からバルクホルン・ペリーヌ・坂本・ミーナ・シャーリー・ソーマ。

皆その通りに並び後はガルーダに持ち上げられているゴーレムがシャッターを切るだけなのだが何を思っただかソーマは静かに数歩右へとズレ、距離を取ろうとする。

「ほら、もつとこれぐらい寄れって」

「うおっ!？」

しかしその動きに気付いたシャーリーがその腕を掴んで引っ張ると、自分の腕を彼の肩に回して引き寄せる。

完全に不意を疲れたソーマの顔が彼女の横顔とピッタリ密着し、そのタイミングでシャッターが切られた。

そして写真も無事に撮れ、料理もなくなりいよいよパーティーにお開きの時が近づいてきた。

そんな時だった。ふとソーマが声を上げたのは。

「そうだ。俺からも一つサプライズするよ」

前触れもなく発せられた言葉は多くの視線を集める。

「サプライズ？なんだそれ」

「うーん、なんていうかちよつとしたアートかな。今思いついた」

『フレイム、プリーズ！ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

疑問に思うエイラにそう言うのとソーマはウィザード・フレイムスタイルに変身。そして

『フラワー、プリーズ！』

フラワーリングを付けた右腕を空に向けて魔法力を送りこむ。

すると夜空に魔法陣が浮かび、直後花の形をした光となって弾けた。

「うわぁ花火だ！」

「花火？」

光の花の正体を咭く宮藤に隣にいたりーネが訊ねる。

その問いかけはりーネ以外の者たちも抱いていた。

「扶桑だとお祭りとかの時によく職人さんたちがこうやって打ち上げるの」

「鎮魂や悪霊を払う目的でも打ち上げられる物でもあるな。まさか扶桑から遠く離れた異国の地で花火を見れるとは粋な計らいをしてくれたものだ」

扶桑で見たことがある宮藤と坂本は懐かしい目で、それ以外の者たちはまるで珍しい美術品を見るかのような目で空を見上げる。

魔力を注ぎ終えたために変身を解くソーマ。その隣に宮藤が立ち、声をかけた。

「ソーマさん、私たちきつとまた会えますよね」

それは優しい声だった。けれど花火の音に打ち消されずはつきりと鮮明にソーマに届いた。

「必ずまた会おう。そのためにも俺はこの空を、希望を守るよ。約束する」

「私も頑張ります。自分にできることを精一杯」

この先どうなるかはわからない。またここにいる面々で集まれるのか、もうこれで最後となってしまうのか。

次に会うのは戦いの場か、落ち着いた平穏の中か。

でもこの瞬間、二人だけでなく全員が等しく胸の内で願い信じていた。

いつかの未来で誰一人欠けることなく再び会えると

そんな祈りを彼と彼女たちは空を見つめる瞳に宿していた。

## 第二章 アルダーウィッチーズ編 1944 第二十八輪 新天地へ

ベルギカ、サントロン基地。

第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズの活躍によりガリアが解放されてから数日後のこの基地に珍しい来客が訪れていた。この基地内では比較的珍しいロマーニヤ空軍の軍服を着た彼をサントロンに駐留する軍人やウィッチたちは奇異の眼差しで見た。

「ねえもしかしてあれが例の？」

「思ってたより普通の人ね。結構私好みの顔かなーなんて」

「あいつあのマロニーの部下だったんだろ…大丈夫かよ」

「でもガリアの解放に貢献したっていうし…なんでここにいるんだろ。こここの所属になるのかなあの人」

廊下を歩く彼の耳にすれ違う人々の囁きが聞こえる。

彼は良くも悪くも特異な存在であるためにその顔と名を知られていて、つい最近も属していた部隊が挙げた功績も相まってますます軍の内外を問わず有名になった。

声を潜めているのをいいことに好き勝手に色々と言ってくれているが彼は視線を寄越さず、毅然とした態度で前を向いて歩く。

「入りましたえ」

ある部屋のドアを数回ノック。中から許可が降りたのを確認してドアを開ける。

執務室の椅子に座る黒髪の女性を前に彼は姿勢を正して敬礼をした。

「お初にお目にかかります。ロマーニヤ空軍所属ソーマ・スペランツァ中尉であります」

「ご苦労、ひとまず座りたまえ。立ったままでは落ち着かんだろう」

女性将校の言葉に「失礼します」と返してソーマはソファに座る。その動作の終わりを見届けてガランドは彼の真正面に移動して、腰を落ち着かせる。



「君の話はよく聞いているよ。初めましてスペランツァ中尉、私はアドルフ・イーネ・ガランド、少将だ。よろしく」

「いえ、こちらこそ」

友好的かつ余裕に満ちた表情でガランドは手を差し出しソーマの手を握る。

「司令部から話は聞いているだろうが今日付けで私が君の直属の上司となる。所属としてはロマーニャ軍のままなのは変わらないが今後主な命令は私を通じてということになる……ここまでで何か異論はあるかい？」

「いえ、ありません」

「よろしい、なら続けよう。次は君の今の立場の確認だ。ウォーロックの開発に関わったマロニー大將が現在も司令部に身柄を拘束されているのは既に知っているな。その彼に対して君は今こうしてここにいる。何故だと思う」

「俺がウィザードだからですね」

授業で学生に問題の解答を求めるようなガランドの物言いにソーマは終始落ち着いた態度で返す。

「その通りだ。彼と違って君はただ一人の魔法使い。替えの効かない存在、ガリアを解放し暴走したウォーロックを撃墜した君の能力を殺すには人類にとつての大きな損失となる。だからこそ彼らは君の問題行動に目を瞑って処遇を一階級下げる程度に留めた……そして私に君のお目付け役という白羽の矢が立ったというわけさ」

ソーマも司令部の将官に事情聴取の際に同じことを言われた。軍人としての素質を問われる行動を判断材料に含めてもウィザードである君をマロニーと同じように対応しておくには惜しいと

「とはいえ私は君のお目付け役になったのにはそれだけが理由ではないがね」

そう言いながらガランドは軍服のポケットから一枚の手紙を取り出す。

「手紙、ですか？」

「他にも後五枚程ある。差出人は君もよく知っている人物だ。誰から

だと思う」

考える時間を与えられソーマは記憶の中にあるこれまで出会ってきた人物の顔を思い浮かべる。

ただでさえ少ない付き合いの中で将官クラスに手紙を出せる自分のよく知る人物となると最有力として挙がるのは

「ミーナ中佐ですか？」

「それとバルクホルン大尉、ハルトマン中尉もだ。彼女たちはかつて私の部下でね。今回の決定を知って君がここに来る数日前から私の元に手紙を送ってきたんだよ。いずれも君の人柄についてよく書かれていて大分参考にさせてもらった。

それにしてもミーナ中佐はともかくまさかバルクホルン大尉やハルトマン少尉にまでこうさせるとはね。特にハルトマン少尉は性格上このようなことをするとは思ってもみなかったから驚いたよ」

そうは言うもののガランドの声色からは驚きよりも嬉しさの方が勝って聞こえるような気がした。

「だからさつき私は白羽の矢が立ったという言い方をしたがそれは少し適切ではない。私の方からも是非とお願いしたんだ。彼女たちにこうまでさせる君という人物に興味が沸いてね」

「…そうでしたか。お気遣いありがとうございます」

「礼なら私よりミーナ中佐たちに言ってくれ。あ、しかし手紙のことは黙っていてくれよ。バルクホルン大尉の手紙には特に私が君にこの手紙の存在を明らかにする事態を想定していないような文面が記されていたからね。うっかり君が手紙について言及しようものなら君ではなく私が彼女に怒られてしまう」

(それ言っちゃまずいやつなんじゃ…?)

少将という立場にしては厳格なイメージでもないし、むしろ一風変わった印象を受ける。

しかしハルトマンの上司を務めていて今も手紙を送る仲というのなら納得だ。

彼女に素直に言うことを聞かせられる人物となればこのくらい変わっていないければ務まらないだろうから。

「それで君の今後についてだが司令部から通達が来ている。君の次の配属先はヴェネツィアだ」

「!…ヴェネツィアですか」

「ヴェネツィアには最近結成されたばかりの統合戦闘航空団があるんだ。名前は第504統合戦闘航空団、アルダーウィッチーズ。君には501で得た経験を元に力になってもらいたいとのことだ」

「お言葉ですが俺にできることなんてそんなにないと思います」

「マロニーの作った魔法使いメイジ、だったかな。軍では押収した研究資料を元にベルトの更なる量産を軌道に乗せ、各軍に配備しようとしている。今後の戦場において主要な編成となるウィッチとメイジの共闘の円滑化、という意味での辞令だと思うよ。それと後は試運転かな」

「試運転…」

「そう、君と私のね」

試運転、この場合ガランドがソーマを上手く活用できるかどうかという意味だろう。

功績を挙げられるのであれば上々。

もし大した活躍も出せず不利益な行動を取るようならマロニーと同じ末路を辿り、その責任の所在はガランドとロマーニヤ軍で留まる。

「まあ要はしばらくヴェネツィアで心機一転、気持ち新たに頑張っただけ欲しいという訳さ。私からはこれで以上だ」

「了解しました。その旨、しかと承りました」

「うん。今日はここで身体を休めて後日ヴェネツィアの指定された場所に向かってくれ。そこから基地までは迎えの者が来てくれる手筈になっている」

「わかりました」

言い渡された命を承諾しソーマは出入口へと向かう。

「あの、ガランド少将」

「ん？」

その言葉に視線を切っていたガランドが顔を向けると扉の前で

ソーマが首だけを向けて見ていた。

「もし足枷になるようでしたらいつでも切り離してくれて構いません」

「そうしなくてすむように頑張ってくれたまえ。期待している」

「そうできるように頑張ります」

ガランドは笑みを浮かべて言い放つ。

「おっと、私からも一つ言い忘れていた」

淀みなくかけられた言葉に頷いて完全に退出しようとしていたソーマを今度はガランドが呼び止め、視線を向けさせる。

「これから長い付き合いになる。何かあれば気兼ねなく相談してくれたまえ」

その言葉に「わかりました」と笑顔で頷いてソーマは扉を閉める。小さくなつていく足音を扉越しに聞きながらガランドはソファに深く腰を預けた。

「聞いていた通りの律儀な青年だな」

それが初めての対面を終えての感想だった。

事前にミーナたちの手紙から人となりを知っていたが実際に会って、言動の節々を注視して一つわかったことがある。

彼は根っからの善人氣質の人間だと。少なくとも自分だけの利益のために裏切りを働くような野心は持ち合わせていないだろう。ミーナたちからの証言も相まってそれは確信を持つてる。

「しかし彼にとつての課題はここから。どう変わっていくのかな彼は」

新しい場所で何を得て、新しい出会いがどんな変化をもたらすのか。

次にソーマと出会うのが楽しみに思えるガランドであった。



何処かの国の、何処かの街の暗がりには三つの人影があった。

人影から少し離れた通りには左右から人の往来が絶えることなく

続いていて、人影からもその動きは見えていた。

しかし人影にとつてはそんなものに関心はなかった。

「ブリタニアの巢が落とされたそうね」

「なんか新しく出てきた妙な奴でてきたよな。なんつったってけな確か…」

「ウィザード、か？」

「そうそう、そいつだそいつ。ウィザード、だったか…あいつ、俺がやっていいよな？」

「単に暴れたいだけだろう貴様は」

「その何が悪いんだよ。なあいいだろ？」

「駄目だと言つても聞かないでしょう貴方は。まあ、面白そうだしいいかもね。でもやるなら徹底的にやるのねウロボロス」

「ま、見とけや。あんな奴なんざ俺にかかれば一捻りさ」

一つの影が離れ、明かりに照らされた街の人混みの中に紛れ去っていく。

「止めなくていいのか。あいつ、見境なく暴れるぞ」

「口で言つて素直に聞くような奴だと思ふ？それに別に私たちの存在が明らかになったところでどうということはないわ。でしよう？へラ」

「確かに、お前の言う通りだな。人間に知られたところで奴らにはどうすることもできない。ウィッチだろうがウィザードだろうが所詮はただの人間。私たちの脅威とはなりえない」

## 第二十九輪 情熱のアルダーウィッチーズ

水と建造物が一体化した構造の街、ヴェネツィア。

数ある街の名物の一つリアルト橋から少し離れたサンマルコ広場にてソーマはいた。

「ここで待つてれば迎えが来るらしいけど…まだ来てないみたいだな」

ガランドの話によれば第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズから迎えの者が来て基地まで一緒に行く手筈になっているそうだが、それらしき人物は今のところ確認できない。

早く来すぎたのもあってこうして十数分、予定時刻からは数分が経過している。

焦りも苛立ちもないが、何もせずただ待つているだけというのはいかんせん時間の流れを遅く感じて退屈だ。

退屈すぎて露店のジェラートでも買ってしまおうかという思いまで生まれてしまっている。もちろん迎えの人の分も買うつもりで

しかしいつ来るか定かではない待ち人の分を今買ってしまうのもどうか、かといって自分だけ食べてしまうのもそれはそれで待ち人に失礼だろうし、もしかしたら食べている途中で来てしまうかもしれない。

それならいっそのこと買わないべきか…などと決断に悩んでいると広場の前の通りに軍用ジープが止まり、運転席から一人の軍人が出てくる。

(あれがそうか?)

白い軍服、見た目は自分と同じくらいの年齢の少女。おそらくは彼女が自分の待ち人だろうと判断したソーマは自らも歩いて彼女との距離を縮める。

「遅くなってしまうてごめんなさい。ソーマ・スペランツァ中尉で、間違いないかしら?」

「はい。貴方がアルダーウィッチーズの?」

「ええ、初めまして。私は竹井醇子。扶桑海軍大尉で第504統合戦

闘航空団アルダーウィッチーズの戦闘隊長を務めているわ。さあ、車に乗って、基地まで案内するわ」

軽く自己紹介を済ますと二人はジープに乗り込み、竹井の運転で基地を目指す。

その道中ソーマは竹井の横顔を見ながら話しかけた。

「扶桑の人なんですね」

「ええ、坂本少佐と同じくね」

「少佐を知ってるんですか？」

「美緒とは同期で一緒に戦ったことがあるの。リバウの時とかね」

（今度は坂本少佐の知り合いか。思ってたより世界狭いな）

ガランドに続いての竹井、これで501を離れてからミーナと坂本の知り合いと出会ったことになる。

いずれも階級が高く、ずつと前から軍にいるから顔が広くて当たり前なのだろうがそれにしたって数日の内に知り合いの知り合いに二人も遭遇するとは前例がなさ過ぎてつい驚いてしまう。

「美緒は元気かしら？」

「元気でしたよ。剣の稽古も少しですけど受けました。でもあの体力には驚きますよ。疲れを知らないのかってぐらい朝から自分の訓練だけじゃなく他の隊員の指導までして」

「そういうところ相変わらず変わってないんだ。それでこそ美緒って感じで安心するけど」

到着までどう話を広げればいいのか悩んだが共通の知り合いのおかげで初対面同士でも話に華が咲いた。

この勢いでソーマは抱えていた疑問を訊ねてみることにした。

「あの一つ聞いていいですか？竹井大尉から見てアルダーウィッチーズの人たちってどんな感じですか？」

「そうね…だいたい個性的な人が多いかしら。それと後敬語使わなくていいわよ。お互いその方がやりやすいでしょ」

「個性的、ですか」

「隊長は特にその代表格といえるかも。気分屋とかいい意味で隊長らしくないとか結構奇抜な発想をすることが多いわね。貴方

に合わせて言うならミーナ中佐とは真反対の人物像ね」

竹井の言葉にソーマは隊長の人物像を想像してみる。

気分屋でいい意味で隊長らしくなくて個性が強く、ミーナ中佐と反対の人物像：竹井から与えられた情報を整理するとあのうじゅ娘、自由気ままな野生児キョウのような少女ニョウが真つ先に連想されるが、さすがに彼女ほどではないだろうとすぐまだ見ぬ上官への無礼を脳内から抹消する。

「大変そうですね」

「ふふ、でも頼もしい人よ。もちろん隊長だけでなく他の皆も。きつと上手くやれると思うわ」

「それを聞いて安心しました。むしろ会うのが楽しみになってきた」

「そう言ってもらえると嬉しいわ。でも敬語がなければもつと嬉しかったかも」

「あ…」

指摘されてソーマは気付いた。まだまだ直すには時間がかかりそうだ。

「すいません」

「謝るほどでもないわよ。ちよつとからかってみただけだから。ごめんなさいね」

真面目な反応に苦笑する竹井。

海に面した険しい崖道を進んでいると

「あれは…何かしら」

水平線の奥、閃光の発生と消滅が見える。それも一度ではなく、何度も。別々の場所で

不審に思つて車を止め、外へ飛び出す二人。

使い魔である白犬の耳を生やした竹井が強化された視力で確認してみると各所に赤い光を点在させている黒い物体とその周辺を飛び回る人影、その影が作りだす飛行機雲を捉えた。

「ネウロイ！戦ってるのはフェルたちね」

「もしかしてアルダーウィッチーズの？」

「ええ」



魔力による五感の強化ができないソーマに返答しながら竹井は敵戦力を確認する。

「敵は大型一体、特に苦戦してる様子はないみたいだけどコアを見つけていないよね」

「魔眼を持つてる人がいないのか」

「残念ながら」

ネウロイのコアの位置を把握する固有魔法『魔眼』。それを有する人物がいるのといないのでは戦況が大きく変わってくる。

魔眼を持つウィッチの指示した箇所を狙って撃破するやり方ができなくなればひたすら手探りで装甲を破壊してコアを見つけにくいしかなく、時間も労力も遥かにかかってしまう。

「ネウロイがこっちに向かってくる」

ウィッチの銃弾を受けながら街に侵攻しようとしているネウロイの姿が竹井の目にはつきり大きく映る。

加勢したいところだが手元にはストライカーはおろか銃火器もない。

「銃さえあれば…」

「向こうから向かってくるならここからでもいけるか。竹井大尉、下がってくれ」

悔しさに歯噛みする竹井にそう言いながらソーマは前へと進み出る。

『ドライバーオン、プリーズ！』

腰元にドライバーを出現させ、慣れた手つきで左の中指に付けた赤い指輪をドライバーにかざす。

「変身！」

『フレーム、プリーズ！ヒーヒー、ヒーヒー！』

竹井の前でソーマは変身し、ウィザードフレームスタイルが降臨する。

「これがウィザード…」

『フレーム、シューティングストライク！』

『コピー、プリーズ！』

実物を目の当たりにして多少驚きを隠せない様子の竹井の前で  
ウィザードは着々と攻撃の準備を整える。

何人もの自分を複製し、全員が銃形態変形させたウィザーソードガ  
ンをコピーで二丁にしてネウロイに向けて構えた。



### 数刻前

二人が向かっている第504統合戦闘航空団アルダーウィッチー  
ズの基地の庭では三人の少女が草木の上に寝そべっていた。

「ねえマルチナ。これから来るウィザードってどんな奴かしらね」

「ドツリオ隊長はすつごく楽しみにしてるよね。面白そうだって」

真つ先に声を上げるのは赤毛と強気な顔つきが目立つ少女。フェ  
ルナンディア・マルヴェツツイ少尉、赤ズボン隊のリーダーを務め、  
『フェル』という愛称で慕われている。

その彼女に同調する少し背の低い少女はマルチナ・クレスピ曹長。  
フェルと同じく赤ズボン隊に属するメンバーの一人だ。

「ドミニカはどう思う？」

「どんな奴が来ようと私は一向に構わない。ジェーンさえいればそれ  
でいいからな」

「あんだ口を開けばそればっかね。らしいちやらしいけど」

問いに毅然とした口調で返したのはドミニカ・S・ジェンタイル。  
返って来た実に彼女を彼女たらしめる言葉にフェルは呆れる。

「こんなところにいたんですね！フェル隊長とマルチナも手伝ってく  
ださいよ。歓迎会の準備がまだまだ終ってないんですから」

「大将ですよ！ルチアナさんと私だけじゃ手が足りませんよ」

困り顔で現れたのは二人の少女。片や黒髪の、もう一人は明るい灰  
色の髪の少女。

黒髪で長身の方はルチアナ・マツツエイといい、フェルやマルチナ  
と同じ赤ズボン隊の一員。

隣に控えるはジェーン・T・ゴッドフリー。ドミニカの相棒的な存

在で彼女を『大将』と呼び慕っている。

二人は隊長からウィザード歓迎会の準備を進めていたのだが作業中、同じく命を受けていたはずの三人の姿がいつの間にか消えていたのに気付कि、作業を中断して捜索。

基地内を一通り見て回った後フェルたちを見つけたのだ。

「準備っていつでも料理は後で作るでしょ？私らのやることなんてないんじゃないの」

「ねーむしろ私たち邪魔になるよね」

「二人ともそう言わずにやってくさいよ…」

「愛らしいジエーンの横顔を見てるだけでいいというならずっといいんだが」

「大将ってば…もう」

三者三様、実にらしくそれでいて参加拒否の意志を表明する回答が帰って来た。

付き合いの長さや性格上どちらかというところといったことには慣れているルチアナとジエーンだがさすがに協力を得られないことは歓迎会の準備は終わらないので、説得を試みる。

「ここから貴方たち、そんな態度じゃこれから来てくれる新しい仲間に失礼よー」

明朗快活な覇気のある声と共に歩み寄って来たのは褐色肌の女性。フェデリカ・N・ドットリオ。

彼女こそ第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズの隊長…

であるのだが

(なんでナースの恰好を?!)

(また始まったわね)

ドットリオの服装は軍服ではなく病院の看護師が着るようなナース服だった。

それを目の当たりにして唾然として固まる一同。

平然と流しているのはドミニカくらいのものだ。

あまりにも場の雰囲気にな釣り合いな恰好に言及しなければいけない空気を肌で感じたフェルはドットリオに訊ねた。

「あの隊長：？ツツコむのも野暮かもしれませんが…どうしてナースの恰好なんかしてらっしゃるんでしょうか？」

「これ？この後来るウィザード君を盛大に歓迎しなきゃいけないでしょ。だからいつもより派手にいかないかね？」

「…ですから歓迎するのにその恰好でいる必要なんでしょうか？」

ウィンクするドットリオに辟易しつつ更にフェルは質問を重ねる。

「男の子はこういうの好きでしょー。それに懇親会だってまだなんだし、尚更ね。大丈夫、心配しなくても貴方たちのもちゃんと用意してるから。バニーとか水着とか、好きなを選びなさい」

「いりません！」

「素っ気ないわねフェルはーじゃあるチアナたちに」

「申し訳ありません。ドットリオ隊長私たちもそれはちよつと」

語気を強めて、断固としてフェルは隊長の誘いを拒否しそれに他の者も首を縦に振って追隨する。

彼女たちはわかっていた。

この隊長の奇行は今に始まったことではない。ちよつとでも相手のペースに乗せられてしまったが最後までどうなるかその末路は想像に難くない。

(ウィザードがどんな奴か知らないけどドットリオ隊長よりマトモであることを祈りたいわ)

この際性格に多少難はあっても文句は言わない。

ただ直に自分の前に現れるウィザードが比較的常識的な感性を持った人間であつて欲しいとフェルは切望した。

するとその時敵の襲来を知らせる警報が基地内にけたましい音が鳴り響いた。

★

ドットリオを除く五人は出撃し海上で複数のネウロイを目視した。

敵戦力はエイのように横幅が大きい大型が一体とそれを取り巻く小型が四体。

「あれぐらいだったら楽勝ね。いくわよルチアナ、マルチナ！」

「了解です」

「ちやつちやとやつつけちやおー」

フェル、ルチアナ、マルチナ、赤ズボン隊の三人が先んじて仕掛ける。

ネウロイのビームを回避しながら接近。フェルが大型を、残る二人が小型に狙いを定めていく。

「つくづく威勢がいいな」

「大将も似たような感じですよ？」

「私が？そんなことはないだろう」

「自分に自信があるところとかすごくそっくりですよ」

「：まあ、そこに関しては否定しないが」

ドミニカとジェーンも戦いに参入する。

赤ズボン隊の三人に負けじと劣らぬ息の合ったコンビネーションで早々に小型の一体を撃墜し、次に向かう。

優勢の勢いを保ったまま戦況を運ぶフェルたちだがここで大型に変化があった。

後部のパーツを外してスピードを上げたのだ。

「あの大型逃げるつもりね。逃がさないわよ！」

大型の担当をしていたフェルが追跡を行う。だが彼女との距離が縮まり切る寸前、大型は急速に飛行速度を上げた。

「加速したー！」

「街の方に向かってるよー！」

大型の進行先を見てマルチナが声を張り上げる。ネウロイがこのまま進路を変えなければヴェネツィアの街に侵入してしまう。

「あなたの相手は私でしょうが！そっちに行くんじゃないってのー！」

残る小型の相手を完全に四人に任せ、フェルは大型を追いかける。ストライカーユニットの加速に魔力を注ぎながら銃撃を命中させるがネウロイの速度は止まらず、次第に相手方との距離が開いていく。

「あいつ早すぎる。これじゃ…ッ何あれ！」

らしくないとわかっていながらもどうしても弱音が出てしまった。その時街の方から光が：赤い炎が複数飛んできた。

炎は弾のような形状をしていて、しかも不気味なくらい無駄なく丁寧にネウロイの横の大きさに合わせるかのように並んでいた。

フェルがそれを炎と認識した時には炎は若干のズレは見られたものの全てネウロイに直撃し、装甲ごとその体の半分は濃い煙幕に飲み込まれていた。

「あの光、見つけたわよ」

風に乗って流れる煙の合間から眩くも怪しい光が漏れている。

「大きいのくれてあげるわ！」

コアの光だと判断してすぐにフェルは炎の銃撃で動きを止めた大型ネウロイに急接近。

接近を拒もうとする光をフェルは華麗に避け、限りなく近い距離で引き金を引く。

その一撃はネウロイを絶命には充分なものだった。

「全部片付いたようだな」

白い破片となったのを滞空して見届けるフェルの元にドミニカたちが集う。

残る敵も片付けてきたのだと察するフェルだがその口から出たのは劳いの言葉より疑問の言葉だった。

「さっきの攻撃、地上からよね。一体誰のかしら？」

『フェル聞こえる？』

「タケイ？さっきのつてあんたの？」

通信機から聞こえてきた声は戦闘隊長を務める竹井のもの。

フェルは試しに問いかけてみた。

『私じゃないわ。一緒にいる彼よ』

「彼って誰よ…あつ」

『彼』と聞いて、フェルはそれがある人物と頭の中で結び付ける。

竹井が基地を離れていた理由を思い浮かんだのだ。

「もしかしてウイザード？」

『今から彼と基地に向かうわ。貴女たちが戻るのが早いだろうから隊

長にも今の戦闘結果と一緒に報告しておいて』

否定せずにそう告げて竹井からの通信は切れる。

(まさか顔も見えない相手に助けられるとはね…一人じゃ街に入る前に倒せなかったとはいえ複雑だわ)

「隊長、スペランツァ中尉をお連れしました」

「ソーマ・スペランツァ中尉です。本日からこちらの部隊にお世話になります」

フェルたちが帰還してすぐ竹井と彼女が連れて来たソーマも到着した。

今フェルたちの前ではナース衣装を着替えていないドットリオが竹井の帰りとソーマの来訪を迎えている。

「あれがねえ」

フェルは竹井の隣に立つソーマを見て呟く。

彼がウィザード。ウィッチと肩を並べてネウロイと巢を倒し、ガリアを解放した功労者。

そしてついさつき自分を支援した者という肩書きも追加された。

「フェルから報告は聞いているわ。海上のネウロイを陸地から狙撃したそうね。着任早々お手柄ねーさすがガリア解放の立役者」

「貴女は…看護師の方？わざわざどうも…」

気さくに話しかけてくるドットリオの服装を見てソーマが怪訝な顔をし首を傾げつつ呟く。

(これ説明した方がいいのかしらねえ)

その反応に困りつつ、フェルは言葉を淀ませながら彼に声をかける。

「あー…その人うちの隊長なのよ」

「……へえ？」

間の抜けた声がソーマの口から飛び出た。

彼はフェルの言葉に凝固し、眉間に皺を寄せながら信じられないような眼差しでドットリオを見る。

「…本当に？冗談でしょ？」

「非常に言いにくいんですがフェル隊長の言う通りです」

「…何故ナースの恰好を？」

ルチアナからの捕捉にソーマは戸惑い改めてドツリオを髪の毛先から靴に至る細部にわたって視線を集中させる。

舌を出してウィンクを送って来る彼女は胸元の谷間こそ大胆に露出しているが、やはりどこからどう見てもナース。

軍人の仕事とは一切関係のない服装であるためそんな言葉がこぼれるのは至極真つ当といえよう。

(やっぱりそういう反応になるわよね。そりゃあそうよ)

自分たちと寸分違わぬ反応を示してくれたソーマにフェルは同情もしつつも感謝する。

どうやら振り回す側ではなく自分たちと同じ振り回される側の人間寄りのようで、ひとまずフェルは安心した。

「これからよろしくねウィザードくん。仲良くやりましょ」

アルダーウィッチーズの隊長は新たに加わる魔法使いを満面の笑みで受け入れた。



### 第三十輪 歓迎の戦い

(ふふっ、よく寝てるわね)

ある日の朝、ドアを開けてベッドまで近づいた彼女は眠る人物の顔を覗き込む。

(可愛い顔)

あどけなく幼い子どものように思える顔がそこにはあった。微塵も警戒心も感じられない無防備な顔。

そつとベッドに上がって隣に寝そべる。手を伸ばして頬に触れる。

眠る人物が目覚める様子はなく、それにすっかり気をよくした彼女は指で頬を軽く何度もつついてみる。

しかしそれでも眠りの中にいる。

彼女はベッドに上がる。眠りを続ける人物の横に寝そべると不敵な笑みを浮かべその手を掴んで自分の胸部へと導くと、自らの意志で自分の胸を揉ませる。

「…うん?…」

奇妙な感触を覚えて薄っすら目を開けるその人物。

彼は目前にいる彼女を見て素っ頓狂な顔をする。

「おはようソーマくん。どう? 目覚めは」

「…はい……おはよう(ぎ)ございます……」

眠気がまだ支配しているために目の前の人物が何故ここにいるのかなどと疑問が生じるより先に無気力な返事を返すソーマ。

そして不気味なまでに不敵に笑う彼女―ドツリオの顔を見つめてしばらく、ようやく自分の手に感じている妙な触感に気付き視線を落とすと彼は凝固した。

あろうことか自分の手は豊満なドツリオの胸を掴んでいたのだ。

ギョツと、地上に打ち上げられた魚のように目を?いた彼に見つめられたドツリオは依然として笑みを崩さなかった。

そして

「えっ♡」

からかうように言いながらドツリオはソーマの腕を掴む手に力を

込めて更に柔らかい感触が強まる。

「うわあああああああああああああああああああ!!?!」

瞬間、基地中を奇声のような悲鳴が轟いた。

★

「これから貴方たちには模擬戦をやってもらいます。組み合わせはフェルたち赤ズボン隊とドミニカさんとジェーンさんにソーマさんを加えた三対三のチーム戦よ」

屋外にアルダーウィッチーズの面々を集めて説明をする竹井。その横で部隊の長たる隊長が固い固いコンクリートの上で正座をさせられていた。

「ドツリオ隊長、また竹井に怒られたんだ」

「あはは…」

珍妙な光景であったが決して珍しくない光景にマルチナは眩き、ルチアナは苦笑する。

よく見れば笑顔で説明を続ける竹井の目の奥は笑っていない。あれは何か、というより主に怒りを抑えている時の顔だとフェル達は勘づいていた。

そしてその原因は何があったのか詳細は把握していないが大方ドツリオに非があるのだと。

フェルは横に立つソーマに小声で訊ねる。

「今朝の声の原因でしょ？ 一体何があったのよ」

「…できれば思い出したくないので聞かないでください」

「はあ？ 何よそれどういうこと？」

フェルからすれば意味不明なのは重々承知していたが言えるわけがない。

朝起きて気付いたら自分の腕をドツリオが掴んでいてそれを彼女が自ら自身の胸に当てていたことなどたとえ己に非がなくとも大っぴらに言えるわけがない。

現に今も思い出すとあの時の柔らかく心地よい感触が蘇ってくる。

(まったくなんで隊長はあんなことを……大きかったな。シャーリーと同じくらい、いやミーナ中佐くらいか?…凄かったな)

あの大きさは501のウィッチの仲間を引き合いに出しても見事なもので相当な破壊力…もとい揉み心地だった。

自らが望んでいたことではなかったとはいえ男としては一時でも楽園にいるような気分を味わえたような気がする。

そんなことをソーマが考えている一方で竹井は今回の模擬戦の目的を語る。

「今回は限りなく実戦に近い形式にしようと思ってね。ソーマさんが味方がいる時どういう動きをするのかも知りたいし何よりドミニカさんとジェーンさんが来てから一回もこういう模擬戦はしてないでしょ?。」

「それは構わないが…」

「あら、どうしたの?。」

「この男と組む必要があるのか?。」

「えっ?。」

―俺嫌われてる?何かしたっけ?

唐突に放たれたドミニカの言葉に耳を疑うソーマ。

ファーストコンタクトからそんなに日数は経っていないというのに知らぬ間に自分は何か彼女の気を害するような行動をしてしまったのだろうか

必死に自分の行いを振り返っているとジェーンとフェルが助け船を出した。

「違うんです。ソーマさんのことが嫌いとかそういうわけじゃないんです。ただその、うちの大将いつもこんな感じでした」

「じゃあ、どういうこと?。」

「要するにドミニカはジェーン一筋つてことよ。まあ、あまり気にしなくていいわよ。私らに対しても基本こうだから」

「そうだな、気にしなくていいぞ」

「…開き直らないで少しは態度改めなさいよ」

ドミニカは否定せずにあっけらかんと答える。

清々しいまでに一貫した姿勢にフェルは呆れながらもどこかで尊敬が生まれつつあった。

「はいはい、話は一旦そのくらいにして。ドミニカさんも、ジェーンさんがいつも側にいるとは限らないでしょう？そういう時に他の人と連携が取れないんじゃないし、この訓練はその事態への備えになると思うの」

「むう」

「理解した？」

「…そうだな。確かにそちらの言う通りだ」

「わかってくれて助かるわ。それじゃ早速準備を始めて」

両手を打ち鳴らして竹井は皆に促した。

空中に吊り橋のかかっていない一つの谷を挟んでいるかのようにして六人は二つのチームに分かれて滞空している。

フェルとルチアナとマルチナ、ドミニカとジェーンとウィザードが銃を手に相対するチームを瞳に闘志をたぎらせて見据える。

「どつちも準備はできてるわね。では、始め！遠慮なくやりなさい！」

ドツリオの声を合図に模擬戦が始まる。

と同時にまず全員がペイント弾を放ちながら移動し、空中を行き交いながら各々の相手を決める。

「この間はまんまとしてやられたからね。借りを返させてもらおうわよ！」

フェルが狙いを定めたのはドミニカ。宿敵、とまではいかないまでもそれなりに対抗心を燃やしている者同士の戦いだ。

「ふん、いいだろう。また私が勝たせてもらおうぞ」

フェルのように活力に満ちてはいないがドミニカも戦意を奮い立たせて対決を受け入れる。

「やっぱりジェーンさんの飛び方綺麗ですね」

「ルチアナさんこそ射撃上手じゃないですか。勉強になります」

一方のこちらはフェルやドミニカと違い、お互いの性格もあってか火花ではなく褒めの言葉を送り合いながらの戦いをしていった。

「えーい！これでどうだ！」

そしてフェルとドミニカ、ルチアナとジェーンと来れば残る組み合わせはわかりきっているだろう。

海面スレスレを飛行するウィザードを追跡しながらマルチナは引き金を引く。

(これは、誘導しているのか)

彼女の射撃は勢い任せに思いきやフェルとドミニカの方に近付くようにウィザードを誘導していた。

マルチナの射撃の回避に夢中になっているところをフェルに撃たせようという魂胆なのだろう。

そしてその意図を悟られぬためかマルチナはウィザードに言葉をかける。

「魔法使わないの？色々使えるんでしょ？見せてよ」

「オーケー、それじゃご期待に沿えとしますか」

『バインド、プリーズ！』

だがウィザードは彼女の狙いに気付いていた。そう簡単に思い通りに動いてあげたりはしない。

マルチナの要望通りウィザードは銃弾を回避しながら風の鎖をマルチナとついでにフェルに向かわせる。

「うっそお！何これ!？」

「風がこっちに向かってくる。そもそも見える風ってなんなのよ！」

奇怪な魔法に面食らったマルチナとフェルは一時接近とドミニカとの交戦を中断して回避に徹する。

「風を操るんですね」

「でも昨日は炎でしたよね」

魔法の影響外のジェーンとルチアナも銃弾と言葉を交えながらそれを尻目にしていた。

ソーマに近づいたドミニカもそれとまるつきり同じ内容の言葉をかける。

「昨日は火じゃなかったか？どっちも使えるのか」

「そそ、後は他に土とか水とかもあるよ」

「本当に何でもありません」

「ちよつとできることが多いってだけ」

ウィザードがドミニカとそんなやり取りをしていると二人の間を銃弾が駆け抜ける。

「おっと」

「おお」

「私たちの前で余所見なんて余裕かましてくれるじゃないの」

二人がフェルの銃撃を避けたことで相手が入れ替わる。ドミニカがマルチナ、ウィザードがフェルを受け持つ流れになってしまった。

『ウォーター、プリーズ！スイースイースイー、スイースイー！』

フェルの猛追から逃れながらウィザードはウォータースタイルに変身。

色を変えただけでなく急に引つ張られるように下へ落ちていったウィザードにフェルは驚きと困惑を見せる。

「今度は青、ほんと次から次に色々やってくるわね」

まだ戦闘での立ち回りを充分に見れていないから、というだけではない。

使える魔法の種類が多いうえに効果の得体の知れないせいで、攻撃方法の予想がし辛いのだ。

（かなり面倒な相手だけど味方にいるとなると確かに頼りにはなりそうね。軍が興味を持つのもわかる気がするわ）

「でももらったわよー」

相手は水面に立ったまま動こうとしない。

それをチャンスと捉えたフェルは接近しながら発砲する。

『リキッド、プリーズ！』

「はあ!?何よそれ!」

しかしフェルの放った弾はウィザードの体をすり抜けてしまう。正確にはウィザードが体を液化化させて回避した、という表現が正しいがそんなことはフェルにはさして問題ではなかった。

「今のどう考えたって当たってるでしょ!?!」

「悪いね、当たってはいないんだ。これが」

至極当然な文句をぶつけられるウィザードは魔力を操作して水面から水の柱を作り出す。

一つ、また一つと時間を追って次々に天へ向かって伸びる水の柱。的確にフェルたちの付近の海面から昇ってくるそれに彼女たちは攻撃の手を止めざるを得なくなってしまう。

「ああ、もう！完全にいいようにやられてるわね！」

悔しがるフェルは水柱を回避しながらウィザードを真つ先に排除しようとするが彼女の意図に気付いたドミニカが横槍を入れる。

そして

「うわっ！えー、一番先に終わりかー！」

ドミニカの援護のおかげでウィザードはマルチナの背中目掛けて引き金を引いた。

水柱にすつかり気を取られていた彼女はシールドの展開には成功したものの模擬戦からは脱落扱いになってしまった。

「悪いね。よし、次は——」

ベチャッ!!

「てっ!?えっ?」

ルチアナかフェルか、どちらかを先に退場させてしまおうか考えてながらウォーターからハリケーンへと切り替えようとしていたウィザードの肩を死角から飛んできた銃弾が打つ。

衝撃に振り向いてみればその視線の先には申し訳なさそうにするルチアナとジエーンがいた。

「すみません。いただきちゃいました」

「ごめんなさいソーマさん！私のせいです！」

自分が攻撃の手を止めたのを見てルチアナがジエーンを相手にしながら一瞬の隙を突く形で狙撃したのだと二人のを見てすぐわかった。

ウィザードは気にしていないと示すように片手を挙げて、もう片方の手で握っていたハリケーンウィザードリングをホルダーに戻す。

「あー大丈夫。それより後は頼んだよ」

「ありがとうルチアナ！フェル隊長も頑張つてね！さ、一緒に戻ろう

かソーマ」

ほぼ同じタイミングで脱落したマルチナとウィザードは仲良く揃って陸に戻る。

これで両チーム一人ずつ欠けて二対二となる。

「やっぱりいい動きするわねあの子たち」

「ドミニカさんとジエーンさんもですけどその二人を相手にここまで一歩も引かないフェルとルチアナも改めて優秀なウィッチですね」

「まあ、そこはそうでないと思うってどうか。さすが赤ズボン隊ってどこよね」

攻防入れ替わる空戦を観戦しながらドツリオと竹井はそんな言葉を交わす。

しかしちやうどそこに戻って来て聞いてしまったマルチナの顔色は二人とは少々異なった。

「それ、私に対する当てつけー?」

「そんなことないわよ。マルチナだっていい動きをしていたわ」

「へへ、でしょでしょー。次はもっといいの見せるから安心していいよ」

「もちろん、期待しているわ」

赤ズボンの中で真つ先に脱落してしまったこともあり口を尖らせるマルチナに竹井は苦笑しながら言う。

「惜しかったわね。けどいい戦いぶりだったわよ」

「ありがとう。もうちよつといけた気がしないでもないけどな」

「今の言葉フェルが聞いたら口酸っぱく言われるわよ。自信があるのは私からすればいいことだから構わないけどね」

ドツリオに言われて変身を解いたソーマか「あー」と小さく声を溢す。

確かに負けん気なフェルの前では失言とも取れる発言だったと、振り返って思う。

「きゃ!?!」

「わわわっ!?!」

ルチアナをドミニカが、ジエーンをフェルが撃破していた。



「ごめんなさい大将、お先失礼します」

「すみませんフェル隊長、後はお願ひします」

ほぼ時を同じくして墜とされた二人は互いの相方に勝敗を託して陸へと下がっていく。

その背中を見送ったフェルとドミニカを視線を切って、残った相手へと見据える。

「これで私とあんたの二人きりになったわねドミニカ。最初の予定通り、この間の勝負の雪辱を晴らさせてもらおうわ」

「こちらこそジェーンの仇を取らせてもらおうぞ」

視線と弾丸で火花を散らせる二人は一騎打ちの戦いを始める。

「いけいけー！フェル隊長！」

「負けないでください大将！」

マルチナとジェーンが声援を送り合う傍ら、ソーマに竹井が質問をかけた。

「どっちが勝つと思う？ソーマさんは」

「うーん…どっちが勝つてもおかしくない、つてのは答えになってないかな？」

「大丈夫よ。私も全く同じ意見だもの」

どちらも共に優れた実力者。その時の判断や状況次第で勝ち負けはどうとでも変わる。それが竹井の結論だった。

そしてソーマ、彼は竹井のようにこれまでの二人の戦いを見てきたわけではないがこの模擬戦での動きを見る限りでは高い実力を備えていて目立った力の差はないと思っていた。

「このっ！」

「ふっ！」

「ほぼ同時、引き分けね」

フェルとドミニカ、双方の放ったペイント弾が相手に着弾する。歴戦の勇士たる竹井の目から見ても着弾のタイミングはどちらも同時、勝敗を付けるには難しいように思えた。

しかしフェルとドミニカは納得がいかないようだった。

「どっち!?あたしが勝ったわよね！」

「いいやお前がシールドを展開するのが早かった。私の勝ちだ」  
「あたしの勝ちよ！」

「くだいな。私だと言っているだろう」

どちらか己の主張を曲げず、銃撃戦の次は舌戦を繰り広げる二人。  
「ありやりやーまた始まつちやつたよ」

口論の様態を数歩離れて慣れた顔で見守るマルチナたち。

一人一人の顔色を一通り伺ったソーマはルチアナにひっそりと近寄った。

「あの二人ついていつもこんな感じ？」

「いつもというわけではないんですけど結構な頻度で。フェル隊長は見ての通り負けず嫌いでドミニカさんも譲れないところがあるみたいでそれでお互いああなつちやうんです」

「なるほどねえ」

ルチアナの言葉に納得しつつもソーマはどちらも一歩も引かず口での戦いを展開するウィッチ二人を物珍しい目で見ていた。

「二人とも、お疲れ様。いい戦いぶりだったわ」

「どう見たって私の勝ちでしょ！」

「なんならもう一戦やったっていい。このまま引き下がるのも癪だからな」

「えーいいわよ。やってやろうじやないの。準備なさい」

竹井が健闘を称えるが納得のいつていない二人の間には再戦の空気が漂っている。竹井の言葉は届いていないようだ。

それを見た竹井の表情にある変化が起きた。

「あ、あのフェル隊長、もうそのくらいにしておいた方が…」

「気付いてください大将、気付いてください」

良からぬ流れを察したルチアナとジェーンが慈悲深くも声をかけるがそれすらも気付けない程にフェルとドミニカは熱中していた。

「そこまで、って言ったの。聞こえてなかったのかしら？ 貴女たち」

結果、ブリザードのように冷え切った竹井の声が飛んだ。

普段の笑みを絶やさない印象の彼女からはとても想像がつかないほどに冷めきっていた。

(どの部隊でも怒らせちゃいけない人っているんだな)

温厚な人ほど怒ると最も恐ろしいと聞かされた。それが当てはまるいい例だ。

さつきまで声を上げていたフェルとドミニカが完全に恐れをなして、身を震わせ沈黙している。しかもルチアナたち三人まで。

平然としているのはドツリオくらいのものだ。

(俺も気を付けよう)

—自分もあの冷めた笑顔を食らわぬようにしなければ

これから送る日々の注意としてソーマは心に留めた。

### 第三十一輪 裸の語らい

「あく気持ちいい」

模擬戦が終わったその日の夜、ソーマは男性用の浴場に一人浸かっていた。

ヴェネツィア基地の浴場は竹井のこだわりで扶桑風の内装が施されていて、ブリタニア基地とは一風変わった雰囲気を楽しめる。

「はあく湯舟はやつぱり最高だな。気分も落ち着けて疲れも取れるし、扶桑式の風呂つてのも味がある」

お湯に浸かる行為自体はブリタニアと一緒にだが周りの内装が違うだけで全く別物に感じる。

肌だけでなく、目でも楽しめるとはこれまた新鮮。

未知の経験に少し興奮しているのもあつてか極上の一時といって差し支えない。

「気に入ってくれたみたいで嬉しいわ。竹井も今の言葉を聞いたら喜ぶわよ」

「いやーほんつとたまらなくいいですよ…?」

「ーん? あつれ?」

ここでソーマは何か違和感を覚える。

声が聞こえてきたのはいい。しかし聞こえてきたのは声と口調からして間違いなく女性のもの。

そして今彼がいるのは男性用の浴場だ。女性の声など本来ならば聞こえてきていいはずがない場所。

「ーなっ!!」

たった一声から情報を整理したソーマは異常を認識し、同時にある予想を立てた。

どうか自分の勘違いであつてくれと願いながらも入り口を見ればそこには

「はあーい」

残念ながら予想通りドツリオがいた。幸いと言うべきか白いバスタオルで隠すところは隠してくれていたが衣服を纏っていない恰好

のドツリオがいた。

「ちよつと、ええ!?何やってんですかあ!？」

その姿を見て上ずった声を上げながらソーマは思わず湯舟の中を移動して距離を置く。

「しー。また竹井にバレたら偉い目にあっちゃう」

「いや、しーってあなた：男湯ですよここ：なんでいるんですか」

「理由ならちゃんとあるわよ。あなたと話がしたくてね」

「話?ここじゃなくてもいいでしょうよ」

「ここだからこそよ。知らない?扶桑にはね裸の付き合いって言葉があるのよ。それにソーマも嬉しいでしょ?女の子と一緒に風呂に入るのは」

いつもながらの眩しい笑顔のドツリオ。

タオル一枚隔てているといえ異性に裸を見られても一点の恥じらいも見せない彼女の姿勢がソーマの羞恥をますます増大させる。

目のやり場に困ってソーマはドツリオから視線をずらす。

たまたまタオルを持ち込んでいたおかげで己の大事などころを隠せて、あちらに不快なものを見せずに済んだのは不幸中の幸いというべきか。

「：とりあえず入るなら早く入ってもらえませんか？」

「えっ?いいの?それじゃ失礼して」

「最初からそのつもりで来たんでしようが」

返事を返すのも一苦勞のソーマの心情など気にしていない素振りでドツリオは乱れのない所作で浴槽に浸かる。

「あく極楽極楽。どう?ウチの子たちとは上手くやれそう?」

「：それを聞きにきたんですか?」

「これでも一応は隊長らしいことはしてるのよ」

「あ、いや、そんなつもりじゃ：すいません」

ドツリオに見つめられてソーマは失言だったと謝罪する。

自由気ままに他人を振り回してばかりというイメージがすっかり定着してしまっただけで彼女がまさか自分を気にかけてくれるとは少し思ってもみなかったからだ。

「ふふふ、いいのよ。そう思われても当たり前だし、むしろそういう風に見てくれてる方ががこっちとしてもやりやすいわ」

「はあ……まあ、大丈夫だと思います。皆いい人たちだし」

「そう、ならよかったわ。でね、ここからが一番大事というか聞いておきたいことなんだけど」

「は、はい。なんででしょうか」

ソーマがドツリオに視線を合わせる。

(何を聞かれるんだ?)

今日の模擬戦の感想か、ウィザードとなつた経緯か、501にいた時の話か、自分自身の話か、それともまるで無関係な不真面目な話か。色々な可能性をソーマが予想しているとドツリオの口から質問が飛び出した。

「誰が一番好き?」

「は?」

あまりに突拍子のない質問。

パンチが正面から来ると思っていた身構えていたら横からボディブローを食らったような、ドツリオの質問はそんな大きな衝撃を伴ってソーマに届いた。

「何の話ですか?」

「この部隊のウィッチで彼女にするなら誰かって話よ。皆それぞれ違う方向性で可愛いし、二日経って気になる子は見つかったかなって。誰? 誰? フェル? ドミニカ? それとも竹井? もしいるなら喜んで応援するわよ」

「なんでそんな熱こもってらっしやるんですか?」

—すごい食い付いてくるなこの人

何故か異様なまでに興味深々なドツリオの眼差しにソーマは気圧されてしまう。

「あつ、なるほどなるほど。そういうことね」

すると今度は一人納得したような顔になるドツリオ。

その顔を見ただけでソーマには嫌な予感しかしなかった。そしてその予感は間もなく現実となる。

「501にもういるのね。付き合ってる子が」

「いませんー!」

即座に声を大にして否定の言葉が出た。そのスピードはハリケーンリンクスでジェットを使用した時に匹敵する程だ。

「いるわけないでしょうが!」

「違うの? てつきりそうかと」

「違いますって。第一501にいた皆とは一人たりともそういう関係じゃないです」

「そうなの? 一人も仲良かった子いないの? 付き合ってるхмаまではかないまでも」

「仲が良かった…それはいいことではないですけど…」

顔を合わせながらも視線はそっぽを向き始めたソーマ。

一方のドツリオはまたしても悪事を思い浮かべたいはずら小僧にも似た表情をするとソーマに向かってこんなことを口にし出した。

「なら私となってみる? そういう関係に」

「はい?」

放たれた言葉を相手がきちんと意味をくみ取って把握するよりも前にドツリオは腰を上げてソーマに近付く。

反射的に後ろへと引き下がっていくソーマだがあつという間に背中が壁際に当たり、逃げ場を失ってしまふ。

彼は間近に迫ってきたドツリオにたじろぐ。

「な、なにを…」

「ふふ、可愛い。私ね、気に入っちゃったの貴方のこと。だから貴方も私のことを気に入ってほしいの…」

言いながらドツリオは背を曲げて顔を近付ける。

豊かな谷間を見せびらかすようなそのポーズは実に煽情的でまるで悪魔に誘われているような感覚になる。

視界に入れぬようにそっぽを向いているがどうしてもその圧倒的な存在感が気になって、いけないとわかっていてもついつい視界の端に入れてしまふ。

「ダメ?」

「…ちよ、ちよつと待つて…急にそんなこと言われても…」

「焦らなくてもいいわ。まずはお互いを知ることから始めましょう。きつといい関係になれると思うわよ。私たち」

煽るようにドツリオが益々背中を丸めて僅かに空いた距離を詰める。

それはどんどん彼女のふくよかな谷間が近づいていることを意味して、逃げ場のないソーマは目を閉じようと体に言い聞かせても食い入るようにそれを見つめてしまう。

頬が紅潮し、心臓の鼓動が異常に早まっている。自らの体に起こっている異変に気付いていながらもソーマの意識はドツリオに完全に集中していた。

「ここは男湯ですよ隊長。なんで隊長がいるんですか」

その声が浴場内に反響した瞬間、温かい湯に身を癒されているはずのドツリオの体感温度が一気に低下した。

奇しくも先のソーマと同じように

「あつらーもうバレちゃったか…つて、竹井?…かくなくり…不機嫌そうね」

ドツリオが背後を振り替えるとそこには腕を組む竹井の姿。

柔和な笑顔で佇んでいる竹井だが目の奥は静かな怒りを宿していた。

最初こそ普段通りの朗らかな笑みで乗り切ろうとしたドツリオがその視線を真っ直ぐ突き付けられたのを認識すると、その笑顔を引き攣らせた。

「当たり前です。何度も何度もソーマさんに迷惑かけて。今度という今度はキツイお叱りさせてもらいますからね。ごめんなさいソーマさん、せつかく休んでいるところ。今からでもゆつくり休んで」

「あ、いや」

ドツリオに対しては冷ややかに厳しく、ソーマに対してはあくまでも平常時と変わらない対応の竹井。

それが益々ドツリオに恐怖心を植え付ける。



「さあ、行きますよ。今後一切こういうことができないようにお灸を据えさせて頂きますからね。覚悟してくださいね」

「痛い痛い。ごめん、ごめんって竹井。悪ふざけが過ぎたのは謝るから！そんな強く引つ張るのはやめて。竹井ってば、ねえ、聞いてるく！」

大型台風は竹井に手を引きずられるようにして退出していく。

戸が閉まった音が浴場内に響き、ソーマは大きく息を吐き湯の中に鼻から下を沈める。

「本当になんなんだあの人」

夜、自室のベッドに寝そべりながらソーマは今日あった出来事を振り返る。

いいことも悪いことも含めて色んな出来事が起こり過ぎた。

朝食の場で改めて行った自己紹介、前日にも簡単にはしたが結構緊張した。

アルダーウィッチーズの皆との模擬戦、混成チームの中で一番に落ちたのは悔しかったが皆錚々たる実力者で実戦では助けられることも多々あるだろう。

ルチアナとジェーンが作った夕食、あれはかなり美味しかった。

宮藤やリーネの料理にはない味があった。明日にでも二人に料理を教えてもらえるよう頼んでみようか

そして

『一人も仲良かった子いないの？』

浴場でドツリオに言われたその言葉が頭から離れない。

他にもフェルや竹井から言われたことは山ほどあるのに何故か一番記憶にあるのはそれだった。

その理由が考えても心当たりがなく、妙にもやもやする。

それから暫くソーマは手にしたハリケーンリンクスの指輪を見つめていた。

### 第三十二輪 仲間からの送り物

「暇だねーフェルたいちよー」

「そうねー。この後の訓練までどう時間潰そうかしら」

「午後の訓練の後もやることなく大変だよ。どうする？」

「このまま部屋に戻ってもやることがないのは一緒だしねえ。どうしたのかしらねえ」

時刻は朝、フェルとマルチナは暇を持て余していた。

というのもここ最近は何ウロイの襲撃もなく、ルチアナとジエーンのように料理や後片付けを担当することもなく、前基地からの引越作業やソーマの歓迎会という大イベントも終わってしまった現在のヴェネツィア基地のこの時間において二人は何も抱えていない。

要は時間の使い方に悩んでいた。

なので特に行く当てもなくただ彷徨うように適当に基地を歩き回りながら何の中身も進展もない会話をしている二人。

「何してるの竹井ー」

そうしていると格納庫で積み荷に囲まれている竹井を発見する。

マルチナの声に反応して振り向いた竹井。その手にはリストが握られている。

「昨日届いた搬入物資のチェックをしているのよ。本当は昨日の内にやっておきたかったのだけどできなくて」

「ほんと仕事熱心よね。毎日ご苦労様よ」

感心しながらフェルは置かれた荷物に目を走らせる。銃器に弾薬、食料、各地から届いた物資の詰まった木箱が並んでいる。

「ねえ竹井。これ何？基地の設備とは関係なさそうよ？見た感じの大きさからして」

その中でフェルが見つけたのは両手で持てる程度の木箱。一見した限りでは弾薬や食料のようなものが入っているように見えない。

興味を引き寄せられたマルチナも実際に持つてみると重さは見た目の想像以上に軽く、ウィッチの魔力を発動せずともいとも簡単に持ち上がった。

「なんだろうね。何が入ってるんだろ」

「えっと、それはソーマさん宛てになってるわね。ガリアからの物資みたい」

「あいつに？ガリアってことは501関連かしら」

物資のリストを確認しての竹井の言葉にフェルがそう返す。

「そうかもしれないわね。悪いけど持ってってあげて。この時間は確か厨房の方にいたはずだから」

「しようがないわね。行ってあげてもいいわ」

「ちようど暇してたところだしね」

いつものフェルならば「どうして自分が」といった類の小言を吐いていたところだがマルチナの言葉通り今回は素直に受け入れるだけの理由があった。

「よいしょ。案外軽いわね。いくわよマルチナ」

「はい」

フェルは木箱を持って厨房を目指し、マルチナはその後を追いかけた。



「ごめんなさいソーマさん。手伝ってもらっちゃって」

「ありがとうございます」

「いいっていいって。むしろ料理作ってもらったんだし二人にはゆっくりしてほしいくらいだよ」

ところかわってその食堂ではソーマとルチアナら四人が同じ卓に座りながら談笑していた。

卓の上には食後のおやつとしてジェーンお手製のビスケットが皿に盛りつけられていて、四人はそれに手を伸ばしては口の中に入れていく。

「うん、相変わらず私の好みを抑えた絶妙な味わいだ。本当にジェーンは何をしても最高だな」

「ジェーンのこと好きなのはわかるけどさあ。本人目の前にしてそんなはつきり言うかね」

「いいものをいいと言って何が悪い。それにジェーンが私にとって最高の存在だというのは揺るがない真実だ。真実を口にするには何ら恥とは思わんぞ」

（言われた方がその分恥ずかしいと思うんですけど。この感じ、ペリーヌみたいだな。いや厳密にはペリーヌともちよつと違うんだらうけども）

そう。ドミニカのジェーンに対する姿勢は坂本に対するペリーヌと既視感を覚えるが似ているようで割と違う。

ペリーヌは本人を目の前に尊敬を口にすれど愛情めいたものをここまで堂々と恥じらいなく言うことはなかった。

「ちよつと失礼。入るわよー」

するとそこにフェルとマルチナがやって来て、ちようどドアが見える位置に座っていたジェーンが二人に気付く。

「フェルさんなんですかその荷物？」

フェルの抱えてきた木箱に食堂にいた者たちは一斉に疑問を持つ。四人の視線を集めるそれを机の上に置くとフェルはソーマを見る。

「さつき来た物資の中にあつたのよ。ガリアからあんた宛てだって」

「ガリアから？誰からだ…？あ、ありがとう」

「いえいえ」

ビスケットに手を伸ばして食べるフェルへの感謝を忘れずに言いながら木箱を開封して中身に手を突っ込む。

フェルを始めとする他の面々もソーマの周りに集まって一緒になつて中身を確認する。

まず出てきたのは

「ティーカップ？」

「それは俺が向こうにいた時に使ってたやつだな。こんなわざわざ送ってくれなくてもよかつたのに」

青いスパード、緑のダイヤ、赤いハート、濃い紫のクラブの絵柄のマグカップ。

ブリタニア基地で余っていたのを拝借し、501着任時から使用していたものだ。

「で…これは、茶葉かな」

「茶葉みたいですね。カモミールって書いてあります」

次に箱から出したのは茶葉。カモミールの他にもダーズリンや  
アールグレイなどそれなりの種類の物があつた。

そしてそれ以外にもまだあつた。

「へがみやもはいふえるよ（手紙も入ってるよ）。はい」

「どれどれ」

ビスケットを口の中で噛み砕きながら話すマルチナから封筒を受  
け取り、裏面を見るソーマ。

そこに書かれていた差出人の名前は

「ペリーヌからだ」

「501の仲間か？」

「ああ、ガリアの貴族」

「貴族なんだ。マルチナと同じね」

「そうそう…は？え？今なんて？」

「そんなことはいいからさ。中身教えてよ中身」

「あ、ああ」

サラツとフェルの口から飛び出た衝撃の事実によりソーマは耳を疑い、  
詳しく問いたださそうとするがそれは当の本人によって遮られてしま  
う。

すごく、すごく気になったがマルチナの勢いに押し負けてソーマは  
封筒を開いて手紙の内容を読み上げる。

『ソーマさんご無沙汰しています。ペリーヌです。勝手ながらミ  
ナ中佐から配属先を聞いて、ブリタニア基地にあつた貴方の私物を送  
らせて頂きました。それと勝手ですがこちらで用意したものもあり  
ますのでもしよろしければ配属先の方とご一緒に召しあがっ  
てください。分けても多少余る程度の数は入っておりますので』

「これ私たちももらつていいんですか？」

「いいよいいよ。さすがには一人じゃ全部はさばききれないし、向こ  
うもそのつもりで送ってるみたいだし」

ルチアナの言葉に顔を上げてそう言うとソーマは再度文面を読み

上げる。

「『最後になります。ガリアをネウロイの手から解放してください。今度お会いした時に改めてお礼をさせていただきます。それまでどうか大事なことを祈っています。お身体にお気を付けてお過ごしください』」

「へー、いい仲間を持つてるじゃない。で、これがその仲間たちとの写真?」

「写真?」

「中に入ってるわよ。ほら」

フェルに言われてソーマは手紙を一旦置いて箱の中を覗き込む。

そこには確かに写真立ての中に納まっている写真があった。

「あの時のか」

それはウォーロックを倒して数日後の夜ブリタニアを解放した記念に撮ったものだった。

501皆が写っている初めてにして唯一の写真だ。

「ねえそのペリーヌって人はどれなの?」

「えっと、この眼鏡の」

ソーマが写真の中のペリーヌを指差すとマルチナが顔を近づけて見つめる。

「これがそうなんだ。どんな人?」

「どんな人:うーん:この中似てるって言ったらドミニカが近いかな」

「どこがだ?見た目は全然似てないぞ」

「あー:見た目っていうか入れ込み具合?特定の相手への」

「何を言ってるのかさっぱりわからん」

食べかすが端に付いた口を「へ」の字にして首を傾げるドミニカ。一方で彼女以外の面々はソーマの言わんとしていることが伝わったのかあえて捕捉は言わずに「あー」と納得したような顔をしていた。それらの顔を見てもさっぱりな様子のドミニカは関心の対象をペリーヌから写真にある別の人物に移し替える。

「ミーナ中佐もいるな」

「知ってるのか？」

「前によくしてもらったことがある。いい上官だった。ここに来る前はミーナ中佐のところに行こうと思っただが扶桑から新人が来たとかで定員が一杯だったようだな」

「新人、あー宮藤のことかそれ」

「ミヤフジ？聞いたことのない名前ね。このあんたに腕を回してるのがそう？特に仲良さそうだけど」

「それはシャーリーってリベリオンの所属。宮藤はこれ。このミーナ中佐の隣にいるのが宮藤」

ソーマは写真の中の宮藤に指先を置く。

写真の中の彼女はミーナの隣でしかも中心あつてかやや緊張気味な笑顔を浮かべている。

「へーなんだか可愛らしい子じゃない。見た感じすごく好きになれそうだわ」

「こう見えて見かけに寄らずかなりの治癒魔法の使い手なんだぞ」

「この人も治癒魔法使うんだ」

「フェル隊長と同じですね」

「ま、私の治癒魔法の方が断然上でしょうけど」

ルチアナの言葉に自信満々に胸を張るフェル。

フェルも治癒魔法には一家言あるのだ。

「ちなみにそのミヤフジって子の治癒魔法はどれだけのものなの？」

「結構すごいぞ。ネウロイのビームで二回と銃の弾を腹にくらったので三回くらい死にかけたことあつてその度に助けられたよ。宮藤がいなかったら今頃こうしてないかもな俺は」

「なによそれ…」

一応の参考までに、くらしいの気持ちで尋ねたフェルにとって完全予想外の解答が飛んできたことで彼女の中でさつきまでのあつた自信が打ち砕かれた。

擦り傷を治す程度の治療は幾度となく余裕でこなしてきたがネウロイのビームを受けた人間の治療という生死に関わる治療の経験はない。それだけでもすごいというのにしかも死にかけの人間を三回

も救っている実績があるという。

自分にはない、これから先もできないであろう実績を相手にこの上ない敗北感にフェルは打ちのめされた。

「フェル隊長よりすごいかもね。残念」

そこに傷口に塩を塗るかのようなマルチナからの追い打ちが飛んでくる。

ぐぬぬ、と唸るフェルが何か言い返そうとして口を開いたそのタイミングでジェーンがソーマに声をかけた。

「ソーマさんもすごいですね」

「何がだ？」

「あ、いたいた。探したわよー」

言葉の真意を問うたソーマにジェーンから答えが返って来るかと思われた時、新たに食堂に入ってきた声が一同の視線を集める。

ドツリオだ。

「あら、いいもの食べてるじゃない。私ももらっていいかしら」

「探してたって、ドツリオ隊長誰を探してたの？」

「ソーマよ」

「俺？」

自分を指差すソーマだが、直後以前の風呂での一件が頭を過ぎり一気に不安が大きく膨らむ。

——また何か厄介ごとに巻き込まれそうだな。嫌だなと

彼の顔色が変わったのを見てドツリオは卓の上のビスケットを摘まみ上げながら誤解を与えないようにと即座に訂正する。

「貴方に電話が来てるわ。私の机に番号を控えた紙があるからかけてきちゃいなさい」

「は、はあ」



(一体誰からだ?)



執務室に移動したソーマは言われた通り電話番号の記された用紙を手に取り、それを見ながら電話をかける。

ドツリオが「ゆつくり話してきなさい」と気を利かせてくれたので周りには誰もいない。

ちなみにフェルとマルチナは電話の相手と内容が気になったのかこつそりと付いてこようとしたがその素振りを見抜いたドツリオによって雑用を押し付けられたのだが、ソーマがその事実を知ることはこの先ない。

「もしもし」

『久しぶり。元気にしてるかしら』

電話越しに聞こえてきた声。それにソーマは目を見開いて喜びに満ちた表情を浮かべ、その表情に見合った弾んだ声で相手の名を呼ぶ。

「その声、ミーナ中佐か!」

『ええ、覚えてくれて嬉しいわ』

ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズの隊長にしてソーマにとってかけがえのない大切な存在の一人だ。

「そりゃ忘れるわけないって。すぐくお世話になったんだから。でもどうして俺に電話なんて」

『ガランド中將が直属の上司になったとはいえ貴方はまだ私の部下でもあるのよ。部下の近況を把握しておくのも上官の務めだもの…嘘、ただ公の理由抜きに話があっただけ。どうかしら?504は。さつきドツリオ隊長と話したけど着任早々大活躍だったみたいね』

「大活躍って言う程大それたもんじゃないさ。まあなんとかうまくやれてるよ。部隊は皆いい人ばかりだし。あ、そういえば中佐に前に世話になったってウィッチもいるんだ。誰だと思う?」

「そうなの?えっと…ごめんなさい。ちよつと見当が付かないわ」

「ドミニカって言ったらわかる?」

『ドミニカさん?彼女今504にいるの?ブリタニアの部隊に配属されたって話は聞いていたけれど』

「そうなの？じゃあそこから504に配属になったんじゃないの？」

『今そっちにいるならそういうことだと思うけど…どうかしら』

電話と国境を挟んでいながら仲良く困惑する二人。これ以上この話を広げても無駄と判断したソーマは話題を振った手前申し訳ないと思いつつ別の話題を振る。

「ああ、さつきペリーヌから写真届いたよ。中佐が教えてくれたんだろ？」

『ええ、すごく心配してたわよ。貴方が別の場所に配属になったと聞いて』

「ペリーヌが…？」

『お返しの手紙でも送ってあげたらどうかしら。きっと喜ぶと思うわよ』

「そうだな。そうしてみるよ」

ミーナの言葉に穏やかな声色でソーマは返した。

『今日のところはこれで切るわね。これから別の仕事に集中しないといけないから』

「了解、忙しいところわざわざありがとう。それじゃあ」

ソーマがそこで会話と電話を打ち切ろうとした時電話口のミーナから呼び止められた。

『ああ、ちょっと待って、最後に一つだけ』

「ん？」

受話器をかけようと下げた腕を再度耳元に当てる。

『何かあったら遠慮なくすぐ連絡してちょうだい』

「わかった。悪いな、気にかけてもらって」

『いいのよ。家族でしょう私たちは。悩みとか相談でも何でもいいから頼って』

「…そうだな。ありがとう」

その言葉を最後に今度こそ会話は終わりソーマの方から電話を切った。

ゆつくりと静かに受話器を戻すが、何故かソーマはその場を離れる

どころか電話機を見つめたまま動かず佇んでいた。

(家族を頼れ、か：俺にそんな資格あるのかな：皆を裏切ったおきながらどの面下げて)

窓から差し込む日差しが顔を照らす。しかしだというのに彼の顔には色濃く陰りがあった。

☆

(元氣そうなのは安心したけど：なんだか少し心配ね。大丈夫かしら)

カールスラント基地の数ある執務室の中の一つで電話を終えたミーナはその美麗な顔に憂いの陰を作っていた。

というのも彼女にはソーマに関して心配事があった。

ウォーロックとの戦いの時に受けたビームや銃弾の負傷は宮藤のおかげで完全に問題はないから身体的な面では心配はしていない。

それ以外の面、精神的な面で彼が何か問題を抱えているような気がしてならなかった。

そしてさっきの会話の中で時折何度か生じた間。それがミーナの疑念を確信に変えた。

(いえ大丈夫よね。彼ならきつと)

501以外の部隊。新たな家族と環境。

それが彼にとって良い方向に作用できれば何かいい変化を与えてくれるはず：今のミーナにはそう祈ることしかできない。

### 第三十三輪 夢の邪魔

「あーあ、見つからねえな。どうすっかな」

穏やかな風吹く街のある家の屋根の上で足を交差させて寝そべる者がいた。

地上との距離は相当なもの。

一歩間違えれば地面へと真っ逆さま、決して軽傷では済まない傷を負うのにそんな可能性などまるで考慮していかないかのように彼はその場を動かず、ただただ晴天を仰いでいた。

彼の心中にあるのは一つの存在。人間の身を越えた力を持ち、人類の希望ともてはやす声が近頃増えてきたウィッチではない者。

それに対して彼は弱くはない大きな感情を向けていた。

今すぐにも会いたいほどに。ただその存在の所在を彼は知らない。見つけようとしても見つからない。

だから彼はこうしてその存在の顔を眺め、頭の中で思い浮かべることしかできなかった。

「早くそのキラキラ鬱陶しそうな顔面を粉々に磨り潰してやりたいぜ」

誌面にある色とりどりの姿を使い分けて砂漠でネウロイと戦うウィザードの写真に向かって彼は笑顔を浮かべた。

「こんなところで何を油を売っていいいの？」

そんな彼に声をかける者がいた。

彼が声の発声源、地上に目を向けるとそこには女がいた。

「あんなに息巻いていた割には随分静かじゃない」

「俺には俺に合ったやり方ってのがあるんだよ」

「嘘おっしやい。大方、見つからなくて困ってるんでしよう。ウィザードが」

その言葉に彼は小さく舌打ちをする。

真実を言い当てられて苛立ちが生じたからだ。

「助け船、出しておいたわよ」

「本当か？」

聞き返す彼はそれまでとは打って変わって上機嫌になり、勢いをつけて屋根から飛び降りるなり女の肩に手を回す。

「ありがてえ。やっぱあんたは話のわかる奴だぜ。なあメアさんよ」

「調子のいいこと」

女は即座に手を払いのける。しかしその動作の割には表情に嫌悪はなく優雅とさえ思える程に美しい笑みを保っている。

「けどあれだな。結局待つだけってのは変わんないわけだ」

「そんなに待つてるのが嫌ならいつそのこと眠ってみたら？いい夢を、見せてあげるわよ」

「シヤレにならない冗談やめてくれ。俺らがあんたに頭が上がりない理由わかって言ってるんだろそれ」

「ええ、もちろん」

(怖え女…)

女の態度に彼は心でぼやいた。

彼はお調子者であっても馬鹿ではない。

もし女の気を損ねるようなことをすればどうなるかをよく知っているからだ。

だから彼はその選択をした。そして女もそれをわかっているのか彼に対して依然として笑みを向け続けていた。

☆

「包丁の音？誰か食堂にいる？」

早朝、基地内を歩いていたルチアナは不審に思った。

向かっている食堂の方向から包丁を立てる音が聞こえてくる。

音自体に問題はないが今日の朝食の当番は彼女だけ。なのに自分よりも先に食堂で料理を作っている者がいるであろうことに疑問を持ったからだ。

食堂の扉付近まで辿り着いたルチアナは僅かに開きつぱなしになつていた扉を押して中に入る。

キツチンの方に目を向けるとそこにはソーマがいた。

「ソーマさん!？」

彼の姿を認めたルチアナは大慌てで壁に立てかけられたエプロンを身につけて駆け寄る。

対してソーマの方はというとルチアナの声にトマトを刻んでいた手を止めて、彼女の方を見る。

「おはようルチアナ」

「ソーマさん、いいですよ。私がやりますから、ソーマさんは休んでいてください」

言葉を交わすなりルチアナはソーマに代わるよう進言する。

「大丈夫、俺にやらせてくれよ。久しぶりにご飯作りたくてさ」

「でも今日の当番は私ですし…」

ソーマの意を汲みたいけれど当番である自分が何もしないわけにもいかない。

そんな迷いが瞳と表情に出ていたルチアナを見てソーマは穏やかに笑う。

「だったら一緒に作ろうか。ルチアナの料理を作るところ見たいし、それでいいかな?」

「はい、それでよければ…私で参考になるかわかりませんが」

ソーマの出した折衷案に納得してルチアナも共に料理を作り始める。

主食と前菜に別れて作業を分割して品を作っていく。

「あちらでも皆さんの料理を作られてたんですか?」

「頻度的にはそうでもないけどな。俺よりも皆の舌を満足させられる一流のシェフがいたし」

「へえ、ちなみにどなたなんですか?」

「こないだ話に出た宮藤っていたろ?その子とリーネ、じゃなくてリネットか。その二人が主に料理当番してたんだよ。宮藤が扶桑出身でリーネも宮藤に料理を教わってたから出てくるのは扶桑料理が多かったな」

それを聞いてルチアナはソーマと501部隊との写真を、次に宮藤の顔を思い浮かべる。

「扶桑の料理ですか。竹井さんもたまに扶桑の料理の話をしてますが、けど変わったものが多いそうですね。腐らせた豆があるとか」

「納豆のことか。あれは確かに匂いとか粘着きとか癖があつて人を選ぶよな。でも美味しいぞ。501でも初めは不評だったのが皆慣れてきてたよ。カールスラントとかリベリオンの仲間にもウケがよくてさ、別れ際には宮藤の扶桑料理が食べれなくなるのが悲しいって言うのでいたくらい」

「そんなに美味しいだなんて、少し気になってきましたね。竹井さんに言えば作ってもらえるでしょうか」

「今度頼んでみたらどうだ？ただ竹井大尉が好物かどうかはわからないが」

「そうですね。試しに聞いてみます」

お互いにとつてこれが初めて行う一対一の会話になるが特に不穏な空気が訪れることはなく、終始和やかに会話も料理も進んだ。

後の残りの作業は他の面々が来てからにしようという方向で休憩に入った二人は一息ついて椅子に座り、ペリーヌから頂いたカモミールティーを飲み物にささやかな談笑タイムに入る。

ルチアナはソーマから501の仲間の話を、ソーマはルチアナから504の仲間の話を、それに区切りが付けばお互い自身の話を。

原隊がロマーニヤ軍所属という共通点もあつてか話は尽きることはなかった。

「あつちやあ〜」

とその話の最中ソーマが自分の服の袖を見て声を上げた。

「どうしました？」

「ここ、いつの間にか破けてた。いつ破けたんだ？」

ソーマはルチアナに腕の裾を見せる。裾部分には決して大きくはないが小さくもない程度の穴が開いていて、そこからソーマの肌が覗いていた。

それ以外にもよく見れば生地 of 消耗具合が激しく傷んでいるところが多く見受けられた。

「また新しいの申請しないとな。でも後一着しかないんだよな。どう

すっかな」

直近でロマーニヤ空軍の軍服は四着あったのだが内二着は人型ネウロイ、ウォーロックとの戦いでおじゃんになり、一着はたった今傷ができてしまった。

補充をしようにも異動のごたごたでその余裕もなく今日まで来てしまったために残り一着でどう工面したものかと頭を悩ませる。

「ちよつと見せてもらっていいですか？」

「ああ、はい」

下にシャツを着ていたため抵抗なく軍服を脱いでルチアナに渡す。

律儀に軽く会釈して受け取った彼女は傷口をじつと見つめると落としていた視線をソーマに向けた。

「これくらいなら私が治せますよ。よろしければやりましょうか」

「いいのか？ならお願いするよ」

「では少しの間お預かりしますね」

そう言つてルチアナは軍服を自分の隣の椅子に畳んで置く。

「裁縫得意なのか？」

「まあ一応軍に入るまではそっちの道目指して勉強してたので」

ルチアナの顔をじっくり見て、声色を聞いてソーマは感じ取った。

趣味程度ではなく本気になりたいと思つていた者にしか出せない種類のものだ。

「夢だった？」

「元々軍にもウィッチ用の装備を作るつもりで入ったんです。夢に繋がる勉強にもなると思つて。それで軍に入隊して射撃の訓練してたところをフェル隊長に声をかけられてで、そのままあれよあれよといった感じです。でも諦めたわけじゃなくて今のこういう状況が落ち着いたら本格的に目指してみようかなと」

「そっか…」

視線をルチアナから手元のカップに落とすソーマ。心なしかどこか痛まし気な顔が紅茶の水面に映っていたが彼は水面に映る自分の表情に気付かない。

「是非叶えてくれよその夢。ルチアナの夢叶ったら俺も嬉しいし」



「ありがとうございます。その時はソーマさんのお好きな服を作らせて貰いますね」

「そんな特典付けてもらっちゃっていいの？」

ニヤリ、とソーマは意地の悪い笑みを出す。

悪ガキ、という言葉が当てはまるようなその顔を見てルチアナは苦笑する。

「さすがに限界はありますが可能な限り要望に答えられるようにその時まで腕を磨いておきます」

「そんな大げさな。冗談だったし：俺そんな意地の悪い奴に見えたか？」

「失礼ですけど…今の表情はかなり」

「それはごめん」

目を泳がせておちやらけてみせるソーマ。直後ルチアナは柔らかな笑みと共に軽く吹きだし、それに釣られてというより気を良くしてソーマも微笑んだ。

「あれ？」

ちやうどその時通路を歩いていたマルチナは食堂のドア際に立つある人物を見て声を上げた。

突っ立っているだけでなかなか中に入ろうとしないように見えるその姿に疑問を感じたマルチナは声をかけようとする。

「あ、行っちゃった？」

けれど声をかけるより前にその人物は食堂を後にしてしまった。

マルチナは首を傾げた。どうしてかその背中がいつもより小さく思えたから。

「フェルの様子がおかしい？」

「ああ、薄気味悪いくらいだ」

ドミニカの発言に竹井とウィザード・ランドスタイルは眉を潜め

る。

実戦での戦術を組み立てるためウィザードの魔法を把握したいという竹井の言でソーマは外で各スタイルへの変身・戦闘用・非戦闘用、今ある全ての魔法を彼女に披露していた。

ドミニカが訪れたのはそのお披露目会が終盤も終盤に差し掛かった頃、一緒になってウィザードの魔法を見物しているところに突然放たれたのが先刻の言葉だった。

「変な物を食べたわけでもないのにずっと口数が少ないのがどうにも引つかかる。何かあったのか？」

「私も朝食の時からいつものフェルらしくはないとは感じていたけど、何かって言われても」

竹井もフェルがいつもと違うと感じてはいたが思い当たる節はなく首を傾げながら答える。

「直接本人には聞いてみたのか？」

「もちろん聞いた。なんでもないと返されてな。どう見てもなんでもないわけではない覇気のない顔だったが」

—それは確かになんでもないと返されてはならない。

普段のフェルを見ている竹井やドミニカにはそれを額面通り受け取るほど鈍感ではなかった。

無論二人に比べて日の浅いウィザードも同様だった。

「ルチアナやマルチナは？二人にも何か変わったところは？」

「いや、あの二人はいつも通りだったな。特に変わった感じはない」

「ならどうして…」

昨日までは普通だったはずの人物がまるで別人のようになった異変に竹井とドミニカも答えが出ず悶々としている。

（確かめてみるか）

そんな二人と心地良くくらいに晴れ渡った青空、それぞれにソーマは目をやった。

（初めて聞いた。あんなの）

フェルは自室のベッドで赤ズボン隊の制服を脱いだ下着姿で横になり、天井をぼんやりと眺めていた。

二人の会話を耳にしたのは偶然たまたまだった。

たまたま開いているドアの隙間から聞こえてきた声が気になって足を止めただけだ。しかしそのせいで聞いてしまった。

服飾の道に進みたいというルチアナの夢を、自分が声をかけたのが理由で前線にいることを、そして夢の話を楽しし気に語る彼女の眩しい笑顔を

「私、ルチアナの邪魔してたのかな…私があの時声をかけたりなんてしなかったら今頃ルチアナは夢のために進めたのに、私がそれを今日までずっと…」

ルチアナはああいう性格だから本当は今すぐ夢への道に行きたいと心底望んでいても自分に気を遣って飲み込んでしまっているのでは？

もしこのままずっと自分がルチアナの側にいれば彼女の夢はこの先ずっと叶うことはないかもしれない

本当はこれまでに夢を成就できる機会があったのに自分が誘い込んでしまったためにその機会を奪ってしまったかもしれない。

(ルチアナには私が邪魔なのかしら。その方がルチアナは今よりも幸せになるかも)

そんなことを考えれば考える程罪悪感は深みを増してフェルの胸を締め付ける。

「—うわああ!？」

その時、開いた窓からレッドガルーダが入って来た。

いきなり音沙汰なしに飛び込んで目の前に浮かんだ奇妙な存在にフェルは悲鳴混じりの驚きの声を上げながら起き上がる。

—ゴッソ!!

だがそのせいでレッドガルーダに盛大な頭突きをかましてしまう形になってしまう。

「いった—！なんなのよこれ」

頭を抑えながらフェルはそれまで考えていた悩みを吹っ飛ばして、

恨めしそうな目でレッドガルダーに注目する。

鳥のようであつて鳥ではない明らかに生命体ではないそれに戸惑っている窓の外からまた別の声が聞こえて来る。

「どこへ行ってるんだよ。おい、ガルダー？かくれんぼのつもりか？でてこーい」

声の主はソーマ。ガルダーの侵入してきた窓の外から顔を突き出した彼は目的のガルダーと、ついでにその隣にいる下着姿のフェルと目が合った。

「あ」

たった一音を溢してまるで想定していなかった光景を目にしてしまったとばかりの目でフェルを見つめるソーマ。

突然の出来事に双方共にピクリとも体を動かさない時間が流れる。そして

「な、何見てんのよー!!」

「おぶっ!?!」

ようやく状況を理解し、羞恥に顔を赤く染めたフェルの投げた枕が寸分の狂いもなくソーマの顔面に直撃した。

「…で、何か言うことは?」

「ごめんなさい。わざとじゃないんです…」

それから時間を置いたフェルの部屋には制服を着直した部屋の主と正座して合わせる顔がないと言わんばかりに床に視線を落とすソーマがあつた。

「まあ、開けっ放しにしてた私にも非はあつたし今回は大目に見てあげるわ。それで、なんだって私の部屋に来たわけ」

「えっと、俺の使い魔、ああ、その鳥を探してたんだ。竹井大尉にさっき魔法を見せてたんだけどその最中にいきなり勝手に飛んでっちやっただよ。それで追いかけてたら、あんなことになってしまった…わけでした」

「ふーん…」

顔を上げて説明をするソーマにフェルは目を細める。にわかには

信じられないという眼差しを向けて

「それよりさ、なんかあったか？」

「何よ急に」

藪から棒に話題を切り替えてきたソーマにフェルは困惑の顔を浮かべる。

「いや、なんていうかさ。こう…今日のフェルはいつものフェルらしくないって感じがしてさ。なんかあったのかなって」

その言葉にフェルは喉を詰まらせる。

同時に思い出す。先ほどまでの抱いていた悩みを、その悩みの根源たるやり取りこそルチアナとソーマの会話の中にあることを。

けれどフェルは迷わずそれを話すよりも隠すことを選んだ。

「…：別になんてことないわよ」

「そうか、俺の気のせいだったみたいだな。変なこと聞いて悪かったな」

そう言っつてソーマは立ち上がり扉へと向かい手をかける。

そのまま扉を押し去ると思っつていたフェルだがその予想に反して彼は振り向いてこんなことを言っつてきた。

「俺でよかったらいつでも相談乗るから」

「何でもないっつて言っつてるでしょ」

小さく呟かれたフェルの言葉を聞き届けてからソーマは静かにドアを閉めた。

「言えるわけないでしょ」

そう言えるはずもない。話してしまえばいずれはルチアナの耳に入っつてしまう。

もしそうなれば今の関係に亀裂が生じてしまう。それだけならまだいい。

彼女に拒絶されるような結末になっつてしまうようなら…：そうなっつてしまうくらいなら苦しくてもこのまま胸の内に抑え込んでおくのが賢明な判断だ。

その選択の結果ずっつと胸が苦しむことになっつても

### 第三十四輪 暗夜に墜つ

「ドミニカの予想、当たってたみたいだな」

フェルの話を聞いて、フェルの様子を見てソーマはそう確信した。彼女は何かとても重たいものを抱え込んでいる。他人には話せないかあるいは話せない何かを一人で抱えて苦しんでいる。

それでドミニカと竹井を別れてからフェルの元に行こうと決め、不自然に思われぬように偶然を装うためにガルーダを使った結果、思われぬアクシデントに見舞われた。見舞われてしまったわけであるが、それはもう忘れた方がいい記憶として消し去ることにした。

(でもそもそもその原因はなんなのか。それを見つけないとどうにもならない：様子がおかしくなったのは今日の昼頃だからそれより前に原因があるはず)

答えを確かめるべくソーマはある人物の部屋の前を訪れ、ドアを二回ノックした。

その人物とは

「俺だけど。いるか?」

「ソーマ? なーに?」

ノックから数秒後部屋の内側からドアが開き中からマルチナが姿を見せる。

「聞きたいことがあるんだけど今いいかな」

「うん、いいけど」

夜もそれなりに遅い時間だというのにマルチナは嫌な顔一つせずソーマを自らの部屋に招き入れる。

マルチナはベッドに、ソーマは床に腰を降ろす。

「聞きたいことって?」

「フェルのことなんだけどさ様子が変なんだ」

「あ、やっぱりソーマも思った? 私もずっと引つかかっているんだよね」  
「理由に何か思い当たらないか?」

マルチナも同じ懸念を抱いていたことには反応せずソーマは質問を重ねる。

ドミニカや竹井はおろか自分ですらフェルの違和感に気付いたのだ。

赤ズボン隊として付き合いの長い彼女が気付いていないはずがない。

「理由か。そう言われてもなあ。私も全然わからなくて：あ、でもそういういえば今日食堂の前で立ってるの見たよ。入らずにそのままどっか行っちゃったんだよねフェル隊長」

「それ何時頃の話？」

「お昼前かな。その後には皆でお昼ご飯食べたから」

（昼前に食堂：俺食堂にいたよな。俺と、後ルチアナ）

昼前の食堂と言われてソーマも同じようにその時の光景を頭に思い浮かべる。

食堂にルチアナがいたのならフェルが声をかけないはずがなくそうしなかったのにはその時の食堂での出来事に何か原因があるはずだ

「：まさか」

「何かわかったの？」

ソーマの表情の変化から何かを思いついたと察したのかマルチナは身を乗り出すように顔を近付ける

「もしかしたら、程度の可能性だけど」

マルチナにソーマが自分の見解を伝えようとする。

しかしその言葉にのしかかるように基地の警報が鳴った。

☆

敵襲の知らせを受けてフェルたち六人にウイザードを加えた混成部隊が迎撃に出た。

日が沈み、月も雲の合間に隠れ、光源の薄い空の下を隊列を組み目標を探しながら飛行する。

「まさか夜の出撃になるなんて少し緊張してきました」

「私も初めてだな。ソーマはどうだ？」

「向こうで一回だけあるよ」

「じゃあソーマさんだけなんだね。夜戦の経験があるの」

「あまり頼りにならない経験かもしれないけどな」

「そんなことないですよ。一回でも経験してる人がいてくれるだけでもかなり安心しますし」

「そう言ってもらえると助かるよ」

世間話のような感じでやり取りを交わしながらネウロイの襲来方向へと向かうソーマたち。

そんな中で一言も会話に参加せず、一人先に行くフェルは会話を終えた後の全員の視線を集めた。

（フェル隊長？）

何か様子がおかしい。無言で飛行を続ける背中を見てルチアナもフェルの異変に気付いた。

「あの大きな影…皆、ネウロイを発見したわ」

ネウロイの姿を捕えた竹井の一声でルチアナたちは気を引き締め、戦闘態勢に入る。

全員の視線の先には緩慢な速度でありながらも、ヴェネツィアの領空内へと確実に進んでいる大型のキューブ型のネウロイ。

「あれだけ？もつといるかと思ってた」

その姿を見ていささか拍子抜けした感じでマルチナが呟く。

（あのネウロイの形状、前に砂漠で見たのに似てるな）

だがネウロイの特徴を見てウィザードは過去の戦いの記憶を思い起こす。

砂漠で戦った無数の小型ネウロイに分離し、ケンタウロスの姿に変異した個体。目前のネウロイはそれによく似ていた。

もし目の前の個体があ那时的個体と同じタイプだとしたら

「気を付けろーもしかしたらこいつはー」

言いかけた言葉をその場にいた全員の耳に届くより前にキューブ型のネウロイが瞬く間に無数の小型に分裂し、多方向に散らばって襲いかかる。

「くっー！」



接近と同時に撃ちかけられるビームを竹井たちは危なげなく回避する。

しかし攻撃は尚も終わってはいない。

「間違いない。あの時と同じタイプの奴だ。分裂した小型の中にコアを持ったのが一体いるはずだ！そいつを倒せば他のもまとめて消える。そいつを探して潰すんだ！」

「そうは言われても、この数でたった一つを探すなんて難しくない!? どうやってやるっていうの!?!」

有象無象の小型の中からコアを持ったたった一体を探すなど至難の業。森の中で一本の木を探すようなものだ。

しかもその木はこちらの攻撃を回避し、反撃してくるのだ。

ソーマの案を実行しようにもそう簡単にはいかない。

「それでもやるしかないわ！なるべく離れず近くの味方をフォローしながらコア持ちを探すのよ！」

マルチナの言葉に返すように竹井が小型の数体を粉粒に変えながら指示を出す。

四方八方から数多くのビームを打たれかねない状況でばらけているのは危険だと判断してのもの。

その指示が正しいと他の五人も判断し、お互いの距離に気を配りながら各個ネウロイの相手をしていく。

『ハリケーン、スラッシュカスタライク!』

ウィザードはガンモードで牽制すると、即座にソードモードに変形。風の魔力を乗せた刃を振るい小型のファクトリー一つを竜巻の中に閉じ込め粉碎する。

しかし他の小型ネウロイは仲間の死などなんとも思っていないのか一切動じた様子を見せず、攻撃の後の隙を狙ってウィザードにビームを放つ。

それに気付き上昇するウィザード。

数秒後、その足元をビームが通過する。

「つづね、俺は攻撃よりフォローに徹するべきか」

こういう各方位を敵に囲まれた場面では咄嗟にシールドを張れな

い自分は最も撃墜されやすい。

元々空中で多数を同時に相手取る戦闘はウィザードの特性上不利なものもあるが、以前の砂漠での同型との戦いでもあわやというところを宮藤に助けられた。

その反省もあつて単騎での戦闘継続を潔く諦めたウィザードは迫りくるビームを避けながら善戦する竹井の元まで移動する。

「どうしたの?」

「俺がネウロイの動きを止めるから攻撃を任せていいか。防御が苦手だよ」

「いいわ、それでいきましょう」

事前に全ての魔法を見せて説明していたのが幸いして竹井は詳細を言わないまでも思惑を理解してくれた。

竹井の理解の速さに無言で感謝したウィザードは彼女の気遣いに応えるべく複数の魔法を使用する。

『コピー、プリーズ!』

竹井がシールドで攻撃から守ってくれている間に己を六人まで増やすウィザード。

『バインド、プリーズ!』

そこから更に次いで風の鎖で周囲に展開する小型ネウロイを風の鎖で拘束し、動きを止める。

「そー!」

身動きの取れなくなり、ビームの照準を合わせにくくなったところに竹井の放った銃弾が炸裂。

反撃を許すことなく、周辺のネウロイを落とす。

「私たちもやりましょう大将」

「そうだな。数がどれだけいようとジェーンが側にいれば私の敵ではない」

二人の大規模撃破に触発されてドミニカとジェーンも合流する。

並走して飛行する二人の後ろに続くネウロイをジェーンがシールドを展開しながら狙撃。

小型の数機を撃ち落とし、取りこぼしと回避に成功した残りをドミ

ニカがジェーンの背後から飛び出して粉塵に変わる。

「なんだと?」

だが次の瞬間ドミニカを含む全員の顔が驚愕に包まれる。

健在なネウロイが紫色に光ったかと思えばそのネウロイが二つになったのだ。その現象は一つの個体だけでなく、ほぼ全てのネウロイに起こっている。

「また分裂した? 前の時はしなかったぞ」

「こうなったらますますコアを見つけないと。長期戦は不利だわ」

ウィザードと竹井がお互い助け合いながらネウロイを撃墜していくがその攻撃を逃れたネウロイからも新たなネウロイが出現し、数を減らせずにいる。

「フェル隊長! ルチアナ! 三人で一氣に仕掛けよう!」

「ええ、一緒に!」

他に遅れていられないと奮起するマルチナの一声にルチアナは応じ賛同する。

しかし反応のない者がいた。

「フェル隊長? フェル隊長も!」

「…あ、え、ええ! やってやりましょう!」

少し遅れて言葉を返して彼女の個性ともいえるお得意の勝気な笑みを浮かべるフェルだがマルチナにはそれが信用できなかった。

(やっぱり何か変だ…でも今は気にしてる場合じゃないし)

(フェル隊長? なんだかいつもと違う感じじゃ…)

らしくないフェルの様子にルチアナも怪訝な顔をする。

だがそんな変調などお構いなしの相手がネウロイであり、何よりもまずはそれを殲滅しなければならぬ。

ひとまずは置いておいて三人は背中を合わせるように一まとまりになり、お互いの死角をカバーしながら周辺のネウロイを片付けようとする。

ところが三人は突如として激化し始めた小型ネウロイのビーム攻撃の前になかなか集結ができずにいた。

先の二組の傾向から集まられたら厄介だとネウロイ側が思考して

のものだろう。

「集まるどころかこれじゃあ攻撃にも移れない…はっ、ルチアナ！」

より激しさを増すビームの波状攻撃に苦しめられるフェル。

彼女は回避行動の最中ルチアナの死角に移動する一機の小型ネウロイを見た。

しかも恐るべきことにその存在にルチアナは気付いていない。

「ルチアナー！ルチアナー!!」

フェルは脇目もふらず一直線にルチアナの元に飛ぶ。

（ルチアナを守らないと。私の勝手に引き込んだんだから！絶対に！何としても！）

「おりゃああああ!!」

銃を乱射し、ルチアナとの距離を縮めながら彼女の周辺のネウロイをはたき落としていく。

勇猛果敢に思える攻めっぷりだが、離れた位置から見ていた者たちからすればむしろそれは危険な行為に映った。

「フェル!?一人で先行しすぎよ！無茶しないで！」

「何を怯えたように焦っているんだあいつは」

竹井の呼びかけにも反応せずルチアナの周辺のネウロイに一心不乱に銃を打ち続けるフェル。

その姿にはドミニカも面食らわずにはいらなかった。

周りの音が耳に入らない程の焦り。視野を狭める不安。それらはフェルにルチアナの危機を助ける機を与えただけでなく、彼女自身の危機を作った。

高高度。フェルの上空、認識範囲外に飛んだ小型ネウロイの照射した一射がフェルのストライカーを撃ち抜いた。

「な、きやああああああ!!」

完全に無警戒な方向からの攻撃に驚く間もなく対応できなかった。ストライカーユニットの破片をまき散らしてフェルは為す術なく落下していく。

「フェル隊長!!」

「助けに行くにもこれでは…!」

ビームによって進路を塞がれ方向転換を余儀なくされそしてその度にまた進路上に赤い線が置かれる。

「フェル！今すぐ助ける！」

蜘蛛の巣を張るように迫りくる赤い線を回避しながらソーマは瞬時に脳内で最適解を導き出す。

（バインドじゃ落下は防いでもかえっていい的になるだけだ。ここはジェット超加速で…！）

ネウロイの波状攻撃と包囲網を振り切り、フェルを救出するにはジェットの超スピードしかない。

その魔法を使うために必要な形態へ変身しようとウィザードはハリケーンリンクスウィザードリングを指にはめ、ウィザードライバーにかざす。

「反応しない？」

ところが使用を許可する音声は鳴らず変身は実現しなかった。それどころかエラー認証すらも鳴らない。

「どういうことだ。なんなんだよ！こんな時に！」

たまらず声を荒げ怒りをぶつけるウィザード。

がむしやらに指輪をかざす動作を繰り返すが一向に期待にこたえてはくれない。

その間にもフェルと海面との距離は縮まっついてウィザードの焦りはますます加速する。

そしてその焦りは隙を生み、そこに視界の端から一筋のビームが放たれる。

「危ない！」

気付いた竹井が咄嗟に射線上に割って入りシールドで受け止めきる。

竹井はウィザードの無事を確認すると、他の面々にも目を走らせる。

（フェルの救出を急ぐあまり皆動きに落ち着きがなくなっている…このままだと）

攻撃も防御もおろそかになっている。

これが続いた場合どうなるか：最悪の結末を想定して冷や汗をか  
く竹井。

「ここは体勢を整え直す他ないわね…離脱するわ!」

「ダメー!フェル隊長を助けないと!」

マルチナが反発の声を上げる。この間にフェルの姿は波の中に飲  
まれてしまった。それだけに何としてでも助けなければという思い  
に駆られていた。

「このまま戦闘を継続しても一人一人落とされるのを待つだけよ!苦  
しいけど理解して!」

「そんな…」

マルチナにもルチアナにもわかっていた。竹井の下した決断が  
フェルを見捨ててものではないことも、圧倒的な物量とビームの前で  
はフェルの救出が叶わないことも。

しかし、いやだからこそというべきか。二人とも苦悩に歪んだ顔を  
しながらも『早くどうか助けられないか』と思考お巡らせていた。

「撤退よ!皆、後退しながら合流して!」

「くっ、了解!」

「は、はい!」

ドミニカとジェーンも後ろ髪を引かれる思いながらも指示  
に従う。

ビームの豪雨をかい潜りながらもどうにか合流した四人を見てル  
チアナも決心する。

「竹井さんの言う通りにしましょうマルチナ」

「でもルチアナ!」

「フェル隊長なら大丈夫なはずですよ!きつと、何とか無事でいてくれ  
るはずですよ!だから今は、竹井さんの指示に」

「…うん」

その言葉を受けてマルチナも唇を噛み締めながらも決定に従った。

助けたいのも辛いのも自分だけじゃない。ルチアナはそうだし、竹

井もドミニカもジェーンもソーマだつてそうだろう。

なのに自分だけが我が俣を振り回してしまつては余計にフェルや

皆の迷惑になるだけだ。

「すぐに戻ってくるから。待っててね隊長」

そう言い残すように呟いてマルチナは後退し、撤退する五人の後に  
ついて行った。

### 第三十五輪 優しさという強さ

日付が変わって数時間。執務室でドツリオは帰還した竹井からの報告を聞いていた。

「そう、フェルが…」

フェルの撃墜、それを聞いて楽天家がウリのドツリオも真剣味を帯びた顔にならざるを得なかった。

「申し訳ありません。私がつとしっかりしていれば」

「タケイの責任ではないわ。それだけ敵が手強かったというだけのことよ。貴方はよくやったわ」

ドツリオがかけた言葉は掛け値なしの本音であった。

分裂と増殖によつて数を増やし、コア持ちの個体を困難にさせる特性を持つという今回のネウロイ。

彼女以外の誰かが指揮していたとしてもおそらく同じあるいはそれ未満の結末になっただろう。

「ネウロイのこともだけどそれよりもフェルの救出を優先しないとね…他の皆はどう?」

「帰投してすぐドミニカさんとジェーンさんには一時仮眠を取つてもらうようにしました。フェルの捜索に出てもらうために。たとえば数時間でも寝ないよりはマシですから」

「正しい判断ね。後の三人は?」

「マルチナさんとルチアナさんは自分の部屋で待機してもらっています。彼女たちにもドミニカさんたちとおなじように睡眠を取るようには言いましたがたぶん休めていないと思います」

「…そうね。なるべく今は二人をそつとしておいてあげて」

「そのつもりです。あの二人が一番ショックが大きいでしょうから」  
赤ズボン隊の三人の間には特別強い繋がりがあつた。それだけにフェルの撃墜並びに行方不明はショックが大きく、心身共に落ち着ける時間を要するだろう。

最も時間は用意できても満足に休めるかどうかは本人たち次第と  
言うほかないのだが



「ソーマさんは自分から部屋に戻って休むとは言っていました。ただ彼もルチアナたちの様に休めないと思うんです」

「優しいものね。あの子も…どうか少しでも休めて欲しいわ」

「どうか少しでも休めて欲しい。それはソーマに限らず、目の前の竹井を含めた全員に対して思った。」

☆

ソーマの部屋のカーテンは閉め切られていた。

カーテンの隙間から僅かに漏れる神々しささえ感じる月の光しか照らすものがない空間の中でソーマは座り、床に視線を落としていた。

(俺が指輪をちゃんと使えていたらこんなことには…)

後悔に苦しむソーマは床から掌に握るハリケーンリンクスウィザードリングへと視線を移した。

フェルがネウロイの攻撃を受けて落下した時助けられたはずだったのだ。

それができる力があると自覚していたし、実際に過去の戦いではフェルの救出をするには充分可能な超スピードを使っていた。

なのにそれができなかった。

(…なんでだ。なんで急に答えてくれなくなったんだ…あの時のあれは偶然だったのか…？それとも)

思えばそもそもハリケーンリンクスへの変身は他の四スタイルとは経緯がてんで異なる。

ペリーヌ・ハルトマン・シャリーリーの体から出てきた光が変化した指輪の出現と共にその変身が可能となった形態である。

言うなればハリケーンリンクスの力には三人の力が含まれているに等しい。

となると考えられる可能性は

(この指輪は俺に使われたくないってことなのか?)

ハリケーンリンクスに変身した唯一の一回。その時はウォーロツ

クを倒してガリアを解放するという共通目標が501全員の間にあった。皆が同じ方向を向いていた。

だからペリーヌやハルトマン、シャーリーの力とそれを扱うハリケーンリンクスへの変身はできた。

だがウォロックを倒し、ガリアを解放した今彼女たち三人に裏切り者である自分に力を貸す理由などない。自分が彼女たちに拒絶されているから変身ができないのだと、そんな考えが浮かんだ。

「ソーマさん。まだ起きてますか？私です。ルチアナです」

指輪に視線を注いでいるソーマの耳にノックの後にそんな声が聞こえてきて顔を上げる。

「…うん。今開けるよ」

指輪を机に置いてドアに向かい、鍵を解除する。

ドアを開ければそこには不安気なルチアナの顔があった。

「どうした？」

「竹井さんには寝るようになって言われたんですけど寝れなくて…少しだけお話してもいいですか？」

「いいよ。入って」

ソーマは一礼した断ることなく部屋に招き入れる。彼女はベッドに腰掛けたソーマの横に座る。

「ごめんなさい。ソーマさんも眠らないといけないのに。私の勝手に付き合わせてしまっただけです」

「そういう言い方しなくていいよ。気持ちはわかるから」

「そう言ってもらえると少し気持ちが和らぎます」

沈黙。そこから数分間二人の間に言葉はなかった。

ただじつと座っているだけだった。

それに対してソーマは機嫌を損ねはしない。

彼もルチアナを思いやれない程鈍感な男ではない。たとえば自身身の不甲斐なさを責めている最中であつたとしても

不気味なくらい静かに、美術品のように美しい雰囲気醸し出した横に座るルチアナを上から下へと視線を動かして見つめていると

ソーマはあることに気付く。

(目が赤い?)

よく見てみると彼女の目は赤くなっていた。

袖にも注目していると黒い服の袖の部分に染みのような跡が浮き上がっているのがわかる。

この部屋に来るまでのルチアナがどんな様子であったのかをそれでソーマは理解した。

故に彼が伸ばした手でルチアナの手をそつと卵を扱う時のように優しく包み込んだ。

「大丈夫」

不意に訪れた温かな感触とかけられた言葉にルチアナは視線をそちらに向ける。

「フェルなら絶対大丈夫だ。きっと俺たちが助けられると信じて待っているはずだ。今は前向きに考えて俺たちにできることを全力でしよう」

「…そうですね。そのためにもまずは寝ないと、ですね……あの、もう一つだけお願いしてもいいですか?」

「なに?」

「今日はこのままここにいていいですか?一人だとまた心配事ばかり考えちゃってたぶん寝れないと思いますから」

「構わないよ。もちろん」

我ながらどこまでも勝手な要求だとルチアナ自身も思っていたがソーマは喜んで承諾してくれた。

ソーマは彼女にベッドを譲り、自分は床で眠りについた。

押しかけた側なのにベッドを使うなどと失礼な話、とルチアナは拒んだがそうしないと今度は自分の方が寝れないとソーマに言われてはその好意に甘えざるを得なかった。

それから数時間。

意識が覚醒するなりソーマは起き上がり、ベッドで静かに寝息を立てるルチアナを起こさぬようにして外へと向かう。

外に出て間もなくガルードとユニコーン、クラーケンとゴーレム。使役する使い魔を立て続けに起動させる。

「なるべく急いでくれ」

そう伝えるとガルードはユニコーンを脚で、クラーケンはゴーレムを触手で掴んで二組のペアに別れて飛行していく。

基地から遠く離れて小さくなっていく自身の使い魔の姿をソーマは見送る。

(頼む、無事でいてくれ)

☆

「う…うん…」

意識を取り戻し始めたフェルがまず感じたのは冷たさだった。

全身、特に脚から腰の辺りが冷たい。

「…こ…こ…」

倒れていた体を両手で起こして暗闇から解放された視界で彼女が見たのは森と砂浜。後ろには小気味よい音を立てる波があった。

「私、なんでこんなところに…？そっか私落とされたんだっけ」

思考が働き始めてようやく状況の理解ができた。

ルチアナが被弾しかけたのに焦りを感じて無理な攻撃を仕掛けてしまった。その結果として周りを見る余裕を失い、落とされたのだと。

「…これじゃ使い物にならないわね」

飛行に必要なプロペラが無残に千切れ、ユニット自体も切断されてしまっている。

プロペラが無事であったとしても飛行は不可能な損傷具合なのは人目でわかった。

「どうしよう…って救助に来てくれるのを待つしかないわよね。当然」

仲間の顔がちらつく。真っ先に浮かんだ二人の内、一人に思うところがあったのかその時フェルの表情に陰りが生まれた。

しかしそれも僅かな間。何よりもまずは生きて帰ることを優先すべきとフェルは思考を切り替えた。

「ストライカーはこのままでいいか。目印にもなるし」

幸い墜落したのが浜辺で視界を遮る物体はない。探しに来た竹井たちに自分の居場所を知らせるにはいい目印になる。

ストライカーをその場に残してフェルは身を隠せる場所を探し求めて移動を始める。

「いったーもう、服は濡れて寒いし何から何までさいっあく！」

森の中を歩いていると木の欠片が足裏に刺さってフェルは口から悲鳴をこぼす。

治癒魔法の使い手であることから即座に傷口を治して、足元に注意を払いながら歩行を再開する。

そして見つけたのが洞窟と思われる穴だった。

「ここならいいかも…大丈夫よね。熊とか変なのいないわよね」

猛獣やら蛇やら妙な生き物の住処でないことを怖がり、祈りながら中に入る。

洞窟自体はさほど深くはなく、他の動物はいないようだった。

一時的に雨風をしのげる場としては好条件だ。

「何もなさそうね。よかったー…さつきから独り言多いわね私。らしくないっいたらありやしない。あーやだやだ」

岩肌を背中を預けるように座りながら呟く。

周りに誰もいないからか、遭難という状況下におかれているからか。とにかく不安が心にあるのは認めたくないが認めなくてはならない。

(助けに来てくれるかな…ルチアナ、マルチナ)

☆

同時刻。ブリーフィングルームではフェルの救出兼敵の動向を探るための偵察から帰還したドミニカとジェーンを交えての対策会議が行われていた。

「あの一帯の空にはまだネウロイがいる。もしあの近くの島のどこかにフェルが漂流しているのだとしたらあれがいる限り捜索は不可能だ」

「まるで動く気がないって感じてました：ソーマさんの使い魔がフェルさんを見つけてくれてたらせめて救出だけでもしたいところですけど…」

二人の話に竹井の表情は深刻さを増し、ソーマに情報提供を求める。

「分裂して数を増やすネウロイ、あれをどう攻略するか。スペランツア中尉は似たようなタイプと交戦したことがあると言っていたけどその時はどうだったの？」

「前に戦ったのは今回のみたいに数が増えるような特性はなかったんだ。魔眼を持っているウィッチがコアを持つてるのを探し当てて、他が数を減らして探しやすくするみたいな流れになってた」

「魔眼の能力を持つウィッチの派遣を要請することはできないのか？」

「一番近い基地に頼んでも数日はかかるわ。それまでフェルの体力が持つかっていったら…」

「私たちだけで倒すしかないということか」

ドミニカの言うように単に倒すだけなら魔眼を持ったウィッチが来るまで待つのも一つの手ではある。

しかしそれだとフェルの救出が叶わなくなるし、ウィッチの選抜にも相応の時間がかかる。

結局のところ追加補充の効かない現状のメンバーでネウロイを倒すしかないのだ。

「コアを持ったネウロイさえわかればまだやりようはあると思うんですがそれも難しいですよね」

「昨日だって最初でも数多かったのにそこからバーツと増えてきたからね。ほんと嫌になる」

ルチアナとマルチナが昨夜の戦闘を振り返りながら話す。

昨夜の戦闘帰還時は休んだらすぐさまフェルの元に飛んでいきそ

うなマルチナだったがいつものような声色と口調に戻っている。

だがその態度が意図的にそのように勤めているのだというのはドミニカたちにはわかっていた。

ならば尚のこと彼女の思いに応えなければと身と心を引き締める。

具体案が出ずに悩む中、ソーマもいい手がないか考えを巡らせながらポケットに手をつ突っ込む。

三つの指輪を出し、その内の一つを摘まむように片手で持つて自分の目線の高さまで運ぶ。

「何か考えがあるの？ソーマ」

無言で神妙な面持ちで指輪を持つその動きを見つめていたドツリオはソーマに声をかけた。

「あ、いや……考えてるのは一つある」

「聞かせてくれる？」

「でもできるかわからないんだ。前はできたけどまたできるかは……」

「それでも聞かせて。ちよつとでもできる可能性があるのなら聞いておきたいわ」

その場における全員がソーマに視線を集中させた。

それを見て変に余計なことを口にして混乱させてないけないと一旦は言葉を呑み込もうとしたソーマだったが、考えを改めて自分の考えていたことを打ち明けた。

彼から語られた内容を聞いて咀嚼する面々。それから真つ先に口を開いたのはドツリオだった。

「いいわ。それでやってみましょう」

即決するドツリオ。彼女の判断に不安を色濃く顔に出し難色を示したのは意見を出した張本人のソーマだった。

何を言いたいのか看破したドツリオは彼が口を出す前にあつげらんかんとした笑顔を浮かべて言い放つ。

「次もできるかもしれないでしょ？それにできなかったとしてもその時はまた別の方法を考えてやればいいのよ。ねえ？」

「実際他に有効そうな作戦もないし、今話してくれた話は俯瞰的な目線で見ても最善だと思うわ」

と続いて竹井は好意的な意見を述べる。他にもルチアナもマルチナもドミニカもジェーンも言葉にはせずとも同意見だというようにソーマを見ている。

「わかった。やってみる」

これだけ信頼されて裏切るわけにはいかない。ソーマはドットリオたちの顔をしっかりと見て答えた。

するとその時開けっ放しにしていた窓からガルーダ・クラークン・ゴレムの三匹の使い魔が帰って来て、主であるソーマのいる机に並び立つ。

「可愛い…」

「ユニコーンがない…見つけたのか!」

「本当ですか!?!」

ソーマの言葉に応えるようにジェーンに『可愛い』と称された使い魔たちは身振りで頷き、鳴き声で肯定を示す。特に感情表現がオーバーなゴレムは元気よく高くジャンプして一際わかりやすく伝えてくれた。

その動作にルチアナやマルチナたちにも安堵と喜びの表情が浮かぶ。

喜びの連鎖はドットリオにも起こり、彼女は不敵な笑みを見せた。

「じゃあ皆、作戦の準備に取り掛かりましょう。ネウロイに私たちアルダーウィッチーズにかかれればちよちよいのちよいだってことを思い知らせてやりましょう」

「了解!」

☆

「ふえつくし!はあ…お腹空いた…」

大きくくしやみが暗く静かな空洞にこだまする。

一体どれくらいの間が経っただろうか。

意識を取り戻してこの洞窟に入ってから三、四時間。撃墜されてからは半日以上といった具合か。



もしかするとそれ以上経っているかもしれない。

海水に濡れた体は洞窟の入り口から侵入してきたすきま風のせいで寒くて震えあがり、ろくすっぽ食料も口にしていないからお腹は何度もやかましく音を立てて栄養を求めてくる。

（このままだと助けが来る前に：食べ物だけでもなんとかしないと：だけど動く気力がない：動かなくちゃって頭じゃわかつてるのに：私の我が侘でルチアナを振り回した罰かえってきたのかもね）

こうやって時間が経てば間違いなく死ぬ。けれどももうそれでも、ぼんやりと思っていた時、掌にポツンと乗りそうなくらいの青い馬が洞窟の入り口からやって来てフェルの近くに駆け寄ってくる。

「なに…この馬…うま？」

「よかった。なんとか無事みたいだな」

馬にしては小さ過ぎ、珍しい色合いをした目の前の奇妙な物体をなんと表現したらよいのかと戸惑っていると、青い馬―ブルーユニコーンのやって来た洞窟の入り口からウォータースタイルのウィザードが歩いてくる。

「あんた…どうして？」

「この辺の空にまだあのネウロイがいてさ。ネウロイに気付かれずにフェルのところに着くには海の中を移動するしかないってことで俺が来た。ほら、これ。お腹空いてるだろ？」

ウィザードがコネクトの魔法陣から取り寄せた小包をフェルに渡す。

それがフェルの手に渡ったのを確認すると次いでフレイムスタイルに変身し、掌に灯した炎を彼女に向ける。

「寒かっただろ。もっと温度上げるか？」

「いい。ありがとう」

邂逅してすぐさま口にしていない自分の要望を提供してくれる優しさと気遣いにフェルは感謝するが、その声はいつもと違う。

衰弱状態にあるせいかな、別の原因によるものか。その追及は一旦置いといてウィザードはクラークを起動させる。

「疲れてるところ悪い。隊長たちに見つけたって伝えておいてくれ」

指示を受けたクラークンが入口を通って基地へと飛んでいく。

その間にフェルが小包を開けており、中には三個ほどのおにぎりが入っていた。

「これって」

「おにぎりっていう扶桑の料理だよ。時間がなかったからそれくらいしかできなかった。味も全部塩振っただけ」

ソーマの説明を聞いてフェルは物珍しい目を維持したままおにぎりにかぶりつく。

「…おいしい」

「ならよかった」

確かに本当に塩の味しかない。

けれど不思議と最近食べたどの食べ物よりもおいしく感じた。長時間何も口にしていなかったからだだろうか。

「怪我は大丈夫か？」

「自分で治した。ダメになったのはストライカーだけ」

「ならひとまずよかった。ストライカーは別の場所か？後で場所を教えてください。俺が直しに行く」

暫し会話が止む。フェルが咀嚼する音だけが洞窟の中に存在する音となっている。

「昨日から様子が変わったのってルチアナのことか…」

一個目のおにぎりを食べ終わるのを待っていたウィザードがフェルにかけて言葉がそれだった。

その瞬間言葉をかけられた彼女は息が詰まったような衝撃に襲われた。二個目のおにぎりを取ろうと伸ばした手を止め、『どうしてそれを…』と言いたげな目を丸く顔で見る。

その表情でウィザードは己の予感が的中したのを悟った。

「マルチナが教えてくれたんだよ。昨日の昼前に食堂の前でフェルを見た時から変な感じだったって。それでももしかしたら、って…聞いてたんだろ？俺とルチアナの会話」

「……」

「自分が強引に引き込んでそのせいでルチアナが本当にやりたいこと

をできなくなっただって思ってるんじゃないか？」

「なんでそんなことがあんだにわかるのよ」

「俺も同じ立場だったら似たようなこと考えるタイプだからさ。なんとなくな」

ウィザードの言葉にフェルは反論せず、沈んだ顔で地面へと向ける。

「ルチアナがそう言ったか？」

彼女の反応を観察してからウィザードが紡いだ言葉にフェルは顔を上げた。

「そりゃあ遠慮して言いたいことを言えずにいるってこともあるだろうさ。でもルチアナにとってフェルは自分の夢と同じくらいに大切で、一緒にいる今の時間が楽しいって思ってるのは確かはずだ：そのことは俺でもわかる。じゃなかったらお前が撃墜されて夜も眠れないほどシヨックを受けたり、慣れないおにぎりを作ったりなんてしない」

「え？」

「そのおにぎり作ったのルチアナだぞ。ルチアナの方からフェルが元気になるために短時間で手軽にできるものを教えてくれないかって頼んできて。それでな。俺も手伝いはしたけどその中に俺の作ったのはない。全部ルチアナのだ。ルチアナがフェルのために作ったんだ」

「ルチアナが私のために？」

フェルは持っているおにぎりに視線を落とす。

さつきまで単なる食べ物として見ていなかった物が急に特別な何かに思えてきた。

「料理は気持ちが入っていると美味しさが増すって聞いたことがある。それを美味しいって思ったならそれだけルチアナがフェルを想う気持ちが詰まってるってことさ。だから変な心配するな。どうしても気になるってなら直接本人に確かめてみたらどうだ？」

ウィザードの言葉の後に再度訪れる沈黙。

ただ今度はフェルの反応が違った。

「…そうね。私、帰ったら直接ルチアナに聞いてみる」

フェルの言葉に段々と力がこもっていき、顔には笑顔が戻っていき。

「おかげでやっと気付いたわ。私の好きなルチアナはどんな言葉をかけても私のことを嫌いにならないってこと」

自信満々で勝気、ようやくフェルという少女が本来の自分の長所を戻した。

その瞬間を目の当たりにしてウィザードは安心する。

「そのためにもあのネウロイよ。どうする気なの？ 作戦はあるの？」

「ある。もちろんフェルにも協力してもらおう」

「望むところよ。今度こそリベンジして私たち赤ズボン隊の前に敵はないって教えてやるんだから」

自身の胸の前で右の手で握りこぶしを作り、戦意をたぎらせるフェル。

しかしウィザードは一つ引つかかることがあり、わざとらしく聞き返した。

「赤ズボン隊？」

「…っと、私たち第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズ、ね」

そう。赤ズボン隊、ドリリオと竹井、ドミニカとジェーン、そしてソーマこと魔法使いウィザードで構成される第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズ一丸となってネウロイと戦うのだ。

逆襲の時は間もなく始まる。

## 第三十六輪 信じあう心

複数の島が点在する海の上空に浮かぶキューブ状の大型ネウロイ。平和を脅かさんとする強大な力を持った黒き巨影に米粒程の五つの小さな影が青空の彼方から接近しつつあった。

「皆、いくわよ」

「了解」

小さな影―竹井、ドミニカ、ジエーン、ルチアナ、マルチナは竹井が声をかけると同時に散開する。

懲りもせずやって来た五人のウィッチを迎撃するべく大型ネウロイは昨夜と同じように全身から紫色の光を放つと、大量の小型となってウィッチたち一人一人へと向かっていく。

多方面から撃たれるビームをストライカーを操り回避する竹井たち。

その動きは皆前回と違って危ういものではなく、相手に翻弄されることなく落ち着いている。

回避してすぐさま方向転換。的確な射撃でネウロイを落とし、落としたネウロイとは別のネウロイから新たなネウロイが生成されても狼狽えず、攻撃の気配を感じたら回避する。

「そう、それでいいわ…後は」

目に見えてネウロイの数が減っているとは思えない戦い方であるが竹井はそれでよかった。

彼女はビームを発射しようとしていたネウロイを撃ち抜きながら視線を走らせ、周りの様子に気を配る。

その時戦闘空域から少し離れた島々の一つから花火が打ちあがった。

太陽に負けない強烈な光と風に運ばれて来る轟音に竹井たちは一斉に花火の上があった方角を見た。

「あそこね。いくわよー」

「ビームに気を付けながら、だよ。わかってるよ」

竹井の言葉に楽観的な調子で応じながら移動するマルチナ。

残る三人も後に続き、ネウロイもまたその背中を追いかける。

竹井たち五人の移動は島の浜辺にいるウィザードとフェルの目にも不鮮明ながらしつかりと映った。

激しい音と眩い輝きを絶え間なく生み出す空を見上げて二人は目配せして頷き合う。

「よし、こっちも始めるぞ」

「もうとつくに準備はできてるわよ。いつでもいいわ」

ウィザードがタイムの魔法で修復させたストライカーを身に着けるフェル。

プロペラや動作に何も不具合がないのを確認したウィザードはフレイムスタイルからハリケーンスタイルにチェンジし、サイクロンの指輪を指に嵌め終わると島の上空に舞台を移した竹井たちの戦闘を見上げる。

「私は右を見るわ。左お願い」

ドミニカとルチアナ、マルチナのいる右側にフェルが、竹井とジェーンがいる右側にウィザードが意識と視線を集中させる。

空中では目まぐるしく攻防が入り乱れている。ネウロイが落とされる時であれば、ジェーンが背後を取られて竹井がその窮地を救う時もあった。

(今すぐにも飛んでいきたい…でも私がするべきことはそうじゃない。私は私のやることに集中しないと。そのためにルチアナたちが戦ってるんだから。私たちを信じて)

(どこだ…どこにいる…)

心中は穏やかではなかった。たたださえ七人でも大苦戦したの五人、しかもこちらがコア持ちを特定しやすいようにと一人一人がバラバラに散らばって味方に隙を補ってもらえない状況にあるのだ。

いつ撃墜される者が出てきてもおかしくない。不安でたまらない気持ちは大きい。

だが不安が芽生える度に二人は必死にこらえて感情が体を動かすのを抑え、じつと戦場の空を見上げていた。

(あれか?)

その努力が功を奏し、ウィザードはネウロイの集団の中で他の個体に守られているように見える個体がいるのを発見した。

それがコア持ちである見込みは高いがまだ確証は持てず動けない。試しにウィザードはコネクトの魔法陣に腕を入れ、戦場から離れた空に浮かべた魔法陣からウィザードソードガンで狙撃を行う。

すると弾丸の進行に気付いた別の小型ネウロイがそのネウロイを守るように盾となり散っていった。

その不自然な動きを見てウィザードは自信を持ってフェルに断言した。

「あの動き、間違いない。あれがコア持ちだ!」

「見つけたのね!」

「ああ、あそこだ!」

ストライカーに魔法力を注ぎフェルは飛翔する。飛行に問題はなく、風に影響を受けることなくウィザードが指で指した方向へコア持ちの疑いのある個体へと射撃を行いながら直進していく。

「フェル!」

「フェルさん!」

「フェル隊長!」

海上から空を駆け上がるように飛び、勇猛果敢に攻める彼女の姿を見て喜びの表情を見せる五人。

島に残ったままのウィザードはサイクロンの指輪を見つめて語りかける。

「この後使えなくなってもいい。でも今この時だけは成功させなきゃいけないんだ。仲間を助けるために…俺に力を貸してくれ!ハルトマン!」

指輪に描かれたパーソナルマークの主、エーリカ・ハルトマンへと祈るように助力を乞いドライバーにかざす。

『チヨォーイイネー・サイクロン、サイコー!』

自由気ままな天使が応えてくれた。

ハリケーンスタイルの状態のままサイクロンが発動し、コア持ちと

その周辺のネウロイは丸ごと竜巻に呑み込まれ中で風に切り刻まれる。

これがソーマの打ち立てた作戦。

コアを持つ個体を特定した上でその周辺の小型ネウロイをまとめて同時に倒してしまえばいい。

拘束と攻撃を同時に行えかつ範囲外からの敵の侵入を防ぐ壁を形成できるサイクロンの魔法はまさに打ってつけだった。

現にその見立て通り切り刻む魔力の渦に小型の数体は増殖する間もなく絶命している。がしかしまだ肝心のコア持ちは耐え凌いでいる。

「くっ、があああー！」

魔法を維持するために魔力を集中させている右手にスパークが走り、ウィザードは苦悶の声を漏らす。

（溢れる魔力を制御できない！普通のハリケーンじゃダメってことか…だがそんなの、構うもんか！）

痛みが増すのもおかまいなしとばかりに魔力の使用量を増やす。

腕の痛みと引き換えに威力が上がり、竜巻の中のネウロイは塵芥と化していく。

「どりゃあああー！」

そこに竜巻の外側からフェルが銃を撃つ。魔力を込めたウィツチの弾丸なら強風に耐え、ネウロイを狙撃することができる。

彼女の放った弾は竜巻の中に突入しても形を保ったまま小型ネウロイを撃ち抜く。

そしてフェルに加勢が入った。

「フェル隊長、私たちも手貸しちやうよ」

「マルチナ…」

左にはマルチナが颯爽と入り

「これが終わったら隊長の大好きなものたくさん作りますからもう少しだけ頑張ってください」

「…ルチアナ」



右にはルチアナが気遣いの言葉をかけながら駆けつける。

二人の顔を見てフェルは自然と笑みを作る。

「へへ…ありがとう」

明るい笑顔を見せあって三人は竜巻に向けて射撃を開始する…正確にはその中のネウロイに向けて

中から隙間を縫ってビームを放たれるも竜巻の外をぐるりと回るように回避しながら、残弾数を惜しまず三方向から撃ちまくる。

竜巻の中のネウロイは減っている。その証拠に風に混じる白い粉の量は増え、飛んでくる赤いビームの数は減っている。

だがまだ竜巻外のネウロイが健在。ということは肝心のコア持ちネウロイも生き残っているということ。

「しぶといわね…根性振り絞って踏ん張りなさいソーマー！」

「うああああああ!!」

フェルが声を発した直後サイクロンの出力がまた上がった。

どうあっても声が届く距離ではないのにまるで彼女の言葉に背中を押されたようなタイミングでウィザードが魔力を強めたのだ。

そして遂に、三人の内の誰かの弾がネウロイのコアを撃ち砕いた。

同時に竹井たちが相手取っていた他のネウロイも連動して行動を停止し、粒子へと姿を変えていく。

「一つ残らず…終わったな」

「成功したんですね。私たち」

「ええ、皆が頑張ってくれたおかげでね」

ドミニカ、ジェーン、竹井が緊張を解き、戦闘終了の余韻に浸る。

顔を見せて頷き合うと三人はコア持ちネウロイを撃破した赤ズボン隊に視線を移す。

静寂に包まれた青空に赤ズボン隊の三人は浮いていた。

「ねえルチアナ。私」

「隊長ずっと私のことで悩んでたんですね。私の夢のことで」

まさにそのことを言いかけたフェルを遮ってルチアナが告げる。

「どうしてそれ…」

「ごめんね。ここに来る前話しちゃった。ソーマと相談してルチアナ

には話すつて私が」

「そうなんだ」

マルチナは申し訳なきように言うがフェルはマルチナを責めたりしない。

ルチアナから次の言葉が放たれるまでの数秒間にどんな内容であったとしても受け入れる心構えの姿勢に入り、待っていた。

「確かに夢は諦めてませんし、私にとって大切です…でも夢と同じくらい今の時間が大切なんです。フェル隊長やマルチナ、504の皆さんと一緒に過ごす時間を私は楽しいと思つてます。むしろフェル隊長には感謝してもしきれません。あの時私に声をかけてくれたこと、あれがなければ私は今ここにいませんから。こうしていることがとても嬉しくて楽しいんです…だからありがとうございます。そしてこんな私でよければこれからもよろしくお願いします」

「…何言つてんのよ。ありがとうだなんて…そんなのこつちから言いたいくらいよ。ありがとうルチアナ、マルチナも、こんな私についてきてくれて」

「どういたしまして。えへへ、当然これからもついていくからね。覚悟してよ?」

和気藹々とした雰囲気で言葉を交わし、晴天にも負けない晴れやかな笑顔の三人を傍目に見ていた竹井たちも満足気に微笑む。

(よかったな。三人とも)

そしてそれはウィザードも同じだった。

右腕を左腕で抑えながら彼はフェルたちを見つめていた。

☆

赤く腫れあがっていた。

脱衣所でタオルを腰に巻き半裸となったソーマは顔を顰め、自身の右腕に視線を落としている。

「全然痛みが消えないな…つてえ、やっぱりあの魔法はハリケーンリンクスじゃないと無理か」

腰のタオルの上にウイザードライバーを出現させてハリケーンリンクスの指輪を取り、翳してみる。

案の定というべきか変身音もエラー音も鳴らない。

深く大きな息を吐いて、指輪を外す。

その後プラズマ、ジェット、サイクロンの指輪を試しても結果は変わらず

「ダメか…」

籠の中の着衣の上に置いた四つの指輪に答えを求めるとような視線を集中するソーマ。

『言っておくが今回俺は一切干渉していないぞ』  
「!!?」

思案していたところに突然響く声。

弾かれたように周りに目を走らせるソーマだが自分以外の存在は影も形もない。

(今のは、俺の中にいる奴の声?…干渉していないって、じゃあ他にどんな理由が)

聞こえてきた声は自分の中にいる存在…ドラゴンのものだと遅れて理解した。

何かを考えること数秒、諦めてソーマは浴場へと姿を消した。

☆

夜の街の高台。街を一望できるその場所に蛇の怪物が佇むように立っている。

その顔が為す微笑みには月明かりの神秘的な光に照らされているにも関わらず、悪魔にも似たおぞましが宿っていた。

「もうすぐ会いに行くからよお。東の間の平和、今の内に満喫しとくんだな」

### 第三十七輪 追跡！赤ズボン隊

ロンドンの病院のある一室。

ここではブリタニアでの激闘を終えた一人の軍人と一人の民間人が対面していた。

「おはようお姉ちゃん」

「おはようクリス。もうだいぶ元気になってきたんじゃないか？前に比べて顔色がよくなってる」

クリステイーナ・バルクホルンとゲルトルート・バルクホルン、二人の姉妹が互いの顔を見るなり挨拶を交わす。

二人が邂逅するのはガリア解放直前、実に数か月ぶり。

昨日から今日というこの日を楽しみにしていたバルクホルンは親愛なる妹に笑顔で近づくとベッドの横に置かれていた椅子に座る。

「今日はハルトマンさんと一緒にじゃないの？」

「あいつはまだ夢の中だ。情けないにも程がある」

「ハルトマンさんらしくていいと思うよ。私はハルトマンさんのそういうところ好きだよ」

「…そ、そうなのか…だ、だがしかしあまりこういうのは軍人としては…」

自堕落など規律を重んじるバルクホルンからすればすぐさまきっぱりと否定したいところであるのだが規律よりも大事な妹にそう言われては返す言葉に困る。

これがシャーリーやソーマであったならいつものように反論がすらすらと浮かんで返すところなのだが…クリスとなると話が変わって来る。

「ふふ、そういうえば聞いたよ。ガリアからネウロイを追い出せたんだよね。おめでとう」

「ああ、しかしだからといってまだまだ戦いが終わってはいない。カールスラント…私たちの故郷を奴らの手から奪い返すまでは私の戦いは続く」

もちろんガリア奪還という仲間ペリーヌの悲願を達成できたのは喜ばしく

人類にとって大きな進展となった。

しかしバルクホルンやクリス、ミーナやハルトマンたちの祖国カールスラントは未だネウロイの占領下にある。

クリスにも言ったがバルクホルンの真の戦いはここからといえよう。

「無理はしないでね。平和も大事だけどお姉ちゃんが元気であることの方が私は大事だから」

「ありがとうクリス。肝に銘じておく」

そう妹の善意に感謝してバルクホルンが何気なく視線を外すと開いた窓が目に留まった。

冷たい風が入ってくるだけでなんの変哲もない窓。だが今日に限っては何故か妙に気になる。

そして一つ気になりだすとさつきまで気に留めなかった他の物にも目がいく。

次にバルクホルンが目を付けたのはクリスのベッドの横にある棚の上に飾られている花瓶に刺している赤い花。

「この花…？」

「え？あ、それね…そう、この間病院の人がくれたんだ。お友達がお花屋さんやってるんだって」

クリスの説明を聞くバルクホルンだがまだまだ他にも気になるところが残っている。

今自分が座っている椅子。

病室に入って来た時からクリスのベッドの真横にあった。

自分以外にこの病室に入る者がいるとしたら看護師を始めとするこの関係者だが、病院の人間が患者と話す時に椅子に座るだろうか

「あ…お姉ちゃん？」

もしかやと思い、バルクホルンは立ち上がって開いた窓に歩き出し、窓から外に顔を出す。

眼下には建物と草花が広がるだけで不自然に思えるような光景はなかった。

「…気のせいかな」

「どうしたの？」

「いや、ちよつとな。妙な風の感じがしてな、気のせいだったようだ」  
「そ、そうなんだ」

「変なところを見せてしまつてすまない」

「ううん平気だよ。そうだ！ねえソーマさんとはどうなの？」

「ソーマ？ああ、今はヴェネツィアにいるようだ」

何故ソーマの名前を知っているのかと疑問に思ったバルクホルンだがすぐに思い出す。

そういえば一度彼と来てその時に会っていたなと

「また会いたいな。あの人すごく優しく色々話し聞きたいな」

「ああ…そうだな」

「お姉ちゃん？」

どうにも齒切れが悪く聞こえる返しにクリスが首を傾げる。

「ソーマさんと喧嘩でもしたの？」

(困ったな。どう説明するべきか)

裏切り、背信行為、一口に言えばソーマの取った行動はそうなる。

だがバルクホルンとしてはそう簡単な言葉で片付けたくなかった。

「喧嘩とかじゃないんだ…考え方の違いや互いの事情から衝突してしまつてな…」

それにクリスは民間人であり、自分の身内であり、ソーマに好意的な感情を持っている。

だからこそバルクホルンは慎重に言葉を選びながら話を続ける。

「ソーマさんとはその後それつきり話してないの？」

「戦いが終わった後何かとごたついてな。そのごたごたが終わつても色々あつてゆつくりと落ち着いて話すような時間は取れなかったんだ」

「じゃあ…お姉ちゃんソーマさんのこと嫌いになつちやつた？」

不安がるクリスのその問いかけにバルクホルンは首を横に振つて否定する。

「いいや、嫌いにはなつてない。今回の件で尊敬するところも発見できたしどちらかといえば…前よりはいい印象を持ったよ…ただいざ

会った時どう言葉を切り出して何を言ったらいいものかと考えれば考える程答えが出なくてな」

「なんだか難しいんだね」

「すまない。こんな話を聞いてもつまらないだろうに」

「ううん、そんなことないよ」

「何か飲み物を買ってこようか。何がいい？」

「じゃあ、えっと、オレンジジュース」

「わかった。すぐ戻って来る」

そう言うのとバルクホルンは立ち上がって一旦病室を後にする。

「お姉ちゃん、出て行きましたよー」

「…本当か？」

ドアが閉まり足音が遠くなっていくのを確認してベッドの下へクリスがひそひそ声をかけると、そこから裏返ったような甲高い声と共に小さくなったソーマが出てくる。

白い上下に青いシャツを着た彼は元の身長に戻り軽く一回背伸びをして、ドアの方を一瞥してからクリスへと向き直る。

「ごめんな。クリスちゃん、こんなお姉ちゃんに嘘つくような真似させちゃって」

「綺麗な花を持ってきてくれたお礼です。もう少しでバレちゃうかとひやひやしましたけど」

実はソーマがこの病室にいたのはバルクホルンが来る前。

朝早く花屋で花を買いヴェネツィアを出てクリスに会いにきた。

前回にはできなかつたお互いの細かい話をしていただけがしばらくして近付いてくる足音に気付いた。

クリスからバルクホルンが来る予定になっていると聞くとソーマはクリスに自分の存在を隠すようお願いし、スマールで縮小化して、さつきまでベッドの下に隠れていたというわけだ。

「勘鋭いからな。バルクホルン大尉は。バイクで来なくて正解だったな」

今回ソーマは交通手段として空路、ハリケーンスタイルを選んだ。

もしも前回と同じようにバイクを病院の付近に止めていたらバル

クホルンはそこから自分の存在に気付いて病院内を探し出していただろう。

「ソーマさん、間違ってたらごめんなさい。お姉ちゃんと会うの避け  
てたのってきつきお姉ちゃんが言ってたことと関係があるんですよ  
ね」

その時ソーマの表情が一変した。クリスマスにとって姉の仲間で優し  
いお兄さんの顔が途端に崩れ、影の作った顔になった。

その変化に驚きを隠せないクリスマスであったが黙って彼の話に耳を  
傾ける。

「俺が悪いんだ。自分勝手な都合でバルクホルン大尉だけじゃなく他  
の皆のことを傷つけて…」

言葉を口にするにつれてソーマの声に力がなくなっていく。

「ソーマさん。私はソーマさんやお姉ちゃんたちの間で何があったか  
わかりません。でも嫌いになったわけじゃないんですよ。お姉  
ちゃんやハルトマンさんたちのこと」

「まさか。嫌いになる理由なんて俺にはないよ」

「だったら大丈夫です。ハルトマンさんたちも一度間違えたからって  
気にしないと思いますし、まだ会ってそんなに経ってない私でもソー  
マさんが優しく温かい人だっていうのはわかります。きつと必ず  
仲直りできますよ」

「クリスマスちゃん…」

なんて優しい子なのだろうと感心する。その一方で同時にそ  
んな子に気を遣わせてしまっている自分に嫌気が刺す。

しかしそんな考えを読まれるわけにはいかない。

全力で表情から心の内を悟られぬよう努めてソーマはクリスマスを見  
つめる。

「ありがとう。頑張ってみるよ」

「じゃあ約束しませんか？」

「約束？」

「もしも今度また来てくれる時はお姉ちゃんと一緒に来てください。  
もちろんハルトマンさんや他の皆さんと一緒に構いませんから」



「わかった。それも頑張ってみるよ」

「ふふ、ありがとうございます」

「そろそろお姉ちゃんも戻って来るだろうし俺は行くよ。またね」

「はい。お元気で。次に会える日を楽しみにしますね」

窓に近づいたソーマは再びスモールの魔法で小さくなり、召喚したガルダの翼に乗って窓から飛び去っていく。

奇しくもバルクホルンがジュースを手に戻って来たのはその僅か一分弱のことであった。

「待たせたなクリス…どうした？何かいいことでもあったのか？やけに嬉しそうだが」

「なんでもなーいよ。うふふ」

「うん…？」

滅多にないくらいに上機嫌な笑顔を浮かべるクリスにバルクホルンは首を傾げた。

少し目を離れたうちに何があったのか、そんな疑問が頭に浮かんだ。

☆

竹井から食料やら日用品の買い出しを頼まれた赤ズボン隊の三人はヴェネツィアの街中を袋を片手に歩いていた。

「竹井も人使い荒いわよね。こっちは怪我から復帰したばかりなのよ？なのにこんな買い出しを頼んで」

「って言ってるけど、ソーマが助けに行ったときには自分で治してたって聞いたよ。お風呂でも怪我ないの確認したし」

「まだ心は傷付いてたのよ。だまらっしゃい」

不満を垂れ流すフェルと冷ややかに指摘するマルチナ。横で交わされるやり取りにルチアナは苦笑をもって応える。

「でもまあ久々にこんな時間が過ごせるのは素直に嬉しいわね」

「そうですね。三人でお出かけなんて最近なかったですから」

アルダーウィッチーズ結成から今日まで何かと忙しい日の連続で

ほとんど基地の中での生活になっていた彼女たちにとって街に繰り出すなどいつ以来だろうか。

それだけでも嬉しいがフェルは最近悩みを解決してから初めてのルチアナやマルチナとゆったりと過ごせる時間とあって喜びは一塩だ。

「それもそうだけど。私はさつきから気になってることがあるんだよね。そんなに布生地買ってどうするのルチアナ？」

マルチナはルチアナが持っている紙袋の中身を指して言う。

紙袋の中には色とりどりの布生地が入っている。

「この間の戦闘でフェル隊長の服がダメになってしまいましたから作ってみようかと。発注をかけるとなるとお金かかっちゃいますし、こつちでできるならやつちやつた方がいいじゃないですか」

「それはありがたいんだけどね…にしたって多いし、余計な色紛れてない？」

布生地についてはフェルも気にはなっていた。

というのもだ…赤ズボン隊を象徴する黒と赤の他にもや緑、白といった赤ズボン隊の制服には含まれてない色の布生地まで買っているのだ。

それも結構な量の。

「これはソーマさんの分ですよ。ソーマさんの服も手直しするってこの前約束したんです」

「あー…あいつのねえ」

そういえばソーマの軍服の色は白を基調としていた。そういうことならば納得がいく…白が入っていることに関しては。だが他の色が入っているわけとはこれ如何に…その理由をフェルとマルチナは奇しくも示し合わせたように同じタイミングで察した。

「へえー。なるほどなるほど」

「あーそういうこと。そういうこと」

「な、なんですか？どうしたんですか二人？」

揃って意味深に笑う二人にルチアナは困惑の色を浮かべる。

「んー？いやなんでも。いいんじゃないの？私は口出ししないわよ。」

あんたの自由だし」

「え？フェル隊長？」

「そうそう、お似合いだと思うよ。二人。うん、見てて安心するよ」  
「マルチナ？」

突然どうしたのだろうか二人の変化に思うルチアナであったが、その意味を徐々に理解し始めると赤面する。

「違いますよ!?!私とソーマさんはそういうんじゃないです!」

「そういうのってどんなよ?」

「その、二人が思ってるような関係じゃ…関係じゃ…」

否定しようとするルチアナだが声に張りがなくなり、顔の真っ赤具合が増す。

先日ソーマの部屋で寝てしまったことが記憶に蘇ったからだ。

無論彼とはそういう関係ではない。けれどそのことを言った時二人がどう捉えるかといったら十中八九そういう関係と囃し立てるだろう。

「あらあら? 私たちはソーマの名前なんて出してないわよ。自覚あるくらい仲良しなのねー」

「やめてくださいよ…:ソーマさんに悪いですし」

「あ、ソーマ?」

「えっ!?!」

思い浮かべていた人物の名を聞いてルチアナの心拍数が跳ね上がり声が裏返る。

だがフェルはそんな彼女の反応に見向きもせず、マルチナの視線の向いている方向を見る。

そこには確かに私服姿で白い花束を持って歩くソーマの姿があった。

「あれソーマじゃない? だよね?」

「花なんて持ってどこに行こうってのかしら。休暇で朝からいないのは知ってたけど」

フェルたちはソーマの手になっている花に注目する。

「誰かにあげるやつかな? 恋人とか?」

「恋人ねえ。確かヴェネツィアの出身って言うたっけ？ だったらありえるんじゃないの」

それぞれ憶測を呟くフェルとマルチナ。

マルチナの口にした『恋人』というワードにフェルはニヤニヤと綻んでルチアナを振り替える。

「こりやまずいんじゃないのー？ ルチアナ」

「だからそんなんじゃないやありませんって！」

「でも本当にどこいくんだろ」

確かにルチアナもそれは気になる。基地での生活ぶりは間近で見えてよく知っているがプライベートの姿は知らないし想像もしたことがない。

その上花束なんて物を持っているとなると、本人には失礼だが気にならないと言えば嘘になる。

「…尾行するわよ」

「び、尾行!?!何を言い出すんですか！」

街中を歩くソーマを見ながら唐突にそんなことを言い出したフェルにルチアナは当惑の声を上げる。

「だって気になるじゃない。あつちは気付いてないし、この機を活かさなきゃもつたないわよ」

「だよね！ わかってるねフェル隊長！」

仕舞いにはマルチナまで乗っちゃってしまっ始末。

「ほらほら、もたもたしてると見失っちゃうわ。いくわよ」

「おっけー」

「ああ！ 二人共…」

呼びかけも虚しくフェルとマルチナは意気揚々と動き出す。

暴走列車の如くな二人の勢いは凄まじい。

出遅れてその場に立ち尽くすルチアナ。

どうすべきか迷った挙句、暴走列車を止めるためのブレーキが必要だろうとルチアナは流れに身を任せることに決めた…自分がその役目を果たせる可能性は低いだろうと思いつながらであるが

かくしてソーマの背後を取る形で追跡を始めた三人。

一定の距離を保ちながら動きを観察しているとソーマは人通りの多い道から外れて狭い路地へと向かう。

「この先って何があるっけ？」

「修道院じゃなかったかな確か」

近くの道路沿いに設置された案内表示をルチアナが見てみる。すると

「そうですね。マルチナの言ったとおり修道院って書いてありますね」

「じゃああの花って…そういう」

結論から言ってフェルの予想は的中していた。

修道院の裏の霊園、広がる緑と墓。その内の一つの前にソーマは持参した花を手向けていた。

「やっぱり…」

当然とも言える光景を物陰から見てフェルが呟く。

好奇心でここまでついてきた自らの非礼を悔みながらも誰のお墓であるのか考えてしまう。

「来るわー！隠れてー！」

踵を返すソーマを見て小声で警告を発し、マルチナとルチアナは素早く物陰に引っ込むように身を隠す。

ほとんど目の前を通り過ぎて元の道へと歩いて行くソーマ。

「マルチナはここにいて。ソーマが花をあげてたのが誰のお墓なのか見てくる」

「うん」

「ちよつとフェル隊長！」

花を目印にしてソーマのいた墓の前まで辿り着くとフェルは墓石に刻まれた名前を読み上げる。

「キアーラ・アベツリ、カルロ・アベツリ…二人とも1931年の同じ日に亡くなってる」

墓に眠る二つの名前の持ち主はソーマにとってどういう関係なのか。それが真つ先にフェルの頭に浮かび上がった疑問だった。

家族か親戚か友人か、または友人の友人か…こればかりは本人に聞いて確かめてみるしかないさそうだ。

墓地を後にしてからもフェルたちは追跡を続けた。マルチナがずっと視界に留めてくれていたおかげでソーマを見失わずにすんだ。

彼は宝石店の前にいた。その店のちょうど対向側に位置する建物の影に隠れながらフェルたちは動向を見守る。

「ずーつとあの店の前にいるけど何の店？」

「遠くてよく見えなくてわかりづらいですけどアクセサリーのお店じゃないですかね。ガラスケースがあります」

服飾の志しているだけあってルチアナは遠目ながらも正解を言い当てる。

この距離でよくわかるものだと驚嘆しつつフェルの意識はあくまでもソーマに夢中になる。

「あ、またどこかいくよ」

マルチナが声を上げた。

店の前から一歩たりとも脚を動かさずにいた彼が突然動いたのだ。

今度彼が赴いたのは宝石店から数分ほど離れた場所にあった噴水広場。

腰を曲げて噴水に片手を入れたソーマはその手をコネクトで魔法陣に突っ込んだ。

「魔法陣？」

「なんで？」

（あ、もしかしてこれ…）

彼のアクションの真意がわからずフェルとマルチナが疑問の声を上げる中でルチアナだけが唯一その答えとこれから訪れる光景を察した。

「ひゃー！ああああ!!？」

「うわああああ!!？」

そしてその予想を裏切らない状況が目前で起こった。

フェルの後ろに現れた魔法陣から手が伸び、首筋に水滴を垂らした

のだ。

絶叫を上げ、両手を激しく揺らしながら身を屈めるフェル。そして隣で唐突に大音量の悲鳴を聞かされたマルチナも大声を出して、フェルから距離を取るように離れる。

「えっ！なに？なに!?どうしたの!？」

「つめ、つめたあ!!」

「まさか休日にごんなところで会うとはな。奇遇だな」

近付いてきた男の声。

その声にフェルとマルチナが振り向くと視線の先には想像通りソーマがいた。

「そ、そうねえ。奇遇ね」

「うん、うん。すごい偶然だよね。ほんとほんと」

何とか誤魔化しを測ろうとする二人だがソーマの表情を見てすぐに悟った。

完全にばれていると

「本当に偶然?」

「…ごめん」

「…ごめんなさい」

諦めてフェルとマルチナは謝罪を口にした。

「つたく、まあ別にいいけどな」

ソーマが軽く呆れの鼻息を鳴らすとそれに連動したかのようにマルチナの胃袋が可愛らしい音を立てる。

「あ…」

「いい時間だしどつかその辺の喫茶店でご飯食べるか?今のお詫びつてわけじゃないが俺が奢るよ」

マルチナの腹の音に小さく笑うとソーマは提案を投げかけた。

### 第三十八輪 魔法使いの客人

ソーマたち四人はそれとなく歩いて見つけた『ファーム』という喫茶店で昼食を取ることにした。

店外の席で一つのテーブルを囲いながらケーキやクッキー、コーヒーにありつけている。

「んまーいーヴェネツィアにこんないいところあったんだね！あ、すいませーん。バナラちよーだい」

「私はチョコレートケーキね。買い出しなんて押し付けられた時はうんざりしたけど収穫あったわね。こき使われた甲斐があったわ」

通りがかった店員に追加の注文をしながらマルチナとフェルは卓上のスイーツを食べ進める。

二人ともそれぞれ五個ほどはスイーツを胃袋に納めているというのに手が緩む気配はなく、会話と並行しながら食事を続ける。

「お、お二人さんや？た、頼み過ぎじゃありません…？足りるかこれ…？」

その豪快とも言える食べっぷりを目にして財布の中身を恐る恐る確認するソーマ。

自分から言い出したこととはいえこんな光景が訪れるとは予想していなかったようで『こんなことなら奢るなどと軽はずみに言うべきではなかった』と、先の自分の発言を悔いていた。

浮かべた表情から後悔の念を汲み取ったのかルチアナがソーマに小声で耳打ちする。

「大丈夫ですか？もし足りないようなら私も出しますよ」

「自分から言った手前そんな払ってもらうのは…大丈夫。ギリギリ、ギリギリいける気がする」

元より外で食事を済ませる予定だったので一応財布にそれなりの額はある。あるのだが

「お待たせいたしました。ご注文のバナラアイスとチョコレートケーキになります」

「ありがと。あと飲み物のお代わりもお願い。四人分」



「シフォンケーキも！ここにいる人数分欲しいなー」

「そうね、もし余るようなら誰かしら食べるなり最悪持つて帰ればいいんだし頼めるだけ頼んでおきましょう」

「うん!？」

こちらの財布事情など気にもしていない素振りのフェルとマルチナの快進撃は留まることを知らず、追い打ちをかける始末。

ソーマは目を見開いて言葉を失う。

「本当に大丈夫ですか？」

「…やっぱりお金出してください。足りない分だけでいいんで」

「いいですよ。むしろ払わせてください。フェル隊長たちには基地に帰ってからちゃんと食べた分を返すように言っておくので」

「ありがとう。ルチアナがいてくれて本当によかった」

結果、見栄を張るのをやめてお言葉に甘えることにした。

ルチアナとしてもソーマにこれを全額支払ってもらうのは気が引けるのもあつて快く受け入れてくれた。

ひとまず安堵して心に余裕が生まれたソーマは自分が注文したティラミスをフォークで切り取って口に運んで、さっきのフェルたちの行動への質問を投げかける。

「さっきのことだけど。そもそもなんで後なんかつけるような真似したんだ？」

「え？…ああ、たまたま花持つてるあんたを見かけてね。そんなもの持つてどこいくのか気になっただけよ」

一瞬何を言われているのかわかっていない様子で目を丸くして動きを止めたフェルだったがすぐに情景を思い浮かべて言葉を返す。

それはマルチナも同様でバニラアイスを口の端に付けながら会話に混ざる。

「もしかしたら女の人と会うのかなって話してたんだよ。でも違ったんだね」

「そっか、そっからか」

「こんな場所で聞くのも変な話つてのはわかってるんだけどあれ誰のお墓なの？あんたの知り合い？」

「そんなところだな。俺がまだ一桁くらいの年の小さな子どもだった時の知り合いだよ」

濁りなく語るソーマの話をフェルたちは手を動かしながら耳を傾けた。

するとそこにさつきとは別のブロンド髪の店員が品物を運んで来る。

「お待たせしました。こちらシフォンケーキです…あれ?」

「ん?」

マルチナが頼んだシフォンケーキとコーヒーのお代わり分を持って来た若い店員の少女。彼女は目が合ったソーマをじっと見つめた。

「あなたどこかで…」

「知り合い?」

「いや…俺は知らない、と思うけどな…」

ソーマも視線を交差させて店員の少女を見る。

「ソーマ、新聞に載るぐらいの有名人だしそれで顔知ってるんじゃないかな?」

マルチナは世界初の魔法使いウィザードとしてまたネウロイの巢を破壊してガリアを救ったストライクウィッチーズの一人だからではないかと予想する。

新聞や雑誌にウィザードとしての姿も素顔も掲載されたこともあるからその可能性も無きにしも非ず。

しかし少女はマルチナが発した言葉の中身ではなく『ソーマ』という名前に反応した。

「ソーマ? ソーマ… あー!! 思い出した! そう、ソーマだ! 貴方、昔ウチのパン食べてた!」

「パン? えつとごめん、誰かな?」

「ほら! ええつと、よく一緒に広場で座ってパン食べたの覚えてない?」

「…ああ! あのパン屋の女の子!」

その言葉でようやくソーマも思い出したようだった。

目を丸くして椅子から立ち上がって店員の少女に体と顔を向ける。

「思い出してくれた？そう、その女の子よ」

「うつわ、え？だってあの時はこれくらいだったのに」

地に掌を向けた右手を己の腰の高さにして、当時の少女の背丈を表現する。

掌が示す意味に少女は口元を手で抑えて吹きだした笑いを隠す。

「あつたり前でしよう？一体何年も前の話だと思ってるの？」

「それもそうか」

「あの一、喜んでるところ非常に申し訳ないんだけどもソーマ？私たちにも紹介してくださいさるかしら？」

向き合って笑顔を見せ合う二人の間にお嬢様口調のフェルが割って入る。

その言葉に店員の少女は悪びれた顔で頭を下げる。

「ごめんなさい。勝手に盛り上がってしまったて」

「そんなに謝る程のことでもないのよ。聞いてた感じ久々の再会みたいだし？盛り上がる気持ちもわかるから」

なんて礼儀正しい少女なのだろうとフェルは思い、そしてその所作と言葉だけで彼女を気に入った。

「この人は子どもの頃お世話になった人で名前は……」

「ラフィーナよ」

「そう、ラフィーナ。よろしくお願いします」

「よろしく。私はフェルナンディア・マルヴェツツイ。フェルでいいわよ」

「ルチアナ・マッツエイです」

「マルチナ・クレスピ。よろしくね」

「フェルにルチアナにマルチナね。うん、ちゃんと覚えたわ」

店員の少女、ラフィーナに赤ズボン隊の三人も順番に名を名乗っていく。

完結し終えたところでマルチナが口を開く。

「さつきパン屋って言ってたけどパン屋さんの人なの？」

「私って言うよりお母さんがね。パン屋をやってて彼はよくウチのパンを食べに来てくれていたの」

「そうなんですネ…あれ？でもここってパン屋、ではないですよね」  
「ほんとだ。俺の記憶が確かならパン屋はもつと別の通りだった気がする。店の名前も違ってる…よな？」

ルチアナは卓に残っている料理を、ソーマは店名の記された看板を見て言う。

「あー、なくなっちゃったのよウチのパン屋。お母さんが病気で倒れちゃってね。その時にお店畳んで。で、どうするか迷ってた私をこのお店の店主さんが拾ってくれて今に至るってこと」

「そうなんだ…ごめんね、知らなかったとはいえ辛いこと話させちゃって」

「いいのよ。お母さん死んだわけでもないし。それにね、今が楽しければ昔の辛いことは気にせずその時間を楽しむって決めてるの」

知らなかったとはいえ悪いことをしたと話題の発端となったマルチナは詫びるが当のラフィーナはまるで気にしておらず、軽く流していた。

その際の彼女の言葉や表情から芯の通った強さを感じたフェルはますますラフィーナを気に入った。

「あなた、ヤーぱり面白いわね。このお店、常連になっちゃうかも」  
「それはもう大歓迎よ！でも、その代わり…」

そこでラフィーナはソーマを見つめる。  
コーヒーを飲んでいる最中だったソーマは突然言葉を切った彼女のその視線に気付き『ん？』と眉を上げる。

「サインか写真もらっついていい？」  
「なんで？」

「だって貴方ガリアを解放した501部隊でウィザードなんでしょ？それだけの人御用達のお店ってなれば社会的な信用も目に見えてわかるし色々な国からのお客さんも増えるかもじゃない。そんなお店まだ他にないでしょ？…もちろんちゃんと貴方にメリットは出すわ。例えば今日の代金全額無料、とかどう？」

『全額無料』、元よりサインだろうが写真だろうがする気ではあったがその言葉を聞いてソーマはより前のめりになる。

なんとという巡り合わせ、なんとという幸運。彼女はまさに財布の窮地に現れた救いの女神。

「是非やらせてください」

「交渉成立ね。そうだ、フェルたちもいつかな？たぶんフェルたちも有名人でしょ？」

「愚問ね。私たちは赤ズボン隊よ。このロマーニヤで知らない者はいないわ」

「じゃあフェルたちもお願い。待ってて、色紙とカメラ持ってくるから。ついでに店長に許可ももらってくる」

ソーマとついでにフェルからも承諾を得るなりラフィーナはは店内へと引っ込んでいく…というより駆けていくという表現の方が合っているかもしれない。

そのくらい発言から行動までの時間と歩くスピードが早かった。

「落ち着きないわね」

「でもああいう人好きだよねフェル隊長」

「ええ、もう完全に気に入ったわ。昔からあんな感じだったの？」

「…ん？何が？」

自分に向けての発言だと気付いていなかったのかソーマはフェルの言葉に遅れて反応し、コーヒーを飲む手を止める。

「ラフィーナよ。子どもの時からああいう感じだったのかって」

「…そうだったと思う…確か」

「おっまたせー！店長もいってー！」

「話は聞いたわ。ウィザードとウィッチが常連になってくれるなんて大歓迎よー！愛のこもったお得なサービスたくっさんしちゃう！あ、私はこのお店の店長のジュリア！よろしくね」

ラフィーナが連れて来た人物。その姿を見た途端に四人は陸に打ち上げられた魚と同じくギョツと目を大きく目を見開く。

流れる水のように透き通った青髪、粉雪のように白い肌…ここまで  
はいい。問題なのは顔。

ラフィーナが店長と呼んだ人物の顔は化粧こそしているが、どこからどう見ても男だった。

しかも声色も妙に艶めかしさはあれどそれでも男だ。

「あ、貴方が店長?…ずいぶん風変わりね」

「少し癖のある人だけどね」

「…少し?…少しかな…?」

少しの範疇を越えているのではと誰もが感じたがラフィーナとの差により、逆に自分たちの感覚がズレているのではとフェルやソーマは思ってしまう。

「ラフィーナから聞いたわ。こっちの男の子がウイザードのソーマちゃん、赤毛の娘が赤ズボン隊のフェルちゃん、黒髪の娘がルチアナちゃん、でこっちのちっこい娘がマルチナちゃんよね」

「ソーマちゃん?…ちゃんって…」

「ち、ちっこい…なんか嫌だなあ。その言い方」

男なのに女性陣と同様に『ちゃん』付けされたソーマ、三人の中で唯一髪色でなく身長で名前を挙げられたことに表情を変えるマルチナ。

そんな二人の反応を鮮やかに流してラフィーナはソーマに色紙を渡す。

「色紙これね。遠くからでも見やすくしたいから大きくお願い」

「ああ、はいはい。こういうサインって書いたことないんだよなあ。軍の書類とかに書く時と同じ感じじゃ駄目だよな」

「好きなように書いてもいいわ。でもせっかくお店に飾るならちよつとかわいらしきさっていか親しみやすさは欲しいかも」

「親しみやすさ、親しみやすさかあ…」

慣れないことである上に店の利益にも繋がることあつてなかなか手を動かせないソーマ。

彼が真剣に悩んでいるとマルチナとジュリアが善意から助言を出してくる。

「ハートでもつけちゃえば?」

「いいじゃないハート!私も好きな印だしお店にも合ってるわ!」

「でもあまり親しみやすさを重視し過ぎても見た人に偽物に思われませんか?あんまりこういうこと詳しくないからなんとも言えません

が

「…そ、そうね…そういう可能性もあるのよね…」

フェルの意見に乗り気だったジュリアがルチアナの指摘に消沈する。

山から谷底に落ちたような落差である。

「写真も撮るんだしそれと一緒に置いとけば本物って証拠になると思う」

「そうだな。それがいいんじゃないかな」

検討を重ねた結果ラフィーナの案を採用することになり、ソーマは書類に書くのと同じサインを書く。

「これでいいかな」

「ありがとう。じゃ、このまま写真いつちやおう。こつち来て」

「ああ、ああああ！そんな強く引つ張らなくても！」

言うが早いラフィーナはソーマの手を取り、彼を引きずり込むように店内へと消えていく。

舌を噛みそうだな、と他人事のように思いながらフェルは無料となったケーキを食べる手とは別の手でサインを書く。

「さっきもだけど無駄がないってくらい行動が早いわねあの子。はい、これでどう？」

「それがラフィーナのいいところよ。ありがとうー、まだまだたくさんあるから満足するまで遠慮なしに食べていってね」

フェルは店主の言葉に有難く従ってスイーツを食した。

「はい、これでおしまい。ありがとうとねここまで付き合わせちゃって」

「今日のあれが丸ごと無料になるってんなら安いもんさ。あれを払うことになるともう…」

ラフィーナによる写真撮影は終わり、ソーマは変身を解除する。

素顔が露わになった彼は妙な緊張感から解放されたせいか、食事代がタダになることが確定したからか心なしか笑顔だ。

「でもよかった。こんな顔ができるようになって…ちよつと心配だったんだよね。あんなことがあって、ちゃんとうまくやっていける

か」

そんな彼の表情を見てそう呟いてカメラを置くラフィーナ。両者の周囲を静寂が包む。

「きつと色んなことに恵まれたおかげ、かな。人にも力にも」

そう口にする言葉に反してソーマは物憂げな空気を漂わせる。

「戻ってきた」

店内から顔を出してきた二人を見てマルチナが一番に声をあげる。

ソーマは椅子に座り直し、ラフィーナはフェルに話しかける。

「お待たせ。次はフェルたちの写真。お願いしていい?」

「ええ喜んで。やるからにはいい写真撮ってよね」

意気込んでまずフェルがソーマと入れ替わる形でラフィーナと店内に移動する。

「きやああああああ!!」

「うわああああああ!ば、化物!!」

しかしその時近くから男女問わずの悲鳴のような叫びが彼らの耳に入った。

座っていたソーマたちも、店の中に入ろうとしていたラフィーナとフェルも、全員が一寸の狂いもなく声の場所へ目を向けるとそこには世にも奇妙な奇怪な姿をした生物がいた。

爬虫類に彷彿とさせる皮膚、胸の中心部には灰色に濁った球体がありそれを境とするように体は右半身が黒、左半身が白に染まっている。

左右の肩には口を開いた状態の竜と蛇を象った突起物が正面を向いている。

「よう、やっと会えたなウィザード。この時を待ち焦がれたぜ」

「喋った!?!」

「あれがネウロイ?」

目の前の怪物が言葉を発した事実マルチナが驚き、ラフィーナは初めて見たそれをネウロイと捉えた。



だがソーマの反応は彼女二人とは違った。

(ネウロイ…なのか? いやネウロイにしては何か違う?)

黒一色の体ではなく、人語を話すとネウロイの生態と異なる。

しかし以前宮藤が遭遇並びに接触した人型ネウロイのような変異種。その類である可能性も捨てきれなかった。

「お前、何者だ?」

だからこそそれを確かめるためにソーマは問いかけた。

人語を理解しているのなら何かしらの反応は期待できる。そう考えて

「挨拶代わりにいいもんくれてやるよ。ほら!」

だが相手から来たのは言葉と同時に肩の蛇と竜から発射された球体状の炎。

「皆!」

「伏せろ!」

その光を見て嫌な予感がしたソーマとフェルが咄嗟に出て、白い炎をディフェンドで黒い炎をシールドで受け止める。

が

「うおっ!」

ソーマだけが炎の威力に耐え切れず吹っ飛び、店の窓ガラスやカウンターに置かれていたグラスなどを巻き込んで奥の床へと倒れ伏す。

「ソーマ!」

「ソーマさん!」

「いやああああああ! 私のお店!」

フェルたち赤ズボン隊とラフィーナが名を呼びながら後ろを振り返る。

騒動に気付かなかった店内にいた客も外から人が窓ガラスを突き破って入店して来たのを目の当たりにして、ようやく異常事態を把握し、悲鳴を出しながら蜘蛛の子を散らすように店から逃げ去る。

割れた窓ガラスの奥、無人となったカウンターの奥からソーマが痛みを歪めながらも起き上がって戻って来る。

ルチアナたちは彼の無事にひとまず安心して駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「なんとかな。それよりも」

「なんなのよあいつ。ネウロイじゃなさそうだけど」

人語を話す怪物などこれまで幾多の死線を乗り越えて来た赤ズボン隊の彼女たちも見たことも聞いたこともない。

まさに完全未知の生物。だがわかつていることもある。

碌なやり取りもなしにいきなり攻撃を仕掛けてきたのならばあれは完全に敵と見て間違いない。

「フェルたちはラファイーナたちを安全な場所に避難させてくれ。この場は俺が引き受ける」

「そんな、一人残してなんてできません！」

「そうだよ！私たちも——」

ウォーターの指輪を出して戦闘準備を整えだしたソーマの言葉にルチアナが異を唱える。

マルチナも同意見だったようでルチアナに加勢しようとするが、フェルがその流れを断ち切った。

「ルチアナ、マルチナ、私たちは基地に戻るわよ。どの道ストライカーも銃ないんじやソーマの足手まといになるだけよ」

フェルの言葉にルチアナとマルチナは否定できなかった。

ウィザードのソーマと違ってウィツチの三人は武器がなければ怪物と満足に戦えない。

悔しいが今はフェルの言う通りソーマ一人に任せるしかないのだ。

「ソーマ、やられるんじやないわよ。必ず後で私たちが助けてあげるからそれまで踏ん張って。ラファイーナとジュリアさんも一緒についてきて」

「ごめんなさいソーマさん。どうか無事で」

「私たちが来るまで負けちゃダメだからね」

「私の店を台無しにしたそんな奴なんかこてんぱんにしちやっつて——！」

フェルたちは怪物の相手を任せてラファイーナとジュリアを安全な場所に誘導する。

「これで余計な邪魔者がいなくなったな」

五人が場を離れ、完全にウイザードと自分だけの空間になったことを確認してから怪物がそう口を開いた。

その言葉からソーマは彼の目的が自分にあるのだと気付く。

「二応改めて聞いておく。お前何者だ。ネウロイとは違うみたいだが」

「はっ、教えてやる理由なんてねえな。だが名前くらいは教えてやる。俺はウロボロス」

「ウロボロス？」

「ああそうさ。今からてめえをブチ殺す奴の名だ！」

無の空間から白と黒の二色に染まった長剣を手に取り、頭上で振りかぶりながら走り出す。

ソーマは横に動いてかわすと長剣は彼のいた地面を深く抉る。

初撃の失敗からすぐさま立ち直って第二撃を入れようと迫るウロボロスへソーマは椅子を蹴り上げ、接近の邪魔をしてから変身を成し遂げる。

「変身！」

『ウォーター、プリーズ！スイースイースイー！』

ウイザード・ウォータースタイルがウイザーソードガンで長剣を防ぐ。

## 第三十九輪 脅威

平和だったヴェネツィアの街が一転。戦場となった。

穏やかで賑わっていた商店街からは人の声は消え、その代わりに金属同士がぶつかり合う衝突音と掛け声が聞こえる。

その中心部では未知なる敵ウロボロスを相手にウイザード・ウォー・タースタイルが援軍もなかった一人で戦いを繰り返していた。

「うおー！」

彼は押されていた。

数度に渡る斬り合いの末にウロボロスの長剣の先が胸元に突き刺さり、負傷箇所から火花を散らして大きく後ろへと下がる。

『ウォーター！シユーティングストライク！』

だが距離が取れたのをむしろ都合と、ウイザードはウイザーソードガンをガンモードに変形させて銃口より水弾を打つ。

それをウロボロスは両の肩の蛇と竜の口から火炎を放ち、相殺する。

高温の炎と低温の水が両者の間で弾け水蒸気が生まれ、それが煙幕のように作用してお互いの姿を相手から隠す。

この間にウイザードが次の手を練っていた時ウロボロスが煙幕の中を突っ切って斬りかかってくる。

「なに!?!」

煙幕の発生からたったの数秒足らずで行動を取っていたウロボロスに驚くウイザードは防御が間に合わず長剣の一閃を胴に受け、建物の壁に打ち付けられる。

「どうした？まだそんなもんじゃねえだろうがよ！」

倒れるウイザードがその声に瞬時に視線を動かすと殺気を高めて迫るウロボロスが見えた。

身体を起こしてから避けるのは不可能と判断し、リキッドの魔法で液体となって回避する。

『リキッド、プリーズ！』

「あん？」

魔力で形成された装甲を裂くと思われた長剣が液体をすり抜けた光景に表情は見えないものの僅かではあるが驚くウロボロス。

彼が振り返るより早くウィザードガンがその背中を切りつけた。

「ちよこまかと小賢しい真似しやがって」

やっとの思いで入れた一撃もウロボロスからしてみれば蚊に刺されたような微々たるもの。

振り向き様に剣を振るう。その一撃は今度こそウィザードに通じた、かと思いきやまたしても液状に変化して直撃を免れてしまう。

ウロボロスは舌打ちして水の流れる先、己の背後へと視線を移す。

そして攻撃のためにいち早く液体から実体に戻ったウィザードの右手首を掴んで彼の武器ごと捻ねあげる。

「くあつ……」

「そう何度も同じ手が通用するかよ」

完全に全身が実体へと戻ったウィザードを嘲笑い、ウロボロスは両肩から炎をお見舞いする。

ゼロ距離な上に腕を掴まれている。もう一度リキッドですり抜けようとしても、次の効力の発動までの時間がない。

二つの要素が重なった結果としてウィザードに回避する術なく、二色の炎をその身に浴びた。

「うわああああ!!」

直撃の瞬間ウロボロスが手を放したことでウィザードは火球に運ばれて宙を舞い、火球の消失と同時に地べたを転がり回る。

ダメージに体を震わせる彼へとウロボロスは容赦なく炎の追撃を叩き込む。

「そう何度も同じ手を通じると思うな！」

『ランド、プリーズ！』

火属性に対するなら水属性という判断で選んだウォータースタイルを捨ててウィザードは防御力と接近戦に長けたランドスタイルで勝負を挑む。

形態変化の直後を狙って放出された二つの火炎をウィザードは

デイフェンドで召喚した土壁で防ごうとする。

しかし一枚目の壁は容易く破られ、二枚目三枚目と続けざまに壁を形成していく。

それによって視界が遮られた機を逃すウロボロスではなかった。土壁を破壊する火球の後を追うように接近し、最後の壁を火球ごと引き裂いて砕く。

遮るものがなくなったウロボロスの視界。そこには瓦礫となった土と、地面にできた不自然な穴しかない。

その穴が自分の攻撃によってできたものではないとウロボロスは理解していた。

「逃げ回るのが大好きな奴だな。ええ、臆病者が！」

『ランド、スラッシュストライク！』

地面からの奇襲。

ウロボロスの死角からウィザードが現れウィザードソードガンで斬りつける。

「くうおっ！」

たつぷり土の魔力を込めた一撃はさすがに効いたようでウロボロスが初めて体を大きく傾かせた。

ウロボロスは火炎で排除しようとするがウィザードは地中へと潜って回避。ウロボロスから離れた位置で地上へと戻ってウィザードソードガンでの射撃を打ち込む。

(どこまでも小細工しやがって！)

威力自体はどうということはないが、その射撃はウロボロスの怒りを買った。

弱いくせに小細工を弄して無駄に足掻く。素直に切られて死ねばいいのに、防御だけは一丁前に上手くなかなか死なない。

ウロボロスは長剣に炎の力を込めて、地面に突き刺す。

剣を通じてウロボロスの力が地中を巡り、たちまち地表の温度が上昇する。

『ハリケーン、プリーズ！』

何をする気なのかわからないがやばい。そう直感したウィザード

はハリケーンスタイルの力で空中に飛び、地面から離れる。

直後眼下の街路で小規模でありながらも強大な爆発が複数の地点で連鎖的に巻き起こる。

「危ないところだった…」

あと少し飛行が遅れていたらあの爆炎の中に飲まれていた。

ウィザードは安堵した。戦いはまだ続いているのに緊張を解いてしまった。

それがいけなかった。

黒い煙の中を突き抜けて白い蛇と黒い竜がウィザードに迫って来る。

「これはー」

形状こそ同じだがさつきまで自分を苦しめたウロボロスの肩にあつたものではない。

彼の力を具現化して、生み出したものだ。

大顎を開けて食らおうとする白蛇と黒竜から逃げるウィザードだが街中というのもあつてか無意識の内に逃げる範囲を自分で勝手に狭めてしまう。

ウロボロスはその配慮を気付いていない。しかしそこに突け込まないはずがなかった。

両肩の火炎で無理矢理逃れるウィザードの軌道を変えさせ、逃避先に置いた白蛇に飲み込ませる。

「この、出せー出せー」

体内に閉じ込められたウィザードは窮屈な空間の中で自身の武器を振って脱出を試みる。一方でウロボロスの魔力を注がれた白蛇はブクブクと風船に近い形状へと膨れ上がり、爆発する。

「ぐわああああああ!!」

変身が解除され、ソーマは高所から体を地面に叩きつけられる。

白く清潔だった私服は汚れと破損が目立ち、彼自身の体も頬や足に出血と火傷が出来ている。

「巣を破壊したって聞いてどれだけのもんかとわざわざ来てみれば。へっ、とんだ期待外れだったぜ」

勝手に期待を寄せておきながら、勝手に失望したウロボロスが残った黒竜を消してソーマへと歩を進める。

なんとかしなければ、痛みに苦しむ体をどうにか動かしてソーマは腰元のホルダーに手を伸ばす。

ウロボロスの妨害を受けぬよう視線を相手に留めたままその手が真っ先に掴んだのはハリケーンリンクスの指輪。

(駄目だ…他の方法は…)

直接目にしなくとも形状で今自分が手にしているのがなんであるかを察したソーマはその指輪を掴んでしばらくして、別の指輪に切り替える。

しかしそれはそれでソーマには躊躇う理由があった。

(上手くいくか…上手くいったとしてもその時俺は…)

今自分がやろうとしていることは賭けだ。成功する確証もないし、成功したとしても自分が無事である可能性ははっきり言って低い。

(自分だけやられるよりはマシか。ごめんクリスちゃん、今日したばかりなのに約束守れなさそうだ)

今朝約束を交わした少女へ無言の謝罪をしてソーマはホルダーから二つリングを選ぶ。

その間にウロボロスは足一つ分空けた距離まで近づいており、ソーマを頭から真っ二つにしようと長剣を振り上げる。

「雑魚は雑魚らしくとつとあの世に行きな」

(うまくいけよ!)

『ライト、プリーズ!』

両腕で長剣を握り締めるウロボロス。その視界を迅速な動きで指輪をはめて発動されたライトの魔法が潰す。

「おおッ!?目が、見えねえ!」

至近距離で両腕を封じられていたウロボロスは長剣を落として自分の目を覆う。

武器を失い、動きが止まったこの時間にソーマは次の行動に移るべくライトの指輪と別に手にしていたフレームウイザードリングを使用する。



『フレイム、プリーズ！ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

フレイムスタイルのウィザードは新たな指輪をはめ、ウロボロスの背後へと周り込む。

その時にはウロボロスの視力は戻りかけていたがもう遅い。

ウィザードはウロボロスの首に右腕を回して締め上げ、バインドの鎖でウロボロスの体を自分ごと拘束した。

そして

『フレイム、プリーズ！フレイム、プリーズ！フレイム、プリーズ！』  
フリーな左手に付けたフレイムウィザードリングを何度もドライ  
バーに翳す。

魔法は発動しない。フレイムスタイルに既になっているのだから  
同じ指輪を使用したところで新たな変化が起こるはずがない。

だというのにウィザードの全身から赤い光が明滅し、その輝きと大  
きさは指輪を翳す回数を重ねるごとに増していく。

緊張した際の心臓の鼓動のように

「魔力が上がっていく。だがこの距離はお前も…まさかてめえ！俺ご  
と吹っ飛ぶ気か！」

「俺だけ死ぬなんて冗談じゃないからな。ありがたく思えよ」  
「狂ってんのか！放せ！放しやがれ！」

視界が完全に戻ったウロボロスはウィザードの攻撃から逃れよう  
と身を振らせるが鎖が音を立てるだけで壊れない。

両肩での火炎もウィザードの右腕によって首を空に向けさせられ  
ているせいで使えない。

なんとかしなければと打開策を捻りだそうとするウロボロスに張  
り付くウィザードの輝きは最高点に達した。

火山噴火のような火柱と爆発がウィザードの体を起点に発生。

凄まじい轟音と爆音と共にウィザードフレイムスタイルの体は地  
面へと投げ出された。

「あううあう…が…うううっ…！」

幸いというべきか不幸というべきか。体への負荷は大きいものの  
ウィザードは変身解除もされることなく生き残った。

(終わってくれ…あれで、あれが通じなかつたらもう…)

「今のはさすがにやばかった。ちと死ぬかと思っただかもな」

目の光景にウィザードは愕然とした。ウロボロスは健在、皮膚はところどころ傷付き焼け焦げていても、目立ったダメージを受けていないのだ。

「そんな…」

決死の覚悟で打った手が通じなかった。ウィザードの心に絶望が重くのしかかった。

「だが残念だったな。相手が悪かった。この最強のウロボロスにそんな手は通じねえ」

ウロボロスは己の武器を拾い上げ、得意げに笑うとじわじわと詰め寄る。ウィザードの首を掴んで軽々と持ち上げると橋の際まで押し付ける。

「うあつ…かつ…あ…」

手を解こうとウィザードは身を振り、腕を掴むが力が入らず苦しみから逃れられない。

いやもしも万全の状態だったとしても結果は同じだろう。それほどこまでにウロボロスの腕力は凄まじかった。

「ま…それなりに楽しめたぜ。あつばよおお！」

「ぐわあああああ！」

手が首から放され、一瞬自由になった紅蓮の胸が水平一文字に裂かれる。

ワイヤーで引かれたようにウィザードは空に舞い、そのまま重力に従って水路の中に落ちた。

水飛沫が上がり、波紋が生まれた水面をウロボロスが見下ろす。

飛沫も波紋も消えた水面に動きがないのを確認する。

「死んだか…面倒ごとが増えない内に離れるとするか」

目的を達成した以上もはやここに留まる意味はない。

憲兵や警察がやって来て更なる無駄骨を折らないようにウロボロスは姿を変えて、落ち着いた何食わぬ顔でその場を去った。

☆

「あ……」

突然吹いた強い風は扶桑のある家の一室に飾られていた写真立てを床に落とした。

「写真倒れちゃった」

その家の主宮藤芳佳は音を聞いてすぐさま拾い上げ、彼女と話していた親友の山川美千子は戻ってきた宮藤の手元にある写真を覗き見る。

「それ芳佳ちゃんが欧州にいた時の写真？」

「リーネちゃんが送ってくれたんだ。ガリアでの戦いの後501の皆で撮った写真」

そうそれはガリア解放を祝して501の全員で撮った写真。

宮藤は一民間人へと戻り今では扶桑で診療所の手伝いを暮らしている。つまりは戦いに身を投じる前と変わらない生活に戻ったということだ。

戦いが嫌いなのは今でも変わらない彼女。だが、こうして写真を見ているとまたこの輪の中に戻りたい気持ち芽生えてくる。

彼女にそう思わせるほど部隊の人は皆いい人ばかりだった。

「色んな国のエースさんたちがいっぱいだね。この人とかよく雑誌に載ってるよね。カールスラントが誇るウルトラエースだって書いてあったよ」

「ハルトマンさんが？そんなに凄かったんだ」

宮藤の記憶にある姿と言えば主にマイペース、寝坊の常習犯、いつもバルクホルンに怒られて彼女を困らせているのが主だった。

戦闘では秀でた技術を見ることも多々あれど戦いに関しては疎い宮藤にはそういうプライベートでの記憶が強く残っていた。

そのせいだろうか。美千子の言葉に大きな疑問を持ったのは

「そうだよ。だから芳佳ちゃんは凄いなんだよ？そんなエースの人たちと一緒にいたなんて」

「そ、そう、かなあ…あんまり実感ないけど」

軍事に詳しい美千子は目を輝かせて絶賛してくれるが当の本人は自覚がないのか正反対の顔で返す。

「でもまた会いたいなあ…皆元気かな」

「ねえ芳佳ちゃんは誰に一番会いたいなの？」

「一番かあ…誰だろ」

美千子からのちよつとばかりいじわるな質問に宮藤は頭を悩ませる。

一番最初に打ち解け親友となったリーネ、態度はきつかったけどところどころで自分を気遣ってくれる優しさを見せてくれたペリーヌ、厳しくも自分を気にかけてくれたバルクホルン。同じ誕生日という共通点から友達と呼べるまでに距離を縮めたサーニャ。

候補を挙げたらキリがないし、皆等しく同じくらい再会したい気持ちには強い。

同じく扶桑にいる坂本すら忙しくしていて滅多に会えないのだから尚更だ。

「この人ってあの人だよ。ウィザード、だっけ？」

「え？…あ、うんそうだよ。ソーマさん」

美千子が指を指したのは写真の中にいるソーマ。

最近新聞や雑誌で一躍その名と姿を世間に知られたウィザードを当然美千子も知っていた。

「この人とも仲良かったんだよね」

「ソーマさんの方が階級も年も上だったんだけど同じ日に501に入ったのもあって色々面倒見てもらったよ。悩みを聞いてもらったり、一緒に料理を作ったり」

「料理得意なんだ」

「ソーマさんの作るケーキがすごく美味しいんだ。そうだ、今度みっちゃんにケーキとか作るね。作り方教えてもらったから」

「ほんとう？ありがとう芳佳ちゃん。楽しみにしてるね」

宮藤の言葉に美千子は期待に胸を膨らませる。宮藤の料理の腕は昔からよく知っている。

「ソーマさん元気にしてるかなあ」

今頃彼は何をしているだろう。

料理を誰かに振る舞っているのか。またウィザードとして誰かの大切なものを守るために戦っているのか、はたまた戦いから離れてゆっくり休んでいるのか。

どちらにしても心も体も健康でいてもらいたいと、宮藤は写真の中のソーマをまじまじと見つめた。

☆

意識は完全に闇へ落ち、体は徐々に水の中へと沈んでいた。

魔力で作られた鎧は形を失い、生身の身となった彼の目はピタリと閉じている。

なのに突然、閉じていたはずの瞳が大きく見開かれる。その瞳はどす黒くも水中で光を放つほど明るい不気味な赤に染まっていた。

## 第四十輪 今足りないモノ

ウロボロスとウイザードの戦いが終わった後のヴェネツィアの街上空をフェルたち赤ズボン隊とドミニカ・ジェーンを加えた五人が飛行していた。

全員の手には銃が握られ、いつ襲撃が来てもいいように備えている。

ところがその警戒を裏切るかのように街は静かで、敵がいる気配も感じられない。

「不気味なくらい静かだな。本当にネウロイのような怪物がいるのか」

「もしかしたらソーマさんがもう倒しちゃったのかもしれないよ」

実際にウロボロスを目撃していないドミニカとジェーンは半信半疑……とまではいかないまでも怪物の存在にいまいち実感がわかずにいる。

しかし次の瞬間そんな彼女たちにあつた疑念を根こそぎ吹き飛ばすような光景が眼下に広がっていた。

「あんなに綺麗だった街が……」

「ちよつと離れただけでこんなにはひどすぎるよ」

「どうやら怪物が現れたというのは紛れもない事実のようだな」

街中のあちこちに散乱した瓦礫。黒く焦げた路面。割れた窓ガラス。

どれもネウロイが通り過ぎた後に残る破壊の痕跡と遜色ないものだった。

そしてこの辺りで戦いが行われたことは疑いようのない事実だとドミニカとジェーンは認めざるを得なかった。

「どこにいるのよ……ソーマ。ちゃんと無事なんでしょうね」

一方でフェルは街中の光景を憂うよりもソーマを探し求める気持ちが強く優先され、飛び回りながら彼を探す。

街があのような有様なら彼も危ない状態にあるかもしれない。

「いたー！見てあそこー！」

探すこと数分弱、彼女たちはゴンドラの乗り場でソーマを見つけ  
た。

打ち上げられた魚のように力なく水に濡れた身を投げ出し、意識も  
また手放しているのが遠目でもわかった。

彼の手にはハリケーンリンクスの指輪が固く握り締められていた。

☆

「スペランツァ中尉が負傷…それは本当ですか？ドットリオ少佐」

受話器を手にするミーナの美貌を驚愕が覆い尽くしていた。

その理由は電話の相手はドットリオ。正確には彼女からもたらされ  
た情報にあった。

『今ウチの部隊のウィッチが回復魔法で治療をして医者にも診ても  
らってる。傷は酷いけど今のところ命に問題はないみたい。ごめん  
なさいミーナ中佐。貴方から預かった大切な部下をこんなことにし  
てしまつて』

「いえドットリオ少佐が謝ることではありません。それで彼を倒したネ  
ウロイは？今どこに」

『ネウロイじゃないみたいなのよ』

「えっ？」

電話越しの相手が何を言っているのかミーナは理解できなかった。

ネウロイとの戦いでないのならソーマは一体何との戦いで敗れ、深  
手を負つたというのか。

ミーナがそう思っていると、ドットリオがすかさず詳細な情報を教え  
てくれた。

「一緒にいたフェル、私の部下の話だとネウロイのようでネウロイ  
じゃない謎の怪物にやられたつて聞いてるわ」

「謎の怪物？」

「ええ、それも私たち人間とほとんど変わらない大ききで私たちと全  
く変わらない言葉を使っていたそうよ」

「えっ…？」

告げられた情報にミーナは大きく目を開いた。

人語を発する怪物など荒唐無稽で馬鹿げた話と断じたいが、それができない理由がミーナにはあった。

統合戦闘航空団の隊長を務めるに相応しい冷静に情報を分析する能力があるというのも一つだが、彼女は人型ネウロイをその目で見た者の一人。

だからこそそれまで確認されていなかった存在が新たに出てきたとしてもあり得ないことではないと考えることができている。

「それはつまり、ネウロイの変異体、あるいはネウロイともまるで違う新しい敵…ということでしょうか」

「どうかしらね。どちらとも今の段階では何も言えない。ただ聞いた情報を総合的に考えるに敵であるってところに関しては揺るぎのない事実だと思う」

フェルもルチアナもマルチナも揃って怪物が明確な敵対意志を持って攻撃をしてきたと証言している。

味方、話し合いが通じる相手ではないのはほぼ確定事項だろう。

「その怪物は今どこに？」

「それもわからないわ。ヴェネツィアの街中でソーマと戦ってからの目撃情報は上がってないわ」

「そうですか…また何かあればご連絡ください。私の手は届く範囲のことなら力を尽くします」

「ありがとうミーナ中佐。頼もしい言葉だわ」

失礼します、と最後に締めくくってミーナは電話を切り受話器を置く。

(…ガリアが解放されたことでネウロイにも変化が訪れたということ？それともこれまで出てこなかったものが出てきただけなのか…)

敵の素性もだがミーナが引つかかったのはタイミングだ。

ストライクウィッチーズによるガリア解放が成された直後というのが気になる。

ガリアの解放が人類にとって大きな変化であったと同時にネウロイにとっても何かのきつかけとなったのではないか。



巢が破壊され、戦力が低下したことでネウロイ側が新たな策・あるいは進化の一環として今回の新たな脅威が出現したのではないかと。(ソーマさん…)

どちらにしても今ソーマが窮地の中にいることに変わりはない。遠く離れた自分にはこうして無事を願うことしかできず、そうすることしかできないことにやり切れない思いが生まれた。

☆

彼が目を覚ますと視界いっぱい赤黒い空が広がっていた。朝昼夜、どんな時間のどんな場所でもあり得ない色をしている。

体を起こして周りに目を向けると更に衝撃的な景色があった。崩れた街並みと稲光、まるで世界の終わりを思わせるようだ。

「目を覚ましたか臆病者が」

凄惨な景色に目を奪われていた彼がその声に反応して振り返る。

そこには蛇と竜の怪物ウロボロス。

彼が戦い、敗れた相手。それがまた目の前にいた。

「お前は、今度こそー」

その存在を認識した途端彼は風の魔法使いとなって斬りかかる。

今度こそ必ず倒すという意気込む彼の手に握られた剣がウロボロスの肉を切断する…ことはなく片手でいとも簡単に受け止められる。押ししても引いても意味がなく、長剣で何回も切りつけられてしまふ。

片膝を付く魔法使いへウロボロスは両肩から火を吹き、遠く離れていった彼の顔と地面とをキスさせる。

「まだだ…まだ俺にはこれがあるー」

てんで攻撃を与えられない魔法使いであったが希望は捨てていなかった。

闘志のこもった声で腰のホルダーからハリケーンリンクスの指輪を引き抜くと、躊躇いなくベルトへと翳す。

だがそこから変化は一切ない。

「っ!?なんで!?なんで使えない!」

まるでそれが異常な現象だというように魔法使いは新鮮に驚き、視線を下げて何度も指輪をベルトに持つていく。

「当たり前じゃない。私たちがソーマなんかに力を貸すわけないじゃん」

そんな魔法使いへ声が飛んだ。ウロボロスとは違う、可愛さの富んだ声だ。

その声を魔法使いはよく知っていた。だからこそ大きく肩を震わせて、ウロボロスから視線を切り替えた。

「ハルトマン?」

声のした方を向くとそこにはエーリカ・ハルトマン。カールスラント軍人で今はミーナとバルクホルンと共に行動しているはずの少女が珍しく二人を伴わずたった一人でいた。

「なんで…」

目の前の少女は持ち前の笑顔ではない敵意をむき出しにした表情で魔法使いを睨みつけるように直視していた。

今の今まで彼女にそんな顔で見られたことのない魔法使いは大きく衝撃を受けた。

「影で私たちを追い詰めようとしていた方たちと繋がっていながら私たちに平気でいい顔をしていたのでしょうか?そのような卑怯者が私の力を使おうだなんてはつきり言って虫唾が走りますわ」

新たに聞こえる第二の声。こちらにも魔法使いには聞き覚えのある声だった。

魔法使いが素早くハルトマンからそちらへ顔を移動させる。

「ペリーヌ?お前までどうして…どうしてそんなこと言うんだよ…ハルトマンも、らしくないぞ…」

声の主はペリーヌ・クロステルマン。ガリア軍所属でブリタニアでの戦いの結末を仲間の誰よりも喜んでいた少女だ。

そんな彼女も強い怒りと嫌悪を詰め込んだ言葉を放ち、魔法使いを激しく戸惑わせた。

良く知る仲間の二人からは到底想像もできない表情と発言に魔法

使いは恐る恐る後退りする。

いつの間にかウロボロスの姿は影も形もなかったが、魔法使いはそのことに気付いていない。気付けない。

「出たよ。お前のそういうところ。ほんと嫌いだよ」

そして魔法使いの背後からまた別の声が出た。

魔法使いは息が詰まったような感覚に襲われる。振り返ることを恐れる仮面に覆われたその顔を背後から伸びた手がそつと触れた。

「本当は気付いてるくせに。自分に仲間の力を使う資格なんてない、気持ちも踏みにじるような真似をした自分に仲間たちが力を貸してくれるはずがないって。そう、わかっているんだ。なのにいざその通りになったらそのことを認められない…上っ面だけなんだ何もかも。本当の意味で何もわかってないんだよ」

「シャー、リー…」

間違いであつて欲しいと思ひながらも、手が触れている程の距離で声を魔法使いが聞き間違えるはずがない。

シャーロット・E・イエーガー、リベリオン軍人で笑顔が心地よい人物だ。

その彼女までもが信じられない程冷めきつた声色で責め立ててくる。

触れている手からは温もりを感じる気がするのに、その口から放たれるのは冷たい言葉の数々。

体を覆う仮面と法衣が消え魔法使いではなくなった彼へハルトマンとペリーヌは薄汚い生き物を見るような目で、何故か愉しそうに笑いながら歩み寄る。

「やめろ…来るな…こないでくれ…」

彼は怯えた表情で二人から逃げようと後ろへ足を引く。

だがシャーリーがそれを許さない。

頬に触れていた手が肩へと下りていきそのまま腕で首を絞めてくる。

「あゝっ！ かつ…な、なにを…」

絞め殺される程の力はないが、息苦しさを与え彼の動きが止めるに

は十分な力はあった。

「私たちの誰も頼りたくもなければ頼られたくもないんだよね。はつきり言って存在が迷惑」

「もういつそのこと消えてくださればいいですけど。ガリアも解放されたことですし、もう貴方に価値なんてありませんわ」

「お前がいなくなったところで誰も悲しんだりする奴なんていない。だからさ、安心していなくなってくれよ。皆それを望んでる」

ハルトマンが、ペリーヌが魔法使いの目の前にまで迫り、シャーリーは首を絞める手の力を強める。

「や、…やめ…やめて…」

魔法使いの視界一面が黒く染まった。

「はっ!?!」

ソーマは眠りから覚めて間もなく、勢いよく上半身を起こし周りの状況を確認する。

赤黒い空も、ウロボロスも、ハルトマンもペリーヌもシャーリーもない。

ただ医務室と思しき設備があつて、複数あるベッドの一つに自分がいた。

「夢…う…よかった…」

べつたりと汗が額にも下着にもべたついて気持ち悪い感触のはずだが、それが気にならない程今のソーマには落ち着きがなかった。

夢であったことを喜びながらも何度も荒く息を吐いて、激しく肩を上下させているのが証拠だ。

(本当に夢だったのか。あれは、あの言葉は本当に嘘なのか?)

その理由は夢の中にあつた。本物ではないにしろ彼女たちに言われた言葉は耳を塞ぎたくなるくらい自分に刺さっていた。

何故ああも的確に自分の突かれたくない急所を突いてきたのか、よりによって何故夢に出てきたのがあの三人だったのか、そのことを

考えるのに夢中になりすぎていたせいで彼はドアの開く音に気付かなかった。

「ソーマ！あんた目覚めたのね！」

その声にソーマはただならぬ速さで首を動かし、ドアの方を見る。入ってきたのはドツリオとフェル。そのフェルの赤い髪の色を見て夢で見たある人物を連想したソーマは目に見えてわかるほど動揺する。

「ちよつと大丈夫？顔色悪いわよ？」

「…平気、な、なんでもない…大丈夫っう！」

ふとした拍子に挙げた右腕に激痛が走り、つい別の手でそこを抑えてしまう。

ソーマの元にドツリオとフェルが心配して近付く。

「ああ、もう言わんこつちやない。あんまり体動かさないで。私程度の治癒魔法じゃ傷口を減らすのが精一杯で痛みまでは完全に治せないんだから」

「あの怪物は？」

「私たちがあんたを見つけた時にはいなかったわ。今マルチナたちやロマーニャ軍の兵士たちで探してる」

「……まるで歯が立たなかった」

ポツリ、溢したソーマの顔には後悔が滲んでいた。

そう、負けたのだ。それもただ負けたのではない。

ウォーター、ランド、ハリケーン、フレイム、自分の持てる力を全て出し切った上での敗北だったのならまだ恰好はつく。

まだ最大戦力を残していたのに、もしかしたらあの時使えたかもしれないのにその使用を諦めた上での敗北は情けないにも程がある。

「フェル、竹井たちにソーマはもう大丈夫だって伝えてきてくれる？ここには私がいるから」

すると彼に視線を合わせていたドツリオが言う。

唐突に言われて目を丸くしたがその内容に納得してフェルは言う通りにする。

「え？あ、うん。いいわよ…つと、ソーマ。あんたの恨みは私たちが返

してあげるから今はゆっくり休んでなさいよ。いい？大人しくしておくのよ」

病室を出る前にそう残してフェルが退出する。部屋の中にはソーマとドツリオの二人きり、無音の時間が訪れる。

その間ドツリオはソーマをじつと見ていた。そして

「何か悩みがあるでしょ？そんな顔してる」

彼の表情から何を感じ取ったのかそう言い放った。

「…勘違いじゃないですか」

ソーマはそう否定して見せるが、一瞬ぴくツと揺れた体の動きをドツリオは見逃さなかった。

正解だと強い確信を持った彼女は一旦椅子から離れると机の上に置いてあった指輪を取ると、また椅子に座って取った指輪を見せる。

「この指輪のことじゃないの？」  
「っー」

ドツリオが見せたのはハリケーンリンクスの指輪。

自分が隠そうとしていた悩みの有無だけでなく、その具体的な内容まで言い当てられたソーマは言葉を失う。

エスパーでも使ったかのようなドツリオに恐れを抱く。

「どうしてわかったんです…？」

「勘、って言いたいところだけどね。残念ながら違うわ。気を失っていた貴方を竹井たちが見つけた時これを大事そうに握っていたようなの。見た感じいつも変身に使ってるのと同じやつみたいだけこれを使つてるところを今まで見たことなければ報告でも聞いたことがない。だからもしかしたら使いたくても使えない理由が何かあるんじゃないかなーって、なんとくね」

まさにその通りだった。反論する余地もなく、ソーマはすんなりと胸の内を明かす。

「…俺がその指輪を使えないのはきつと俺のせいなんだ。俺が仲間を傷つけたから」

「どういふこと？」

「その指輪には501の仲間…隊員たちの力が関係しているんです。」

でも使えたのは最初の一回きりで：フェルが撃墜された時にも使おうとしたけど使えなかった」

「つまり501の仲間が貴方のことを仲間として認めてないからこの指輪は使えない。そう考えてるの？」

「他に理由がないですから」

「そうかしら」

「え？」

「原因が貴方にあるってのは正しいかもしれない。けれどちよつとズレてるんじゃない？」

「どういう意味なのかとソーマが訊ねようとする。しかしその前にドツリオは椅子から離れてドアへと向かい、医務室を去ろうとしていた。

「まあ私の考えてることと合ってるか確証はないわ。でももしそうだとしたらそれは貴方が自分自身でちゃんと気付くべき問題よ。それができない限りいつまで経ってもその指輪は使えないわね」

いつもとは違う真面目な声色でそう言つてドツリオは医務室を出て行った。

☆

ヴェネツィアから離れたロマーニヤの小さな町のカフェ。

日が落ち、店も閉まっている時間帯だというのに店の外の席で優雅に紅茶を嗜む一人の女がいた。

濃い暗闇の下、街灯が照らす彼女はまさしく絵画のよう。彼女自身の美貌と体つきもあつて、絵が命を持って現実世界に飛び出してきたように思える。

しかし惜しむべきは彼女を目にする人間が一人としていないことだろうか。せつかくの美しさもそれを堪能する者がいなければ寂しいもの。

と思いきや、女の前の椅子が動き、気だるそうに座る男が現れた。

男の顔を見ずに女は口を開く。

「あら、ぐ機嫌斜めって感じね」

「そりやあなるだろ。拍子抜けもいいところだったぜあのウイザード。これならまだ魔女数人を相手にした方がまだマシだったかもな」  
既知の友人のような慣れ親しんだ様子で女と会話を交わす男。彼こそがウロボロスであった。

「期待外れだったわけね…でもいいの？最後まで味わなくて」

「あん？何がだ？」

「まだ生きてるわよ。彼」

女の言葉をウロボロスの眉が微かに動いた。

「そんなわけねえだろ。俺は確かに確認した。水に落ちたあいつが浮かんでこないのを」

ウロボロスははつきりと断言する。自分の目が節穴であったなどとそんなことがあるはずがないと。

しかし女は表情を変えることなく言い放った。

「いい味だったわよ。彼の」

「…マジかよ」

ウロボロスは苛立ちを込めた舌打ちを打つ。露骨に嫌悪に満ちた彼の顔を前にして女は不敵な笑みを浮かべておる。

自分を嘲笑しているようにしか見えないその顔にウロボロスは物申したい気持ちはあったが、喉元から出かけた言葉を理性で飲み込んで席を立つ。

「いくのね？」

「面白味のない戦いも面倒くさいのも嫌いだがやり残しはもつと嫌いなんでな。今度こそきっちり息の根止めてきてやるよ。期待して待つてな」

勝利宣言とも取れるその言葉を最後にウロボロスは夜の街へと消えていく。

「私としては是非とも頑張ってもらいたいわね…彼に」

一言、呟いて女は夜風に揺れる髪を抑える手とは別の手を使ってティーカップを口に運んだ。



## 第四十一輪 向き合うべきコト

緑溢れる大地に二人の兵士が銃を手に立っている。

ヴェネツィア周辺の地域ではロマーニヤ軍による厳戒態勢が敷かれていた。

街中に出現し破壊の限りを尽くした怪物―ウロボロスの襲撃に備えて兵士が警備にあたっているのだ。

だが警備の任を受けて数時間この場所にいるが特にこれといっておかしなことはなく、二人の兵士は暇を持て余していた。

「なんだって俺らがこんなことやらなきゃいけないんですかねえ。怪物なんて本当にいるのかよ」

「ヴェネツィアの街がああなったのはお前も見ただろ、住民の目撃証言も多数ある。万一の事態に備えて警戒を強化しておくのは妥当だろう」

「そう言われたら何も言えないじゃないですか。あーあ、ウイザードが倒してくれてたらなあ。ガリアを解放したって言われてますけどその割には大したもんでもないんですかね」

又聞きした話でしかないがウイザードが怪物と交戦したというではないか。

彼がしっかりと撃破してくれていたら今自分はこんなことをせずに済んだのではないかなどと、兵士の一人は胸の内を考えていた。

「不謹慎なことを言うんじゃない…ん？何か来るぞ」

愚痴を溢す兵士と彼を諫める兵士たちの前に前方から影が近づいてくる。

もしや噂の、と思い姿勢を直し緊張した面持ちで銃を握る手を強める兵士二人。

影が大きくにつれてその姿が鮮明に見えてきた。影の正体は至って何もおかしなところも見られない男であった。

二人は安堵して銃を下げると自分たちからも距離を縮める。

「ヴェネツィアにある基地つてのはこの先か」

「君ここは今立ち入り禁止だ。悪いが基地に用があるなら別の日にし

てくれ」

「黙れ」

「は？―がつ!!？」

首を傾げた生真面目な兵士が首を掴まれ、持ち上げられた。

これには片割れの兵士も動揺し、震えながら銃を向けて男への警告を行う。

「ぐっ…あ…」

「な、なんの真似だよ！手を降ろせ！」

「いいぜ。降ろしてやるよ」

―ボキィ!!

男が不気味に笑った直後そんな音がし、持ち上げられていた兵士の手がぶらりと力なく垂れる。

男が軽々と兵士の首の骨を折ったからだ

「ひい!？」

「お前らに用はねえ。とつとつとウイザードを出せ」

兵士の目前で男は不気味な姿―ウロボロスとなる。

それがさつきまで噂していた怪物、と悟った兵士の顔は完全なる恐怖に脅え、その場で腰を抜かす。

「うわああああああ!!」

その兵士の叫びも途絶えるのもそう長くなかった。

☆

「ソーマさん、大事には至らなくてよかったですね」

「でも安心はできないわ。敵がいつどこに現れてもいいように今の内に対応を練っておかないと」

ブリーフィングルームでドツリオと竹井を中心とした対策会議が行われていた。

議題はもちろんウイザードとの戦闘を展開した相手ウロボロスに  
関してだ。

「そうは言うが具体的にどうするんだ。ネウロイのように観測できる

のか？」

「無理でしょうね。おそらく。街に出てきた時まるでこっちじや気付  
けなかったもの」

「次にどこに出てくるか場所だけでもわかればだいぶ違うんでし  
ょうけど」

ドミニカ、竹井、ジェーンが意見を交えるがネウロイとは勝手が違  
いかつ初めて相まみえる存在とあって話に大きな動きはない。

と、そんな時だった。フェルがポツリと呟いたのは

「もしかしたらここに来るかも…」

その言葉に他の者が視線を向ける。

説明を求める皆の目を一手に集めてフェルは言葉を紡いだ。

「あいつはソーマに言ったの。『やつと会えたな』って。あいつがまだ  
ソーマにこだわってるなら次はこの基地を狙ってくるかもしれない  
わ」

ウロボロスと会った時のことを参考に自分の考えを語るフェル。

すると直後バタバタと周囲への配慮など感じないような騒がしい  
大きな足音を立てて通信兵の一人がミーティングルームへと入っ  
てきた。

ノックもなく平静さを欠いている様子からして只事ではないと察  
したドットリオが内容に粗方の予想をつけながらも報告を促す。

「大変です！」

「どうしたの」

「基地周辺の平原で救援要請が！ネウロイと酷似した怪物と交戦中、  
ただちに応援をと！」

報告を聞いた皆の顔に緊張が走る。

「向こうの方が動きが早かったみたいね」

「皆、出撃よ。急いで準備して！」

竹井の号令にフェルたちは頷いて格納庫へと走り出す。

(皆気を付けて…)

☆

基地の内も外も、ウィッチも一般兵も慌ただしく動いている状況下であるというのに医務室にいるソーマの周りには不気味と言える程に静かだった。

退屈しのぎに何かをするわけでもなく、眠りに付くわけでもなく、静かにぼんやりと医務室の景色を眺めていた。

無論ただ眺めているわけでもなかった。

『原因が貴方にあるってのは正しいかもしれない。けれどちよつとズレてるんじゃない?』

『言っておくが今回俺は一切干渉していないぞ』

ドットリオが去ってから彼女から言われた言葉とそして自分の中にいるドラゴンに言われた言葉の意味をずつと考えていた。

(この指輪を使えない理由に他にどんな答えがあるっていうんだ)

どれだけ考えても正しい答えが見つからず、ハリケーンリンクスの指輪を使えない自分。

なのにドットリオとドラゴンは自分がわからない答えが見えているかのような口振りで語りかけてきて、そのことがより一層悩みを強くさせる。

悩み苦しむソーマが視線を窓に向けた時空へと飛び立つフェルたちが映った。

「フェルたちが出撃した?ネウロイが出たのか?」

ストライカーを身に着け、銃を手にして同じ方向へと飛んでいった。

ネウロイ出現の報を受けての出撃かと思ったが、彼女たちの進行方向は海上ではなく陸地。

となれば考えられる可能性は二つになる。

通常・陸戦型を含めたネウロイか。もしくは

(まさかあいつ!)

ウロボロス。ソーマはそちらの可能性を強く思い浮かべた。

だとすれば敵の狙いは自分にある。自分がいかなくは。フェルたちを巻き込むわけにはいかない。

居ても立っても居られずソーマは着の身着のまままで医務室を飛び出す。

しかしドアを開け、手をドアノブから離す前に首を後ろに動かして机の上で光るある物―ハリケーンリンクスの指輪を見つめる。

戦闘で使い物にならない代物。持って行ったところでどうせ意味なんてない。

そういった思いがソーマの脳内を駆け巡った。だがやがてハリケーンリンクスの指輪を掴み、医務室を完全に後にした。

☆

「いたわー！あそこー！」

フェルたちが駆けつけた時には既にそこには凄惨な光景が一面に広がっていた。

銃器だった物の金属片が散らばり、腕が不自然な角度で曲げられて白目を剥いている者、胸に穴が空きそこから大量の血を流している者。

そんな火の粉舞う平原の中心にはウロボロスがいた。

「あれがソーマを苦戦させたウロボロスとか言う奴か」

「撃破よりもまずは負傷している兵士から遠ざけて退避する時間を作ることを優先させて…いいわね、いくわよー！」

竹井の下した方針に従ってフェルたちは連携の取りやすい赤ズボン隊の三人・ドミニカとジェーンの二手に別れ、左右二方向からウロボロスに向かう。

「ウィッチの方が先に来やがった。まあいい。こいつらじゃウイザードを叩き潰す前の肩慣らしに物足りなかったところだしなー！」

上空を見上げたウロボロスは肩の蛇と竜の口から炎をドミニカとジェーンの方へ、炎を帯びた長剣による斬撃波を赤ズボン隊の三人へと発射する。

三日月の形を作って飛んだ炎を赤ズボン隊の三人は減速もシールドの展開もせず炎の軌道から逃れ、接近しながら銃弾を浴びせる。

「ううあつー！」

フェル、ルチアナ、マルチナが時に一斉に時にタイミングをずらし、て銃撃を行う。

魔力の込められた弾丸はウロボロスを直撃し、苦悶の声を引き出す。

続いて同じく火球の回避に成功していたドミニカとジェーンが別方向から追撃に加わる。

五人がウロボロスの相手を引き受けているこの間に竹井は地上へと降り立ち、負傷している兵の救援に当たっていた。

「無事な人たちを連れて帰投してください」

「申し訳ありません。我々が不甲斐ないばかりに」

「そんなことはありません。よくここまで耐えてくれたこと感謝します。後は私たちが引き継ぎます」

頭から血を流している兵士へ竹井は建前のない労いの言葉を送る。

実際戦車もない魔力もない戦力でネウロイと同等近い相手を前に彼らはよくやってくれた。

逃げずに立ち向かったその姿勢だけでも大いに評価されるべきだ。

「貴方たちの頑張りに今度は私たちが応える番です」

健闘虚しく命を落としてしまった兵、傷付いたお互いの体を支え合いながら離脱していく兵。

自分たちが到着するまで被害を食い止めてくれていた全ての兵に感謝を口にして竹井も戦線に入る。

移動もできず剣を盾代わりにするウロボロスだがそれで一方向からの直撃は凌げても別方向からの直撃は防げない。

ウィザードの銃撃と違うのは複数人による一斉射というだけではない。一つ一つの弾に込められた魔力の高さが違うのだ。

「ウィザードよりもやるじゃねえか。ちと見くびってたぜ。だがな、こんなんで勝てると思ってるようじゃ甘えな！」

しかし銃弾の雨もウロボロスの戦意を削ぐことはなかった。むしろ思っていた以上の手応えに高揚したウロボロスは全身に纏った炎で自身に降りかかる銃弾を灰に変える。

「やっぱ簡単にはいかないわよね」

この結果をフェルはすんなりと受け入れた。

ウィザードが敵わなかった相手だ。いくら数的にこちらが有利とはいえ圧倒的な勝利で終われるわけがないことは戦う前から覚悟していたことだ。

「ちよこまか動かれたら面倒だ。数を減らすか」

止まない銃撃を受けつつウロボロスは地面に魔力を送る。

白と黒の強い魔力は地面の表面を伝う水のようにフェルたちの目に見え、彼女たちは危機感を強めた。

「何か来ますー!」

いち早く警告を発するルチアナ。その見立て通り轟音を立てて地面から出てきた黒い竜と白い蛇がフェルたち目掛けて襲い掛かる。

「下からなんか出てきたよ!しかもでかいし!」

「こんな真似もできるのかこいつ!」

大型ネウロイ程の大きさの物体に驚愕を大きく表すマルチナ。彼女とドミニカ、残るウィッチたちは攻撃を中断して回避行動に意識を集中させる。

ストライカーを巧みに操り、空を舞って巨体二つを振り切ろうとするが執念深く追いかけてくる。

それだけでも厄介だというのに両肩からの火球と斬撃波をウロボロスは追加で手当たり次第に打ち出す。

「しっしー!」

いくらスピードを上げても方向転換してもしぶとく狙ってくる白蛇を姿勢を反転してドミニカは撃ち抜こうとする。

姿勢制御のために一時動きの止まった一瞬に付け入りウロボロスは彼女へと照準を合わせて火球を放った。

「しまった、避けきれない!」

視線も体も完全に白蛇へと向けていたドミニカには回避する術はなかった。

咄嗟にシールドを出して火炎を受け止めたものの彼女の体は強制的に移動され、その先で大きな口を開けた白蛇がいた。

「大将危ない！ーきゃー！」

その時ストライカーを全速で吹かしたジェーンが体当たりでドミニカを救い出す。

しかし結果として彼女の方が今か今かと獲物を食おうと待ち構えていた白蛇の口へと飲み込まれてしまう。

「まずは一人消えたな」

「ジェーン！おのれ、よくも！ジェーンを吐き出せこのデカ物！」

自分を庇う形で吞まれたジェーンを助けようとドミニカは白蛇へと一直線で向かい一心不乱に弾を撃ちまくるも思いのほか頑丈な表皮で白蛇は簡単に消滅しない。

「うわあー」

「マルチナ！」

その一方で次はマルチナが同じ道を辿る羽目になった。ウロボロスの火球と炎の斬撃波に翻弄されていた彼女は黒竜の接近に気付かず、その胴体から繰り出される体当たりを食らう。

フェルとルチアナが援護に周りうとするも火球と斬撃波の横槍を入れられ、一直線に救出に向かえない。

救出に手間取っているその内に黒竜はマルチナを一思いに口の中に納めた。

「これで二人。後の奴らは俺が直接始末してやるとするか」

余裕を崩さないウロボロスに竹井はたまらず唇を噛む。

(あの蛇と竜が消えずにsいるということはまだマルチナとジェーンは生きている…でもウロボロスをどうにかしないと二人の救出もままならない。考えるのよ、きつと手はあるはず)

マルチナとジェーンを救出を優先するには火力を二体に集中させるのが最善なのだろうが、ウロボロスを無視してできるほどの余裕も時間も無い。

かといって先の一斉砲火に耐えたことからウロボロス自身も二体に劣らぬ防御力を有しているのは明白。

今いる四人で簡単に倒せる相手と言えるかといったら違う。

一体どう動くのがベストな選択か、ウロボロスの攻撃を避けながら



竹井は思考を続ける。

「どうした？・ビビッて迂闊に動けねえのか？ だったらこっちからいっせ！」

そんな中で新たな動きを見せたのはウロボロスであった。

地面を蹴って、炎を帯びた剣でフェルへと斬りかかる。

「狙われてるわよフェル！ 避けて！」

「わかってる！」

竹井からの言葉に手短かに返してフェルはウロボロスを迎え撃つ。

射撃を行い限界まで引き寄せてからウロボロスの長剣の及ばぬ高度へと上昇し、攻撃を失敗に終わらせる。

「こういうのが面倒なんだよなウィッチってのは…だが、隙だらけなんだよなあ！」

「どこに撃って…！」

空振りし着地したウロボロスは別方向に体を向けて両肩から火球を二つ発射する。

たった今攻撃を与えようとしていた自分とは異なる見当違いな方角に疑問を抱くフェルだったが火球の進行先に視線を移した瞬間、血相を変える。

その先にはジェーンを救出するために白蛇への攻撃を継続しているドミニカ。

ウロボロスがフェルへ攻撃を仕掛けて遠距離攻撃が止んだのを機と捉えて行動したのだろう。

しかしジェーンを助けるのに躍起になるあまりウロボロスへの意識を緩めてしまったのが仇となった。

「ドミニカ！」

叫ぶフェル。

その呼びかけに答えるかのように寸でのところでルチアナが前に入り、シールドを展開してドミニカを守る。

守れはしたが防御に秀でていないルチアナのシールドでは威力を殺すことはできず、二人は派手に押され平原の地面と激突する。

「いったい…ドミニカさん大丈夫ですか！」

「すまない。ルチアナ、私の不注意のせいでお前に迷惑を」

「謝らないでください。無事なら何よりです」

ドミニカは自らの非を詫び、ルチアナへの感謝を告げる。

ルチアナもそれを受け取って再度飛び立とうとした時二人は異変に気付いた。

「ストライカーが！」

「私のも。これでは……！」

二人のストライカーは地面に衝突した影響で部品が外れ損傷していた。

ウロボロスはそんな二人を戦力に当てはまらないと見なして鼻で笑うと未だ空にいる竹井とフェルを見上げる。

「最後に残ったお前ら二人は特別待遇だ。じっくり遊んでやるよ」

「誰があんたなんかと！」

睨むフェルと竹井を始末しようと駆けるウロボロス。

そのウロボロスの胴体を一闪する風が現れた。

風は速度を落とすことなく流れるようにそのまま地上に降り立つと、ウロボロスへと走り出す。

「ソーマ!? どうして」

その風―ウイザードの参戦にフェルは驚いた。

このピンチの場面で助けに来てくれたのは嬉しいが彼は怪我人だ。万全な状態でないのにどうして来たのかという疑問の方が彼女の中では勝っていた。

「よく生きてたじゃねえか。おかげでこんな面倒する羽目になっちゃった」

ようやく待ち望んだ相手の登場に沸き立つウロボロスはウイザードとの剣戟を交える。

「お前を倒すまでは死んでも死にきれないんでな」

「ほう、口だけは達者だな。だったらやってみろよ！」

「ぐあっ！」

一度攻撃が入ったのを皮切りにウロボロスは反撃を許さず立て続けにウイザードを斬りつけ、地べたへと転がす。

前回の戦いのダメージが今なお尾を引いていることもあってたった数回の斬撃でウィザードはすぐに立ち上がれない。

「もつと真面目にやれよ。でないとおの中にお前の仲間のウィッチが溶けてなくなっちゃうぞ」

「なに!?!」

「なんですって!?!」

そこで初めてウィザードは白蛇と黒竜に意識を向けた。

地面から生える大樹のようにそびえ立つ二体。その中にいる『仲間のウィッチ』をウィザードは周囲を見て確かめる。

「マルチナとジェーンのことか。そんなこと、させるか!」

仲間の命が危険に晒されていると聞きウィザードは傷付いた己の体を強引に動かしてウロボロスへと突っ込む。

「いいぜ、そうこなくちやな」

剣だけでなく蹴りも攻撃に織り交せて仕掛けていく。

が、剣は長剣で反らされ、打撃はウィッチの銃撃にも耐え凌ぐ表皮が相手では碌に痛みも与えられない。

そう、まるで歯が立たないのだ。

だからウィザードはウロボロスに身を切り裂かれ火で炙られるしかない。

「私たちだけでも援護するわよ!フェル!」

「当然よ!」

一方的に嬲られる様に耐えかねてフェルと竹井がウロボロスに向かって射撃を行う。

足が止まり、守りの体勢に入るウロボロス。

「これしかない!」

『チヨロイイネ!キックストライク、サイコー!』

今しかチャンスはない。

跳躍し、足に風の魔力を纏うウィザード。

右脚を突き出した姿勢でウロボロスへと真っ直ぐに突き進んでいく。

ギリギリまでフェルと竹井が斉射を続けてくれていたおかげで

キックは長剣を盾にされたもののウロボロスに決まる。

「うおおっ！」

「うっ……！」

呻き、足が土をめくって後ろに下がる。

このまま押し切れればあと少して攻撃が炸裂するとウィザードは期待した。

「おらあー！」

けれどもその期待は抱いてすぐに水泡のように淡いものと化し、ウィザードは振り抜いたウロボロスの長剣によって弾かれる。

「うわあああー！」

変身が解かれたソーマは右肩から派手に滑稽に地面に転がり落ちる。

「今ので万策尽きたって感じだな……じゃ、もう終わりにするぜ」

長剣を肩に担いだウロボロスは軽やかな足取りでソーマへと歩を進める。

「逃げろ！逃げるんだソーマ！私たちに構うことはない！」

「逃げてくださいソーマさん！」

ドミニカやルチアナが懸命に呼びかけるが彼女たちの思いに反してソーマは土に伏してウロボロスを睨んだまま動かない。

今の戦いと先の戦いで蓄積されたダメージの影響で逃げたくても逃げられないのだろうか。

それが真実かは定かではないが少なくとも竹井はそう判断し、ウロボロスの背後に回りこんで背中を撃ち抜く。

「ちっ、無駄だとわかってる癖にしっこさだけは一丁前だな。順番くらい守れよ。お前らの相手は後でしてやるってのに」

「フェル！ソーマさんをお願い！」

自らを囷にしてウロボロスを引き受けている内にソーマを逃がす。

その意図を理解したフェルは竹井の目論見通りウロボロスが彼女に火球を放った間にソーマの横へと飛行した。

「立てる？私の肩に手を回して。あんただけでもこの場から離れないと」

「駄目だ。あいつの目的は俺だ。俺を消さない限りあいつはどこだろうと見境なく狙ってくる。俺のことはいいからルチアナたちを。いやそれよりもマルチナとジューンを助け―」

「ああ…うるさい！余計な口叩かず黙りなさい！で、言うこと聞く―」「やめろフェル！」

ソーマの言葉にフェルは真っ向から強く言い返すなり強引にその腕を掴んで自分の肩へと回す。

異議を唱えるように名前を呼ばれたがそんなのはお構いなしだ。

「二度も逃がすかよ。お前は今日ここで俺に殺されるんだよ！」

ウロボロスがその動きに気付いた。

竹井からの連続射撃を無防備で受けながら、体をそちらに向けて火球を放とうとする。

すぐに逃げて、と竹井が焦りをにじませて叫ぼうとした時だった。

「ぐおおっ―！」

弾丸がウロボロスの右側で炸裂し、彼を吹っ飛ばした。

竹井たちは弾丸の飛来して来た方角に目を走らせる。

一台のジープ。運転席にいるのはボーイズライフルのスコープを覗くドットリオ。

「ドットリオ隊長!?!」

思いも寄らぬ人物の登場に竹井やフェルたちは驚きの声を上げるがドットリオはその反応を楽しむような表情を見せず、ジープをフェルトとソーマの近くに止める。

「いたた…わかっててやったこととはいえ結構腰に来るわ」

「隊長までどうしてここに来たのよ。怪我してるんじゃない」

ドットリオは過去にマルタ島での戦いで負傷が原因で実戦には出てこれないと聞いていた。

なのにそれがこうして目の前に駆けつけてきたことを疑問に思ったフェルが訊ねると当の本人は痛みを笑顔で誤魔化しながら言葉を返してきた。

「大切な部下たちが戦ってるのに隊長の私が何もしないわけにいかないじゃない。それに何よりソーマに届けたい物もあったしね。竹井

「悪いけどもう少しだけ踏ん張ってくれる！」

「っ了解！」

何か考えがあつてのものと思つた竹井にウロボロスの相手を任せてドツリオは軍服の内側、胸元のポケットから一枚の写真を出してソーマに差し出した。

「よく見てソーマ、これに貴方がずっと求めていた答えがあるわ」

「これは…なんでこれを今俺に」

ソーマが受け取つたそれはペリーヌから届いたストライクウィッチーズの皆で取つた写真。

非常に大事な物であるがドツリオがわざわざ戦場にこれを持って来た意味がわからず怪訝な顔をする。

「そこにいる皆すごく気持ちのいい笑顔してるわよね。貴方と一緒に写真撮つてそんな表情をしてるのに貴方のことが好きじゃないと思う？仲間として認めてないと思う？」

「っ!!」

その言葉にハツとしてソーマは写真を見つめる。

自分の行いを全て知つた後でもこの写真に映る皆は眩しく心地良い笑顔を見せている。

それはどうしてだ。自分のしてきたことの全てを知つても受け入れてくれたからではないのか。

「なんの話だかよくわからないけどそれでもはつきり私にも言えることがあるわ。ソーマ、前にルチアナのことで悩んでる私にあんた言つたわよね。ルチアナが本当に私が思つてるようなことを言つたのかつて。あの言葉そのまま今返すわ。あんたの仲間は確かにあんたが思つてるようなことを言つたの？」

続いてフェルからもそう告げられソーマは頭にかかつていたもやのようなものが消えかかつていく気がした。

「…違う、皆は俺を」

皆は自分を許してくれた。ガリアを解放を祝つて写真を撮つたその時も、その後も。

ペリーヌは写真を含めた送り物を送つてくれた。ミーナは電話で

気遣ってくれた。バルクホルンは行いに思うところはあっても仲間であることを否定しなかった。

「…指輪を使えない原因は俺だったんだ。他の誰でもない俺自身が自分で自分を認めていなかったんだ」

仲間を裏切った自分を許せなかったのは自分だけだったのだ。

いくら仲間が力を貸すことを許しても自分自身でそれを拒んでいたら、使える力も使えない。

そんな単純なことに気付くまでどれだけ時間がかかったことだろうか。

「ほんとどこまでも迷惑な奴だよ」

自分で自分に自虐的な言葉を吐いてウロボロスへと目を向ける。

ハリケーンリンクスの指輪を左手の中指に嵌めながら一步一步、歩み寄る。

「ちよつとー」

「心配しなくても大丈夫よフェル。きつともう」

とても防御など考えていないような姿勢で敵へと近づくの不安に思い止めようとするフェルに対してドツリオはどこか落ち着きがあった。

ソーマが視界に入った竹井は攻撃を止め、ウロボロスはその竹井の行動でソーマの接近に気付いた。

「とうとう諦めて自分から命を捨てに来たか」

「違う。俺が捨てたのは自分の中にあつたくだらない悩みさ」

言いながらソーマはドライバーを操作し、変身の準備を整える。

『シャバドウビタッチヘンシーン！シャバドウビタッチヘンシーン！』

「訳がわからねえな！」

はなから相手の意志など興味のないウロボロスは一思いに頭から両断しようとして長剣を振りかぶる。

迫り来る危機にソーマは怯えない。

スウつと、大きく息を吸いある言葉を気持ちで込めて呟く。

「変身！」

ウロボロスの勢いの乗った長剣はソーマの脳天を砕き、弾けたスイカのように血潮が舞い散り、その命を絶つ。

『ハリケーン、リンクスー!』

というのがウロボロスの思い描いた未来。

しかし現実には長剣が髪先に接触することすら叶わず、ソーマの周囲に鳥籠のように発生した緑の風にウロボロスは長剣ごと吹き飛ばされた。

「なんだと!?!」

『ビュービュー、ビュービュービュー!!』

信じられないとばかりに声を上げるウロボロスの目に映るのは大地の上で渦を巻く濃い風。

それが薄れ晴れた時、立っているのは魔法使いである自分自身のマークを中心にして展開するウサギ・ダックスフロント・シヤルトリユウのマークの刻まれた魔法陣を背にしたウイザード・ハリケーンリンクス。



## 第四十二輪 強さ×強さ＝最高

ガリアの首都パリ。

この町は現在復興作業の真っ只中。新たに家を建てる職人たちが木材を運んでは置き、置いては一息ついてまた木材を運ぶために移動を再開している。

熱心に作業に励んでくれる彼らの様子を見る少女は少し離れた場所ですら喜ばしく感じていた。

「そろそろお茶にしませんかーペリーヌさん！」

遠くから呼ぶ声に少女ーペリーヌは顔を上げて視線を切り替える。

丘の上から声をかけてきたリーネを発見して笑顔を向ける。

「もうそんな時間ですね。ええ、そうしましょうかリーネさん。作業中の方たちも一旦お休みになられてください」

二人はクロステルマン家の屋敷へと場所を移動して休憩を取ることにした。

自身が端整込めて育てた花壇の前で机と椅子を用意してリーネが持って来た紅茶入りのカップをペリーヌは口に運んだ。

「どうですか？ペリーヌさん」

「そうですね…なかなかいい味ですわ。貴方が入れましたの？」

「はい、今回は前より自信があるんですよ。だっていつでもペリーヌさんに比べたらまだまだですけど」

「そう簡単に追い付けるなんて思わないでください。でもまあ確かに成長は感じますわね」

「本当ですか？」

「嘘言っただうするんです」

それもそうだと苦笑で返すリーネ。

吊られてペリーヌも柔和な笑みを浮かべるとガリアの街並を思い返して口を開く。

「やっと少しだけ元の姿が戻ってきましたわね」

「協力してくれる皆さんのおかげですね」

「それもありますけど貴女のおかげでもあることを忘れないでください」

いりーネさん。貴方には本当に感謝しています」

その言葉に嘘はない。

ガリア解放以来りーネは復興を共に手伝い、自分をサポートしてくれている。所属も生まれもブリタニアなのだ。

彼女の友情と尽力にはペリーヌは頭が上がらない。

「感謝だなんてそんな、私がやりたいと思っただけのことですから」

「貴女も変わりましたわね」

心の底からペリーヌは思う。

今の彼女は以前の自信なきげでおどおどしていた姿からはとても想像できないほど堂々としていて信頼を寄せられるほど頼りになる。

こんなにも彼女が変われたのはきつと扶桑から来たあのウィッチの影響だろう。

自分の敬愛する坂本少佐の推薦（というのが少し気に入らないが）で部隊に来たあのウィッチ。

良くも悪くも己の思っただけに真っ直ぐ突き進む彼女の姿勢にりーネは感化されたのだろう。

現にあのウィッチが来てからりーネは戦場で目まぐるしい活躍を挙げ、その活躍はブリタニアのエースの称号に相応しかった。

そういう意味ではりーネの素質をあのウィッチが開花させたと言っている。もしあのウィッチが来てなければりーネが本来秘めていた素質を発揮することなく、自分の愛する祖国が解放されることもなかった。

…となれば自分はそのウィッチに感謝しなければならないだろう。

坂本少佐のお眼鏡にかない、何度も指導を受けていて、今頃も扶桑で時々会っている可能性があると思うと妬ましい…いや羨ましい部分もあるが

ともかくそれを抜きにしないであのウィッチが自分たちに与えた影響は大きい。

「出会いと言うのは不思議なものですわね」

感慨深げな思いを持ったままペリーヌがティーカップを置いた時

彼女の体は強烈な緑色の輝きを纏いだした。

「ペリーヌさん!？」

「これは…?。」

突然自分の体が発光する現象。その現象にペリーヌにも、それを見て戸惑っていたリーネにも心当たりがあった。

「今のってウォーロックの時と同じですよ。もしかしてソーマさんが?。」

「ええ、そんな気がしますわ」

ペリーヌは感じ取っていた。

今遠くの場所でウィザードが戦っていると。そしておそらく自分の魔法に由来した力を持つハリケーンリンクスを使わざるを得ないほどの状況にあるというものも

(今も戦ってるのですね貴方は…人を守るため、何より貴方を守るためなら私の力、貴方の思うように好きなだけ使ってください)

☆

「ハルトマンの奴、またこんな時間まで寝ているとは。今日という今日は今度こそきつく言っておかなければカールスラント軍人として他の皆に示しがつかん」

早朝のサントロン基地の廊下をゲルトルート・バルクホルン大尉はある部屋を目指して歩いていった。

その目的地は彼女の相方の寝室。多くの軍人ならば起床して一日の行動を規則正しく開始している時間になっても姿を見せず眠りについている彼女を起こすためである。

度々口を酸っぱくして態度を改めるようになってきたがのんびんだらりとかわされ諦めて見逃してきたがさすがにそろそろ改善してもらわないと困る。

「おいハルトマン——」

部屋の前まで到着したバルクホルンは扉を開けながら中の人物を叱責する。

いやしかけた時、言葉の途中で軍服を着たハルトマンが眠たそうに眼を擦りながら出てくる。

反射的に進路を譲る形でドアに手をかけたまま体を動かすバルクホルンは目を丸くしていた。

「…どうした?」

「何が?あ、おはよートウルーデ」

「こんな時間なのに服を着て…どうした」

「何それ。いつもはこんな時間まで寝てるとは何事だーって言うくせに」

「あ、いや、それはそうなんだが…」

ハルトマンの言うようにいつものバルクホルンならばそう言っていたし、自分の目覚ましくなく軍服を着て起きて来たことには『やっど自覚ができたようだな』くらいには褒める。

しかしいざこうしてそんな事態に直面すると喜びよりも恐怖が勝ってしまった。

「向こうも頑張ってるみたいだしさ、私も今日くらいはちゃんとしないといけないかなーって」

「向こう?」

「そ、さっきまた感じたんだよね。前みたいなの」

バルクホルンからすれば何のことだかさっぱりだがハルトマンにはわかっていた。

彼女もペリーヌと同様にハリケーンリンクスに変身した戦っているソーマを感じていた。

「さーって、ひとまずミーナにも顔出しとこっかな。今日何するか予定も聞いておきたいし」

疑問に関する答えを一切返すことなくハルトマンはいなくなってしまう。

一人取り残されたバルクホルンはどうと

「向こう?感じた?一体何を言ってるんだあいつは」

余計に益々困惑を強めていた。

☆

アフリカ大陸の砂漠地帯を一台のバイクが横断している。

その運転を担うのはシャーロット・E・イエーガー大尉。サイドカーに同乗しているのはフランチェスカ・ルツキー二少尉。

通常の指揮系統の中に納まらない特異な立場にいる彼女たちは祖国ロマーニヤ及びリベリオンの管轄内ではなく、司令部からの指示でこのアフリカ地帯に身を置いていた。

「シャーリーお腹空いたー喉も乾いたー」

「まだちよつと我慢できるか？もうすぐで水のあるところに着くだろうから」

「んー頑張ってみる」

「よしよし、偉いぞルツキーニ」

姉妹にも母娘にも思える仲の良さが伺える会話は相変わらずの二人。

無駄に広く、その癖変わり映えのしない砂漠を走るバイクのサイドカーの上でルツキーニはふと空を見上げた。

「ねえシャーリー」

「なんだ？」

「皆は今頃どうしてるかな？」

「んーそうだなあ。解散する前に聞いた話だとミーナ中佐たちはサントロンで、ペリーヌとリーネがそのままブリタニアに残って、サーニヤとエイラがスオムスだったか、確か。で、後は宮藤と坂本少佐が扶桑に帰るって話だったな」

「じゃあソーマは？ソーマはわからないの？」

「ソーマかあ。あいつは…最後に話した時も自分がどういう扱いになるかはわからないって言ってたしな。どうしてるだろうな」

シャーリーとしてもソーマの近況は気にしている。

諸々の要因があつて彼は自分たち二人以上に特殊な立場に置かれている。

もしかしたら処罰を与えられて、拘束か投獄されている可能性だつ

である。

ルツキーニもその辺りの事情を詳しく把握している訳ではないだろうがなんとなくソーマが嫌な目に合っている可能性は低くないと薄々思っているのだろう。

「大丈夫だよね？またちゃんと会えるよね？」

「大丈夫さ。必ずまた会える。だからその時まで私たちがまずはしっかり頑張らないとな」

「そだねーじゃあそのためにも早く人のいるところにいこー！」

シャーリーの言葉を受けて途端に元気を取り戻すルツキーニ。

さつきまで不調を訴えていたのとは同一人物とは思えない変わり身の早さにシャーリーは心の中で思い切り笑う。

そんな彼女にももちろんある現象が起こった。

「うおっ、わあ!?!なんだなんだ!?!」

「シャーリー光ってるよー！ウォーロックの時みたいに！」

体が緑色の光を放ったのだ。

予兆もなくあまりに突然の出来事であったためにシャーリーはすぐさま運転を止めて光輝く自身の掌と身体を不思議そうにルツキーニと一緒にみて見つめる。

「ソーマがまた私やハルトマンたちの力を使って変身したのか」

シャーリーもまた自分の身に起きた発光現象を結びつけた。

『ウォーロックの時と同じ』というルツキーニの言葉で気付いたが確かに自分の体内から温かな力が満ちてくるのを感じる。

「ソーマ戦ってるんだ…」

彼が今この時も戦っていると知り、心配そうな顔をするルツキーニ。

そんな彼女を励ますようにシャーリーは平常時と変わらぬ笑顔を浮かべる。

「そんな心配しなくても平気だよ。ソーマは強い。それに私たちの力もついてるんだ。簡単に負けやしないさ」

「そっか、そうだよね」

ルツキーニから目を外して先ほどの彼女のようにシャーリーは青

空を見上げた。

(大丈夫だよなお前なら。絶対負けるなよ)

遠く離れたこの空の下で戦う仲間の魔法使い。彼の勝利と無事を信じて

☆

アルダーウィッチーズのウィッチたちとウロボロスの前でウィザードは変化した。

彼は変身に使用したハリケーンリンクスの指輪を見つめて感慨深げに呟いた。

「あの時と同じだ…体の中に温かい力を感じる」

前にも味わった感覚。この感覚を再び味わえたことがウィザードは嬉しかった。

身体の中を流れ外を覆う強くも優しく温かい魔力。それが近くにいなくてもあの三人が…仲間たちと繋がって、支えてくれていることの証明のように思えるから。

ウィザードは拳をぎゅっと握り締めてからウロボロスへと歩いていく。

「さつきとちよつと見た目が変わっただけじゃねえか。そんな程度の変化で俺に勝てると思ってるのかあ！」

ウロボロスも走り出し彼の方からも両者の間にある間隔をなくしていく。

己の武器のリーチにウィザードの体が入ったところで長剣を勢よく叩き付けるように振り下ろす。

ウィザードは舞うように身軽な所作で横に回転して回避。

後ろへと通り過ぎたウロボロスの背中をその場で蹴り付ける。

「うおー」

情けなく前のめりに倒れ込むウロボロス。

だがダメージ自体は大したことはなかったためにすぐに起き上がる。

なにかのまぐれだろうと確信して何度も斬りかかるが、振り回した長剣は何度も余裕を持った最小限の動きでかわされ、ウロボロスの苛立ちが蓄積する。

「この、こいつー！」

縦や斜めに振るっていたものを今度は横に剣筋を変えて振るう。これならば回避のしようがないと思つての一振りだった。

しかしウィザードはバク宙で剣の軌道から外れ、着地と同時に顎を蹴り付ける。

またしてもウロボロスは地面に全身を付ける羽目になった。

「何故だ!? 何故こんな……こうなったら先にこつちから始末してやる！」

ウロボロスは標的を変えて白蛇と黒竜、二頭の中にいるマルチナとジェーンを溶かす消化液の速度と強度を上げるために地面を経由して魔力を送る。

その行動をフェルたちは見抜けなかったが一度受けた経験のあるウィザードは地面を流れる魔力から狙いに気付いた。

「そうはいくか」

『チョーイイネー! プラズマ、サイコー!』

掌を地面に向けて雷撃を放つウィザード。雷撃はたちまち地中を巡り、ウロボロスと彼の使役する白蛇と黒竜に到達する。

「がああああ!!」

ウロボロスは大きなダメージを受けて膝を付き、白蛇と黒竜は破裂して体内にいたマルチナとジェーンが肉片と共に放り出される。

「マルチナ！」

「いった!? あー、助かった。危うくもう少しで溶かされるところだったよ」

「ジェーン! 無事で何よりだ」

「大将ーソーマさん!? なんでここに!」

胃液で身体はべとべとになってしまっていたが解放された二人にすかさずルチアナとドミニカが駆け寄り喜びを露わにする。

これで心置きなく集中できる。



それを見て同じように喜び、安堵していたウィザードだが気を抜くことなくウロボロスへと向き直り、魔法陣から出したウィザードソードを手にする。

最初の数歩はゆったりと、そこからは一気に駆け出して接近する彼のウィザードソードガンと長剣が幾度となくぶつかり合う。

力任せに振るうウロボロスだがウィザードは剣戟を結んでいたと思いきや途中で距離を取ってガンモードに変形させたウィザードソードガンで射撃を行う。

その射撃もこれまでと違いウィッチの放つ弾と同等近くにまで威力が上がっていて無防備な体勢で受けたウロボロスの身を苦しめた。(どうなってやがる。さつきよりも強くなってる…)

ウロボロスは疑問に思った。どういうわけだかウィザードは格段に強くなっている。

自分に手も足も出なかったはずがあつという間に形成が逆転し、今では自分の方が痛めつけられている。

とにかく近接戦は一旦諦めてウロボロスは遠距離攻撃を主体に戦い方を変えることにした。

両肩から火球を連続で放ち、ウィザードを丸焼きにすることに決めた。

『チョーイイネ！サイクロン、サイコー！』

「はあ！」

迫る来る複数の火球をウィザードは魔法陣から竜巻を吹きだし打ち消す。

そしてそれだけにとどまらず竜巻は頭を宙へと向けてウロボロスの足を地上から切り離した。

「うおおあああ！」

大した抵抗もできず空に舞い上げられるウロボロスに滑空したウィザードの剣が上下左右から刻まれる。

「こんな変わるものなの…」

その圧倒ぶりはソーマが本気を出せるようになればもしかすれば希望はあるかも、と思ひ悩みの払拭に貢献したドリオにも予想外

だった。

しかし単純に考えれば当たり前のことでもある。ハリケーンリンクスはウィザードの胸に眠る力が引き出されていることに加えてウィッチ三人分の魔法が付与された形態。それもただのウィッチではなく一流のエースの三人だ。

これで弱くないはずがないのだ。

「凶に乗るな人間の分際で！」

攻撃を受け続けていた鬱憤が蓄積したウロボロスが叫んだ。そして体に変化が起き始めた。

「うっ！おおおおああああっ！ああ！」

「何をするつもりなの……」

苦しむ声を上げながら背中から突起が二つ左右に伸び、それらはやがて銀の翼へと形成されていった。

「俺に楯突いたことをあの世で後悔しろ。全員まとめて塵にしてやる！」

翼をはためかせてウロボロスは飛翔する。ウィザードやフェルたちが小さな豆粒と錯覚するまでの高度に到達すると翼を広げ、そこに力を集約させる。

空中にいたフェルや竹井が攻撃を未然に防ごうとするが、彼女たちが射程圏内に移動するよりも早く翼から無数の火の矢が雨のように地上へと降り注いだ。

「こんな無茶苦茶な数私たちだけじゃ防ぎ切れない！」

「大丈夫だ。あれくらい速さなら間に合う」

あまりに広範囲に及ぶ攻撃に狼狽えるフェルだがウィザードの声には動揺はなかった。

『チョーイイネ！ジェット、サイコー！』

『コピー、プリーズ！』

緊迫感の欠片もない陽気な音声。

その音声が魔力で強化されたフェルの耳に聞こえたのと地上にいたウィザードが空から地上に落ちていく最中の矢の一部を切り払ったのはほぼ同じタイミングだった。

「馬鹿な…」

「はっや」

敵も味方も言葉を失う。矢の数はどんどんと高速で動く二つの刃の前に消えていく。

空に展開していた火が全て消滅し、ウロボロスの脇腹をウイザードが切り裂いて駆け抜け抜けウロボロスよりも大きく離れた高みに移動していた。

「どうした。これでおしまいか？」

「殺す！」

白雲を背にするウイザード。

視線でも実力でも自分を見下しているように感じたウロボロスは戦法も戦略も考える時間を置くこともなく一直線に目指す。

ウイザードも二刀流でウロボロスを迎え撃つ。

「何ぼさつとしてるの。貴女たちもいくのよ」

「でも私たちのストライカーは壊れてしまつて」

「おまけに弾も心もとない。こんな有様で突っ込んでもソーマの足手まといになると思うが」

ルチアナとドミニカのストライカーは破損により飛行ができず、弾薬も全員残りわずか。

しかしドリリオはそんな答えなど予想していたというように得意気な顔を浮かべて、ジープを親指で指す。

「こんなこともあろうかとちゃんと用意してきたわ。ほら！」

ルチアナたちが揃つてジープの後部座席を見ると、そこにはルチアナたちが扱う武器ごとの弾薬が詰まっていた。

「ストライカーはさすがに持ってこれなかったけどね…持って来たかったけどうちに予備はなかったし」

「どの道私とルチアナは戦えないか」

「だったら私がやります！大将の分も！」

主戦場が空に移った今ストライカーがなくては戦えない。悔しさを表情に出すルチアナとドミニカだったが、二人に向かって意気込んで声を上げたのはジェーンとマルチナだった。

「ジエーン、戦えるのか？」

「あの中にいる間もし外に出れた時のためにストライカーだけは守らないとって、シールドで守ってたんです」

「私もいくよ。やられたままじゃ黙ってられないからね」

ウィッチの基礎訓練として水面にシールド展開して海の上に立つ内容があり、ある扶桑の新米ウィッチはこの訓練を日常的に行っている。

マルチナとジエーンはこの応用でストライカーを足元の消化液から身を守ったのだ。

「なら私の銃も持っていけ。せめてこれだけでもあいつのところへ届けてやりたい」

「はい、大将」

「マルチナ、私の分までお願いします」

「任せて！しっかり届けてくるから。ソーマにもあいつにもね」

大切な相方から武器と意思を受け取り、マルチナとジエーンは空へと飛翔する。

「竹井、私たちも」

「わかっているわ。終わらせるわよ。私たちの力で」

フェルと竹井も続いて上昇した。

緑の魔法使いと白と黒の怪物の剣が透明な青空で何度も音を立てて激突する。

ウロボロスの苛立ちは頂点に達していた。

攻撃がまるで通らないのだ。自身が繰り出す攻撃は軒並みかわされ、逆に向こうからの攻撃は入る一方。

しかも息を切らしているこちらと違ってウィザードは調子を崩すことなく落ち着いていた。

剣を両手ごと頭の上上げるとウィザードに斬りかかる。

するとウィザードは思い切った行動に出た。二つのウィザードソーダガンを更に空中に投げると、空いた両手の平で長剣を挟み込んだ。

「なに！？」

それは扶桑で言うところの真剣白刃取り。ウィザードが坂本や宮藤から聞いて知っていたわけではなく、過去に試した経験もない。

完全なる予備知識なしのぶっつけ本番であったが成功したようだ。

ウロボロスは押し込もうと腕に力を込める。しかしウィザードも負けじと押し返し、剣の位置は両者の中間から大きく動かない。

「いいのか？俺にばかり夢中になって」

ウィザードがそう言っただけでウロボロスが疑問を感じた直後彼の両翼が被弾した。

「おおっ!？」

首を動かして背後を見るとジエーンとフェル、マルチナと竹井が左右に分かれて銃口を向けていた。

翼の傷みが彼女たちの仕業とわかるとウロボロスは怒りの形相を浮かべる。

「いいのかしら？私たちばかり見てて。痛い目見るわよ」

フェルの言葉にウロボロスが元向いていた方に首を戻すと彼の想像していた通り横蹴りが飛び、蹴りをぶつけた張本人はウロボロスが手を離れた瞬間に剣を掴み投げ捨てる。

「俺は最強だ！最強のウロボロスだぞ！それがこんな、こんな奴らに負けるなんてありえねえ！」

自分の方が圧倒的な強さを持っているはずなのに。その強さで追い詰めていたはずなのに。

それがどうして。どうして急に自分の方が追い詰められているのか。

ウロボロスには理解ができなかった。

「お前の言う強さよりも」

「私たちの強さの方が強かった。それだけの話よ」

『チョーイイネ！スペシャル、サイコー！』

フェルの言葉に同調するようにして先ほど手放し落下してきた二つのウィザードソードガンを魔法陣の中に収納したウィザードが締めの一撃に入る。

高速移動・竜巻・放電。仲間たちの持つ三つの魔法を同時に使って

ウロボロスの周囲を高速で旋回し、雷帯びる風の檻を形成する。

逃れる間もなく閉じ込められた風をから抜け出そうと試みるウロボロスだが、武器を失った今の状態では猛烈な勢いで吹き荒れる風と身体の中まで浸透する雷には太刀打ちできない。

風を破ろうと拳を突き出しても、ダメージを覚悟で突撃しても満足に抜けきれず中へと押し返されてしまう。

ウロボロスが足掻いている間にもウイザードは風の檻の頂点に行き着いていて、その位置から急降下して風と雷を纏った蹴りをウロボロスへと突き出してくる。

「まず、いー」

あれを食らったら自分は…己の強さに確固たる自信を持つウロボロスは直感で相手の攻撃の威力の高さを見抜いた。

真っ向から立ち向かう姿勢を見せず逃げることだけをひたすら考えていた。

生まれて初めてのことであった。

(下だ…この風を抜けるにはあそこにしかなない！)

生に飢えた彼の視線が無風の空間を見つけた。

傷付き痛みが治まらない翼を懸命に働かせて必死に生存への希望を求めてウイザードに背を向けた。

しかしウロボロスが目指した無風の安全領域の先には一つの銃口が置かれていた。

「あらどこへいこうってのかしら…逃がさないわよ」

銃口の主、フェルが勝気な笑みを浮かべて引き金を引いた。

弾はウロボロスに直撃し、弱っていた彼の身体を貫通する。

「うがああああ!!?」

その間にもウイザードはもうすぐそこまで迫っていた。

「だああああああ!!」

「俺が、この俺がああああああ!」

竜巻の中で大きな爆発が生まれた。最後の最後まで自身の敗北を受け入れられぬまま怪物は炎の中に散った。

「ふうー」

竜巻が消え始めたのと時を同じくして翼を広げたウイザードがフェルの横で止まる。

「助かったよ。ありがとう」

「いえどういたしまして。そっちなこそ、お疲れ様。帰ってゆっくりシャワーでも浴びましょ」

お互いに感謝と労いの言葉を送り二人は勝利の喜びを分かち合った。

## 第四十三輪 いつかまた…

「え!!? ソーマさん、もう504から離れちゃうんですか!？」

「昨日司令部からお達しがあつてさ。五日以内に荷物をまとめて引き払えって」

ウロボロス撃破から数日経った昼食の席でのこと。

自分の店を台無しにしてくれた敵を自分の代わりに倒してくれたと噂で知ったジュリアが同業者の友人の店で購入し、差し入れられたドーナツを食べながら話をしていた。

色んな話が飛び交う中で、最もルチアナたちを驚かせたのが『ソーマの転属』であつた。

「せっかく仲良くなれたのに」

「連携だつて慣れたところだつたのにね」

マルチナがシナモンドーナツを、フェルがレーズンロールを食べながら突然の知らされた別れを残念がる。

ドツリオも同感の意を口にしながら話題を変える。

「仕方ないわよ司令部が決めたことなら。でもその代わりにうちにメイジになれる人を多く派遣してくれるみたいよ」

「メイジ。それって確かソーマの使つてるのと同じようなベルトを使つて変身する魔法使いのことよね」

「合つてるよ。俺がブリタニアを離れる前はベルトは十個くらいしかなかったけどそこからまた更にベルトを増やしたみたい」

メイジなる者の名はフェルも噂くらいでなら少しだけ聞いたことがある。

ウィザードと同じ原理・道具で変身する魔法使いでウィザードの戦闘データを元に反ウィッチ派思想を持つマロニー一派によつて開発された。

魔力の少ない者でも変身が可能なのが特徴で実際ソーマを隊長とした部隊の変身者は全て潜在的に魔力が乏しいとされる男性ばかりであつた。

「元々ソーマが来ることになつたのも統合戦闘航空団のウィッチと魔



法使いが戦場で上手く共存ができるかっていう試験的な意味合いあつてのことなのよ。つまりこれからのアルダーウィッチーズは本来司令部が今後の主軸として考えていた編成になるってわけ」

「魔法使いとウィッチの混成部隊ですか。それが実現すれば確かに戦いは楽になるかもしれませんがね。戦える人が増えればそれだけ私たちウィッチの負担が減るわけですし」

「それなら大歓迎だが逆の場合も考えられないか？」

竹井も全面的に同意を示したメイジの導入。しかしそこにドミニカが懐疑的な言葉を投げかけた。

「逆？」

「問題が増えるかもしれない、ということだ。極端な話今後そのメイジとやらに後ろから撃たれる、そのようなこともありえないとは言えないだろう」

「それは…どうなの？」

「ドミニカの言うようなことはありえると思う。こんなこと特にフェルたちの前で言いたくないけど軍の中でもウィッチにいい感情を持たない人間はそれなりにいる」

ソーマにはドミニカの懸念をはっきり否定できない根拠があった。

メイジの初陣となったガリアでの戦いがまさにそうだった。

ウィッチを快く思わない人間は残念ながら軍の内部にも一定数おり、マロニーらの一派の中樞はまさにそういった人物で構成されていてウィッチへの反発的な行動を取った。

「もちろんそういう人ばかりがメイジに選ばれるわけじゃないと思う。特に今は上の方も気を遣ってそんなことを起こさないようなメンバーを選別してるんじゃないかな」

ミーナかランド辺りから小耳に挟んだ程度の情報になるがマロニー一派に関与し反ウィッチの思想を持つ軍人の多くが降格や辺境の地へ左遷されるなど何かしらの罰を受けたばかりだという。

その直後に同じような行いをしかねない人物をメイジの変身者を選ぶようなことは連合軍上層部も各国のお偉いさんも自分たちの面子を下げないためにも避けたいところだろう。

「そうね、ドミニカの言うことには私も一理あるわ。けどそれはメイジに限った話でもないんじゃない。私たちが使っている銃や刃物だってそう。結局はその道具や力を扱う人次第。手にした力で大切な何かを守りたいと思ってくれるそんな人がメイジとしてこの基地に来てくれたら私にとって嬉しいことはないわ：ん！これ見た目の割に味がまとまって美味しいわね」

そうまとめたドツリオはストロベリーにチョコフレークの乗ったドーナツを絶賛する。

最後の最後で真面目さを崩す辺り実に彼女らしいが言ってることの内容自体にはフェルたちも納得させられた。

「そうね、それに来てみたら案外ウマが合うってのもあるかもしれないわね。事前の評判が悪かった魔法使いさんと違って結果的には別れるのが寂しいくらいには仲良くなれたし。ね？」

「うっー」  
からかうように言うフェルの横で彼女曰く事前の悪かった魔法使いが無言で背中を曲げて、苦しそうにシナモンドーナツを持っているのは別の手で胸を抑えて背中を曲げる。まるでそこを弾丸で撃たれたように。

大袈裟なおどけた仕草にルチアナたちの口元は自然と綻ぶ。

「これから色々問題も出てくるだろうけどそれ以上にステキなことが起こる。そう期待しておくことにしましょ。今はそれでいいんじゃないかしら」

ドツリオが最後の一口を口に含んでそう締めくくった。

それから数時間後の夜。

ソーマは自室を出て浴場へと足を運んでいた。

ところが男性浴場の入り口にはいつもはない立て札が設置されていてそこには『設備点検中にて使用不可、現時刻は男性は隣の浴場を使用してください』の文字が手書きで書かれていた。

「点検中…ってことは、今はこつちを使えばいいんだよな」

何の疑いも抱かず女性専用の浴場へと入っていく。

その背中が消えたのを見て物陰に身を潜めていたある女は音を立  
てずに誰も見ていないのを確かめると立て札を動かした。

男性浴場の入り口から隣の壁際へと

「これを変えてつと。よし、後は…んっふっふっふ、たんのしみだわ  
〜」

これから何が起こるかを想像して女は愉快的な笑みを浮かべた。

そんな外の様子など知る由もなくソーマは脱衣所で衣服を脱いで  
腰にタオルを巻いてから浴場に足を踏み入れた。

まずシャワーで身を満遍なく清潔にしてそれから湯舟へと身を沈  
めた。

「くあく。この風呂ともうすぐお別れか。少し寂しくなるな。扶桑式  
の凝った風呂なんてあるところそうそうないだろうしな」

ここヴェネツィアの基地では扶桑たけい人が基地の設備に口が利く立場  
で、彼女のこだわりを反映して浴槽が設けられているがこういったと  
ころは希少種。

元いた部隊で関わった扶桑のウィッチ二人から教わったのもあつ  
てかすっかり扶桑の文化に身も心も虜になってしまった身としては、  
多少なりともさみしかつたりする。

「次はどこに行くんだろうな…次のところでもこんな風にやっていけ  
るといいけど」

今後の自分の未来に思いを馳せる。どんな出会いが待っているの  
か、期待と不安を考えながら腕を頭の後ろで組んで天井を見上げる彼  
の耳は次の瞬間奇妙な音を拾いだした。

「皆でお風呂に入ろうだなんてどうしたんですか隊長？」

「これといって深い意味はないわよ。珍しく書類仕事も片付いたから  
久々に皆で入れたらいいなってだけよ」

「その書類仕事ほとんど私がやったんですけど…」

「あ、貴女たち、入る前にちよつと待って。タオル巻いておいた方がい  
いわよ」

「……えっ？」

おかしい。

女子の声、というよりフェルたちの声が聞こえてくる。

一瞬自分の耳がおかしくなったのかと疑ったがそうではなさそうだ。段々と会話の内容が鮮明になってくる。

「うっそだろ。この時間は使っていないはずだよな。なのになんで？なんでこっちくんの？」

次々と浮かび上がってくる疑問を片っ端から口にしながらソーマは浴槽の中で起き上がる。

脳内で描かれてしまった現実になりうるであろう嫌な光景を避けるためにもとにかく今はここを離れなければ、そう思って脱衣所の出入り口へと向かったが今一步遅かった。

彼の手が届く数秒程前に向こう側から扉が開かれフェルたちの顔が見えたからだ。

「あ……」

「はっ？」

ソーマの側もフェルたちの側も両者が自分の目の前にある光景を信じられず、その場で立ち止まって目を見開く。

フェルとマルチナは驚きと怒りの表情でソーマを睨むように見て、ルチアナとジェーンは驚きの中に恥じらいの混ざった赤い顔で自身の身体をタオルと手で隠している。

ポーカーフェイスな印象の強いドミニカでさえも不審と失望の目をソーマへと寄越している。

今まで見たことがないそんな彼女の表情がソーマは一番傷付いた。

「…何してるのあんた。ここ女湯よ」

「まさか私たちの身体を見るために？」

「そんな奴だったとはな。最後の最後で見下げ果てたぞ」

「待って！待って！話、話を聞いてくれ！」

怒りと失望を持ってしまった三人からの非難の嵐にソーマは言葉と手を思いつきり使って否定する。

「ヘンタイの言い訳なんて私たちが耳を貸すと思う？」

「俺が来た時ここは男湯ってことになってたんだよ！」

必死になって弁明する彼の様子を見てフェルたちも落ち着きを取り戻して冷静に質問を投げかける。

疑いの眼差しを維持したままではあったが

「どういうこと？」

「入口に立て札があつてこの時間男湯は点検中だから代わりにこつちの湯を使つてくれつてあつたんだ。それで俺は何の疑いもなくここに」

「私たちが来た時はそんなのどこにもなかつたわよ。なかつたわよね」

「うん。なかつた。絶対なかつた」

「でも、ソーマさんが嘘をついてるようには思えませんし」

「ソーマがヘンタイで私たちの艶姿を見るのが目的だったとしても目的に対してあまりに手段が杜撰すぎるしな。ソーマではない誰かがその立て札を設置してソーマが入った後、私たちが入る前にこつそり立て札を取り除いたといつたところか」

「けれど一体誰が何のためにそんなことをしたんでしょう」

これまでの積み重ねが功を奏してソーマへの誤解はあつさり解け、この状況に至つた原因を突き止めようと言葉を重ねるフェルたち。

彼らの輪から外れ、音を立てないように密に浴場の出入り口へと逃亡を図る者がいた。

「どこに行くんですかドットリオ隊長」

この状況下において明らかに浮いて目立っていたその者の動きを竹井は逃さなかつた。

空間内に広がる温かい空気を裂くように凍てついた声で自分の名前を呼ばれ、逃亡者は背筋が跳ね上がり恐る恐る振り向いた。

「隊長、貴女ですよね。ソーマさんをここに入るよう仕向けたのは」

「さ、さあ？何のことかしら。私にはさっぱり…」

ドットリオはソーマのように弁解を試みるが無駄なあがきだというのは残念なことに気付いていた。

目の前で竹井は表情こそ笑っているが目の奥はちつとも笑ってい

ない。

完全に自分の犯行だと確証を持っているようだ。

そして竹井は更にそれを裏付ける根拠を突き付ける。

「さっぱり？いいえ、そんなことはないはずですよ。私たちが入る前こう言ってましたよね。タオルを巻いておきた方がいいって。あれってソーマさんが中にいるのを知ってたからですよね」

「どうだったかしら…私、言った覚えはないんだけどな」

「言ってた！そっだよ。今考えてみたらおかしいよ。いつもはそんなこと言わないのに」

視線を泳がせながらドツリオはすつとぼけてみせるがマルチナにまで証明されてしまったことで逃げ道を潰された。

「一応私たちへの配慮してくれたってわけね。そこはよかったけど、いやよくはないんだけど。そもそもなんでこんなことを？」

「最後にソーマにちよつとでも記憶に残るようなことをしてあげようかなって。後ソーマの反応面白そうだったし」

「最後のがメインですよねそれ」

「でも嬉しいでしょ。こんなかわいい女の子たちのあられもない恰好なんて見たくても見れるものじゃないわよ。でしょ？そう思わない？ソーマ」

「隊長、反省してないようですね」

反省の色がまるで伺えない享楽主義の塊に竹井が冷ややかな目を突き刺さす。

その目を維持したまま彼女の耳は次の瞬間後ろの方で小さな声で咳かれた言葉も聞き逃さなかった。

「嬉しいか嬉しくないかって言ったら、嬉しいけど…」

「ソーマさん？気のせいかしら。今何か言ってる？」

「いえ！何も！えつと、とにかく本当ごめん！すぐに隣に移動するからほんとごめん！」

不用意な失言を繰り返して竹井の怒りの矛先が向くのを避けるためソーマは駆け足でフェルたちの間を通り抜けて女子風呂を出ようとする。

「危ないですよ走ったら！」

「え？うおわああ!!？」

大急ぎで危なっかしい動作を見てルチアナが警告するが遅かった。水に濡れた床に足を取られたソーマは顔から地面にダイブする。

咄嗟に鼻と口を手でカバーして、腰には元からタオルを巻いていたためにソーマ自身にとってもルチアナたちにとっても悲劇が起きなかった。

それは不幸中の幸いといえよう。

しかしほぼ素っ裸の男が複数人の女子が見ている前でだいぶ悲惨なこけ方をしたのは情けないと思われるのは否めない。

「……じゃあ、また明日」

本人も自覚はあったようで恥じらいを隠すようにすぐさま起き上って顔を見せずに男湯の方へそそくさと消えていく。

「同情するわね。ある意味」

「なかなか可哀想だったね」

一方的に振り回された挙句すつ転ぶ顛末を迎えてしまった彼のいた場所へフェルとマルチナが悲哀の混じった眩きを残す。

「もつたいない。もう少しいればよかったのに」

「隊長。後でお話がありますので覚悟しておいてくださいね。今日は少し長いですよ」

ドツリオは尚も自らの行いを悔いているとは思えない発言をする。

当然そんな彼女を竹井が気にも留めないはずはなく、お灸を据える腹積もりを打ち明ける。

「せ、正座は勘弁して。あれ足痺れてしんどいのよ」

「自分の蒔いた種ですよね？もちろんこうなるってわかってやってやったことですよね？なら何も問題ないじゃないですか」

いつにも増して恐ろしさが増している。竹井の顔を見て、声を聞いてドツリオは震えた。

ソーマが相手だったとはいえ異性にほとんど裸に近い状態を見られたのが相当堪えたのだろう。

フェルたちもそんな竹井の思いは充分理解できた。

「これが扶桑のコトワザにある自業自得ってやつかしら。まあ仕方ないわよね。私たちもさすがに今回は庇いきれないわ。さ、隊長は放っておいて温かいお湯に入りましょ」

「そだねー」

「こんな姿でここに突っ立っていても風邪をひくだけだからな。悪く思わないでくれ」

「す、すみませんドツリオ隊長。そういうわけですので、頑張ってください」

「私も失礼します。ごめんなさい！」

だからこそ止めるのは野暮と思いドツリオを見捨てる道を選んだ。それは他の者も同じであった。

そもそもフェルも言っていたがこれはドツリオの自業自得なのだ。

ある者はすんなり割り切って、ある者はせめてもの謝意を送ってから湯舟へと進んでいく。

「あ、えつと…」

脱衣所に残ったのは自分と竹井の二人のみ。

見捨てられる形になったドツリオは恐る恐る竹井の顔色を伺うと尚も彼女は安心できない笑みを浮かべたままであった。

「お風呂には入っていいですよ。私のお話は上がった後の方がゆったりできますから」

「は、はい…でもできるだけお手柔らかにお願いします」

「そんなことが言える立場だと思えますか？」

「いえ…すみません」

ああ、どうか温かいお湯が竹井の怒りを鎮めて何とか上手い事収まってくれないだろうか。

そんな可能性の低い、淡い希望が現実になることをドツリオは切望した。

当然そんな奇跡は起こらなかったが

☆



同じ日の夜。

ヴェネツィアから少し離れたロマーニヤの町の空は月も星も厚い雲に覆われ天から地上を照らす光は一つたりともなかった。

ひんやりと冷たい風吹く街の無人の喫茶店の席でまた女性が一人で座りティーカップに入った紅茶の味と香りを楽しんでいた。

背筋をピンと伸ばして両足を揃えて紅茶を飲む姿は貴族顔負けの気品と美しさに溢れている。

「やられちゃったのねウロボロス。あれだけ息巻いていたのに残念ね……でも大丈夫、安心して。貴方の仇は取ってあげるわ。私の心を満たすついでにね」

仲間の死を想って口元に笑みを作る。

彼女が手には新聞がある記事の面で開かれた状態にあった。その記事に載っている写真にいたのは第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズの十一人のウィッチとウィザードであるソーマ。

そこにある顔を見て女の笑みはより深みを増した。

第三章 ストライクウィッチーズ2編 1945  
第四十四輪 人類、進展の兆し

扶桑の長野県の山中のとある遺跡。

数週間前に発生した地震により崩れた山肌の中から遺跡らしき建造物が発見されたという知らせを受けて、上層部の命により考古学者数名を中心に結成された扶桑軍技術部の研究チームが調査に乗り出していた。

遺跡の中はこの上なく暗く静かで慎重に辺りを見ながら歩を進める自分たちの足音が反響する音が鮮明に響き渡る。

「どのくらい前にできた遺跡なんでしょうね。古い遺跡にしては全体的にかなり形保つてませんか？」

研究チームの中で最も若く経験の浅い研究員が壁に興味を示す。

白髪の研究所所長は奥へと進みながら、それでいて手がかりを逃さぬように壁の細部にまで注目して周囲を見ながら言葉を返す。

「今の段階では何も言えんよ。ただざっと見た限りではあるが数百年程前、魔女がありふれていたとされる太古の時代にまで遡るかもしれない」

「もしかしたらネウロイ打倒のヒントがあるかもしれないね。運が良ければ魔法石も出てくるかも」

「その辺りも含めて確かめるのが我々の調査だ。何かあるかわからないから注意は常にしておいてくれ」

何が出てくるのか。期待と不安を胸に抱えながら遺跡の中を進み続けると左右に二つずつ並ぶ石柱の奥に棺が一つ置かれている空間と遭遇した。

「棺でしようかねこれ。何が入っているんでしょうか」

「不用心に開けようとするな。侵入者への罠として呪いの類が仕込まれているかもしれんぞ」

「の、呪い!?!」

呪いと聞いて恐れた若い軍人が素早く手を引く。

いちいち大袈裟など研究所所長はそれを尻目に棺の側面に彫られている奇妙な模様を目を近付ける。

「古代文字がある…『力を求める者は力に選ばれることで初めて力を手にするに値する。力に選ばれた者が願い叶わず、その身を食われぬことをここに望む』か」

「どういう、意味ですかね？」

「やっぱり呪いかもねー。この棺を開けたお前を生氣を食ってやるー！とか」

女性研究員が背後から新人研究員の肩を掴んで耳元で大きな声を出して脅かす。

「うわああ!?もう、怖がらせないでくださいよ。そんなことありませんよね。ねー!」

「ないとは言いい切れんな」

「そんなあ…」

反応を面白がっていちいち怖がらせる女性研究員と新人研究員の仲睦まじいやり取りはさておいて研究所所長は文面の意味について考える。

「力にも意志があるような言い回しだな。こんな警告文を残す程の力ということなのか…こうしていても埒が明かない。一か八か、開けて確かめるしかなさそうだな」

危険を覚悟で年配研究員が棺の蓋に手を添える。

鬼が出るか、仏が出るか。

棺の蓋を押して数センチばかり空気が棺の中を通る隙間が生まれる。

「ぎゃあああああ!!出たああああ!!」

この上なく最高に情けない悲鳴が狭い遺跡内に反響する。

若い研究員は脱兎のごとき速さで女性研究員の衣服から出た生足にしがみつく。

「怖がりすぎ」

まだ何も出て来ていない段階で絶叫を上げた若い研究員を女性研究員が白い目で見る。

もつとも年配の研究者も彼ほどではないとはいえ不安はあったので窘めることはなく、蓋を押す力を強め蓋は完全に取り除かれた。

地響きとともに蓋が地面に触れる。

「あ、あれ？何も出てきませんね」

「残念ね。呪いちよつと期待してたのに」

安堵と落胆、相反する二つの感情を二人の研究者が声に出す。

「これはー」

中から呪いの邪気は溢れてこなかった。

代わりにそこにあつたのは閉じた扉を模したような黒と黄金の二色のベルトが一つと色とりどりの複数の指輪であつた。

☆

連合軍上層部が一同に会する会議室には深刻な空気が蔓延していた。

扶桑・リベリオン・カールスラントなどの世界各国から出席している将官が皆一様に表情を険しくさせている。

「ネウロイだけでも手を焼いている有様だというのに、更に人型の怪物とは：おまけに人語を理解して話すなどと」

カールスラントの年老いた将官が頭を抱え、悩まし気な声色で咳く。

彼を始めとした将官らの手元には同じ内容の資料があつた。

その内容というのは世界初のウィザードことソーマ・スペランツァ中尉と第504統合戦闘航空団アルダーウィッチーズがまとめ上げ提出したネウロイとは別の怪物ウロボロスの情報。

「でっち上げた作り話ではないかね。この報告書を提出してきたのはマロニーの子飼いの犬だったウィザードだろう？とてもではないが信用するに値するか疑わしい情報元だな」

「報告書の内容は504統合戦闘航空団隊長であるドツリオ中佐も書いている。加えて副隊長である扶桑海軍の竹井大尉も両者の報告書にサインをしている。そして何よりヴェネツィアの街が荒らされ我

がロマーニャ軍から多数の戦死者が出ている事実がある。貴方がでっち上げだという怪物の手によって」

揶揄するような言葉を放つリベリオンの将官に苛立ちを隠すよう務めながらロマーニャの将官が平坦な口調で返す。

仲良しこよしには程遠いやり取りはいつもと変わらないことではあるが今日は一段と酷い。

彼らが理性という人間の英知を持っていなければ手足も交えた争いなんていたとしても無理のない物々しい空気で空間が一杯になっている。

この空気を断ち切るためにカールスラント将官が咳払いをしてから将官一同に向けて言葉をかける。

「怪物の存在がネウロイの同種のものであるかの真偽は現段階では答えを出せない。だが今確実に言えることは我々人類もこのままではいられないということだ。人型のネウロイと謎の怪物、これら新たな脅威に対抗するためには各国のウィッチたちによる統合戦闘航空団の普及とメイジのベルトの量産による軍事力の強化が必要不可欠。そしてそのためにも我々人類は国という枠を越えて一丸となって化け共どもの根絶を目指さなければならない」

お世辞にも今日ここに集っている全員が全員と仲良くしているとはいない。だが人類が存亡の危機に瀕している以上は表面上は仲良くする努力を見せ、どんなに憎たらしく嫌いな相手であっても手を取らなければならない。

憎たらしい相手を叩き潰すのはネウロイの後いくらだってできるのだから。

☆

ヴェネツィア南部沿岸の小島にはある年老いたウィッチが居を構えている。その名はアンナ・フェラーラ。

かつては空軍大尉としてヴェネツィア軍に席を置き、退役後も指導役という立場で長く軍に貢献した素晴らしいウィッチだ。

そんな彼女の家を一人の男が訪れていた。

黒いコートに身を包み、片手にジュラルミンケースを持った彼は家の扉を四度、一定の間隔を開けてノックすると扉の向こう側からの返事を待たずに中へと入る。

椅子に座っていたアンナは男の顔を見ると顔色一つ変えることなく慣れた様子で対応する。

「またかい」

「そうだ。また仕事を頼みたい」

そう言つて男がジュラルミンケースのロックを外して中身を見せる。

そこには部屋の照明の光を反射して輝く美しい青色の宝石が収まっていた。

宝石の大きさは成人男性の握り拳くらいはある。

「この前の緑のと同じような奴だね」

「最低でも前と同じように変身用と攻撃用の二つは欲しいところだ」  
「私に言われても困るね。そういう注文は石にしてくれ。私は石の声を聞いているだけ。ただ石がなりたい形になるように要望に応えているだけさ」

アンナは男からケースを受け取り机の上に置くと、男ではなく彼の持つて来た魔法石に視線を注ぐ。

「本当にウィッチの役に立つんだろうね」

「もちろん。この魔法石はウィザードの魔力を高め強くする。彼が強くなることに伴いウィッチたちの戦いも楽になる。そしてこの魔法石を指輪として形して力を発揮させることが出来るのはこの世に貴女を置いて他にはいない。貴女もまたウィッチと人類にとっての希望だ。これまでの貴女の協力には大変感謝している」

「…できるだけすぐに仕上げるようにはするよ。早いに越したことはないだろう?」

「すまない。よろしく頼む」

渡す物を渡し終えた男は用は済んだとばかりに早々と家を出て行く。

「こんな年老いた女でも若い子らの役に立ってるってのはいいけどねえ…どうにも」

まだ自分にもできることがあるというのは素直に嬉しい。

しかしアンナは男を信用できずにいる。

アンナと男の出会いが突然だった。退屈な隠居生活を送る中で趣味の一環として魔力を秘めた石『魔法石』を集めてはアクセサリを製作していたアンナの元に男は連絡もなしに訪れ、持って来た四色の魔法石で指輪を作るように求めてきた。

軍人であることは明かしても名前すらも教えない、その上初めて会う男の要求を叶えてやる必要はないと思いいアンナは最初は断った。

しかし

『人類を、そしてウィッチを守るために必要な物だ』

その言葉にアンナの関心は一気に引き寄せられた。ウィッチのあがりとされる年齢を越えても魔力は残っていたが、前線に出るほどの気力と体力は肉体にはなく自分の知識と経験も後進たちには粗方伝えきった。

そんな自分でもまだウィッチの助けになることができるのなら、という考えの元彼女は承諾しいつも男が持つてくる魔法石から指輪を作ってきた。

これまで要した時間は半年以上、完成させた指輪は数十にも及ぶ。「どうにも好かないんだよねえあの男は。聞こえのいい言葉を並べる割にそこに気持ちもこもってる気がしない…」

自分の作った指輪はウィザードやメイジの力に使われ、その力が人類に多大なる利益をもたらしていることはアンナも知っている。

特にウィザードとウィッチの十二人で成し遂げたガリア解放はこんな自分でも貢献できたのだとても喜んだものだ。

だから男の言い分が間違っているとは思えない。でもどこか好感は持てないというところが本音だ。

「自分がひねくれているだけなのか、年寄りの勘違いであることを祈りたいねえ…」

そう言葉を零すとアンナはケースから魔法石を取り出して作業の

準備に取りかかった。



## 第四十五輪 空に集う運命

春。温かな季節。

扶桑では桜の華が満開になり、出会いと別れの訪れる時期だ。

「なんか変な感じだなあ。学校に行くのこれで最後なのに寂しさよりもドキドキの方が強いよ」

「卒業生代表だもん。無理ないよ」

かつて第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズとして戦ったメンバーの一人。宮藤芳佳もまさにその時期を実感していた。

彼女と美千子が歩いているのは横須賀の学校への通学路。今日卒業を迎えることになる彼女たちは色んな思いを抱いて今後そう通る機会のないであろう歩き慣れた道を征く。

「芳佳ちゃんはさ、卒業した後どうするの？上の学校には行かないの？」

「実家の診療所を継ぐつもりだよ。早くお医者さんになりたいの」

「そっか…」

その答えを聞いて美千子は寂し気な表情をする。

自分は士官学校に入学する。それは宮藤とは異なる進路だ。

夢を追う宮藤は好きだけれども彼女ともう同じ道を歩けないと思うと…

「すみません。右通りまーす!」

「え?—うわあ!」

目的地まであと少し、という地点で憂鬱な思いを抱いていた美千子、そして宮藤は己の聴覚が背中からの声を感じ取ったのに反応して振り向く。

それからほどなくして紺色の服を着た男が彼女の右側を通過して速度を落とすことなく駆け抜けていった。

「すみません!ありがとうございます!」

振り向かず走りながら感謝を伝える。

あまりにも唐突であつたという間の出来事であつたがために宮藤の目は戸惑いを保ったまま小さくなっていく男の後ろ姿を見つめてい

た。

「びつくりした…」

「あの服、扶桑の軍人さんだね。芳佳ちゃんの知ってる人？」

軍事通の美千子は僅かな時間見ただけで男の服装から身分を特定してみせる。

「どうなんだろう、顔よく見えなかったから。でも扶桑の軍人さんに知り合いの人はいないから顔ちゃんと見れてもたぶん知らないなあ」

宮藤は濃紺の服と黒色の髪をしていることくらいしかわからなかったが軍人にしては変わってるなと思った。

声の印象は年齢は自分とさほど変わらない明るい感じ。

身近な人物に例えるなら坂本をそのまま男に落とし込んだようなそんな力強さが表れていたような気がする。

☆

「この辺り、だよな」

サントロン街中の広場。緑の私服ジャケットを着たブラウンの短髪の青年がある紙を手にして立っていた。

左手の中指では緑色の指輪が太陽の光を受けて輝きを放っている。

彼の名はソーマ・スペランツァ。ロマーニヤ空軍中尉にして第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズのメンバーの一人にして世界初の魔法使いウィザードとして世界的に名の知れた男だ。

そんな彼は今何をしているのかというところ

「ガランド中將から渡されたけどなんなんだ？ 服装も場所も指定しておきながらそれらしいのはいないし」

ソーマの手に行っている紙。

それを受け取るようになった出来事を説明するには数時間前に時間に戻すことになる。

『何ですかこれ？』

自身の上司の一人であるアドルフイーネ・ガランド中將に呼び出さ

れたソーマは彼女の部屋で雑談をした後、一枚の紙を渡された。

『見ての通りの手紙だが。君の愛人だという者から預かった』

『愛人？そんなのいせんけど』

『ほう、これは意外だな。君がそんな薄情な男だとは思わなかった。今の言葉をこの手紙の彼女が聞いたら泣いて悲しむぞ』

『いやだからそもそも愛人なんていませんって』

『心配しなくてもこの後の時間は空けてある。今から準備でもして愛人の彼女への謝罪の言葉とロマンティックな詩を考えておくといい。女性に愛を囁くのは詩が有効的だといつかの本で見たことがある』

（あ、聞いてないなこの人…この感じ何か企んでるのか？）

ここでようやくガランドの態度にソーマは違和感を持つ。

会話をしているようでごちらの言い分に一切耳を貸そうとしない今の彼女はあまりにも普段の彼女と違っていたからだ。

『わかりましたよ。行ってきますよ。愛人じゃありませんけどね』

『ああ、できるだけ人目を避けて気を付けていくといい。君も痴話喧嘩を起こした時そんな醜態を軍の関係者に見られたくないだろう？』（だから愛人なんていない、ああもう。いいや）

否定するのも面倒だしそもそも言っても訂正しないだろうと諦めてソーマは部屋を出た。

そういつたことがあってソーマは紙に記されていた時間通りに指定の場にいるわけなのだがガランドの言うところの愛人と思われる人物が近くにやって来る気配すらない。

「遊ばれてるのかな俺。ガランド中将に限ってないだろうけど、こんなに待っても来ないのはな…」

一向に待ち人來たらずな状況に不安になるが、ついこの間まで自分が身を置いていた統合戦闘航空団の隊長とガランドを脳内で比較してみたソーマはガランドを信じてもう少しだけ待つてみることにした。

その彼の様子を歩道脇に停めた車内の中で眺める者がいた。

困った顔と離れようか迷っている動作が愛らしく思える。

もう少しその姿を堪能したい意地悪な気持ちもあつたがさすがに

これ以上このままにしておくのも悪いと思い、車を出て彼の元へと歩み寄る。

「すみません」

「はい」

かけられた声に反応してソーマが視線を寄越すとそこにはサンングラスをした女性がいた。

紫と白を合わせた衣装にベレー帽という組み合わせの服装で、着衣越しながらも優れたスタイルの良さがしつかりと伝わる。腰の辺りまで届いている流れるような赤い髪も魅力的だ。

誇張抜きに言つて美人だとソーマは評価した。

しかしそんな美人が自分に一体何の用なのかと疑問を口にしようとした時その答えを向こうから提示してきた

「この街に来るの初めてで展望台に行きたいんですけどそこまで案内してくれませんか？」

「案内つて言われてもな…俺もここは詳しい方じゃないしそれに俺今人を待つてる予定ではあるんだよね」

「知ってます。愛人さんですよ？なら大丈夫です。その人ならさつき帰つたみたいですから」

「なんでそんなこと知つて…あ」

ガランドと同じ言葉を発した女性に詳しく聞き返そうとしたソーマはふとあることに気付く。

(この声、髪の色、目線の高さ……ん？あつれ?)

見覚えのある赤い髪と身長、よく聞いた声。改めて女性の特徴を確認してソーマは記憶の中にある人物を該当する。

「もしかしてミーくんむっ!？」

その人物の名前を出そうとする行為を女性は人差し指を彼の口に当てて止めた。

驚いて目を丸くするソーマに対して女性「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐はサンングラスの奥で温かな眼差しを向け、笑みを浮かべていた。

「ダメよそれは。こうまでした意味がなくなっちゃう」

ソーマは目を丸くしたまま無言で頷く。

ミーナは指をそつと優しく離し、彼からの言葉を待つ。

「いいよ。俺もさつきまで会う予定だった人が来れなくなって暇になったところだから」

「そうですね、ありがとうございます。声をかけたのが貴方みたいなの優しい人で良かったです」

両手を合わせて喜ぶミーナの姿にソーマはうつかり吹きだして笑いそうになる。

(仕上がってるなあ)

などと思いつながらミーナの後に続いて彼女の乗って来た車の運転席に乗り込む。

ミーナも助手席に乗りお互いにシートベルトを装着したところで車を発進させる。

「で、どこまで行けばいいですか？お嬢さん」

「そうですね。さつき言ってた展望台までお願いしようかしら。そこなら今の時間人もいないでしょうし。次のところ右に曲がって」

「了解」

助手席からの指示に従ってソーマは車を運転させる。

普段はバイクに乗ることがほとんどで車の運転など片手で数える程しかない彼にとつて少々苦戦を強いられるが、時間が経つにつれてコツを掴んだのか危なげなく街道を走っている。

「ありがとう、話合わせてくれて。それとごめんなさい。急に呼び出したりなんてして」

「驚いたよ。中佐が来るともそんな恰好で来るとも思ってたし。さ。なんであんなことを？会うなら基地の中でも良かったのに」

「そうしたかったところだけどあまり他の人に聞かれない話だからこうしてわざわざ変装までしてきたのよ」

「…あんまりいい話じゃなさそうだな」

人目を忍んで変装までしてしなければならない話と聞いてソーマは表情を曇らせる。

内容が気になりながらも車を展望台に到着させ、駐車スペースに車

を停めてミーナからのアクションを待つ。

「降りる？」

「大丈夫。このままでいいわ」

そう言うともミーナは神妙な顔つきになる。その表情だけでソーマはこれから彼女の口から出る言葉が只ならぬものであると直感で感じ取った。

「今から言う話は落ち着いて聞いて欲しいの…貴方にはあまりにシヨックが大きいと思うから」

「…わかった」

「ヴェネツィアが陥落したわ」

— ついこの間まで自分がいた場所が壊滅？

前置きの言葉からして碌な情報ではないと覚悟していたが、告げられた衝撃の大きさにソーマの全身に動揺が走る。

目に見えてわかる程冷静さを欠いた彼は声を荒げ、身を乗り出してミーナに詰め寄る。

「なんで！あそこにはフェルたちが、504がいる！メイジだって…まさか—」

全滅。嫌な可能性がソーマの頭を過ぎるがそれはミーナによって即座に打ち消された。

「落ち着いて。大丈夫よ、被害は決して軽いものでも504部隊は全員無事よ」

「そっか…よかった。皆生きてるんだな…ごめん、声荒げたりして」

「この間までいた場所だもの。そうなるのも無理もないわ」

「そう言ってくれて助かるよ。ああ…でも本当によかった」

ソーマは大きく安堵の息を吐く。

彼の心が落ち着いたのを待ってからミーナは更なる情報を伝える。

「トラヤヌス作戦については聞いたことがある？以前の私たちが見た人型ネウロイの出現を受けて司令部がネウロイとのコミュニケーションを取ろうとしたの。この作戦が成功すれば彼らとの平和的解決への道を拓けるはずだった」

「でも失敗した？」

「報告書によれば突然ヴェネツィア上空に巨大なネウロイの巣が現れて人型ネウロイと元々あつた巣を破壊して新たにヴェネツィアを占領したみたいなの」

「訳が分からないな。ネウロイがネウロイを」

「私も同感。私たちがガリアを解放してからこんなことばかり続ける気がする。今回のネウロイの巣も、貴方が戦った謎の怪物も」

ソーマとウロボロスの初戦の時にもミーナは全く同じようなことを独り言で言った。

ガリア解放後、ネウロイとは異なる敵が現れその後にはネウロイがそれまで例のなかった異質な行動を取った。

「そう、その怪物のことをソーマさんに直接聞きたかったの。報告書に書いたこと以外に何か思い出したこととかない？」

「いや報告書に書いた以上のことはなにもないよ。隠してることもない」

「そう…」

上層部に言えない事実があるのかと思ひ聞いて見たがアテが外れたようだ。

しかしだからと言ってミーナが落胆することなく、ソーマも彼女の意図に気付いていたからその反応に引つ掛かりを覚えることなくスラスラと会話を続ける。

「どうするんだ？上の方は、っていうか中佐はもう何か手を考えてあるんだろ？だから俺を呼び出した」

「501を、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズを再結成するわ」

「そうか…また皆と」

不謹慎ながらソーマの中には嬉しさがあつた。

またあの十一人の輪の中に入れる。また皆と会って共に同じ時を過ごすことができることに喜びを感じていた。

「でも正確に言う和前とはちよつとだけ違う501になるかも」

「違う？あ、そっか。宮藤か」

「宮藤さんもだけど美緒、坂本少佐がね。新しく加えたい人がいるっ

て言うのよ。まだ正式に加入するとまではいかない段階だけれども統合戦闘航空団のメンバーに入るには十分な素質があるはずだって。今日貴方を呼んだのは再結成前に扶桑に行つてその人を見てもらうと思つて」

「なんで俺が？そんな権限ないぞ」

ソーマが首を傾げながら言う。

「その人がちよつと変わつてるといふか特殊みたいでね。貴方じゃないといけないつて言うのよ。まあとにかく一度扶桑に行つてみてもらえる？手続きとかは私とガランド中将の方で済ませておくから」

「あ、ああ」

—自分じゃないといけないこととは一体？

その疑問はミーナとその日別れてからしばらくの時間彼の中に残り続けた。

☆

横須賀基地内の海上に着水した飛行艇。

今から欧州ロマーニヤの救援に向かう飛行艇の搭乗口の前で坂本美緒は土方圭助を伴つて立っていた。

「遅いですね彼」

「困つた奴だ。こんなことでは先がおもいやられる」

土方は心配そうな顔で坂本は言葉の割にはいつもと変わらぬ凛々しい顔である人物の到着を待つていた。

「坂本少佐、宮藤さんのことは本当によかつたんですか？彼女はガリア解放を成し遂げた人物です。一緒に来てもらうべきであつたように思います」

「ああでもしなかつたらあいつは意地でも我々と共に来ようとする。あいつはもう戦いに身を投じるべきではない」

「遅くなりましたすみません！」

そんなやり取りを交わしているとようやく待ちかねていた人物が手荷物を持つて駆けこんでくる。



黒色の髪を逆立てた坂本よりも幼さの目立つ顔立ちの少年は彼女の前で止まるなり荒い息を吐いて呼吸を整える。

「遅いぞ！」

「すみません坂本姐さん！準備に時間かかりました！」

「まあいい。準備が済んだのだろうか？ならば機体に乗れ服部幸助軍曹！」

「はい！」

上官に元気よく応じた少年。その少年は宮藤と美千子がすれ違った軍人と同一人物であった。

## 第四十六輪 扶桑の若き野獣

宮藤芳佳は今飛行艇の機内にいた。

発端となったのは諏訪天城という扶桑の新米ウィッチが運んできた父―宮藤博士から届いた手紙。死んだはずの父から何故手紙が届いたのか、その詳しい情報を坂本から聞くために訪れた横須賀基地の通信指令室にて偶然にも聞いてしまった。

通信機械越しに聞いたヴェネツィアの壊滅の報と親友リネット・ビショップの緊迫した声を。

大切な友達の危機。すぐにでも駆けつけたい一心で坂本の説得を攻略し、彼女の許しを得てロマーニャに向かう飛行艇に同乗しているのだが

「あの…どうかしましたか？」

道中ずつと向かいの席から注がれる眼差しが酷く気になって仕方がなかった。

眼差しを送っているのは濃い青色の髪を逆立てた少年、服装からして扶桑軍人であるのには間違いないのだが一般的な扶桑軍人と違って自分を見る目が明らかに違う。

その目の意味がずつとずつと気になっていた宮藤はここに来てようやく言葉に出して訊ねてみることに成功した。

「宮藤さん…俺、俺ずつと宮藤さんに会いたって思ってたんです！嘘じゃないです！」

「は、はい…ありがとうございます？」

興奮たつぷりな声と今にも上半身をこちらに突き出してきそうな強烈な勢いに圧され、どう反応すればよいのやらと対応に苦しむ宮藤。

彼女に代わって坂本が少年へ落ち着くよう呼びかける。

「宮藤を困らせるんじゃない服部」

「あ…ごめんなさい。つい嬉しくて」

服部と坂本に呼ばれた少年は照れくさそうにして後頭部を搔く。

「迷惑をかけたな宮藤。しかし許してやってくれないか。服部はお前

に憧れているんだ」

「私に？」

「そうだ。もつと言うなら501にだな。だろ？」

「はい！皆さんの話を坂本さんから聞いてから俺ずっとずっと皆さんみたいになりたいと思つて訓練してるんです！」

服部の声に再び熱量がこもる。それだけ自分のことを思つてくれているというのは宮藤にとつては嬉しいものであるが、戸惑う気持ちもある。むしろそちらの方が大きい。

落ち着けと言つた側から興奮がぶり返した服部に呆れつつも坂本は宮藤に彼を紹介する。

「まだちゃんとお前に紹介していなかったな宮藤。こいつは服部幸助。扶桑海軍兵学校の生徒で私の教え子の一人だ。そして今度から501に加入することになる」

「坂本さんのお弟子さん？」

「よろしくお願いします！宮藤先輩！」

「はい…先輩？」

先輩。人生で一度足りとも呼ばれたことのない呼ばれ方に宮藤は益々混乱を加速させる。

悪い人ではないのはもうとつくにわかつてはいるのだがなんとなくかこう…圧が強い。

そんな感想を抱いたまま宮藤は別の質問を坂本にする。

「501に入るってことは貴方もメイジってことなんですか？」

「いやこいつの場合少し違ってな。魔法使いではあるんだが—」

宮藤に坂本が説明しようとしたところで機体全体を大きな音と振動が襲う。

「何事だ！」

「ネウロイです！前方に大型のネウロイが！」

「なんだと!？」

操縦桿を握る扶桑軍人からの報告を聞き坂本は操縦席へと駆ける。

鏡面越しの空に大きな黒色、大型のネウロイが進路を塞ぐような形で近づいて来る。

「ロマーニヤまでもう少しというところで、我々の合流を阻もうというのか」

「坂本姐さん！俺に行かせてください！」

この危機に真つ先に進言したのが服部幸助。声量と言葉と表情から彼は戦う気満々だというのは坂本には彼の顔を見るまでもなくわかっていった。

「ダメだ。お前に実戦はまだ早すぎる」

「でも姐さんに無理はさせられませんよ！」

坂本のウィッチとしての寿命が近づいているのは服部にも知っている。だからこそ今の坂本をなるべく戦わせたくなかった。

「私のストライカーユニットは？」

「さっきの衝撃で動作に支障が…今すぐに出撃は無理です」

「……やむを得んか」

坂本が出撃できないとなればこの場で戦える軍人は唯一人。

その事実を認めざるを得なかった坂本は自らの私物を入れた袋から一つのベルトといくつかの指輪を取り出し服部に手渡す。

「服部出撃だ。ただし訓練通りにやれ、絶対に無茶な真似はするな」

「はいー」

正式な許可を貰った服部は指輪の一つを左の中指に嵌めベルトを勢いよく腰に叩き付けるように置く。

『ドライバーセット！』

すると自動的に腰に合わせて巻き付いたベルトから出た音声が高らかに動作の完了を告げる。

服部は腰を落としながら両手を大きく動かす。

「変く身っー」

『オープン、L・I・O・N！ライオン！』

「おりゃー！」

指輪をベルトの外側の空白部分に挿入し。両腕を腰の辺りで左右に広げる。

ベルトから黄金の魔法陣が飛び出しこれまた自動的に服部の方へと接近し、彼を別の姿へと変える。

「金の魔法使い…」

宮藤の視界に現れたのは黄金と黒の体。全体的に獅子を思わせる見た目で目は少々可愛らしさのある丸つとした緑色、突き出た左の肩には獅子の顔のような模様が刻まれている。

宮藤が見たことのない魔法使いが服部のいた場所に立っていた。

「よっしやー！」

左の掌に右の拳を打ち付け音を鳴らした服部、いや新たな魔法使いに坂本が扶桑式の銃を手に近付く。

「何度も言うようだが無茶はするな。敵を倒すことも大事ではあるが何よりもまず自分が生きること優先するんだ。私もストライカーの準備が終わり次第すぐに行く。それまではなんとか頼んだぞ」

「了解っすー！」

扶桑式の銃を肩にかけ、真横に発生させた金の魔法陣からサーベルを手に取る。

そこから更に赤い鳥の絵の指輪をベルトに突き刺し獅子の肩ではない別の肩に鳥の顔と赤いマントを装着する。

『ファルコー・ゴー！ファ、ファ、ファ、ファルコー！』

黄金の魔法使いは搭乗口から飛び降り、赤い鳥のマントの力で空を自在に飛び回りネウロイへと向かっていく。

その軌跡を見守る宮藤は彼について坂本に訊ねる。

「坂本さん。服部さんのあれってメイジ、じゃありませんよね？」

「あのベルトと指輪は扶桑の技術部が古代遺跡から発見したもので男女問わず数多くの士官や訓練生の中で唯一服部だけがあのベルトを使って変身できた。扶桑軍ではその変身した姿が獣に酷似していることから『ビースト』と名付けられた新たな魔法使い」

「ビースト…」

宮藤は視線を戻す。

彼女の視線の先にはリベリオンの言葉で『野獣』を意味するその名に恥じぬように勇猛果敢に攻めようとしていた。

機体を降りて姿が露わになった瞬間から集中的に放たれてる死の熱線を服部―否魔法使いビーストは危なっかしい大きな動きでかわ

していく。

「おつとつと！へへっ、最初っから全力で行かせてもらおうぜ！」

『ファイブ！ファルコ、セイバーストライク！』

手にしたサーベルのダイス部分を回してあるタイミングでファルコリングを突っ込んでダイスを止める。

ダイス部分に表示されている数字は五。

「よっしゃー！いい数字だ。こいつを食らいな！」

出てきた数字にガッツポーズで喜ぶビーストはサーベルをネウロイ目掛けて振るうと剣先から赤い鳥が五羽飛び出し、ネウロイに各方向から衝突し被弾箇所から装甲の破片が散る。

「当たったー！どんなもんだー！」

「止まるな、避ける服部！」

「えっ？うおおおお！」

攻撃の命中に喜んでいたビーストの耳に焦燥を含んだ坂本の声が飛ぶ。

ネウロイの赤色部よりビームが放たれ目にしたビーストは慌てて上に逃れ寸でのところでの回避に成功する。

坂本はホッと息を吐き安堵する。

「馬鹿者め、攻撃が決まったからといって油断するな訓練の時から何度も、私のストライカーはまだか！」

「まだです！もう少し！」

「急げ！あの調子ではそう持たない！」

実戦の経験のない訓練生であることはわかかっていてもあまりにも危なっかしくて見ているこっちまでひやひやして居ても立つても居られない。

現に今もネウロイの連続砲火にさらされているビーストはハチャメチャな動きでなんとか辛うじて直撃を免れている有様だ。

そんな時であった。坂本的心情を見て取った宮藤が進言してきたのは

「私に行かせてください！坂本さんの代わりにはなれませんがこのまま見ているだけなんてできません！」

「宮藤……すまない。私の代わりにあいつのことを頼む」

「わかりました」

坂本の言葉に頷いて宮藤は自分のストライカーユニット『零式』に足を通し、扶桑式の銃を取る。

こうして銃を持つことは未だ慣れないのが我ながら情けなく思うが、人を助けるために必要とあらばそれを扱うことに抵抗はない。

「宮藤芳佳、発進しますー!」

ガリアでの戦いから半年程の時を経て宮藤芳佳は再び空に羽ばたいた。

苦戦し遠距離からの射撃でなんとか反撃を試みているビーストの元にネウロイへの射撃をしながら降下する。

「大丈夫ですか服部さん!」

「宮藤さん!来てくれたんですか!ありがとうございます!」

「私も一緒に戦います。ネウロイの攻撃は私が防ぎますから服部さんは私の後ろから攻撃を」

「はい!」

戦闘経験の差から珍しく宮藤が先導する側に回ってネウロイへと仕掛ける。

死の熱線を宮藤が自慢の強力なシールドで防ぎながら距離を詰め彼女の後ろからビーストが射撃を行うが彼の銃弾は黒い装甲に少し傷を付ける程度に終わってしまう。

「全然効いてねえ。やっぱり俺はこれしかねえか!」

『ツー!ファルコ、セイバーストライク!』

使う武器はウィッチと同じでも弾に込めた魔力の質が違うせいで明確なダメージを与えられない。

やはり自分にはこれで攻撃するしかないのだとビーストは再度ダイスサーベルを回すが

「げっ!?なんでよりによってこれなんだよ!」

表示された数字は二。パツとしないどころか頼れない数字、しかしそこで止まってしまったのならやり直しはできない。この武器はそういう仕様なのだ。

一か八か、万一の可能性に賭けて技を繰り出す。

二羽の鳥が宮藤を避けてネウロイへと向かうが装甲に触れる前にビームに飲み込まれて消え去ってしまう。

「くっそー！やっぱダメか！」

「他の攻撃はないんですか！」

「あります。けど…」

「けど？」

「近寄らないと他の使えないんです。しかも飛べなくなるし」

「ええええええっ!?そんなーっ!?」

それを聞いて宮藤は仰天する。当然その間にもネウロイからの攻撃は続いていて宮藤は一度シールドの展開を止めビーストの手を引いて回避行動を取る。

「なら私がネウロイの注意を引き付けます。その隙に近付いてください」

「俺が決めればいいんですね?わかりました!」

自身が囿になってビーストが決める。それが宮藤の打ち出した作戦。

その作戦にビーストは抵抗なく従い実行しようとするその間際のこと、青い魔力の塊が上空から降り注ぎネウロイの装甲の一部分を穿つ。

「攻撃!？」

「上から?誰?」

攻撃のやってきた方を見上げれば宮藤が乗って来たものとは別の飛行艇。そこから一つの影が離れて宮藤たちの方に降下して向かってくる。

『シャバドウビタツチヘンシーン!シャバドウビタツチヘンシーン!』

「この音!もしかして!」

次第に大きくなる音に宮藤は歓喜に震えた。何度も何度も聞いて安心感すら持たせてくれる機械音声。それをもたらす人物が誰なのかをよく知っていたから。



『ハリケーン、プリーズ！フーフー、フーフーフー！』

そして彼女の予想を裏切らず彼女たちの上空に出現した風の魔法陣の中から緑の魔法使いウィザードが現れ宮藤の真横に浮かび立つ。

「なんだかお前と会う時ってのはいつも戦いの真っ只中だな。久しぶり、宮藤」

「ソーマさん！お久しぶりです！」

「ソーマさん？本当だ！あれがウィザードのソーマ先輩!？」

再会を喜ぶ宮藤と同じか、もしくはそれ以上にビーストはウィザードを見て興奮していた。

「うわ、すごい！本物だ！本物のソーマ先輩だ！」

「えっ、つと…誰？」

身振り手振り激しく喜びを発信するビーストを指差してウィザードが宮藤に問う。

「この人は坂本さんのお弟子さんでー」

「ソーマ先輩の後輩です！よろしくお願いします！」

「セン、パイ？コウ、ハイ？なんだかよくわかんないけどその辺のことは後、こいつを片付けるぞ。手を貸してくれるな宮藤…後コウハイ、だっけ？」

先輩だの後輩だの初めて聞く言葉に首を傾げ困惑を深めているとウィザードの付けているインカムに通信が入る。

『ソーマ、聞こえるかソーマ。私だ坂本だ』

「坂本少佐？どこから…飛行艇の中か」

周りを見回して声の出所を探すウィザードの瞳が自分の乗って来たのとは別の飛行艇を捉える。

ストライカーを装着した坂本が近辺にいないことから彼女がその中にいるのだと結び付けるのはそう複雑なことではなかった。

『単刀直入で悪いが私はまだ出撃ができない。宮藤とそこにいるビーストの世話を任せる』

「ビーストってこの魔法使いのことか。ああ、オーケー、焦らなくていいからゆっくり来ていいよ。来る時にはもう終わってるかもしれないけど」

『それはそれで構わないさ』

通信を終えたウィザードと宮藤、そして遅れてビーストがスライドするかのよう空を駆ける。

死を運ぶ赤い光の襲来を目視したからだ。

「今の聞いたな。つてことで、行くぞ！宮藤それとビースト？コウハイ？どっちでもいいか！」

「もちろんです！」

「後輩って呼ばれたー！」

(…調子狂うな)

いちいち大袈裟に興奮するビーストに変わらぬ困惑を見せるウィザードであったがその彼らに数条のビームがいつぱんに襲いかかる。

ウィザードと宮藤は難なく、ビーストはやはり余裕のない運動で何度も放たれる赤い光線をかわしていく。

「宮藤。フレイムで射撃したいからフォローしてくれ」

「私はソーマさんを支えればいいですか」

「ああ。でもその前に一回だけ撃たせて！」

避けながらウィザードと宮藤はインカムを通じて話し合う。

先の戦いで築いてきた信頼の蓄積が残っていたためか双方共に言葉数は少ない。だがそれだけでもウィザードが何を自分に求めているのか宮藤は理解できた。

『フレイム、プリーズ！ヒーヒー、ヒーヒー！』

『バインド、プリーズ！』

ウィザードはフレイムスタイルになり鎖をネウロイの翼部分に巻き付ける。

浮力を失い重力によって落下する彼は握り締めた鎖を支えにネウロイの真下へ移動、振り子の原理を利用して真上へと舞い上がる。

『コピー！シューティングストライク！』

一気にネウロイの頭上を取り武器ごと自身を増やしたウィザードは銃身を下に向け引き金を引く。

二つの火球はネウロイの片翼に直撃し破片をまき散らす完全な破壊には至らず、ネウロイからお返しビームが真っ直ぐ向かってく

る。

「ソーマさん！」

真横から聞こえる声。

分身を消したウィザードは声を聞いてすぐ片手をそちらへ伸ばすと飛んで来た宮藤がその手を引つ張ってネウロイのビームの軌道から外れる。二人を消し炭にするはずだったビームは虚しくも雲を貫くだけに終わる。

だがネウロイも攻撃の手を緩めることなく連続して熱線を放つ。それらを宮藤が全意識を集中させての動作で回避あるいは片手で展開したシールドで防ぐ。

そしてウィザードが彼女の手を握りながら、シールドの外側から射撃を行ってネウロイの装甲を微弱ながらも削っていく。

「先輩たち、かつけえ…」

流れるように自然に息の合った連携を披露する魔法使いとウィッチにビーストから感激の言葉がこぼれる。

実戦経験の浅い彼は純粋な眼差しを向けるが当の二人は渋い顔をしていた。

通常射撃ではちつとも有効打にならず、強化した炎の射撃で与えた損傷もネウロイお決まりの再生能力によって台無しにされてしまった。

「再生速度が速いな。だったら…宮藤もういい。ありがとう」

そう言うウィザードは宮藤の手を離してハリケーンスタイルへと戻ると、自分にとつての切り札ハリケーンリンクスの指輪を腰元のホルダーから掴み取り、ドライバーに認証させようとする。

しかし動作の直前で動きが急に止まる。ネウロイの攻撃が迫ってきたわけでもないのだ。

不審に思つて宮藤はウィザードの深緑の仮面を見ながら問いかける。

「ソーマさん？」

「宮藤、ここからの戦い驚くほど楽になりそうだぞ」

「え？」

ウイザードの返答の捕捉はネウロイに命中した弾がしてくれた。

誰もいないはずの方角から飛んできた弾の経路を辿った宮藤の顔に温かな笑顔が生まれた。

「あー！」

「な？言つたろ？」

二人の視線の先には二つの影が、ロマーニヤ空軍所属フランチェスカ・ルツキー二少尉とリベリオン空軍所属シャーロット・E・イエーガー大尉の二人のウィッチ：かつて共に厳しい戦いを乗り越えた仲間間の姿があつた。

## 第四十七輪 結成！新生ストライクウィッチーズ

「いやっはー!!」

「やつふー!」

戦場には異様なまでに不相応な元気で可愛らしい背丈の異なる二つの太陽。シャーリーとルツキーニの変わらない元氣さ明るさ全開の登場に宮藤は顔が綻んだ。

「シャーリーさん！ルツキーニちゃん!」

「えへへ、今のすごいでしょ。全弾命中だよ!」

ルツキーニは自分の成果を宮藤にアピールし、一方のウィザードは近づいてくるシャーリーに片手を挙げるとそこ目がけて彼女が真っ直ぐ一直線に突っ込んできた。

「いっつつあ!!」

一種の制止ブレーキつもりで上げた手だった。実際にその望み通りシャーリーは手を取ってくれたわけなのだが、減速も制動もせずに来られたせいで想定していたよりもよっほど大きな負荷が肩にかかりウィザードは反射的に苦痛の声を漏らす。もう少しで肩が持っていられるところだったと言ってもあながち間違いではない。

だがシャーリーはその声が聞こえていなかったのか、あるいは聞こえていたけれども心配するほどのものでもないとみなしたのか、そのことに触れずにウィザードに話しかける。

「つつてえ、肩…肩が…」

「私たちが一番乗りみたいだな」

「…残念。一番は俺」

受け止めた側の肩を手でさすりながらウィザードが得意げに言う  
とシャーリーはちよつとだけ不服そうに口を尖らせる。

「ちえーなんだよ。そう言うのは普通黙ってるもんだろ」

「それで納得するようなタイプじゃないだろ」

「当然。よくわかってんじゃない」

「だろ?」

再会してすぐ軽口を言い合った二人は笑みを向け合う。もつとも

ウィザードは仮面に隠れているために笑顔であるのか確かめようがないが、彼と視線と言葉を交わしているシャーリーには間違いない自分と同じような顔をしているだろうという確証があった。

お互いにまた久しぶりの再会に喜んでいるとシャーリーとルツキーニがすっかり蚊帳の外に追いやられてしまっていたビーストに気付く。

「なあ？あいつは知り合いか？ウィッチじゃないみたいだけど」

「すっごい金ぴかピンだね。芳佳あれ誰なの？」

「あの人は坂本さんのー」

説明しようとしたところでまたしても水を差すように赤い光が連続して飛んで来る。

「また邪魔をする。これじゃ落ち着いて話もできないな」

「だったら早く倒しちやおうぜ。で、ゆっくりと話し合おうか」

「気が合うな。俺もそう思ってたところだ」

同じ方向に飛行したウィザードとシャーリーはそう言うのと仲良く空気を読んでくれないネウロイに銃口を向ける。

二人の銃口から弾が出る前に遠くから飛来した弾丸がネウロイの装甲を撃ち抜き、大量の白い破片を巻き散らした。

「この射撃って」

「芳佳ちやーん!!」

宮藤には今の射撃が誰によるものなのかすぐさま検討が付いた。そしてそれを裏付けるかのようにして狙撃手が宮藤に勢いよく抱きついてくる。

「リーネちゃん！よかった、無事だったんだね！」

「うん！芳佳ちゃんも元気でよかった」

宮藤と抱き合い再会を喜び合う三つ編みの少女はリネット・ビショップ。宮藤が最初に友人になったブリタニア軍のウィッチだ。

「やれやれ会って早々落ち着きのない方たちですわね」

大はしやぎな宮藤とリーネに対してそう言いながらウィザードの近くに降り立ったのは気品と佇まいが美しい貴族の令嬢にしてガリア空軍ペリーヌ・クロスステルマン中尉。

タイミングからして彼女はリーネと一緒に来たのだろう。

「そう言う割にはそっちだって嬉しそうじゃないか？」

「あら、喜ぶのがダメなんて一言も言ってもせんわよ」

己に対して視線を寄越してから言ったウイザードにペリーヌが風に揺れ動く髪を手で抑えながら言う。

「なんか少し変わったんじゃないか？」

「これといって自覚はありませんけど……？」

本人は口ではそう言うがウイザードは間違いなく変わったと思う。たった僅かな言葉であったがその中にはブリタニア時にはあまり表面に出てこなかった優しさがよく伝わって来た。

「イエーガーさんにルツキーニさん、でもってあれはビシヨップさんにクロステルマンさん？うおおおお！501、ストライクウィッチーズの皆さんが今俺の目の前に！」

着々と揃い踏みしつつあるガリア解放の英雄たちの半数を視界に入れてビーストの感激と興奮は一層激しさを増していた。

この間攻撃を加えられることのなかったネウロイはというと彼女たちの再会もビーストの興奮も関心はないようで、発光部に光をためて攻撃の準備を行う。

しかしネウロイの起こした次なるアクションは攻撃ではなく、光を集めていた部位を爆発させて悲鳴のように金属音を上げることであった。

「この流れでいったらあの二人しかないな」

黒煙と広範囲の爆発、それをもたらしたロケット弾を見てウイザードは確信した。この要素で当てはまる人物は一人しかない。そして彼女が来ているのなら必然的にもう一人のウィッチもセットでいると

「サーニャー！それとエイラー！」

ロケット弾をお見舞いしたのはオラーシャ陸軍サーニャ・V・リトヴァク中尉。その隣にいるのはスオムス空軍エイラー・イルマタル・ユートイライネン中尉。

「お久しぶりです皆さん。また会えて嬉しいです」

「それとっておまけみたいな言い方すんなよなー」

「私たちもだよ。サーニャちゃん」

「わかってるわかってる。会えて嬉しいよエイラ」

「なんか適当にあしらわれる感じが気に入らないな…」

敵の出方を伺いながらサーニャは宮藤らの元へ、エイラはウィザードに名を呼ばれたために彼の元に向かう。

会話だけ切り取れば完全な同窓会の雰囲気。しかし彼女たちは警戒を怠ってはいない。

しっかりとネウロイの攻撃を避けて、射撃を継続している。

「これで後はミーナ中佐たちだけか。てか来るのか？」

「ネウロイが出たって聞いてここに来る前に連絡は取ったからたぶんもう少しで来るんじゃないか」

「あー惜しい。たぶんじゃなくてももう来るぞ。ほら、あっち見てみよう」

エイラが首で示した方角をシャーリーとウィザードが見ると示し合わせたようなタイミングで空から三つの影が接近してくる。

「どうやら私たちが最後のようだな」

「もートウルデーがもたもたしてたせいで遅れちゃったじゃん」

「私のせいだというのか！そもそも私とミーナはお前の出撃準備が終わるのを待ってた側だぞー！」

「ふふ、二人共そのくらいにしましょう。皆の前よ」

カールスラント軍人の三人。個性豊かな501部隊を束ねる隊長ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐と軍人とはこうあるべきという理想像を体現したような人物ゲルトルート・バルクホルン大尉、そしてバルクホルンの相棒でありながらもまるで大きく異なる気質の持ち主エーリカ・ハルトマン中尉。

「おおおおお！ストライクウィッチーズの皆さん、勢揃い、キター!!!」

十一人のウィッチとウィザードの結集、憧れの部隊を間近にして両手をバンザイするように上に広げて喜びを噛み締めるビースト。

ほとんど絶叫に等しい声を聞いて後からこの空に到着した者たち



はようやくビーストの存在に気付いた。

「なんだ？あの猫みたいに変ちくりんは」

「あれが坂本少佐の言っていた魔法使い？ソーマやメイジよりも面白い見た目だね」

エイラとハルトマンはビーストの奇抜な見た目に関して眩く。

自分がそんな感想を言われているとは知らずビーストは集ったストライクウィッチーズの錚々たるメンバーの元に素早くかつ恐る恐る緊張しながら移動する。

「あ、あ、あの、初めましてです！俺坂本少佐と同じ扶桑の軍人で魔法使いをやらせてもらってましてー」

「話は聞いているわ服部幸助軍曹。挨拶もしたいのは山々だけどでも今は何よりも先にネウロイを。貴方も協力してもらえる？」

「いいんですか!?!」

「もちろん、頼りにさせてもらおうわ」

まさか隊長直々に協力を求められるとは思っていなかったのかビーストの声には相当な驚きがこもっていた。

「いい流れになってきた。俺もこの勢いに乗らせてもらおうとするか」

『ハリケーン、リンクス！プリーズ！ビュービュー、ビュービュービューー！』

気分が高まったウィザードは風の強化形態ハリケーンリンクスに変身を遂げる。

その体を風が包むと同時にやはり力の源となった三人の体も一度眩い緑の光を纏いだす。

「そうそう、これこれ。いつも気持ちいいねー。いきなり体が光っちゃうのだけが困るけど」

「やはりこの前にも変身していましたのね」

「やっぱこれだよなーこれがあるとより一層やる気が出てくるよ」

いつもよりも自分の中の魔力が体の中を活発に巡り、向上したような感覚。この感覚を体感するのは三度目となるハルトマンやペリーヌ、シャーリーはそれぞれ感想を眩きそして

「攻撃開始！」

ミーナの一声でウィッチと魔法使いが一齐に動き、ネウロイの放つ赤い線の群れを回避しながら攻撃を仕掛ける。

「当たるかよ。そんなもんに」

最初に仕掛けたのは自分の描いた未来を疑うことなく一直線に進むエイラ。自身の能力を駆使してシールドを一秒たりとも使わずにビームを全て最小限の間隔で避けると銃撃を加えてネウロイの装甲の表面を削ぎ取る。

「……ならどうだー！ちよあー！」

今回ネウロイの脅威に晒されている故郷の未来を救うためにも俄然気合いの入ったルツキーニは光熱魔法を帯びたシールドでエイラが損傷を与えた部位に突撃し、融解して本体と分断することに成功する。

「皆の手前たまには気合入れていいとこ見せとかないとな」

『チョーイイネー！サイクロン、サイコー！』

接近を防ぐためにネウロイが打ち出した大量のビームを潜り抜けながら接近していくのはウィザード。

ルツキーニと同様に故郷を覆い尽くす絶望を砕き、希望をもたらすという決意をその心に宿す彼は竜巻をシールドの代わりにしてビームを受け止めるとそのまま強引に前方へと突き進む。

ビームの発射部との距離を限界まで縮めたところで竜巻を押し出すようにして離脱し、竜巻とビームの威力が混ざり合った結果発射部はおじゃんとなる。

「私あれやつちやおうかな。シユトルム！」

その動きを見てハルトマンも実行に移そうと思いついた。同じ風の魔法を有する彼女はウィザードとは違い、自分自身が一つの大きなうねりを持つ竜巻となると体当たりで別の発射部を穿つ。

(……！)

ハルトマンと同じカールスラントに属するミーナも勢いで彼女に負けてはいない。派手な固有魔法こそ持たないが冷静沈着な観察眼と判断力に優れているミーナは味方の位置と相手の動きを見ながら味方を援護しネウロイに的確な射撃を行う。

「俺も続いてみせるぜ……こいつでいつてやる！」

『バツファ、ゴー！バツ、バツ、バツファ！』

ミーナに次いで501を束ねる立場にある坂本と親しいビーストが勇猛果敢に攻め込む。

ルッキニーや先のウイザードのようにネウロイの上を取ると指輪を切り替え、マントも鳥から牛の頭部を模した朱色のマントに変え肩を突き出すような体勢で体当たりをかます。

地球の重力に引かれて落ちていくその一撃は元々の威力の高さも相まってネウロイの片翼に大穴を開け、衝撃で破片が飛ぶ。

「やったぜ！」

手応えに喜ぶ彼だがその彼の目にこちらに照準を合わせているかのように輝く赤い光が見えた。

「やっべ、急いで戻さねえと！」

大慌てで鳥の力を得るマントに変えようとするビーストだがその行為が最後まで完了することは叶わない。

ネウロイのビームが彼を貫いたからではない。それよりも先にビーストの胴を腕に抱えて逃がしたウイッチがいたからだ。

「あ、あれ？」

「やる気なのはいいけどもうちよつとだけ後先考えてやってくれよ。けっこー危なかったぞ今の」

そのウイッチとは快活さではビーストに匹敵するシャーリー。スピードを求めて空を飛ぶ彼女にとってビーストを抱えて射線上から離脱することなど造作もない。

しかもそれだけに留まらずビーストの手を握るのは別の腕でネウロイの赤く光る箇所を弾を撃ち込む。

「これで……！」

シャーリーが弾を打ち続けている間別方向からもロケット弾が飛来し、大きな爆発を生み出す。

日差しのように見る者を明るく照らすのがシャーリーの笑顔だとすれば、こちらの少女サーニヤの笑顔は月明かり。

多くを語らず見守るようなその優しい笑顔は神秘的で異性はもち

ろんのこと同性（エイラ）をも魅了する程。

「リーネちゃん今だよ！」

そのサーニャとの誕生日が同じ宮藤は未だ残っている発射部のビームからシールドを使ってある人物を守っている。

その人物というのはリーネ。

宮藤という強固な守り手が前にいてくれるのおかげで精神的余裕を得ている彼女は狙いを絞って正確な射撃で大きな発射部の一つを一射の元に潰す。

「やったー！」

誰一人として被弾せず損傷を与えていく501部隊。

これらの総攻撃を受けてネウロイは自慢の修復能力で装甲の復元を試みるがそれを防ぐために動いた者が二人いた。

「修復などさせろものか！」

リーネたちと故郷ガリア奪還の道を拓いたペリーヌとかげがえない妹と彼女と同じくらい家族と言っても差し支えない程にまで深い繋がりで結ばれた仲間を守るためにその両手に銃を持つバルクホルン。

彼女たちによる連射性に長けた射撃と内部にまで一瞬にして浸透する雷撃で修復をも上回るダメージを与える。

「見えましたわ！コアはあそこです！」

雷撃の直撃を集中して受け破損した部位から漏れ出す赤い光を見てペリーヌがそれを他の者にもわかるように口に出す。

しかしやはり修復速度の速さは平均的な大型を上回っているようで彼女が光を見てから言葉を発するごく短い合間にも傷口を塞ぐように装甲が戻りつつある。

『チョーイイネー！ジェット、サイコー！』

高速魔法を発動させてウイザードはシャーリーと彼女の手元にいるビーストの元に飛ぶ。ネウロイのビームが後を追うように放たれるがスピードが上がったウイザードには当たらない。

「シャーリー、コウハイをこっちに！」

「おう。ほら、いってこい！」

「え？—うわあああ！」

疑問が生まれてから質問を挟む余地もなくビーストは投げ出され  
ウィザードに託される。

その手を無事掴んだウィザードは迫り来る赤い線をかわしながら  
上空へと浮上する。

「とっておきの魔法はあるか？キックとか」

「あります！」

「よし、同時にコアのところまでいくぞ」

ウィザードは自分の手をビーストの手から腰に回し、彼がファルコ  
マントの浮力を得るのを待ってから新たな指輪をベルトに翳す。

ビーストも単独で浮遊した後全く同じ動作でホルダーの指輪を選  
び取り、ドライバーの穴に突き刺す。

『チョーイイネ！キックストライク、サイコー！』

『キックストライク！ゴー！』

二種の音声が鳴り、二人の魔法使いはネウロイへと急降下。

突き出された片足にはそれぞれ旋風と獅子の頭に形を作った魔力  
を纏っている。

「だあああああ！」

「おつりやあああ！」

両者の蹴りはネウロイのコアがあつた箇所に炸裂し、易々と装甲を  
ぶち抜く。

金属音のような悲鳴をあげるネウロイ。しかしそれでもネウロイ  
は絶命しない。

「コアがないよ！—どういうこと？」

「コアを移動させるタイプか。当たる寸前でコアの位置を変えたん  
だ」

キックで貫通した穴から赤い欠片が見えないことを疑問に感じた  
ハルトマンにバルクホルンが返す。

その時ウィザードに向かってエイラが叫んだ。

「ソーマー！剣を銃にして下に投げる！大体四時くらいの方角だ！」

「下？」

言われてウィザードは下を見るが下には何も無い。海が広がるだけだ。

なのに何故と思ったが未来予知を持つエイラの事だ。きっと何かある。

そう信じてウィザードは言われた通りガンモードにしたウィザードガンソードを思いつき投げ捨てるように手放した。

その銃を取ったウィッチがいた。

それは

「坂本少佐！」

「坂本姐さん！」

自らの愛刀『烈風丸』とウィザードソードガンを手に、ネウロイへと全速力で突っ込む坂本。

彼女を慕い尊敬を抱くペリーヌとビーストが揃って名を呼ぶ。

コアの位置を見抜く目を持ち真っ直ぐそこに向かう坂本をネウロイは全力のビームで応対する。

「こんなものどうということはない！」

魔力を伝達したウィザードソードガンの銃口から青白い大きな球体状の弾丸を撃つ。

弾丸はネウロイのビームと衝突するが一秒たりとも拮抗することなく次第に押されていく。

しかし当然坂本はこの瞬間に次の手に出ていた。

「烈風斬！」

本命の一撃。ありつただけの魔力を込めて振るわれた刀から強力な衝撃波が飛んだ。

それは先に放った弾丸と合わさりより強大なエネルギーの刃となるとネウロイのビームを真ん中から引き裂いて本体をも断裂する。

まるでチーズのようにあっさりと左右に分かれたネウロイ本体、そしてコアも移動が間に合わず破壊されネウロイであったものは白い欠片となって散らばる。

「さすがですわ坂本少佐！」

「すげえ、やっぱすげえ坂本姐さん！」

「ビームごと斬るって、なんていうか無茶苦茶だな…」

「坂本少佐が無茶苦茶なのはいつものことじゃないかな」

坂本の絶技への反応はそれぞれ。手放しに賞賛するペリーヌとビーストがいたり、驚愕と呆れの混濁した感想を呟くウイザードとハルトマンがいた。

「はっはっは、見たか。これが501の結束の力だ！」

その本人はというと既に形のない敵に向かって高らかに勝ち誇っていた。

この戦闘を皮切りにストライクウィッチーズはロマーニヤの防衛とネウロイの巢の破壊の任に就くこととなった。

ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐

坂本美緒少佐

ゲルトルート・バルクホルン大尉

シャーロット・E・イエーガー大尉

エーリカ・ハルトマン中尉

ペリーヌ・クロステルマン中尉

サーニャ・V・リトヴァク中尉

ソーマ・スペランツァ中尉

エイラ・イルマタル・ユートイライネン中尉

フランチェスカ・ルツキーニ少尉

リネット・ビショップ曹長

宮藤芳佳軍曹

そして服部幸助軍曹

以上、十三人から成る新生ストライクウィッチーズの新たな戦いが幕を開けた。

## 第四十八輪 二度あることは三度ある

服部幸助こと魔法使いビーストを新たに加えた第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ。

ロマーニヤの防衛とヴェネツィアの奪還、そしてヴェネツィアの空に発生したネウロイの巢の破壊。その目的に向かって十三人一丸となつて団結していくことになったのだが

「んがああ ああ!!か ああ ああ!!」  
「……」

早くもその結束のに亀裂が入りそうな目に遭っている人物がいた。日付が変わり、まだ日も昇っていない時間なのにソーマは眠れずいた…というよりは寝ていたところを強引に起こされた。

その原因というのが数歩離れた隣のベッドで爆睡する服部だ。

就寝した最初の段階では静かだったのだが数時間後に突然とんでもなく大きな音で出し始めた鼾にソーマは心地よい眠りを妨げられてしまった。

「うつるっさ…」

布団の中に頭までくるまって頑張つて音を遮断しようとするが大な鼾の前ではそんなちっぽけな防御膜など無意味。寝付けずに段々といらいらが募っていくばかり

我慢できずにソーマは布団から出て服部の鼻を指で軽く詰む。

「ふんがっ…こっ、かっ…うあ…」

「止まった。悪く思うなよ服部」

幸せそうな寝顔だけに申し訳ない気持ちになるがこれも己の安寧なる睡眠の確保のためと罪悪感を誤魔化してソーマは自分のベッドに戻つて夢の世界に旅立とうとする。

「かあ…ふぎやあ ああ ああ ああ!!」

「おおっあ!!」

しかし意識が再び夢の世界に落ちることはなくまた復活した鼾に睡眠を妨害される。

「うつそだろ…」



ソーマは絶望する。

これがいつまで続くのかと不安になりながら、どうか収まってくれと願いながらソーマは布団にくるまってその時を待つ。

だがその願いも虚しく眠れないまま時間だけが過ぎ、気付けば朝日が顔を出しカーテンから光が漏れ出した。

「よっしー！今日も一日気合い入れて頑張っぞー！」

日の出と共に服部は飛び跳ねる勢いで起き上がった。

目を覚ますなり彼は寝間着から軍服に着替え、起きたばかりとは思えない元気な足取りで部屋を出て行く。

「……」

結果として

「どうした？朝から疲れた顔して」

「顔色悪いですよ？具合悪いなら診ましようか？」

「ちよつと……色々あつて。風邪ではないから大丈夫……うん、大丈夫そうかな」

誰がどう見ても気分の優れない顔をして朝の食堂に出てきた彼をシャーリーと宮藤が気遣う光景が生まれた。

ちなみにこの光景を生むことになった張本人は坂本主導による早朝の自主鍛錬を終えて汗を流すためにシャワーを浴びている。

「夜更かしか？だらしない。常に己の健康を万全な状態で維持するのも我々の軍人の務めだ」

「それはわかつてる。わかつてるんだけどさ……相部屋なんて初めてだったから予想してなくて」

「そう言えば訓練校でも服部の同居人が睡眠不足に悩まされていたな。普段話す分にはとてもいい奴だし悪意がないのはわかる。でもさすがに何日も耐えられないからどうすればいいかと」

宮藤の煎れてくれたコーヒを口に含みながらバルクホルンが小言を言う。

一方でソーマの不調の原因に気付いた坂本が口を挟んでくる。

「今すぐく気が合いそうその人と」

「空き部屋は何個かあるから部屋を別々にしてみる？ずっとこのまま

の状況が続いたらさすがに辛いでしょう？」

失礼ながらもソーマの苦労に苦笑を隠せずにいるミーナが提言する。

规律的に多少問題はあることではあるからあまり良いとは言えないが戦闘や日常生活に支障をきたすレベルまで酷いのであればやむを得ない。

「いや…耳栓でもしてなんとかするよ」

せっかくのありがたい提案だが服部への罪悪感が芽生えてしまうことを考慮してソーマはミーナの案をやんわりと断った。

そんな彼の心情を慮ってハルトマンが同情の言葉をかける。

「ソーマも大変だね。新しい基地に来て最初に悩むのがネウロイじやなくて味方のことなんて」

「私としてはお前はもう少し悩んでほしいところだがな」

「悩むことなんてないよ？」

「どの口が言うか！私たちの部屋をみてみる！お前の私物が私の空間にまで侵攻してきているんだぞ。着任したばかりで何故あんなことになる！」

ソーマのことなんてそっちのけにバルクホルンはハルトマンに口撃を向ける。

彼女も彼女で同居人の問題に苦しんでいた。ハルトマンは片付けをするのが苦手で部屋中にゴミや脱ぎ捨てた私服が山のように散らばっており、それがバルクホルンの生活スペースを侵食しているのだ。

もつともこれはブリタニアにいた頃以前からで今に始まったことではないのだが、ロマーニヤ基地では二人以上の隊員が相部屋となつて生活するという都合によってバルクホルンという悲しい犠牲が生まれる弊害となつてしまった。

「…あっちも大変だな」

「どっちがいいよ？汚いのと寝れないの」

バルクホルンに同情するソーマ。その隣でシャーリーが自分の豊かな胸を枕代わりにして眠るルツキー二を抱きかかえて質問を投げ

かける。

「まだあつちがいいかな。寝れるのが羨ましい」

そう、寝れるのが羨ましい。枕の柔らかさが相当心地良いのかウトウトと眠るルツキーニの寝顔に羨望の眼差しを送っているとシャーリーを見てあることに気付く。

「そういうえば服変えた？」

視覚的に強い刺激をもたらす鮮やかな赤色のジャケットを見てソーマが言う。

記憶に強く根付いている彼女は確かベージュのジャケットだったはず。

「なんだよ今気付いたのか？どうよ？」

「うーん、シャーリーって感じ？合ってるよ」

「そういうそっちだって、緑に変えたんだな」

「いいだろ？これ。前にいたとこの仲間が作ってくれたんだ」

ソーマもまたブリタニアの時とは軍服が変わっていた。明るい緑と白を基調としたデザインをしているそれはルチアナからもらった物だ。

服飾の道を志しているだけあってその出来は市場に出回っている品と比べても遜色ない。むしろそういった品よりも優れた仕上がりとなっている気さえする。

「そりゃまた本格的だな」

「デザインとかも全部その人がやってきてさ。内側とかほら、こういうのもわざわざ」

そう言つてソーマが服の内側を見せると胸元の内ポケットの表面に赤いウィザードの魔法陣が描かれていた。

あまりの凝りようにシャーリーだけでなく宮藤やリーネまでもが食い付く。

「ソーマさんの魔法陣の絵があるんですね。でも作るの大変そう」

「実際大変だったし手間だったと思うぞ。前のところから俺がいなくなつて一月くらい後かな。送ってきてくれたから」

「でも作った人がそれだけソーマさんを大事に思ってるっていうのが

わかります。なんだかこっちも嬉しくなります」

リーネが我が事のように笑顔で言う。彼女のその言葉と表情にソーマも胸の内に嬉しさが込み上がってきた。

「そうだな。だからこそ頑張らないとな…」

託されたのはロマーニヤの防衛とヴェネツィアの奪還だけではない、ルチアナやフェルたち504の思いや悔しさも背負って自分はこのにいるのだ。彼女たちのためにも何としてもネウロイを殲滅してこのロマーニヤに平和を取り戻さなければ、とソーマは強く意識し、拳を握った。

それを成し遂げるためにも食事は欠かせない。腹が減っては戦はできないと扶桑のことわざにもある。

朝食の席に着いた皆を迎えたのは宮藤お手製の白米と焼き魚と味噌汁。扶桑食のオンパレードだ。

「ごっはんーごっはんー久しぶりの芳佳のご飯ー」

「そんなに喜んでくれるんだねルツキーニちゃん」

「だってだって今まで食べられなかったんだよ」

あまりにも喜びを大にしているルツキーニに嬉しさと戸惑いが混ざった複雑な感情を抱く宮藤。

そのことに関しては珍しくエイラも気が合ったのか同調して頷く。

「ま、わからなくはないかな。宮藤作るご飯ってどうしてか他のところで食べるよりも美味しいんだもんな」

「それは愛情、という奴だろうな。料理が美味しいのならそれだけ宮藤が私たちを想ってくれている証と言えるわけだ」

「愛情…私だって、宮藤さんに負けないくらい坂本少佐を想っておりますわ」

(まーた何言ってるんだペリーヌ)

坂本の言葉のどこに触発されてか対抗意識を燃やしてブツブツと呟くペリーヌを見てソーマが内心でぼやく。

そのことを上手い事流してご飯にありつこうとする。そしてそれは服部も同じであった。

「いったただきまーす！」

元氣よく食前の礼儀を欠かさずに行った服部は卓上の醤油を手にし、白米の上にかけて。

数滴ではなく滝の水を思わせる豪快な量を

「えっ…」

その瞬間だけ時間が止まったかのように誰もが動きを止めて服部を凝視する。

いや誰もがという表現は誤りだ。坂本、彼女だけそこにある光景を当たり前と受け止めているような表情で箸を動かしている。

「何してんだよお前」

皆の意見を代弁するエイラ。それを受けて当の本人はさも彼女の反応が不思議であるかのような顔をする。

「醤油ですけど。あ、ユートイライネンさん。もしかして初めてですか？これは醤油って言ってー」

「それがなんなのかくらいわかる。そうじゃなくて私が言いたいのではなくでそんなにかけるのかって話だよ」

服部のご飯はもはや白米と呼べる色をしていなかった。

黒っぽい茶色が大半を染め尽くしていて辛うじて白い面積が残っている程度でもう全く新しい食べ物に変貌を遂げてしまっている。

あんなにも生き生きとしていた姿はどこに消えてしまったのか。まるで美味しそうには見えない。

生まれて初めてエイラは料理に同情している。

「俺子どもの頃からずっとこれでご飯食べてますよ…変ですかね？」  
「…どうなの？」

もしかしたら億分の一くらいの可能性で服部が正しいのかもしれないと思いつまは扶桑出身である宮藤に答えを求める。

「扶桑だごご飯に醤油をかけるのは珍しくない食べ方です。ですけども」

「ですよ。変じゃないですよ」

「変ではなくても限度の問題かと思えますわよ。ショウユのことはあまり詳しくないですけどそのうち体を壊しても危険があるのでな

くて?」

「どうなんですか?」

「えっと前に読んだ本には低血圧とか呼吸困難の恐れがあるって書いてあったような」

ペリーヌの指摘と服部の質問に人差し指の先を顎下に添えて答える宮藤。

想定していたものよりもよっぽど深刻な内容が返ってきたのか問題の行動を起こした張本人は愕然とショックを受けていた。

「え!? そんな…そんなに酷いことになるんですか…」

「元氣出せって。別にこれからもう一生かけちゃダメって言ってるんじゃないんだ。明日から少し量と頻度を減らしてれば平気だったな?」

想像を遥かに超えた落ち込みっぷりを見せる服部にソーマはそう言葉をかけて慰めた。

☆

朝食と午前中の走り込みと空中訓練を終えた後真昼時の滑走路に夜間哨戒の任のために就寝しているサーニヤを覗いた面々が集った。

彼女たち、というより服部に対して坂本は言葉を発した。

「午後の訓練はロツテによる模擬戦を行う。服部、早速だがお前にも加われ。今後戦力になってもらうためにもウイツチとの戦闘に慣れてもらおう」

「ロツテ、って誰かと一緒ってことですよね?先輩と一緒にですか?」

「いや今回はウイツチと魔法使いで分かれてソーマにお前の相手をしてもらおう。その方がいい」

「じゃあ俺たちの相方は?誰になるんだ?」

「特にこれといって決めていない。好きにしてくれていい」

とは言われてもそれはそれで悩んでしまう。ソーマが考えているとルツキーニが手と声をあげた。

「それなら私やるー!この前シャーリーがやったし今度は私がソーマ

と組む！」

「正確には私はソーマと組んだわけじゃないんだけどな。まあとにかく行ってこいルツキーニ！」

ソーマと初めて模擬戦をした相手であるシャーリーがルツキーニの背中を叩いて気合を注入。

後押しを受けたルツキーニはそのまま上機嫌で軽々とスキップを踏んでソーマの横に付く。

「につひつひよよろしくねソーマ」

「こちらこそ、ぜひとも頼りにさせてもらおうよルツキーニ先輩」

「任せて！頼りにしていいよ！」

ない胸を自信満々に張るルツキーニはさておいて彼女の申し出はソーマにとってはこの上なく有り難い。

その理由は主に二つ。

彼女とのロツテは経験がなく今後の戦闘のために一度でもやっておくべきだということ。そして何より最後の理由は自分が誰に相方を頼もうかと悩んでいたところにあちらの方から率先して志願してくれたこと。

ソーマとルツキーニ、これで服部と対戦するロツテが決まり残すは服部の相方のみ。

誰に白羽の矢を立てようかと坂本が考えていると思っても寄らぬ人物の声が上がった。

「では服部の相方には私が立候補しよう」

バルクホルンがそう言つて数歩前に出た。

「バルクホルンか。うん、確かに適役だな」

カールスラントではハルトマン、ミーナに並ぶ有数の実力者。物事を客観的に捉える目線を持ち、どんな事態にも動じず対処する優れた判断力を持つ彼女と服部が組むのは服部にとつても悪くない人選だと坂本は思った。

一方でそんな坂本の考えに至らない服部は進んで自分とロツテを組んでくれたことに感謝を告げていた。

「ありがとうございます！バルクホルンさん」

「この志願は私の個人的な理由も含んでいる。そうかしこまらなくていい」

服部に言うとバルクホルンはソーマに視線を向ける。

「一応念のため言っておくが」

「え？」

「今回は以前のような真似をしても勝ったうちには入らないからな」

「…はい、承知しております」

彼女の言う『以前』というのがマロニー関係で敵対した際に行った模擬戦でのことを指しているのはソーマもすぐ気付いた。

あのような勝ち方をされた挙句にやり直しもなく今日まで来たことは彼女の中で少なからずしこりとして残っていたのだろう。

心なしかその時に殴られた頬がまた痛くなってきた。

それはきつとおそらく気のせいだと解釈してソーマは模擬戦の準備に移行する。

「変身」

『ハリケーン、プリーズ！』

一足先にソーマはウィザードに変身を終える。

彼の変身を見届けた服部は何やら思うところがあつたようで疑問を率直に告げる。

「先輩っていつも変身する時そんな感じなんですか？」

「そうだけど？」

「なんかあつさりしてるんですね」

「あつさりって、お前はどをやってるの？」

まるで自分の変身の仕方が変わっているとでも言いたげな服部にソーマが聞き返す。

「俺は—」

『ドライバーセット！』

言いながら服部は腰にビーストドライバーを装着。左手を天に掲げ腰を落として変身の工程をこなしていく。

「へんくっしん！」

『オープン！L・I・O・N！ライオン！』



指輪をベルトの穴に差し込んで服部も魔法使いビーストへとその姿を変える。

「こっちもうるさいのかヨ。魔法使いの音ってのは大きくなきやいけない決まりでもあるのか？」

それが初めてビーストの変身音を聞いてのエイラの感想だった。

ウィザードにしてもビーストにしてもどうしてこうこれから戦いに挑む緊張感を削ぐような音が流れるのか。

製作者の趣味なのかそれとも全く意図していない偶然の産物なのかとあらゆる可能性を思いつくエイラだが、当然彼女に答えてくれる人物は誰もいない。

「こんな感じですよ！」

「長くないか？」

おそらくはウキウキしているであろうビーストに訊ねられたウィザードはほとんど反射的に言葉を返した。

「そうですか？」

「戦う前にいつもそれをやる余裕があると思います？」

ビーストはシンプルに疑問に思っているようだがそこにペリーヌも援護射撃として加わる。

これから戦うことになるネウロイが律儀に終わるまで待つてくれるのか、と意味合いを込めて言葉を投げかける。

その一言を受けてビーストは彼女の前まで移動し始めた。

「でもこれが一番気合いが入って気持ちも乗るんですよ！よし、これからやるぞ！って気になれるんですよ！」

「そんな近付いてこられても私にはわかりませんわよ…すごい勢いで来ますわね」

理解を得ようと一生懸命説明するビーストの熱の入り様にペリーヌは視線を反らして困惑の表情を浮かべる。

「つとそうだそうだ、忘れるところだった。三人とも、空に行く前にこっち来て」

「なんだ？」

ペリーヌに迫るビーストはさておいてウィザードは招き猫のよう

な手招きでバルクホルンたち三人を呼ぶとペンキの絵が描かれた指輪を取り出す。

「三人にこれを使う。これを使えば俺たちの攻撃が全部ペイント弾になるんだ」

「弾が？」

「実際に見た方が早いかな」

百聞は一見に如かず。扶桑のことわざをウィザードが知っているのか知らないのかはさておきその言葉に倣って自分が指輪を嵌めて使用する。

『ペイント、プリーズ！』

魔法の発動を身にかけてから己の左手の平をウィザードソードガンで撃つ。その行動にバルクホルンたちは狼狽えたが彼女たちの心配に反してウィザードの左手は緑色のペイントに染まっただけで風穴が空いてはいない。

「な？この通り本気出しても怪我しないで済むってわけ」

「それはいいが効力が切れた後が危険じゃないのか」

「その心配は大丈夫かな。前に俺が試した時魔法の効力がなくなる前に体に予兆みたいな感覚があったから」

「わかった。お前がそう言うなら安心してできそうだな」

安全面が保証されているのであればバルクホルンとしても異論はなくその提案を受け入れる。

もちろんビーストとルツキーニも同様で三人はウィザードにペイントの魔法をかけられるといつも実戦で愛用している銃器を手に空に飛び上がる。

「ソーマ、私からも少しいいか」

ウィザードも続こうとしたが坂本に呼び止められる。

坂本はわざわざ彼のところまで足を運ぶと耳元で声を潜めて話しかける。

「—というわけなんだが頼めるか」

「なるべく意識はしてみる」

「すまないな」

坂本に返事代わりに軽く手を上げるとウイザードも空に上がり、彼と入れ替わってミーナが坂本の隣に歩み寄る。

「何を言ったの？」

「大したことは言っていない。これからの戦いで私が服部に求めるもの、その手本となるような動きをして欲しいと言っただけだ」

これから模擬戦を始ようとしている二組四人を見て坂本は言った。

## 第四十九輪 規律・野獣VS希望・野生

「はあく緊張するなあ。上手くやれっかな」

ビーストは不安と緊張を交えた眩きをする。

ただでさえ慣れない空中戦で初めて501の一員として行う模擬戦。他の隊員たちに見られているのに加えて彼が尊敬して止まないウイザードと部隊の最年少でありながらも統合戦闘航空団のエースの一人に名を連ねるルツキーニが相手と来た。

彼がそういう反応になるのは致し方のないことではある。

「バルクホルンさん、足引っ張ると思いますけど俺全力で頑張りますー！」  
しかしそれでも精一杯自分なりに結果を残して先輩たちにいいところを見せようという意気込みを露わにする。

「服部軍曹一つ言っておく。模擬戦だからと言って気を抜くな。相手が自分や仲間の命を奪おうとしてくる敵だと思って挑め」

「は、はい…」

バルクホルンの言葉に浮かれていたビーストは慌てて気を引き締める。

緊迫した空気の漂う中彼の耳に坂本の声が届いた。

「始め！」

それを合図に三人が一齐に動いた。

ルツキーニとウイザードは別方向に散らばりながら接近し、バルクホルンは上空に飛ぶ。

「あ、待ってくださいー！」

完全に出遅れた形となった遅れを取り戻すべくビーストも前進する。

彼以外の三人は銃撃を開始し、相手の弾をかわしながら空を駆ける。

誰かが被弾する気配は微塵もないが三人は顔色を一切変えない。

今のところは様子見を兼ねた牽制。

相手と味方の出方を探りながら必要以上に距離を詰めず自分の行動を考える。

それが多くの実戦経験を積んだ三人の共通意識としてあったが当然というべきかビーストにはそんな考えはなかった。

「よっしゃ、気合い入れていくぜ！」

『シックス・ファルコ、セイバーストライク！』

ダイスサーベルを出すなり早々と大技と放ちにかかった。サーベルから飛んだ六羽の鳥がウイザードとルツキーニに均等に三羽にわかれて襲いかかる。

二人は飛び回ってそれらを振り切ろうとするが鳥たちは軌道を辿るようにして進行してくる。

「これおっかけてくるの!?!」

回避しきれないとなれば撃ち落とすしか逃れる手はない。

魔力を込めた弾で鳥を相殺するウイザードとルツキーニ。

小規模の爆発となつて消える鳥たちの末路を確認してウイザードは視界の端に映り込んだバルクホルンの動きに意識を向ける。

おかげで死角から撃たれた彼女の射撃に気付いて回避することができた。

回避されたバルクホルンも悔しがる素振りも見せずにウイザードに向けて引き金を引き続ける。

「ソーマがバルクホルンに行くなら私は、勝負だ服部ー！」

バルクホルンの相手をウイザードに一旦任せてルツキーニはビーストに勝負を仕掛ける。

まさにバルクホルンの援軍に向かおうとしていたビーストは自分の鼻先を弾が横切つていったことで彼女の接近に気付いた。

「うお!?!ルツキーニ先輩が相手か。望むところだ！」

進路先を変更してビーストはルツキーニに扶桑式の銃から弾を放つが余裕綽々とかわされ、あちらからの弾をヒヤリとしながら凌ぐ。

「服部さんは動きが大雑把ね」

「経験の有無を置いといても致命的な酷さだ」

ビーストの動きを見てミーナと坂本が彼の問題点を指摘する。

彼女たちの言葉通りビーストは回避自体には成功しているがその動きが大きすぎて次の攻撃を自分から避け難くしてしまった。

「だがそこは今問題じゃない。あいつにこれから必要なのは」

坂本は一旦別の戦いに視線を切り替える。

「どうした？遠慮せず魔法を使っていいんだぞ」

「言葉と行動が合っていないくせによく言うよ」

バルクホルンとウイザードの戦い、こちらの戦況はというとバルクホルンがウイザードを押ししていた。

バルクホルンは魔法を使わせまいと攻撃の手を緩めず、おかげでウイザードにはウイザーソードガンでの射撃くらいでしか対抗手段はない。

だから彼はこの状況を切り抜けるべく移動を開始した。

その位置とはバルクホルンとビーストが直線で重なり合う位置。

「くっ、これでは」

ウイザードならばほとんど自分の射撃をかわす。

このままでは弾がビーストに当たってしまう。ビーストはウイザードの意図を察したルツキーニが他に意識を回せないようにしてしまっていて、誤射を避けるにはバルクホルン自身が位置を変えるしかない。

だがウイザードも彼女に合わせて移動をするせいで上手くビーストへの直撃を避ける狙撃を行えなかった。

(やっつけてくれるな)

「お待ちどおさま。要求通り今からたっぷり見せるよ」

『バインド、プリーズ！』

バルクホルンからの狙撃が止まった隙にウイザードは魔法と魔法陣を発動させる。

ただし魔法の標的になったのはバルクホルンではなく

「うおわわあ!？」

ビーストだった。彼の付近の空に出現した魔法陣から風の鎖が伸び、腕を絡め取る。

よりにもよって戒められたのは銃を持っていた方の腕でビーストは必死の抵抗をするが筋力増強もしていない単純な腕力で破れるような脆い鎖ではなかった。

「いったただきー！」

「待ってタンマ！せめて、せめて受け入れる時間を！」

手こずっている間に仕留めるべくルツキーニが銃口をビーストに向ける。

「ごめんね、やくだよ」

小悪魔的な笑みを浮かべてルツキーニは引き金に添えた指に力を込める。ところが

「ずおりゃああー！」

ウィザード目掛けてバルクホルンが真っ直ぐ勢いよく突っ込んでくる。

通常の弾をシールドを張って防ぎ、風の魔力で強化された弾を撃たれる前にMG42を大きく振りかぶり銃身で殴り付ける。

「ーなっ!? うおっ!?」

腕での防御は辛うじて間に合ったもののウィザードは激しく吹っ飛ばされ、その先のビーストと追突する羽目になる。

その衝撃で風の鎖も消滅しビーストは拘束から逃れると同時に射線上から外れ、代わりにウィザードがルツキーニの照準に入ってしまったことになった。

「嘘、あっ!?」

大慌てでルツキーニは引き金から指を外そうとするが間に合わず弾が発射されてしまう。

向かってくる味方の弾丸をウィザードは不安定な体勢ながらも身を捻ってかわし、なんとか窮地を脱する。

「大丈夫ソーマ!?」

「ルツキーニ避けるー！」

「え?ーひゃあ!?」

ウィザードが顔を向けている方角をルツキーニが見ると大量の弾が飛んできた。

ギリギリのところまで全てかわしきるとウィザードの隣に滑り込むように並ぶ。

「怖かったー！」

「あんな方法で切り抜けるとは。その上ルツキーニを落としかかかって」

一つのアクションで仲間の撃墜の回避と敵の撃破を両立。そして同士討ちの危機に動揺した別の標的をすかさず狙いにかかる。

たった短い時間の中にバルクホルンの空戦技術と判断能力の高さが如実に表れていた。

「性格悪いなあちよつと」

たとえ訓練であつても手を抜かず全力を尽くす。バルクホルンの信条であり、ウィザードも彼女のそういつたところは好感を持てるのだが、今だけは少し嫌いになりかけていた。

「畳みかけるぞ服部軍曹。火力を一点に集中しろ」

「了解です！」

指示を受けてビーストは僚機の上官と共に一斉射撃を敢行する。

「ルツキーニ、シールド頼む！」

「りょーかい！」

三つの銃口より飛び出る弾にルツキーニはウィザードの前に出てシールドで防御する。

しかしペイント弾とは言え威力は実戦と等しい。ルツキーニのシールドの耐久性は連続射撃に敗れつつあつた。

シールドとそれを張る彼女に守られている間にウィザードは指輪を二つ選び取ると、まずその内の一つを使うため指示を出す。

「片手貸してくれ」

「え？…うん！」

シールドが不安定になつてしまうことを恐れたがそれも一瞬。ルツキーニはすぐに恐れを取り払ってソーマに手を差し出した。もちろんもう片方の手でシールドを維持したままで

『ビッグ、プリーズ！』

ルツキーニの手に指輪をはめてウィザードが魔法を発動させた瞬間ルツキーニの展開している魔法陣が大きくなる。

彼女の身長二つ分以上にまで巨大化したシールドは魔法発動前と打って変わって集中射撃を受けても尚綻びが生じることなく頑丈さ



を保っている。

「おー！でつかー！」

「あんなに大きなルツキーニのシールド初めて見た」

この変化にはシールドを展開しているルツキーニはもちろんのこ  
とシャーリーも驚いていた。

ルツキーニと長らく行動と戦闘を共にしてきた彼女の目からして  
もウイザードの魔法の恩恵でパワーアップしたシールドの防御力に  
は目を見張るものがあつたようだ。

「右肩一瞬だけ重くなるぞ。すぐに軽くなるから気にしないでくれ」  
『ウォーター、プリーズ！スイースイースイー、スイースイー！』

この間にウイザードは青いウォータースタイルに装甲の色を変え  
る。浮力を失った代わりにルツキーニの肩を掴むとその状態である  
魔法を自分にかける。

「大きさだけでなく防御力まで上がっているのか。ならば、服部軍曹。  
お前は左から攻めろ。私は右からいく」

「左ですね、はい！」

バルクホルンの判断は早かった。

正面からの突破を諦めビーストと共に左右からの挟撃、シールドの  
範囲外からの攻撃に切り替える。

この時ビーストは射撃をやめているがバルクホルンは頻度を抑え  
めにしていてだけで射撃自体は継続しており、ルツキーニはそちらに  
体を向けてシールドで防ぐ。

しかしこうなると背中ががら空きになってしまうわけで

「今度こそ、後ろから頂いたぜルツキーニ先輩！」

そこをビーストが仕留めようと銃を構える。

ところがルツキーニの肩を踏み台にしてビーストに向かって跳躍  
する青い豆粒のような物体があつた。

「え？なんだ？」

その青い豆粒は戸惑うビーストに向かいながら人と同じ大きさにな  
る…いや戻っていき、ビーストがその正体に気付いた時にはウイ  
ザード・ウォータースタイルの射撃を至近距離で受けてしまってい

た。

「先輩？どうして——うえええっ!？」

何が起こったか理解が追いつかないビーストは黄金の胸板に乗せされたペイント塗料を見て喉の奥から驚愕の叫びを上げた。

「やったねソーマー！作戦大成功！」

「体を小さくする魔法。そんな魔法まで持っていたのか…」

—そうか、さっきの魔法は単にルツキーニのシールドを強化するためだけのものではなかったのか。

シールドの巨大化と自分の体を縮小化。この二つを合わせることで、虚を突きやすい状況を作り出したのだ。

自分とビーストは巨大化シールドの突破に意識を注ぎすぎていたのもまんまと虚をつかれてしまった要因の一つとなってしまうた。

「だがまだ勝負はついていない!！」

ビーストはやられてしまったがバルクホルンはまだ戦える。

海面へと落下していくウィザードは一旦無視してルツキーニへと真つ直ぐ直進する。

「バルクホルンもこれで終わりにするよ!！」

ウィザードがビーストを倒したなら次は自分がバルクホルンを倒す番。二丁のMG42から放たれる弾を次々と避けつつルツキーニは照準を合わせ、バルクホルンが正面から距離を縮めようと突っ込んできたところを狙い撃つ。

「ふっ、甘いな。フランチェスカ・ルツキーニ少尉」

真つ直ぐ突っ込んでいたはずのバルクホルンは前回りの宙返りの挙動を取って弾の上を通過してルツキーニに迫る。

「何それ!？」

啞然とするルツキーニ。

まさか避けられるとは思わず動揺によって行動が止まっていた彼女の背中をバルクホルンは上方から引き金を引いてペイント弾に染め上げる。

「なんだよあの動きは」

回避と前進をまとめて行う無駄のないかつ大胆な動きにルツキーもウイザードもただただ衝撃を受ける。

二人の顔色にこっさり気持ちいい感触になりながらバルクホルンは次なる標的を求めて降下する。

海の表面を足裏でなぞるように移動して弾との接触を回避していくウイザード。彼の方からも通常の弾や水属性の魔力を帯びた弾を撃ち、海面から水柱を上げるがそれらも相手の体に触れることなく虚空の彼方へと過ぎ去ってしまう。

「一騎打ち、あの時と同じか」

「だが今回も勝たせてもらおうぞ」

「あれは無効の扱いだろ！勝手に勝ったことにしないで欲しいな！」

前回の結果はなかったことにする分にはいいが勝ったことにされるのはソーマは納得しない。

今度こそはちゃんと正しい形で勝ちたいというのは彼も同じだ。

「あれだけ動き回っているのにバルクホルンには疲れが見えないな」

「ソーマさんもあれから成長しているみたいね。魔力も立ち回りも前とまるで違う」

一進一退の戦いを見せる両者を坂本とミーナは評した。

片や実践や日頃の訓練で養った蓄積を遺憾なく発揮し、片やガリア以降の戦いの中で磨きをかけてより強くなっているのが見て取れる。

「頑張れソーマー！そこだ！いけいけ、バルクホルンをガツンとやっちゃえー！」

「お、俺はどっちを応援したらいいんだ？バルクホルンさんを応援するのが筋なんだろうけど先輩にも負けて欲しくないし…ええつと、そうだ。二人とも、二人とも頑張ってくださいー！」

その一方でルツキーニは純粹に屈託なく相方に、ビーストはどちらに絞るか迷った挙句に両方に声援を送る。

しかし戦っている二人には外野の声は全くと言っていいほど届かず相手に弾を当てることに全神経を注いでいる。

「うおっ！」

バルクホルンはウイザードの前方、足元近くの水面を撃って彼の体

を覆う程の大きな水飛沫を上げる。

(俺の視界を潰すのが目的か。だったらー)

あえて直撃を避けたということはこの間に攻撃を決めようとするはず。それを失敗に終わらせるためにウィザードは水飛沫が自分の体を隠している合間に海中へと潜る。

これであちらからは姿が消え、位置を特定できなくなる。

ウィザードはすぐに海中を移動、彼女の背後にあたる位置で上がって自分の攻撃を撃ち込むという手段に出る。

その算段を実行に移して海中から海面に出たまではよかったがウィザードの視界には本来収めるはずだったバルクホルンの背中はなかった。

「いない!?!」

「悪いな。私の勝ちだ」

バルクホルンを探す自分の後ろからの声。ウィザードがその声に不吉な予感を感じて後ろを振り返ると胴体にペイント弾の洗礼を受けた。

「読まれてたか」

完全にしてやられた。でも前の時と違って後腐れのない決着となった。

ウィザードは銃を魔法陣に戻して坂本たちの待つ陸上に踵を返して隣に降り立ったルツキーニに謝罪の言葉を言う。

「悪いルツキーニ、負けちゃった」

「なんで謝るの? ソーマも私も頑張ったんだからそれでいいじゃん。ね?」

やられた時の悔しさをもう既に捨てきっていた彼女は猫のような歯を見せる可愛らしい笑顔を浮かべてソーマを元気づける。

いや彼女からすれば元気づけようと言う気も一切なしに己のその瞬間に思った感想をそのまま素直に口に行っているだけと言った方が正しいのかもしれない。

「服部、今の戦いの中でお前に足りない物があつた。何がわかるか?」  
模擬戦を終えて帰還したバルクホルンとソーマに目をやってから

坂本は服部に対して言った。

「えっ…？えっと、もつと違う戦い方があつたとか？」

「違う」

坂本は首を振って即座に否定する。

「戦いの最中、お前は一度でもバルクホルンの方に考えや意識を向けたか？」

「…いえ。俺は、自分のことしか考えてませんでした」

「だろうな」

服部は耳の痛い指摘に苦しい顔をしながらもはつきりと誤魔化すことなく答えた。

窮地に陥った服部を何度も救ってくれたバルクホルン、風の力で自力での浮遊ができない状態でもルツキーニの支援を得て服部を倒したウィザード、ウィザードの魔法でシールドを強化して彼の身を守ったルツキーニ。

振り返ってみれば服部以外の三人はちゃんと他の存在を意識して動いていた。

「力が強い。単独での戦いならそれだけでも充分だろうが部隊の中に身を置くのならそれではいけない。周りにいる仲間たちとの連携や協力なくして大きな敵を倒すことなどできはしないからだ」

それこそが坂本が服部に最も伝えたい教えにして模擬戦が始まる前にソーマに耳打ちして実践するようにと求めた内容だった。

「例え己の力が弱くできることが少なくても周りとの連携次第で敵に大きなダメージを与えることに繋がる。私がこれからの戦いでお前に求めるのはそれを行おうとする意識や考え方だ」

「もちろん始めはやろうと思っても上手くいかないと思うわ。時には迷惑をかけてしまうことも多いかもしれない。でもそれでいいの。むしろたくさん失敗してもどれだけ時間がかかってもいいから服部さんには挑戦してほしい」

「失敗を恐れずに…」

坂本に続いてミーナから賜った言葉を服部は自身でも口にした。

「お前の失敗くらいどうとでもフォローしてやる。私を含めここにい

る仲間たちはそれができるし、そのことを不快に思ったりもしない」  
服部は他の隊員たちの顔色を伺う。

たった今模擬戦で苦勞をかけさせてしまったバルクホルンを含めて全員が坂本の言葉に異論を挟まず、服部へ温かい笑みを向けていた。

「わかりました。やってみます。俺、頑張ってみせます！」

思いを受け止め、そう言い切ってみせる服部。

彼の気持ちいい返事に坂本も呼応されて満面の笑みを浮かべる。

「ああ。お前なら必ずできる。期待しているぞ」

彼女の発した言葉。そこに誇張や忖度はなかった。

本心で彼ならば時間がかかろうともきつと一人前に成長してくれると信じていた。

恐らくはここにいる誰よりも強く

## 第五十輪 服部レポート 前編

『例え己の力が弱くできることが少なくても周りとの連携次第で敵に大きなダメージを与えることに繋がる。私がこれからの戦いでお前に求めるのはそれを行おうとする意識や考え方だ』

『初めは上手くいかないと思うわ。でもそれでいいの。むしろたくさん失敗してもどれだけ時間がかかってもいいから服部さんには挑戦してほしい』

昨日の模擬戦で坂本姐さんとミーナ中佐は言ってた。

実践では仲間のことを考えておくことが大事で、その意識を俺に持って欲しいって。

一日でも早く坂本姐さんたちからの期待に答えたい俺はあることをしようと決めた。

それは部隊の皆さんのことをもつと知ること。

皆さんがどんな魔法を持ってどんな戦い方をするのか、どんなことをするのが好きで好きな食べ物は何なのかとか戦いに関わること以外にも色々聞いてみようと思った。

戦いにも役立てて皆さんと仲良くなれる。これぞ一石二鳥。

そうと決まれば早速行動開始。善は急げだ。つてなわけだ

「俺のことをもつと知りたい?」

「はい!教えてください!」

最初はやつぱりこの人からだ。世界で初めての魔法使いウィザードで俺がすつごい尊敬するソーマ先輩。相部屋となった寝室の中で机の前に置かれた椅子に座る先輩に俺は聞いてみた。

「なんでいきなりそんなこと、あー…昨日坂本少佐に言われたことか。いいよ」

「やった。ありがとうございます!」

急な俺の願いを快く快諾してくれた。本当に先輩は頼りになって優しい。坂本姐さんが教えてくれた通りの人だ。

「さて何を話すか。そうだなあ、やつぱりまずは俺の使う魔法のことから話すか」

そう言うと先輩は自分の腰に身に着けたホルダーから変身に使う四色の指輪を引き抜いて俺に見せてくれる。

「これが俺が変身に使う指輪。もう何回か見て知ってるだろうけど、風と火、土と水の力がこの指輪にはあって俺はこれがあるおかげでウィザードとして戦ってる」

「全部で四つあるんですね。俺が見たことないのは黄色の姿ですけどそれは土でいいんですか？」

「そう。これは他よりも防御力が高くて剣が使える近距離の戦いだと重宝するんだがな、空だと使い勝手が悪くてな。この姿で飛べたらまた違ったんだろうけど」

先輩は一旦他の三つの指輪を机の上に置いて黄色の指輪を親指と人差し指で挟み込むように持った。

「言われてみれば緑の時以外は全部下に落ちてましたね」

「風の力を持つハリケーンだけしか浮かべないからな。でもだからって空の戦いでハリケーン以外の他の指輪がいらないうってことにはならない。フレイムやウォーターの姿でしかできない魔法もあるし、同じ魔法でも姿が違くと効果も変わったりするから」

「なるほど……っとメモしないとな。えっと紙、紙が……ない」

教えてもらったことを忘れないようにと俺はペンと紙を探すがここである事実気付いた。

俺の私物には紙とペンがないということに、これでは今日一日皆さんから話を聞いたとしても翌日にはすっぽり記憶から消えてしまう。

ところがそのことに困っていたのが動作や顔に出ていたのか先輩が自分の机の引き出しから小さな紙とペンを出して俺に渡してくれた。

「使うか？」

「是非。ありがとうございます」

ああ、本当になんて心の広い人なんだろうか。

先輩から貰った紙とペンを使って俺は自分の膝を机の代わりにしてメモを取る。

とペンを走らせていたが、ここで疑問に思ったことが一つ出てき



た。

「あれ？変身するのに使う指輪は四つって言ってたじゃないですか。けどもう一個ありませんでした？この間使ってたあの風の奴」

メモを書きつつも俺は先輩のある姿を思い浮かべていた。

胸部分が何かの生き物の顔のようなものがくっついてるように見えた緑の風の姿だ。

「ハリケーンリンクスのことか。それもあるな」

「水とか火とかは一つだけなんですよね？なんで風だけ二つあるんですか？」

「…それなあ、なんて言ったらいいかな」

説明に困った。そんな感じで先輩は頭を掻いている。

「ちよつと特殊でさ、最初は使えなかつたんだよ。でもブリタニアでの最後の戦いで光って使えるようになったんだよ」

「へー光って、光った？」

「光った。突然」

「そうなんですか…」

指輪が光るなんていまいちよくわからないとしても信じられないけどでも先輩がそんな嘘つくわけないから本当なんだろうな。

不思議なこともあるんだなあ。

「まあこんなところかな。指輪はまだ変身に使う以外の物もあるけど数あるし、いっぺんに一つ一つについて説明しても覚えられないだろうし、それに他の皆にも話聞くんだろう？次は誰のところ行くのか決まってるのか？」

「いえ、まだ特には…」

「だったら一緒に来るか？俺もミーナ中佐に呼び出されてるからついでにそっちの用も済ませられる」

「は、はい」

その先輩からの誘いを受けて俺が一緒に向かったのは隊長室だ。

俺はこの部屋に来るの初めてだから緊張しているけどもちろん先輩はそんなことはない。

「中佐、俺だけど。今入っていいかな？」

「どうぞ、入っていいわ」

先輩がノックして中にいるミーナ中佐の許可を聞いてからドアを開けるとそこにはミーナ中佐だけではなく坂本姐さんもいた。

坂本姐さんとは扶桑でも一緒にいて会話する機会が多かったから平気だけどもーナ中佐はほとんど初対面だし（それは他の皆さんにも言えることだけど）501の隊長だっというのもあつてまだ話す時に緊張してしまう。

ちゃんとしつかり俺の言いたいことを伝えられるだろうか

「あら服部さんも一緒なのね」

「皆の魔法とか色々知りたいらしくてさ。それで聞きに来た」

不安に思っていたら先輩が俺が頼みたいことを先に言ってくれた。でもありがたい反面本来俺が直接言わなくちゃいけないのを代わりに言わせてしまったことに申し訳ない気持ちになつてくる。

「ほう、早速私の言ったことを実践しようとしていることか感心だ」

やった。坂本姐さんに褒められた。

昔から坂本姐さんに褒められると毎回嬉しくなる。

「先輩の言った通りなんですけどいいですか？」

「ええ、もちろん」

「私も一向に構わん。何でも聞きたいことを聞くといい」

二人の承諾を貰った俺は気を良くして質問をする。

「じゃあ早速、坂本姐さんがネウロイのコアの位置がわかる魔眼で俺も見たいことがありますけどミーナ中佐の魔法っていうのは」

「空間把握よ。近くの物体や人の位置がわかるの」

「それってどのくらいの範囲までできるんですか？」

空間把握。なんだか凄そうな魔法だがどう凄いかいまいちピンと来ない。おそらく俺の理解力が足りないからだろう。

「そうねえ。どこまでできるかっていうのは試したことはないから何とも言えないわね」

「この基地の中くらいなら余裕で把握できるだろう。どうだ？試しに私たちが以外の隊員たちがどこにいるか教えてみるか」

「そうね。服部さんはまだ私たちとソーマさん以外の人のところには

行っていないのよね?」

「はい。先輩と坂本姐さんとミーナ中佐だけです」

「ちよつとお手伝いしてあげる」

俺の返事の後にミーナ中佐はウィッチ特有の耳と尻尾を出し、目を閉じて意識を集中させている。

「宮藤さんとリーネさん、ペリーヌさんが自分たちの部屋にいるわね。格納庫にルツキーニさんとシャーリーさん、それから訓練場にバルクホルン大尉とハルトマン中尉が、エイラさんとサーニャさんも二人の部屋にいるみたいね」

「すげえ、こんな短い時間でわかるなんて。これが空間把握ですか」

一歩も動かずにはつきりとどこの場所に誰がいるか直接そこに行つて確認するまでもなくわかるなんてミーナ中佐の魔法は思つていた以上に凄い。確かにこの魔法が戦いであれば坂本姐さんたちの連携が上手くできそうだな。

俺は今の目の前で起こった出来事も忘れないようにメモに書く。

「この後の行く順番としては宮藤たちのところとルツキーニたちのところ、その次にバルクホルンたちのところにするといいだろうな。エイラとサーニャは夜間哨戒があるから今日はそつとしいてやれ」

「バルクホルン大尉とハルトマン中尉には私から服部さんが来ることを伝えておくから先に宮藤さんかルツキーニさんの方に行つた方が手間と時間がかからずに済むわね」

「そうだな。じゃあそうするか」

俺が一生懸命にミーナ中佐の魔法についてまとめている間にお三方は俺のこの後の予定について考えてくれている。

ここまですてくれるなんて素晴らしい人たちなんだ。

次にやって来たのは宮藤さんとビショップさん、そしてクロステルマンさんの部屋。

部屋の中はいかにも女の子らしさに溢れた雰囲気や匂いがあつて俺は少し、いやかなり緊張してしまっている。

そんな俺を余所に先輩が宮藤さんたちにここに来た目的、俺が皆さ

んのことについて知りたいということ話を話してくれていた。

「つていうわけで服部に色々教えて欲しいんだよ」

「何を話せばいいんですか？」

「何でもいいよ。自己紹介くらい簡単な感じでもいいし、あ、でも魔法のことは絶対教えて。坂本少佐からの宿題だから」

「わかりました。じゃあ私からやりますね」

先輩とのやり取りを終えて宮藤さんが俺に体と目線を向けて話を始めてくれる。

「ええっと、名前はもう知ってると思うけど一応。宮藤芳佳です。私の魔法は治癒魔法で皆の傷を治せます。もし怪我したら遠慮なく私に言ってくださいね」

「私はリネット・ビシヨップ。皆からはリーネって呼ばれてます。魔法は撃った弾の軌道を安定させること、つて言ったらいいのかな」

「最後は私ですわね。ペリーヌ・クロステルマンですわ。使う魔法はトネールと言って雷を扱う魔法です」

宮藤さんとリーネさん、クロステルマンさんがそれぞれ丁寧に名前と魔法について言ってくれる。

傷を治す魔法に射撃を上手くする魔法に雷が出せる魔法、こうやって聞くと本当に一人一人効果が違うんだなあウィッチって。

でもだから坂本姐さんが言ってたみたいに協力して大きな力になるわけで、そう考えるとやっぱさすがすがげえや

「それじゃあ今度は服部さんの番だね」

「え？俺ですか？」

「そうだね。私たちも服部さんのこともつとよく知りたいもの。これから一緒に戦う仲間なんだし」

言われてみれば確かにそうだ。人から求めてばかりで自分だけは何もしないというのもおかしい話だし失礼だ。

「わかりました。ではいきますね」

「いきます、つてそんな身構えるようなことでもないでしょうに」

「気持ちの問題だろうからそこはまあ」

クロステルマンさんと先輩が何か言っていたようだが残念ながら

俺の耳は上手く聞き取ることが出来なかった。

そのくらい次に自分の言う言葉を考えることに頭がいつぱいだつた。

「俺は服部幸助っていいいます。扶桑の松山の出身で魔法使いビーストをやらせてもらってます」

「服部さん松山なんだ。私は鎌倉生まれだよ」

「鎌倉ですか。鎌倉は軍学校が横須賀だったんで休みの日とか出かけてましたね。たまに妹とも一緒に」

「服部さん妹いるの？」

「はい。二つ下の妹が一人、今年の八月十五日で十三になるのかな」

「私と同じ誕生日だ」

「えっ、そうなんですか？」

これはまた凄い偶然だ。まさか宮藤さんと俺の妹の誕生日が同じだなんて。

これだけでも充分度肝を抜くような衝撃の事実であるのに宮藤さんは更に俺が驚くような情報を投下してきた。

「私だけじゃなくてサーニヤちゃんも同じ誕生日だよ」

「サーニヤって…リトヴァクさん？リトヴァクさんもなんですか？」

サーニヤという名前がリトヴァクさんだと結びつけるのに時間がかかってしまった。

宮藤さんだけじゃなくリトヴァクさんまでもが妹と誕生日とは…俺も相当驚いたが妹が知ったら俺以上に驚くだろう。これは扶桑に戻って妹に会ったら真っ先に報告しないと。

絶対に喜ぶに違いない。

俺と同じで501の皆さんには憧れているから絶対そうなる。

「あれ？ちよつと待って、もしかして服部さんって私たちと同じ年なの？」

「妹さんが十三で二つ年下って言ってたからそうだね。私たちと同じ十五歳ってことになるね」

「え？俺がお二人と同じ年？」

「後ペリーヌさんともだよ」

この部屋に来てからもう驚きっぱなしだ。妹だけじゃなく俺にまで共通点があるなんて。

こんなのラッキーが過ぎる。

「凄い偶然だね。でもおかげで一気に服部さんと距離が縮まった気がする：ねえ服部さん、だからってわけでもないけど今から友達にならないかな？私のことは芳佳とか宮藤って呼んでよ。もちろん服部さんが良ければ」

「私のこともそんなビショップさんとかじゃなくてリーネでいいよ。そっちの方が嬉しいから」

「わかりました。改めてよろしくお願いします。芳佳、リーネ」

「ふふ、敬語」

「あつ、すみませーごめん、リーネ」

「うん、それがいいな。よろしくね幸助くん」

敬語を止めるようにと言われたのにすぐ戻ってしまった俺をリーネは怒るわけでもなく柔らかい雰囲気で指摘してくれた。

尊敬する先輩としてではなく同じ年の友達として仲良くすることになった二人と握手がしたくて手を伸ばした。

すると二人はにっこりと笑って俺の手を握り返してくれた。

温かい手だった。二人の優しさがそのまま表れているようで俺はなんでか嬉しく思えてくる。

「ペリーヌさんもいいよね？」

「別に友達になる分には一向に構いません。でもそれはそうと服部さん。私、貴方に言いたいことがあるんです」

「はい」

「貴方坂本少佐のことを何と呼んでらっしゃいますの？」

「えっ？」

思いも寄らぬ質問に俺は戸惑った。つい目を動かして他の皆さんの顔を見てみると芳佳とリーネは俺と同じようにキョトンとしているようだ。先輩はなんだか苦笑してように見えた。

「坂本姐さんって呼んでますけど」

「そう、その言い方。坂本少佐と親しくしているだけでも問題ありだ

というのにもことあるうに姐さんとは何事ですの」

俺が答えると何故だかクロステルマンさんが声を大きく出して顔を近付けて来る。

俺はクロステルマンさんの機嫌を悪くするような何かをしてしまったのだろうか。

「えっ？でも…坂本姐さんからそういう風に呼んでもいいって言ってくれたんで言ってるだけですけど」

「いくら坂本少佐本人が仰ったからといって本来坂本少佐は貴方たちがそんな軽々しく呼んではいけないお方。宮藤さんといい貴方といいそれをキチンと理解しておりますの？」

「私も…？」

「まだそういうとこ治ってなかったんだな…」

なんだなんだ？どうして坂本姐さんを姐さんって言ったらクロステルマンさんがこんなに怒るようなことになるんだ？

「何がいけないんですか？俺が坂本姐さんって言ったらクロステルマンさんに何の問題があるっていうんですか？もしあるなら遠慮しないではつきり言ってください。俺、絶対直しますから」

「あ、いえ…」

もちろん俺はクロステルマンさんとも仲良くしたい。俺に問題があるなら謝りたいし、そこは直したい。

だからこそクロステルマンさんにそこを教えて欲しいのにクロステルマンさんはなかなか次の言葉を言ってくれない。

「その、はつきりとなんて言われても言えるわけが…ああもう！なんでもありませんわ！」

「なんで!？」

「自分で考えてごらんなさい！」

「ええっ…」

どう考えてもどう見てもなんでもないわけがない。クロステルマンさんの言葉と態度が合っていないように見えるのは俺だけなのか…それに顔もなんか赤っぽくて変だし？

どうすればいいのか助けを求めるように俺は先輩や芳佳たちの方

を見ると、芳佳とリーネは俺と同じように疑問を感じていそうな顔をしていて先輩は苦い顔をしている。

こんな状態じゃペリーヌに聞いても無駄だし後で先輩に聞いてみようか。そうだな。それが一番だ。



## 第五十一輪 服部レポート 後編

「なんでクロステルマンさん、じゃなかった。ペリーヌはあんなに言ってきたんですかね。俺が坂本姐さんのことを姐さんって呼ぶのに」

「あれはあんまり気にしないでいいぞ。そのなんていうかペリーヌは前からあんな感じだ」

先ほどの坂本姐さんの話になってからのペリーヌの態度の変化が妙に気になりながらも俺と先輩は別の場所を目指していた。

今度向かう場所は格納庫。ミーナ中佐の空間把握によるとそこにはイエーガーさんとルツキーニさんがいるみたいだけど、先輩には何か不安に思うようなことがあるみたいだった。

「あの二人が格納庫でこの時間、この暑さってなるとなんか嫌な予感するな」

「嫌な予感? どうしてですか?」

「いや、少しな」

そんなことを言い合っている内に格納庫が見えた。

俺はすぐさま入ろうとするがそんな俺を先輩は手で止まるように合図した。

「ちよつと止まってな一応念のため確認する」

「は、はい」

入り口の壁に体をくっ付けて先輩は顔だけを出して格納庫の中を見る。

その様子がなんだか敵がいるか警戒しているように思えて俺としてはそんなことをしなければいけない理由がわからなかった。

そんな風に俺が疑問の目で見ていると先輩は顔を引っ込めるなり目を片手で覆って困ったように顔を上に上げた。

「やっぱりかー。まいったな」

「何がですか?」

「悪い服部、上着貸してくれるか?」

「上着ですか? いいですけど」

先輩は俺にそう言いながら自分の上着のジャケットを脱ぎだした。一体先輩が中で何を見たのか俺にはさっぱりだけどとりあえず先輩と同じように自分の着ている上着を脱いで渡した。

「ありがとう」と言ってくれた先輩は俺から上着を取るとそれを肘にかけて別の手で指輪を出して指に付け、そして声を張って中に呼びかける。

「シャーリー聞こえるかー？」

「聞こえる。なーにー？どうしたー？」

先輩の声に対しての返事か格納庫の中から聞こえてくる。この声はイエーガーさんだ。

ミーナ中佐の空間把握の正確さがまた証明された。

「服部からシャーリーとルツキーニに話があるんだ。今いいかー？」

「話？いいよ。こつち来いよー」

「行くけどその前に上に何か羽織ってくれー。羽織る物ないなら今からそつちに渡すからさー」

「わかった。頼むー」

そんな言葉をイエーガーさんと掛け合って先輩はベルトの前に指輪を嵌めた手を出して魔法を唱える。

『コネクト、プリーズ！』

ベルトから音が鳴ると真横の空間に現れた緑色の魔法陣の中に先輩は自分の手と一緒に二つの上着を突っ込む。

この魔法はこの前の戦いで先輩が使ってた魔法陣の中から物を出したりしまったりできる魔法だったかな。

模擬戦の時も思ってたけれどすごい便利な魔法だよな。俺も使えたらいいんだけど俺のベルトには先輩の指輪が入りそうな穴がないからきつと使えないんだろうな。

「いったかー？」

「来てるぞー」

「それ着終わったら教えてくれー」

今の会話からして先輩はイエーガーさんに上着を渡したのは間違いない。

でもなんでだ？なんでわざわざそんなことをしなくちやいけないんだ？

「着終わったぞー」

「わかった今行くー…よし、大丈夫そうだな。待たせたな服部、でもなるべく顔から上見て話した方がいいぞ。つていうかそうしてくれ」

大丈夫ってなんだ？さっきまで危険な物があつたつてことなのか？

格納庫の中だし多少危ない物があつても不思議じゃないだろうけど。それに顔から上を見て話せつていうのもいまいちわからない。

などと思いつながら先輩が続いて中に入ると先輩のジャケットを着たイエーガーさんがストライカーユニットの前にいた。

「悪いな服借りちやて。後で洗ってちゃんと返すからさ」

「いや急に押しかける形で来たのはこつちだから」

「それで？話つて？」

「実は今俺皆さんの魔法とかの話聞いてましてそれでイエーガーさんとルツキーニさんからも話を聞ければと思つて」

俺は言われた通りイエーガーさんの顔を、もつと言うなら目をじっくり見てお願いをする。

「なるほどなーそういうことか。よし、だったら遠慮なく聞いていいぞ。ほらこい」

「あ、でもいいんですか？今何かしてたんじやないんですか？」

俺たちが来たのは突然で事前に連絡もしていなかった。だったらイエーガーさんはさつきまでずっと何かをしていて俺はそれを中断させてまで自分の都合を優先させてしまうことになる。

もしそうだとすれば俺は今回はやめて別の機会でも大丈夫だと伝えるつもりだったが、イエーガーさんの次の言葉によってそれは杞憂という奴に終わった。

「平気平気。肝心なところはほとんど終わつてるから」

俺に話しかけながらイエーガーさんが手を置いたのはストライカーユニット。その周りの床には部品や工具が多くあつた。

これはつまりイエーガーさんはさつきまでこの工具とかを使つて

ストライカーの整備してたのだろうか。

「ストライカーユニットの整備してたんですか？」

「整備ってよりかは改造だな。ほとんど毎日やってる」

「自分でできるなんてすごいですね。大変じゃないですか」

ストライカーユニットの整備っていうのは大抵整備を担当する兵士の人がやるはずなのに。イエーガーさんは自分でやるんだなあ

「大変とは思わないかなちつとも。私は好きでやってるから」

「スピードが好物だもんなシャーリーは」

「そりやあもう好物も好物さ。音速を超えるのが私の夢だしな」

夢、夢か。最前線で戦い抜いて毎日大変な訓練をこなすだけでもしんどい話なのにこうしてストライカーに時間を割くなんて並大抵の苦労ではないはずだ。

でもそれを苦とも思わずにできるのはきつと

「イエーガーさんにとってその夢はそんなだけ大事ってことですね。くうー、かっこいいな。夢のために一直線に進むって」

「二回目だな。その言葉言われるの」

「二回目？」

「ちよつと前にもさ、この話になった時同じようなことを言ってくれた奴がいるんだよ。今の服部の言葉でその時のこと思い出した」

「へえ、誰なんですかその人？」

「さー誰だったっけなー」

なんだか明るい笑顔とは違った笑顔でシャーリーさんは俺とは違う方向を見た。

イエーガーさんと同じ方向に目を向けてみるとそこには腕を組んであらぬ方向に目が泳いでいるように見える先輩。

これは

「もしかして…先輩は知ってるんですかその人のこと！」

俺の言葉に先輩とイエーガーさんは物凄く大きく体を震わせた。

「お前マジか…ほぼ答えだったろ今」

「ははは！そつちいくかー。面白いな服部は」

先輩は信じられない物を見るかのような目で俺を見て、イエーガー

さんは大きな声でとても楽しそうに笑っている。

今の俺の発言ってそんなに変だったのか？

「ところでルツキーニさんは？」

と、ここで俺はあることに気付いた。

そういえばシャーリーさんと一緒のはずのルツキーニさんの姿が見当たらない。

ルドガーの姿を探して俺が首を左右に動かしたその時だった

「いんまつさら気付いたかー！」

「ぎよあああああ!!？」

俺の背中に不意打ちのようにやって来た大きな声と衝撃、軽く柔らかな感触に俺は情けない悲鳴のような叫びを上げてしまった。

しかしそれでいながらも体は反射的に背中にある物を落としてはいけないと判断したのか俺の両手は自然と後ろにある物を支えた。

「ルツキーニさん!?!上にいたんですか!？」

「気付くの遅いよー驚かそうと思ってずっと待ってたのに」

俺におぶられる形となっていたのはルツキーニさんだった。

どこにいるのかと思っていたら上の鉄骨の上にあったのか。でも向こうがそのつもりだったとはいえ今の今まで気付かなかったなんて申し訳ないな。

「すみません。ルツキーニさん気付かなくて」

「いや。受け止めてくれたから許してあげる。後それとルツキーニでいいよ」

すぐに謝るとルツキーニさんは俺を許してくれる。『ぴよん』とか可愛い音が付きそうな軽い動作で背中から降りて両手を腰に当ててルツキーニさんは俺に言ってきた。

あれ?よく見てみたら俺の上着ルツキーニさん着てる。

「私のこと知りたいんですよ?なんでも聞いて!」

「はい、もちろん!ではルツキーニさん、じゃなかったルツキーニから質問するな」

「どんとハーッ」

俺が始めにまずルツキーニさん改めルツキーニから質問をしよう

と思った時

「騒がしいと思えばお前たちか。リベリアン、ルツキーニ」

「バルクホルンさんにハルトマンさん」

俺たちの入ってきた入口から新しい声がした。それはバルクホルンさんとハルトマンさんだ。

「ミーナから事情は聞いた。私も協力しよう…というかなんという恰好をしてるんだお前たちは」

「服部も案外真面目なんだね。でもほどほどにしときな、あんまり真面目がすぎるとトゥルーデみたいになっちゃおうよ」

バルクホルンさんにハルトマンさんがそう返した。

二人共カールスラントのエースで戦場では息の合った連携をする。と坂本姐さんから聞いていたが、シャーリーさんやルツキーニさんみたいに性格の似た者同士じゃなく真逆の性格の二人であることはこの基地に来て初めて知った。

だから俺は想像とはだいぶ違う二人の会話に驚いてしまう。

「でも俺一日でも早く一人前になつて皆さんの役に立てるようになりたいんです。じゃないと妹に合わせる顔がないですから」

「妹…?」

「服部にも妹がいるんだ」

「はい。妹も同じ訓練校の生徒でウィッチとして頑張ってるんです。俺がここでだらしなかったら妹にまで恥をかかせるかもしれません。もしそんなことになったら俺は妹に顔を合わせられません」

501の皆さんにもだが何よりも妹に恥ずかしい思いはさせられない。そんなことはないと思うが万が一、俺のせいで訓練校でいじめを受ける可能性があると思うと俺には尚更しつかりと一人前にならなきゃいけない責任と義務がある。

そんな俺の覚悟と思いが伝わったのかバルクホルンさんは俺の肩に手を置くと、別の手で握り拳を作つて俺の前に出す。

「己のため、そして妹のためにか…素晴らしい、素晴らしい心意気だぞ服部軍曹。私はお前が気に入った」

「本当ですか?」

「戦いの動きは私がみっちり仕込んでやる。この前の訓練を見た限りではしつかりと時間と経験を積みめば光る物を持つているはずだ…ただお前自身が強くなりたいたいという気持ちを持ち続けなければその時点で私は指導を放棄するぞ」

「はい！どんな訓練だって耐え抜いて全力でご期待に答えてみせます！」

「そうか、いい返事だ！」

「はい！」

バルクホルンさんが嬉しそうな理由はわからないがこんなに俺に親切にしてくれることは光栄だしたまらなかつた。

なんてたつてバルクホルンはカールスラントの大エースなんだから。

よし、バルクホルンさんとの訓練も頑張るぞ！俺！

「トウルーデが変になった…」

「シャーリー、なんでバルクホルンご機嫌なの？」

「仲間ができて嬉しいんだよ。なあ？」

「俺に言われてもな…でもそうなんじゃないか？あんなに嬉しそうだし」

それからバルクホルンさんたち四人の魔法や好きなこととか食べ物とかを聞いた。

メモすることが多くて俺はシャーリーさんが用意してくれた木箱と机の上で必死に頭に入れた情報を紙とペンを使って文章に起こしている。

「後どこにいくんだ？それとももう終わり？」

「エイラとサーニヤがまだだな。でもエイラはともかくサーニヤはな」

「そっか、難しいよね」

俺の近くでシャーリーさんと先輩、ルツキーニさんが話している。

「私たちと違って夜の任務が多い上に本人の性格もあるからな。私も

サーニヤとは話せてないな」

「言われてみたら俺もサーニヤとあまり話したことないな。二人きりの会話なんてそれこそ一回もないんじゃないや。いや一回あったわ。とびきりのが」

聞く限りだとどうやらバルクホルンさんも先輩もリトヴヤクさんと話す機会はないようだった。

でも一人だけ、ハルトマンさんだけは違ったみたいだ。

「私はあるよ。二人きりで何回もね」

「なに？」

「嘘じゃないよ。どうしても疑うってならサーニヤに直接聞いて確かめてもらっていいよ」

「ハルトマンさん、今度リトヴヤクさんと話す時があったら俺もそこにいていいですか？」

「ん、いいよー。サーニヤも嫌じゃないだろうしね」

やった。他の皆さんとは話ができてるのにリトヴヤクさんとだけ面と向かって話ができないなんて嫌な事態は回避された。ハルトマンさんにはとつても感謝したい。

「サーニヤに関してはそれで良しとしてエイラにはこの後会いに行ったらどうだ？」

「サーニヤと部屋で寝てるんじゃないかかったか？」

バルクホルンさんが先輩と俺に向かって言った。

バルクホルンさんは返事をした先輩の顔を見て話を続ける。

「さつき廊下ですれ違った。たぶん一度目が覚めて寝付けずに歩いているんだろう。それにエイラがいる時にサーニヤがいるとそのちよつと、あれだろう」

「あれ？あれってなんですか？」

「確かにそれもそうかー」

「したい話もできないかもだからねー。エイラにはサーニヤとは別々の時に話すのがいいと思うよ」

バルクホルンさんの言う『あれ』の意味がわからず俺は首を傾げるが先輩やハルトマンさん、そしてイエーガーさんやルツキー二もその



『あれ』というのがわかっているようだった。

皆さんの反応が俺は詳しく教えてもらおうと聞いてみたが『知らなくてもいいことだ』とバルクホルンさんに説明を拒否されてしまった。

「ハルトマンが言うには食堂に向かったって言ってたが。あ、いたいた」

結局皆さんの言う『あれ』の意味がわからず聞けぬまま俺は先輩とユートイライネンさんに会うために食堂に足を運んだ。

食堂の席の一つにはハルトマンさんからの情報通りエイラさんがいてカップに入れた飲み物を飲んでるところだった。

「エイラ、今時間いいか？」

「ん？どうかしたか？」

「服部が話を聞きたいんだって。教えてあげてくれないか？」

「話？」

先輩が俺に顔を向けてくる。自分の口から説明しろということだろう。

「これからの戦いのために皆さんのことをもつと知ろうと思つて話を聞いて回ってるんです。ユートイライネンさんにも話いいですか？」

「あー坂本少佐の言つてたことか。まあ別にいいよ。偶然こつちも時間の潰し方に困つてたし。付き合つてやる」

「ありがとうございます」

エイラさんにも許可を貰つて安心した俺はエイラさんの向かいの席に座つてメモとペンを取り出して情報活動の体勢に入った。

先輩はというと俺とエイラさんから二つほど離れた席に座つていた。たぶん邪魔にならないように気を遣つてくれたんだ。

「それで何が知りたいんだ？」

「一番知つておきたいのはエイラさんの使う魔法ですかね。そこは絶対教えて欲しいです」

「未来予知だよ。敵の取る動きとか攻撃が手に取るようにわかるんだ。例えばネウロイのビームとかは撃たれる前に軌道が見えるから

ササツと避けてズバツと斬り込める」

「むっちや凄いいじゃないですかそれ。それでシュシュツと撃つてパツてネウロイから離れられるわけですね」

「そうだよそれそれ、なんだよくわかってるじゃないか。ちよつとだけ見直したよ」

「なんで今ので通じ合えるんだ…」

敵が行動を始める前にその行動がわかるなんてもし自分がネウロイの立場に立つたら卑怯だとかズルいとか悪くて汚い言葉を言ってしまうそうなくらいユーティライネンさんの魔法は強力そうだ。

「エイラはシールド一回も使ったことないんだったよな」

「自慢じゃないけどその通りなんだな」

「そっか。攻撃が全部避けれるならシールド使う必要ないですもんね」

そういえば前に妹と501の皆さんの話で盛り上がった時に言っていた気がする。

501にはこれまで一度の被弾もなく、シールドも開いたことのないスーパーエースがいるって。

それはユーティライネンさんのことだったんだな。

「後他にはあるか？」

「他ですか…そうですねユーティライネンさんにとって誰と一緒にの時間が一番戦いやすいって感じます？」

「そりゃあもちろんサーニヤに決まってる」

「リトヴァクさんですか」

俺の質問にユーティライネンさんは迷うことなく言った。そういえば夜間哨戒でもリトヴァクさんと組むのはユーティライネンさんがほとんどだって坂本姐さんだったか先輩だったかどつちか忘れたけど言ってた気がする。

「そう、サーニヤ以外の奴とは組めないんだな。私のパートナーはサーニヤを置いて他にいないんだな」

「むしろエイラがサーニヤじゃない誰かと組んでるところなんて見たことないぞ。あ、でも宮藤と三人で夜の空飛んだことはあったよな」

「あれはあの一回だけだろ。宮藤もそれなりに悪くはなかったけど、でもやっぱり私にはサーニヤしかないんだ」

なんで芳佳が駄目でリトヴャクさんはいいんだろう。相性の問題か？

そこも気になったけどひとまずそのことは置いてくとして俺は別の質問をユーティライネンさんにぶつける。

「リトヴャクさんとはどんな感じなんですか？」

「ど、どんな感じって？どういうことだよ」

「ユーティライネンさんから見てリトヴャクさんがどんな印象なのかとか、ユーティライネンさんはリトヴャクさんのことをどう思ってるのかみたいなの」

「どう思ってるか、ってそりや…そりや、サーニヤは可愛くて綺麗で私の…私の…」

「私の？」

いきなり声が小さくなったユーティライネンさん。顔が赤くなっているように見えるけど気のせいかな？

「わ、私の…私の…だー！こんなこと言わせるなー!!」

「ええっ!？」

なんとユーティライネンさんは両腕と共に大きな声を上げた。

その理由は俺にあるのはさすがにわかる。

でも今の何がユーティライネンさんを傷つけてしまったのか俺には原因がわからなかった。

…なんか似たようなことさつきもあつたような

そうこうありながらもユーティライネンさんからの情報収集を終えた俺と先輩は自分の部屋に戻った。

その頃にはいつの間にかもう夕方になってしまっていた。

「とりあえずサーニヤ以外には話聞けたな」

「ありがとうございます先輩。わざわざ付き合ってくれて」

椅子に座った先輩に俺はベッドの上に座りながら感謝の言葉を伝

える。

俺のために貴重な時間を削ってくれた先輩には今日だけでも本当に感謝してもし足りないくらいだ。

「礼なんていちいち言わなくていいって。仲間なんだし遠慮なんかするな」

「はい」

そう言ってくれると少しでも気が和らぐ。

協力してくれた先輩のためにも益々一人前にならないといけなくなってしまうた。

「でも先輩ミーナ中佐に話があったんじゃ？」

しかしここで俺は思い出す。先輩はミーナ中佐のところに用事があるから俺について来てくれたはずなのにその用事をしないまま気付けば最後まで俺と一緒に行動してくれた。

それはありがたいし嬉しいけど俺のせいで先輩の用事ができなくなったんじやと思った瞬間申し訳ない気持ちが出てくる。

「あ、あー……それは明日にするよ。急ぎのことでもないし」

「そうですか？ならよかったですけど」

本当によかった。先輩の迷惑になつてなくてほんとうによかった。

「そうだ。もう一つだけ聞いていいですか？これも聞いてみたいことだったんですよ」

「俺に？なんだ？」

すっかり忘れてた。俺にはまだ先輩に聞いてみたい質問があったんだ。この基地に来てからっていうよりもっと前、俺が魔法使いの力を手に入れた時から是非とも聞いてみたいと思った質問が

その質問を俺は口にした。

「先輩の使つてるベルトの中にもいるんですか？力を貸してくれる言葉を話す生き物なのって」

## 第五十二輪 大いなる獣

『先輩にもいるんですか？力を貸してくれる生き物みたいなの』

一瞬服部に何を言われているのかの理解が出来なかった。

体感で数分、実際の時間経過で数秒の時間を要してそれが俺の中にいるドラゴンを指しているのはやっと飲み込めたがその時にはまた別の疑問が出てきた。

先輩にもという言い方からしては服部にも俺の中にいるドラゴンのような存在がいてしかもそれを認識しているわけで、その事実を受けて俺は思わず言葉を失ってしまった。

しかしそれでも何か返さないといけないとなんとか言葉を返した。

「お前にはいるのか？」

「はい、あいつが言うには俺のこのベルトの中にいるみたいなんですよね。俺が寝てる時とかたまに向こうから話がしたいって話相手になってくれたりして、あ、ちなみにそいつはキマイラって言う名前の奴なんですけど」

次に服部から出てきた言葉に俺はますます驚いた。服部はその存在キマイラと会話をしている、その上かなり友好的な関係を築いている様子なのだから。

とても信じられないような話だが服部が言うのだ。嘘であることはまずないとみていい。

「その生き物、キマイラ？っていうのはどんなのなんだ？」

「見た目ですか？見た目は動物っぽい感じ、ですかね。鳥とか牛とかの部分があつて、それにむっちゃやでかいです。山くらいあります」

「話してる時は？」

「うーん結構いい奴ですよ。俺の悩みとか聞いてくれたり、昨日の夜なんかは模擬戦の感想とか聞いたりしました。ダメ出し多かったですけど」

やはり服部とキマイラの関係は俺やドラゴンとは全く違うようだ。俺があればと会話した回数なんて片手で数えられる程度だ。ましてや悩みを聞いてもらえるなんて想像もつかない。

「俺も話せるか？そのキマイラと」

「どーですかね。俺もキマイラのこと誰かに話したのこれが初めてで俺と話す時もいつも向こうから一方的なんで自分の好きなタイミングじゃないんですよ。でもやってみましょうか…どうぞ先輩、使ってください！」

そう言うのと服部は変身に使うベルトを掴んで俺に差し出してきた。

この中にキマイラがいるのか。

これを、これを…

「どうすればいいんだ？」

やり方がわからず俺は服部に訊ねる。

「どうすればいいんですかね…俺もよくわかんなくて。俺がキマイラと話す時は寝てる時でいつもベルトに触ったまま寝てるからたぶん」

「とりあえず触ってみるか」

いまいち参考にならないあやふやな情報に首を傾げなくなる気持ちになるものの俺は服部の持つベルトに手を伸ばす。何が起きるのか不安でいっぱいだったが

そして表面に触れた…という実感を体が感じるよりも前に俺の見ていた景色は歪み、あつという間に真っ黒になった。

☆

「え？…」

服部のベルトに手を伸ばしたはずが俺の目前にはベルトはなかった。

それどころか服部もおらず、自分のいる場所も基地の部屋どころか屋内ではなくなっている。

緑の溢れる自然とそれに囲まれた木で建てられた屋敷。欧州では見たことがない光景だ。

どこか異国の地にある屋敷、その庭の中に俺は一人で立っていた。

「服部？服部がない？それにここ、どこだ？」

自分に身に起きた現象への理解に追い付けない俺は服部の姿を求めてひとまず今いる場所から動いてみる。

雲一つとしてない晴天の下にある屋敷を、ミンミンと煩くなくセミの鳴き声を聞きながら歩いていると外と中を隔てるドアのない部屋に行き着いた。

壁に寄りかかって顔だけを出して中の様子を見てみると坂本少佐の部屋にあるのと同じような畳の敷かれた大きな部屋に赤子を抱いた一人の女性と彼女の横で眠る幼子がいた。

幼子の方は赤子よりは大きく少なくとも一目見ただけで男だとわかるくらいには成長している。

「子ども？…男の子？まさか服部か？そうだ、どこか服部の感じがする。じゃああの女性が服部のお母さんで寝ている子は服部が言っていた妹？」

よくよく見てみれば幼子の方に服部の面影を感じる。ということに隣にいる女性が服部の母親で彼女の抱いている赤子が服部の妹：その可能性を思いながら彼女たちを見つめる俺の足元に大きな影が覆い被さった。

『ようこそ来てくれた。歓迎するぞ』

背後から突然聞こえてきた威厳のある声。素早く俺は後ろを振り返るとそこにいたのは一匹の大きな獣がいた。

屋敷を大きく上回る体躯を持ち、その体躯には赤い牛や藍色のイルカを思わせるような部分と体躯に負けない大きく頑丈そうな翼を有している。

音も気配もなく目の前に姿を現した巨大な存在に呆気に取られていると気を利かせてくれたのかあちらの方から声をかけてきた。

『こうして直接会うのは初めてだな。魔法使い、いや我も幸助に倣って先輩と呼ぶべきかな』

「その見た目あんたがキマイラ？なんで俺のこと知ってる？」

『ベルトを通じて幸助の記憶を共有しているからな。加えて魔法使いの力を与えている時は我も幸助が見ているのと同じ景色を見ている。』

お前だけでなく他のウィッチたちのことも大体知っているぞ』

「なるほど…」

記憶の共有とかの原理はともかく今俺の目の前にいるとてつもなく大きな獣がキマイラで、あっちが俺のことを（ついでに言うと501の皆のことを）知っているのだというのはわかった。

「ここはどこなんだ？」

『服部幸助という人間の心の中、奴のこれまで過ごしてきた時間の中で最も自分自身に根強く残った景色を表したものだ。そういう意味では奴の過去と言い換えてもいいかもしれない』

服部の心の中にして過去を表した世界。キマイラの言葉を鵜？みにするならばこの見知らぬ光景もこの中に俺が放り込まれたことにも説明が付く。

そしてこの状況を引き起こしたのは

「最後に残ってる記憶からして俺をこの世界に招いたのはあんた、つてことでいいんだよな？なんのために？」

『質問が多いな。まあ、よかろう。久しぶりの幸助以外の話し相手、何よりあいつが尊敬して止まない先輩だからな。もう少し付き合つてやろう。お前の想像通りお前の意識をこの世界に引つ張つたのは我だ。そしてその理由はお前と話をしたかったからだ』

「話？」

何度目かの疑問を口にする俺にキマイラは文句に近い言葉を言っていたものの説明をしてくれる。

『結構いい奴』という服部の評判は今のところ間違つてなさそうだ。

『幸助を介して見たお前に興味があつてな。どれ、直接お前のことを調べさせてもらおうぞ』

言うなりキマイラは俺に数歩近付いて右の前脚、いや手つて言ったらいいのか？…を俺の額に伸ばしてきた。

そこから黄金の光が水のように流れ出てきて俺に注がれる。キマイラが脚を降ろすまでそれは光を失うことはなかった。

『ふむ、これはこれは。お前もお前で面白い奴だな』

「俺に何をした？」



キマイラのその言葉に俺は警戒する心を戻した。もしかしたら睨みつけるように相手のことを見ているかもしれない。

『そう身構えることはない。記憶を覗き見たただけだ。前もって許可を取らなかつたのは謝るとしよう。悪かつた』

記憶を見るだなんてそんな真似ができるのか。それは凄いと見えるが黙って自分の過去を好き勝手見られるのはいい気はしない。

謝ってくれたのは予想外だったが

『そのお詫びと言ってはなんだがお前の知りたがっていることに答えよう。幸助のベルトの中にいる俺が何物でどういう存在かが一番知りたいのだろうか?』

「あ、ああ……」

たつたちよつとの時間脚を翳しただけでそこまで知られていたことに俺は戸惑いつつも返答する。

『我はかつて魔力を有していた人間たち、今のお前たちで言うウィッチのような人間たちと敵対関係にあつた。太古の昔はネウロイとは別に強大な力を持った異形が蔓延っていた時代でな。我もその中の一つだった。だが戦いの中で我は人類によつてある道具の中に封印される失態を犯してしまった』

「その道具っていうのが服部の持つベルトか」

『ご名答、封印された我は二度と外の世界に解き放たれることのないよう遺跡ごと地の中に存在を隠された。だがつい数か月前に扶桑で起こつた地震がきっかけで扶桑の軍がベルトを見つけ再び外の世界へ出る事となつた』

今のところ出てきた話をまとめると、キマイラは大昔の時代に人類に牙を向いた化物の一体であり、ウィッチにあたる存在を始めとする人類によつてベルトの中に、そして遺跡の中に封印されていた。

ところが最近になって遺跡とベルトが発見されたことで、服部と協力関係を結び俺の前に姿を見せるようになったと

「今の話が本当ならあなたは人類に恨みを持ってないのか?自分を長い間ずっと閉じ込めてた俺たち人間に何かしようとか思つてそんなものだけど」

『恨みか…封印されて最初の頃はそんな感情もあつたような気がしないでもないが今はこれと違ってないな』

意外な答えだったが実際その言葉が嘘ではないとも思える。ネウロイと同じくらいの大きさと力を持っていて昔は人間と敵対していたにしては敵意を微塵も感じさせない。

『実を言うと昔も人間に対しては敵対心はおろか関心さえ持っていないかったというのが正直なところだな。他の周りの奴らがそうしていたからなんとなく我も、と言った感じだ。だが今は昔とは違ってお前たち人間というものに興味を持っている』

「服部?」

『ああ、そうだ。奴は面白い。俺を見つけた扶桑の軍人たちが訓練生も含めて何人もあのベルトを使って変身しようとしたがその中で唯一奴だけが私の興味を引き寄せ、協力を得ることに成功した』

キマイラはどこか嬉しそうに誇らしげな口調で語る。人間で例えるなら孫の成功を喜ぶおじいちゃんみたいでそう捉えてみるとなんだか可愛く見えてくる。

…そんな感想は置いといて俺は質問を再開する。

「服部を気に入ったのに理由があるのか?」

『その質問に対する答えはこの世界そのものだ』

「世界そのもの?」

『奴は妹を始め自分の身近にある大切なものを守るために今日まで生きていく。この時から変わらず、自分に力があるかないかに関わらずな。我が心を覗いてきた他のどんな人間にもなかったその真つ直ぐさに惹かれた、といったところか』

その言葉を聞いて俺はこの世界の服部に視線を移す。

この世界にいる服部はこの景色を覚えているかどうかすら定かではない年齢のはずだ。なのに生まれたばかりの妹と一緒にいる景色が今も心に強く残っているというのは相当なもの。

そこまで妹のことを大事に思っていて、そんな妹に恥じない自分であるために真つ直ぐに生きていこうとする真つ直ぐな心に惹かれたのだと言うキマイラの言葉には俺も同意できる部分があった。

『さて、さすがに話し疲れた。今日のところはこの辺でお開きにする  
としよう。ああ、言い忘れていた。お前の中にいる存在についてだ  
が、残念なことに我ともかつていた我と同じような存在とも違う。た  
だ言えることがあるとすれば、それとの関わりは大事にしておくのが  
身のためだぞ』

「それってどういう」

『幸助のことをよろしく頼むぞ。先輩よ』

キマイラに詳しいことを聞こうとする前にキマイラの体全体が黄  
金に輝いて、光が川の水のように俺に向かって流れて来る。

目を覆う眩しい輝きと得体の知れないものであったために腕で身  
体を守る姿勢を取るが、それはまるで意味を為さずそして俺の意識は  
この世界に來た時と同じ感覚に襲われた。

☆

「う…」

「先輩？起きたんですね先輩！よかったあ」

目が覚めると俺の体にくっつかの情報がやって來た。服部の声、体  
にかけられた布団の温かさ、照明の眩しい光、どれもさつきまでいた  
世界では感じられなかったものだ。

つまりそれが意味するのは

「戻ってきたのか俺は」

仰向けでベッドの上に横たわっていた体を起こす。まだ頭がぼん  
やりとする。

そんな俺を横に置いた椅子から服部が氣遣ってくれている。

「心配しましたよ。俺のベルトに触ったら急に倒れて眠ってたんで俺  
パニックになっちゃって。とりあえずベッドに寝かせてみたんです  
けど大丈夫ですか？どこも変なところありませんか？」

「どこも悪いところはない。悪いな、迷惑かけて」

もしも俺が逆の立場だったとしても服部と同じようになる。ここ  
は一言感謝の言葉を言っておきたかった。

「迷惑だなんて、何事もなかったなら何よりです。あ、それでどうでしたか？」

「どう？ああ、会って話したよ。キマイラと」

「話せましたか。キマイラの奴先輩になんか失礼なこととか言ったりしてませんよね？」

「気のいい奴だったよ。服部から聞いてた通り」

「ならよかったあ。安心しましたよ」

「これでもし冗談でも失礼があったと言ったらきつと服部は自分のことのように俺に謝ったのだろうか。」

「そんな想像があつさりできるし、そんな服部だからキマイラも気に入って力を貸しているのだろう。」

「ほんとよかった。キマイラの奴俺に言うみたいに先輩にとんでもなく失礼なこと言ったら許さなかつたですよ。いやあ、ほんとうによかつた」

「服部が何かをほつとしたように言っているが俺の耳にはそれは一切入ってこなかつた。」

「頭の中にキマイラの言葉が蘇っていたからだ。」

「お前の中にいるそれとの関わりは大事にしておくのが身のためだぞ」

「俺の記憶の見た時にドラゴンのことも知つたのだろうかだとすると引つかかる。」

「キマイラは姿だけならまだしもドラゴンがどういった存在かまで把握したような口振りだった。」

「もしも俺の見立てが正しかつたとしてキマイラは俺の記憶だけを元にドラゴンの存在を見抜いたのか？」

「中に宿している俺ですら『自分の中にいて力を与えてくれる謎の生き物』というごくくらしいかわからないのに？もしかしてドラゴンはキマイラと同じ過去の異形で関わりがあつたのか？」

「いやそれならばそんな大昔の生き物がどうして俺の中にいるのかまた違った問題が出てくる。」

「どれだけ考えても答えの出ないことだと俺は一時思考を止めた。」

いずれは知らなければいけないことだが今ある情報だけではどうにもならない。

だから今はこれでいい…これでいいはず、なのにどうにも俺の中にしこりのようなものが残っていた。

## 第五十三輪 魔法使いの協力者

「ふう〜気持ちいいね」

「一生懸命水を運んできた甲斐があったね」

宮藤とリーネ、ペリーヌは星々の浮かぶ夜空を見上げながら各々清らかな裸身を温かな水の中で癒していた。

彼女たちの浸かっている風呂はロマーニヤ基地のものではない。ある老ウィッチの所有する島の敷地内にある風呂だ。

ではなぜ彼女たちがその風呂にいるのかというところそれは三人に原因があった。

三人は訓練についていけていなかった。宮藤は軍を抜けて実家の診療所を手伝っていたから、リーネとペリーヌはガリア復興に勤んでいたからといったように真つ当な理由によるものではあるのだが、それではいけないと判断した坂本によって彼女に所縁のある老ウィッチアンナ・フェレーラの元でウィッチとしての勘を取り戻す特訓をすることになった。

「でも明日は基地に戻るんだよね」

ストライカーユニットの支援を受けずに魔力のコントロールし、箒で空を飛ぶ。

数日に渡って訓練も今日で終わりを迎える。

そのことに名残惜しさを若干感じながらリーネは指先を絡めて両腕を頭上に伸ばす。本人としては何の気のなしに行ったその動作はある人物にとつては密に響響を買っていた。

（年は同じなのにどうしてリーネさんの胸はあんなにも大きいのかしら…私だってあれくらいあってもいいはずなのに）

ペリーヌには強調されたリーネの胸に納得いかなかった。

性格は大人しくて決して目立ちたがり屋というわけではないのに、どういうわけか性格に反して肉体の主張は激しい。

ペリーヌにとつてはシャーリーに追随する程のリーネの女性的なボディは羨ましくもあり、時に自分にはないものを持っている彼女を恨めしく思った。

(リーネちゃん、いつ見てもすごいなあ。前よりも大きくなったんじゃないかな)

そしてリーネの胸部に視線を注ぐ者はもう一人、宮藤だ。彼女はペリーヌのように恨めしきはなかったが彼女よりも危ない思想を持っていると言えるかもしれない。

もしも彼女に客観性と理性が備わっていなければ今ここで飛びついて自分の手で欲望のままにリーネの胸を揉みしだき、谷間へ獣のように飛びついて顔をうずめたていたかもしれない。

お風呂も終わり、食事も先ほど済んで後はベッドで眠るだけ。そうすれば勝手に朝日が戻って訓練を終えた自分たちは基地に戻る。

「あそこ、灯りがついてるね」

宮藤が寝食を行った建物ともストライカーユニットを収納している建物とも違う建物の窓から灯りが漏れている。

アンナが何かをしているのだろうか。

気になって三人が音を立てないように扉を開けて中を見てみるとアンナがいた。

「やっぱりアンナさんだ…あの石」

宮藤たちはアンナの姿よりも、彼女が道具を使って削っている青い石に注目した。

作業をしていたアンナは自らに注がれている視線を肌で感じたのか作業の手を止めて扉の近くにいた三人に声をかけた。

「まだ起きてたのかいあんたたち」

「アンナさん、それって」

肌寒い風が入ってこないように扉を閉めてから宮藤たちはアンナの側に近づく。

三人の興味が自分ではなく手元の石にあることにアンナは気付いた。

「ああ、そういえばあんたたちはウィザードの坊やと一緒に部隊にいるんだったね。そうさ、これはあんたたちの仲間が使ってる魔法石だよ」

「魔法石？」

「なんだい、初めて知ったみたいないな反応だね。まさか何も知らないのかい？」

その反応に意外そうな表情をしたアンナ。彼女は手で作業を再開しながら宮藤たちに席に着くよう促す。

「まあいいさ。訓練頑張ったご褒美に教えてあげるとしようかね。座りな、説明するとなるとちよつとばかし長い話になるからね」

言われた通り宮藤たち三人は各自椅子を用意して座った。動作の完了を見届けたアンナは石を削りながら口を開く。

「いいかい、あんたたちのよく知ってるウィザードやメイジの使う指輪は魔法石っていう石が元になってる。私の役目は魔法石の中に秘められている力を完全に発揮できるように指輪にして、魔法使いが使えるようにしているんだよ」

「そもそも魔法石ってなんなんですか？」

「名前の通り魔力が込められた石さ。世界中のあちこちで発見されている。山の壁やら地面の中やら、海の底なんかで見つかったこともある。中に魔力が入っているのは遠い昔にいたウィッチが自分たちの魔力を石に込めたことで生まれたからなんて説もあるけどそれが真実かどうかは定かじやない…本当に何も聞いてないんだねえ」

アンナからすれば今話した内容は自分からすれば初歩的な情報。ウィザードやメイジのような自分の完成させた魔法石の指輪を扱う者たちに囲まれているはずの宮藤たちがそんなことすら知らないことには驚いた。

「知りませんでした。そんな話ソーマさんから聞いたことがなくて」

「ソーマ…ああ、ウィザードの坊やか。そういやそんな名前だったような覚えがあるね」

「アンナさんはスペランツア中尉とは会ったことがありますの？」

まるで初耳であるような話し方にペリーヌが疑問に思ったのと同じ時に質問をした。

「会ったどころか話したことすらないね。電話でだってやり取りはないね」



「でもアンナさんが作った指輪をソーマさんが使ってるんですね。どうやって指輪を？」

「私が仕上げた指輪はいつも別の奴が取りに来てるんだよ。そいつがそのソーマってのに渡してるのかあるいはまた別の奴を介して渡してるのかは知らないがね」

質問に答えている間にアンナの作業は終わりを迎えており、彼女は宮藤の前に青い石から出来上がった指輪と既に出来ていた指輪を置く。

「ほら、できたよ。持っていきな」

「いいんですか？誰か他の人が取りに来るってさっき」

「どうせ魔法使いの坊やのところに渡るんだからあんたたちに渡したって一緒だろう」

「ありがとうございます…」

取りに来る人への罪悪感を感じて控えめながらも礼を言う。宮藤は二つの指輪を手に取り、横から顔を出すリーネやペリーヌと一緒に、なつてそれらを見つめる。

（青い色、つてことはこの指輪の中にあるのは水の力…つてことになるのかな）

色はいずれも青、一つは竜と氷の絵が描かれている。もう一つは色は違えど形状はソーマがハリケーニンリンクスに変身する際に使う物と同じであった。

となればソーマがこの指輪を使って発揮するのは水属性の力が強化されたウィザードであることは何となく想像が付いた。

「アンナさんはどうして指輪を作ることになったんですか？」

仕事を片付けて肩が凝ったのか自分の手で肩を揉むアンナ。彼女にペリーヌが率直な疑問をぶつける。

「暇つぶしや」

「暇つぶし？」

「現役を引退して年を取って動けなくなるとやるのがなくて時間を無駄にすることが多くてね」

「それが理由？」

思わぬ返答にリーネもペリーヌも首を傾げて聞き返す。

思ったよりも軽い動機だな、と思ったが続くアンナの言葉によってそれは誤解だと知ることとなった。

「それに戦えないこんな年老いた女でもまだ戦ってる若い者の力になるってんなら引き受けようと思ったのさ」

「アンナさん…」

暇潰しと聞いた先ほどとは違ってペリーヌはアンナに尊敬の眼差しを向けた。

「ご高齢の身であつても自分なりの戦い方で人類の平和のために戦っている。」

そんな彼女の姿に刺激を受けたのは宮藤もだった。

「アンナさん、私頑張ります！アンナさんのような人たちの分までネウロイを倒して世界を救つて皆を守つてみせます！」

「だったらここで学んだこと、忘れるんじゃないよ。すぐまた戻ってきたら次はもっと大きな風呂に水を入れてもらうことになるよ」

「はい！」

意気のいい返しにアンナは口元に軽く微笑みを浮かべた。

☆

「あの家で間違いないんだな」

「本国諜報部からの情報通りです。老婆のウィッチが一人、それとその家族を思われる人物が数名」

それは宮藤たちが去つて数日が過ぎた夜に起きた。

アンナとその娘たちの住む家に三つの影が迫っていた。

「その程度であれば出直す必要はないだろう。彼女を他の軍が狙っているという情報もある。その前に我がリベリオン軍の管轄で保護する」

「保護ですか？保護にこれがあるんですかね？」

肩から下げた銃を叩いてある兵士が言う。銃を携行しているのは他の二人もだった。

「なにもしもの時の備えだ。もしも彼女が保護をしようとする我々の邪魔をするなどした場合などには必要になるかもな」

「それはつまり、もしそうなった時には多少手荒な真似をしても構わないということでしょうか」

「保護対象に危害を加えさせなければな」

隊長の言葉に他の二人の兵士も小さく笑う。

この場合の保護、というのが言葉通りの意味を持たないことは全員が理解していた。

彼らがりベリオン本国より課せられた作戦命令、それは『ウイザードとメイジの指輪の製作に関わっているとされる者』の確保。

マロニー騒動の後、既にウイザードを有しているロマーニヤを除いたどの主要国にもメイジのベルトは均等な数を保有することが連合軍の間で決定された。

しかしリベリオンとしてはその決定では満足しなかった。他国と全く同じパワーバランスをこの先も維持し続けるなどご免だからだ。

他国よりも、特にロマーニヤよりも優位に立つためにウイザードやメイジの扱う指輪を製作しているという人物を自国に引き入れ、ウイッチのように消費期限のない戦力を手に入れる。

「指輪を作る技術を持つ彼女の協力を得ることができればリベリオンの戦力が各国を遙かに上回る。いくらロマーニヤのウイザード、他国のウイッチやメイジであろうと優れた質を得た数の前には歯が立たんだろう」

指輪の製作技術を持つアンナを有すればリベリオンはやがて戦力が大幅に向上し、それをもつて一気に世界の頂点に君臨することができると。

リベリオン一強時代を築くその野望への一歩を彼らが踏み出し、アンナの住居に迫ろうとした時だった。

彼らの前に白い魔法陣と共にその中から一人の白色のメイジが現れた。

「なつ、こいつ」

いきなり目の前に出てきたメイジに動揺しながらもリベリオンの

兵士たちは銃を起こし、三つの銃口を向ける。

そのメイジは彼らの知るメイジとは異なる点が見え、外見に見受けられた。

リベリオンを含めた各国のメイジはウイザードの基本形態ハリケーンスタイルと同じ緑だが目の前にいる相手の色は白。夜空に浮かぶ月と似たような白色であった。

どこのメイジかは知らないが、その一点だけでも彼らに警戒心を抱かせるには十分な理由となった。

「た、隊長!」

「貴様、何者だ!? 国旗の腕章がないようだがどこの所属だ! いや、どこの所属だろうとどうでもいい。とにかくそこをどけ! 命が欲しくばな」

外見の装備や色が全て共通しているメイジにはどこの国の所属が誰にでも遠目でもすぐに識別できるように腕に国旗を付けることが連合軍の間で取り決めがされている。

ところが目の前のメイジには国を識別できるような物が一切ない。それも三人の兵士たちの警戒感を強める要因となった。

「…魔力のないに等しい兵士風情が。お前たちに用はない。命が惜しければ早々にここから去れ」

「ふざけたことを!」

警告に対して警告で返され、なんならこの状況下でありながら高圧的に見下されたような言葉にリベリオンの隊長は一層引き金に添える指に力を入れる。

一歩間違えれば発砲しかねないところだが彼はそれでもいいと思っただ。

どこの馬の骨とも知らぬメイジの一人を殺したところで自分たちには何も問題ないからだ。

「警告はした」

『エクスプロージョン、ナウ』

メイジの身に着けたベルトが指輪を認証した瞬間、リベリオンの兵士三人は音もなく爆炎に飲まれ、彼らには悲鳴が上がる暇さえ与えら

れなかった。

銃口から弾丸が飛び出すよりも魔法の発動が遥かに早かった。

「愚かば最期まで治らなかつたようだな」

軽い一仕事を終えたメイジはさつきまで兵士たちがいた地面を一瞥してアンナの家のある方角に顔を動かした。

メイジの変身を解いた男は工房に向かって歩き出す。

目的の部屋の明かりが付いているのを確かめて扉を数回ノック。相手の返事を丁寧待つ。

「いるよ」

中からアンナの声を聞いてからドアを開けて足を踏み入れる。

「こんな時間に何のようだい」

「前に預けた物を取りに来た。そろそろ出来上がってもいい頃合いだ」

「あれならもう渡してしまつたよ」

「なんだと？」

男は眉を吊り上げる。

いささか不機嫌な様子、とも取れる目をする男をアンナは怯みもせずに見つめ続けている。

「この間偶然来た501のウィッチにね。ウィザードに渡すつもり物だつたんならそう目くじらを立てることもないだろう？」

アンナの言葉に嘘はない。でも一つだけ誤魔化している点があるとすればその行為に男への嫌がらせが含まれていたことだろう。

「…ならば問題ない。しかし、以後は勝手にこのような真似をしないでもらおうか。こちらにも都合というものがある」

「色々注文をつけてくれるねえ。人の都合は無視するくせに」

「…その点に関しては申し訳ないと思つている。貴方からすれば私を信用できないのも無理のないことだろう。だがこれは人類のため、ネウロイという脅威から世界を守るために仕方のないことなのだ。それだけはわかつて欲しい」

男はアンナの視線を受け止め、また彼女に誠意を示すように深く頷く。

「わかったよ。次からは前と同じようにやるよ。あなたの提示する物をあなたの求めるやり方であんたの言う通りにね」

「感謝する」

これ以上居座る必要性がなくなった男は扉を閉めて外へと出て行く。

草木を踏みしめる音が完全に途絶えたのを待ってからアンナもまた部屋を出て別の家屋へ、そしてその中にある寝室へと移動する。

寝室の中にあるベッドには先客がいた。

ネウロイに陥落されたヴェネツィアからアンナの娘や孫二人だ。

すやすやと心地よさそうに眠るかけがえのない愛する娘たちの姿にアンナから笑みが零れる。

(…もしもこの先あの男がこの子たちに危害を加えるようなことがあつたら)

あの男がどこまで自分の情報を握っているかわからないがあの男を自分の要望を叶えさせるために娘たちを傷つけるような事態がこの先ないとはいえない。

明確な理由こそないが、男にはその懸念が現実になってもおかしくないような不気味さがあつた。

(そうなる前に何か考えておく必要があるそうだね)

## 第五十四輪 新型ストライカーを巡って

嫌いではないがかと行って好きでもない喧嘩の絶えない仲、というのは人間関係において珍しくない。

一日を同じ屋根の下で過ごし寝食を共にする間柄であつても必ずしも親しい関係と言えるのかというところではなく、それは武器を持たない民間人の間にも、武器を持つ軍人、そして魔力を持つウィッチにすら存在する非常によくあるどこでもありふれた人間関係の模様の一つだ。

「シャーロット・E・イーガー大尉！そんな恰好で何をしている！この基地には男性職員もいるんだぞ！」

そう、バルクホルンにとつてはシャーリーがまさにそんな相手だった。

ロマーニヤの炎天下の気候の下、人目を意識しているとは思えない肌を晒した下着姿の彼女にバルクホルンが抗議を申し立てたのだ。

ところが格納庫の中に響き渡る彼女の声を一身に受けているシャーリーは全くもって意に介していない清々しい笑顔を保ったままストライカーの起こす風とエンジン音に心地良さそうにしている。

「しようがないだろ暑いんだから。カールスラント人は着てる服にすら文句つけるのが作法なのかー」

「ふわあ」

「なっ!？」

シャーリーの挑発的な顔色と言葉、そして何よりも背中から聞こえてきた欠伸。

それだけでバルクホルンは今自分の後ろで誰がどういう恰好をしているのか想像が付いてしまった。

けれども直にその目で確かめなければならぬ生真面目さを持っていたがために彼女は振り返り、絶望した。

「ハルトマン！お前もか！」

「へえ？何のこと？」

自分の相手とも呼べる存在がシャーリーと鉄骨の上で眠るルツ

キーニとまるつきり同じ恰好をしていた。

しかも悲しいことに当人には自分の恰好に対する抵抗や恥じらいは微塵もないようだった。

ハルトマンはそれでいいのかもしれないがしかし結果としてシャーリーに苦情を訴えていたバルクホルンが恥じらう思いを味わうこととなった。

「はははー」

そんな彼女の姿に同情しながらもついどうしても面白さの方が勝っていたシャーリーの口から笑いが飛び、それも益々バルクホルンの羞恥を増大させる。

「だ、だがなー」

それでもバルクホルンが見過ごすまいと二の句を告げようとした時シャーリーの横から発生した魔法陣の中から衣服を持った手が出現した。

「お、今日も来たのか」

突然自分とシャーリーの間に見れたことに目を大きく開いて驚くバルクホルン。だが彼女と違ってシャーリーは手慣れた動作で衣服を受け取り、それを羽織る。

「終わったぞー」

一体誰に向けて言っているのかと、バルクホルンが首を傾げて後ろを振り向くと入口の方からソーマが格納庫に入って来た。

先日連合軍上層部から戦いで功績を改めて評価され大尉に復帰した彼は上着を着たとはいえまだバルクホルンからしたら看過できないほど露出の多いシャーリーの姿に動じることなく歩み寄ってくる。

「ソーマ？」

「バルクホルン大尉がここにいるなんて珍しいな。どうした？」

「お前は何をしに？」

「俺は洗車。最近全然やれてなかったからさ」

ソーマは格納庫に隅に置いている愛用バイクマシンウインガーを指で指し、その汚れを落とすためホースを引く準備をする。



「聞いてくれよソーマ。バルクホルンの奴私の服装に文句つけてくるんだぜ？」

「なに!？」

まるで先生に言いつけるような、あるいは自分の方に非があるような言い方にバルクホルンは不服そうな顔をする。

「それは言われても仕方なくないか? 一応ここ男もいる場所だし」

「ほら見たことか。ソーマもこう言ってるんだ」

「なんだよ、ソーマはそっちの味方するのか」

「味方、っていうか。いや前も言ったけど俺しかない時だったらいいんだけどさ」

「なに!？」

理性的で心強い味方を得たと喜んでいた矢先その味方から飛び出した発言はバルクホルンを大層驚かせた。

「今の言葉は聞き捨てならんぞ。誰がいる、いないに関わらずこんなだらしない恰好は慎むべきだ」

「でも本人がそうしたいって言うならそこまで強制することもないと思うんだよ。服部とかがいる前だったらさすがに止めるけれど俺だけだったら俺が意識しないようにすれば済む話だし。そりゃあさっきのままだったら俺だってもちろん抵抗あるよ?」

「いいやダメだ。この際だから言わせてもらおうがお前はリベリアンにしてもハルトマンにしても甘やかしがすぎる。優しいのと甘いのはわけが違うぞ」

「面倒くさいなーこれだからバルクホルンは駄目なんだよ」

「なんだと!？」

どこまでも全体の規律と調和を重んじるバルクホルン、強烈な束縛を嫌い一個人の自由を尊重するシャーリー、そして規律も自由もどちらも大事と理解して最終的な判断は本人の意思に委ねるソーマ。

そんな三つの思想が織りなす会話は一向に妥協点に行き着くことができず、平行線を辿るばかり。

三人から離れた同じハンガーの中にはまた別の組み合わせがいた。

ミーナと坂本だ。

二人は赤いストライカーユニットの前で何やら話し合いをしているようだった。

「これがカールスラントの最新型か」

「正確には試作機ね。Me262V1ジェットストライカー」

「ジェット?」

「こらハルトマン!服を着ろ!服を!これは?」

そこに二人の姿と見慣れない新しいストライカーに気付いたハルトマンと露出の多い恰好のまま上官らに近付く彼女に気付いて終わりの見えない戦いを一時中断したバルクホルンもやって来て、新型ユニットの存在に興味を持つ。

「前に本国で開発されたというあれか」

「そう、最高速度は時速九百五十キロに到達するみたい。今までのストライカーとは桁違いね」

「九百五十キロ!?すごいじゃないか」

速度の話題で彼女が食い付かないはずがなかった。

スピードに関わる単語がミーナの口から出た瞬間シャーリーはすぐさまジェットストライカーのところへと行き、ギラギラと赤く輝く装甲に触れている。

「シャーリー、お前もなんて恰好だ」

ハルトマンよりも目線を反らしたくなる姿に苦言を呈す坂本。

それが普通の反応だよな、と思いつつながらソーマもやって来てミーナの横に立つ。

「新型なんだ。誰が使うか決まってるのか?」

ソーマの問いかけにミーナは首を振る。

正式な使用者が決まっていない。つまりは席が空いているということだ。

「中佐!私が使っているか!」

「私が使おう」

そこで二人の人物が名乗り出た。言わずもがなシャーリーとバルクホルンの大尉両名だ。

「なんでお前なんだよ。スピードの世界を知る私を使うべきだろ」

「お前の頭には速度のことしかないのか！」

「またか」

今日という一日が始まってまだそう時間が流れていないのに本日二回目のカールスラント・リベリオン口論が始まった。

スピードに秀でた性能を持つカールスラントのストライカー：シャリーリーが関心を示しだした辺りから薄々目の前の光景が現実不起こりうるだろうと考えたし、なんならさっきのやり取りも若干聞こえていた坂本は頭を抱えなくなる気分になる。

自分というものを強く持っているのはいいがもう少し落ち着いた話し合いというものができないのだろうか

「二人共そんなんじや一向に決まらないぞ。一旦落ち着いたらどうだ？」

坂本の心情を見透かしたようにソーマが仲介役を買って出ようとする。

ところが二人から返ってきた反応はソーマの期待を大きく裏切った。

「ソーマは私がこのストライカーを使うべきって思うよな!?!ソーマの使う時の私の魔法ジェットで一緒だしき、私にピツタリだろ?..な?」

「そんなこじつけがまかり通るか!カールスラントのストライカーならば私が扱うのが理にかなっている。お前ならばわかるだろうソーマ!」

「:..なんで俺に聞いてくるの」

まさかこの流れで揃って自分に意見を求められると想定しておらずソーマは大した返事もできずにたじろいでしまう。

もちろんこの間にジェットストライカーに意識を向ける者はいない。

そうしてできた隙に上から飛び降りたルツキーニが誰よりも早くジェットストライカーに足を通した。

「いっちばーんー!」

「あ」

「いらー！」

「ずるいぞルツキーニ！」

「へっへーん。早い者勝ちだもんね！」

意気揚々とジェットストライカーを装備したルツキーニは魔法力を発現させて起動しようとする。

ストライカーの起動音が大きくなり、連動して展開する魔法陣も大きくなっていく、ことはなくルツキーニの全身を奇妙な感覚が駆け巡った。

「びゃああああ!？」

ルツキーニは尻尾を踏まれた猫を彷彿とさせる動きで飛び上がりジェットストライカーから離れると逃れるようにシャーリーの背中へと移る。

「どうしたルツキーニ？」

「シャーリー、あれ使わないで。変な感じする」

今の短時間で何が起こったのかシャーリーには理解できない。でもルツキーニの怯えようはただ事ではないのはわかる。

となれば彼女が取る選択肢は一つだった。

「やっぱやめた。私はパス。考えてみたらレシプロでやり残したことがあるからさ」

「ふん、怖気づいたか」

「言ってる」

「ではミーナ、性能の確認をしよう。早くこのストライカーの実力を試したい」

シャーリーとの口喧嘩に見切りを付けてバルクホルンはミーナに進言する。

成り行きを見守っていたソーマも彼女に続いてミーナに話しかけた。

「俺も参加していいかな？比較になる対象は多いに越したことはないだろ？」

「ええ、是非お願いしようかしら」

メイジも前線に積極的に投入されるようになった現状を踏まえる

と魔法使いの始祖たるウィザードとの比較検証はしておくのも必要だろう。

ミーナには彼の参加をわざわざ拒む理由は思いつかなかった。

そうして始まったバルクホルン、シャーリー、ウィザードによるジェットストライカーの性能テスト。

最初の項目は上昇、いかに高高度まで飛翔できるかの測定だ。

バルクホルンのジェットストライカー、シャーリーのレシプロストライカー、ハリケーンスタイルのウィザードが一斉に空へと飛び立った。

「くっ！」

離陸して最初に三人の中で異変が起きたのはシャーリーだった。高度の限界を迎えたレシプロストライカーのプロペラが黒煙を上げ、上昇が止まった。

そのために彼女は自分の横を斜め下から通り過ぎていったウィザードを目で追うことしかできなかった。

そしてもう一人、遙か高みに行くバルクホルンとジェットストライカーも。

「シャーリーさん一万二千メートルで止まりました。バルクホルンさん、尚も上昇中……すごい」

「ソーマも頑張ってるけどバルクホルン大尉のあれの前じゃ霞んで見えるな」

魔導針を使って位置情報を把握するサーニヤと隣で空気に寝っ転がるような体勢のエイラは縦に伸びる三つの飛行機雲を見てそう呟く。

時間がかかっても上昇を続けるウィザードもすごいが、バルクホルンのジェットストライカーはその数段先に行く凄さなのが一目見ただけでもわかる。

（こっちもそろそろ高度の限界が来てるな。なのにまだ上がり続ける。上昇速度もさつきから落ちてないじゃないか）

自身も上昇を続けながらウィザードはまるで衰える気配を見せないジェットストライカーを見上げていた。

「次はなんなんですか?」

「搭載量勝負だつて。どれだけ武装を積んで飛行できるか」

ペリーヌとリーネの目の前には戦闘用の装備の装着を行っているバルクホルンとシャーリー。

だが何故か準備を行わずに椅子に座り込んでいるソーマに宮藤と服部は声をかけた。

「ソーマさんは参加しなくていいんですか?」

「もうすぐ始まつちやいますよ」

「俺は今回は見学。物を小さくしたり大きくできる奴が参加したつて大して意味ないだろ?」

「そつか、確かにそうですね」

ソーマの放った言葉に宮藤たちは納得したような顔になった。

スマールやビッグで大きさを好き勝手に変えられるある意味インチキじみた手段が使えるウィザードにとっては搭載量を競う勝負は無縁の項目だろう。

だからソーマはわざわざミーナに見学の許可を貰ってバルクホルンとシャーリーの対決に神経を注ぐことにした。

「待たせたな」

準備が終わったバルクホルンの声につられてその方を向いた皆が一様に目を見開いた。

「おいおいそんな装備で飛べるわけないだろ」

彼女は背中に人間の体を易々と上回る長さの砲塔、両手に銃火器、加えて予備の弾薬を携行している。

バルクホルン自身の魔法があることを考慮してもとても満足な飛行ができるとは思えず、シャーリーの口にした心配はまさに全員の共通の見解であった。

「ふん、問題ない」

しかしバルクホルンは彼女の言葉を一蹴した。彼女には確かな自信があった。そして結論から言つてその自信は間違いでなかったと自身の手で証明した。

重装備を抱えながらも衰えないスピードで仮想敵として浮かべたバルーンを無駄撃ちなしの数発で落としてみせたのだ。

「マジかよ…」

予想を大きく裏切るジェットストライカーの力にシャーリーは啞然とする。

当然地上で見えていた仲間たちも彼女と遜色ない反応であり

「あれで問題がないなんて…」

「とんでもないパワーだな。あのジェットストライカーつて奴は」

ペリーヌも服部もジェットストライカーの成果に驚嘆を露わにする。

そして何より一番驚いていたのはそれを履いているバルクホルンだった。

(すごい、すごいぞ。このジェットストライカー…これがあればカールスラントの奪還も夢じゃない)

新型の性能は自他の評価に厳しい彼女からしても実に素晴らしいと手放しで褒められる。

二つの勝負でシャーリーを上回り、高度ではウイザードすらも凌駕してみせた。

これを身に着けて故郷を奪還する自分の姿は今のバルクホルンには容易に思い浮かぶ光景であった。

シャーリーとバルクホルン、そしてソーマの三人を応援したいという宮藤の思いから今日は格納庫でご飯を取ることになった。

彼女の作ったカツオを使った料理に対する感想は様々で

「今日もうんまいなー。私は料理のことはわからないけど宮藤の作る料理はさいっこうだな」

「ほんとにそうですよ。芳佳の料理、俺の母さんの料理の味に近くてもうたまらないぜ」

「そう言って頂けると嬉しいです」

シャーリーと服部は舌鼓を打ち、絶賛の声を上げる。

皮肉を一切言わない二人とあって宮藤も疑いなく言葉を受け止めた。

「なんでこんなところで食べないといけませんの」

「文句言いながら食うな」

料理の味にはおおむね満足しているが場所に不満があるペリーヌ。エイラは彼女を注意しながらも胃袋に料理を運んでいる。

「とつても美味しいよ芳佳ちゃん」

「ありがとうサーニヤちゃん」

もちろんサーニヤもその例に漏れず宮藤に褒め称える。

その彼女に食事の手を止めて、意識を向ける者がいた。

(この前はできなかつたからリトヴァクさんと話しをしたいけど何をどう話したらいいんだ…ご飯美味しいですねとか、か?けどそれ言うならリトヴァクさんだけに言うのも変だしな)

その者というのは服部であつた。未だに唯一ちゃんと話しをできていないサーニヤと会話したいと思つているのだがこの状況で彼女に何と言葉を切り出したらいいのか上手く思いつけずにいた。

「あの…」

(でもここで何か言つとかなないと次いつ話せる時が来るかわからないしなあ。何か、何かいい切り出し方は…)

「おい、おいってば!」

「ーはい?」

思考を中断して服部は自分に声をかけてきた二人、サーニヤとエイラの方に顔を向ける。

サーニヤは当惑を、エイラは奇妙な物を見るような目で服部を見ていた。

「俺ですか?」

「お前しかいないだろ。さつきから何サーニヤのことジロジロ見てんだよ」

「ーえ!?!見えました俺?」

「とぼけてんなよ。思いつきり見てただろ」

「私の顔…何か変ですか?」

「あ!いや、変だなんてとんでもない。全然そうじゃくてその…えつと…なんでもないです、すみません」



齒切れの悪い返事をしながらこの時服部は後悔した。何故反射的  
とはいえ誤魔化さず本当のことを言わなかったのかと。

しかし後悔しても時既に遅し。エイラには益々珍獣を見るような  
目を向けられてしまった。

「はあ？なんだそれ。変な奴だな」

（やつちまった…完全にリトヴァクさんに変な奴だって思われたよ）

エイラの言葉通りサーニャにはそう思われてもおかしくない印象  
を持たれてしまったことだろう。

服部は視界の端にサーニャを入れてはいても彼女の表情をよく見  
えない。知るのが怖くて見れなかった。

ソーマもまた宮藤の料理の美味しさを確かめながらも感想を口  
に出さず、ある一点を見つめていた。

その先にいたのはバルクホルン。

彼女は宮藤の置いた食事に一口も手を付けず、木箱の上に座って項  
垂れていた。

☆

屋外に設置された二つのドラム缶、に入る三人の姿があった。

一つのドラム缶には宮藤とルツキーニが、もう一つのシャリーが  
入っており、焚火で沸かしたお湯に身を浸かっている。

「くあゝこんな形の風呂を思いつくなんて扶桑ってのはつくづく変  
わってるよな」

食品を敢えて腐らせて美味しい味を生み出す食事といい、つくづく  
扶桑の奇想天外な発想には驚かされる。

シャワーや大きな浴槽に浸かっつての入浴とは違った味わい深さが  
あってシャリーとルツキーニは大層お気に召したようだ。

「芳佳、もっとそっちいってー」

「あ、ごめん」

ただルツキーニと芳佳は二人で同じドラム缶を使っているのだお

互いが窮屈な思いをしない位置取りをするのに手こずっている。

「こっちは私一人でいっぱいだからな」

そんな小柄な二人がスペースの確保に悪戦苦闘する様を見物するシャーリーの居心地は快適だ。

何しろ高身長と大きく実った胸のおかげで彼女のドラム缶には他者が入るこむだけの間が存在しないからだ。

いくら小柄なルツキーニといえども不可能なほどに。

「バルクホルンさん今日はなんだか様子が変でしたね」

「きつとあれのせいだよ！」

「あれって、ジェットストライカーのこと？」

「そう、それー！ビビビツってきたし」

どんなに不調の時でも食事だけは欠かさずにとっていたバルクホルンが録に手をつけなかった。

その異常の原因を宮藤は推測から、ルツキーニは実際に一度履いた体験からジェットストライカーにあるのだと言った。

(明日もやる気なのかなあいつ)

紅の空を見上げてシャーリーはふと考えた。

そして同じ可能性を考える人物が彼女たち以外にももう一人いた。

夜、誰もいない格納庫をソーマは訪れた。

周りに人の姿や気配はないとはいえもしものことを考えて大きな音を立てないように足を忍ばせてジェットストライカーの手前まで足を進める。

「バルクホルン大尉のあの様子はどう考えてもこれが原因だよな」

彼の頭には憔悴しきったバルクホルンの顔が残っていた。

あんなバルクホルンを見たのは初めてだし、歴戦のエースたる彼女がいくら新型とはいえたかだか性能テストであそこまで疲弊するほど自分を追い詰めるなど考えにくい。

今日あの顔を見れる機会が訪れることになったのはこのジェットストライカーを置いて他に考えられない。

「でも一体何をどうすればいいのか…」

原因ははつきりしていても、何かしたいと思う気持ちがあっても、整備士でもなければ技術者でもない自分に何ができるのか。

その答えが出ないままソーマは暫しの間ジェットストライカーの前から離れずにいた。

## 第五十五輪 わたしがあなたにできること

ジェットストライカー性能テストは二日目に突入。

昨日の『高度』『搭載量』に続いて今日最初に行う項目は『スピード』、単純な速さを競う対決だ。

「頑張れシャーリー！」

「ああ、スピードでは必ず勝ってみせるさ」

となればシャーリーが俄然やる気になるのは当然の理だった。

他の二つならばまだしもさすがにスピードでまで負けてなるものと闘志を燃やす彼女にルツキーニが精一杯の声援を送る。

なんとも微笑ましく思える光景を尻目にソーマもベルトを出現させる。

「それやめてくれないかソーマ」

そのままハリケーンスの指輪を指に通そうとするが待ったがかかる。

その言葉にソーマは動作を止めて首を向けるとシャーリーは真っ直ぐな瞳で見返していた。

「私とP-51だけの力だけであれに挑戦したいんだよ」

「わかった」

「悪いな、わがまま言って」

シャーリーとももうそれなりに長い付き合いだから彼女が速さにかけるこだわりは知っている。

ソーマは不機嫌な様子を見せずすんなりと要求を飲んだ。ハリケーンスの指輪を戻してハリケーンスの指輪に変え、シャーリーもそんな彼の配慮に礼を告げる。

ソーマがウィザード・ハリケーンスタイルに変身したところでジェットストライカーを身に着けたバルクホルンもやって来る。

ただやはりといふべきか昨日に引き続いて表情に濃く疲れが表れているように思える。

「お前大丈夫かよ」

「余計な心配は無用だ。お前こそそれで負けても言い訳は受け付けない

いぞ」

「んだと！」

愛用するストライカーと自分だけの力のみではジェットストライカーに勝てるわけがない。遠まわしにそんな挑発を言われている気になってシャーリーの心からバルクホルンへの気遣いは消し飛んだ。

バチバチと、視線が火花を散らしているようにも思える対抗心剥き出しの二人をウィザードは交互に見やった。

三人は空中に並び、旗を持ったルツキーニの合図を待つ。

彼女が旗を降ろしたと同時にスタートとなる。

(何事もなければいいけど)

何でもない風を装っているのはソーマにもわかつている。

この後起こりうるかもしれない事態に備えてバルクホルンを心配しながらソーマは足に魔力を集めて開始の合図を待つ。

「よーい、ドン！」

ルツキーニが降ろした旗を合図に一齐に飛行を始めた。

ただし前に進んだのは二人だけであり、バルクホルンは体を動かすこともしなかった。

「あれ？ドーンだよ、ドーン。ねえ！」

「バルクホルン先輩？始まってますよ！」

「ねえってばー！」

一向に微動だにしないバルクホルン。彼女を不審に思っただけでピーストが声をかけ、ルツキーニに至っては旗を大きく何度も振っているがそれでも動きに変化はない。

「まだ動いてない？何をしてるんだバルクホルン大尉は」

これには前を行くシャーリーを全力で追っていたウィザードも後ろに首を向けざるを得なかった。

動きが鈍かったり、思った以上の速度が出ないのならわかるがでんでんことうしろ姿にはウィザードも理解が追い付かなかった。

(来ない…あいつ、勝負を諦めたのか?)

シャーリーもバルクホルンがいつまで経っても自分の前後に現れ

ないことに疑問を思っていた。

開始前、あれだけ挑発を吹っ掛けておきながら舞台を降りたのかと  
しかしそんな彼らの僅かな不安は徒労に終わった。

バルクホルンがやっとジェットストライカーを吹かしその強風で  
ルッキーニとピーストを吹き飛ばしたかと思えば、瞬く間にウィザード  
ドを追い抜きその際に発生した風は彼に目を腕で守らせた。

「な!? もうあんなところに…!」

一瞬にして横を通り過ぎてシャーリーに迫りつつバルクホルンに  
ウィザードは面喰ってしまふ。

「速い、これじゃ追い抜かれる…くそ!」

ストライカーユニットに魔力を送ってシャーリーの速度が少しだけ  
上がる。

だが努力も虚しくジェットストライカーを操るバルクホルンは  
軽々と彼女の横を経由して前方へと躍り出た。

(そんな…私がスピードで負けるなんて)

全力を出してもんで太刀打ちできなかった事実を目の当たりに  
してシャーリーは衝撃を受ける。

(まるで天使に後押しされているようななんて心地良い感覚…)

当のバルクホルンは今までに感じたことのない速さと気持ちよさに  
高揚していた。

そしてその高揚を保ったまま彼女は脱力感と共に意識を失った。

「なんだ?」

上から下へ、下から弧を作るように右上へ

いきなり不規則な軌道を描き出したバルクホルンの生み出す飛行  
機雲にウィザードは良からぬ予感がした。

彼の目の前で飛行機雲は上から下へと真っ直ぐな線となっていく。

「まずい! シャーリー!」

『ハリケーンリンクス! プリーズ!』

ソーマがハリケーンリンクスに変身した。

自身の体の発光と内側からこみ上げてくる力の上昇によってその  
ことに気付いたシャーリーは迷わずバルクホルンの元にフルスピー

ドで飛ぶ。

だが元より大きく引き離された距離は強化された彼女の全力を持ってしても簡単には埋められず、このままいっても手が届くよりも先にバルクホルンの体は海に沈んでしまう。

(ダメだ…間に合わない。手も届かない…)

飛行を継続しながらも諦めたシャーリー。

バルクホルンが海面に激突する。その間際、バルクホルンの体の近くに出現した魔法陣から伸びた手が彼女の腕を掴んで落下運動を止めた。

「海に落ちるのだけは避けられたか」

バルクホルンの腕を握っているそれはウイザードの手。ジエツトの魔法でコネクトの有効範囲まで近づいてなんとか間に合った彼のものであった。

彼が止めてくれたおかげでシャーリーは遅れてバルクホルンの元に到着することができた。

シャーリーはバルクホルンの腰に手を回して体を支える。

「バルクホルン大尉の様子は？」

「気を失って寝てるだけだ」

「そうか、ならよかった。基地に戻って休ませてあげよう。俺も運ぶの手伝うよ」

「ああ、頼む」

シャーリーは右腕を、ウイザードは左腕を自分の肩に回してバルクホルンを基地まで移送する。

バルクホルンに負担をかけないようにゆつくりと帰投するその道中シャーリーの瞳はバルクホルンではなく、緑の仮面の横顔から反れることはなかった。

(さつきまで私よりずっと後ろにいたのにもうここまで…)

バルクホルンが目を開くと自分の周りに仲間たちがいた。

見慣れたハルトマンとミーナ、宮藤やリーネ、服部にエイラ…バルクホルンは気付いていないがシャーリーとソーマ以外の皆がベッド

を困うように立って心配そうな眼差しを向けている。

「皆どうした…こんなにも揃って」

目が覚めたばかりでこの状況に至った理由がわからない様子の彼女にミーナが告げる。

「ジェットストライカーのテスト飛行中に魔法力を使い切って意識を失ったのよ。ソーマさんが間に合ってくれたからそれだけで済んだけど、一歩間違えたら貴方は海に落ちていたところだったわ」

「魔法力を？馬鹿な、そんな初歩的なミスをするはずがない！」

意識を手放す程の魔法力の消費に気付かないなど歴の長い自分にするなどと、いくらミーナの言葉とはいえ信じきれなかった。

「バルクホルンの問題じゃない。ジェットストライカーの方に欠陥があるんだ」

坂本がバルクホルンの実力を正當に評価しながらミーナの発言を肯定した。

実際彼女の言う通りなのだろうと宮藤たちも思った。

バルクホルン程のベテランすらもし振り回し、意識を奪い取る危険性をジェットストライカーは持っている

「今を持ってジェットストライカーの使用を禁じます。誰もあのユニットに近寄らないようにしてください」

「いや、テストを続けさせてくれ」

ミーナが皆に下した命令にバルクホルンが即座に異議を申し立てた。

思いがけない発言に彼女以外の全員が声に出さずとも表情で驚きを語った。

「あれは素晴らしい機体だ。あれがあれば前線の負担は一層軽くなるだろう」

「バルクホルンさん…」

「バルクホルン大尉…」

一番酷い目に遭ったとまで言ってもよいのにその原因たるジェットストライカーを擁護するバルクホルン。

宮藤とリーネは肯定も否定することはできなかったがミーナは



違った。

「バルクホルン大尉、貴方には当分の間謹慎を命じます。許可が出るまで生活に必要な行為以外での自室からの外出は認めません」

「ミーナ中佐、いくらなんでもそれは―！」

そう言い放ち脇目もふらず誰よりも先に部屋を出たミーナ。そんな彼女の振る舞いに呼びかけたりリーネを始めとした全員は何も言葉をかけることができずにただ見送った。

「中佐、ちよつとお願いいいかな」

部屋を出たミーナはすぐ横の壁際に立っていたソーマに呼び止められた。

何故部屋の中に入らなかったのかの追求はせず、彼の雰囲気から大事な話があるのだと察したミーナは黙って先を歩き出した彼の後についていく。

そうしてバルクホルンたちのいる部屋から距離を置いた廊下に場所を変えるとソーマは振り返った。

「ジェットストライカーの資料貸してくれないか？できたらでいいんだ」

「一応理由を教えてもらえるかしら」

「俺の魔法で問題が解決できるか試してみたいんだ。ダメかな？」

「わかったわ。私の部屋に取りにいきましょう」

即答だった。

そのことに要求した身でありながら少し驚きつつもソーマは「ありがとう」と感謝を告げた。

その頃シャーリーは屋外で風を浴びていた。

基本ほとんど毎日が真夏日なロマーニヤの温かな風が猛烈な暑さを運んでくるがそれでも構わなかった。

今は無性に風に当たりたい気分だった。

「あの時…」

バルクホルンを抱えて基地に戻った時ハリケーンリンクスの変身を解いたソーマの掌にはジェットの指輪が握られていた。

自分とバルクホルンとの距離もさることながら自分とソーマとの距離はもつと離れていた。

なのにああも早く合流できたのはハリケーンリンクスに変身した直後にジェットの魔法を使い、コネクトの有効範囲まで接近したのだ。

それをシャーリーはその時理解した。

「ソーマは諦めてなかった…なのに私は、最後まであいつを助けることをしなかった。スピードで負けたからって途中で諦めて」

あの僅かな間にソーマはどうすればバルクホルンを助けられるか考えて、最善を尽くしてバルクホルンを救った。

それに引き換え自分はどうだろう。

彼よりもバルクホルンの近くにおいて、彼よりも早いスピードを持っていたのに最後まで足掻こうとしなかった。

心のどこかで間に合わないと諦めていた。

スピードで負けた自分よりもそんな自分にシャーリーはこれまでに感じたことのない程激しい嫌悪を覚えていた。

だから当然機械弄りなどできる心の状態ではない。バルクホルンのこともあつては余計に。

なのに足は何故か格納庫への道を進んでいた。

その足取りが行き着いた終着点で彼女を待っていたのは異様な光景。

ソーマがバインダーで止められた資料を手にジェットストラライカーの近くにいた。

(ソーマ?なんでソーマがストラライカーの近くに?)

ウィザードである彼がストラライカーユニットに触れることなんて珍しい光景だ。

違和感を感じて自然とシャーリーは彼に近付いていた。

彼女の作る足音が聞こえたのかソーマは顔を上げて、ジェットストラライカーに向けていた目をそちらに向けた。

「何してるんだ?」

「ちよつと、勉強をさ」

「勉強…」

ソーマの持つ資料にはストライカーの内部構造と部品の名称を記した図があり、シャーリーは少し見づらかったがそれがジェットストライカーに関するものであることに気付いた。

(ジェットストライカーの、バルクホルンのためか)

その言葉と今日起こった出来事を踏まえてシャーリーには彼がそれを持ってここにいる背景がすぐ予想できた。

だがあえて彼に質問をぶつけてみることにした。

「なんでまた？」

「こいつが抱えてるらしい欠点を魔法でどうにかできないかなって思っただけ。でもいざ手つけてみたら難しいな。そもそもどのパーツがどんな役割をしているのか設計図見てもよくわからない」

シャーリーはもつと顔を近づけて資料を覗き見る。

設計図に各部に使われている情報が紙面に載せられている。

ソーマにはわからなくてもシャーリーにはパッと一目見て情報を飲み込めた。

「…これが魔力の伝達速度を速くしてて…へえ、少し待つてな」

「え？」

言うなりシャーリーはソーマの返事を待つことなく格納庫を離れる。

執務室のドアがノックもなしに開けられた。

書類と格闘していたミーナがドアの開いた音と人の気配に顔を上げるとその時にはもうシャーリーが目の前まで歩いてきていた。

彼女が自分からこの部屋を訪れるなんて珍しい、というか初めてではないだろうか。

そんな感想を持ちながらミーナは彼女の顔に視線を固定した。

「中佐—この前使えなくなっただけで言っただけでカールスラント製のストライカーあったよな。あれ、私に出来ないかな？その分のお金は私の給料から引いてくれていいから」

「それは構わないけどどうしたの？」

「たまには別のユニットも弄ってみたくなくてさ。他の国のストライカーを好き勝手できる機会なんてそうそうないし」

自身が投げかけた問いに対しての答えを聞いてミーナはつい口元から笑みを溢してしまふ。

「あれなら確か倉庫に置いてあったと思うわ。もう誰も使わない物だから好きに使ってくれていいわよ」

「おっけー。ありがとう中佐」

許可を貰うとシャーリーは上機嫌でそそくさと部屋を出る。

その前にミーナが声をかけた。

「さつき私のところに来た人とは共犯なのかしら」

「いんや、私はそいつとは関係ないよ」

シャーリーは足を止め、体を向けてから言った。

「そうなの、でも誰のことを言っているのかはわかるのね」

「まあね」

両者がほとんど同時に笑みを浮かべ、シャーリーは今度こそ扉を閉めて部屋を去っていった。

「今戻ったぞー」

再び耳に聞こえた先ほど聞いたばかりの声に振り向いたソーマは口を半開きにして凝固する。

シャーリーの姿はさつきまでと大きく違っていた。

カールスラント製のストライカーと工具箱を乗せた台車が近くにあり、服装は軍服ではなく整備士と同じような作業着を着ていた。

「何それ…？」

変化が色々とありすぎて何から聞いたものだろうかと悩んだソーマの口から出た一声がそれだった。

「ミーナ中佐に貰ったんだ。ジェットストライカー使うのは禁止されてるんだろ？ だったら規格は違っても基本は同じカールスラント製のストライカーで実験した方がいいだろ。で、こいつは私のもう一つの勝負服だ」

ストライカーと服装の二つの律儀に指差してシャーリーは応える。

「それはその通りだろうけど、いいのか？」

「いいのかつて？」

「手伝わってもらったりして」

「あのなあ、魔法使うにしたってストライカーの知識もないのに一人で問題の解決からユニットの改良までできるのか？」

「あ……お願いしていいですか？」

この上ない正論を突き付けられソーマの中にあつた抵抗が消え失せた。

自分がやろう、やろうという気持ちで頭がいつぱいでシャーリーが指摘したことなど全然考慮していなかった。

目的を成功に導くためにもストライカーに精通した彼女の協力を得るのが利口な選択肢だろう。

「それでいいんだよ。後ほら、これ私の使ってるノートな。そこに色々な国で使われてるストライカーの部品の情報書いてあるから貸すよ。わからないところあつたら聞いて」

「わかった」

「そつちがそうしてる間はこれを使えるように直しとくからさ」

ノートを渡すとシャーリーは台車からストライカーユニットを降ろして、工具箱から工具を出す。

ソーマは彼女から拝借したノートをパラパラと捲り、中身に目を通す。

(すごいなこれ)

ストライカーユニットや部品の名称・特徴が事細かにまとめられていた。しかも丁寧に手書きの図まで書かれている。

彼女の性格からは少しかけ離れた几帳面さが伺えた。

「さあ、俺も頑張らないとな」

彼女に付き合ってもらっているのだから必ずやジェットストライカーを使える物にしてみせる。

そう意気込みを内に秘めたソーマは椅子に座ってノートを読む。

「バルクホルンさん、大丈夫かな」

「大丈夫だよ。ちょっと休むことができたらきつと明日には元のバルクホルンさんになつてるはずだよ」

「そうだね。今日の夕飯は元気が出る物にしてみるよ」

基地内を歩きながら呟いた服部と同様に宮藤とリーネもバルクホルンを心配していた。

「そんな単純に済めばそれに越したことはありませんけどね」

ペリーヌもジェットストライカーの性能を危惧する者の一人だったが他の三人とは少しだけ違いバルクホルンに理解を示していた。

(ジェットストライカーの性能がいかに優れていてもバルクホルン大尉のあの様子を見る限り実用化には程遠い代物：それでもバルクホルン大尉はジェットストライカーの使用を諦めることもなさそうですわね。大尉だつて故郷を自分の手で取り戻したいはずですよ)

仲間たちの協力もあつてのことだから自分はこの手でガリアを取り戻した。しかしバルクホルンの故郷カールスラントは未だネウロイの支配下、加えてバルクホルンが抱えるウィッチの宿命の時期を考えると、その焦りは大きいはずだ。

— なにか彼女のためにできないだろうか。

考えるペリーヌと他の三人は何気なく赴いたのは格納庫。そこから聞こえてくる音が彼女たちの会話を一時中断させた。

「ここのこれで魔法力の消費を抑えることってできないのか？」

「んーどれどれ。それだとなあ、こういうストライカーなら使ってもいいんだらうけどジェットストライカーみたいな最新型だと大して役に立たないと思うんだよな。そこに書いたのはもう最新のじゃないし、最新のは最新なので確かもつと小型化されてるから今度は組み込められないって問題が出てくる」

「そっか、他の部品との兼ね合いだったりも考えないといけないのか」  
「先輩とイエーガーさん、だよな？」

「そうだね。何してるんだらう」

音：いや声を聞いて服部とリーネが顔を合わせて確認し合う。

二つの声がシャーリーとソーマの物であることはわかった。しかし肝心の内容は断片的にしか聞こえず、一体何をしているのかまでは

わからない。

「難しいな」

「全部理解する必要はないよ。なんかこれ使えばよさそうだなぐらいの感じで聞いてくれれば私が判断するからさ。その代わりこっちは魔法のことに關しては聞くからその時は頼むな」

近付くにつれて声が大きくなり、会話の内容も聞き取りやすくなった。

そして格納庫に辿り着いた宮藤たちの目には作業服を着て工具でストライカーユニットを分解しスプレーで塗装したりしているシャーリーと、椅子に座って机の上に置いてあるノートを熱心に読み込んでいるソーマの姿が映り込んだ。

「二人共何をされてるんですか？」

「見ての通りストライカーの修理、私はね。あつちは勉強で絶賛苦戦中」

作業服と白い顔を塗料で汚してしまっているシャーリーが言う。

「なんでそのようなことを…もしかしてジェットストライカーの？」

「そう、あの問題児をどうにか更生できないかって方法を探してるんだ」

シャーリーは日常のことではあるがどうしてソーマまでストライカーの学習をしているのかというペリーヌの疑問はすぐさま自身とシャーリーによって解消された。

「上手くいきそうなんですか？」

「いや今のところは全然。まだ何も試してないし、部品もどれがいいのかとかまるでわからない」

シャーリーの言葉通りソーマは苦戦を余儀なくされた。

元々ストライカーの知識に乏しい彼にとつていくらシャーリーのまとめたノートがあつたところで短時間で膨大な情報を分析して最適解を導き出すのは困難を極めた。

「だからソーマは一から全部わかる必要はないんだって」

「でもさ、俺こういうのちゃんと理解しないとなんか落ち着かないっていうか」

口を動かしつつも作業を行う手も動かす二人。

そんな二人に刺激されて宮藤は何事かを決心したような強い意思を瞳に宿した。

「シャーリーさん、ソーマさん、私にも手伝わせてください」

「宮藤はストライカー弄ったことないだろ？そう言ってくれる気持ちは嬉しいけどさ」

「はい。ですから何か食べたい物とかありますか？私にはそれくらいしかできませんから」

「そういうことならありがたく、じゃあハンバーガーお願いしようかな。ハンバーガーわかるだろ？」

「前にシャーリーさんが作って食べてた奴ですよ。はい、作り方もなんとなくですけど作れると思います。ソーマさんはどうですか？」

「俺？俺は、なんでも…」

「そういうのが一番困るものですよ。ちゃんと希望を伝えてください」

要望を聞かれてのソーマの解答にピシッとペリーヌが言い放つ。

「えっと…それならピッツアで」

「わかりました！ご飯の時間になったらここに持ってきますね」

「私も手伝うよ芳佳ちゃん」

「うん、二人で一緒に作ろうかりーネちゃん」

元気よく宣言した宮藤は同じくやる気満々のリーネと共に仕事を果たすための場所せんじょうに急ぎ足で行く。

「俺はどうしよう…えっと、よし、俺もあっちに行ってきますね！先輩たち、頑張ってください！」

ここにおいても邪魔になるだけと自分に客観的評価を下した服部も宮藤たちに続いて厨房へと向かう。

さてその彼の行動によってペリーヌが残されたわけなのだが

「では私はソーマさんのお手伝いを致しますわ」

彼女はそんな結果に機嫌を損ねる様子もなくソーマの前に椅子を用意して座り込んだ。

「わかるのか？」



「これでもウィッチとしてそれなりに学んでいるつもりですわ。シャリーリーさん程とまではさすがにいきませんがソーマさんに教えられることは多いと思います」

「悪いな。助かるよ」

正直なところ完全に行き詰っていたと言っているいい状況だっただけにペリーヌの申し出はありがたかった。

ソーマとしては申し訳ない気持ちもあったものの彼女の善意に甘えることにした。

## 第五十六輪 レッツ・トライ・トウギャザー 前編

「聞いたぞ。ソーマにジェットストライカーの資料を渡したそうだな。いいのか？いくら私たちの元に送られてきたとはいえ一応カールスラントの機密扱いのものだろう」

書類と格闘するミーナに坂本が言った。

統合戦闘航空団の一員といえどソーマはロマーニャの軍人だ。カールスラントの最新技術の搭載されたジェットストライカーを簡単に見せてもよかつたのだろうか。

坂本の指摘にミーナは書類から目を離さずに涼しい顔で答えた。

「ソーマさんもここに居る皆もそういうことはしないわよ。それにカールスラントにとつても改善点が見つければ次の研究に活かすことができるし問題ないんじゃないかしら」

彼はそう簡単に情報を漏らしたり売るようなことはしない。

この部隊に属する全員の人柄を信じていたからこそミーナはジェットストライカーの資料をソーマに託した。

そして坂本もあえて忠告じみたことは言ったもののミーナと同じく部隊の隊員たちの良心は熟知していた。

だからミーナの言葉に余計な言及はしなかった。

「上手くいくと思うか？」

「そうであることを祈るしかないわね。こればかりは」

自分たちが目を通した限りではジェットストライカーの改善点を見つけて出すことはできなかった。

ストライカーの知識に関しては部隊随一のシャーリーと豊富な魔法の持ち主たるソーマでトライしても駄目だったのならその時は大人しくジェットストライカーをカールスラントに返還して、いつも通りの戦力で今後もやりくりするしかない。

自身が修理を施したカールスラント製のストライカーを履いたシャーリーが空から帰還した。

基地周辺を軽く飛んできた彼女に宮藤が近づいた。

「どうですか？シャーリーさん」

「うーん、こいつも速いっちゃ速い。けどジェットストライカーに比べたら全然だな」

ストライカーから足を外しながらシャーリーは言う。

このストライカーの全力は引き出せている。しかしやはりカールスラントの誇る最新技術の塊であるジェットストライカーの壁は越えられるものではなかった。

それも致し方のないことと思考を切り替えたシャーリーの視線は椅子に座って意見を交わし合うペリーヌとソーマを視界に収めた。

「この部分ってさ、どれ使うのが一番だと思う？」

「スオムス製のこちらなんてどうですか？このままですとジェットストライカーには少々大きくて入るか微妙ですがソーマさんの物を小さくする魔法なら組み付けはできると思います」

「でもそれも一時的でしかないんだよな。魔法の効力が切れて元の大きさに戻った時のことを考えたら」

「できませんわね」

いくら便利な魔法でもソーマの魔法はずっと効果が続くわけではない。

仮にペリーヌの案を実行したとしていずれ魔法が切れた瞬間に部品が大きさが元に戻ってしまい、結局その部品を組み込んだストライカーに余計な悪影響を及ぼす恐れがある。

「シャーリーさんの魔法じゃ駄目なんですか？」

「私の魔法？」

並行して行われていた二つの作業を邪魔にならないように静かに見守っていたリーネが言った。

「あ、ソーマさんが使うシャーリーさんの魔法の方です。シャーリーさんと同じ加速の魔法でジェットって名前も一緒だから上手くいくかなって」

「それさっきペリーヌが思いついて試してみたんだけどさ、上手くいかなかった」

「効果が出ないどころかソーマさんのベルトが反応すらしませんでし

たわ」

実を言うとリーネたちが食事を作っている間ペリーヌが全く同じ提案をしていた。

物は試しとハリケーンリンクスとなったソーマが加速魔法を持たないペリーヌの指にジェット指輪を嵌めて自身のベルトに翳したのだがベルトから音声は鳴らなかつた。

発動しないことに三人揃って首を傾げて再度同じ動作を行っても結果は変わらず。

しかしソーマが自分の指に嵌めてやってみるとベルトから音声は鳴り、魔法は問題なく発動した。

つまりこのことから導き出される結論は

「ハリケーンリンクスの時に使えるウィッチの指輪はその魔法の元になつた仲間しか使えないってことなんだろうな……」

まだ確かめていない憶測の段階であるが『プラズマ』の指輪だったとしても同じ結果になることだろう。

シャーリーがペリーヌのトネール由来の雷の魔法を使うことはできない。

「ねーねー、ご飯食べないの？温かいうちに食べないともったいないよ」

「悪い悪い、区切りもついたところだし休憩するか。皆もいいだろう。時刻は夕方の17時半近く、そろそろ何か口にしてもいい頃だろう。」

机の上にはハンバーガー、ピザ、シーザーサラダ。

宮藤とルツキーニが主導で作った料理が並んでいた。

作つた二人と手伝つたリーネと服部はもちろん、作業をしていた三人も一時手を止めて椅子に座る。

「いただきます」

「二いただきますー！」

全員が同時に両手と声量の異なる礼を合わせて料理に向き合い手に取る。

「このピッツァ、色んな味に分かれてるのか？」

「そうだよ。私と芳佳と後服部で決めた味だよ」

ピッツアの種類は三つ。

トマトとキノコの乗ったもの、海老や貝の乗ったもの、サラミのトッピングがされていて焦げ目にしては妙に薄く見える茶色で全体が染まっているもの、それらがまとめて一枚の大きな皿の上に乗っていた。

シャーリーはその中から一枚、海鮮類のものを手に取って食す。

具材からしてそれがルツキーニの作ったものであることはすぐに見抜けた。

「上手に作れたなルツキーニ」

「でしよでしよ、えへへ」

「これをルツキーニさんが…？美味しい、美味しいですけどなんだか腑に落ちませんわね」

普段料理を作らないルツキーニだがピッツアの本場育ちなだけあってピッツアに関しては味は絶品らしい。

シャーリーだけでなくペリーヌも味を褒めたたえている。ただペリーヌはやや納得のいかないとも取れる顔をしていたが

「リーネがそれか。じゃあ俺は、これいくか」

「あ…ソーマさんそれ」

リーネがキノコとトマトのピッツアを手にしたのを確認してソーマはまだ誰も手に取っていない見た目に茶色の成分が強いピッツアを一切れ摘まんで口に入れる。

宮藤が何か言いたそうにしていたが彼女が言い切る前にソーマはゆつくりと口の中で噛んでいく。

(まっずい！なんだこの味…いやこれ、あれだ。あの味だ)

ところがどういうことだろう。最初の一噛みで強烈な味が口内を満たした。肉の味でもチーズの味でもない。一言で言えば不気味、しかし何の味であるかの特定はできた。

「どうですか？先輩、美味しいですか？」

「やっぱお前か…これ、醤油」

「わかりますか？入れさせて頂きました！」

顔を歪めるソーマが食べたピッツアを作ったのは服部。彼が入れたのは彼が愛してやまない醤油。『自分が美味しく感じるなら他の人も美味しいと感じるに違いない』独自の理論の元生地の上からかけられた調味料だ。

そんな考えで入れたものだから服部はソーマが喜んでくれると思っていたし、彼の口から喜びを表す言葉が出てくるのを期待して待った。

「…美味しくはない」

「ええ!?!」

服部は新鮮に驚くが彼を除いた多くの者たちはソーマに同感と言わんばかりに首を縦にしていたり、苦笑いを浮かべていた。

特に調理工程を間近で目撃していた宮藤からしてみれば服部の反応の方に驚きを禁じ得ない。

実のところ美味しくないを通り越して不味いと言っても差し支えないの味であったがその表現を口にするのは踏み留まった。

ソーマとしては率直に感想言ってしまうえば服部が露骨に落ち込むだろうと考えが働いたからだ。

「うえ、なにこれまずい」

「ええっ!?!」

(ルツキーニー!!?)

ところがルツキーニーによつて彼の配慮は儂く散った。

どれくらい酷いものかと好奇心で一口かじってみた幼く純粋な少女は感想をオブラートに包むという慈愛を知らないがために思ったことをそのまま声に出してしまった。

「まずかったか?」

「ちつとも美味しくない。0点だよこんなの」

「そ、そっかあ」

自信満々だった料理を酷評され落ち込む服部。ただそこから先がソーマの予想と少し違った。

「じゃあもうピザに醤油はやめるか」

あっさりと服部が立ち直ったからだ。醤油への入れ込み具合から

しててつきりもつと落ち込むと思っただけにソーマにはこの結果は意外だった。

「それがいいよ。今度私が作り方教えてあげるね」

「教えてくれるならお願いしていいか？次はこんなことないようにな誉挽回したいからさ」

「いや」

そんなやり取りを交わしながらの食事を終えて小休止。シャーリーとルツキーニはひとまず自分たちの部屋に戻り、ソーマは椅子に座って腕を組んだままじつとしていた。

「私これをバルクホルンさんやエイラさんたちにも届けてきますね」

「あ、芳佳。ユーティライネンさんとリトヴャクさんには俺が持つて行っっていいか？」

食器の片付けをリーネとペリーヌに頼んでまだ食事を摂っていないここにいない仲間たちに料理を運ぼうとする服部が呼び止めた。

どうしてエイラとサーニヤに絞った言い方をしたのか宮藤にはわからなかったがきつと大事なことがあるのだろうと解釈して二人の分を任せた。

「いいよ。ならエイラさんとサーニヤちゃんのところは幸助くんにお願ひするね」

「氣遣ってもらってありがとな芳佳。こいつは責任を持つて運んでいくから安心してくれ」

トントン。

ぐっすりと安眠を貪っていたエイラをドアを叩く音が目覚めさせる。

「んん、なんだあ？誰が何の用だ？」

夜間哨戒に備えて眠っているのは他の皆は知っているはず。なのに夜を迎える前に誰かが来たということは差し迫った事態でもあったのだろうか。

起きたばかりで上手く機能しない頭で色々考えながらエイラは体を起こして横を見る。

そこにはサーニヤの顔。おとぎ話に出てくる姫君のように清く美しい寝顔。

彼女との幸せな一時を邪魔されたような気がしてエイラはほんのちよつとだけむかむかする気持ちが芽生えたが、非常事態の場合もありえるためにそれを心に留めるように努めて扉に足を運ぶ。

「なんだお前かよ」

ドアを開けたエイラの視界に飛び込んできたのは服部の顔。エイラがあまり得意ではない相手の顔だった。

「はい俺です。今大丈夫ですか？…あ、もしかして寝てました？」

「もしかしても何もそうだったよ。しかもよりにもよってなんでお前なんだよ」

他の者ならまだしもどうして服部なのかとエイラは不満気に言った。

別に彼のこと嫌いなわけではない。だってエイラには彼に何かされた覚えはないから。

ではなぜすんなりと受け入れずらいのかというところにはある理由がある。

「それ今日のご飯か？」

だがそれを決して言いたくないし悟られたくもないエイラはふと服部の手に持っているトレイの存在に気付いた。三種のピツツアにハンバーガー、シーザーサラダが二人分載せられていた。

「そうです。お二人の分持つてきました。リトヴァクさんもいるんですよね？」

サーニヤの名を出しながら背伸びしてエイラを避けるように部屋の中を覗こうとする服部。

何を目的としての動作なのか即座に看破したエイラは素早くトレイを服部の手から奪うように取った。

「あー！」

「用が済んだらとつとと出てイケ。これを届けに来ただけなんだから！」

突然のことに驚く服部に構わずエイラは扉を閉めようとする。下



着姿の自分を見られたくないからではない。

サーニヤの姿を服部の視界に収めておきたくなかったからだ。

しかしそんなエイラの気持ちを服部が理解できるわけもなくドアに手をかけてエイラとは真逆の動作、扉を開けようとする。

「待つてください！そうなんですけどリトヴァクさんと話をしたいんです！話が駄目ならせめて顔だけでも見させてください！」

「やなことっ！お前みたいな悪い虫、サーニヤに近付かせるわけにはいかないんだナ！」

ギシギシと両者の間で音が鳴る。閉めようとするエイラ、開けようとする服部のせめぎ合いによってドアが振り回されているせいだ。

「虫？虫ってなんですか？俺のどこが虫みたいだって言うんですか」

「そういうところだよ……いいから。出て、イケ！」

エイラにとっては服部の質問に答える気はなかった。

服部の指を外して反発の力が弱まった瞬間に間髪入れずにドアを閉める。

それ自体は成功した。ところが思いつ切り閉めてしまったために服部の指がドアに挟まってしまう。

「あゝっだあああああ!!いゝってえええええ!!」

「あ」

やってしまったと思うエイラであったがつい反射的にドアを閉める。

完全に隔たったドアの向こうから苦しそうな絶叫が聞こえる。姿こそ見えないがよっぽど痛かったのは声だけでも伝わってくる。

さすがに申し訳ないと自分の行いに罪悪感を覚えるエイラだが反面『最初から私の言うことを聞いていればこういうことにはならなかったわけだからあいつが悪いのであって私は悪くない』と言い聞かせる気持ちもあった。

「どうかしたのエイラ」

そんな気持ちのせめぎ合いがあつて動けずにいるエイラの耳が声を拾った。

反応して目を向けるとこの騒ぎで目を覚ましたサーニヤがいた。

「サ、サーニヤ。起きてたのか。い、いやなんでもないんだ。ちよつとその…」

「いったあ…かつ、たああ…」

咄嗟にエイラは誤魔化そうとするがそれではドアの向こうから聞こえる悲痛な声はかき消せない。

「服部さんがいるの？」

「い、いや…いるっちゃいるけど…」

どう説明したものかと迷っている間に下着姿の上に軍服を羽織ったサーニヤはドアを開けてしまう。

ドアに妨げられていたそこには蹲って負傷した手を無事な方の手で抑えて悶絶する服部という光景があった。

「いてえ、いてえよお…」

「大丈夫ですか？服部さん」

「あ、サーニヤ…」

「はい。まあなんとか…あ」

顔を上げて服部はようやく気付く。

あれだけ話をしたと思っていた念願の人物の顔がすぐ目の前にあるのだと。

しかもその上彼女は服部の負傷した方の手を取って自分の目に近づける。

服部の指を見つめるサーニヤとそのサーニヤの顔を見つめる服部。

その構図にエイラはわなわなと震える。

「少し赤く腫れてますね。痛いですよね？」

「あ、いえ…」

「医務室の方に救急箱があったはずですから持ってきますね。冷やしたタオルも用意しないと」

「い、いえこれくらいどうってことないです。大丈夫です」

医務室に向かおうとサーニヤが手を離して身を翻す。服部は未だに痛みが静まらない指を抑えたまま立ち上がり、サーニヤとは真逆の方向に行こうとする。

「え、でも…」

「本当に、本当に大丈夫です！失礼します！」

サーニヤの声が届いていないのか早口でそう言って服部は駆け足でサーニヤの前から離れていく。

「あー！」

だが何か忘れたことがあったのかまた廊下の角から姿を現す。

「ご飯持って来たので食べてくださいね！」

顔を廊下の角から出して言っただけでまた引込んで去っていく。

「なんだっただよあいつ…騒ぐだけ騒いで」

エイラは奇異の目で、サーニヤは不思議そうな目を服部がいた場所に送った。

ミーナと坂本に夕食を届けた宮藤。最後に残ったバルクホルンとハルトマンの分を渡そうと彼女は二人の部屋に目指して歩いていった。

その道すがら進行方向からやって来たハルトマンが宮藤の手にしている料理に気付いて彼女の前で立ち止まった。

「あつれどつたの宮藤ー？」

「今日の夕食です。さつき坂本さんとミーナ中佐たちに渡しに行つてハルトマンさんとバルクホルンさんのところに行く途中なんです」

宮藤も丁寧に立ち止まり説明する。

「今日は食堂で食べるんじゃないんだ」

「ソーマさんとシャーリーさんがジェットストライカーの研究をしてペリーヌさんとかもそれを手伝ってたりで、なので今日は申し訳ないですけどこういう形になっちゃいました」

「へえ、私の知らない内にそんなことになってたんだね…」

ハルトマンのその言葉でやり取りが止まる。

（えっと、どうしよう。ハルトマンさんはここにいるけど、バルクホルンさんの分も今渡しちやった方がいいのかな）

ハルトマンは宮藤の向かっていた方角からやって来たから自室に戻る可能性は低い。

ならば彼女の分もまとめて二人の部屋に置きに行くのが正解だろうか。

宮藤が手元の料理の行方に悩んでいるとハルトマンが救いの言をかけてきた。

「それ私がついていっとくよ。トゥルーデもあるんだよね？私同じ部屋だしさ」

「いいんですか？どこかに行こうとしてたんじゃ」

「宮藤も忙しいんじゃないの？ここは任せてよ。それにちよつといいことも思いついたしね」

「いいこと？」

「うん、ちょうどいいし宮藤にも協力してもらおうよ」

ハルトマンのしたり顔を直視しながら宮藤は首を傾げた。

夕食を食べ終え、太陽が西の空に沈み辺りが暗くなり始めた。そんな時間になつても飛行実験は続いていた。

「スモールじゃ駄目だったか」

時にはストライカーの部品を色んな国の物に変え、時には指輪の魔法を変えて、時には魔法をかける対象をストライカーや部品そのもの、ウィッチに変えと色んな形で試行錯誤を繰り返してきたが一向にジェットストライカーの課題をクリアする方法を見つけないことは敵わずにいる。

それどころかジェットストライカーのスピードに届いてすらもない状況だ。

「ソーマさんの言っていた通りの結果になりましたわね。大きなパーツが組み込めるようになっても魔法の効力がなくなつた途端に大きさが戻ってユニットそのものに悪い影響を与えてしまう」

「それに加えてジェットストライカー自体が魔力の消費が激しいのもあつて普通に使うのよりも効果が長く続かないだろうしな」

ソーマとペリーヌは一つの机のすぐ近くに移動し、その上に置かれた指輪の数々と試行錯誤の結果をまとめたノートに視線を落とす。

同じ格納庫の少し距離を置いた場所ではスモールの魔法が解けて元の大きさに戻ってしまった部品のせいで他のパーツが歪んでしまったストライカーの修理にあたっているシャーリーと作業を眺め

ている服部とルツキーニがいる。

「次はどうするか。ビッググじや同じ結果だしな」

「ソーマさんが変身に使う風の指輪はいかがですか?」

「どうなんだろうなあ。自分にかけてたことしかない奴だけど試しにやってみるか」

ハリケーンウイザードリング、普段はソーマがウイザードに変身する用途にしか使わず他の人や物にかけてたことはない。そのためどんな事象が起こるかソーマ自身でさえも想像がつかない。

だがもうこの際やれることはやってみるべきだ。

シャーリーの手が止まるのを待ってからソーマはリーネに声をかけた。

「リーネ、頼めるか?」

「私はまだ大丈夫です」

「疲れたらいつでも休んでいいからな? さつきからずっと飛びっぱなしだから」

「そうですね。慣れないユニットを長時間使用するの思ったよりも体に負担がかかるものですから。もしも時は私が代わりを務めますわ」

「ペリーヌがリーネの代わり?」

ルツキーニはペリーヌを、正しく言うならある彼女の一点にじくと視線を注ぐ。

「無理なんじゃないの?」

「誰のどこを見て言ってるんですの!」

ルツキーニが己の何に向けて言っているのか看破したペリーヌは声を大にして言う。

自分でも不足していると自覚していて、どれだけの小さな努力を重ねても実る気配のない場所なのだからそんな反応になるのもペリーヌとしては無理のない話であった。

一方で服部は意味がよくわからなかったよう指を水で冷やしたタオルで抑えながら近くにいるシャーリーに尋ねてみた。

「ペリーヌよりリーネの方が強いんですか?」

「そりやあもちろん。見てすぐわからないか？」

「ええ…」

(俺にはわからないな。経験が足りないからかな?)

服部もルツキーニと同じく、いやそれ以上に目を凝らしてペリーヌとリーネを見比べてみるが違いがちつともつかめない。

死線をくぐり抜けてきたエースたちにしかわからない何かがあるのだろうか。

(言葉そのままに受け取ったなあいつ)

服部の仕草からソーマは彼の心境をそう解釈した。

あまりの素直さにもはや呆れを失くして賞賛を思うソーマは隅に置かれたジェットストライカーを視界に入れた。

チエーンが巻かれ、誰も使用できないようにされたストライカー。

もしもバルクホルンが何も不自由なく飛ぶことができたら…その時の情景を思い浮かべると尚更やる気がこみ上げてきた。

## 第五十七輪 レッツ・トライ・トウギャザー 中編

「九百六十七…九百六十八…」

バルクホルンは黙々と懸垂を片手のみで行っていた。

ミーナからは室内で大人しくしているように言われたがそういうわけにはいかない。

ジエットストライカーの力を存分に発揮できないのは自分の至らなかつたせいだ。一日でも早くジエットストライカーを使いこなすためにも鍛錬で自分の体を強化し、負荷に耐えられるようにする必要がある。

疲弊した体に無理を言わせてでもやる価値がある。

「まだやってるんだ」

「ジエットストライカーを乗りこなすためだ。休んでいる暇などない」

背中からかけられたハルトマンの声にバルクホルンは正面を見据えたまま言葉だけを返す。

「これ宮藤たちから、ご飯ね」

「後で食べる。そこに置いていてくれ」

「はあ〜い」

己に視線を移さないバルクホルンにさして嫌な思いを持つわけでもなくハルトマンは気の抜けた声色で言い、指示通りに手に持った物を全て置いて部屋を出て行く。

彼女の気配がなくなってもバルクホルンは懸垂を続けた。

床には流れ落ちた汗が蓄積し、池水のように広がっていきその上にもまた新しい汗が落ちていく。

それから一時間弱、懸垂運動を継続して行うバルクホルンの元に再びハルトマンがやって来た。

「食器下げとくよー」

「かたじけない」

バルクホルンの食べ終わった皿を撤去しにきたのが目的のようで

食器を回収したら立ち止まることなく部屋を後にしていった。

ハルトマンにしては珍しいなと思ったが長い付き合いの中で仲間思いな一面を見せてくれたことはあるし、なんだかんだで世話焼きな面も見たことがある。自分のための行いに対してバルクホルンは感謝を告げた。

懸垂を続けること暫く。さすがに筋肉に疲れが出てきてペースが落ちてきた。

(この程度で音を上げてしまうのか。仕方ない、少し休むとしよう。風呂にでも入るか)

自室謹慎中とはいえ一応風呂の許可は出ている。汗水でべたついた体を洗い流すためバルクホルンは浴場に向かう準備をしようとするがさつきまで食器の置いてあった場所にインカムを見つける。

「インカム？何故こんな物が、ハルトマンがさつき来た時忘れていったのか？」

この部屋に入ってきたのは食器を運びにきたハルトマンのみ。

だからこのインカムは彼女の物であると即座にわかったのだが、気になることはまた別にあった。

「誰の声だ？」

インカムから声が出ているのだ。それもどうやら一つではなく複数の声、誰かとの会話が流れているようだった。

気になったバルクホルンはインカムを耳に付け、聞こえてくる音に意識を集中させた。

そして彼女は目を見開いた。

時刻は夜の九時を過ぎた。

陽の代わりに三日月が黒の空を独占し、格納庫の中は照明の光が照らしている。

手伝ってくれた宮藤たちがそれぞれの部屋に戻ってもなおソーマとシャーリーは残って作業を続けていた。

「なあ、ソーマってさ」

「なに？」



汚れたストライカーユニットの表面を布で拭きながらシャーリーはノートにペンを走らせているソーマに言った。

「バルクホルンのこと好きなのか？女として」

「好きだよ」

シャーリーの発言から十秒と経たずに答えたソーマ。ただ次の瞬間動きを止めてシャーリーの方を向いた彼の顔は疑問に満ちていた。

「え？」

「へ？」

どういふことなのか？いまいち状況をよく理解できないとでも言いたげな目で二人はお互い見つめ合った。

「今の質問なんて質問した？今」

「バルクホルンのこと好きかって、女として」

「俺、なんて返した？」

いくつかの会話を重ねてもソーマの呆けた顔は変わらない。

それに打って変わっていち早く状況を理解したシャーリーは意地の悪い笑みで言った。

「好きだって答えてたぞ。はつきり」

「……違う！違うぞ！そういうんじゃない！」

その言葉と表情でようやく状況を咀嚼したソーマ。瞬間、彼は目に見えて動揺した。

「そういうんじゃない？」

「さっきの！バルクホルン大尉のこと！俺はそういう目で見てない！」

「じゃあ嫌いってことか？そういうことになるよな。その言い方」

「違う、違う。ああ、なんて言ったらいいんだこれ……」

「わかってる、わかってるよ。仲間としては好きだってことだろ」

「そう、それ……」

「何も考えずに答えてたろ。今日はもう休んだ方がいいんじゃないか」

普段ならここで『からかうのはやめてくれ』とか文句の類を言ってきたところだが違った。

シャーリーとしてはいつもの彼と比べて調子が乱れていると捉えられた。

「…かもな」

本音を言うと今の一連の流れの方が一日の中で最も疲れた気もするが確かに今日の作業量は多いとソーマは自分でも思った。

朝はジェットストライカーのテストをし、昼から夜にかけてはそれに加えてストライカーの勉強、と言った具合に体も頭も魔力も一日中使用している。

こんな疲れる一日はウィザードになってから初めてなくらいだ。

「キリのいいところまでやってからにするよ。変なところで終わりにしてもなんか嫌だし」

眠たそうに欠伸をしながら背伸びをして体を伸ばすとソーマはまたノートと向き合う。

そんな彼にシャーリーはまた先ほどの話を蒸し返した。

「でも実際のところどうなんだ？いくら仲間のためだからって一からストライカーの知識を学ぼうなんてなかなかできることじゃない」

「…どうなんだろうなあ」

手の動きを止めてソーマは考え込む。

「俺はただジェットストライカーをバルクホルン大尉が使えるようになったらいいなって思ったただだよ。バルクホルン大尉にとつても早く故郷を取り戻せるならその方がいいだろう？」

カールスラント軍人であるバルクホルンがカールスラント製のストライカーで奪われた故郷を取り戻す、そうなってくれたらと思って行動を起こしたのは本当だ。

それにウィッチとしてのあがりも近いことを考えると時間は惜しいだろう。

「だからその、異性としての好きとかそういう感情はないと思う。バルクホルン大尉だけじゃなくて他の皆にも」

「ふうん、そっか…」

シャーリーは納得した調子で返す。

話を聞いている間にも手を動かしていたため整備が終わり、道具と

ストライカーユニットを片付けると工具箱を手に持って立ち上がる。

「私はもう風呂入って寝るとするよ」

「ああ、お疲れ。お休み」

「そっちも夜更かしはするなよー」

温かい湯で身体と疲れを洗い取ったシャーリーは自分の部屋に戻ってベッドの上に座り込んだ。

時刻は十時を過ぎて少し経った頃、もちろんルツキーニは深く長い夢の中に没入している。

あんまりにも気持ちよさそうな寝顔をしているものだから見ているシャーリーも眠気が増して来たような気がする。

もうとつとと寝てしまおう。ベッドに横になって目を閉じたシャーリーであったがそのまま眠りにつくことはなく、ふと何かを思っただけ目を開ける。

シャーリーはベッドを離れてシャツを羽織るとそのまま部屋を出てある場所に向かう。

下着の上にシャツを着ただけのしかも風呂上りな彼女の恰好はスタイルの良さも相まって実に刺激の強いことこの上ないが、幸いにもこの時間帯は部屋の外に出ている人間はいない。

精々夜間哨戒の任のあるエイラとサーニヤくらいのものだろう。

やがて格納庫の入り口が見えるようになると出入口の隙間から光が漏れていた。

夜間哨戒の二人がユニットを装着して発つ時はいつも照明を落とすのでいくから彼女たちによるものではない。

(はあ、やっぱりか)

まさかとは思ったが念のために来てみればさつきと同じ場所、同じ椅子に彼はいた。

「私が言ったこともう忘れたのか？あれだけ休めって言っただろ」

目の前にある光景が予想ができていたとはいえ呆れないというわけでもなくシャーリーはそう言いながら歩いて行く。

ところが声をかけても、足音を立てても彼からは何の反応もない。返事はおろか体をピクリとも動かしていない。

「なあ、何か言ってる―」

いくらなんでも無視は酷くないか？

そう不満を口にしかけたシャーリーが顔を除いた時それは引つ込んだ。

ソーマはペンを握って腕の上に額を押し付けたまま眠っていた。

ルツキーニのように静かに寝息を立てて、熱心に学習していたであろうノートを広げたまま。

「…こんなところで寝たら風邪ひくつてのに」

全くもってしようがない。本当なら声に出してそう言いたいがシャーリーは飲み込んだ。

今日一日頑張ったんだからこれくらいは見逃してやろう。

日付が変わり後数時間で朝日が昇る時間になってソーマは眠りから覚めた。

顔を上げて、首を左右に動かして周囲の光景を確認する。

「どこ、どこ……かくのうこう？……あ、あくあのまま寝ちゃったのか俺」

明瞭になった視界に飛び込んで来る光景から思考が情報を分析し、今に至る経緯を自力で解き明かした。

そして自分に失望した。

いくら疲れているにしても作業の途中で、おまけに風呂にも入らずに眠り込んでしまうとはなんとも情けない。

深い落胆の息を吐いて、彼は背中を包む温かさを感じた。

首を動かしてその正体を見てみると肩にはタオルケットがかけられていた。

「自分でかけたっけな俺…」

記憶を思い返してみる限りタオルケットを自分で羽織った覚えも格納庫に持ち込んだ覚えもない。

なのにどうしてここにはないはずのものがあるのか。

そんな疑問が生まれたソーマは続いて自分の手の中に奇妙な感触

を感じた。

白い紙、それが右手の中にあつた。ただこれも眠る直前に目にした覚えはなく、ソーマは首を傾げながら手を開いて紙を広げた。

『今日はお疲れさん。明日は昼の十二時から今日の続きするからそれまで起きてくるなよ。もしその前に起きてきたら当分口聞いてやらないからな』

あ、後風呂にはちゃんと入ってから寝ろよーわかったなー』

手紙にはその文面と最後にはハートマークとウイंकをしたウサギの顔が可愛いらしい字体で書かれていた。

内容を一読したソーマは小さく笑った。

☆

後日昼の十二時に差し掛かった頃と同じ格納庫内では昨日に引き続いて実験が行われていた。

ペリーヌがノートから得た情報を元に選別した部品をシャーリーがストライカーに組み込んで調整し、そのストライカーにソーマが魔法を付与し、リーネと宮藤そしてルツキーニが交代交代で飛行し結果を確認する。

そういつた光景が何度も繰り返されていた。

「今のが最後の組み合わせですがこれもはつきり言っていないち、でしようね」

「速いには速い方だと思うんだがジェットストライカー程かかって言われたらなあ」

ペリーヌに相槌を打ちつつシャーリーは机に置かれた紙に視線を移す。

紙には宮藤やリーネ、ルツキーニらの名前があり、そのすぐ横には時間が何個も書かれている。

この時間はストライカーのスタートからゴールまでにかかった時間を使用者で分けて測定し、パーツや魔法を変えた都度に書き足していったものだ。

既に計三十回近くにわたって行われているが、どのパターンを試してもジェットストライカーに到達するスピードを引き出すことは難しかった。

部品や装着者の問題ではなくジェットストライカーがそれだけ他の追従を許さぬ素晴らしい発明だという証明なのだが、

「でもいっばい長く飛んでも魔力がもう少ない！って感じはしないよ？」

「ああ、今のままでもストライカーの中じゃ断然燃費はいい。ただジェットストライカーでも同じようにいくかっていったら…」

「上手くいかないんですか？」

「たぶんな」

ジェットストライカーの力を一番その心に味わっただけにシャーリーにはわかる。

自身が改造調整し、魔法の手助けを得た物でもあれに及ぶにはまだ足りない。

それはソーマも同じ考えであった。彼は机に並べた指輪を眺め次にどれを使うか思案し、宮藤も手伝うために隣に立った。

「他に何か良さそうな魔法あったかな…」

「この指輪、まだ試してないですよね？」

「タイムか」

宮藤が手に取って見せたのは時計の絵が描かれたタイムの指輪。

「時計の模様があるからもしかしたらって思ったんですけど使えるならソーマさんがもうやってますよね」

「その指輪は確かに時間に関係する力がある。ただ使った瞬間に効果が発動しちゃうんだ」

「瞬間ですか？」

「前にそれをシャーリーに使った時は壊れたストライカーとシャーリーの魔力を元の状態に戻したんだ。その時みたいに俺が魔法を使う相手の側にいるなら今宮藤が考えた通りでいいんだけどジェットストライカーみたいなのだと俺が魔法をかける相手と同じくらいのスピードで飛べるのが前提になってくるし、そうならないように飛

ぶ前の段階で魔法を使っても結局はその状態の、つまり魔力をちつとも消耗してないところにかけることになるから意味がなくなるんだ。魔法を使ったその時点で効果が発揮する魔法だから」

ソーマもタイムを使う発想自体は浮かんだが今述べた『使った瞬間に効果が発動してしまう』という理由から実行に移すことはしなかった。

それにそもそもタイムの魔法を使うのにすら膨大な魔力を要するものもあって、とてもではないが正式な打開策に採用できるとは言えないだろう。

「そうなんですネ」

「でもそういう風に案を出してくれるのは助かるし嬉しいよ」

協力してくれている宮藤を傷つけないようにそう言葉をかける。

「そういえばもうお昼は皆食べたのか?」

机の上にある皿に乗ったサンドウィッチを見てソーマが言う。今になって彼はそこにそれがあることに気付いたが記憶を辿っていくと自分が昼過ぎに来た時からあったような気がする。

「はい、あれはソーマさんの分です」

「あれ俺の分だったのか。ミーナ中佐とかももう?」

「私とリーネちゃんを渡してきちやいました」

「バルクホルン大尉にも?」

「バルクホルンさんにはハルトマンさんがやってくれました」

「ハルトマンが?そっか」

自分からは目立って発信しないが彼女も彼女で仲間を思う心を持つているのは知っているし、バルクホルン相手ともなればそういう行動を取ったとしても疑問はない。

ないのだが、

(ハルトマンがなあ…)

それを考慮しても納得よりも意外性の方が強かった。

「インカム?これ誰か戻し忘れたのか?」

サンドウィッチや皿が乗っている机に置いてある一つのインカムをソーマは摘まみ取り、指で抑えるように持って眺める。

誰かが任務に出た時に取ってそのままにしてしまったのかとソーマが考えていると宮藤がインカムに気付いた。

「あ、それはそのままそこに置いといてください！」

「宮藤のか？」

「私のじゃないです。でもそれでいいみたいです」  
(みたい?)

宮藤のどうにも引つかかる言い方にソーマは首を傾げて追及の言葉をおうとする。

しかしその言葉が音になる前にシャーリーからの言葉が飛んできた。

「ソーマはそこにあるサンドイッチ食べるのか？」

「ああ、起きてから何も食べてないから」

そう返事を返したソーマはインカムを机の上に置き直して代わりにサンドイッチを手にとって食す。

「それじゃあそれ食べて時間置いてから続きやるぞ。四、五十分くらいしたらで再開。宮藤たちもそれでいいか？」

「私は大丈夫ですよ」

「あ、だったら俺今の内に一旦ミーナ中佐のところ行ってきていいですか？やらなきゃいけないことがあって」

「幸助くん、ミーナ中佐に呼ばれたの？」

幸助に向かってリーネが疑問を口にする。

「手続きの資料に書いた俺の名前の字が間違ってたみたいでさ、正式な書類として提出するのにそのままじゃ受理されないから直さないとけないって」

「自分の名前を間違えるなんてありませんの？」

「ロマーニヤの文字で書かないといけないやつだったんだよ。俺、自分の名前を扶桑以外の国の言葉で書いたことなかったからさ」

「…なるほど、それでしたらまあわからなくはないミスですわね」

自分の名前を記入し間違えるなんてどうやったらできるのかと信じられなかったペリーヌだったがそれを聞いて合点がいった。

統合戦闘航空団に属する者は時に自分の生まれ育った国以外の言



語を使う必要に迫られる。

その点を考えてみたら服部の犯したミスも珍しい話でもないのだ。「わかるなあ、私も覚えるの大変だったよ。私はブリタニアの言葉で最初の手続きの時は坂本さんが側で見なくて、その後はリーネちゃんに言葉を教えてもらったからちよつとは書けるようになったけど、坂本さんやリーネちゃんがいなかったら怖かったなあ。何度も書類をやり直すことになってたかも」

雑談で盛り上がる宮藤たち。その風景を目に、話に耳を傾けながらソーマは黙々と神妙な面持ちでサンドウィッチを食べていた。

(やり直す…時間を置く…時間を置いて、やり直す)

会話の中に出てきたいくつかの言葉を振り返ってある一点に自然と目がいく。

昨日今日にわたつての飛行テストでストライカーユニットに組み込まれ使い物にならなくなった部品の数々。

「じゃあ俺行つてきますねー」

全員に届くようにはつきりと言つて離れていく服部。その際彼の置いたストップウォッチをソーマは手に取ると壁際に寄せられた部品に近づき足腰を曲げてタイムの指輪を手に嵌める。

『タイム、プリーズ!』

『タイム、プリーズ!』

二度に渡つて使用される同じ魔法。会話が少ない最中に響いた音声なだけにルツキーニは音が耳に入るなり迷わずソーマの元に移動して尋ねる。

「何してるの?」

「ちよつと試したくてさ。まだ結果出ないだろうけど」

「どゆこと?」

「まあ少ししたら答えが出るからそれまで待つてくれ」

疑問の晴れないルツキーニの顔を見ながらソーマは言い、同時に持っていたストップウォッチで時間の測定を始めた。

「すいません、今戻りました」

「おかえり〜」

「よし、皆揃ったし充分休みも取ったし再開するぞ」

解散から約一時間弱、服部が戻ってきた。

さあこれから改めて実験を始めようとシャーリーを筆頭に行動を移そうとした時格納庫の床のある部分で青白い光が瞬いた。

何の光かと全員が寸分違わぬタイミングでその方向を見ると新品同様綺麗な品質を保っているストライカーの部品とそのすぐ近くで椅子に座りストツプウォッチのボタンを押すソーマがあった。

「ここにある部品壊れてたはずじゃありませんでしたっけ」

「すごい。全部ピカピカ、これってソーマがやったんでしょ？さっきのやつ？」

「そう、さっき言ってた試してみたいこと」

「前に私に使った魔法か？タイムだっけ」

シャーリーの言葉にソーマは頷く。

「ああ、ただちよつと違う使い方をしてみた。今回は二回、この部品に一回とタイムの魔法自体にも一回かけた」

「魔法にですか？」

「いまいち理解が追い付いていない。そんな心境を物語るような声色で服部はソーマの発した言葉をそのまま反覆した。

「魔法を魔法にかけるなんてできるんですね」

「俺も最初はそう思ったよ。でもよくよく考えてみたら同じ魔法をかけたことがないってだけでこれまでも似たようなことはやってたんだよな。俺が戦う時同じ魔法でも風や火の姿で魔法の効果が変わるのとか」

「ん〜つと、それでソーマは今何を確かめたかったの？」

小難しい話は苦手なルツキー二はリーネとソーマの会話についていけず頭痛に見舞われる。

「一回目のタイムは『物の時間を戻す使い方』二回目のタイムは『一回目にかけてタイムが発動する時間を遅らせる』っていうふうにして、時間差で同じ魔法が使えるか知りたかったんだ」

「そうか。一回目をジェットストライカーを使う奴の魔力を元の状態に戻すっていう使い方、二回目を一回目の効果を遅らせて発動するっ

という使い方にするってわけか。それならソーマがジェットストライカーを使う奴の側にいなくても消耗した魔力を回復できる」

「俺の考え通りならそうなる。ただだとしてもまだ課題はある。『ジェットストライカーを使って一体どのくらいで魔力が限界を迎えるのか』これがわからないと二つのタイムが効率よく使えない」

「では今度はその時間を検証する、その作業が必要になりますわね。また一筋縄ではいかない難題ですがどうすればいいかまるでわからなかったさつきよりはだいたい希望が近くに見えてきたような気がしますわ」

シャーリー、そしてペリーヌが追従するように言葉を並べる。

これまでの『ユニットや部品に魔法をかける』アプローチから『使用するウィッチに魔法をかけ、更には魔法そのものにも魔法をかける』というアプローチに変える。

これが吉と出るか凶と出るかは断言できないが今日の前で目撃した検証結果を見たらなんとなくいける気がしてきた。

「ようするにうまくいく可能性が出てきたってことですね。そうならば俺も頑張ります！」

「ようするに…貴方本当に理解できてます？」

手の平を別の手で作った拳で打ち付けやる気満々さを見せつける服部にペリーヌが疑いの眼差しを向ける。

服部が今の話の内容を飲み込めるとは思えないと感じていたからだ。

「いや？わかんねえよ。ちつとも。でもペリーヌや先輩たちは理解できてるんだろ？なら俺は指示に従って動けば間違いにはなってるだろ？」

「それは、その通りと言えばその通りですけども…貴方はもう少しご自分でも考えるようにすべきでは…？」

「別にいいじゃん。わかる人がわかってればさ。ね、シャーリー？」

「まあなー。ルツキーニと服部はそれでいいんじゃないか」

「えへへ、だよねー」

「ありがとうございますー！」

「私、やはりこの方たちのことが時々わからなくなりますが」

前向きな言い方をすれば思い切りがいいとでも言うのだろうか。あまりにも考えることを放棄しすぎているような気もする……そんな二人の考え方にペリーヌは頭痛のような感覚に見舞われた。

夕映えのする美しいオレンジの空にまた飛行機雲が直線を刻み込んでいた。

ストライカーユニットで宮藤が空を飛んでいるのだ。

「千二百、千二百一、千二百二……」

窓枠を隔てた先にある景色を見てバルクホルンは懸垂運動を欠かさず行いながらうわ言のように呟く。

彼女の耳にはインカムがあり、ベッドの横の机の上にはペンと何か書き記されている用紙があった。